

第Ⅳ章 遺物

1 瓦塼類

A 軒瓦

藤原京左京六条三坊の発掘調査では、古代から中世におよぶ軒丸瓦が17種類121点、軒平瓦が25種類84点と多様な軒瓦が出土した。その一部はこれまでに『藤原概報』で報告され、特に吉備池廃寺創建瓦である重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦と型押し忍冬唐草文軒平瓦については、奈文研2003『吉備池廃寺発掘調査報告』において詳細な検討がなされている。

本調査区で出土した軒瓦のうち、古代のもの的大部分は、大和盆地内各地の寺院や、藤原宮の所用瓦と同範とみられるものである。本報告では、煩雑さを避けるべく一連の型式番号をふって説明と図示を行うが、それぞれの寺院や宮ですでに付された型式名を合わせて記す。一連の型式番号をふる際には、同一寺院・宮所用のもの、もしくは同種の文様をもつものに同一の数字をふり、その中のバラエティーについてはアルファベットで細分する。

i 軒丸瓦

軒丸瓦1A型式 (Fig. 71-1~3, Ph. 52) 山田寺式重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦。吉備池廃寺創建1A型式と同範。14点出土した¹。残存状況の比較的良好な3点について、記述、図示する。

1はほぼ完形に近い資料。外縁幅は0.9~1.6cmとムラがあり、最も狭い部分では3条ある重圏文のうち最も外側の圏線までしか表出されていない。外縁内面の調整は不完全で、範に粘土を充填する際のしわや木目痕跡が残る。側面は円弧に沿ってナデ調整する。外縁上面から0.7cmほどの範囲は、それ以下の部分と傾斜角度が異なり、かすかに凸線風にみえる部分もある。これはA型範の痕跡の可能性²がある。瓦当裏面は中央がやや高く膨らむ。ヨコ方向中心にナデ調整するが、同心円状の凹凸がわずかに残る。丸瓦との接合面は、凹面を斜めに削って楔形に加工した丸瓦を当てるべく、瓦当の上面をカットしている。ただし、丸瓦は瓦当面には到達しない。丸瓦凹面に沿う位置には接合粘土を付加する。支持ナデつけの有無は不明であるが、接合粘土と瓦当のカット面はぴったりと密着している。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。瓦当径19.8cm。中房径4.1cm。HF23地区の土坑SK4270出土。

2は全体の五分の二ほどの資料。丸瓦取り付け位置は1と90°ずれる。外縁は破損し、全く残らない。側面は円弧に沿ってナデ調整する。瓦当裏面は中央がやや高く膨らみ、ヨコ方向中心にナデ調整。丸瓦との接合面は瓦当上面を削り、支持ナデつけを施したのち、接合粘土を付加している。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。NI29地区の東西大溝SD4130中層出土。

3は全体の五分の三ほどの資料。丸瓦取り付け位置は2と同じ。外縁内面には範詰めの際の

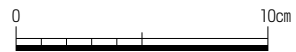
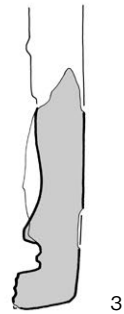
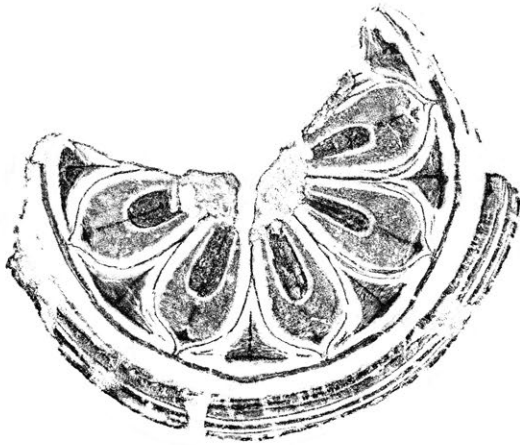
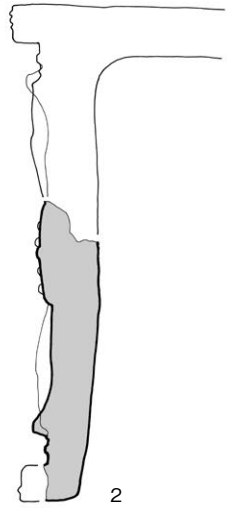
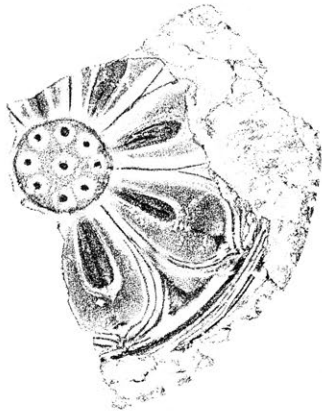
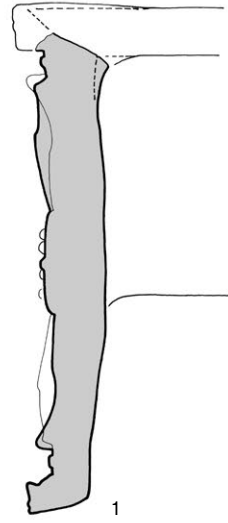
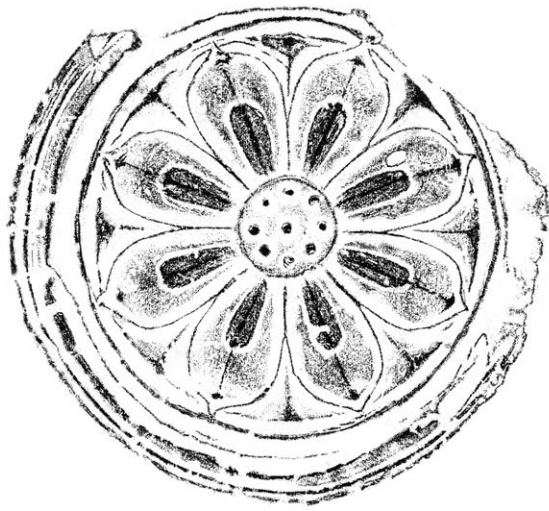


Fig. 71 軒丸瓦1A型式 1:3

粘土のしわや木目痕跡が残る。側面は円弧に沿ってナデ調整する。1と同様の理由から、A型範とみられる。瓦当裏面はナデ調整し、比較的平坦。丸瓦との接合面は、瓦当上面を削る。支持ナデつけを施した後、接合粘土を付加している。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NH33地区のSD4130上層出土。

軒丸瓦1B型式 (Fig. 72-4~7, Ph. 53) 山田寺式重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦。吉備池廃寺創建1B型式と同範。13点出土した。残存状況の比較的良好な4点について記述、図示する。

4は完形に近い資料。中房上面に同心円状の凹凸がみられる。外縁内面の調整は不完全で、範に粘土を充填する際のしわが残る。全体的に磨滅し、調整の観察が難しいが、側面は円弧に沿ってナデ調整するか。外縁上面から0.5cmほどの位置にわずかな段が走り、A型範の痕跡の可能性はある。瓦当裏面は中央がやや高く膨らむ。調整はナデか。丸瓦との接合面は瓦当上面を削り、接合粘土を付加している。支持ナデつけは弱く、接合粘土と瓦当カット面との間には隙間がある。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英と長石が特に多い。復元瓦当径20.6cm。中房径4.2cm。HO11地区の包含層出土。

5は全体の四分の一ほどの資料。丸瓦取り付け位置は4と180°ずれる。外縁をほとんど欠損する。瓦当裏面の調整はナデか。丸瓦との接合は、範に粘土を詰める過程で行ったとみられ、以下のように復元できる。①範に粘土板(厚さ0.8cm前後)を詰め、瓦当上面を斜めにカットする、②凹面を斜めに削り、楔形にした丸瓦を瓦当に当てる、③瓦当裏面に粘土板(厚さ0.8cm前後)を足して、上面は丸瓦に沿ってナデつける、④丸瓦凹面に沿って支持ナデつけを弱く施し、接合粘土をナデつける。また、最初に詰めた瓦当粘土のみに丸瓦のキザミ(タテ方向)が転写されている。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。藤原京期後半(Ⅲ-C期)の南北棟建物SB4330の柱穴から出土。

6は全体の四分の一ほどの資料。丸瓦取り付け位置は4と同じ。外縁内面、側面は円弧に沿ってナデ調整。瓦当裏面は中央がやや高く膨らむ。調整は中央寄りがユビオサエで、周囲は円弧に沿ってナデ調整。丸瓦との接合面をわずかに残し、斜め方向のキザミが転写されている。支持ナデつけは非常に弱い。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、赤色粒子を含む。藤原京Ⅲ-A期の施設解体時の、塵芥処理用の土坑と考えられるSK4325から出土した。

7は全体の五分之一ほどの資料。全体的に磨滅し、文様も不明瞭。丸瓦との接合は、5と同様に範に粘土を詰める過程で行ったとみられる(Ph. 53細部写真)。筒部を一部残すため、幅6cmほどの接合粘土を付加している状況がよくわかる。支持ナデつけは弱い。丸瓦は凹面を斜めに削って楔形にし、そのカット面にタテ方向のキザミを施す。また、丸瓦の凸面先端にも接合粘土を付加する。丸瓦凹面は一部ナデ調整するが、布目痕跡を残す。側面調整は、全体に丁寧なヘラケズリを施し、両側縁に面取りをするc3手法³。厚さ2.3cm。色調はにぶい黄橙色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、赤色粒子を含む。SK4325出土。

この他、本報告対象外の左京六条三坊において、接合部にキザミの転写を良好に残す資料が出土している(Ph. 53細部写真)。

また、1Aか1Bか細分できない資料が8点出土した。

軒丸瓦2型式 (Fig. 73-8, Ph. 53) 山田寺式重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦。奥山廃寺ⅧA型式と同範。2点出土。8は中房を欠く。接合部が残るが、キザミの転写はみられない。接合粘土

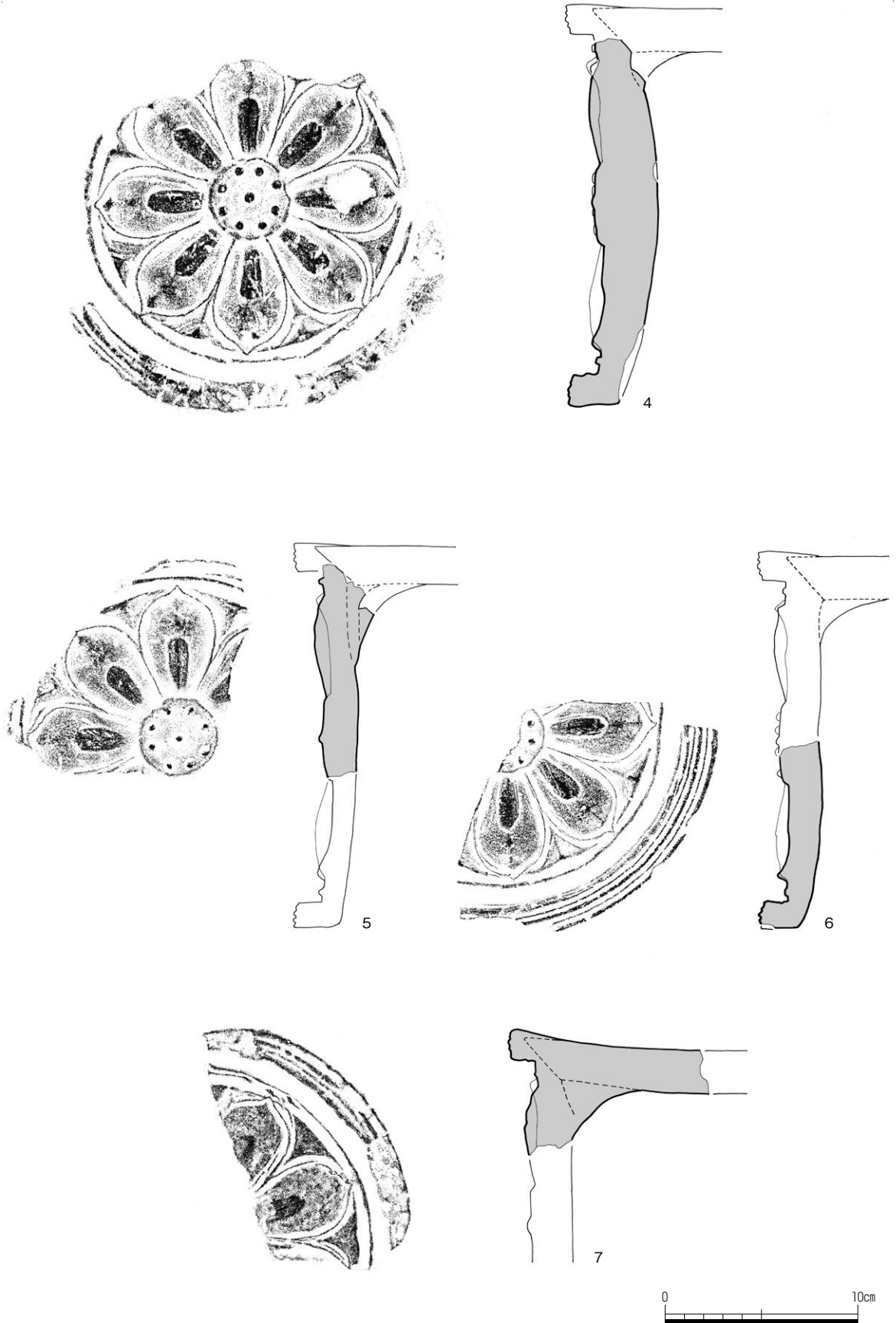


Fig. 72 軒丸瓦 1B型式 1:3

にのみ布目痕跡が転写されていることから、丸瓦の凹面を浅く斜めに削って接合したと考えられる。側面、瓦当裏面はナデ調整する。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母を含む。HI18地区の土坑SK4491出土。

軒丸瓦3型式 (Fig. 73-9, Ph. 53) 雷文縁複弁蓮華文軒丸瓦。小山廃寺創建KYM-4類と同範⁴。1点出土。9は全体に磨滅が著しい。接合部の状況がよくわかる資料で、丸瓦は先端未加工で接合される。キザミは施されない。丸瓦の厚さは2.1cm。丸瓦の凸面、凹面両方に厚く接合粘土を付加する。色調は灰色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多量に含み粗い。調査区北西部の中世の大土坑SK5015から出土。

軒丸瓦4型式 (Fig. 73-10, Ph. 53) 法隆寺式複弁蓮華文軒丸瓦。長林寺4b型式の花弁と鋸歯文を彫り直した新型式⁵。1点出土。10は接合部端部をわずかに残す。外縁端にわずかな突出部分がみられ、B型範の痕跡の可能性はある。側面は円弧に沿ってナデ調整。瓦当裏面は板状工具でナデ調整する。瓦当は非常に厚く、外縁部で4.1cmを測る。破面観察により、粘土板を2回に分けて範詰めしたことがわかる。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NI28地区のSD4130上層出土。

軒丸瓦5A型式 (Fig. 73-11, Ph. 54) 複弁蓮華文軒丸瓦。藤原宮所用6233Bb型式と同範⁶。1点出土。11は瓦当面が磨滅し、蓮子が不明瞭である。側面はヨコ方向にナデ調整。外縁上面から0.7cmほどの位置に、凸線がかすかに走る。A型範の痕跡の可能性はある。瓦当裏面は平坦でナデ調整するが、接合部付近は部分的に接合粘土を付加してナデつけている。接合部には丸瓦を差し込んだ幅1.3cmの溝が残り、丸瓦先端は未加工とみられる。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。HG19地区包含層出土。

軒丸瓦5B型式 (Fig. 73-12, Ph. 54) 複弁蓮華文軒丸瓦。藤原宮所用6273B型式と同範。5点出土。12は全体の五分の四ほどの資料。側面はヨコ方向にナデ調整する。瓦当裏面は中心寄りをユビオサエし、周縁はナデ調整する。接合部には丸瓦を差し込んだ幅1.8cmの溝が残り、丸瓦先端に施されたタテ方向のキザミが転写されている (Ph. 54細部写真)。丸瓦先端は削っていない。また、接合粘土を棒状工具で填圧した痕跡がわずかに残る。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NL23地区の包含層出土。この他、丸瓦先端にキザミを施さない未加工のものも出土している。

軒丸瓦5C型式 (Fig. 73-13, Ph. 54) 複弁蓮華文軒丸瓦。外区に珠文、外縁に凸鋸歯文を配する6273型式であるが、すでに確認されているA～D型式のどれにも該当しない。凸鋸歯文の形状は平坦な三角形ではなく、稜をもつために見鋸状形を呈する。外区の珠文も大きめである。1点出土。13は側面をヨコ方向にナデ調整。外縁上面から1.4cmの位置に凸線が走るが、範端痕跡であるのかナデによる傾斜変換点であるのかは明確でない。瓦当裏面はナデ調整する。接合部が残るが、丸瓦が瓦当上面に接するほど取り付け位置が高い。接合粘土は剥離している。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質。胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NE11地区の耕作溝出土。

軒丸瓦5D型式 (Fig. 73-14, Ph. 54) 複弁蓮華文軒丸瓦。藤原宮所用6274Aa型式と同範。3点出土したが、同一個体の可能性はある。14は瓦当裏面がほぼ全面剥離する。側面はヨコ方向にナデ調整するが、外縁寄り是一段強いためやや内傾する。瓦当厚は外縁部分で4.0cm。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含み精良。NH36地区の

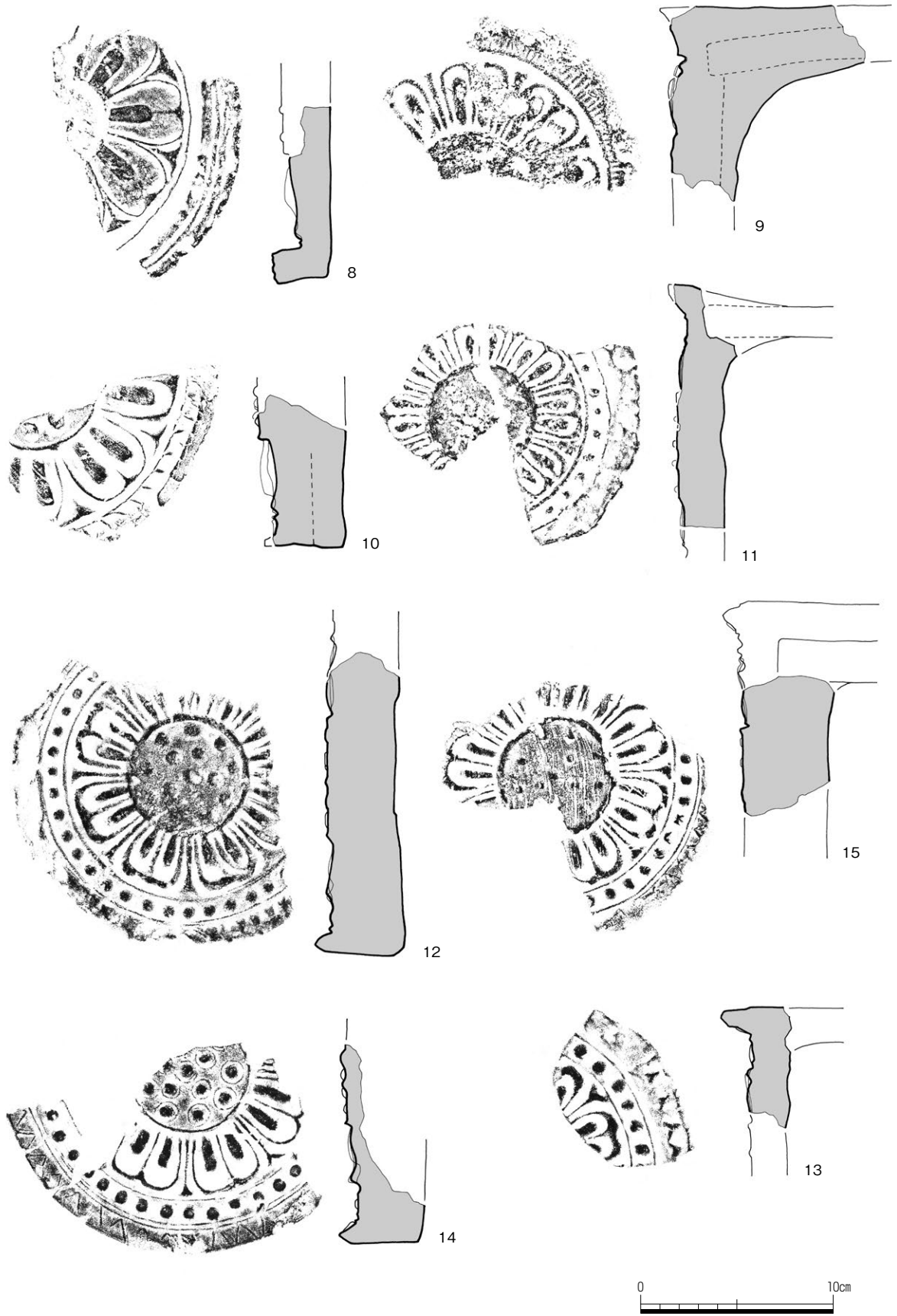


Fig. 73 軒丸瓦2~5E型式 1:3

SD4130中層出土。この他、瓦当上半から接合部にかけての部分を残す資料があり、丸瓦凸面に施したキザミが明瞭に転写されている(Ph. 54細部写真)。キザミは5cm以上の長さで、タテ方向が主であるが所々交差している。

軒丸瓦5E型式(Fig. 73-15, Ph. 54) 複弁蓮華文軒丸瓦。藤原宮所用6276C型式と同範。1点出土。15は瓦当面に条線が走り、糸切痕跡とみられる。側面はナデ調整するが、外縁上面から0.8cmほどの位置で段差が生じており、A型範の痕跡と考えられる。瓦当裏面はナデ調整。接合部には厚さ2.3cm前後の丸瓦が一部残る。丸瓦端部にキザミはみられないが、凹面にはタテ・ナナム方向にキザミが施され、それが転写されている。破面観察により、粘土板を2回に分けて範詰めしたことがわかる。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含み精良。NN24地区の中世井戸SE4790から出土。

軒丸瓦5F型式(Fig. 74-16, Ph. 54) 複弁蓮華文軒丸瓦。1点出土。16は磨滅が著しい。側面はナデ調整するが、瓦当裏面の調整は不明瞭。色調はにぶい黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、特に石英と長石が多く粗い。SK4325出土。

軒丸瓦6A型式(Fig. 74-17, Ph. 55) 複弁蓮華文軒丸瓦。文武朝大官大寺創建6231A型式と同範。1点出土。17は外縁を欠損する。側面は円弧に沿ってナデ調整し、瓦当面向けて外傾する。瓦当裏面は全体にナデ調整を施す。特に周縁に沿っては強いナデが施され、幅2cmほどの窪みが円弧に沿って巡る。接合部は支持ナデつけられるが、接合粘土は痕跡のみ残る。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。NL32地区SK4796出土。

軒丸瓦6B型式(Fig. 74-18, Ph. 55) 複弁蓮華文軒丸瓦。文武朝大官大寺創建6231C型式と同範。1点出土。18は全体的に磨滅が著しい。文様のみならず、側面、裏面の調整も不明瞭である。丸瓦は瓦当上面よりもやや低い位置に取り付き、凹凸面に付加された接合粘土は多い。色調は灰オリーブ色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、特に石英、長石、黒色粒子が多く粗い。JH25地区の中世井戸SE4460出土。

この他、6231型式でBかCの可能性のあるもの4点、細分できないものが2点出土した。

軒丸瓦7型式(Fig. 74-19, Ph. 54) 複弁蓮華文軒丸瓦。1点出土。外区に珠文を巡らせ、外縁は直立する。型式は不明であるが、奈良時代後期に位置づけられるか。19は側面、瓦当裏面ともにナデ調整。色調は褐色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。NI29地区のSD4130中層出土。

軒丸瓦8A型式(Fig. 75-20・21, Ph. 55) 右巻き三巴文軒丸瓦。巴は平板で頭はやや尖る。頭同士は接していない。外区の珠文は35個。外区に範傷がみられ、範傷進行を少なくとも3段階追うことができる⁷。丸瓦取り付け位置は180°でずれる。筒部には吊り紐痕跡が残る。調査区北西の中世大溝SD4744・4745・4755、SK5015(以下、SD4744等とする。)と周辺の包含層から、36点出土した。

20は丸瓦部が完形。範傷は残存する範囲で4箇所確認できる。瓦当面には離れ砂が付着する。瓦当裏面は下半部をヨコ方向に、上半部は円弧を意識してナデ調整し、平坦に仕上げる。丸瓦先端は未加工のまま接続する。瓦当粘土の範詰めは2回に分けており、丸瓦はその途中で設置される。接合粘土は凸面側が多く、凹面側は少ない。丸瓦凸面は縦位縄叩き目をタテ方向にナデ調整する。凸面段部から5.0cmの位置に、径1.5cmの釘穴を設けている。凸面から凹面方向の

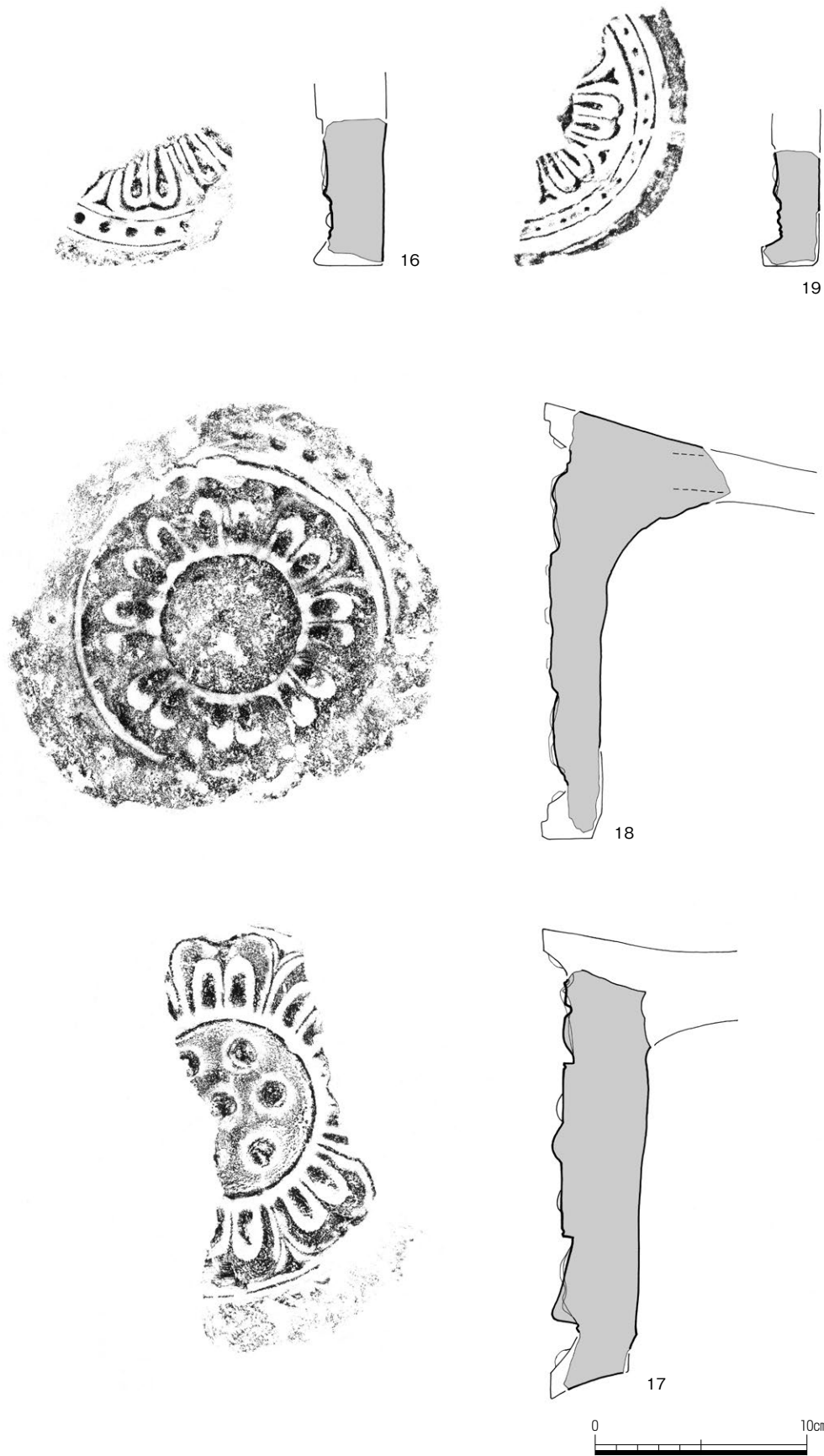


Fig. 74 軒丸瓦5F~7型式 1:3

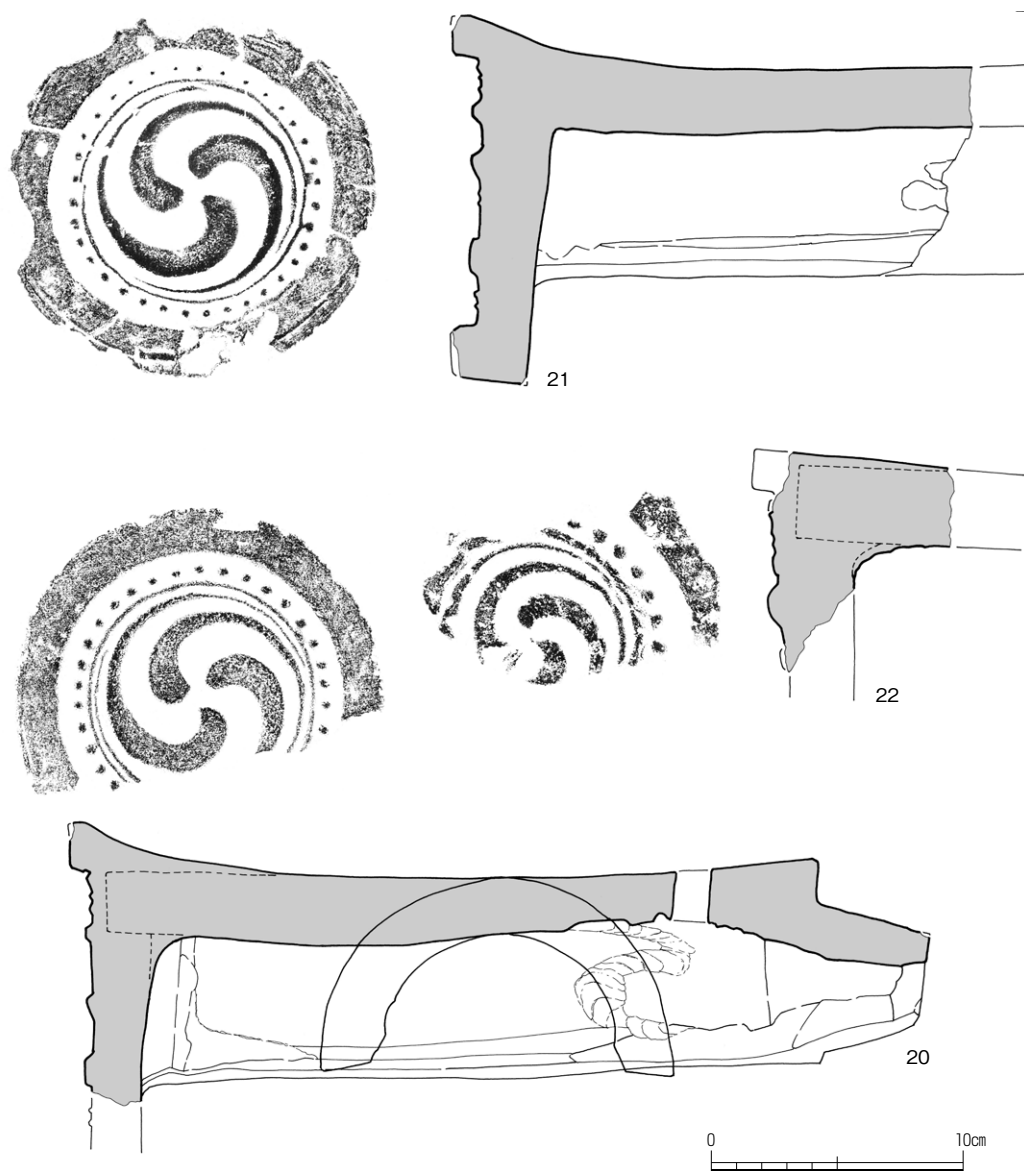


Fig. 75 軒丸瓦8型式 1:3

焼成前穿孔。側面は凹面側に玉縁部と一連の幅広い面取り。凸面側は玉縁部のみ面取りする。玉縁凹面端部も面取り。筒部凹面は部分的に軽くナデ調整するが、吊り紐、糸切り、粘土板合わせ目（Z）、布目の各痕跡を残す。吊り紐は通し縫いされるが、大部分が布袋の外側に出る。全長34.2cm、段部幅14.5cm、瓦当径14.5cm、瓦当厚は外縁部で2.9cm、外縁幅1.7～2.0cm。筒部厚さ2.5～2.7cm、玉縁長4.4cm。色調は黄灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を多く含む。中世大溝SD4755出土。

21は瓦当がほぼ完形。瓦当面外区上面に糸切り痕が残る。範傷が7箇所あり、範傷進行最終段階のもの。瓦当面には離れ砂が付着する。外縁上面の一部には凸線が巡る。丸瓦取り付け位置は20と同じ⁹。瓦当裏面の調整も20と同様。筒部凸面は板状工具でタテ方向にナデ調整する。側面は凹面側にのみ面取りをする。凹面は一部ナデ調整するが、吊り紐、糸切り、布目の各痕跡を残す。吊り紐痕跡は一部のみしか残らない。瓦当径14.9cm、瓦当厚は外縁部で3.0cm、外縁幅1.7～1.9cm。筒部厚さ2.4cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を多く含む。中

世土坑SK5015上層出土。

本型式には、上記のように焼成が硬質のもの以外に、軟質のものもある。範傷進行との比較を行ったが、資料数に限界があり顕著な対応がみられるとはいえない。また、年代については、吊り紐痕跡に着目すると、14世紀後半に位置づけることができる¹⁰。

軒丸瓦 8B型式 (Fig. 75-22, Ph. 55) 右巻き三巴文軒丸瓦。巴は丸みを帯び頭はやや尖る。頭同士は接していない。外区の珠文数は不明だが、8A型式よりも大きい。4点出土し、うち3点はSK5015からである。22は筒部を一部残す。磨滅が著しく、調整等はわかりにくい。丸瓦先端は未加工で接合している。瓦当復元径16.0cm。外縁幅1.7cm、色調は橙色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、赤色粒子を多く含む粗いもの。SK5015出土。

本型式は、すべて同様の色調、焼成、胎土である。丸瓦部を良好に残す資料がないため、製作技術に基づいて年代を絞り込むことが難しい。

上記2型式の他に、別型式の巴文と考えられる軒丸瓦が4点出土したが、外縁部の小片であり、詳細は不明である。

ii 軒平瓦

軒平瓦 1A型式 (Fig. 76-1~9, Ph. 56) 型押し忍冬唐草文軒平瓦。吉備池廃寺創建 I A型式と同範。22点出土¹¹。うち、残存状況の比較的良好な5点について記述し、9点を図示する。

1は右側面を残す。やや磨滅し、瓦当面の調整は不明瞭。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。瓦当付近はヨコ方向にナデ調整後、凹面側縁を面取り。瓦当文の押し型を押しした圧力で瓦当上面が若干波打つため、調整後の押捺とわかる。凸面はタテ方向にナデ調整する。面取りは施さない。瓦当厚4.1~4.3cm。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。NL34地区の14世紀の井戸SE5023出土。

2は右側面を残す。やや磨滅し、瓦当面の調整は不明瞭。2つの単位文様のうち、右（瓦当を正面から見て。以下同じ。）の単位文様が左のそれにつぶされる。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡をごくわずかにしか残さない。瓦当付近は1同様、押し型の押捺によって波打つ。凹面側縁は面取りをする。凸面はタテ方向のナデ調整。凸面側縁もわずかに面取りをするか。瓦当厚3.5~4.0cm。色調は黄褐色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、赤色粒子を含む。SK4325出土。

3は右側面を残す。瓦当面に範の木目の痕跡が残る。また、範傷が明瞭である。左の単位文様が右のそれにつぶされる。凹面はタテ方向に強めのナデ調整。瓦当付近はさらにヨコ方向にナデ調整し、凹面側縁を面取り。凸面はタテ方向にナデ調整し、側縁を面取りする。粘土板合わせ目（Z）が残る。瓦当厚4.2cm。色調は暗灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。調査区北西部の中世大溝SD4745出土。

4は側面を欠く。瓦当に施文する前に、円弧に沿ってナデ調整する。文様の範傷が明瞭。凹面はタテ方向に強めにナデ調整し、布目痕跡を残さない。瓦当付近はさらにヨコ方向にナデ調整するが、瓦当正面が若干波打つ。凹面はタテ方向にナデ調整する。瓦当厚4.1cm。色調は灰白色でやや軟質。石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。NH27地区のSD4130上層出土。

5は右側面を残す。瓦当に施文する前に、円弧に沿ってナデ調整する。文様の範傷が明瞭。

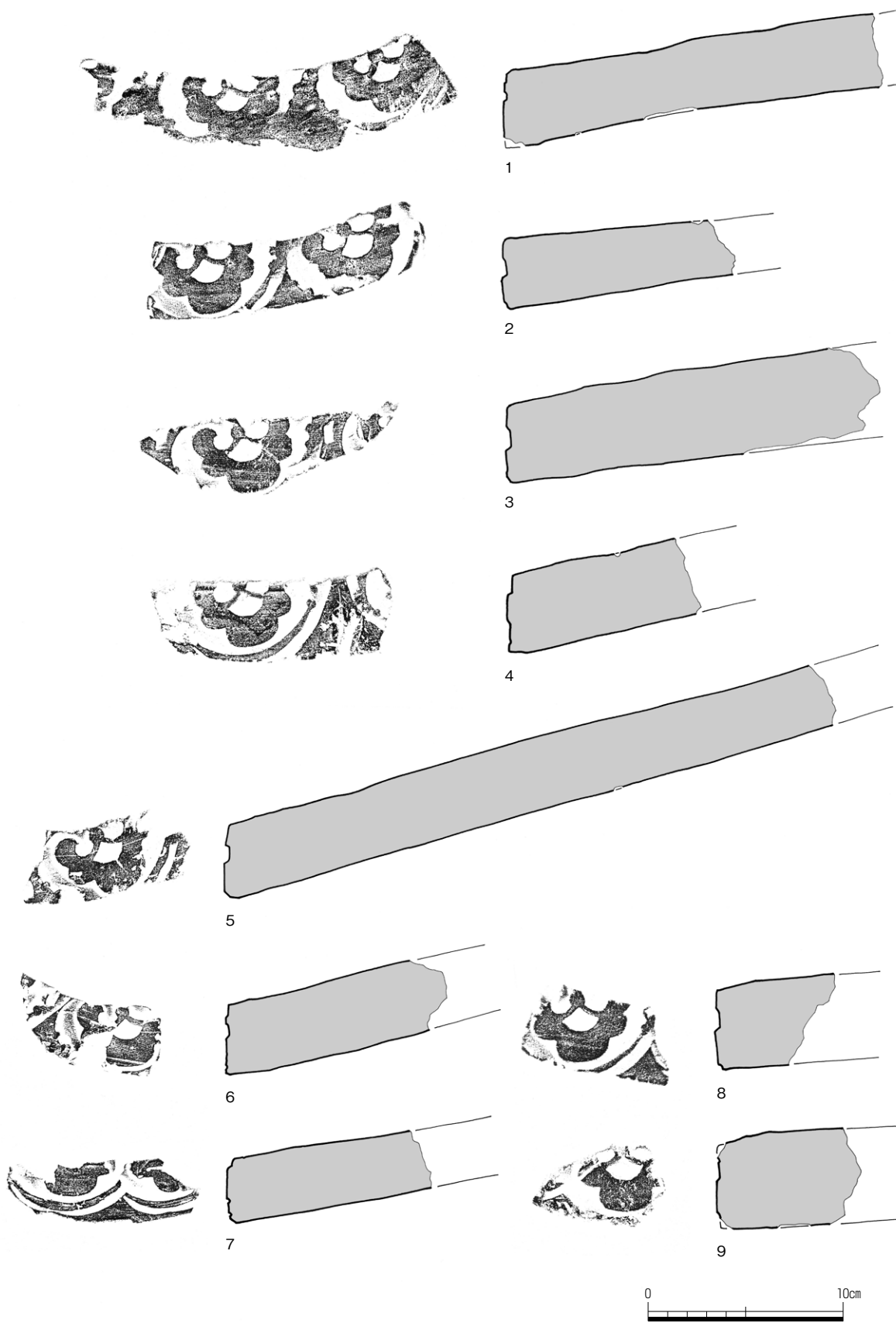


Fig. 76 軒平瓦1A型式 1:3

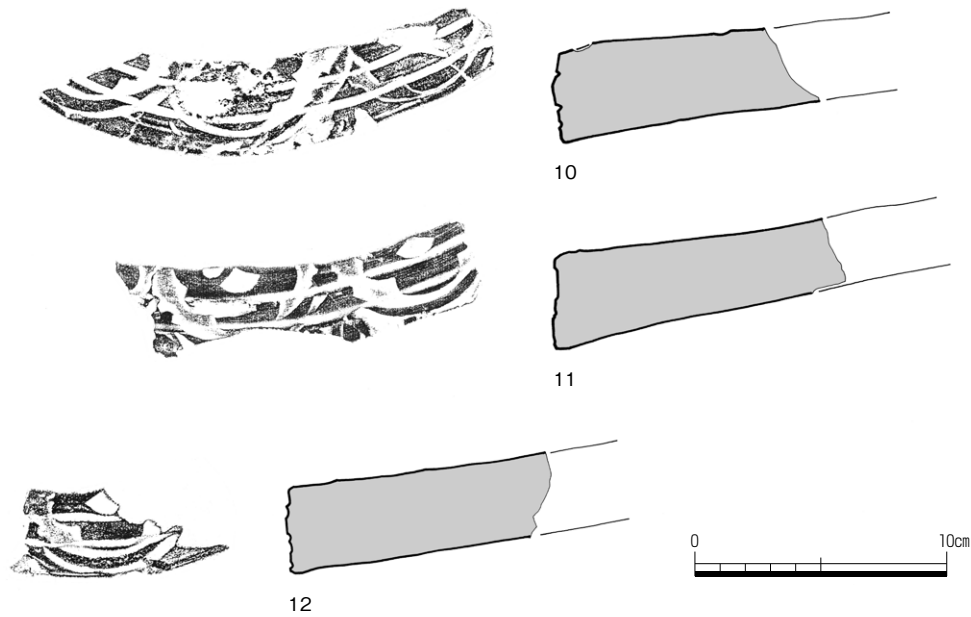


Fig. 77 軒平瓦1B型式 1:3

凹面はタテ方向に強めにナデ調整し、布目痕跡をわずかにしか残さない。瓦当付近はさらにヨコ方向にナデ調整する。側縁は面取りをする。凸面は大部分をタテ方向にナデ調整するが、一部、側縁寄りで平行叩き目がナデ消されずに残る (Ph. 56細部写真)。側縁に面取りはない。粘土板合わせ目 (S) が残る。瓦当厚3.8cm。色調は暗灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NH30地区のSD4130下層出土。

この他、押し型の押捺順序を考える手掛かりになる資料が4点ある。6は瓦当厚3.3~3.6cm、色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。HH21地区の土坑SK4500出土。7は瓦当厚3.3cm、色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NB28地区の耕作溝出土。8は瓦当厚4.1cm、色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。NP38地区の包含層出土。9は瓦当厚4.5cm、色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、赤色粒子を含む。NH29地区のSD4130中層出土。いずれの資料も、右が左の単位文様につぶされる。

右京七条一坊と左京六条三坊の本報告対象外の地で同型式が5点出土し、うち右の単位文様が左のそれにつぶされるものが2点、逆のものが2点ある。また、単位文様の重複が両側にみられる資料もある (『吉備池廃寺発掘調査報告』PL. 38-10)。単位文様の重複順序と押し型の施文順序の関係については、第Ⅵ章3で述べる。

軒平瓦1B型式 (Fig. 77-10~12, Ph. 56) 型押し忍冬唐草文軒平瓦。吉備池廃寺創建IB型式と同範。3点出土。

10は右側面を残す。重弧文 (心々で1.1cm間隔の2本の凹線。凹線は断面がV字形。) を施文したのち、押し型を押捺している。重弧文の施文方向は不明だが、右の単位文様が左のそれにつぶされる。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。瓦当付近はさらにヨコ方向にナデ調整し、側縁を幅広く面取りする。瓦当上面は押し型の押圧によって波打つ。凸面はタテ方向、瓦当付近のみヨコ方向にナデ調整。部分的にかすかに平行線が確認でき、平行叩きもしくは木目の目立つ無文叩きが行われた可能性がある。側縁の面取りはない。瓦当厚3.2~3.7cmで、瓦当の中

心寄りが厚い。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。六条条間路北側溝SD4139出土。

11は右側面を残す。重弧文(心々で1.1cm間隔の2本の凹線。断面には丸みがある。)を施文したのち、押し型を押捺している。重弧文の施文方向は不明だが、左の単位文様が右のそれにつぶされる。凹面・凸面調整は9と同様。瓦当厚3.3~3.6cmで、瓦当の中心寄りが厚い。色調、焼成、胎土も9と同様。SD4130に南から合流する南北溝SD4131下層出土。

12は右側面を残す。9同様の重弧文を施文したのち、押し型を押捺している。調整は9と同様。瓦当厚3.4cm。色調、焼成も9とほぼ同様。HF20地区の包含層出土。

以上1B型式の3点は、単位文様の重複順序を除いて、よくまとまった特徴をもつ。この他、左京六条三坊の本報告対象外の地において、残存状況が良好な資料が出土した。詳細はすでに報告している(『吉備池廃寺発掘調査報告』p84、Fig. 60-20)が、調整や焼成、色調が上記3点とは若干異なる。

また、1Aか1Bか細分できない資料が3点出土した。

軒平瓦2A型式(Fig. 78-13, Ph. 56) 二重弧文軒平瓦。凹線は、断面「**U**」形で明瞭。凹線幅は0.2cm。弧線は意識的に作り出されていない。13は直線顎。凹面はタテ方向に、瓦当付近のみヨコ方向にナデ調整。顎部には平行叩き(平瓦の節で後述する平行叩き目C13。)を軽くナデ調整する。瓦当厚1.9cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。HD33地区の包含層出土。

軒平瓦2B型式(Fig. 78-14, Ph. 56) 二重弧文軒平瓦。凹線は断面「**U**」形で明瞭。凹線幅は0.4cm。弧線は意識的に作り出されていない。14は直線顎。凹面はタテ方向にナデ調整し、瓦当付近のみヨコ方向に削り調整。側縁は面取りする。凸面は平行叩き目(同じく平行叩き目C9。)が残る。瓦当厚1.5cm。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を少量含む。NI30地区のSD4130中層出土。

軒平瓦2C型式(Fig. 78-15, Ph. 56) 三重弧文軒平瓦。凹線はごく浅く、0.6~0.7cm間隔である。弧線は意識的に作り出されていない。瓦当縁に完全には平行せず、瓦当縁に被さるような挽き型ではないとみられる。15は直線顎。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。瓦当付近はヨコ方向にナデ調整。凸面もナデ調整。瓦当厚2.5~2.9cm。色調は暗灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。NF17地区のⅢ-A期土坑SK4734出土。

軒平瓦2D型式(Fig. 78-16, Ph. 56) 三重弧文軒平瓦。凹線はごく浅く、1.0~1.2cm間隔である。弧線は意識的に作り出されていない。15同様、瓦当縁に完全には平行しない。16は直線顎。凹面はタテ方向にナデ調整し、工具痕が平行に走る。布目痕跡は残らない。瓦当付近はヨコ方向にナデ調整。凸面もナデ調整。瓦当付近は無文の板で補足叩きをする。瓦当厚2.7~2.9cm。色調は褐灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。SE4740出土。

軒平瓦2E型式(Fig. 78-17, Ph. 56) 三重弧文軒平瓦。弧線は丸みを帯び、凹線は深くU字を呈する。17は顎の形状が不明。凹面は瓦当付近をヨコ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。凸面もナデ調整。瓦当厚2.9cm。色調は明褐色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。NG17地区のSD4130上層出土。

軒平瓦2F型式(Fig. 78-18, Ph. 56) 四重弧文軒平瓦。弧線は丸みを帯び、凹線はわずかに平坦

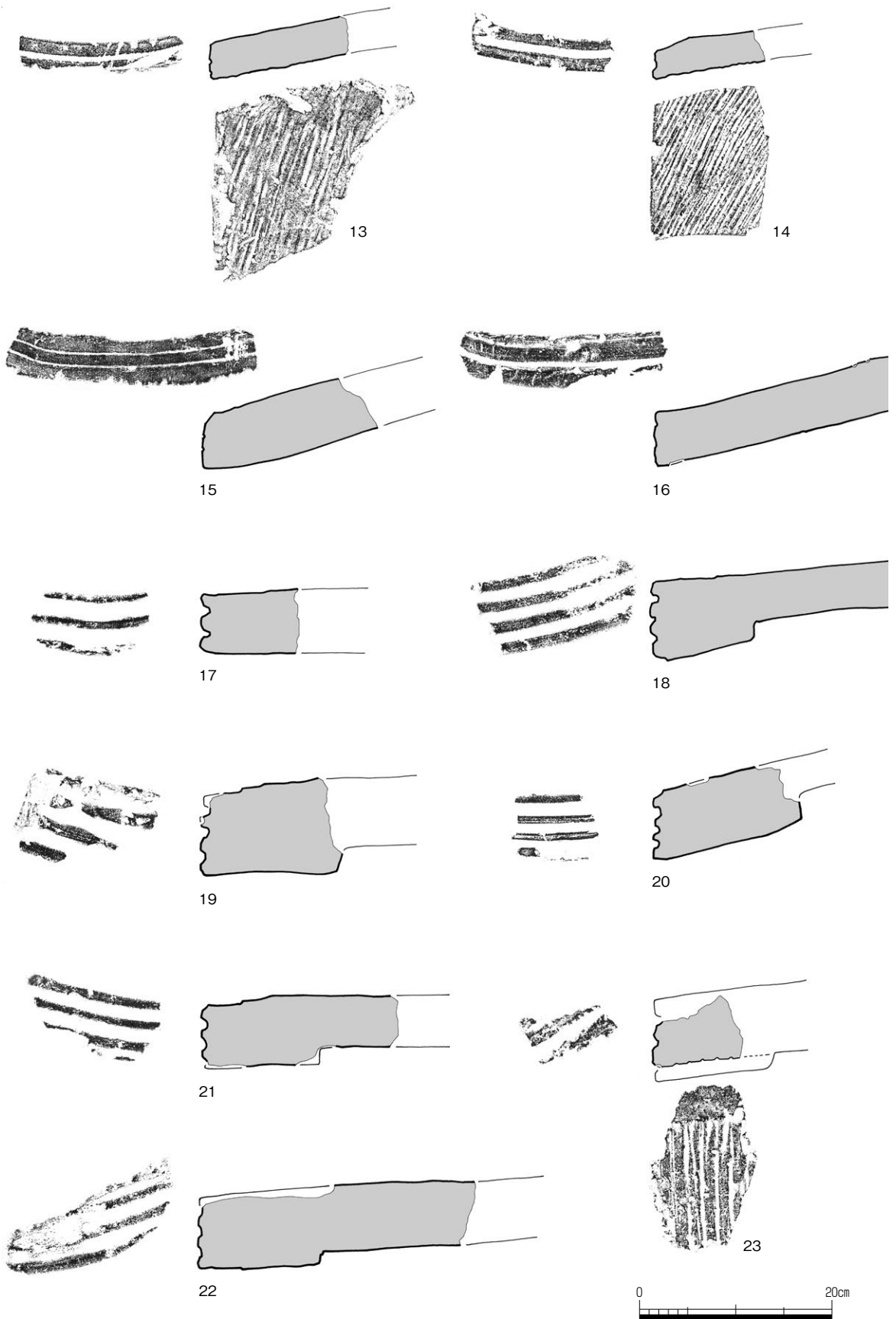


Fig. 78 軒平瓦2型式 1:3

面をもつ。弧線は凹線に比べ幅広い。18は長さ5.2cm、深さ0.9cmの段顎。凹面はヨコ方向、側縁付近をタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。側面は顎部のみ面取り。顎部には瓦当面から0.5cmほどの位置に施文具のあたりが走る。凸面はナデ調整。瓦当厚3.9cm。色調はにぶい黄褐色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を多く含む。NI23地区のSD4130上層出土。

軒平瓦2G型式 (Fig. 78-19, Ph. 56) 四重弧文軒平瓦。弧線は丸みを帯び、凹線は明瞭に平坦面をもつ。弧線は凹線よりもやや幅広い。19は長さ7.2cmの段顎。深さは欠損し不明。左側面をわずかに残す。凹面には瓦当面から1.2cmの位置に施文具のあたりが走る。また、ナデ調整は部分的で、桶杵板、分割突起、布目の各痕跡を残す。杵板幅は3.2cmで、分割突起(界点)は径1.3cm。凸面はナデ調整。瓦当厚4.3cm。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石を含む。HC31地区の包含層出土。

軒平瓦2H型式 (Fig. 78-20, Ph. 56) 四重弧文軒平瓦。弧線は平坦で、凹線は丸みを帯びる。弧線と凹線幅はほぼ変わらない。小山廃寺KYH-5類に相当する¹²。20は長さ7.9cmの段顎。深さは欠損し不明。凹面には瓦当面から1.7cmの位置に施文具のあたりが走る。ナデ調整するが、布目痕跡を残す。凸面はナデ調整。瓦当厚3.3cm。色調は黒褐色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。NG31地区のSD4130上層出土。

軒平瓦2I型式 (Fig. 78-21, Ph. 56) 四重弧文軒平瓦。第四弧線がごくわずかにしか表出されない。弧線と凹線ともに丸みを帯び、弧線は凹線に比べ幅広い。21は長さ5.8cm、深さ0.7cmの段顎。左側面を残す。凹面には瓦当面から2.1cmの位置に施文具のあたりが走る。ナデ調整するが、布目痕跡をわずかに残す。側面は断面剣先形にケズリ調整する。凸面はナデ調整。顎部は磨滅し調整不明瞭、瓦当厚3.2cm。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。NJ37地区のSD4130上層出土。

軒平瓦2J型式 (Fig. 78-22, Ph. 56) 四重弧文軒平瓦。第一弧線がごくわずかにしか表出されない。弧線は丸みを帯び、凹線は平坦面が明瞭である。凹線は弧線に比べてやや幅広い。小山廃寺KYH-7類に相当する。22は長さ6.2cm、深さ0.7cmの段顎。右側面を残す。磨滅により凹面の調整は不明瞭。布目痕跡がわずかに認められる。側面は斜めに大きく削る。顎部には瓦当面から2.0cmの位置に施文具のあたりが走る。顎部、凸面ともナデ調整か。瓦当厚3.4cm。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。SE4740出土。

この他、重弧の数が不明な資料が1点ある (Fig. 78-23, Ph. 56)。23はわずかに右側面を残す資料。上部を欠き、かつ顎の部分剥落する。弧線は丸みを帯びるが、わずかな平坦面がある。弧線に比して凹線は狭い。顎の接合面には挽き型で重弧文風の凹凸がつけられる。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。中世土坑SK5015下層出土。これ以外に、欠損により残存状況が良好でない資料が3点出土している。

軒平瓦3型式 (Fig. 79-24, Ph. 57) 法隆寺式均整忍冬唐草文軒平瓦。法輪寺所用A型式と同範¹³。2点出土。24は外縁をすべて欠損。凹面をヨコ方向にケズリ調整し、中心寄りにはさらにナデ調整。布目痕跡は残らない。側縁は面取りをする。凸面はタテ方向にケズリ調整する。瓦当厚5.8~6.2cm。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。法輪寺出土資料と焼成、胎土などが非常に似る。NK26地区の小穴から出土。

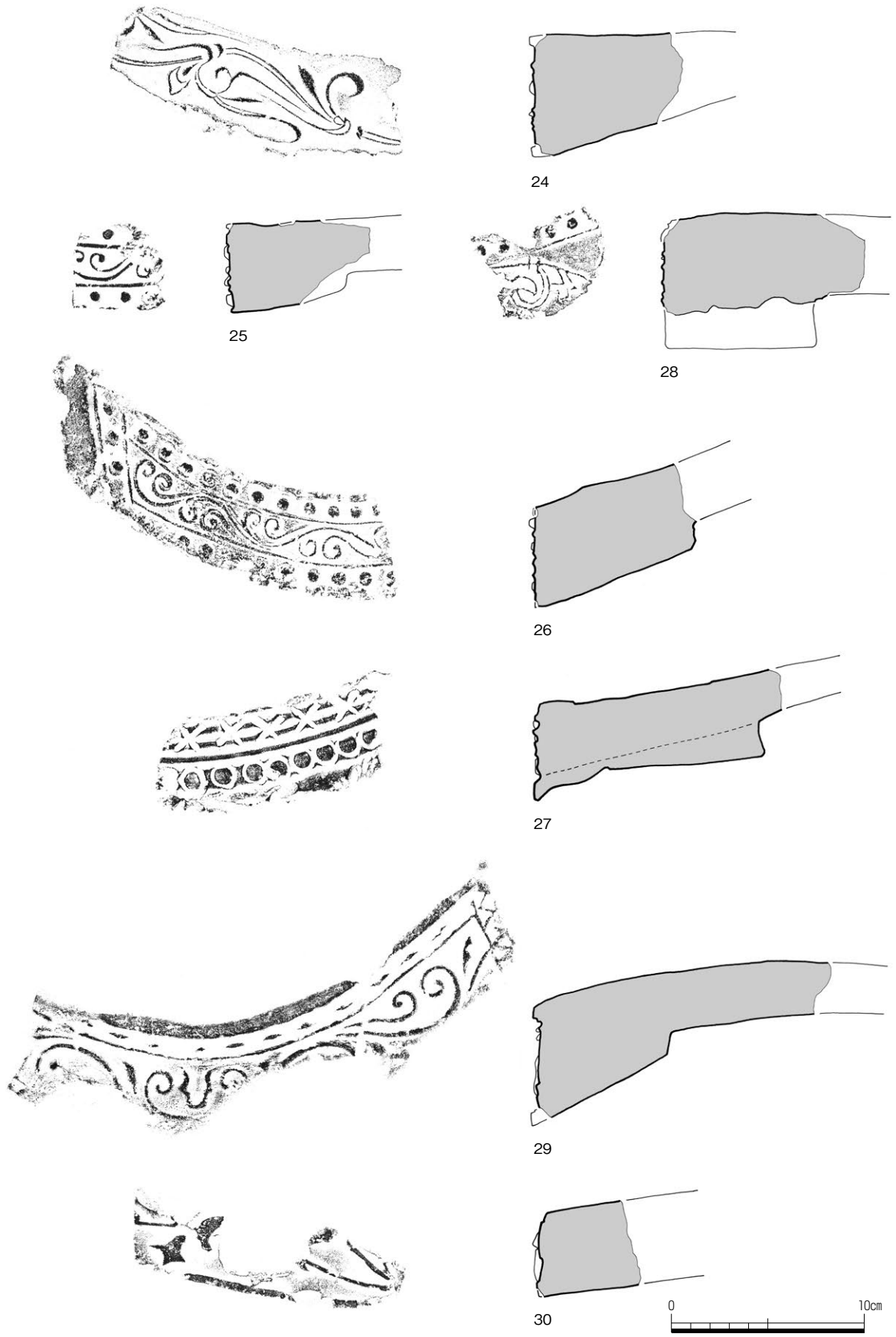


Fig. 79 軒平瓦3~6型式 1:3

軒平瓦4A型式 偏行唐草文軒平瓦。藤原宮式6641C型式と同範。1点出土。瓦当のごく一部が残る。小片のため、図示しない。HD29地区の包含層出土。

軒平瓦4B型式 (Fig. 79-25, Ph. 57) 偏行唐草文軒平瓦。藤原宮式6643Aa型式と同範。1点出土。25は凹面瓦当付近のみヨコ方向にナデ調整し、その他は未調整で布目痕跡を残す。顎部はナデ調整。瓦当厚5.8～6.2cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。SE4740出土。

軒平瓦4C型式 (Fig. 79-26, Ph. 57) 偏行唐草文軒平瓦。藤原宮式6643C型式と同範。1点出土。26は長さ9.0cm、深さ1.2cmの段顎をもつ。凹面はヨコ方向にケズリ調整し、布目痕跡は一部にしか残らない。側縁は面取りする。顎部はナデ調整。瓦当厚5.2cm。色調はにぶい黄褐色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石を非常に多く含む粗い。HK17地区の小穴出土。

軒平瓦4D型式 (Fig. 79-27, Ph. 57) 変形重弧文軒平瓦。藤原宮式6561型式と同範。4点出土。27は長さ11.6cm、深さ1.8cmの貼り付け段顎をもつ。施文順序は、重弧文を挽き出し、スタンプ文を左から右へ押し(「×」と「○」の先後は不明)、下縁部に押圧波状文を施す。凹面は瓦当付近をヨコ方向にナデ調整する以外は未調整で、桶桙板、布端、布目の各痕跡を残す。桙板幅は5.0cmと幅広い。側縁は面取りする。顎部は縦縄叩き目をヨコ方向にナデ調整する。瓦当厚5.0cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。NI22地区のSD4130上層出土。

軒平瓦4E型式 (Fig. 79-28, Ph. 57) 変形忍冬唐草文軒平瓦。藤原宮式6647A型式と同範。1点出土。28は右側面を残す資料。長さ8.0cmほどの段顎をもつが、貼り付けた部分が剥離しており、深さは不明。剥離面にはユビでナデつけた痕跡がある。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目はわずかにしか残らない。凸面はヨコ方にナデ調整する。瓦当厚5.6cm以上。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、粒の大きい黒色粒子が目立つ。NH36地区のSD4130上層出土。

この他、型式は不明だが、藤原宮式軒平瓦と考えられる資料が2点出土した。

軒平瓦5A型式 均整唐草文軒平瓦。文武朝大官大寺創建6661A型式と同範。1点出土。瓦当のごく一部が残る。小片のため、図示しない。NL34地区の中世井戸SE5023出土。

軒平瓦5B型式 (Fig. 79-29, Ph. 57) 均整唐草文軒平瓦。文武朝大官大寺創建6661B型式と同範。2点出土した。29は二次的に被熱したとみられる資料。長さ7.2cm、深さ1.0cmの段顎をもつ。顎部を貼り付けたのちに、さらに削り出しているか。凹面はナデ調整するが、一部布目痕跡を残す。瓦当付近のみヨコ方向にナデ調整。側縁の面取りはない。顎部、凸面ともにナデ調整する。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を多く含む。HK19地区の小穴から出土。

この他、型式は不明だが、文武朝大官大寺所用軒平瓦とみられる資料が1点出土した。

軒平瓦6型式 (Fig. 79-30, Ph. 57) 忍冬唐草文軒平瓦。中心から左右に伸びる茎と葉からなる。文様密度は低い。外区・脇区はない。外縁は瓦当下縁にのみある。顎の形状は不明。平安時代か。1点出土。30は左側面を残す資料。凹面はナデ調整し、布目痕跡はない。凸面は縦縄叩き目をナデ調整する。側縁の面取りは凹面、凸面ともない。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質。石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、黒色粒子や赤色粒子が多い。SE4790出土。

軒平瓦7型式 (Fig. 80-31, Ph. 57) 連珠文軒平瓦。断面に丸みをもつ珠文を13個以上並べ、上下に界線を配する。瓦当貼り付け段顎である。6点出土し、いずれも調査区北西のSE4790、SK5015とその付近の包含層に限られる。31は左側面を残す。離れ砂が瓦当面と凹凸面に付着する。凹面は軽くナデ調整するが、布目痕跡を全体的に残す。凸面もナデ調整。顎部下面と裏面はヨコ方向にナデ調整。色調は灰色からにぶい黄褐色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。SK5015出土。

本型式には、凸面と顎部の境目に凹型台の圧痕を残すものが存在する (Ph. 57細部写真)。

軒平瓦8型式 (Fig. 80-32, Ph. 57) 花唐草文軒平瓦。6弁の花文を中心飾りとし、左右に唐草文を4葉ずつ配する。唐草文は巻きが弱く、それぞれは連結しない。界線は四周に巡らせる。瓦当貼り付け段顎である。18点出土し、いずれも調査区北西のSD4744等とその付近の包含層に限られる。32は瓦当面から25.0cmの位置に、円形の釘穴を有する。焼成前穿孔で、径は不明。瓦当外縁上面はナデ調整。瓦当上縁は0.6cm幅で面取りするが、下縁は部分的に傾斜が変わるも不明瞭。凹面はナデ調整し、布目痕跡をかすかにしか残さない。凸面もナデ調整。顎部は下面・裏面をヨコ方向にナデ調整した後、後縁を0.2~0.5cm幅で面取りする。瓦当幅25.2cm、瓦当厚4.9cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含み、石英、長石

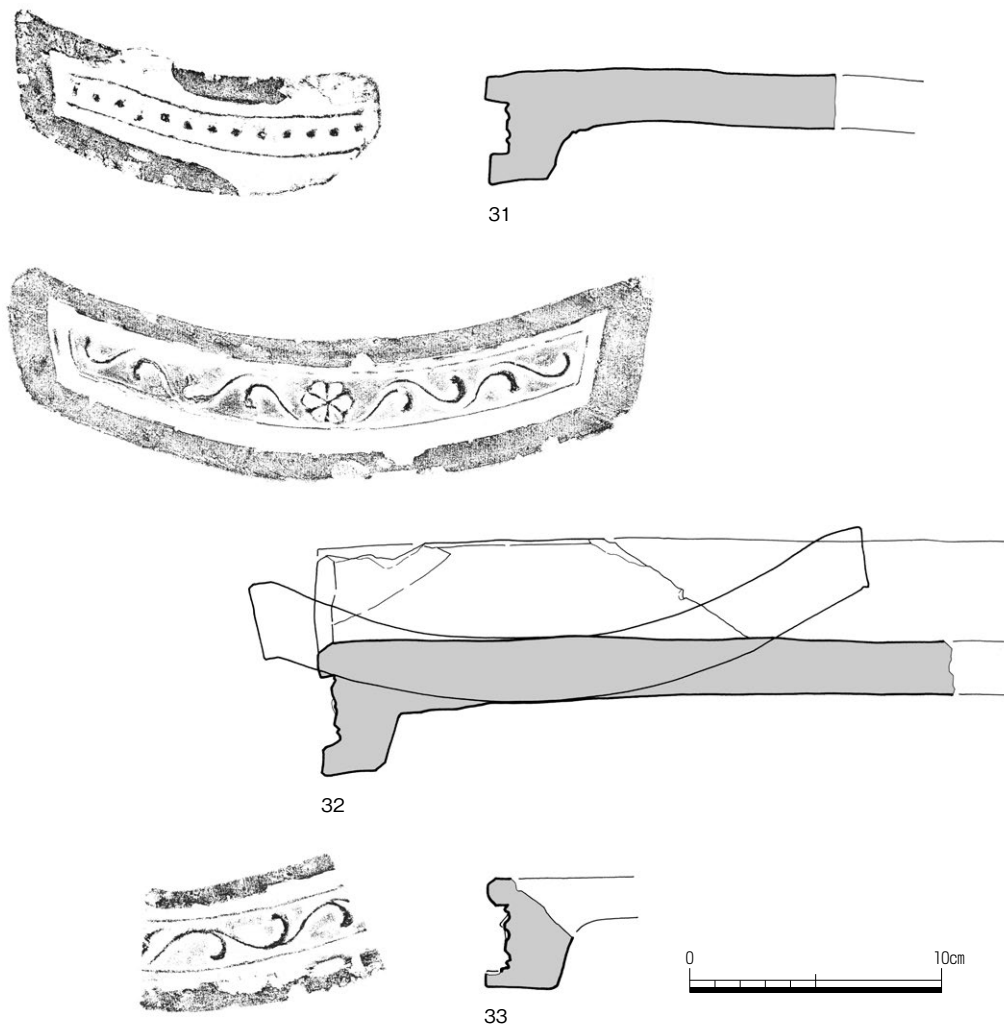


Fig. 80 軒平瓦7~9型式 1:3

が多い。SD4755出土。

本型式には、焼成が硬質のものと軟質のものがある。瓦当の面取りについては、上縁と顎部後縁に施される資料が多いが、明瞭でないものも若干存在する。また、平瓦との接合は、平瓦を斜めに削って瓦当裏に当て（Ph. 57細部写真）、その部分で剥離した資料が複数認められる。

軒平瓦9型式 (Fig. 80-33, Ph. 57) 蓮華唐草文軒平瓦。蓮華文を中心飾りとし、左右に唐草文を3葉以上配する。唐草文は巻きが弱く、それぞれが連結する。界線は上下には巡らせるが、左右は不明。瓦当貼り付け段顎である。1点出土した。33は中心飾りをわずかに残す資料。平瓦との接合面で斜めに剥離している（Ph. 57細部写真）。瓦当面には全体に離れ砂が付着する。瓦当上縁は0.5cm幅で面取りをする。瓦当下縁には面取りを施さない。顎部下面、裏面はヨコ方向にナデ調整した後、後縁を0.4cm幅で面取りする。瓦当厚4.4cm。色調は暗灰黄色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。FB96地区のSD4139出土。

以上の中世軒平瓦7～9型式の年代は、凹型成形台の圧痕の有無、瓦当と平瓦の接合方法、瓦当部の面取り等、技術面に着目すると、7型式は13世紀後半～14世紀前半、8・9型式は14世紀中頃～後半に位置づけることができる¹⁴。この年代観は各遺構で共伴した土器の年代観とも矛盾がない。また、軒丸瓦とのセット関係についてであるが、出土遺構とそれぞれの年代観から、軒丸瓦8A型式と軒平瓦8型式が組み合うことは確実である。これら以外については、出土量が少ない、出土遺構が異なる、といった点からセット関係を見出すことが難しい。

以上が、本調査区で出土した軒瓦の全型式である。7世紀代の多種多様な軒瓦、そして鎌倉時代～室町時代の軒瓦が出土したが、その間の奈良時代、平安時代のものはごくわずかとみてよい。ただし、当該期に位置づけられる建物は確実に存在し、土器などの遺物も多く出土し、この地での活動があったことは確かである。したがって、奈良時代から平安時代に営まれた建物は、瓦葺きではなかった可能性が高い¹⁵。

B 道具瓦・刻印瓦など

今回の調査区内で出土した道具瓦・刻印瓦類は、古代から中世におよぶ。古代のものには面戸瓦、熨斗瓦、隅切平瓦、土管、塼などがある。この他、道具瓦ではないが刻印丸瓦がある。中世の道具瓦には、鬼瓦、鳥衾瓦、面戸瓦、雁振瓦、箱熨斗瓦、隅軒平瓦がある。以下、古代と中世に分けて、それぞれ記述する。

i 古代の道具瓦・刻印瓦

面戸瓦 (Fig. 81-1, Ph. 58) 1点出土。1は完形の蟹面戸瓦である。丸瓦を焼成後に打ち割ったもので、右端部が丸瓦広端部にあたる。凸面は長軸方向にナデ調整。側面調整は、側面全体を丁寧へラケズリし、凹面側に面取りを施すc1手法。凹面は軽くナデ調整するが、糸切り、布綴じ合わせ目、布目の各痕跡を残す。右端部凹面はヨコ方向にナデ調整。舌部に粘土板合わせ目(S)がみられる。全長38.5cm、幅23.2cm、舌部長15.0cm。厚さ2.2cm。色調はにぶい黄橙色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英、長石が多い。HR21地区周辺の大土坑SK4327出土。

熨斗瓦 (Fig. 82-2～4, Ph. 58) 3点出土し、いずれも切熨斗瓦である。



Fig. 81 面戸瓦 1:3

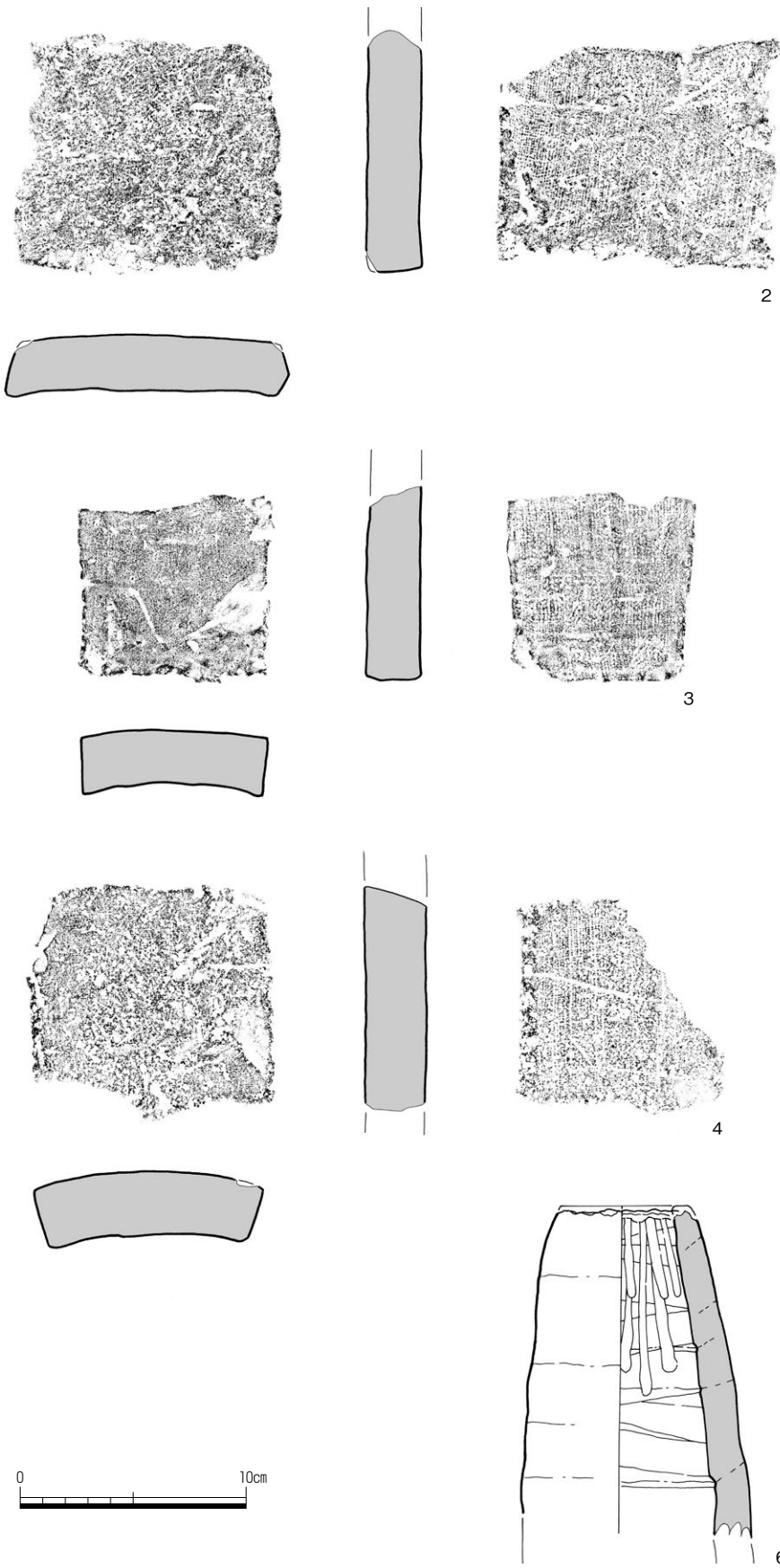


Fig. 82 熨斗瓦・土管 1:3

2は磨滅によりわかりにくいですが、凸面はナデ調整、側面はケズリ調整、凹面はほぼ未調整である。凸面と側面が鈍角をなす。端部幅12.4cm、厚さ2.4cm。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。調査区北西の中世土坑SK5015上層出土。

3は凸面をナデ調整、側面はケズリ調整する。凹面はほぼ未調整で、桶杵板と布目の各痕跡を残す。杵板幅は2.5cm。端部幅7.7cm、厚さ2.3~2.5cm。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。SK4734出土。

4は端部が欠損している。凸面はナデ調整、側面はケズリ調整、凹面は未調整で桶杵板と布目の各痕跡を残す。幅10.3cm、厚さ2.9cm。色調は暗青灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、黒色粒子が多い。AI86地区の包含層出土。

隅切平瓦 (Fig. 83-5, Ph. 58) 1点出土。5は広端部の右端（屋根に葺いた状態での左右）をやや

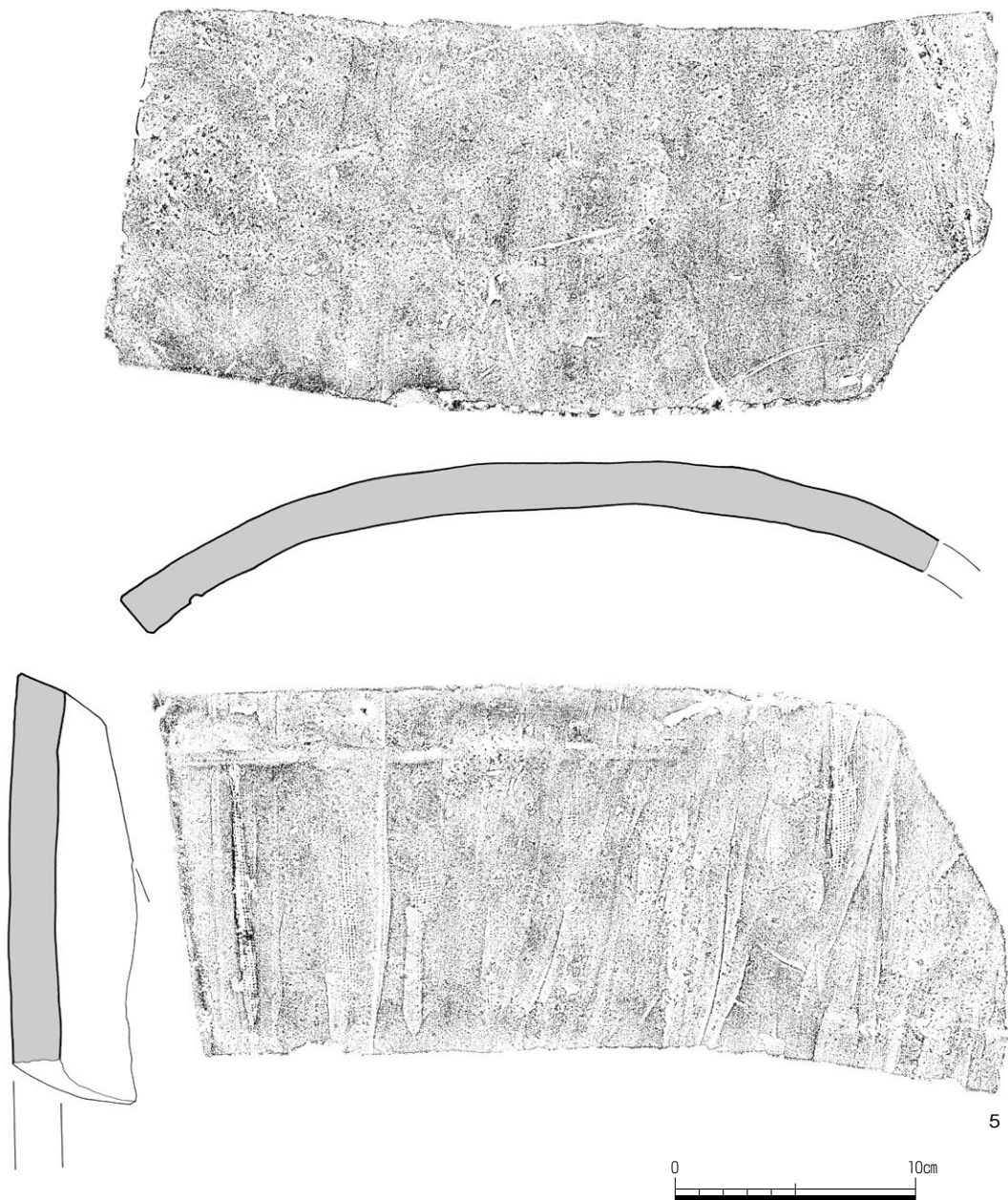


Fig. 83 隅切平瓦 1:3

内弯気味に切り落とす。凸面は丁寧にナデ調整する。側面調整はc3手法。凹面はタテ方向に粗くナデ調整するが、布目痕跡を部分的に残す。側縁からやや内側に走る凹線は分割界線の可能性がある。また、広端部から3cmほど内側に凹線が断続的に走る部分があり、その上をヨコ方向にナデつけている。性格は不明。広端幅30.7cm、厚さ2.0cm。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。SK4270出土。

土管 (Fig. 82-6, Ph. 58) 1点出土。6は粘土紐を積み上げて作っている。狭端、広端ともに欠損する。外面はタテ方向にケズリ調整、内面はヨコ方向に粗くナデ調整する。残存長15.0cm。残存最大外径9.8cm、残存最大内径6.5cm。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母を含み、長石が多い。SE4740出土。

埴 (Fig. 84-7・8, Ph. 58) 7点出土。比較的残存状況の良い2点について記述、図示する。

7は三辺を残す。一辺32.5cm×9.2cm以上、厚さ5.0cm。上下面、側面ともにナデ調整。破面は均質で、粘土塊の単位はみえない。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。JS36地区の中世井戸SE4463出土。

8は三辺を残す。一辺16.0cm×13.0cm以上、厚さ7.0cm。上下面は同一方向にケズリ調整、側面はナデ調整する。いくつかの粘土塊を型に詰め込んで成形したとみられる。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を含む。SE4469出土。

同型式とみられる資料がHB29地区の耕作溝から、もう1点出土した。この他、厚さが4cm前後と7・8よりも薄手で、断面台形を呈する資料も出土した。

刻印瓦 (Fig. 84-9, Ph. 58) 1点出土。9は丸瓦の凸面段部付近に「池上」刻印を押捺している。刻印は1.4cm×1.6cmで、「池上」字を凸線が方形に囲む。向きは段部に平行。この刻印が押捺された瓦は、法輪寺において多数出土している。丸瓦は凸面をナデ調整し、凹面は未調整。段部はほぼ直角に曲がり、凹面には輪状圧痕が残る。筒部の厚さは0.9~1.3cmと非常に薄く、玉縁も同様の厚さとみられる。色調は灰白色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。SD4255と連続する溝SD4256出土。

瓦製円盤 (Fig. 84-10, Ph. 58) 1点出土。10はわずかに弧を描き、平瓦を加工したものの可能性がある。表裏両面ともナデ調整する。側面は焼成後に打ち欠いて成形したか。不整形円で、最大径7.1cm。厚さ2.1cm。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。NI37地区のSD4130上層出土。

ii 中世の道具瓦・刻印瓦

鬼瓦 (Ph. 59-11・12) 2点出土。11は頭頂部から顎にかけて円筒形の空洞を作る。非常に立体的な作りであるが、牙や角は欠損している。外縁に沿って幅3.0cmの珠文帯を設ける。珠文は径2.2cm。裏面は縁を残して大きく削り込み、空洞部に平行して縦方向の把手を作り出す。残存高24.4cm、残存幅25.9cm、地板厚6.8cm、下辺削り込み高さ6.8cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、赤色粒子を含む。調査区北西部の中世大溝SD4755から出土。

12は上顎以上を欠損する。11同様、頭頂部から顎にかけて円筒形の空洞を作る。珠文帯も11同様の法量をもつ。足下端はやや内弯気味で、底面には幅2.4cmの溝が左右方向に走る。裏面は縁を残して大きく削り込み、空洞部に平行して縦方向の把手を作り出す。残存高22.5cm、残存

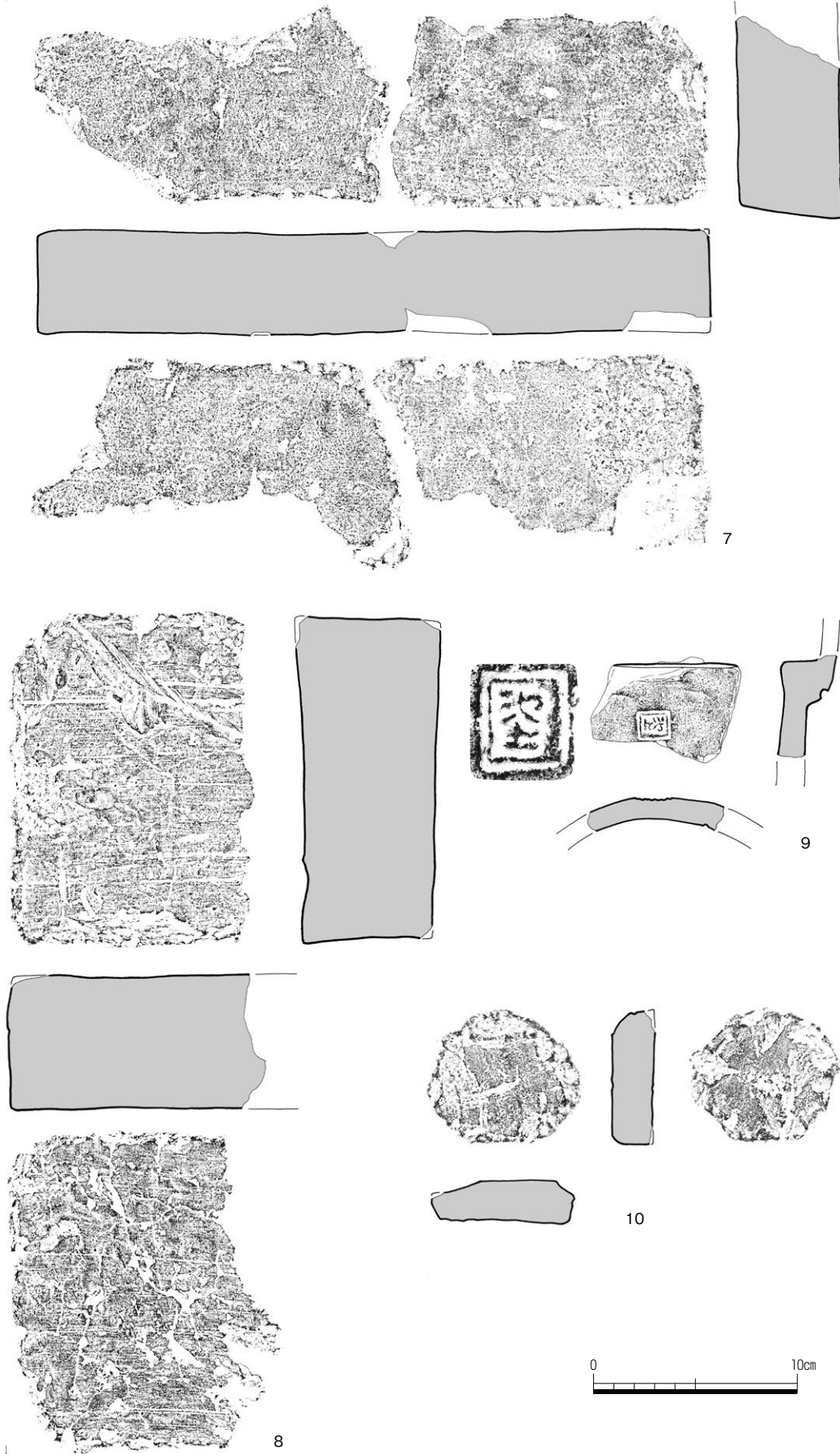


Fig. 84 磚・刻印瓦・瓦製円盤 1:3 刻印のみ1:1

幅32.9cm、地板厚6.4cm、下辺割り込み幅14.6cm、高さ9.4cm。下辺割り込み幅は、軒丸瓦8A型式の段部幅にはほぼ一致する。色調は黄灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、赤色粒子を含む。調査区北西部の、中世大溝SD4745出土。

2点とも作風や技法が似ており、同工の作とみてよいだろう。

鳥衾瓦・雁振瓦 (Fig. 85-14・15, Ph. 59) 計81点出土。小片が多く、総重量では38.1kgを測る。重量から換算すると約8個体分に相当するか。SD4755等から出土。

13は鳥衾瓦。顎部から瓦当部分と、胴部の大半は欠損する。胴部凸面は、縦方向に丁寧へラ状工具でナデ調整。凹面は平坦。調整は粗く、糸切り、布目の各痕跡を部分的に残す。胴部前端（瓦当側）は凹面側を削るが、首部との間は段をなす。背の反りは粘土板を重ねて作り出している (Ph. 59細部写真)。復元胴部幅27.6cm。高さ12.9cm。色調は浅黄色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、褐色粒子を含む。NH32地区の包含層出土。鳥衾瓦と明瞭にわかるのは、この1点だけである。

14は雁振瓦の後端部（玉縁側）。胴部凸面は、縦方向にへラ状工具でナデ調整。凹面は糸切り、布目の各痕跡をほぼ全体に残すが、前端寄り是一部削ってやや凹ませる。玉縁端部凹面、側縁、胴部凹面側縁は面取り。復元胴部幅24.8cm、高さ11.3cm、玉縁長5.0cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、褐色粒子を含む。SD4755出土。

15は前端から後端までを残す資料。胴部の凸面と凹面の調整は14と同様だが、側縁の面取りは不明瞭。凹面前端縁は面取りする。また、凹面前端の中心を半円形に浅く削り込む。胴部長32.4cm、復元胴部幅25.6cm、高さ11.4cm。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、褐色粒子を含む。SK5015出土。

これら以外の資料も、14・15と同様の特徴をもつ。

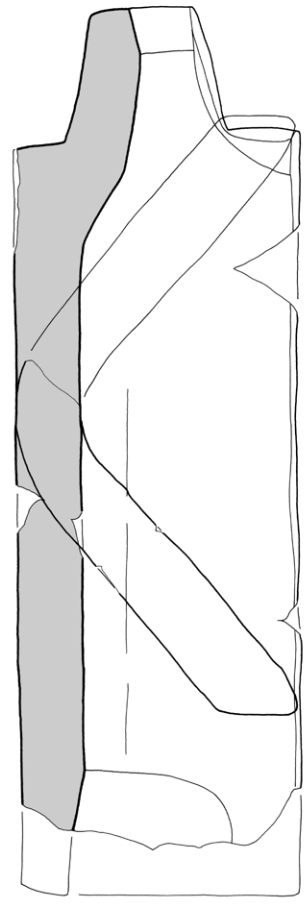
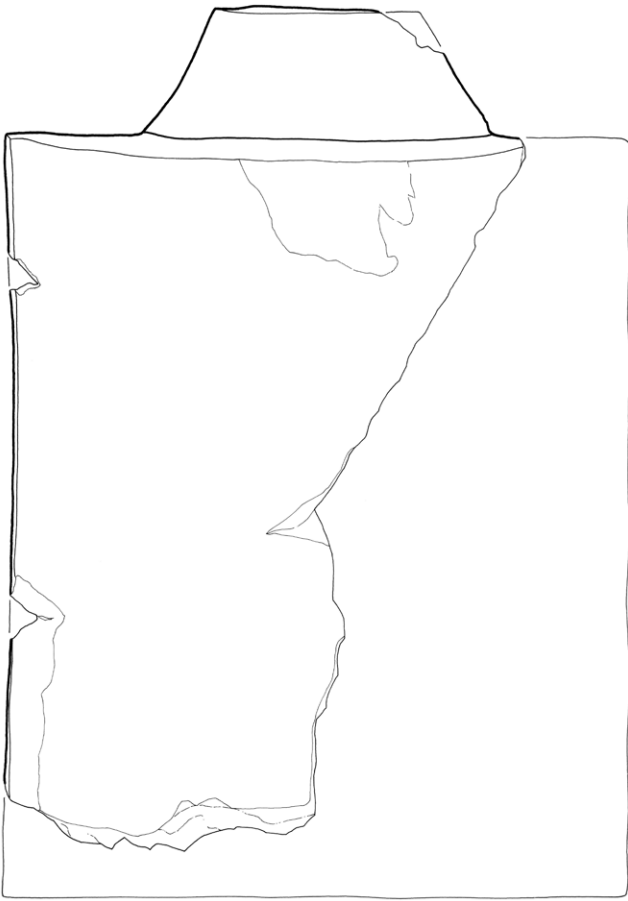
面戸瓦 (Fig. 86-16~18, Ph. 60) 23点出土。いずれも鱗面戸。SD4744等とその付近の包含層から出土した。

16は左傾する切り面戸瓦（屋根を下から見上げたときの左右。以下、面戸瓦については同じ。）。凸面はへラ状工具でナデ調整。凹面は糸切り、布目の各痕跡を残す。凹面側縁の面取りは、上下は幅広いが、左右は狭い。長さ15.0cm、幅10.7cm、厚さ2.4cm。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を含む。NF34地区の包含層出土。

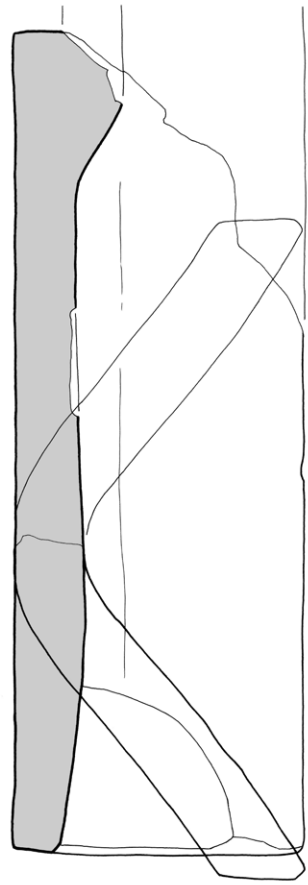
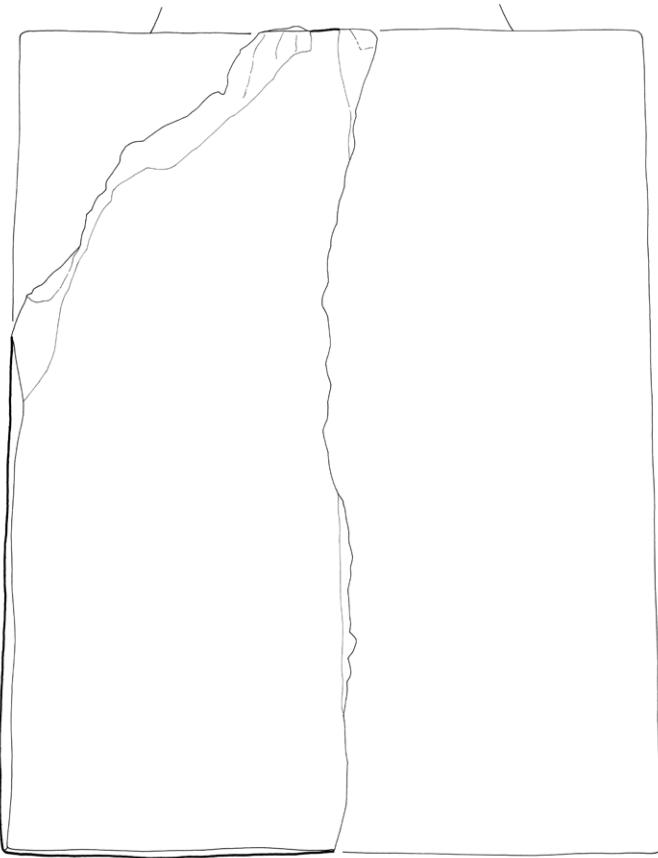
17は右傾する切り面戸瓦で、玉縁がわずかに残る。一方の側縁は破損するが、焼成後に打ち欠いて弧の浅い面戸瓦に仕上げた可能性がある。凸面は縄叩き目をナデ調整する。凹面には吊り紐と布目の各痕跡が残る。凹面側縁の面取りは四周とも幅広い。幅9.8cm、厚さ2.6~2.8cm。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を含む。SK5015出土。

18は左傾する割面戸瓦。17と同様、弧の浅い製品の可能性がある。凸面は縄叩き目をナデ調整する。凹面も軽くナデ調整するが、糸切り、吊り紐、布目の各痕跡を残す。側縁の面取りは幅広い。幅11.2cm、厚さ2.1~2.4cm。色調は灰黄色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を含む。SD4755出土。

出土した23点のうち、左傾するものが12点、右傾するものが4点、不明が7点である。また、幅は8.4~12.0cmとばらつくが、大部分は10cm~11cm前後のものである。厚さはほぼ同じ。長さ



14



15

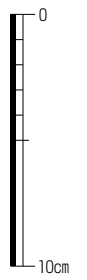


Fig. 85 中世雁振瓦 1:3

のわかる資料は2点と少ないが、いずれも15cm前後である。凹面側縁の面取りは、上下方向は幅広く、左右方向はそれに比べ狭い傾向にある。

熨斗瓦 (Fig. 86-19, Ph. 60) 1点出土。切熨斗瓦で、平瓦の広端部が残る。凹面側から分割線を入れたとみられる。凸面はナデ調整するが、端部には木目の目立つ無文叩き目が残る。凹面は丁寧にナデ調整し、布目痕跡を残さない。幅12.4cm、厚さ2.1cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。NP30地区の包含層出土。

隅軒丸瓦 (Fig. 87-20, Ph. 60) 1点出土。軒丸瓦8A型式の瓦範を利用したもの。ただし、瓦当は軒丸瓦8A型式の1.5倍ほど厚い。瓦当面に離れ砂が付着する。丸瓦接合後、瓦当下半部縁に沿って幅2.2cm前後の粘土紐を二段積み上げ、土堤を設けている。瓦当裏面はユビナデ調整。丸瓦の法量、調整等も軒丸瓦8A型式とほぼ共通する。瓦当下半部の瓦当厚は5.8cm。色調は灰色で、焼成はやや軟質で、胎土は石英、長石、雲母、褐色粒子を含み、石英と長石が多い。SD4755出土。

隅軒平瓦 (Fig. 87-21, Ph. 60) 1点出土。軒平瓦8型式を加工したもの。瓦当左側の唐草文4葉目途中から、全体の二分の一ほどを斜めに切り落とす。斜めに切り落とした端部に沿って、径1.2cmの釘穴を2箇所を開ける。凹面から凸面への焼成前穿孔。端部からは2.0cm離し、両穴の間隔は13.5cmである。凸面には「井」の刻線がある。全体の調整は、同型式の軒平瓦と同様。瓦当幅22.3cm、長さ24.5cm。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含み、石英と長石が多い。SK5015出土。

刻印瓦 (Fig. 87-22, Ph. 60) 1点出土。丸瓦玉縁部とみられる部分の凸面に、16弁の菊花文の刻印を押捺している。菊花文は径3.3cm前後。平瓦は凹凸面、端面ともに丁寧にナデ調整する。端面はやや丸みを帯び、角が明瞭でない。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を少量含む。SK5015出土。

不明道具瓦 (Fig. 87-23, Ph. 60) 1点出土。L字形に屈曲し、三面を残す。上面は平坦で、木目の目立つ工具でナデ調整。側縁は面取りする。側面はやや外傾し、ヨコ方向にナデ調整。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母、橙色粒子を少量含む。NP25地区の耕作溝出土。

以上の道具瓦のうち、熨斗瓦、不明道具瓦については包含層出土の破片資料であるため、時期を絞り込むことが難しい。それ以外のものは、軒丸瓦8A型式や軒平瓦8型式が多く出土した遺構からまとめて出土しており、同じく14世紀中頃～後半の所産である可能性が高い。

C 丸瓦・平瓦

今回の調査区内で出土した丸瓦は総重量966.1kg、破片数3860点で、平瓦は総重量3083.9kg、破片数22993点におよぶ。それらは7世紀から室町時代までの多様な遺構から出土し、大多数が完形品の二分の一にもならない破片資料である。このような瓦群がどのようなものか理解するにあたり、まず、7世紀代を中心とし奈良時代におよぶ古代の遺構出土資料と、中世の遺構出土資料に分けて整理を行いたい。

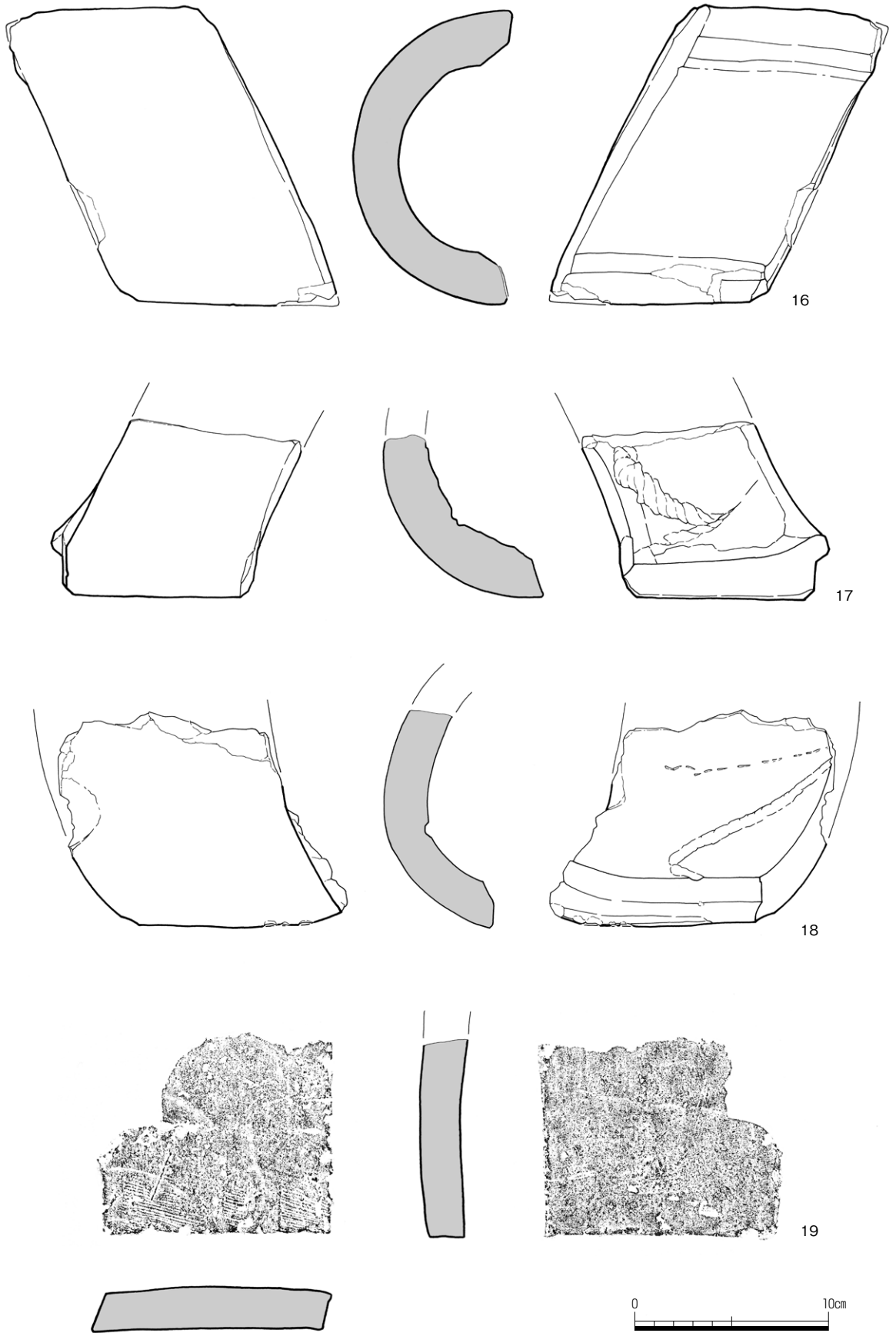


Fig. 86 中世面戸瓦・熨斗瓦 1:3

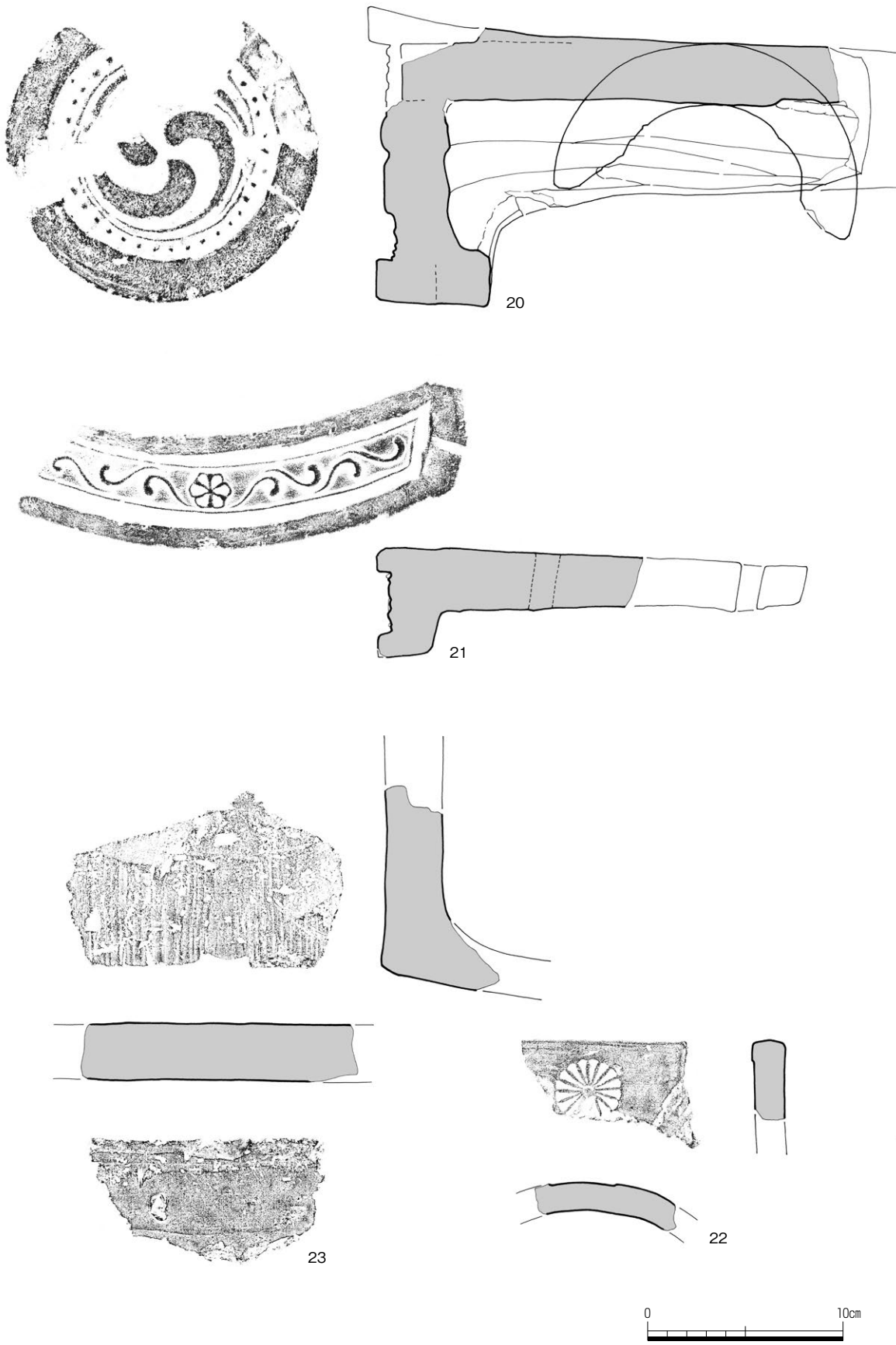


Fig. 87 中世隅軒瓦・刻印瓦・不明道具瓦 1:3

i 古代の遺構出土丸瓦・平瓦

古代の瓦は、東西大溝SD4130、六条条間路北側溝SD4139、SE4740、SK4160・4270・4267・4325、SD4255で比較的まとまって出土した。基本的に、これらの遺構から出土した丸瓦・平瓦について分類し、各分類のうち残存状況の良い資料を抽出して詳細を述べる。

a 丸瓦

玉縁式に限られる¹⁶。粘土成形方法と凸面調整に着目して、以下のように分類する。

粘土板巻き付け作り丸瓦

I類：叩き目の調整が不完全で一部残るもの

II類：叩き目をほぼ完全に調整するもの（叩き目の観察が困難な資料）

粘土紐巻き付け作り丸瓦

III類：叩き目の調整が不完全で一部残るもの

IV類：叩き目をほぼ完全に調整するもの（叩き目の観察が困難な資料）

粘土板巻き付け作り丸瓦 粘土板を模骨に巻き付けて成形した後、分割する一群。凹面に糸切り痕跡や粘土板合わせ目痕跡を残す。

丸瓦I類 本調査区で出土した丸瓦のうち、確認できたのはB：斜格子叩き目、C：平行叩き目、D：縦位縄叩き目である¹⁷。B・Cともに資料数は非常に少ない。Dについては、古代の遺構から出土した丸瓦のうち、縦位縄叩きを残す資料が少なく（SD4130とSE4740にほぼ限られ、そのなかでも総重量の13%程度。）、かつ小片資料が多いため、粘土板巻き付け作りであるかどうかの判別が非常に難しい。

B：斜格子叩き目 (Fig. 88-1, Ph. 61) 斜めに交差する格子目状の刻線を入れた叩き板を使ったもの。1種類ある。

B1は0.2cm幅の刻線が約75°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は0.7cm前後。刻線と木目との関係は不明瞭。1は広端部。凸面を横方向にナデ調整し、叩き目をほとんど消している。側面調整は浅い分割截面と破面をそのまま残し、凹面側を面取りするa1手法。凹面は広端部付近をヨコ方向にナデ調整する以外は未調整で、布目痕跡を残す。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母を含み、長石が多い。厚さ1.7cm。NI37地区のSD4130中層出土。

C：平行叩き目 (Fig. 88-2, Ph. 61) 平行する刻線を入れた叩き板を使ったもの。1種類。

C1は0.2cm前後幅の刻線を刻んだ叩き板。密度7本/2cmで、凹部幅は0.1~0.2cm。2は凸面をタテ方向にナデ調整し、叩き目を部分的にしか残さない。玉縁部はヨコ方向にナデ調整。側面調整は丁寧なケズリを施し、面取りは行わないc0手法。凹面は段部を軽くナデ調整する以外は未調整で、糸切り、布目の各痕跡を残す。段部の屈曲が明瞭で、幅1cmほどの平坦面をもつ。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含み、石英と長石が非常に多い。筒部厚さ1.8cm。玉縁厚さ1.5cm。SD4255出土。

D：縦位縄叩き目 (Fig. 88・89-3・4, Ph. 61) 縄を長軸方向に巻きつけた叩き板を使ったもの。2種類ある。

D1は5粒/3cmの縄を、8本前後/2cmの密度で巻きつけた叩き板。3は非常に小型の丸瓦。凸

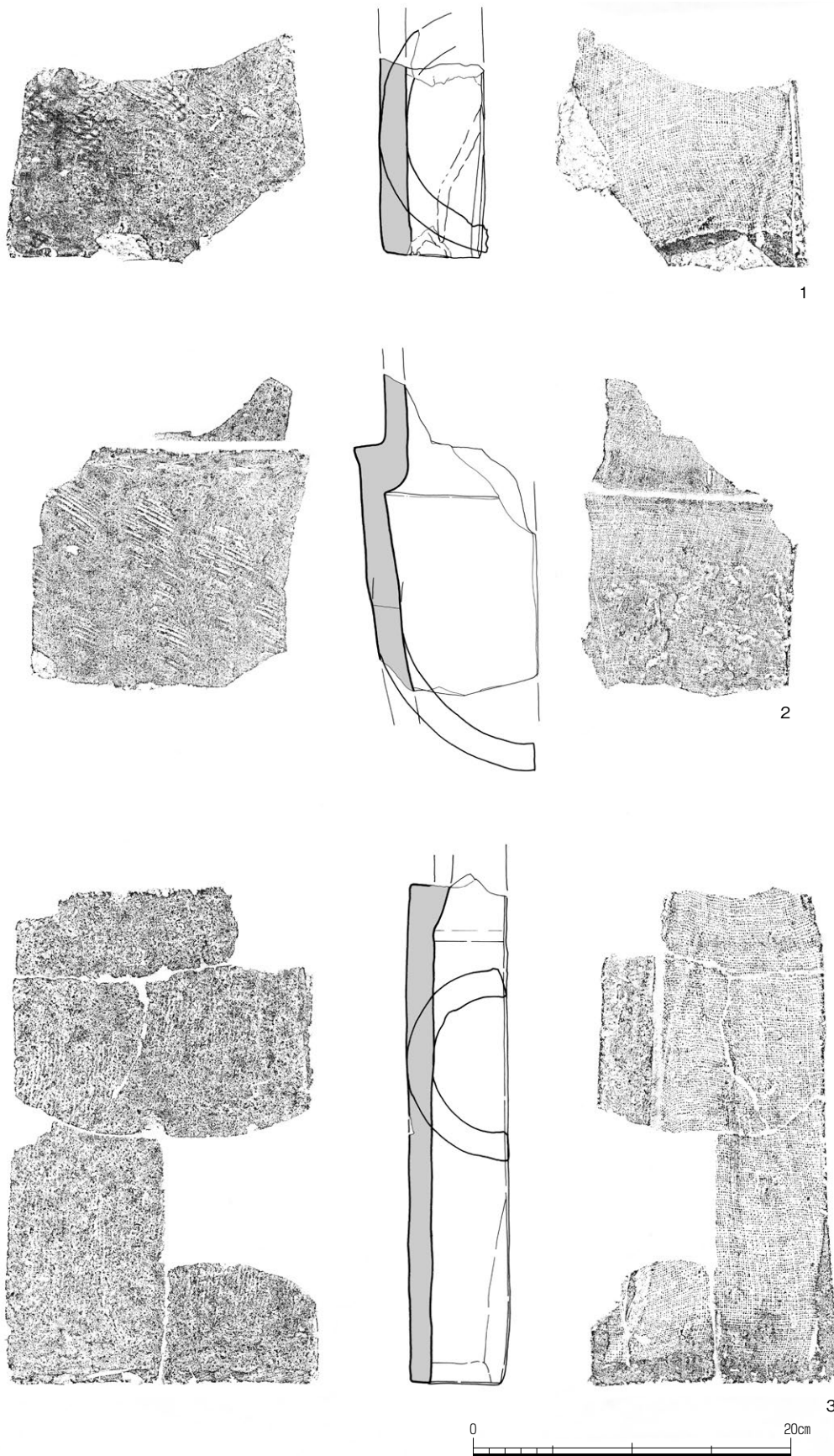


Fig. 88 丸瓦 I類B1~D1 1:4

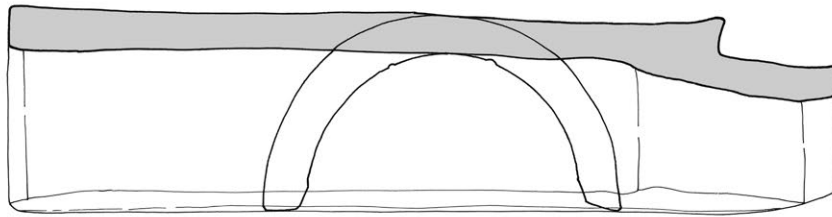
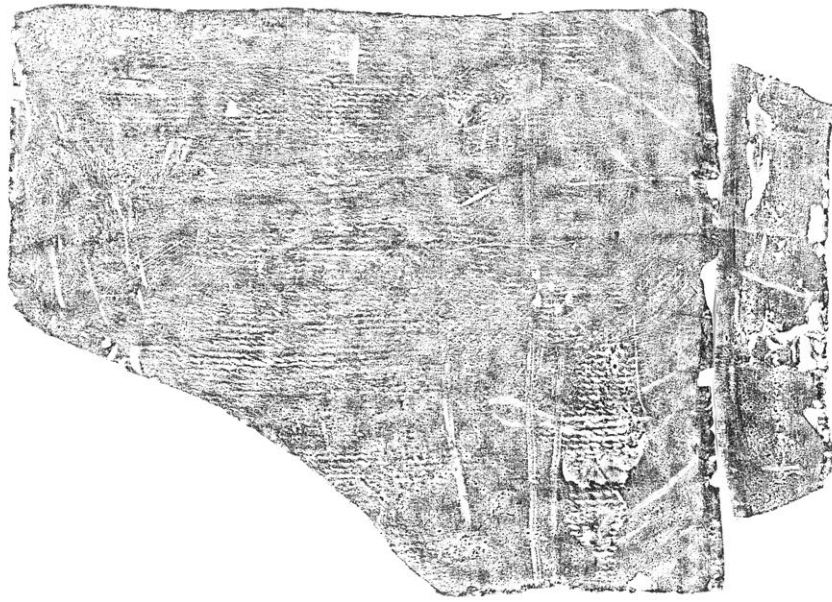


Fig. 89 丸瓦 I 類 D2 1:4

面をナデ調整し、叩き目はごくわずかにしか残らない。側面調整は大部分がc0手法だが、広端部寄り10cmほどの範囲はc1手法、段部寄り7cmほどの範囲はa0手法。凹面は広端部以外はほぼ未調整で、布目痕跡を残す。一方の側縁より内側3.0cmの位置に、幅0.7cm、深さ0.4cm前後の凹線が走り、その部分より側縁側には布目がみられない。模骨にかぶせたのが布筒ではなく、一枚布であった可能性がある。段部は屈曲が弱く、玉縁がほぼ直線的に伸びる。色調は暗灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。筒部長31.0cm、筒部広端幅13.5cm、筒部厚さ1.7cm。玉縁厚さ1.0cm。NH31地区のSD4130中層出土。

D2は5粒/3cmの縄を、6本前後/2cmの密度で巻きつけた叩き板。4は凸面下半はタテ方向、上半は主としてヨコ方向にナデ調整するが、叩き目をよく残す。凸面段部は、指でつまみ出して段を明瞭にする。玉縁凸面はヨコ方向にナデ調整。側面調整はc1手法。凹面は、広端部と玉縁端部をヨコ方向にナデ調整する以外はほぼ未調整。段部の屈曲は弱く、玉縁がほぼ直線的に伸びる。色調は灰白色で、焼成は硬質。石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。全長44.0cm、筒部長37.5cm、筒部厚さ2.4cm。玉縁厚さ1.6~2.0cm。FG98地区のSD4130上層出土。

丸瓦Ⅱ類 本調査区で出土した丸瓦の大部分が、この分類にあたる。玉縁に着目すると、側面調整、長さ、段部の屈曲などに多様性がある。なかでも、型の違いを反映する段部の屈曲に基づいて分類を試みる。屈曲が強いものから弱いものまで4種類ある (Fig. 90、1目盛は0.5cm)。

段部ア (Fig. 91-5・6, Ph. 61) 段部が明瞭でほぼ直角に近く、幅約1cmの平坦面をもつ。

5は広端部にかけて歪んでいる。筒部凸面をタテ方向、玉縁凸面をヨコ方向にナデ調整する。筒部側面調整、玉縁側面調整はc1手法。凹面は部分的にナデ調整するが、大部分は未調整。糸切り、粘土板合わせ目 (S)、布綴じ合わせ目、布目の各痕跡を残す。筒部の粘土板合わせ目と布綴じ合わせ目は、上からナデつける。布綴じ合わせ目は玉縁と筒部で連続するが、段部付近から筒部にかけて、二股に分かれている。布を玉縁部のみ一周させて綴じ合わせ、筒部には三角形の隙間に別の布を縫い合わせたと考えられる。綴じ合わせ目の一方には、さらに襷をとって縫い合わせている。広端部凹面はヨコ方向にケズリ調整。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。全長54.4cm、筒部長46.4cm、筒部厚さ1.8cm、段部幅19.2cm、玉縁長8.0~8.2cm、玉縁厚さ1.7cm。SK4270出土。

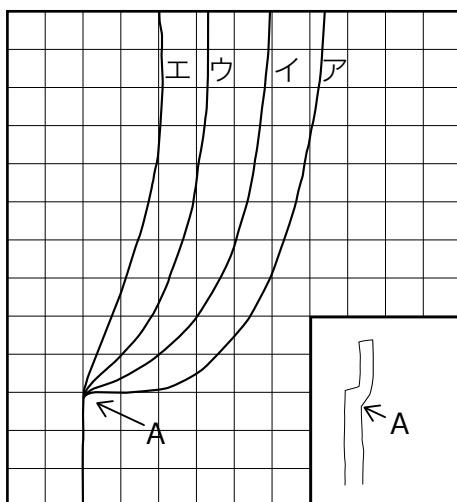


Fig. 90 丸瓦Ⅱ類段部の屈曲4種 (A: 屈曲点)

6は筒部凸面を丁寧にナデ調整するが、ごくわずかに平行叩き目、もしくは木目の目立つ無文叩き目を認めることができる。玉縁凸面はヨコ方向にナデ調整する。筒部側面調整、玉縁側面調整はc1手法。凹面は未調整で、糸切り、粘土板合わせ目 (Z)、布綴じ合わせ目、布目の各痕跡を残す。段部には凹型台のアタリが残る。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母を含む。筒部残存長17.8cm、筒部厚さ1.8~2.1cm、玉縁長6.7~7.8cm、玉縁厚さ1.6~1.8cm。SK4325出土。

これらの他、段部アには焼成が軟質のものも

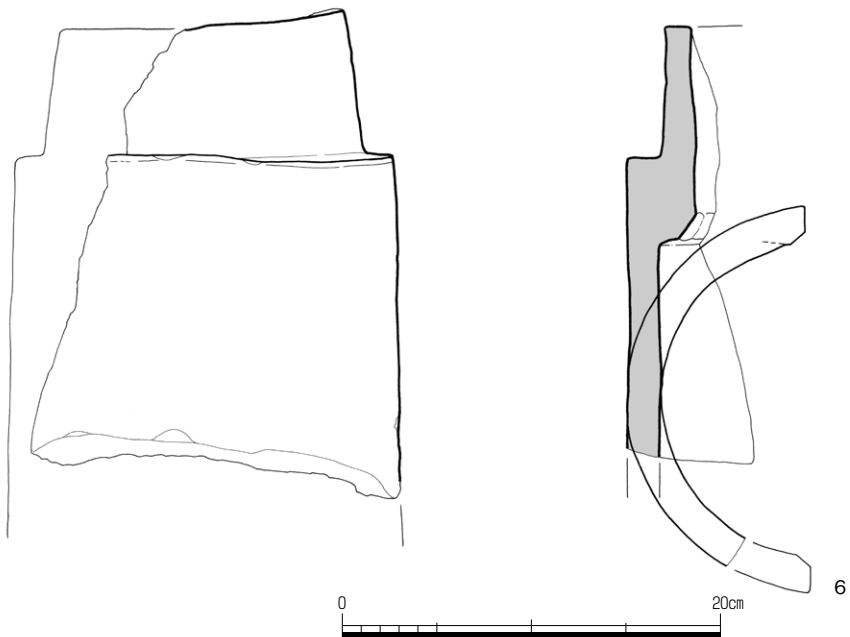
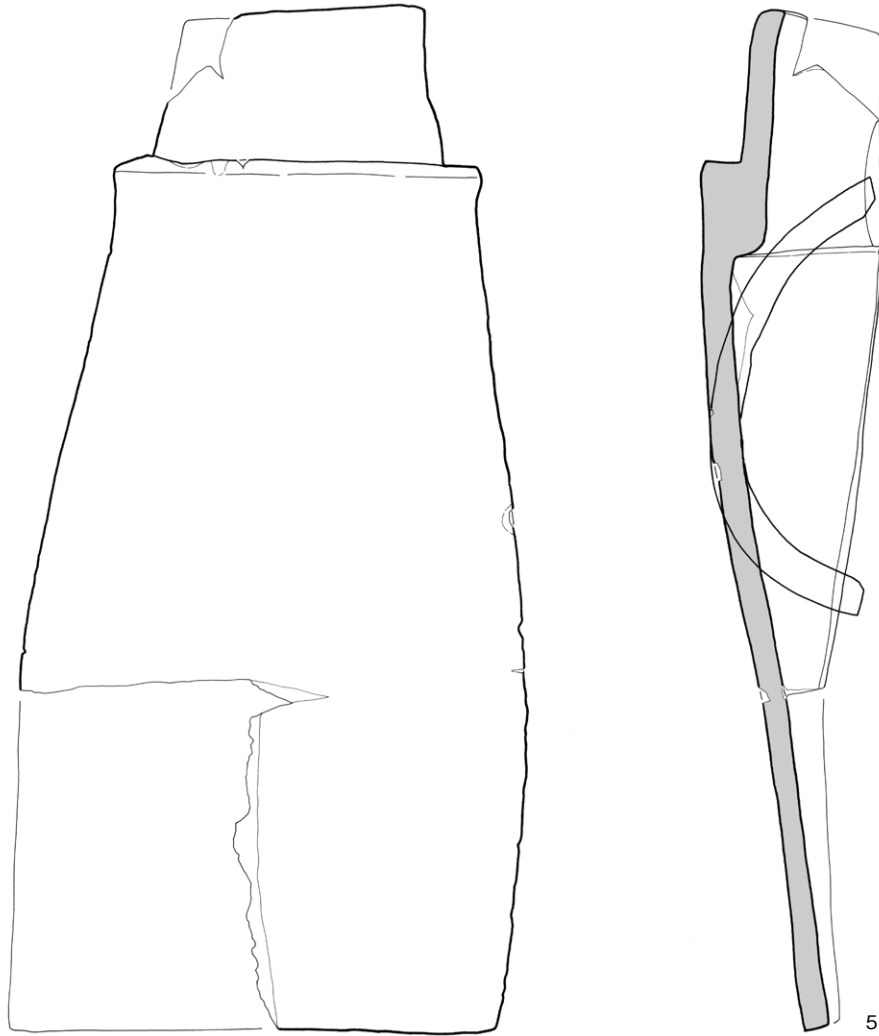


Fig. 91 丸瓦Ⅱ類段部ア 1:4

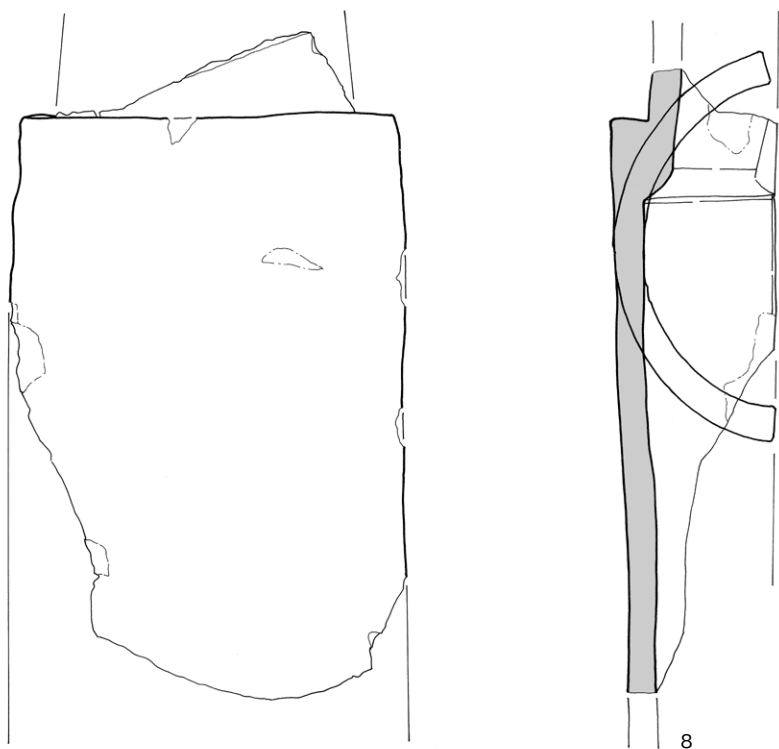
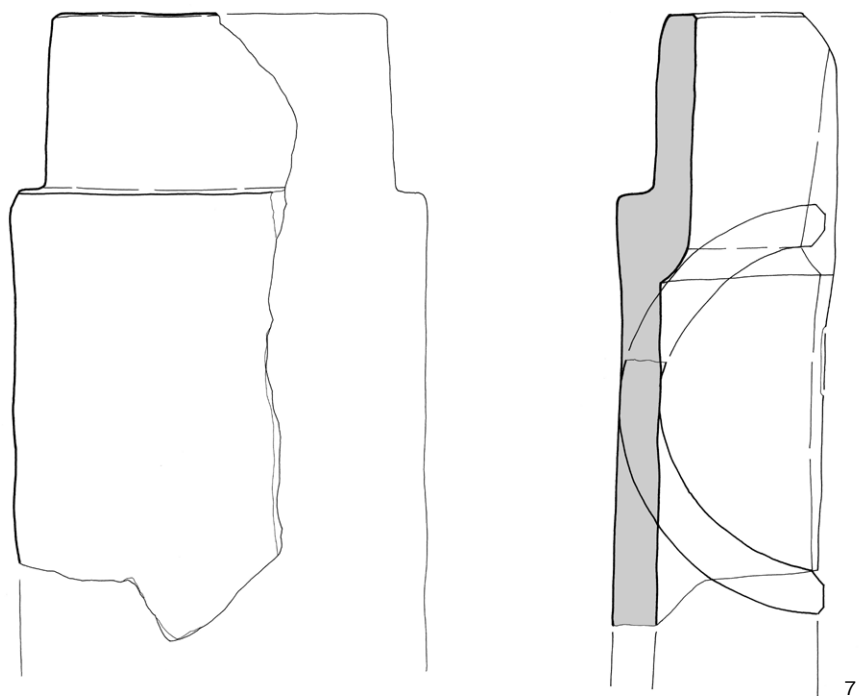


Fig. 92 丸瓦Ⅱ類段部イ 1:4

存在する。磨滅が著しく残存状況が良好でないため、データのみを記す。1点は、筒部厚さ1.8cm、段部幅19.4cm、玉縁長10.0cm、玉縁厚さ2.2cm。SK4325出土。もう1点は、筒部厚さ1.7cm、段部幅20.4cm、玉縁長7.8~8.2cm、玉縁厚1.7cm。SK4160出土。

段部イ (Fig.92-7・8, Ph.62) 段部は明瞭であるが、平坦面が少なく筒部と玉縁段部寄りが鈍角をなす。

7は筒部凸面をタテ方向に、玉縁凸面をヨコ方向にナデ調整する。筒部側面調整はc3手法、玉縁側面調整はc1手法。筒部凹面は磨滅が著しいために調整はわかりにくいが、布目はほぼ残らないため、ナデ調整であろう。玉縁凹面は、布綴じ合わせ目と布目の各痕跡を残す。色調は



Fig.93 丸瓦Ⅱ類段部ウ 1:4

灰黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。筒部残存長23.4cm、筒部厚さ2.3～2.7cm、玉縁長9.3cm、玉縁厚さ2.1cm。SK4160出土。

8は筒部凸面を丁寧にナデ調整する。玉縁はわずかにしか残らないが、凸面をヨコ方向にナデ調整する。筒部側面調整はc0手法だが、広端部寄りにはc1手法。筒部凹面はタテ方向にナデ調整するが、糸切り、布目の各痕跡を部分的に残す。玉縁凹面は未調整。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、褐色粒子を含む。筒部残存長30.0cm、筒部厚さ1.7cm、段部幅20.2cm、玉縁長8.0～8.2cm、玉縁厚さ1.6cm。SK4160出土。

段部ウ (Fig. 93-9～11, Ph. 62) 段部の屈曲が弱く、玉縁が曲線的に伸びる。

9は筒部凸面を丁寧にナデ調整する。玉縁は一部分しか残らないが、ヨコ方向にナデ調整する。側面調整はc0手法。筒部凹面はナデ調整し、布目痕跡は部分的にしか残らない。玉縁凹面は軽くナデ調整する。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。筒部残存長13.5cm、筒部厚さ1.8cm、玉縁長9.2cm以上、玉縁厚さ1.9cm。NI37地区のSD4130中層出土。

10は段部から11.7cmの位置に方形の釘孔をもつ資料。凸面から凹面に向けての、焼成前穿孔である。筒部凸面、玉縁凸面ともにヨコ方向のナデ調整をする。側面調整はc1手法だが、筒部の凸面側にわずかに面取りをもつ部分がある。凹面はほぼ未調整で、粘土板合わせ目(S)、布目の各痕跡を残す。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を含む。筒部残存長15.0cm、筒部厚さ1.8～2.1cm、玉縁長5.5～5.9cm、玉縁厚さ1.8～2.1cm。SD4256出土。

11は磨滅が著しく、調整等の観察がやや困難である。筒部凸面はナデ調整する。筒部側面調整はc1手法。筒部凹面は部分的にタテ方向のナデ調整をするが、布目痕跡を部分的に残す。玉縁凹面は段部を部分的にナデつけるが、ほぼ未調整。色調はにぶい黄橙色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。筒部残存長20.8cm、筒部厚さ1.8～2.4cm。SD4255出土。

段部エ (Fig. 94-12・13, Ph. 62) 段部の屈曲が弱く、玉縁が直線的に伸びるもの。

12は筒部凸面をタテ方向、玉縁凸面をヨコ方向にナデ調整する。筒部側面調整はc3手法で、凹面側の面取りが幅広い。玉縁側面調整はc1手法。凹面は磨滅するものの、ほぼ未調整で、粘土板合わせ目(S)、糸切り、布綴じ合わせ目、布目の各痕跡を残す。粘土板合わせ目は軽くナデつける。布綴じ合わせ目は、玉縁と筒部で連続する。玉縁凹面端部には面取りを施す。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を含む。筒部残存長34.8cm、筒部厚さ2.4～3.0cm、段部幅21.0cm、玉縁長7.5～7.8cm、玉縁厚さ2.6cm。SK4267出土。

13は凸面を丁寧にナデ調整するが、ごくかすかに平行叩き目、もしくは木目の目立つ無文叩き目を認めることができる。筒部側面調整はc1手法だが、c3手法の部分もある。凹面側の面取りが幅広い。筒部凹面はタテ方向に軽くナデ調整するが、糸切り、布目の各痕跡を残す。玉縁凹面はほぼ未調整。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英や長石を含む。筒部長44.4cm、筒部厚さ2.0～2.4cm、段部幅19.6cm。SK4325出土。

以上の分類に基づき、丸瓦Ⅱ類のうち、段部を残す資料の出土数が比較的多い遺構についてみると、SD4255では段部ア・イ・ウ、SK4160では段部イ・ウ、SK4325では段部ア・イが

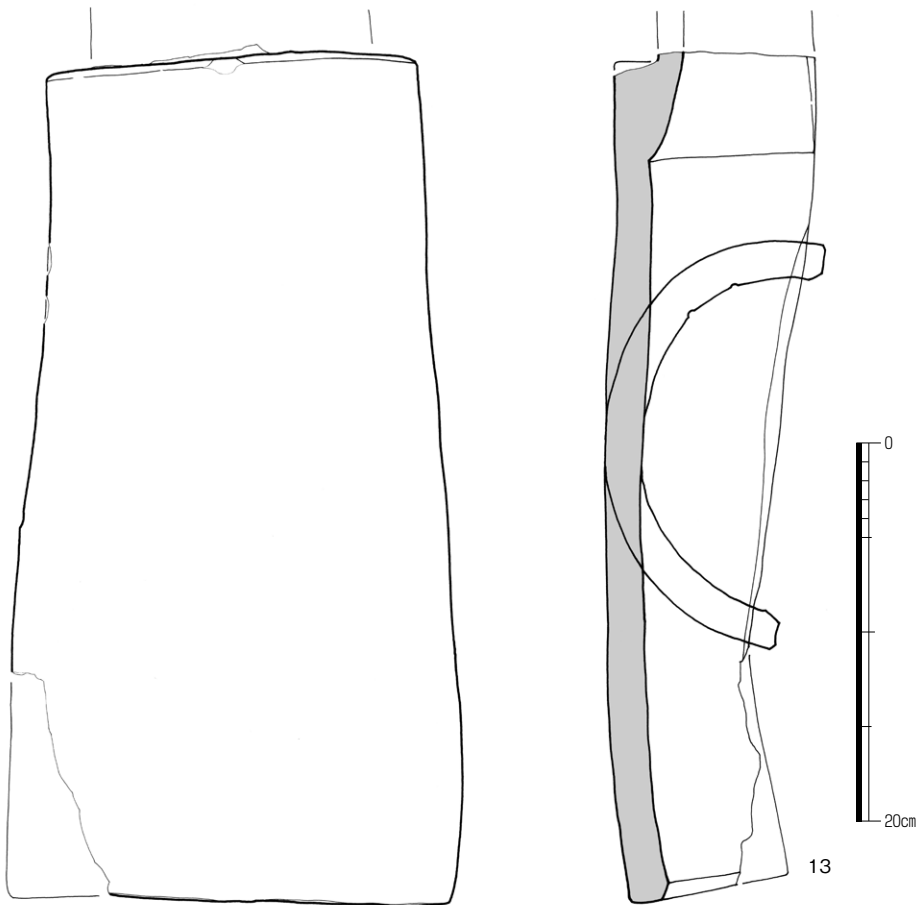
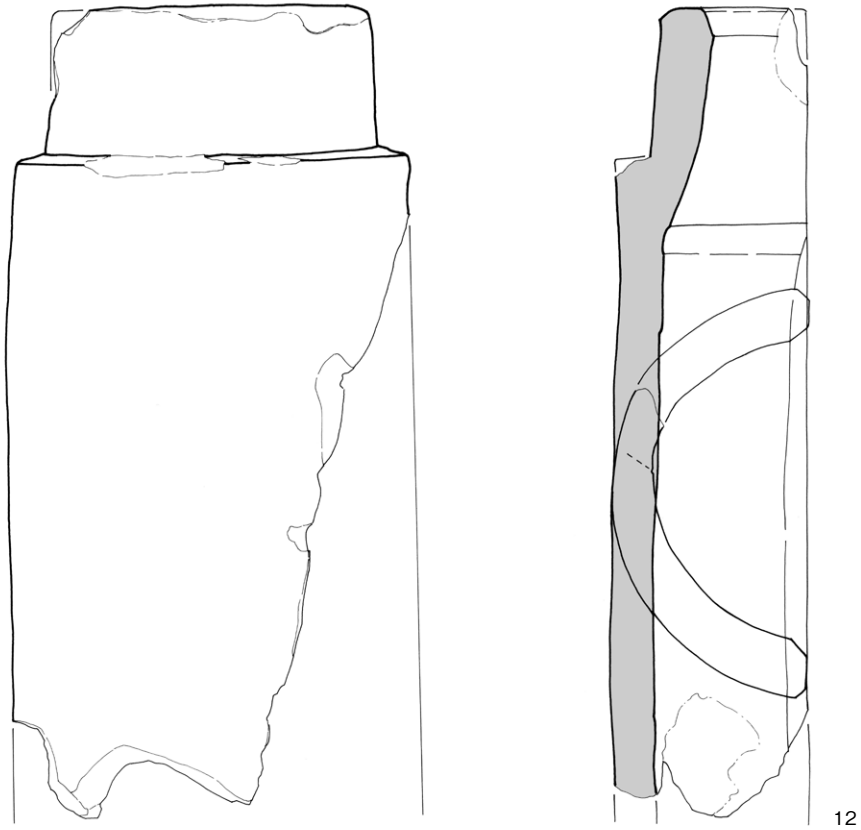


Fig. 94 丸瓦Ⅱ類段部工 1:4

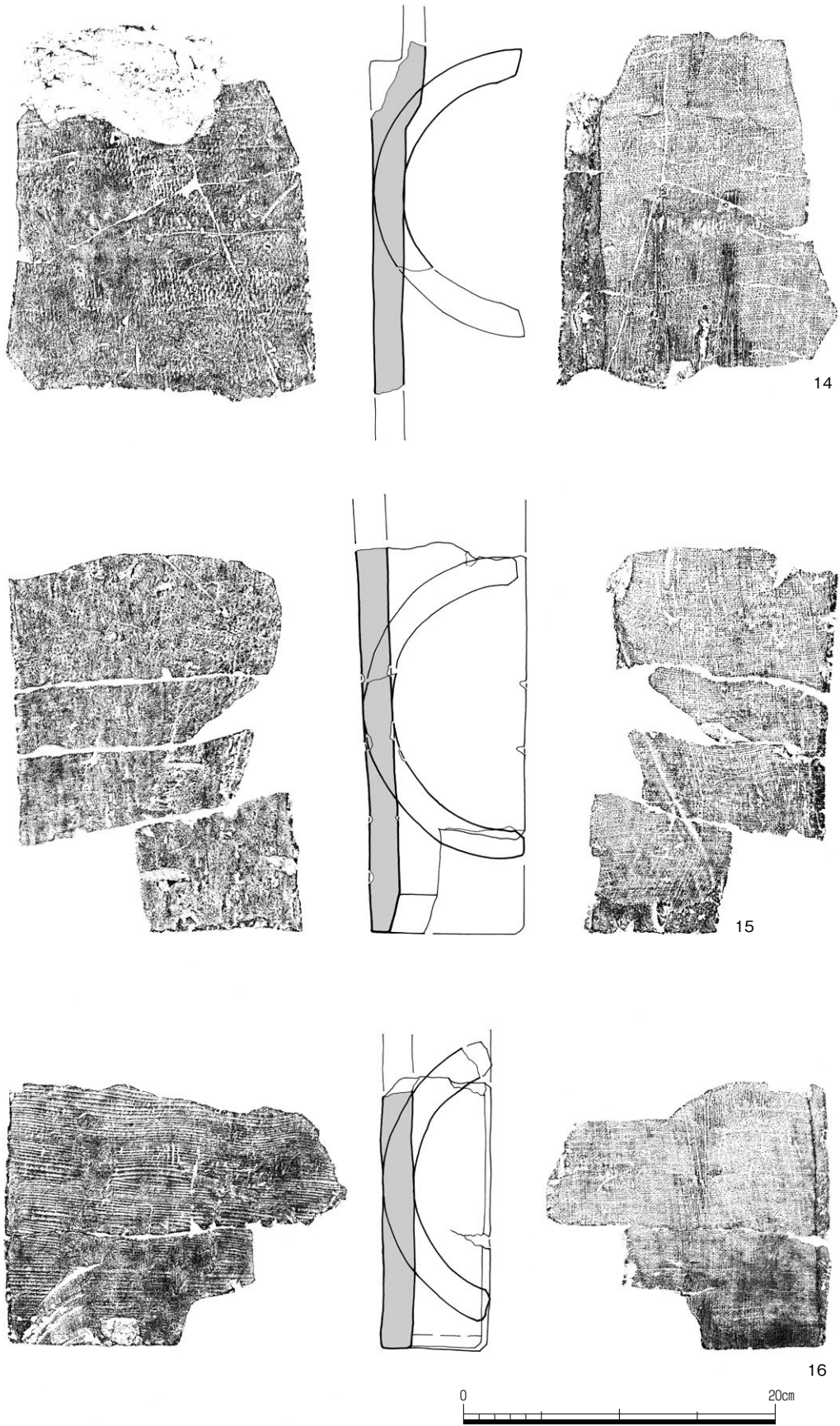


Fig. 95 丸瓦Ⅲ類D 1:4

主体をなす。そして、SD4130では段部アからエまでの多様な段部をもつ丸瓦が出土したが、他の遺構に比べてエの割合が多い。

粘土紐巻き付け作り丸瓦 粘土紐を模骨に巻き付けて成形した後、分割する一群。凹面や破面に粘土紐の単位を認めることができる。

丸瓦Ⅲ類 確認できたのは、D：縦位縄叩き目のみである。ナデ調整等によって明瞭ではないため、縄目に基づくさらなる細分は難しい。比較的残存状況の良好な資料を提示する。

D：縦位縄叩き目 (Fig. 95-14~16, Ph. 63) 14は凸面をヨコ方向にナデ調整し、叩き目のごくわずかにしか残らない。側面調整はc1手法。凹面はほぼ未調整で、粘土紐の単位と布目痕跡を残す。粘土紐の幅は3.0~4.0cm。段部の屈曲は弱く、玉縁が直線的に伸びる。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。筒部厚さ2.1cm。NI31地区のSD4130中層出土。

15は広端部で、粘土紐の単位で破損する。凸面はナデ調整し、叩き目のごくわずかにしか残らない。側面調整はc1手法。凹面は広端部付近以外未調整で、布目痕跡を残す。広端部付近はヨコ方向にナデ。粘土紐の幅は4cm前後。色調は暗灰黄色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。筒部厚さ1.9cm。NI26地区のSD4130中層出土。

16は凸面をカキ目調整し、叩き目をほとんど消し去ってしまう。側面調整はc1手法。凹面は磨滅するが未調整と判断され、粘土紐の単位、布目痕跡を残す。粘土紐の幅は3.5cm前後。色調は浅黄橙色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。筒部厚さ2.1cm。NI28地区のSD4130上層出土。同一層から同様にカキ目調整した破片が数点出土しているが、玉縁部を残すものをみると、段部は屈曲が弱く、玉縁が直線的に伸びるという特徴をもつ。

丸瓦Ⅳ類 粘土紐の単位で破損した資料が、SD4130を中心に数点出土している。細長く、断面が傾斜している特徴をもつ。いずれも小片であるため、Ⅰ類のうち、叩き目をわずかにしか残さない資料との厳密な区別が難しい。良好な資料がないため、図示はしない。

b 平瓦

平瓦は、粘土成形方法と凸面調整に着目して、以下のように分類する。

桶外巻き作り平瓦（粘土板桶巻き作り・粘土紐桶巻き作り）

Ⅰ類：凸面の叩き目未調整、もしくは調整が不完全で一部残るもの

Ⅱ類：凸面の叩き目をほぼ完全に調整するもの（叩き目の観察が困難な資料）

桶内巻き作り平瓦（粘土板桶巻き作り）

Ⅲ類：凸面の叩き目未調整、もしくは調整が不完全で一部残るもの

桶外巻き作り平瓦 粘土板もしくは粘土紐を桶の外側に巻き付けて成形した後、分割する一群。小片資料や凹面の調整が丁寧に施される資料の場合、粘土板と粘土紐の確実な識別が難しいため、まずは一括した。凸面の調整を残すⅠ類には、A：正格子叩き目、B：斜格子叩き目、C：平行叩き目、D：縦位縄叩き目、E：無文叩き目をもつものが確認できる。A・B・Cの叩き目をもつ平瓦には粘土板、Dの叩き目をもつ平瓦には粘土板と粘土紐の両方が存在したと推測される。具体的には各分類の項で述べる。

平瓦 I 類

A：正格子叩き目¹⁸ (Fig. 96-1~4, Ph. 64・70) ほぼ直角に交わる格子目状に刻線を入れた叩き板を使ったもの。4種類ある。

A1は木目に平行・直交する0.2cm幅の刻線が交差する叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.6cm、木目直交線が0.7cm前後。1は凹面をナデ調整し、桶椀板、布目の各痕跡はかすかにしか残らない。端部から約8cmと10cm内側に、端部に平行する3cm前後の凹線が1条ずつ走り、桶綴じ紐痕跡の可能性ある。色調はにぶい黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。厚さ1.3cm。SD4139出土。

A2は0.15cm幅と0.3cm幅の刻線が交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.5cm、後者が0.7cm前後。2は広端部で、広範囲に斜格子叩き目B11と重複する。広端部付近は軽くヨコ方向にナデ調整。側面調整はc手法で、面取りは凹面が幅広く、凸面はわずかである。凹面はタテ方向にナデ調整するが、糸切り、布目、布端の各痕跡を残す。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.8cm。HI27地区の包含層出土。

A3は木目に平行・直交する0.15cm幅の刻線が交差する叩き板。刻線の間隔は、木目平行線が0.7cm、木目直交線が0.8cm前後。3は凹面未調整で、桶椀板、布目の各痕跡を残す。椀板幅は3.5cm。端部凹面側を面取り。色調はにぶい褐色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ2.0cm。HI24区周辺の土坑SK4501出土。

A4は木目に平行・直交する0.3cm幅の刻線が交差する叩き板。刻線の間隔は、木目平行線が0.9cm、木目直交線が0.7cm前後。4は叩き目の大部分がつぶれる。凹面は軽くナデ調整するが、糸切り、布目、布縫い目の各痕跡を残す。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ1.5cm。NI31地区のSD4130中層出土。

B：斜格子叩き目 (Fig. 97~100-5~35, Ph. 64・65・70~72) 斜めに交差する格子目状の刻線を入れた叩き板を使ったもの。31種類ある。

B1は0.1~0.15cmと0.15~0.2cm幅の刻線が、約70°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.4cm、後者が0.6cm前後。5は側面調整がc1手法。凹面は布目、桶椀板の各痕跡が残る。椀板幅は2.6cm。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.3cm。SD4255出土。

B2は木目に斜交する0.1~0.2cm幅と、同じく斜交する0.2cm幅の刻線が、約70°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は前者が0.4cm、後者が0.6cm前後。6は叩き目が一部つぶれる。凹面は布目痕跡を残す。色調はにぶい黄褐色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.3cm。SK4325出土。

B3は0.1cm幅と0.25cm幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.4cm、後者が0.6cm前後。7は叩き目を一部ナデ調整する。凹面は全体にナデ調整するが、糸切り、布目の各痕跡を残す。端部付近は丁寧にナデ調整をする。色調は灰白色で、焼成は軟質。石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。厚さ1.5cm。SD4255出土。

B4は0.1cm幅と0.3cm幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.3~0.5cm、後者が0.7cm前後。8は凹面を粗くタテ方向にケズリ調整し、布目痕跡

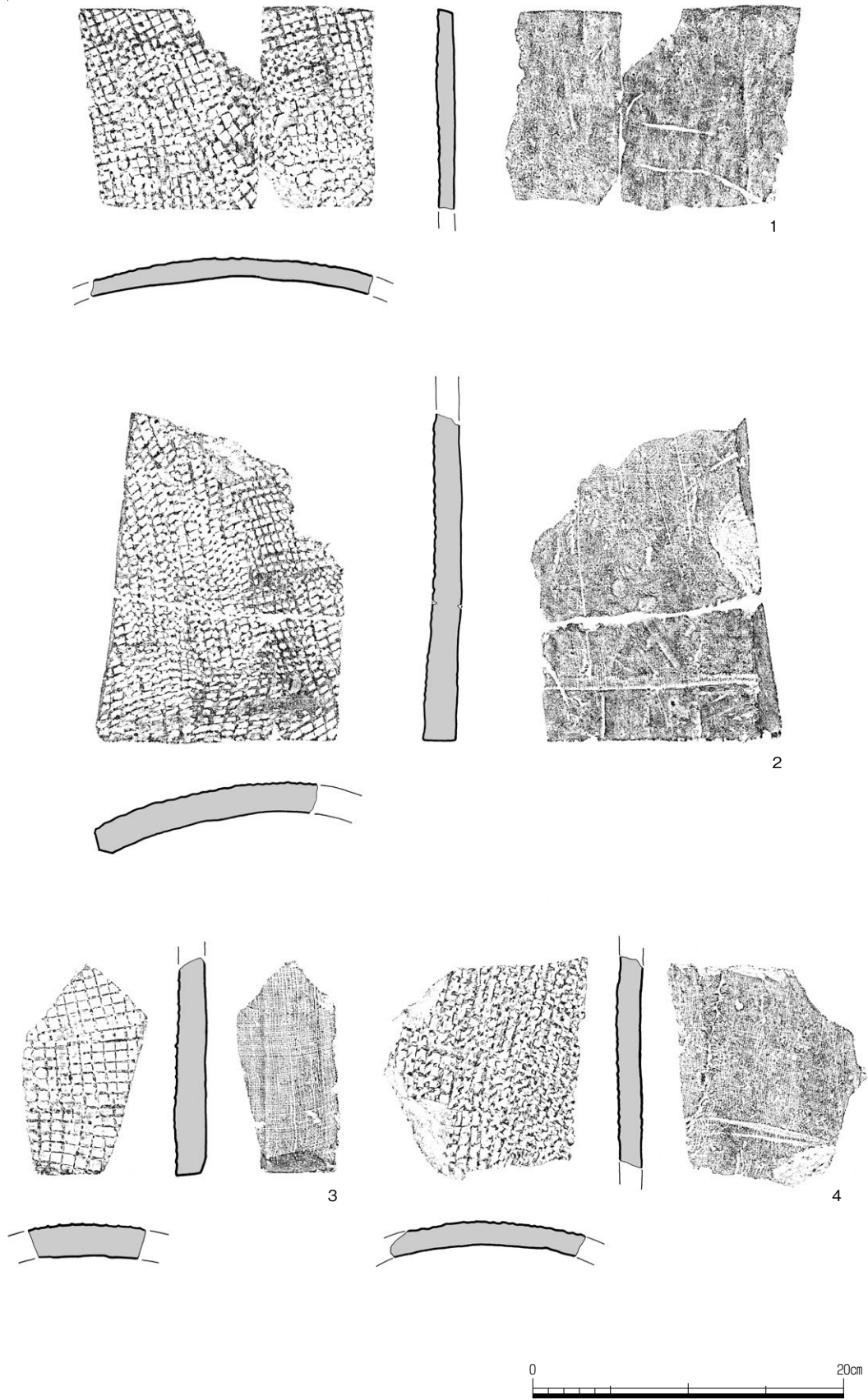


Fig. 96 平瓦 I 類 A 1:4

を部分的にしか残さない。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ1.5cm。SD4255出土。

B5は0.15cm幅の刻線、が約60°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔はいずれも0.5cm前後。9は正格子叩き目A3と重複する。凹面は粗くナデ調整するも、糸切り痕跡と布目痕跡を明瞭に残す。側面調整は軽いヘラケズリを施し、側縁の面取りを行わないb0手法。色調はにぶい黄色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.2cm。SD4139出土。

B6は木目に平行する0.1cm幅と、斜交する0.2cm幅の刻線が、約85°の角度で交差する正格子に近い叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.5cm、木目斜交線が0.6cm前後。10は一部、刻線がB6よりも若干間隔の広い叩き目が重複するが、残存する範囲が狭く明瞭でない。側面調整はc1手法。凹面は粗くナデ調整するが、糸切りと布目の各痕跡を残す。側縁から約11cm内側に、径1.0cm、深さ0.2cmの円形の窪みがあり、内部には布目痕跡が残る。破面をみると、粘土板が合わさっていることがわかる（Z）。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ1.7cm。SD4255出土。

B7は木目に斜交する0.2～0.25cm幅の刻線が、約55°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は0.5cmと0.6cm前後。11は狭端部。凹面はナデ調整し、糸切り痕跡と布目痕跡をごく一部残す。側面調整はc手法で、凹面に面取りのみられる部分とみられない部分がある。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.4cm。SD4255出土。

B8は木目に斜交する0.1cm幅の刻線と、同じく斜交する0.15～0.2cm幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は前者が0.5cm、後者が0.6cm前後。12は叩き目が一部つぶれる。凹面はナデ調整するが、糸切り、桶杵板、布目、布端の各痕跡をわずかに残す。杵板の幅は不明。端部から約10cm内側に1.0cm×0.6cm、深さ0.3cmの楕円形の窪みがあり、内部に布目痕跡を残す。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.4cm。SD4139出土。

B9は0.1cm幅と0.2cm幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.5cm、後者が0.6cm前後。13は狭端部。叩き目が一部つぶれる。端部付近には別種の叩き目がみえるが、明瞭でない。側面調整はc0手法。凹面は一部ナデ調整するが、ほぼ全体に布目痕跡を残す。色調は浅黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を含む。厚さ1.5cm。NI35地区のSD4130上層出土。

B10は木目に斜交する0.15cmと0.2cm幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は前者が0.8cm前後、後者が0.5cm前後。14は広端部。叩き目を部分的にナデ調整する。凹面は桶杵板、糸切り、布目、布端の各痕跡を明瞭に残す。杵板幅は2.1～2.7cm。側面調整はc1手法。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.5cm。SK4325出土。

B11は木目とともに斜交する0.15～0.2cm幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。15は狭端部。狭端付近と側縁付近で明瞭に確認できるが、大部分は斜格子叩き目B6と重複する。狭端部付近はさらにヨコ方向にナデ調整。側面調整はc3手法であるが、凹凸面ともに面取りのみ

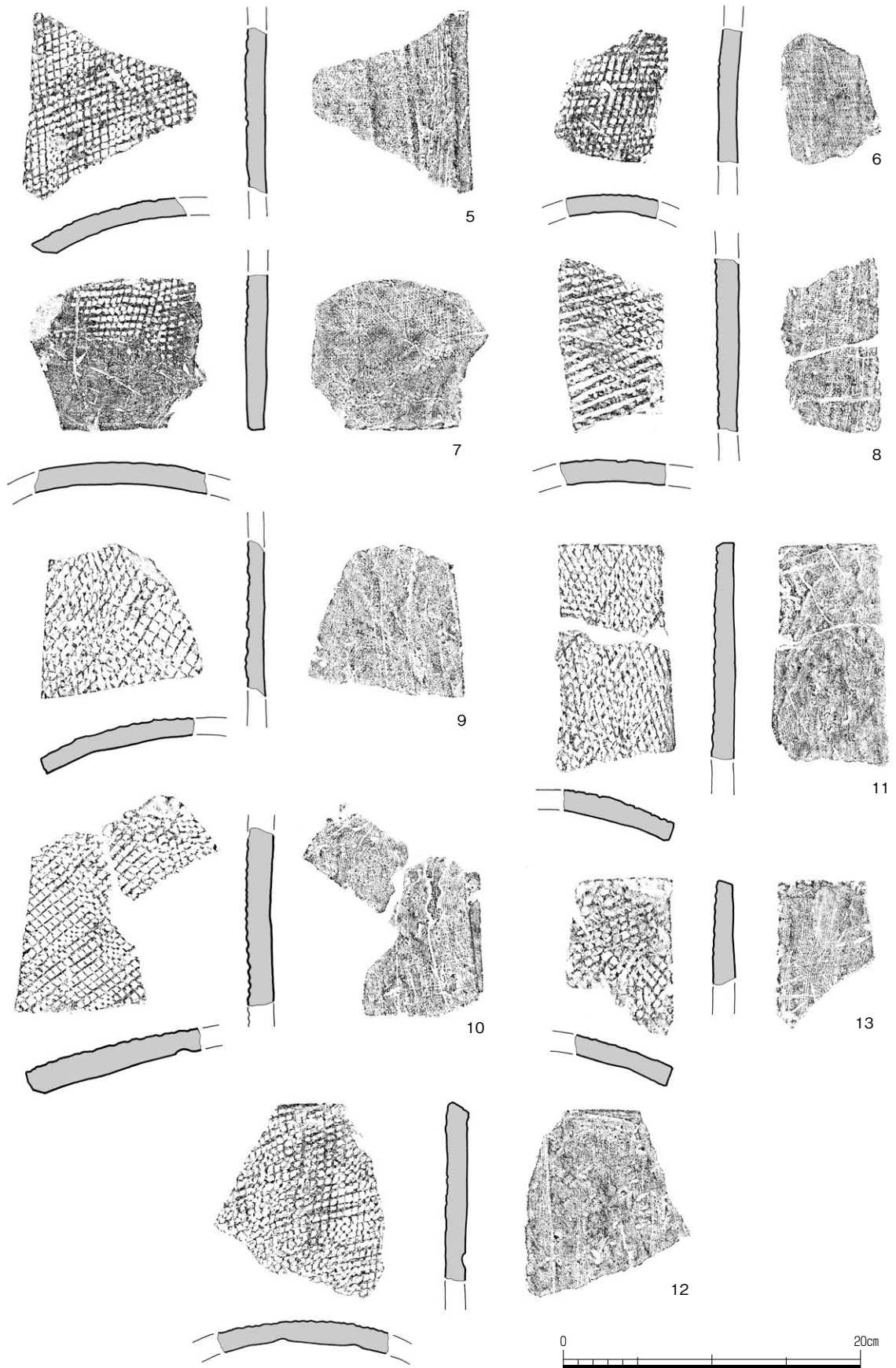


Fig. 97 平瓦 I 類 B (1) 1:4

られない部分もある。凹面はケズリ調整するが、糸切り、布目、粘土板合わせ目（Z）の各痕跡を残す。狭端部付近は面取り風にヨコナデ。色調は黄灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、赤色粒子を含む。厚さ1.6cm。NH33地区のSD4130中層出土。

B12は0.2cm幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。明瞭な部分の刻線の間隔はいずれも0.6cm前後だが、バラつきが大きい。16は狭端部。狭端部付近は叩き目が重複しており、刻線の細いものがかすかにみえるが、異なる叩き板であるかは明瞭でない。側面調整は面取り幅の広いc3手法。凹面はタテ方向に粗くナデ調整し、布目痕跡が部分的に残る。狭端部付近は面取り。色調はオリーブ黒色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.6cm。NH18地区のSD4130中層出土。

B13は木目に平行・斜交する0.15～0.2cm幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔はいずれも0.6cm前後。17は叩き目が一部つぶれる。側面調整はc0手法で、凹面はタテ方向に粗くケズリ調整し、布目痕跡は部分的にしか残らない。色調は暗灰黄色で、焼成はやや軟質、胎土には石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.3cm。SD4255出土。

B14は0.15～0.25cm幅の刻線が約80°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔はいずれも0.6cm前後。18は凹面をナデ調整し、布目痕跡はわずかにしか残らない。色調は黄灰色で焼成は軟質。石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。厚さ1.7cm。SD4255出土。

B15は0.15～0.2cm幅の刻線が、約50°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔はいずれも0.6cm前後。19は叩き目を一部ナデ調整する。側面調整はc0手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面はナデ調整するが、布目、桶枳板の各痕跡を残す。枳板の幅は2.0cm。色調はにぶい黄橙色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.4cm。SK4325出土。

B16は木目に平行・斜交する0.15～0.2cm幅の刻線が、約55°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.6cm、木目斜交線が0.7cm前後。20は凹面は軽くナデ調整するが、糸切り、桶枳板、布目の各痕跡を残す。枳板の幅は2.5cm。また、布の継ぎ足し痕跡とみられる幅約1cmの凹線が横断する。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.3cm。SK4325出土。

B17は木目に平行・斜交する0.15～0.2cm幅の刻線が、約60°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.6cm、木目斜交線が0.7cm前後。21は広端部付近をヨコ方向にナデ調整。側面調整はb3手法。凹面は未調整だが、広端部付近のみヨコ方向にナデ調整する。桶枳板痕跡が残り、幅2.8cm。広端部より約3cm内側に、端部と平行する幅0.25cmの凹線が走る。布端痕跡にしては折り返し幅が狭く、紐の圧痕にみえるが性格は不明。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.6cm。NH22地区のSD4130中層と上層から出土したものが接合した。

B18は木目に平行・直交する0.2cm幅の刻線が、約70°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔はいずれも0.7cm前後。22は側面調整がc0手法で、凹面は桶枳板痕跡、布目痕跡が明瞭に残る。枳板幅は2.0cm。色調はにぶい褐灰色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.9cm。SK4501出土。

B19は木目とともに斜交する0.2cm幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔

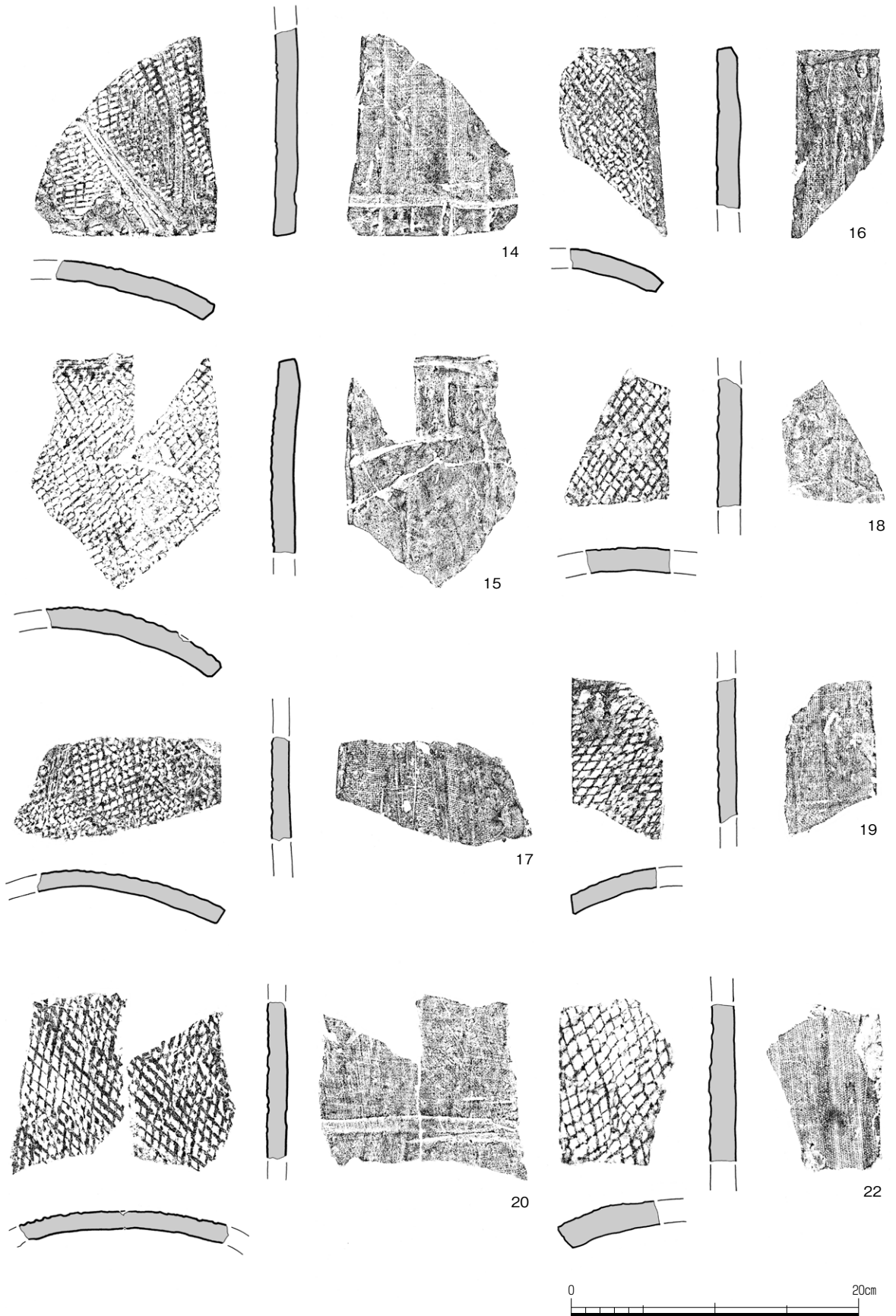


Fig. 98 平瓦 I 類 B (2) 1:4

はいずれも0.7cm前後。23は狭端部。叩き目を一部ナデ調整する。側面調整はc0手法。凹面は粗くナデ調整するが、布目、粘土板合わせ目（Z）の各痕跡を残す。また、爪状工具のあたりがみられる。狭端部付近は面取り風にヨコナデ。色調は灰黄色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.5cm。NH34地区のSD4130中層出土。

B20は木目に平行・斜交する0.2cm幅の刻線が、約60°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔はいずれも0.7cm前後。24は凹面をナデ調整するが、糸切り、布目の各痕跡を残す。色調は灰黄色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.6cm。NH29地区のSD4130中層出土。

B21は木目に平行・斜交する0.2cm幅の刻線が、約55°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は0.7cm前後。25は広端部。斜格子叩き目B6と重複する。側面調整は欠損により不明瞭だが、c手法か。凹面はナデ調整するが、布目と粘土板合わせ目（Z）の各痕跡を部分的に残す。端部付近はヨコ方向にナデ調整。色調は暗青灰色～黄灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.6cm。NI34地区のSD4130中層出土。

B22は0.3cmと0.4cm幅の刻線が、約60°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔はいずれも0.7cm前後。26は叩き目を軽くナデ調整する。側面調整はc0手法。凹面はタテ方向にケズリ調整する。布目痕跡はほぼ残らない。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を含む。厚さ1.1cm。SK4325出土。

B23は木目とともに斜交する0.15cm幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。木目が明瞭に走るのが特徴的である。刻線の間隔はいずれも0.7cm前後。27は斜格子叩き目B26と重複する。側面調整はb0手法。凹面はナデ調整するが、布目痕跡を残す。色調は黄灰色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.6cm。NH21地区のSD4130上層出土。

B24は木目に平行する0.15cm幅と、木目に斜交する0.2cm幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔はいずれも0.7cm前後。28は凹面の布目痕跡を一部ナデ調整する。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石・雲母・赤色粒子を含む。厚さ1.6cm。NH37地区のSD4130上層出土。

B25は木目とともに斜交する0.3cm幅の刻線が、約60°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔はいずれも0.7～0.8cm前後。29は狭端部。同一の叩き目が全面に重複する。側面調整はb0手法。凹面はナデ調整するが、糸切り、布目、分割突起の各痕跡を残す。端部付近はヨコ方向にナデ調整。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.3cm。NH25地区のSD4130中層とHM15地区のSD4255で出土し、接合した。

B26は木目に平行・斜交する0.3cm幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.7cm、木目斜交線が0.8cm前後。30は側面調整c0手法。凹面はタテ方向にナデ調整するが、布目痕跡をわずかに残す。色調は黒褐色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。厚さ1.4cm。SD4255出土。

B27は0.2cm幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は0.8cmと0.7cm前後。31は凹面をタテ方向にナデ調整する。側面調整はc1手法で、凸面と側面は鈍角をなす。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.1cm。NI28地区のSD4130上層出土。

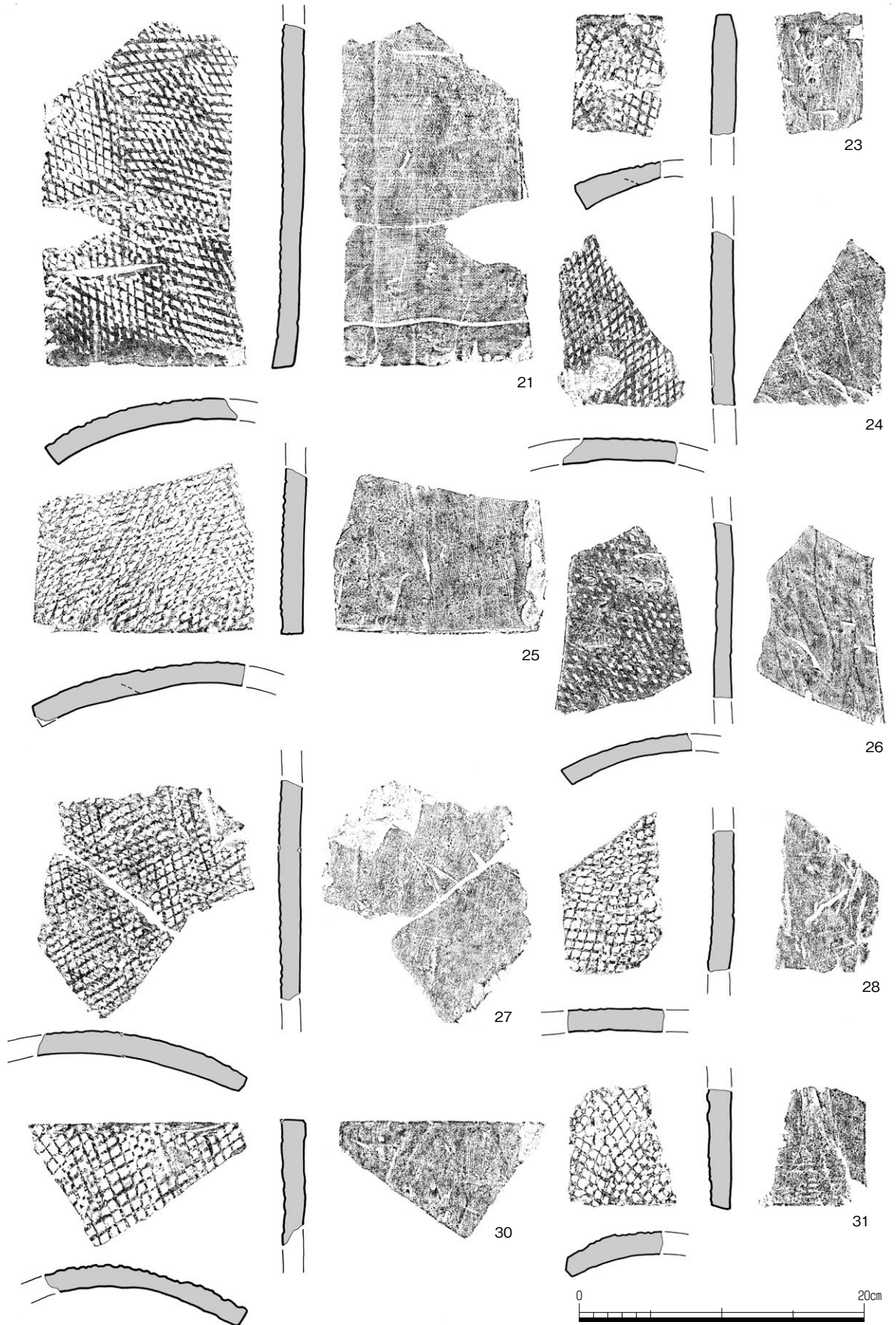


Fig. 99 平瓦 I 類 B (3) 1:4

B28は木目に平行・直交する0.3cm幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.9cm前後、木目斜交線が0.7cm前後。32は狭端部。側縁付近には叩き目がみえる。側面調整c0手法。凹面は狭端付近をヨコ方向にナデ調整するが、桶杵板、糸切り、布目、粘土板合わせ目(Z)、分割突帯の各痕跡を明瞭に残す。杵板幅は3.2cm前後か。側面調整はc1手法。色調は灰白色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.3cm。NH24地区のSD4130下層出土。

B29は0.2cm幅と0.3～0.35cm幅の刻線が、約55°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.7cm、後者が1.0cm前後。33は全体に磨滅する。凹面はナデ調整し、布目痕跡は部分的にしか残らない。色調は灰黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を少し含む。厚さ1.5cm。SE4740出土。

B30は木目とともに斜交する0.2cm幅の刻線が、約45°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は0.7cmと1.0cm前後で、断面はV字形を呈する。34は一部叩き目が重複する。側面調整はb0手法。凹面にも凸面と同じ叩き目がみられるが、ナデ調整する。色調は灰褐色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.2cm。NN38地区の包含層出土。

B31は0.3cm幅と0.4cm幅の刻線が、約50°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.8cm、後者が1.0cm前後。35は狭端部で、端部付近には叩き目が重複する。側面調整はc0手法。凹面は粗くナデ調整するが、糸切りと布目の各痕跡を残す。端部付近はヨコ方向にナデ調整。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.5cm。NH34地区のSD4130中層出土。

B32は木目とともに斜交する0.3cm幅の刻線が、約45°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は0.8cmと1.2cm前後。斜格子叩きB28と重複する資料でのみ確認している。

この他に、叩き目が重複する資料として、A1+B26、B4+B13、B6+B11+B21、B13+B23+B26、B28+B32が確認できた。

C：平行叩き目 (Fig. 101～104-36～50, Ph. 65～67・72・73) 平行する刻線を入れた叩き板を使ったもの。15種類ある。

C1は0.05～0.15cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度10～11本/2cmで、凹部幅は0.05～0.15cm。刻線幅と凹部幅にはバラつきがある。36は狭端部。側面調整はc3手法。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡はわずかにしか残らない。狭端付近はヨコ方向にナデ調整。破面をみると粘土板が合わさっていることがわかる(S)。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.8cm。SK4325出土。

C2は0.15～0.2cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度8～9本/2cmで、凹部幅は0.1cm以下。凹部幅が狭く、刻線も浅く断面がへ字状を呈するものがみられるため、木目の明瞭な無文叩き板の可能性もある。37は側面の分割破面が大きく突出して残るb3手法。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡はごく一部しか残らない。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母を含み、石英、長石が多い。厚さ1.9cm。SK4325出土。

C3は0.1～0.3cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度8本/2cmで、凹部幅は0.15～0.2cm。38は狭端部で、叩き目が一部つぶれる。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向にナデ調整をし、布目痕跡は一部にしか残らない。狭端部付近はヨコ方向にケズリ調整し、面取り風になる。色調は青

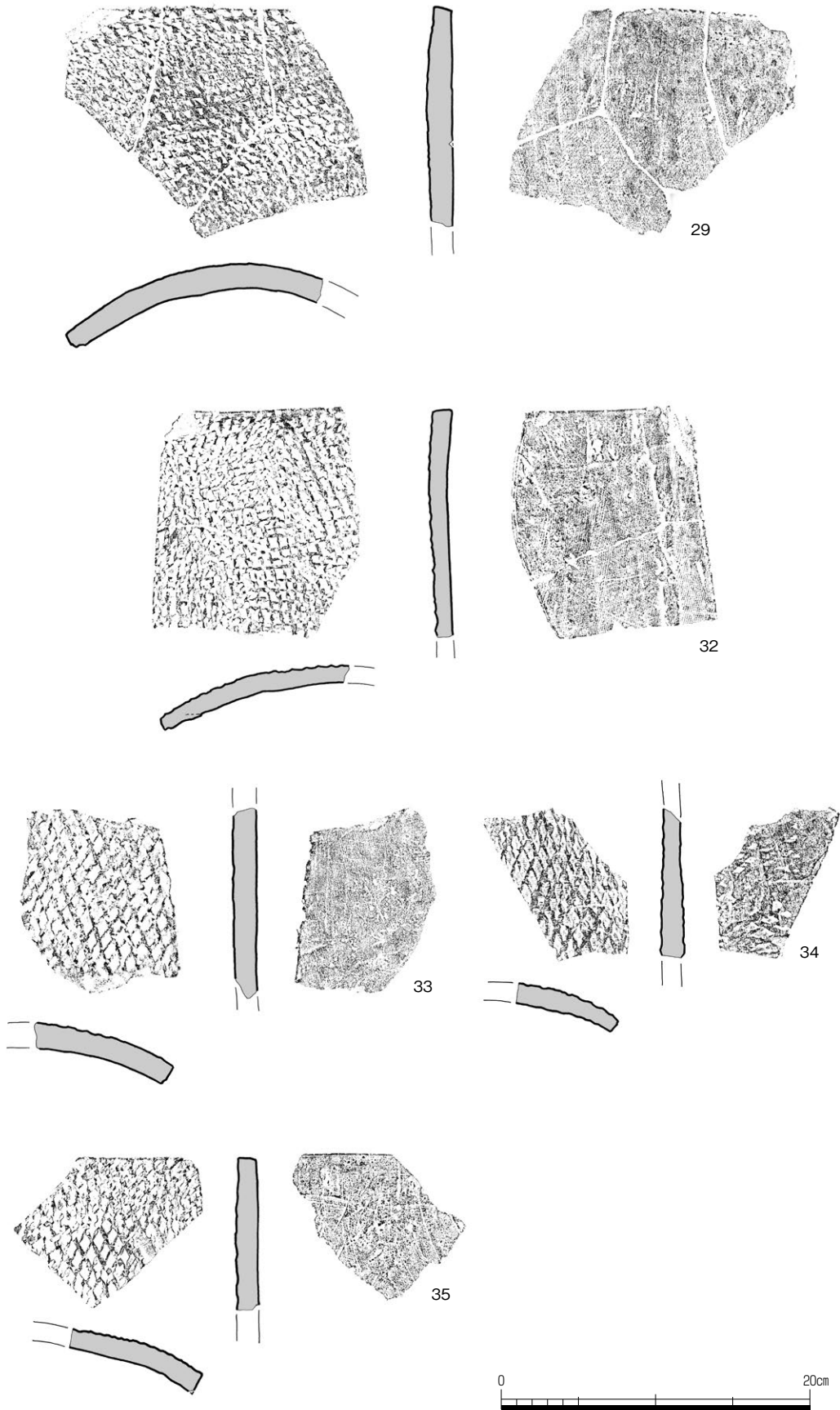


Fig. 100 平瓦 I 類 B (4) 1:4

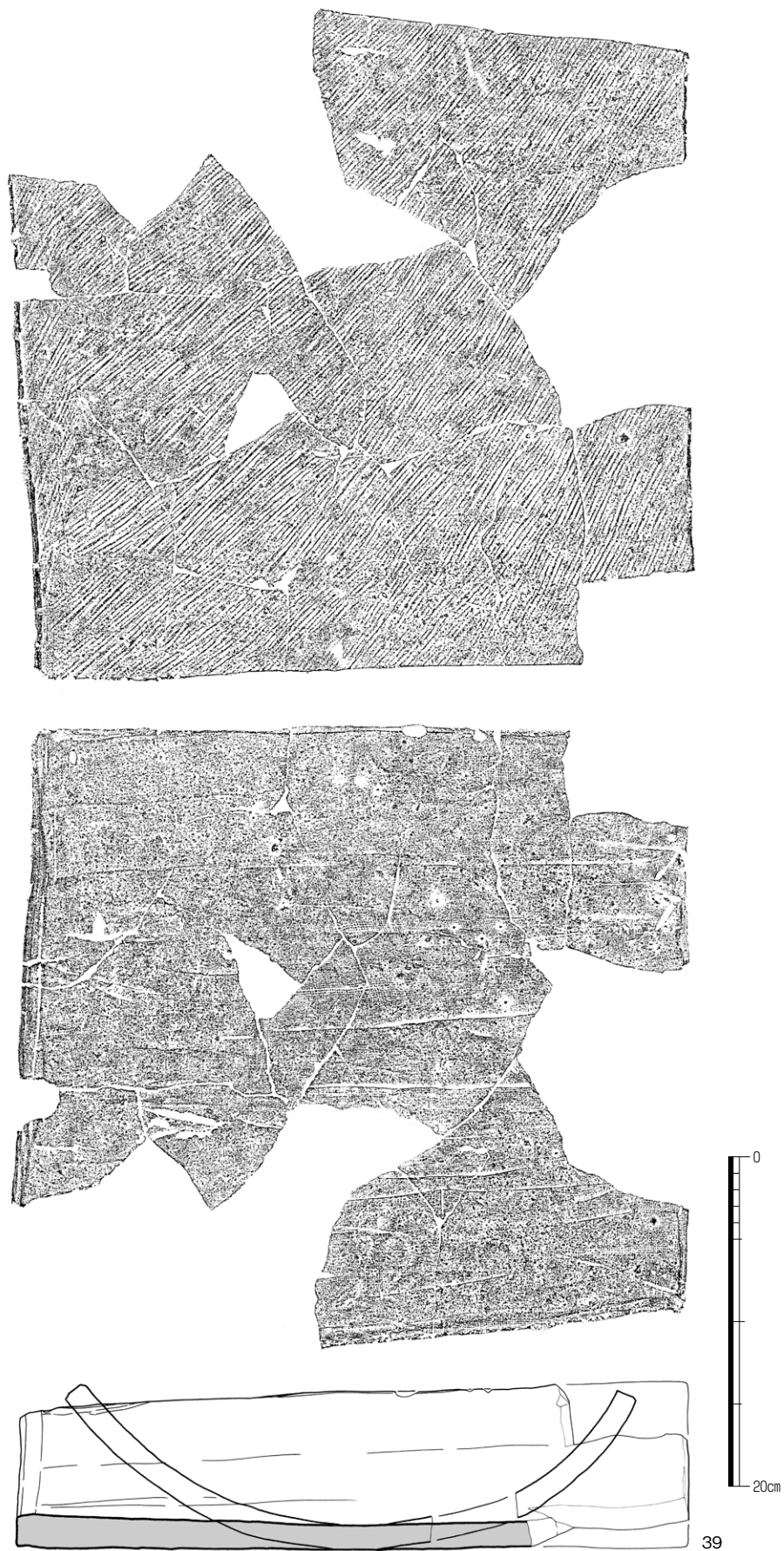


Fig. 101 平瓦I類C (1) 1:4

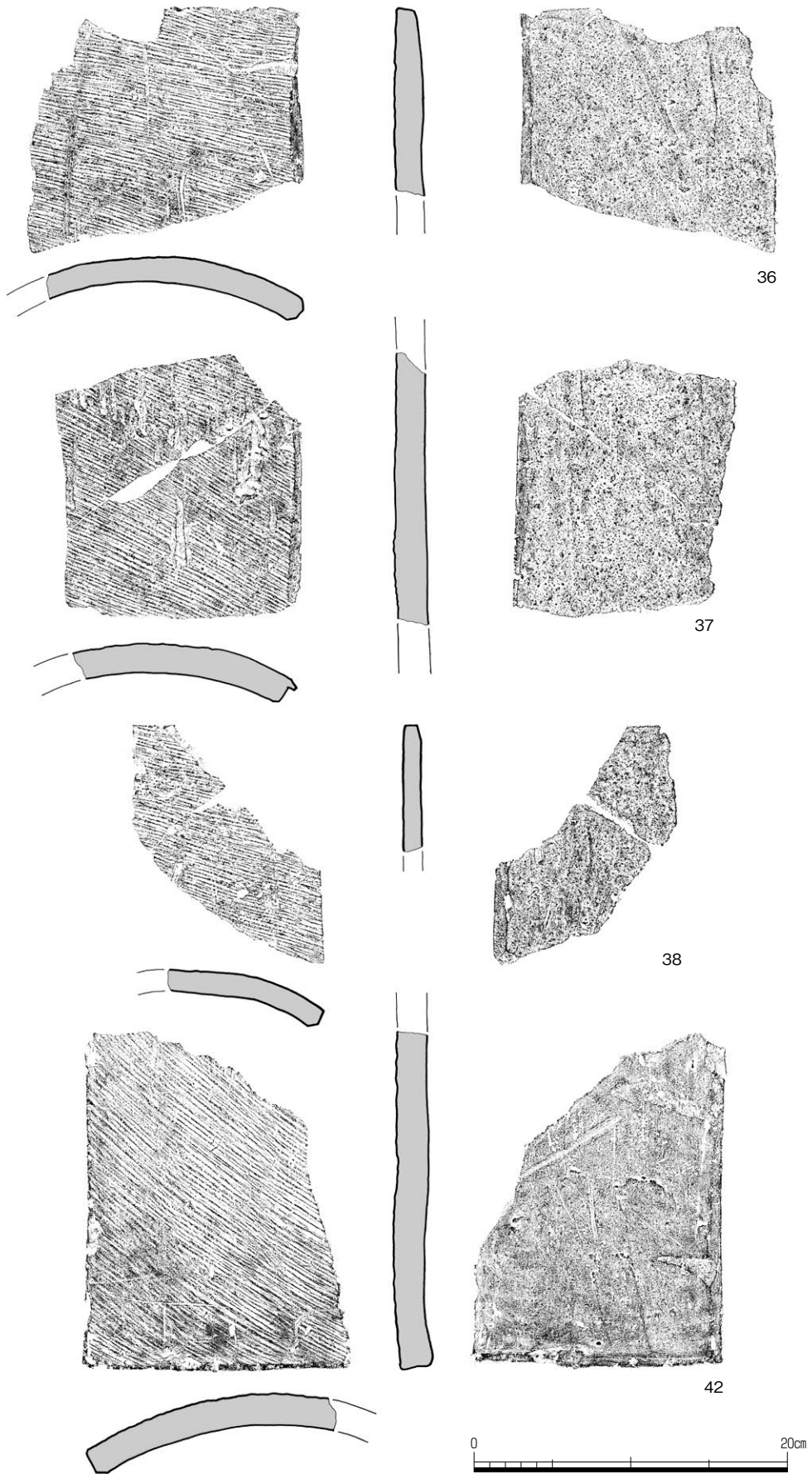


Fig. 102 平瓦I類C (2) 1:4

灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.6cm。NH24地区のSD4130中層出土。

C4は0.1～0.2cm幅の刻線を刻んだ叩き板。木目は不明瞭。密度8本/2cmで、凹部幅は0.1～0.2cm。刻線幅と凹部幅にはバラつきがある。39は両端部、両側縁が残存し、長さ39.4cm、幅33.0cm。広端部は補足叩きを施し、さらにヨコ方向に軽くナデ調整する。側面調整はc0手法。凹面はほぼ全体をタテ方向にケズリ調整し、工具のアタリが筋状に残る。糸切り、布目の各痕跡がごくわずかに残る。広端付近は強くヨコ方向にナデ調整。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.8cm。SK4325出土。

C5は0.05～0.15cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度7～8本/2cmで、凹部幅は0.1～0.3cm。刻線幅と凹部幅にはバラつきがある。40は叩き目を一部ナデ調整する。側面調整はc3手法で、凹面の面取りは幅広い。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.9cm。NH24地区のSD4130下層出土。

C6は0.1～0.15cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度7本/2cmで、凹部幅は0.3～0.4cm。粗い木目が刻線と直交し格子風に見える。刻線幅と凹部幅にはバラつきがある。41は叩き板のアタリが残る。側面調整はc0手法。凹面は未調整で、桶枠板、分割突帯、布目の各痕跡が残る。分割突帯は撚り紐であることが明瞭。桶枠板の幅は3.5cm。色調はにぶい褐色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母を含む。厚さ1.4cm。NH17地区の包含層出土。

C7は0.1～0.25cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度6～9本/2cmで、凹部幅は0.1～0.2cm。42は広端部。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向にケズリ調整し、布目痕跡は残らない。色調はオリーブ黒色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ2.0cm。SK4325出土。

C8は0.2cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度6～7本/2cmで、凹部幅は0.1～0.2cm。43は狭端部。側面調整はc1手法。凹面は丁寧にタテ方向、狭端部付近はヨコ方向にナデ調整する。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.7cm。SK4325出土。

C9は0.1～0.2cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度6～8本/2cmで、凹部幅は0.1cm以下。C2と同様の理由により、木目の明瞭な無文叩き板の可能性もある。44は広端部。側面調整はc3手法。凹面はタテ方向に丁寧にナデ調整し、布目痕跡はわずかにしか残さない。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.7cm。SK4327出土。

C10は0.1～0.15cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度6～7本/2cmで、凹部幅は0.1～0.15cm。45は広端部。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向にケズリ調整と、工具によるナデ調整をしている。布目痕跡は残らない。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.5cm。NH19地区のSD4130上層出土。

C11は0.1～0.25cm幅の刻線を刻んだ叩き板。木目は不明瞭。密度6～7本/2cmで、凹部幅は0.1～0.3cm。刻線幅と凹部幅にはバラつきがある。46は狭端部。側面調整はc手法により、凹面に面取りを施す部分と施さない部分がある。凹面は全面をナデ調整し、布目痕跡はわずかに

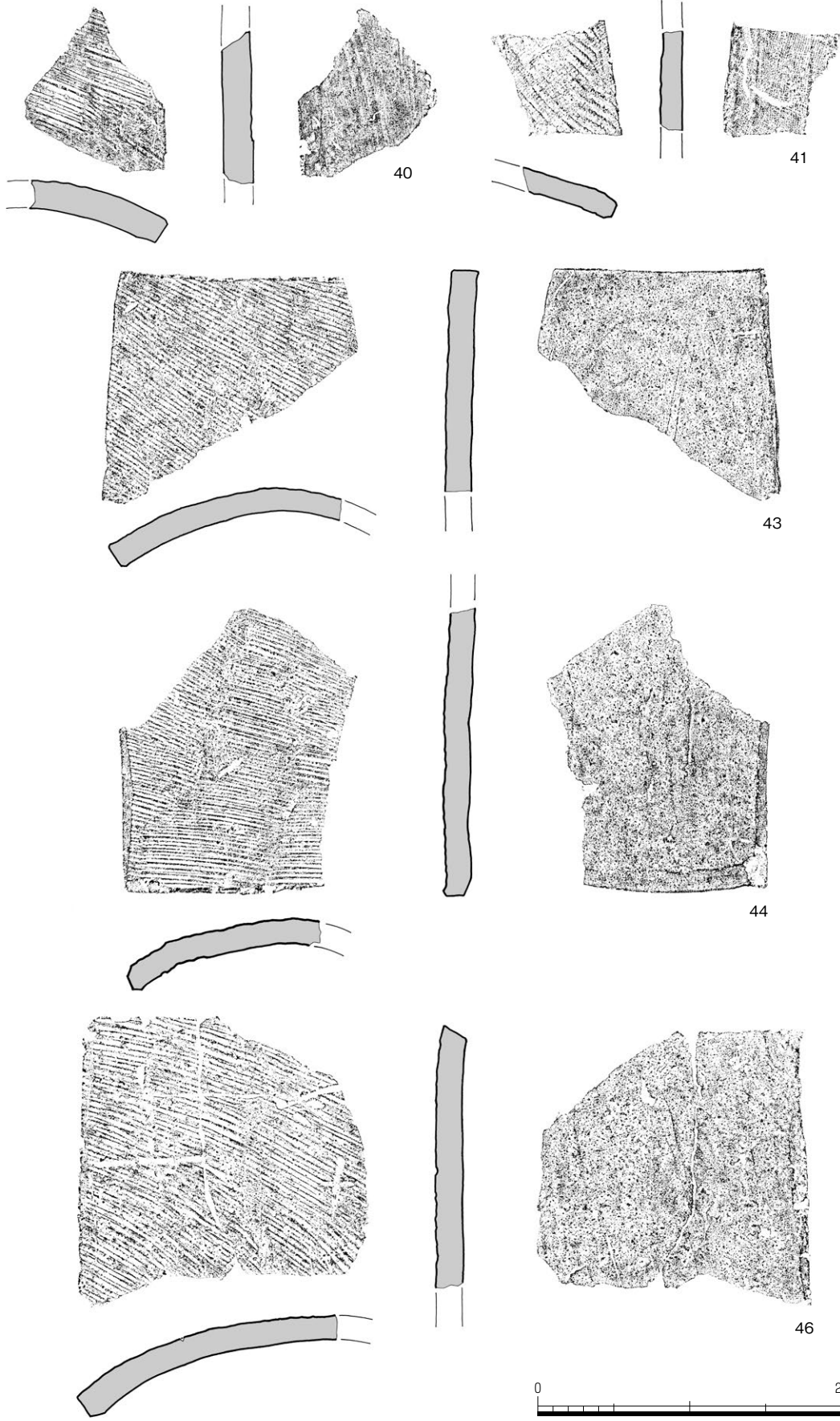


Fig. 103 平瓦I類C (3) 1:4

しか残らない。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.5cm。SK4325出土。

C12は0.1～0.4cm幅と線幅にバラつきの大きい刻線を刻んだ叩き板。密度5～7本/2cmで、凹部幅は0.15～0.25cm。47は広端部。叩き目を一部ナデ調整する。側面調整はc0手法。凹面はナデ調整をするが、布目痕跡が部分的に残る。広端部から6.5cm、7.5cmの位置に、端部に平行する幅0.4cmの凹線が1条ずつ走り、凹線内部にも布目痕跡が認められる。桶枠板綴じ紐痕跡の可能性があるか。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母を含み、石英、長石が多い。厚さ1.6cm。NH35地区のSD4130中層出土。

C13は0.2～0.25cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度6本/2cmで、凹部幅は0.15～0.25cm。48は広端部。凸面と凹面の各所に、焼成時のものとみられる溶着物が付着する。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向にケズリ調整し、布目痕跡は残らない。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母を少量含む。厚さ2.0～2.5cm。SK4325出土。

C14は0.1～0.15cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度5本/2cmで、凹部幅は0.2～0.3cm。49は凹面を丁寧になデ調整する。オリブ灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.7cm。NH25地区のSD4130中層出土。

C15は0.1～0.15cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度5本/2cmで、凹部幅は0.3～0.4cm。50は凹面をタテ方向にケズリとナデ調整し、広端部はヨコ方向にナデ調整する。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.8cm。HE24地区の包含層出土。

D：縦位縄叩き目 (Fig. 105・106-51～58, Ph. 67・73) 縄を長軸方向に巻き付けた叩き板を使ったもの。8種類ある。D1～D5は粘土板桶巻き作り、D6・D7は粘土紐桶巻き作り、D8は不明である。

D1は7.5粒/3cmの縄を、8～9本/2cmの密度で巻き付けた叩き板。51は叩き目が一部つぶれる。凸面は未調整だが、側縁付近のみタテ方向にナデ調整する。側面調整はc1手法で、凸面と側面はほぼ直角をなす。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。破面に粘土板合わせ目(S)が確認できる。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、大きめの黒色粒子、赤色粒子が目立つ。厚さ1.7cm。NI28地区のSD4130中層出土。

D2は5.5～6粒/3cmの縄を、7本/2cmの密度で巻き付けた叩き板。52は狭端部が完存し、幅23.4cm。叩き目が一部つぶれる。側面調整はc0手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面は軽くナデ調整するが、糸切り、布目の各痕跡を残す。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.8cm。NG30地区のSD4130上層出土。

D3は5粒/3cmの縄を、5～5.5本/2cmの密度で巻き付けた、長さ15.5cm以上の叩き板。53は狭端部。側縁と端部付近の叩き目をナデ調整する。側面調整はc0手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面は側縁付近と狭端部付近をナデ調整するが、それ以外は未調整で、糸切り、布目の各痕跡を残す。色調は灰黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.9～2.1cm。SE4740出土。

D4は4粒/3cmの縄を、7本/2cmの密度で巻き付けた、幅5.5cm、長さ14.5cm以上の短冊形叩

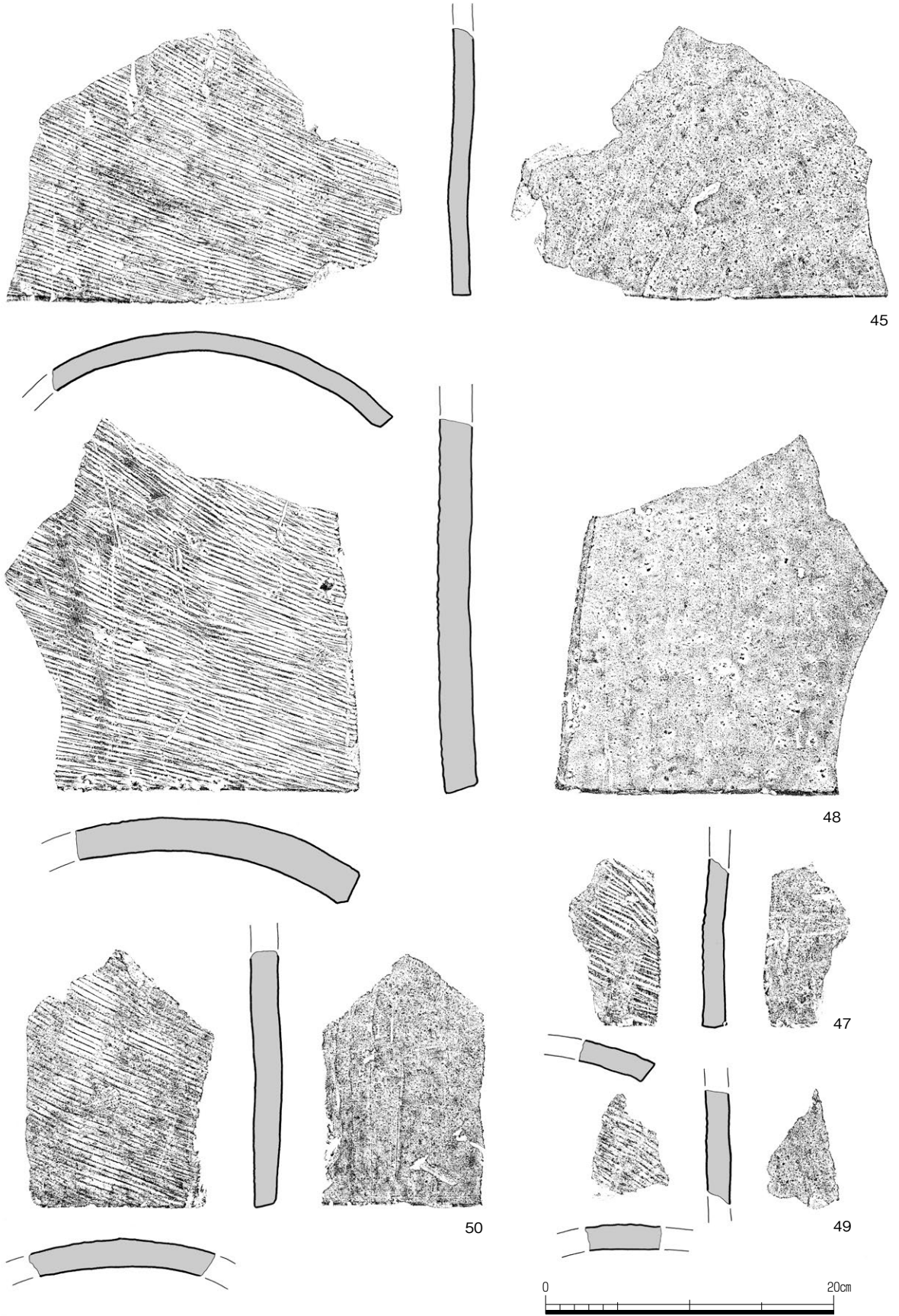


Fig. 104 平瓦 I 類 C (4) 1:4

き板。54は狭端部の幅がわかる資料で、幅21.6cm。叩き目が一部つぶれる。側面調整はc0手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面は軽くナデ調整するが、ほぼ全面に布目痕跡を残す。糸切り痕跡はかすかに残る。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.7cm。SE4740出土。

D5は3.5粒/3cmの縄を、6本/2cmの密度で巻き付けた叩き板。55は叩き目が全体的につぶれる。側面調整はc3手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面は未調整で、粘土板合わせ目（S・Zは不明）、布目の各痕跡を残す。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。厚さ1.7cm。NH31地区のSD4130中層出土。

D6は5.5～6.5粒/3cmの縄を、7本/2cmの密度で巻き付けた叩き板。56は叩き目が一部つぶれる。側面調整はc0手法で、凸面と側面はほぼ直角をなす。凹面は軽くナデ調整するが、布目痕跡を残す。破面観察により、素材は粘土紐と考えられる。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、黒色粒子が多い。厚さ2.6cm。NH25地区のSD4130上層出土。

D7は5粒/3cmの縄を、7本/2cmの密度で巻き付けた、長さ13.5cm以上の叩き板。57は叩き目が一部つぶれる。側面調整はc0手法で、凸面と側面は鈍角をなす。凹面は軽くナデ調整するが、粘土紐継ぎ目と布目の各痕跡を残す。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を少量含む。厚さ1.6cm。NH28地区のSD4130中層出土。

D8は4粒/3cmの縄を、4本/2cmの密度で巻き付けた叩き板。58は叩き目を一部ナデ調整する。側面調整はc0手法で、凸面と側面は鈍角をなす。凹面はタテ方向にナデ調整するが、布目痕跡を一部残す。粘土成形方法は痕跡がみられず不明。色調は灰色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.7cm。NG23地区のSD4130上層出土。

E：無文叩き目 (Fig. 107-59・60, Ph. 67・73) 線を刻んだり、縄を巻き付けたりしない叩き板を使ったもの。刻線風に筋が入るものがあるが、凹部幅が非常に狭く、刻線も非常に浅い。この線は木目で、板に人為的に線を刻んだとは考えがたいため、無文叩きとした。主としてSD4130から出土している。

E1は幅0.1cmほどの凸線が走る叩き板。密度は9本前後/2cm。59は広端部で、凸面を叩いた後にタテ方向にナデ調整する。側面調整はc1手法で、面取り幅が1.8cmと広い。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡はかすかにしか残らない。広端部付近はヨコ方向にケズリ調整。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.5cm。NI29地区のSD4130上層出土。

E2は幅0.1cmほどの凸線が走る叩き板。密度は12本前後/2cm。60は広端部で、凸面を叩いた後にタテ方向、広端部付近はヨコ方向にナデ調整。側面調整はc3手法。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡はかすかにしか残らない。広端部付近はヨコ方向にケズリ調整。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ2.0～2.4cm。NI30地区のSD4130中層出土。

以上、本調査区で出土した桶外巻き作り平瓦のうち、叩き目未調整、もしくは調整が不完全で一部残るものの分類を示した。すべての資料をこれらの分類に当てはめることは難しいが、

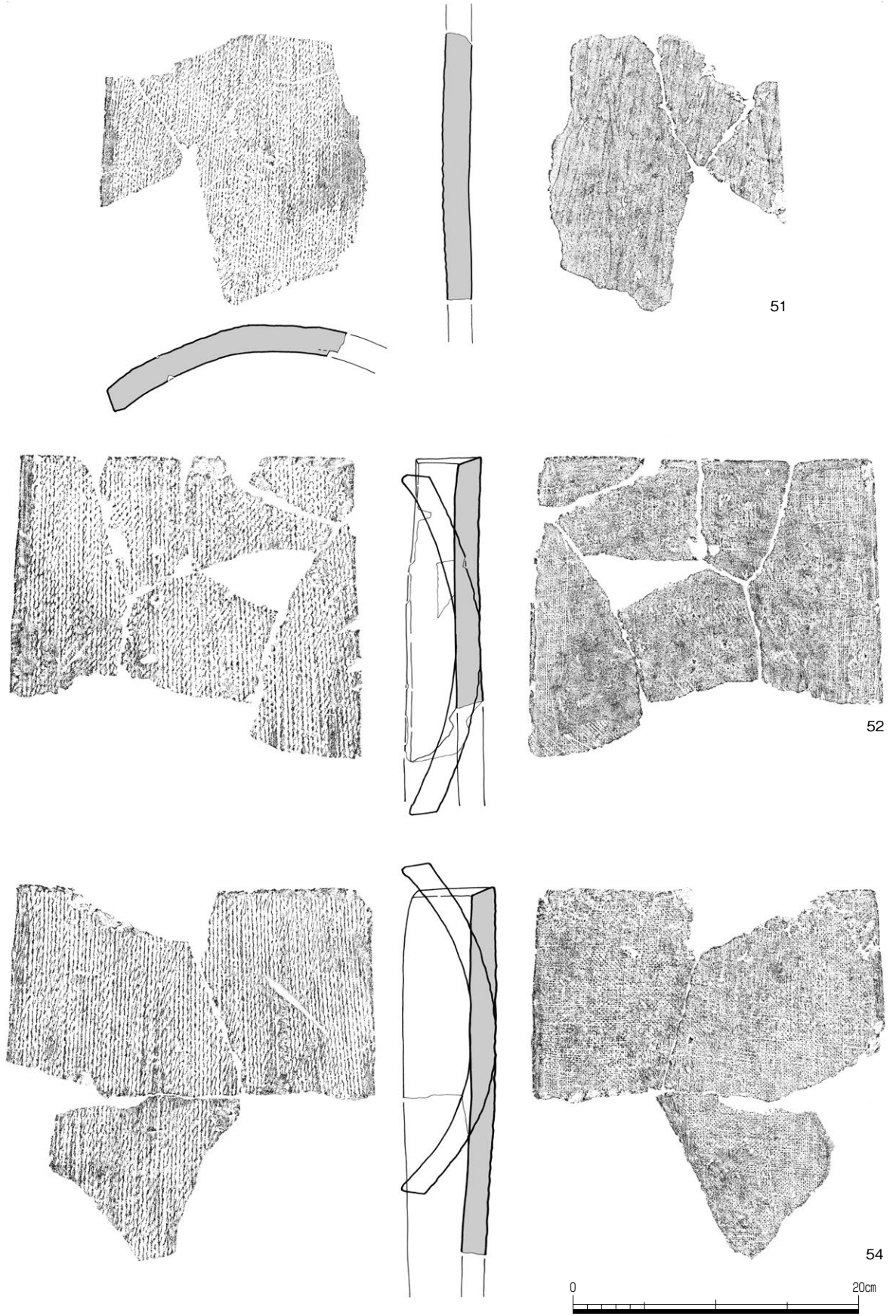


Fig. 105 平瓦I類D (1) 1:4

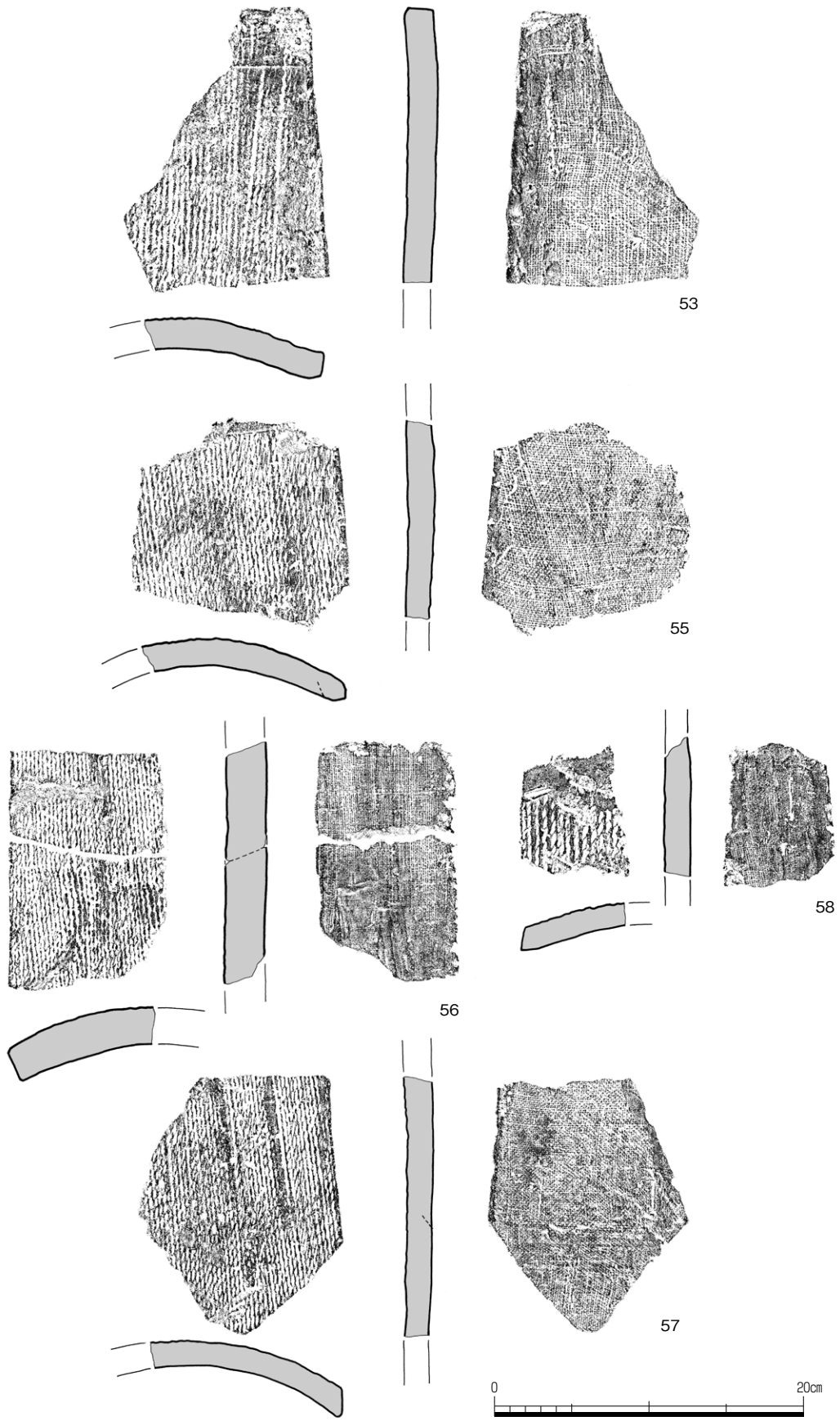


Fig. 106 平瓦 I 類 D (2) 1:4

極力分類を試みたところ、凸面調整とその他の属性に一定の相関関係がうかがわれた。まず、正格子と斜格子叩きをもつものは、1.3~1.6cmの厚さで、調整は凹面が布目痕を残す程度の粗いナデ、側面は分割破面・截面ともに削るものの、面取りを施さないc0手法であるものが主体的である。色調は灰色~灰白色や黄灰色で、焼成はやや甘いものが多い。平行叩き目をもつものは1.6~1.9cmの厚みで、調整は凹面が布目痕跡をほぼ残さない丁寧なナデを施すものが主体となる。側面の調整はc0手法と、分割破面・截面ともに削ったうえに凹面側に面取りを施すc1手法が拮抗する。色調は灰色~青灰色、焼成は硬質で、石英、長石を多く含むものが目立つ。縄叩きをもつものは1.6~2.4cmの厚みで、調整は凹面がほぼ未調整、側面はc0手法で凸面と側面の角度が鈍角をなすものが主体である。色調は灰白色~黄灰色で、焼成はやや軟質で磨滅しているものが多い。無文叩きをもつものは、1.6~2.4cmの厚みで、調整は凹面が布目痕をほぼ残さない丁寧なナデを施すものが主体的で、側面はc0手法と、分割破面・截面ともに削ったうえ凹面側に面取りを施すc1手法が拮抗する。色調は灰色~青灰色で焼成が硬質なもの、黄灰色で焼成がやや軟質のものに分かれる。

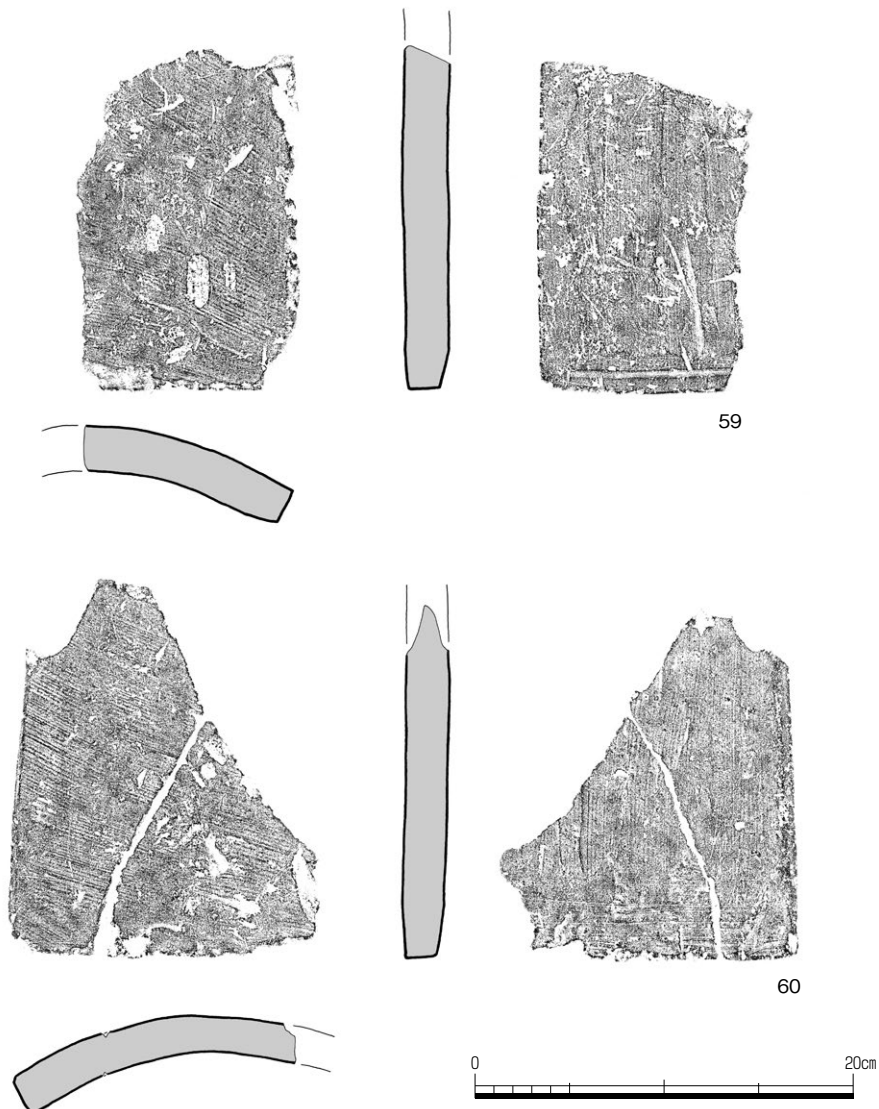


Fig. 107 平瓦 I 類 E 1:4

平瓦Ⅱ類 本調査区出土の平瓦は、ナデやケズリ調整によって叩き目をほぼ完全に調整するものが大多数を占める。有効な数値を示すことは難しいが、たとえば遺構別に出土点数を数えた場合、7世紀(Ⅱ期)の瓦溜SK4160・4270では平瓦Ⅱ類が100%、同じくSD4255では平瓦Ⅰ類が約15%、平瓦Ⅱ類が約85%となる。Ⅲ-A期の土坑SK4325では平瓦Ⅰ類が約10%、平瓦Ⅱ類が約90%、東西溝SD4130のうち、もっとも平瓦Ⅰ類(特に縄叩き)の比率が高い上層でも、平瓦Ⅰ類は約30%、平瓦Ⅱ類は約70%という値を示す。

きわめて多量に出土した平瓦Ⅱ類を分類するにあたり、着目する属性としては調整(凹面、側面、端部)、焼成、色調、胎土、法量などが考えられよう。本調査区において吉備池廃寺の軒瓦が多数出土している以上、平瓦にも吉備池廃寺所用のものが含まれている可能性が高いが、その他の寺院や藤原宮所用のものも含まれているとみてよい。しかし、全資料を検討して、それら各々を抽出することは非常に難しい。必ずしも平瓦諸属性の組み合わせが排他的であるとは限らないからである²¹。

このような状況をふまえ、本調査区で出土した平瓦Ⅱ類については、瓦がまとまって出土した遺構における属性の傾向を述べたうえで、主体的、特徴的な資料について個別記述、図示を行うことにする。

土坑SK4160出土瓦 (Fig. 108・109-61・62, Ph. 68) 1.8~2.3cmの厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc0手法、焼成はやや軟質であるものが主体的である。

61は、狭端部を残す。残存長34.0cm、残存幅23.0cm。凸面はタテ方向、狭端部付近のみヨコ方向にナデ調整する。側面調整はc0手法で、凹面側に深く削り込むため、凸面と側面が鋭角をなす。凹面はタテ方向、狭端部付近のみヨコ方向にナデ調整。色調は灰黄褐色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。厚さ2.0~2.5cm。

62は、凸面はタテ方向にケズリ調整する。側面調整はc0手法。凹面はタテ方向に粗くナデ調整し、糸切り、布目痕跡を残す。また、端部に平行して幅2~3mmの凹線が走り、その凹線に重なるように縫い目の痕跡がみられる。凹線の上下で布目が似ているため、布のほつれをつまんで縫い合わせたか、布を継ぎ足した痕跡と考えられる。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.2cm。SK4160出土瓦のなかで、焼成や凹面調整が異質な資料である。

瓦溜SK4270出土瓦 2.0~2.4cmの厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc0手法、焼成はやや軟質であるものが主体である。SK4160出土瓦と同様の属性をもつ瓦が多い。小片のため、図示しない。

南北溝SD4255出土瓦 (Fig. 109-63・64, Ph. 68) 1.6~2.4cmの厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc0手法、c1手法、c3手法であるものが主体的である。焼成は軟質のものから硬質なもの幅広い。

63は、広端部をわずかに残す。凸面はタテ方向にナデ調整する。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向にケズリ調整するが、布目痕跡を一部残す。端部から約6cm内側に、長さ1.0cm、幅0.3cmほどの凹線が4cmの間隔をあけて2条、さらに1.5cm内側に同様の凹線が1条認められる。桶枠板の綴じ紐痕跡の可能性はある。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.8cm。

64は狭端部。凸面はナデ調整する。側面調整はc0手法であるが、一部分割破面が残る部分がある。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡をかすかにしか残さない。端部付近はヨコ方向にナデ調整し、面取り風になる。端部から約4cm内側に、長さ1.7cm、幅0.4cmほどの凹線が1条認められる。桶枠板の綴じ紐痕跡の可能性ある。色調は灰白色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.4cm。

六条条間路北側溝SD4139出土瓦 (Fig. 110-65・66, Ph. 68) 1.6~2.3cmの厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc0手法、c1手法であるものが主体的である。凸面と側面が鈍角をなすものを若

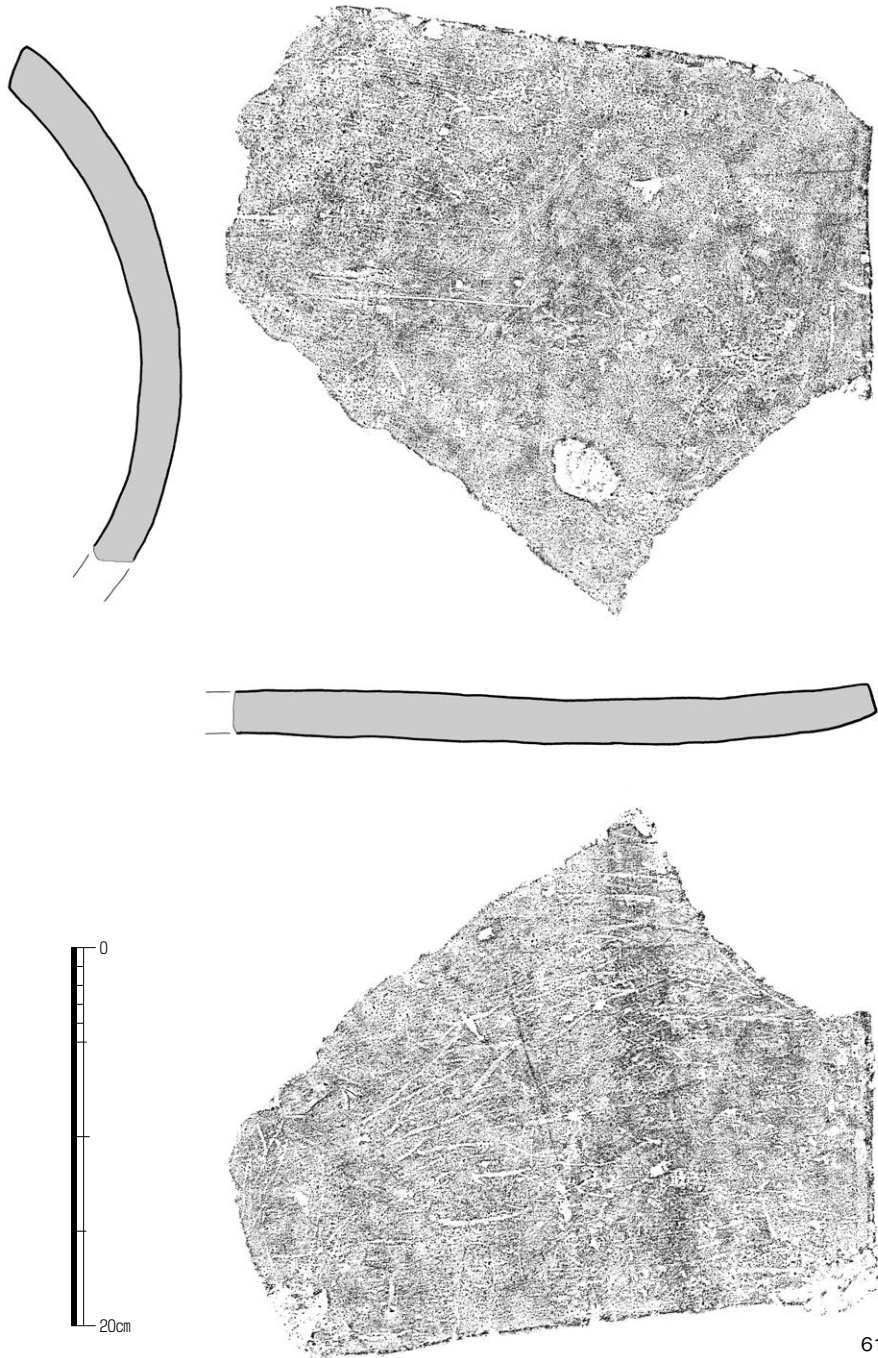


Fig. 108 平瓦Ⅱ類 (1) SK4160出土 1:4

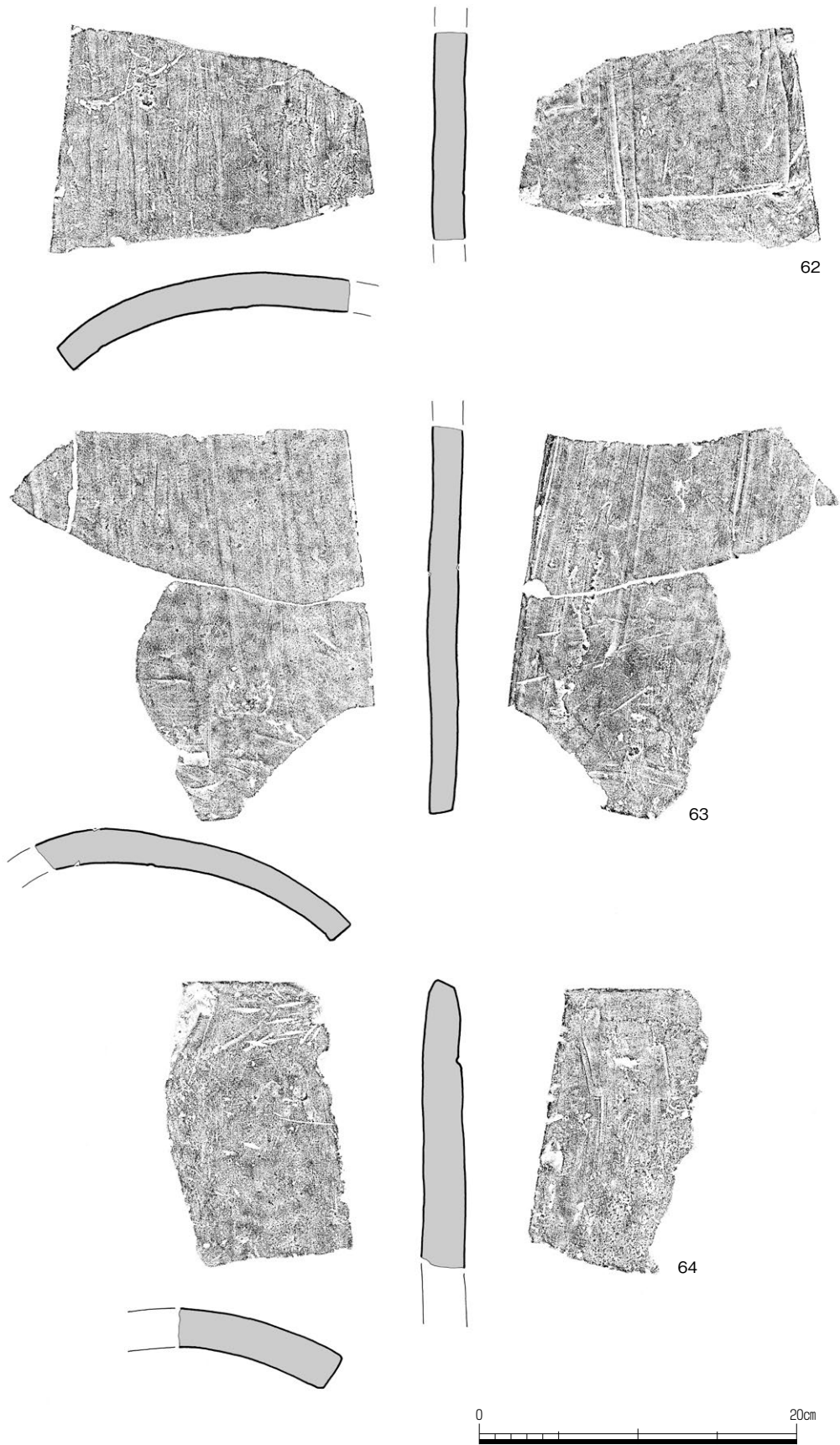


Fig. 109 平瓦 II類 (2) SK4160・SD4255出土 1:4

干含む。焼成はやや軟質と硬質のもの両者あるが、やや軟質のものが多い。

65は凸面をナデ調整する。側面調整はc1手法。凹面もナデ調整するが、桶枳板と粘土板合わせ目（S・Zは不明。）の各痕跡を残す。枳板幅は2.5cm。端部に平行する様に、幅0.3~0.4cmの凹線が1.5cmほどの間隔をあけて2条走る。内部に布目痕跡が残ることと、桶枳板の凹凸に対応してわずかな切れ目がみられることから、枳板の綴じ紐痕跡と考えられる。色調は灰白色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.2cm。

66は狭端部。凸面はナデ調整する。側面調整はc0手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面もナデ調整し、布目痕跡を残さない。色調は明褐色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ2.0cm。

土坑SK4325出土瓦 (Fig. 111~113-67~69, Ph. 68・69) 1.7~2.6cmの厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc1手法、焼成はやや軟質のものが主体的である。凸面と側面が鈍角をなすものを若干含む。他の遺構に比べ、破片の大きい資料がまとまっている。この他、焼成の時点で変形した資料が9点あり、厚さは1.8~1.9cm前後で凹面調整はナデ、側面調整はc1手法とc3手法、暗青灰色を呈し焼成は非常に硬質である。

67はほぼ全形がわかる資料。全長47.2cm。残存最大幅は33.4cm。凸面はタテ方向にナデ調整する。側面調整はb0手法だが、一部断面と破面の段差がない。凹面もタテ方向にナデ調整し、

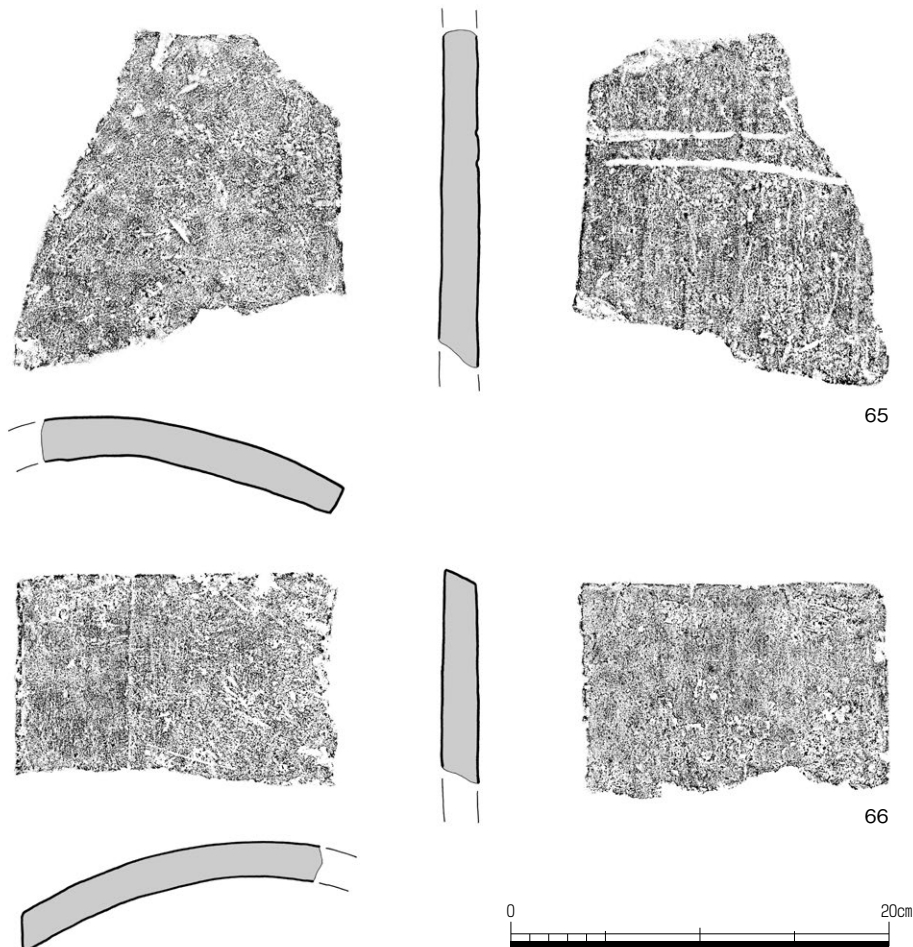


Fig. 110 平瓦Ⅱ類 (3) SD4139出土 1:4

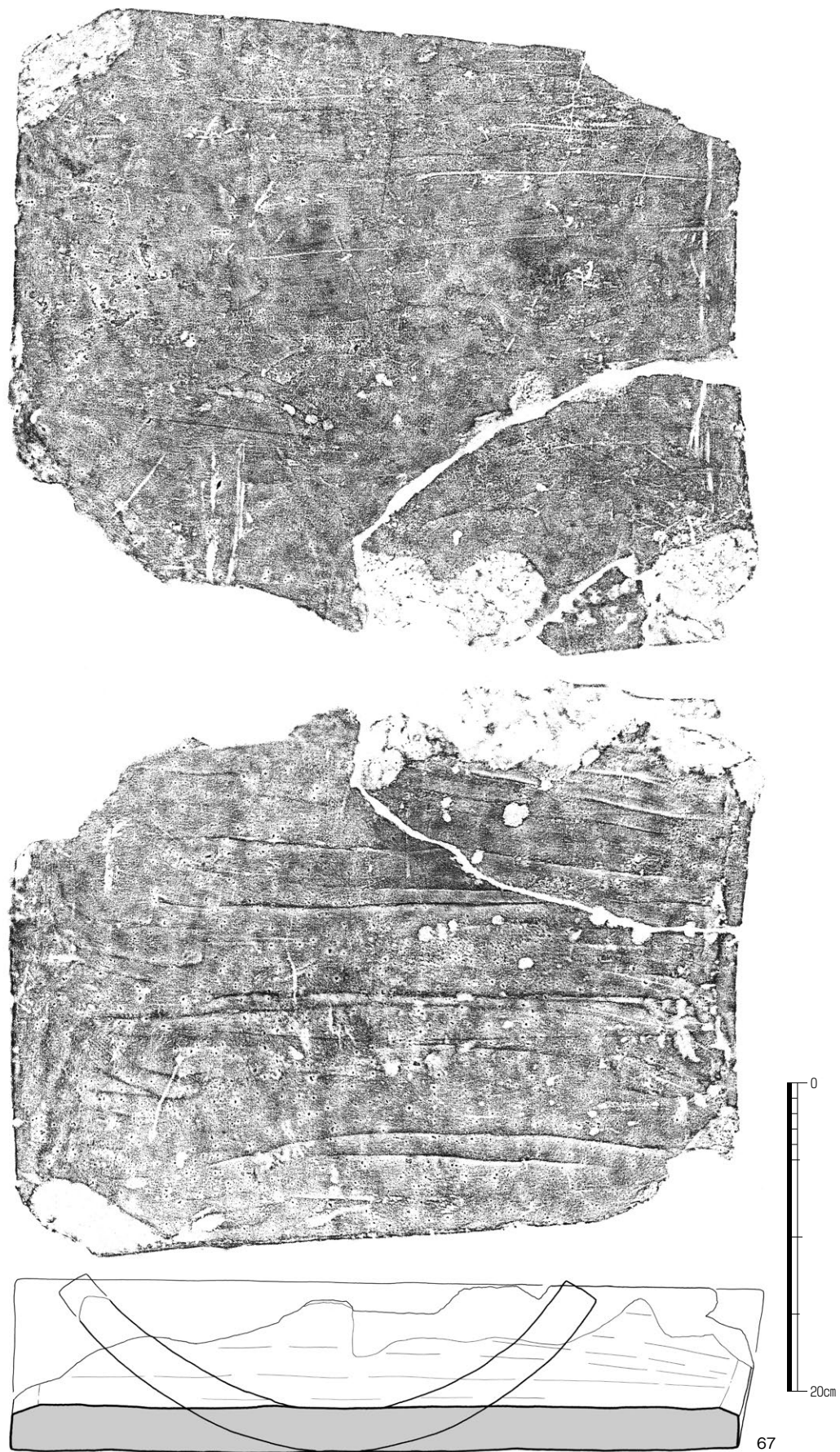


Fig. 111 平瓦Ⅱ類(4) SK4325出土 1:4

布目痕跡を残さない。両端部は面取りする。狭端部から3.5cm内側、広端部から5.5cmにそれぞれ凹線が断続的に走る。不明瞭ではあるが、枳板の綴じ紐痕跡の可能性もある。破面は粘土板合わせ目(S)か。色調は明褐色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ2.4~2.8cm。

68は全長45.6cm、残存最大幅は27.8cm。凸面は木目の目立つ無文叩き後、ナデ調整する。凸面中央部には、最終調整後に縄をわたしたとみられる痕跡が横断する。側面調整はc1手法。凹

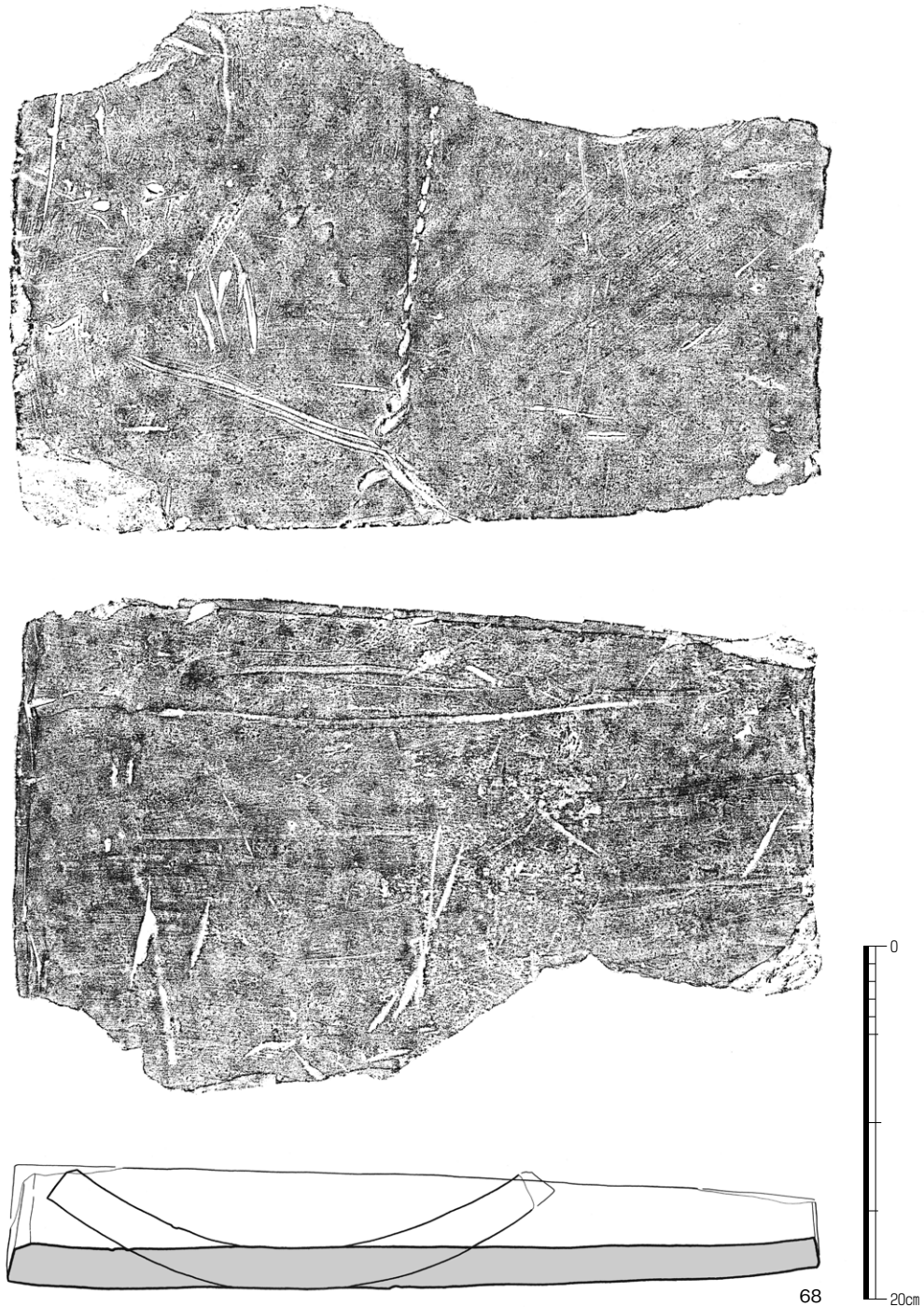


Fig. 112 平瓦 II 類 (5) SK4325出土 1:4

面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡を一部にしか残さない。両端部は面取りする。広端部から5.5cm内側に幅0.3cm、長さ1.4cmの凹線が、さらに1.0cm内側にも同様の凹線がみられる。桶枠板綴じ紐痕跡の可能性ある。色調は黄灰色～灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ2.3～2.5cm。

69は焼成の時点で変形したとみられる、歪みの大きい資料。広端部を残す。凸面は板状工具でタテ方向にナデ調整し、端部付近のみ斜め方向にハケ目調整。側面調整はc3手法だが、一部分割破面の段差が残り、面取り幅はごくわずか。凹面はタテ方向にケズリ調整し、端部付近のみさらにヨコ方向にナデ調整。布目痕跡は残らない。色調は暗青灰で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を多く含む。厚さ1.6～1.9cm。

東西大溝SD4130出土瓦 (Fig.114・115-70～74, Ph.70) 1.6～2.4cmの厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc0手法、c1手法、焼成はやや軟質～やや硬質のものが主体である。凸面と側面が鈍角をなすものを若干含む。下層、中層、上層間で、出土瓦の様相に大幅な違いはない。

70は広端部。凸面はナデ調整し、端部付近のみヨコ方向にナデ調整。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向、端部付近のみヨコ方向にナデ調整し、布目痕跡をわずかにしか残さない。両端部は面取りする。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を少し含む。厚さ2.4cm。NH28地区の中層出土。

71は狭端部。凸面は木目の目立つ無文叩きの後、ナデ調整する。側面調整はc0手法。凹面もナデ調整し、布目痕跡はみられないが、分割突帯の撚紐痕跡は残る。破面には粘土板の合わせ目(S)がみえる。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ1.8cm。NH31地区の中層出土。

72は広端部。凸面はヨコ方向にナデ調整。側面調整はc1手法。凸面と側面はやや鈍角をなす。

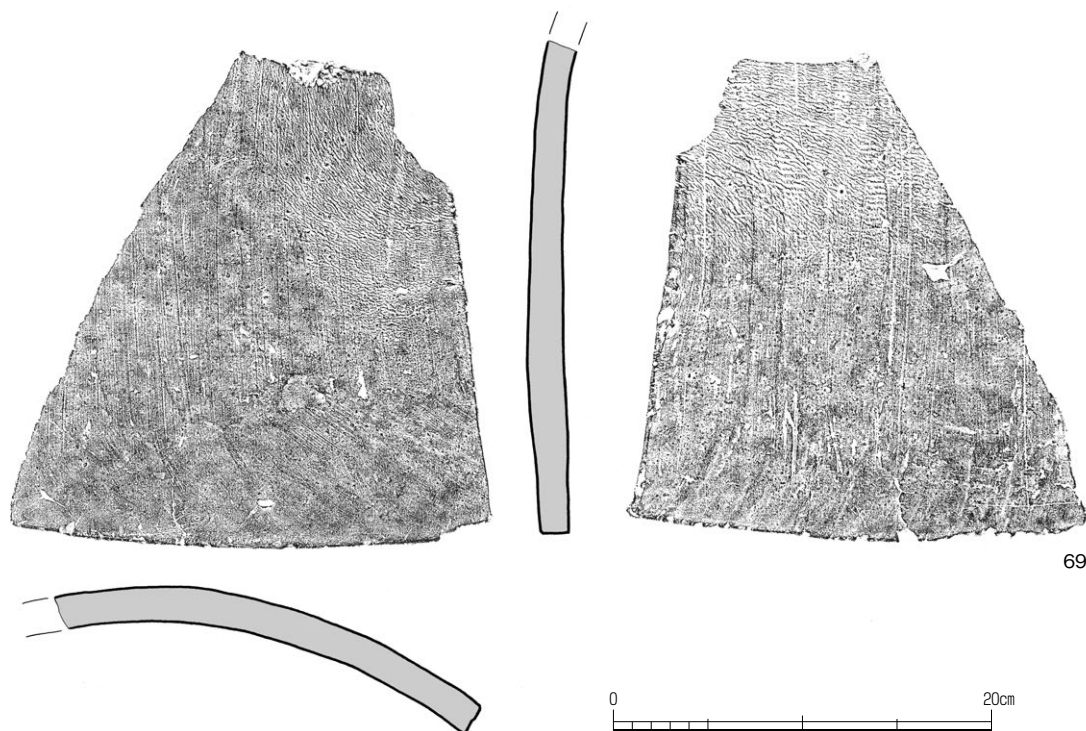


Fig.113 平瓦Ⅱ類(6) SK4325出土 1:4

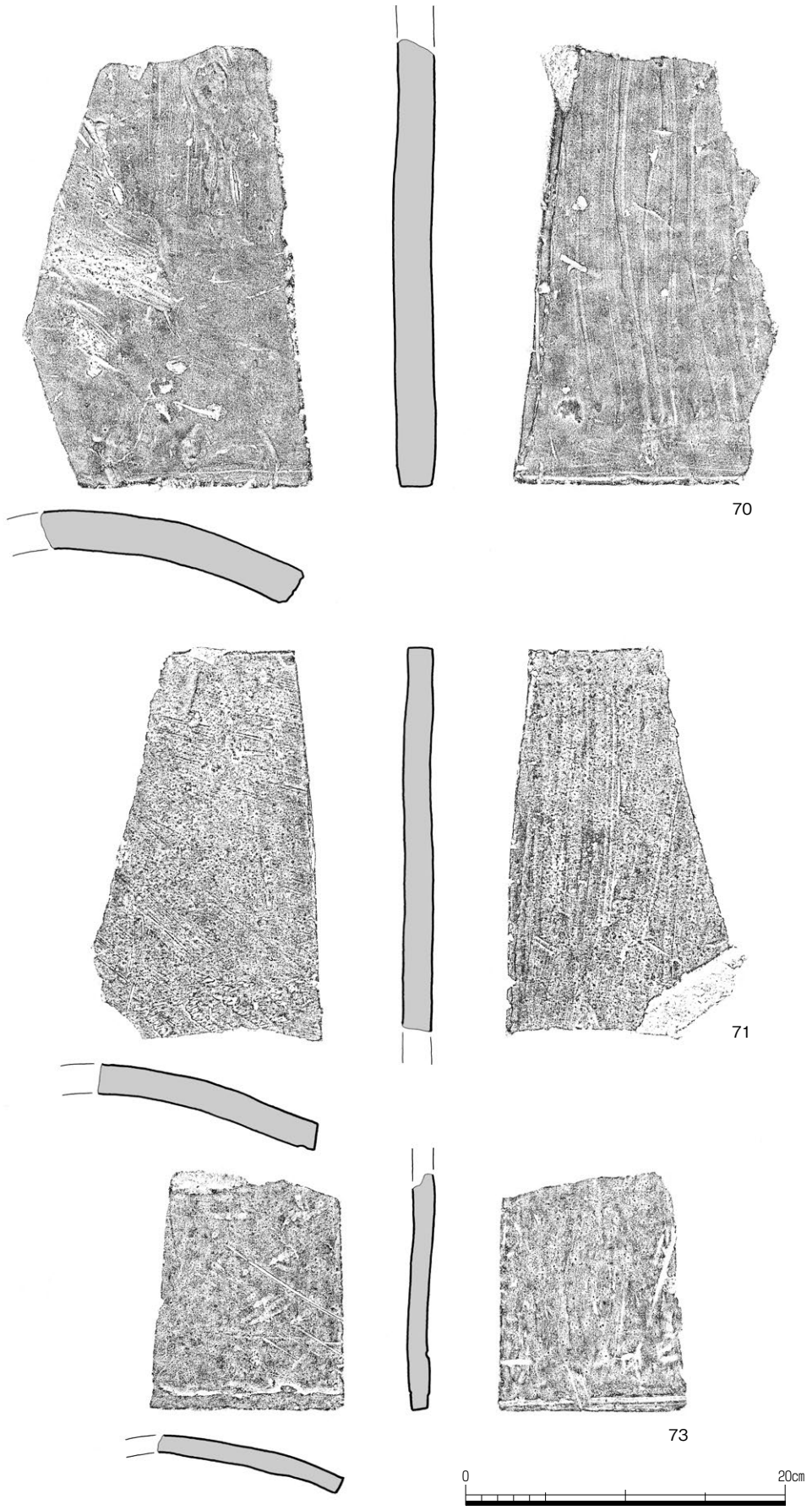


Fig. 114 平瓦Ⅱ類 (7) SD4310出土 1:4

凹面はほぼ未調整で、桶枠板、布目の各痕跡を残す。枠板幅は3.0～3.5cm。色調は灰白色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ2.1cm。NH24地区の中層出土。本調査区で出土した平瓦Ⅱ類で、このような凹面未調整の資料は少ない。

73は広端部。凸面はナデ調整する。厚みを整えるために、端部の粘土をナデつけている。側面調整はc0手法。凹面はナデ調整するが、布目痕跡をわずかに残す。広端部より3cmほど内側の位置に、幅0.2cmの凹線が断続的に走る。桶枠板の綴じ紐痕跡の可能性はある。色調はにぶい黄橙色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.3cm。NH23地区の上層出土。本調査区で出土した平瓦Ⅱ類のなかで、非常に薄手の部類である。

74は木目が目立つ工具によって凸面を調整した資料。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡を残さない。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を少量含む。厚さ2.1cm。NI32地区の中層出土。SD4130では1点のみ出土した。

井戸SE4740出土瓦 2.1～2.5cmの厚みで、凹面調整はナデ、焼成はやや軟質のものが主体的である。側面調整はc0手法、c1手法、c3手法に分かれる。凸面と側面が鈍角をなすものを若干含む。大部分が小片であり、製作の痕跡を確認するのは困難である。残存状況の良い資料がないため、図示しない。

以上、平瓦Ⅱ類について遺構別の特徴を述べたが、凹面調整はナデを施し布目をほぼ消してしまうもの、側面調整はc手法のものが圧倒的多数であると言える。b手法は、わずかにしか存在しない。また、厚みに着目すると、Ⅰ類の正格子、斜格子、平行叩きを施す資料と比較して、粘土素材の厚いものが大多数であると言える。このことから、平瓦Ⅱ類は正格子、斜格子、平行叩き目を磨り消した資料ではなく、縄叩きか、無文叩きが施された平瓦を調整したものである可能性が高い。ただし、縄叩き平瓦は凹面に布目を大部分残し、凸面と側面が鈍角をなすものが目立つため、平瓦Ⅱ類の大部分は無文叩きを調整したものとみるべきであろう。

また、粘土板、粘土紐、一枚作り等の成形方法については、凹面調整が丁寧になされる場合が多いために区別が困難であった。ただ、破面観察によっても、粘土紐であることが明確にわかる資料は非常に少なかった。

桶内巻き作り平瓦 粘土板もしくは粘土紐を桶の内側に巻き付けて成形した後、分割する一群で、いわゆる凸面布目平瓦と称される。

平瓦Ⅲ類 (Fig. 116-75～78, Ph. 69) 調査区全体で36点出土したが、遺構から出土したものはごく少数であり、かつ、飛鳥地域周辺で凸面布目平瓦が盛行する7世紀代の遺構に限るとさらに少ない。いずれも小片であり、全体の大きさが復元できるものはない。残存状況の良い資料を記述、図示する。

75は狭端部。枠板幅は2.6cm前後。凸面は未調整だが、一部布目痕跡がつぶれる。狭端部から8～9cmの位置に、凹線が枠板の起伏に沿って波状に走る。桶の綴じ紐か。側面調整はc3手法。凹面は板状工具でヨコナデ。端部は面取りなし。焼成は硬質で、色調は灰色。胎土に石英、長石を多く含む。厚さ2.2cm。NN24地区の中世井戸SE4790掘方から出土。

76は凸面に丁寧にタテナデを施し、枠板と布目痕跡の大部分を消す。枠板幅は4.6cm前後か。側面調整は面取り幅が大きいc2手法による。凹面は丁寧にヨコナデ。焼成はやや軟質で、色調はにぶい黄橙色。胎土には石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.7～2.3cm。SE4740周辺出土。

77は枳板幅2.8cm前後。凸面は未調整だが、一部布目痕跡がつぶれる。側面調整は面取り幅が大きいc2手法。凹面はヨコナデで、さらに板状工具で斜め方向に軽くナデる。焼成はやや軟質で色調はにぶい黄橙色。胎土には石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.9~2.1cm。SK4734出土。

78は、枳板幅2.7cm前後。凸面は枳板の段差部分をナデ消す。側面調整は、凹面に比べ凸面の面取り幅が大きいc3手法による。凸面に撚り紐痕跡とみられる凹線が縦に走る。凹面はヨコナデ。焼成はやや軟質で、色調はにぶい黄橙色。胎土には石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.6~2.7cm。NO21地区の包含層出土。

79は、枳板幅2.7cm前後。凸面にはヨコナデを施すが、段差と布目痕跡がわずかに残る。側面調整はc3手法。凸面に、撚り紐痕跡とみられる粒列が縦に走る。凹面はヨコナデで調整。焼成は軟質で、色調は橙色。胎土には石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.7cm。NM30地区出土。

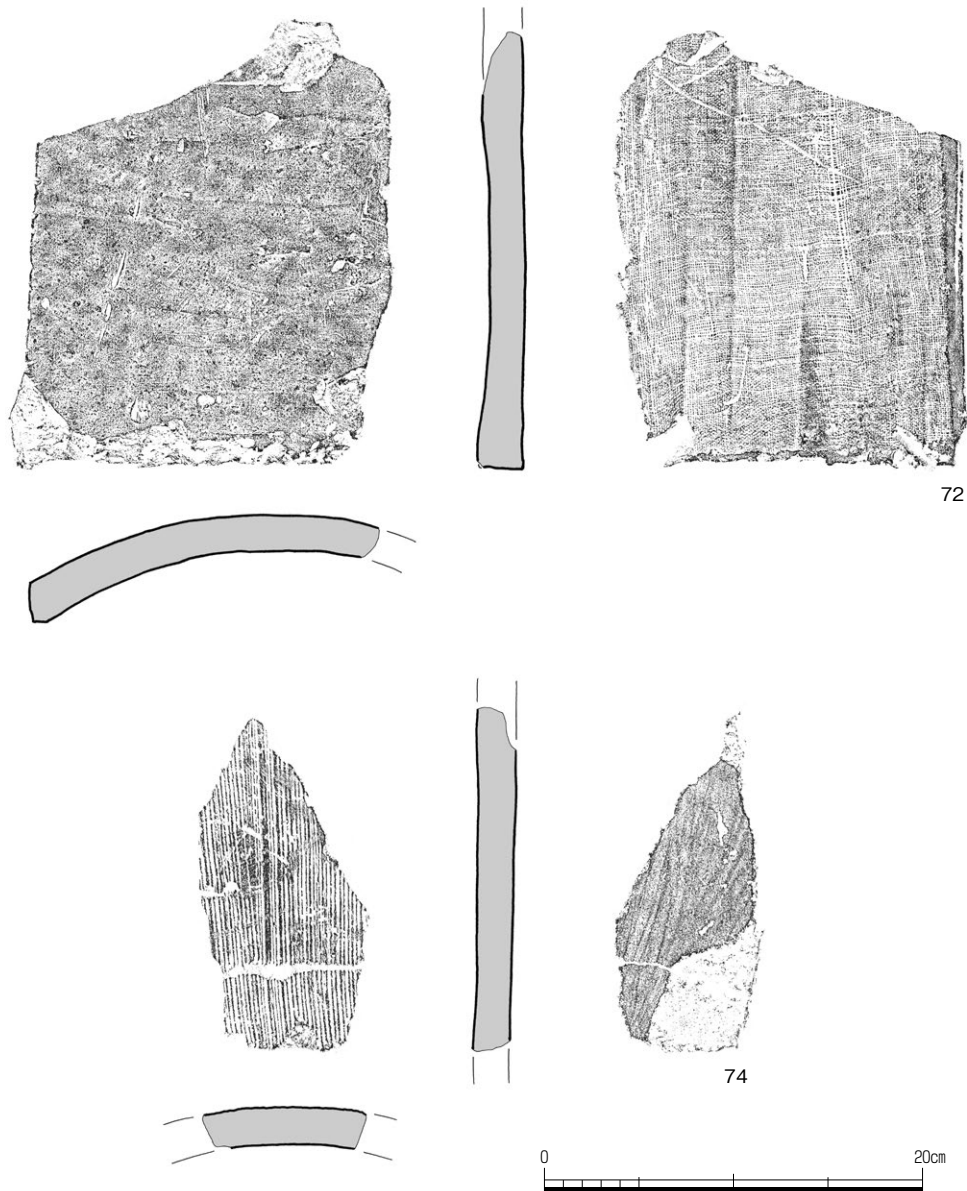


Fig. 115 平瓦Ⅱ類(8) SD4310出土 1:4

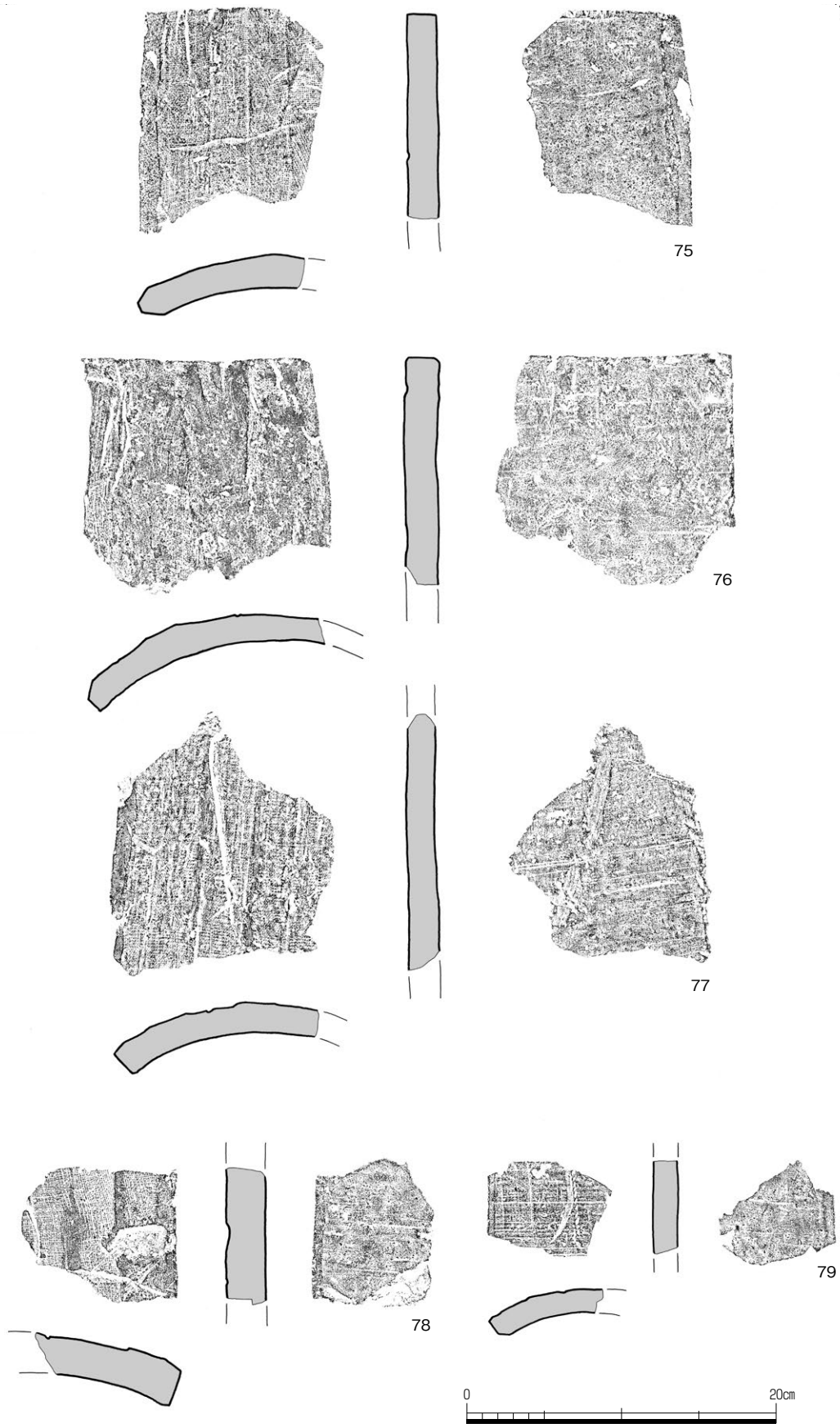


Fig. 116 平瓦Ⅲ類 1:4

今回出土した凸面布目平瓦の大部分は、凸面の桶桹板の段差を残し、未調整か一部をナデ調整、凹面はヨコナデ調整、側面調整はc3手法、桹板幅は2.4～2.8cm前後という特徴をもつ。凸面に、糸切痕跡や縦方向の撚紐痕跡を認める資料もある。色調と焼成は、灰色～暗灰色で硬質のものと、黄橙色～橙色でやや軟質のもの、大きく2種類がある。このような特徴は、小山²² 廃寺の凸面布目平瓦に共通し、なかでも小谷徳彦が「3類」としたものとみられる。小山廃寺の凸面布目平瓦は多様であるなか、本調査区では一定の特徴をもつものに偏って出土したことは興味深い。

ii 中世の遺構出土丸瓦・平瓦

本調査区で、中世の遺構から出土した丸瓦・平瓦は、総重量約500kgである。出土地点は、SD4755等などが所在する調査区の北西部に集中している。調査区他の場所では井戸などから出土したが、量はごくわずかである。

SD4755をはじめとする調査区北西部の溝や土坑では、規格のそろった丸瓦・平瓦が多量に出土した。それらを見ると、法量や調整が非常に似通い、主体となる種類はほぼ一つに限定されるとみてよい。同じ遺構から出土した軒瓦の型式のまとまりを考えると、問題ないであろう。この主体となる種類に加えて、異なる種類のもの、そして混入品として古代の丸瓦・平瓦が若干含まれるというのが、本調査区における中世遺構出土瓦の状況である。

以上のことから、中世の丸瓦・平瓦のパターン抽出は、古代の丸瓦・平瓦に比べて容易であると言える。したがって、古代の丸瓦・平瓦で試みたような「成形方法」や「調整」に基づく分類や、遺構別に属性の傾向をみる作業は行わず、SD4755等で主体をなす種類と、若干数存在するその他の種類について記述、図示する。

a 丸瓦

玉縁式と行基式がある。玉縁式を i 類、行基式を ii 類とする。

丸瓦 i 類 (Fig. 117・118-1～5, Ph. 74) SD4755等出土丸瓦の大多数を占める。

1は完形。筒部凸面は、縦位縄叩きをタテ方向にヘラ状工具でナデ調整する。玉縁部凸面はヨコ方向にナデ調整。筒部凹面は軽くナデ調整するが、糸切り、布目の痕跡を全体的に残す。吊り紐は、大部分が布袋の外側に出る通し縫い。側縁は玉縁部と筒部を一連に2cm前後面取りする。広端部は幅5～6cmほど幅広く面取りし、さらに縁辺を0.2cm削る。玉縁端部も0.5～0.8cm面取り。全長33.2cm、筒部広端幅15.6cm、狭端幅14.8cm、筒部厚2.6cm、玉縁長4.8cm、重量2.29kg。焼成は硬質で、色調は灰色。胎土は石英、長石、雲母をごく少量含む。SD4755出土。

2はほぼ完形。調整は1と同様。筒部凹面には布の綴じ合わせ目痕跡が残る。全長33.7cm、筒部広端幅15.4cm、筒部狭端幅15.2cm、筒部厚2.5～2.8cm、玉縁長5.2cm。焼成は硬質で、色調は灰色。胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を少量含む。SD4755出土。

3は段部から4.0cmの位置に径1.5cmの釘穴がある。凸面から凹面への焼成前穿孔。調整は1と同様。凹面の吊り紐痕跡には結び目が認められる。筒部狭端幅15.3cm、筒部厚2.6～2.8cm、玉縁長4.5cm。焼成はやや軟質でにぶい黄橙色。石英、長石、褐色粒子を含む。SD4755出土。

4は、玉縁部端部から2.9cmの位置に径1.3cmの釘穴がある。凸面から凹面への焼成前穿孔。ま

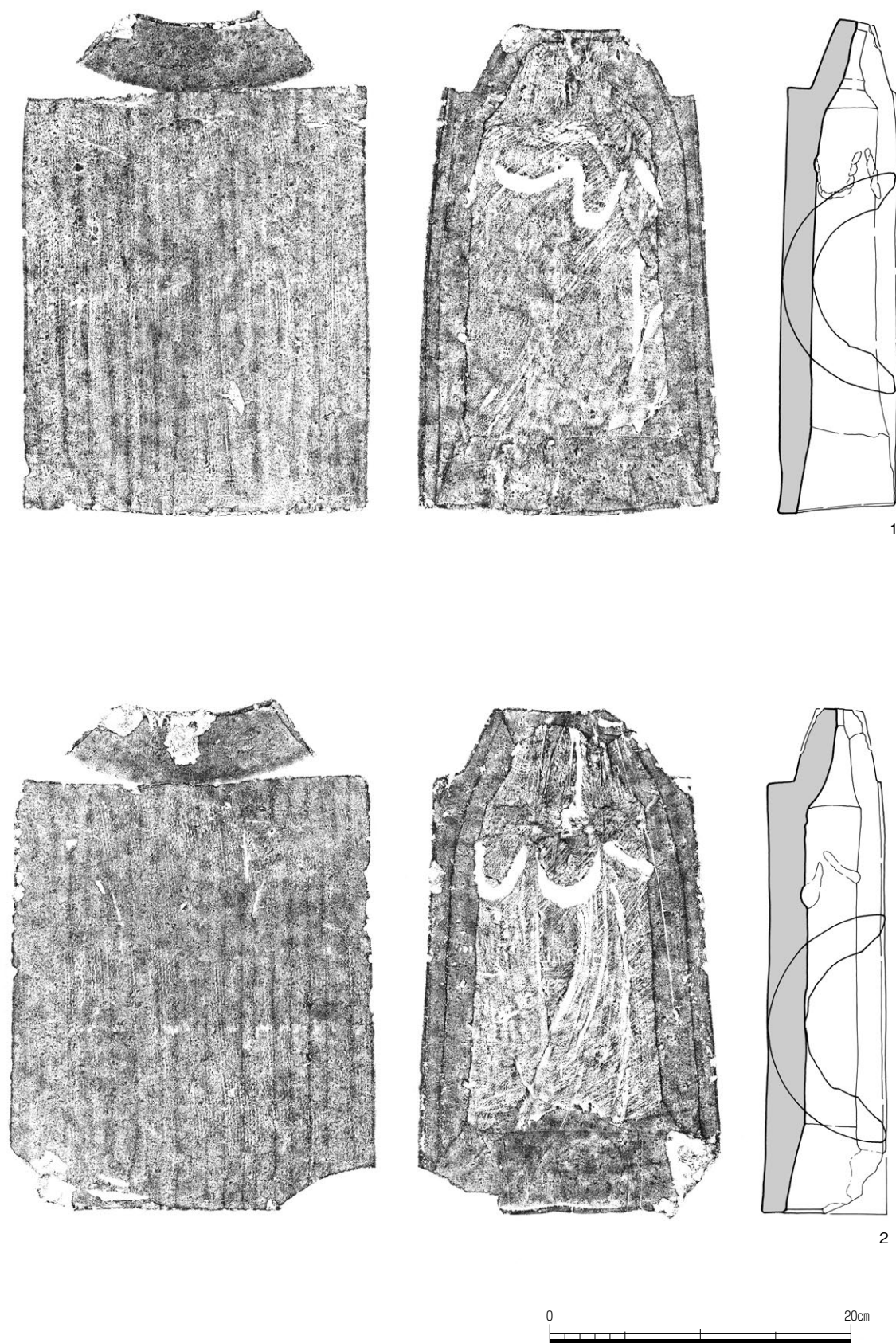


Fig. 117 中世丸瓦 i 類 (1) 1:4

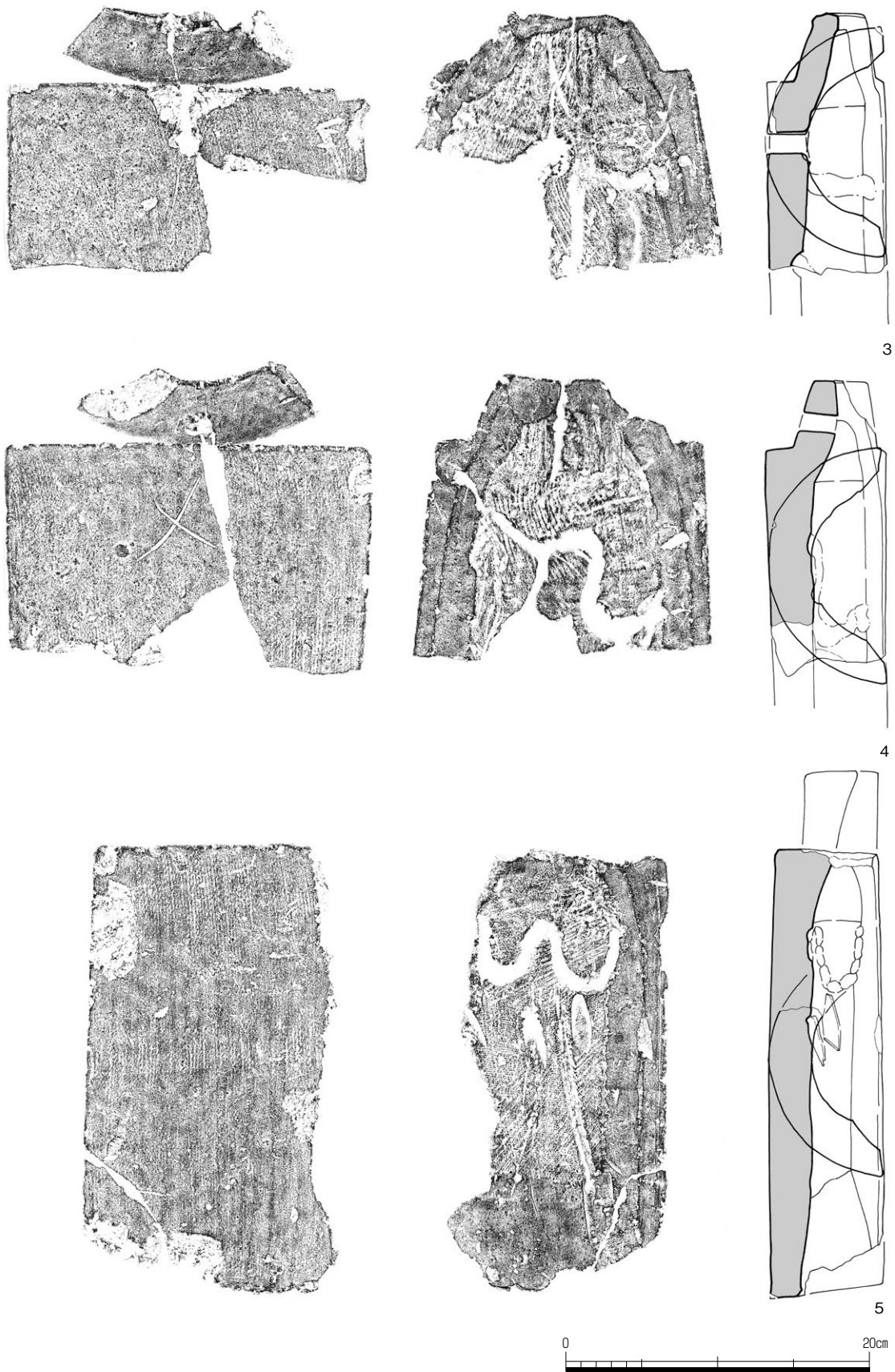


Fig. 118 中世丸瓦 i 類 (2) 1:4

た、筒部凸面に「×」の刻線がみられる。調整は1とほぼ同様だが、玉縁部凹面端部の面取りが2.0~3.0cmと幅広い。筒部凹面の吊り紐痕跡には側縁寄りに結び目が認められる。筒部狭端幅15.8cm、筒部厚2.6~2.9cm、玉縁長4.5cm。焼成はやや硬質で、色調は灰褐色。胎土は石英、長石、雲母、褐色粒子を含み、石英、長石が多い。SD4755出土。

5は筒部凹面に楕円形の圧痕を3箇所に残す。圧痕は玉縁側が狭く、深い。深い方が広端側を向く資料も他に存在する。機能は不明。焼成はやや軟質で、筒部厚2.5~2.7cm。色調はにぶい橙色。胎土は石英、長石、雲母、褐色粒子を含む。SD4745出土。

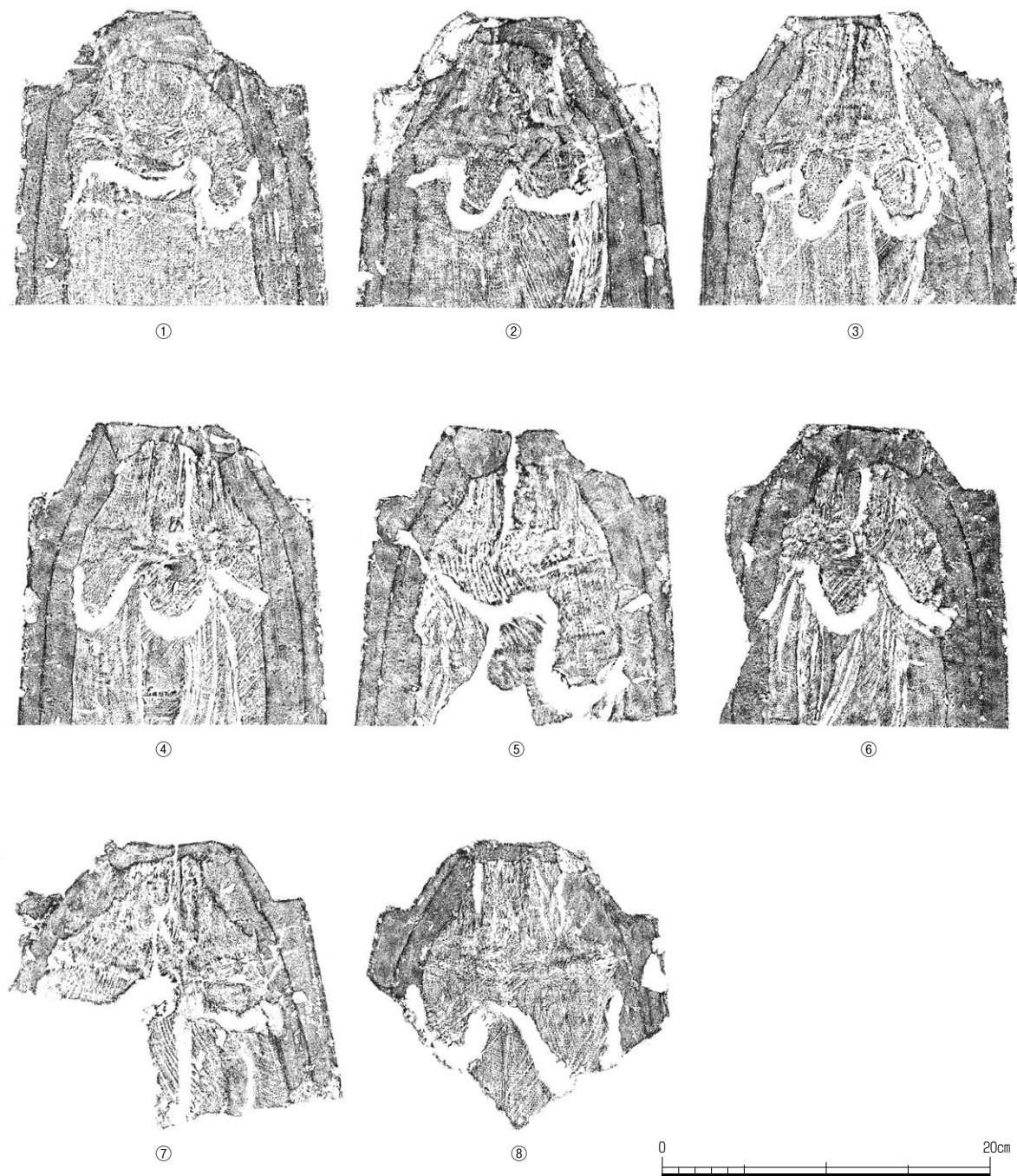


Fig. 119 中世丸瓦 i 類凹面の吊り紐パターン 1:4

i 類丸瓦にみられる吊り紐痕跡のうち、残存状況の良好なものを分類すると、8パターンに分類することができる (Fig. 119)。丸瓦は粘土円筒を二分割して製作することから、少なくとも4種類の布袋が存在することになる²³。また、吊り紐の結び目が筒部の側縁付近にくるか、どこにも現れないものが多いことから、結び目が分割突起の役割を果たし、分割の際の目安になっていた可能性が高い。

丸瓦 ii 類 (Fig. 120・121-6~8, Ph. 74) SD4755・4744、SK5015で少数出土した。

6は、凸面をタテ方向にヘラナデ調整し、狭端付近はさらにヨコ方向にナデ調整。凹面は一部ナデ調整するが、吊り紐、糸切り、布目の各痕跡を残す。吊り紐は通し縫い。側縁は幅1.5cmほど面取りする。その後、狭端部を幅2.5~3.0cmほど面取り。復元幅15.3cm、狭端部幅9.3cm、厚さ2.0~2.4cm。焼成はやや硬質で、色調は黄灰色。胎土には石英、長石、褐色粒子を含む。SD4755出土。

7の調整は、6と同様である。凸面に、長さ3~5cm前後の刻線が平行して斜めに7条走る。また、凸面側縁を幅0.3cm面取りする。復元幅15.0cm、狭端幅8.7cm。厚さ2.1~2.3cm。焼成はやや硬質で、色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土には、石英、長石、褐色粒子を含む。SD4755出土。

8の調整は6と同様。復元幅14.0cm、厚さ2.2cm。焼成は硬質で、色調は灰色。胎土には石英、長石、褐色粒子を含む。SD4755出土。

ii 類は i 類に比べて出土数が非常に少ないが、吊り紐痕跡のパターンがいずれも i 類にみられた8パターンに含まれる。6の吊り紐パターンはFig. 119の④であり、7・8は吊り紐の残存状況が良くないが、それぞれFig. 119の⑥、③の可能性もある。また、i・ii 類ともに筒部幅や復元幅、狭端にかけての屈曲の度合いが近似する。このことから、丸瓦の構造が異なっても同一の布袋、ひいては同一の型で製作していた可能性が高い。

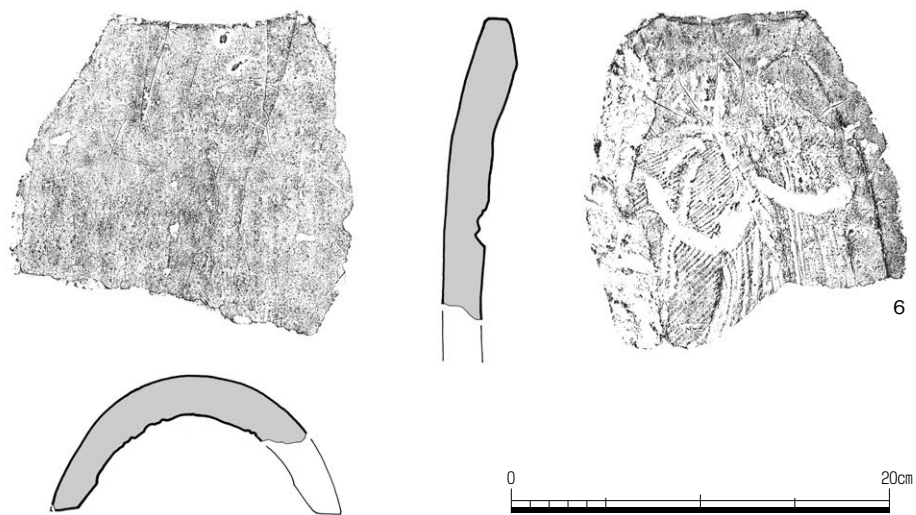


Fig. 120 中世丸瓦 ii 類 (1) 1:4

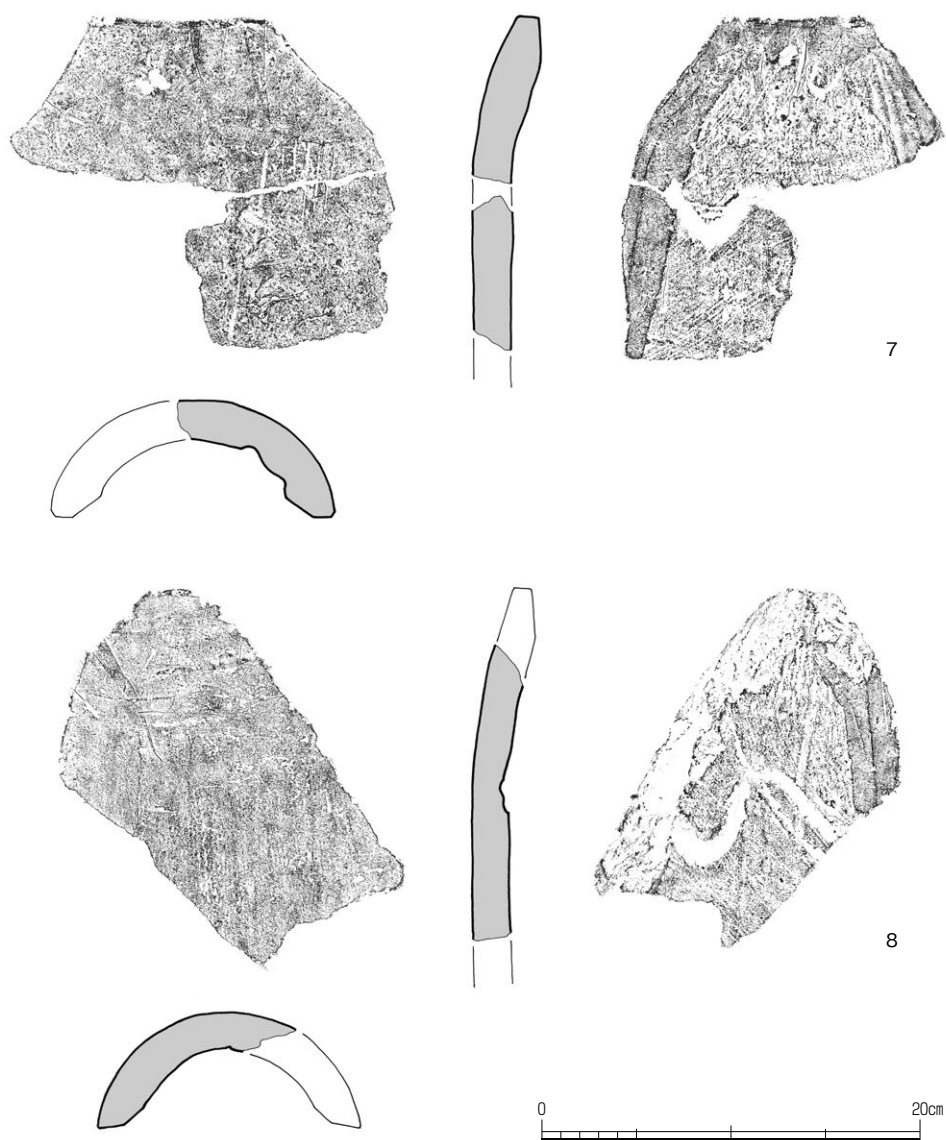


Fig. 121 中世丸瓦 ii 類 (2) 1:4

b 平瓦

凸面を丁寧にナデ調整するものを i 類、叩き目を明瞭に残すものを ii 類とする。

平瓦 i 類 (Fig. 122~124-1~3, Ph. 75) SD4755等から出土した平瓦の大多数を占める。

1は、凹面を丁寧にナデ調整し、糸切り痕跡を広端部の一部にしか残さない。狭端縁は幅1cmほど面取りし、側縁は角を丸く仕上げる。凸面もナデ調整するが、広端部付近の糸切り痕跡が大部分残る。凸面側の側縁に面取りはない。凹面に比べ、凸面の表面がざらつき、砂粒が目立つことから、凸面に離れ砂がまかれた可能性がある。全長31.4cm、狭端幅23.0cm、広端幅24.3cm、厚さ2.0~2.2cm。焼成はやや硬質で、色調は灰白色。胎土には石英、長石、雲母、褐色粒子を含む。SK5015出土。

2は1とほぼ同一法量だが、凹面側の四周に面取りを施す。調整も1と同様。焼成はやや硬質で、黄灰色を呈する。胎土には石英、長石、雲母、黒色・褐色粒子を含む。SK5015出土。

3は狭端部から5.2cmの位置に径1.1cmの釘穴を設ける。凹面から凸面への、焼成前穿孔である。凹面はナデ調整するが、布目痕跡が完全には消されていない。狭端縁と側縁には、面取りがない。凸面はナデ調整するが、狭端付近には糸切り痕跡を残す。また、側縁にわずかにバリ状の突出がみられるのは、凹型台を用いたためか。焼成はやや硬質で、色調は灰黄色。胎土には石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。SK5015出土。

平瓦 i 類は、上記の資料のように灰色でやや硬質のものと、橙色で焼成がやや軟質のものに

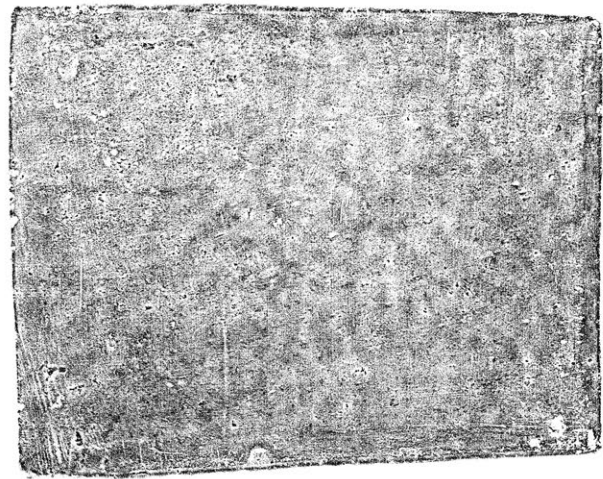
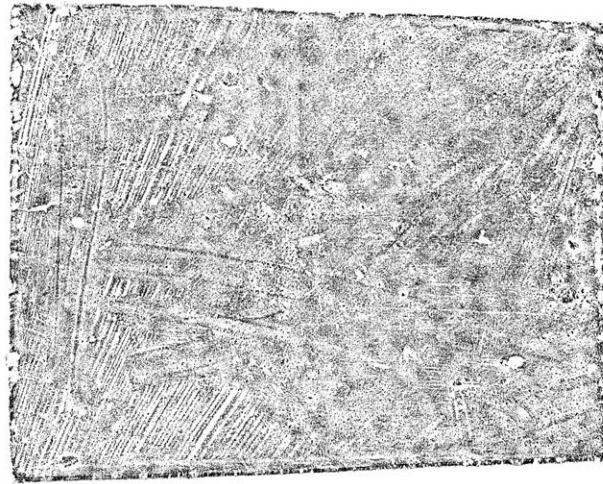


Fig. 122 中世平瓦 i 類 (1) 1:4

大別することができる。後者は、残存状況の良好な資料が少ない。

平瓦 ii 類 (Fig. 124-4・5, Ph. 75) 「*」文様と直線を組み合わせた叩き目をもつもの。SE4790とその付近の包含層でのみ少数出土した。

4は狭端部。凹面はナデ調整し、狭端縁を1cmほど面取りする。凸面の叩き目が一部つぶれ、側縁にバリ状の突出がみられるのは凹型台を用いたためか。凹凸面の表面には砂粒が目立ち、離れ砂の可能性はある。厚さ1.9~2.1cm。焼成はやや硬質で、色調は灰色。胎土には石英、長石、

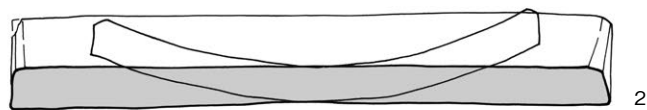
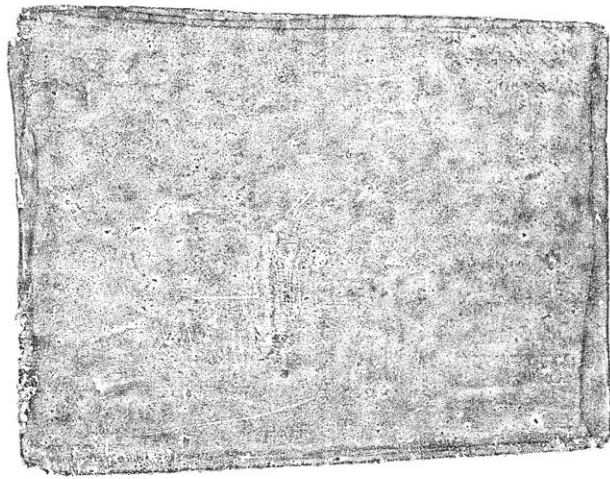
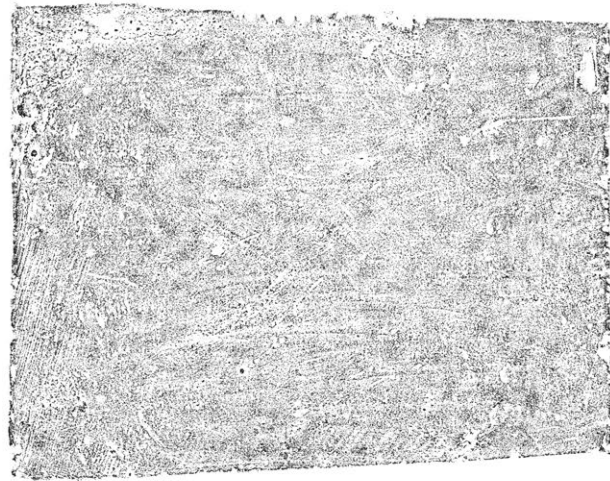


Fig. 123 中世平瓦 i 類 (2) 1:4

雲母、黒色粒子を含む。

5は二次的に被熱したとみられる、煤が付着した資料。狭端部分であり、4と同様の調整が施されている。ただし、凹面狭端縁の面取りはない。厚さ1.9~2.1cm。色調は灰色を呈し、胎土には石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ2.4cm。焼成、色調、胎土ともに4と同様である。

以上が、本調査区で検出した中世の遺構から出土した丸瓦・平瓦の概要である。出土量や出土した遺構、およびその特徴から考えると、丸瓦 i・ii 類、平瓦 i 類が軒丸瓦 8A 型式・軒平瓦 8 型式と、平瓦 ii 類が軒平瓦 7 型式と一緒に用いられたとみてよいだろう。SE4790 における丸瓦の出土量のごくわずかであるため、平瓦 ii 類とセットになる丸瓦の存否は明らかにし得なかった。

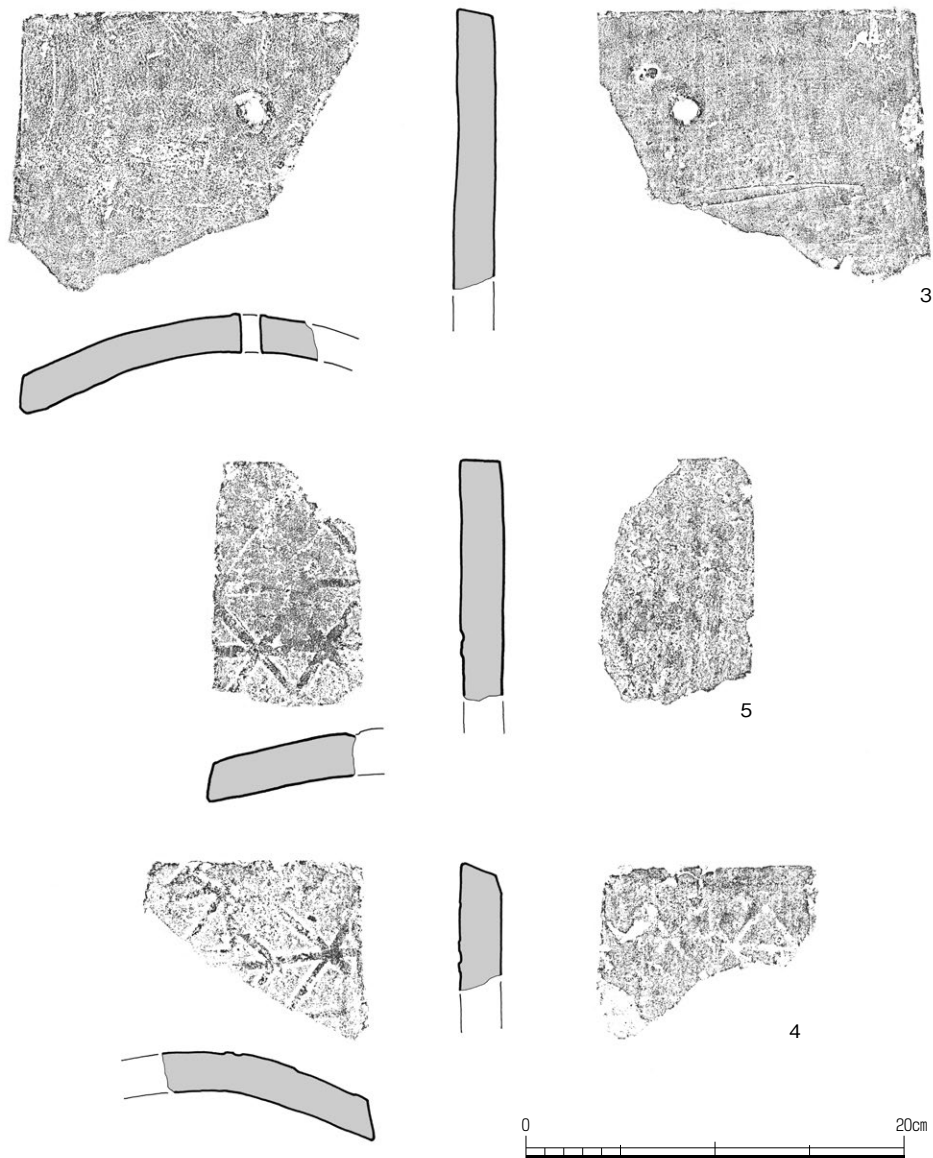


Fig. 124 中世平瓦 i 類 (3)・ii 類 1:4

D 埴 仏

方形三尊埴仏の破片9点が出土した。出土地点を調査区全体からみると、北西部にまとまる傾向がある。出土した方形三尊埴仏にはA・B²⁴の2種がある。

方形三尊埴仏A (Pl.13-1) 長方形の区画内に、宣字座に倚坐し定印を結ぶ如来形を中心に置き、両脇侍に合掌する菩薩立像を配する三尊形式の埴仏である。主尊は袈裟を偏袒右肩として二重円光の頭光をもち、背には後屏を表す。脇侍の頭光はともに一重円光。三尊ともに茎のある単弁の蓮華座に乗るが、蓮華座の蓮肉部に蓮子の表現はない。主尊の上方には宝珠を戴く天蓋が懸けられ、その左右に飛天を配す（以下、左右は主尊を基準にする。）。右の飛天は両手を左右に伸ばし、左の飛天は右側の手を胸元に、左側の手に華籠を持ち上方に掲げる。主尊後部の両側には菩提樹を表現する。大きさは完形品で縦21~24cm、横16~19cm。奈良県橘寺、同川原寺、同坂田寺等に出土例がある。

1は、主尊右側足部、左側かかと、衣文、蓮華座、および宣字座の一部であり、下端側面の一部を残す。図像の表出は明瞭である。埴面に白色、および赤色を呈する付着物が認められ、蛍光X線分析の結果、白色の付着物からは鉛が、赤色の付着物からは水銀が検出された。裏面の観察から粘土を上端側より詰め、下端部側からナデつけることにより、平滑にしたことがわかり、一部に浅い木理条痕をとどめる。胎土は精良、焼成は堅緻、明褐色を呈する。縦残存長8.8cm、横残存長5.8cm。埴面の厚さ1.8cm。NP22地区の包含層出土。

方形三尊埴仏B (Pl.12・13-2~5) Aと同様、長方形の区画内に、宣字座に倚坐し定印を結ぶ如来形を中心に置き、両脇侍に合掌する菩薩を配する三尊形式の埴仏である。主尊は袈裟を偏袒右肩とし、茎のない単弁の蓮華座に乗る。光背は、2条の縦線と珠文からなる車輻文の円光の周囲に、中心に珠文をもつ12個のC字形を巡らす頭光と、火焰を表現した身光からなる。各C字形の間にはさらに栓形花を配す。左右の菩薩は同形で、茎の付く複弁の蓮華座に立ち、頭光は一重円光である。腰部分の裳とX字形の瓔珞は繊細に表現され、左右両脇には肩から天衣が下がる。天衣の裾が左右の縁上にかかることが特徴である。三尊ともに蓮華座の蓮肉部に蓮子を表現する。主尊の上方には宝珠を戴く天蓋がかかり、その左右に飛天を配す。右の飛天は両手を上方に折り曲げ、左の飛天は右側の手を胸元に、左側の手に華籠を持ち上方に掲げる。左右の飛天より下方に向かって2組の飛雲文を置く。主尊後部両側の菩提樹は、5葉を上方で展開する。三重県夏見廃寺²⁵、奈良県駒形廃寺²⁶、同二光寺廃寺²⁷、同藤原宮西南部外周帯²⁸ (Fig.125) 等に類例がある。夏見廃寺例の復元で、縦21.3cm、横14.0cmとなる。

出土した8点の破片のうち4点(2)と2点(5)が接合し、残存部位、焼成、色調などから、2・3・5と4に分かれ、2と5は主尊蓮華座の右端蓮弁が共通することから別個体であり、最低3個体、多くて4個体があるものとみられる。



Fig. 125 藤原宮出土方形三尊埴仏B
(縦残存長:13.8cm)

2は左下隅の破片である。4点(a～d)が接合した。左脇侍の頭光、足部、天衣、主尊の身光、腕、衣文、宣字座、蓮華座、および右脇侍の蓮華座に一部かかる。宣字座の左下隅の外側に釘穴があり、0.2cm角の銅釘の脚が遺存している。銅釘は表面側が尖端状になる。埴面に白色の付着物が残る。白色の付着物の表層には、褐色の付着物が遺存する箇所がある。また、釘孔の周囲で金箔が確認された。蛍光X線分析の結果、白色の付着物はケイ素・アルミニウムを主成分とする白土であること、褐色の付着物は赤外分光(FT-IR)分析の結果、漆を主成分とすることが判明した。また、赤褐色の付着物をとどめる箇所があり、蛍光X線分析の結果、鉄系赤色顔料であることが確認された。裏面は、布圧痕をとどめる押圧の後、その窪みに補充のための粘土を薄く重ね、さらに板状工具によるナデを行い平滑に仕上げる²⁹。部分的に褐色の付着物(漆)が認められる。側面は長軸方向にほぼ平行する浅い木理条痕を残し、平滑に仕上げる。表面は灰黒色、内部は暗灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。縦残存長12.8cm、横残存長13.1cm。厚さは、周縁部で1.6cmを測り、四周に幅3.5mm、埴面から高さ約2mmの縁部が巡る。a・b・cはNL34地区の井戸SE5023、dはNP32地区包含層からの出土。

3は主尊頭光右部の破片で、菩提樹の枝と葉、頭光の一部が残る。右下から5つ目のC字形の位置にあたる。埴面にわずかに白色の付着物が残る。裏面は剥離している。縦残存長4.5cm、横残存長3.9cm、残存厚1.3cm。胎土、焼成、色調は2と類似する。HM24地区の溝状土坑SK4510からの出土。

4は左脇侍の胸部分の破片である。合掌する手と胸飾り、頭光の下端、および主尊の左辺身光の一部が残る。裏面は大きく剥離するが、範詰め³⁰の状況を表している可能性がある。橙褐色を呈し、焼成は堅緻。二次的な加熱を受けた可能性がある。縦残存長3.8cm、横残存長4.5cm。外縁部の厚さ1.5cm。外縁の幅約0.3cm、埴面からの立ち上がりは約0.2cm。NM30地区の中世大溝SD4755からの出土。

5は右下隅の破片である。2点(e・f)が接合した。主尊の右側足先と蓮華座、右脇侍の両足、左側の天衣、蓮華座が残る。蓮華座の蓮肉部には、沈線により周環を表現した蓮子が配される³⁰。宣字座左下隅の外側に約2.5mm角の釘穴を開ける。埴面にわずかに白色の付着物(白土)と褐色の付着物(漆)が残る。裏面と側縁には、長軸方向の木理条痕が残る。残存長6.4cm、横残存長7.0cm。胎土、焼成、色調は2と類似する。2点ともNP33地区包含層からの出土。

これら方形三尊埴仏Bについて縦幅は不明であるが、横幅は2と5の組み合わせにより約13.7cmとなる。

なお、これら埴仏については、胎土や付着物に関して自然化学分析を行った。その結果、焼成後に白色下地を行い漆塗布の後金箔をおく、あるいは赤色顔料による彩色を行っていたことが判明した。飛鳥時代の埴仏において、こうした彩色や色の使い分けが行われていたことは、橘寺出土埴仏の分析から指摘されていたが、新たな類例を加えたこと³¹になる。また、方形三尊埴仏Aでは、鉛系白色顔料と水銀朱、方形三尊埴仏Bでは、白土と鉄系赤色顔料というように、型式によって白色下地および赤色顔料の組み合わせが異なることも判明した。詳細な結果については、第V章4を参照されたい。

- 1) 『吉備池廃寺発掘調査報告』では本調査区出土軒丸瓦 I Aが11点、軒丸瓦 I Bが14点、種別不明が6点としたが、今回改めて数え直したため、数値が異なっている。
- 2) 大阪府泉南市海会寺で確認されている同範瓦にも、側面に範端痕跡が確認されている。泉南市教育委員会1987『海会寺—海会寺遺跡発掘調査報告書—』。
- 3) 大脇潔1991「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈文研学報第49冊。以下、側面調整の分類はこの書による。
- 4) 近江俊秀1999a『7世紀後半の瓦づくり—藤原宮跡とその周辺寺院出土の軒瓦を中心として—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別陳列図録第1冊。近江俊秀1999b「7世紀後半の造瓦の一形態—明日香村小山廃寺を中心として—」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集。
- 5) 長林寺白鳳時代の軒丸瓦は、報告書（河合町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所1990『長林寺』河合町文化財調査報告第3集）においてAとBの2型式が設定されていたが、その後大西貴夫によってそれらは同範彫り直しであり、同一型式と訂正され（大西貴夫2009「平隆寺と長林寺の法隆寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅳ』奈文研）、彫り直しの前後で4a、4bと設定している。大西は以下に述べる10も4b同範と書いているが、あらためて河合町所蔵長林寺出土4bと照合したところ、花卉の子葉が4bよりも長く、深く彫られ、本来は面違いである鋸歯文は線刻で表現され、また、外区鋸歯文帯の幅が4bよりも狭く、外縁はより幅広であることが判明した。したがって10は4bの彫り直しとみられる。瓦範以外の点でも、長林寺4bに比べて瓦当が非常に厚く、胎土が精良で、焼成が堅緻であるという大きな違いがある。同様に4b型式同範とされてきた藤原宮内裏出土資料（奈文研2000「内裏地区の調査—第100次」『年報2000-Ⅱ』）も10と同様の特徴をもつ。
- 6) 奈文研1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』。藤原宮所用、大宮大寺所用軒瓦の型式については以下出典同じ。
- 7) 最初の段階からすでに範傷があるため、他の地で用いられていた瓦範が移動してきた可能性がある。
- 8) 外縁上面端よりも0.6cmほど内側に入っている。同型式別個体にも、同様の凸線が確認できるものがあるが、外縁端からの距離は0.2~0.5cmと一定ではない。B型範の痕跡の可能性があるが、同一個体の外縁幅に広狭があることから、瓦当部範径が実際の瓦当径よりも若干小さいのであろう。丸瓦取り付け位置から考えて、範枠は長方形と考えられる。
- 9) 取り付け位置を確認できる資料14点中、20と同位置のものが8点、180°ずれるものが6点である。範傷との対応はみられない。
- 10) 山崎信二は、中世丸瓦の諸属性のうち、吊り紐の変遷が最も編年に有効であるとする（山崎信二2000『中世瓦の研究』奈文研学報第59冊）。山崎の編年を参考にすると、本型式のように、吊り紐の比率（布に隠れた部分1に対する、布に隠れない縄目の鮮明に見える部分の比率）が1：6~7と大きいものは、14世紀中葉以降に位置づけることができる。さらに山崎は、吊り紐が完全に外に出る「外側のとじつけ」スタイルは1370年頃に出現すると考えており、その説に従えば、本型式のような「布袋の内外に通し縫い」のものは、それ以前に絞り込むことができるだろう。ただし、山崎の編年はあくまでも大和北部の瓦を中心に提示されたものであるため、完全に敷衍できるとは言いきれない。
- 11) 『吉備池廃寺発掘調査報告』では本調査区出土軒平瓦 I Aを25点、軒平瓦 I Bを4点、種別不明を3点としたが、今回改めて数え直したため、数値が異なっている。
- 12) 奈良県立橿原考古学研究所所蔵小山廃寺出土資料と照合させていただき、判断した。以下で述べる軒平瓦2J型式についても同様である。
- 13) 平田政彦2009「斑鳩とその周辺の法隆寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅳ』奈文研。
- 14) 佐川正敏によると、「瓦当貼り付け技法」軒平瓦は、1250年前後に各地で採用され、1280年頃までには九州以外の各地に普及する（佐川正敏1995「鎌倉時代の軒平瓦の編年研究」『文化財論叢Ⅱ』奈文研）。そして、室町後期（1495~1548）には再び顎貼り付け技法になるという（佐川口頭発表による。山崎信二『中世瓦の研究』p9に記載。）。また、山崎信二によると、顎後縁の面取りは南北朝期以降、瓦当下縁の面取りは1390年以降に出現するという（山崎前掲註10文献）。
- 15) 後述する丸瓦・平瓦についても、確実に奈良~平安期に位置づけられる資料（たとえば一枚作り平瓦など）はほとんどみられなかった。見落としがあったとしても、全体の中での割合が非常に低いことは確かである。また、熨斗棟の可能性も低い。
- 16) 中世の遺構から古代のものとみられる行基丸瓦が1点出土したが、古代の遺構からは出土しな

- かった。
- 17) Aは正格子叩き目とする。後述する平瓦では確認できたが、丸瓦では未確認である。
 - 18) 叩き目の分類は本来、叩き板の分類を目指して行うべきであるが、本調査区出土資料は大部分が破片資料であるため、叩き板の抽出は難しく、瓦片内の限られた範囲に認められる叩き目の分類をすることができない。刻線の太さ、間隔、木目、交差角度によって極力同様の叩き目を省くよう努めたが、別分類とした叩き目同士が、実は同じ叩き板による可能性も完全には否定できない。
 - 19) 刻線の間隔は、刻線の心々間で計測した。凹部幅だと、同一の刻線でもつぶれ具合によって大きく変わることによる。
 - 20) 先述の通り、叩き板の種類によって粘土の厚みに異なる傾向が認められるため、重量での比較はより有意でないと考ええる。
 - 21) たとえば、吉備池廃寺の創建期平瓦は、厚みに基づいて厚さ2cm以上の「平瓦1類」と2cm未満の「平瓦2類」に分類している。後者のうち、凸面を丁寧になで調整する「平瓦2類A」は、側面調整、胎土、焼成に一定の傾向を見出したが、一方で厚さ2cm以上とした1類のそれはまとまりに欠け、厚み以上の共通性を見出すのは難しい。本調査区で出土する厚さ2cm以上の平瓦のすべてが、吉備池廃寺所用とは言い切れないだろう。
 - 22) 小谷徳彦2004「飛鳥における凸面布目平瓦の一事例」『奈文研紀要2004』。
 - 23) パターンの組み合わせを見出し、一枚の布袋を復元するまでには至らなかった。後述の通り丸瓦を半截する場所がほぼ一定で、吊り紐の連続性の把握が難しかったためである。
 - 24) 方形三尊磚仏のA・Bは、大脇潔による（大脇潔1990「磚仏とその製作年代」『特別展 磚仏一土と火から生まれた仏たち一』倉吉博物館）。大脇は磚仏の型式を、板状部分の形、仏像の数などによって区分したうえで、同じ原型から作られた代表的な作品についてのみ、アルファベットをつけて区別するとし、橋寺出土例および川原寺裏山遺跡出土例を「方形三尊磚仏A」、三重県夏見廃寺からまとまって出土したものを、「方形三尊磚仏B」とした。なお、このA・Bの対応に関して、大脇（1986）（大脇潔1986「磚仏と押出仏の同原型資料—夏見廃寺の磚仏を中心として—」『MUSEUM』No. 418 東京国立博物館）を典拠とする文章がある（清水昭博1994「磚仏製作の様相—画像分析を中心とした方形三尊磚仏Aの成立についての検討—」『檀原考古学研究所論集 第十二』吉川弘文館。花谷浩2006「川原寺の調査—第133-2次出土瓦磚類」『奈文研紀要2006』）。しかし、大脇（1986）では、同原型資料と考えられる磚仏と押出仏の群別を行い、B群として方形三尊磚仏Bに言及するが、A群は阿弥陀五尊像を中心に置く図像の一群であり、方形三尊磚仏Aについてはふれていない。
 - 25) 名張市教育委員会1988『夏見廃寺』。
 - 26) 菟田野町教育委員会・奈良県教育委員会・関西大学文学部1971『奈良県宇陀郡菟田野町 駒帰廃寺（伝安楽寺跡）発掘調査概要』菟田野町。奈良県立檀原考古学研究所附属博物館2002特別陳列『白鳳のイメージ—奈良県出土磚仏展一』。
 - 27) 奈良県立檀原考古学研究所2006「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報2005年（第二分冊）』。
 - 28) 奈文研1993「宮外周帯の調査（第69-9次）」『藤原概報23』。
 - 29) 同様の手法が、夏見廃寺出土例においても観察されている（中東洋行2012「磚仏にみる調整痕の違いについて—夏見廃寺出土磚仏を例に一」『関西大学博物館紀第18号』関西大学博物館）。
 - 30) これに対し、夏見廃寺・二光寺廃寺例では膨らみをもつ突出した蓮子をもつ。本例と夏見廃寺例の蓮子の表現に相違のあることについては、真田廣幸の指摘がある（倉吉博物館1992『特別展 磚仏一土と火から生まれた仏たち一』）。
 - 31) 清水前掲註24文献。今津節生1999「磚仏の科学的調査」『橋寺』奈良県文化財調査報告書第80集、奈良県立檀原考古学研究所。

2 土器・土製品

調査区全域から、縄文時代から近世に至るまでの土器・土製品が出土した。土器・土製品は第45・46・47・50・53次調査分で整理用木箱374箱、第133-7・13次調査を含めて397箱分ある。7・8世紀の土師器と須恵器が大半を占め、次いで中世の土師器、瓦器や、古墳時代の土器がある。縄文時代および弥生時代の土器も出土しているが、量的には少ない。土器の大半は東西大溝SD4130と、それに南接する井戸SE4740から出土した。また、SK4325・SE4335・SK4327からもまとまった量の土器が出土した。他の溝や井戸、土坑、柱穴からも出土しているが、量的には少ない。ここでは7・8世紀の土器を中心に報告し、次いで他の時代の遺構出土土器と特殊土器・土製品について報告する。

土器の分類と編年 土器の器種名称は基本的に既刊の奈文研刊行物に従うが、7世紀の土器に関してはこれまでの分類を整理し、別表2・3として呈示する。土師器杯Gについては、杯Ga、Gb、Gcに細分している¹。なお、同一器種でも法量差がある場合は、大きい方からI～Vの記号を付けて区別している。当該期の土器の大別と年代に関しては『藤原宮報告Ⅱ』において既に枠組みが示されているが、その後の新資料も含め、別表4にまとめた。奈良時代土器の器種に関しては『平城宮報告XⅥ』、群別は『平城宮報告XⅢ』に従う。

調整手法の分類 土師器食器類の調整は、その種類と施す範囲により記号化している (Tab. 3)。c手法のなかで、e手法によって調整した後、外面全体をヘラケズリするが、口縁端部にはヘラケズリが及ばないものをe-c手法として区別している。また、外面のヘラミガキ調整は、その範囲によりTab. 3のように記号化している。以上を組み合わせ、a0手法やc3手法というように調整手法を表記する。

また、内面の暗文については、口縁部に二段放射暗文や一段放射暗文、あるいは一段放射暗文および連弧暗文があり、底部内面には螺旋暗文を施す。放射暗文には、右上がりや左上がりがある。口縁部の連弧暗文については、各円弧間に小円を描く連弧暗文Aと、円弧が連続する連弧暗文Bに細分し、連弧の向きは口縁部に対して凸となる上向きの連弧暗文、底部に対して凸となる下向きの連弧暗文として表記する。

計測の基準 土器の口径や高さ、径高指数については、口縁部が六分の一以上残存する個体に限って表示した。かえりのある杯蓋の口径の計測点については、Fig. 126のbとした。文中の径高指数の数値は(器高÷口径)×100とし、小数点二位以下は四捨五入した。杯Bなどの径高指数は、高台を除いて計測した。

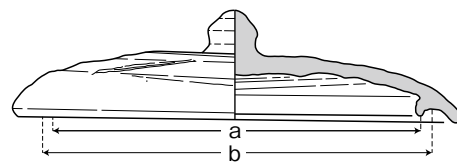


Fig. 126 須恵器杯B蓋・杯G蓋の計測点

Tab. 3 土師器の調整手法

手法	口縁部外面調整	底部調整	手法	ミガキ調整の有無および範囲
a手法	ヨコナデ	不調整	0手法	ミガキ調整を施さない
b手法	ヨコナデ	ヘラケズリ	1手法	口縁部のみ
c手法	ヘラケズリ	ヘラケズリ	2手法	底部のみ
e手法	幅狭くヨコナデ	不調整	3手法	口縁部から底部にかけて

A 東西大溝SD4130・井戸SE4740出土土器

i SD4130出土土器

SD4130は、第53次北調査区から第45・47・50次調査区の北寄りを東西に流れる素掘溝である。溝の方位は東で南に若干振れており、第53次北調査区で南北溝SD4143に接続すると考えられる。六条条間路道路心からは、北に17～25mの距離に位置する。調査では総長124m分を検出したが、東側ほど削平が著しく、東端部ではわずかに溝底部が残るに過ぎない。溝の規模は、第50次調査区西壁で幅11.2m、深さ1.5～1.7mで、第45次調査区西端で幅4.5m、深さ1.1mを測る。8箇所ある土層断面図によると、溝底の標高は75.0m前後でほぼ水平であり、溝底の標高から、水流の向きを確定することは難しい。埋土は、調査時の所見からは、灰色砂礫、茶褐色砂礫を中心とする下層、青灰色粘質土を中心とし、細砂や粘質土が交互に堆積する中層、暗褐色粘質土、茶褐色粘質土、灰褐色粘質土、淡褐色粘質土などからなる上層の大きく3層に分けられる。第50次調査区西壁での各層の厚さは、下層が10～25cm、中層が70～85cm、上層が60～80cmである。下層と中層は溝が機能していた時の流水や滞水により堆積した層とみられ、粘質土の上層は溝が最終的に廃絶した時の埋土と考えられる。

各層出土土器の器種構成は、別表5に示した。SD4130とSE4740については、個体数の算定は、基本的に口縁部が八分の一以上残存するものを対象とした。底部に高台の付く杯Bと皿Bは、口縁部の残存が八分の一に満たなくても、高台部分が八分の一以上残るものは算出対象とした。高杯の脚柱部や細頸壺頸部、平瓶頸部などの部位は、口縁部が残っていない場合でも、二分の一以上が残存していれば数に加えた。盤や竈、横瓶、提瓶などの器種は、口縁部が残っていない場合でも、器種同定が可能であれば算出した。また、各土器の出土地区、法量や調整手法については別表7にまとめたので、合わせて参照されたい。

以下、下層から中層、上層の順に、各層ごとに出土土器の報告を行う。

a 下層出土土器 (Pl. 14～16, Ph. 76・80・81)

土師器 (Pl. 14) 土師器には、杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B、皿B蓋、椀C、鉢、高杯A、盤、壺B、甕、鍋、甌、竈などがある。

1～5は杯A。1・2は杯AⅠ、3は杯AⅡ、4・5は杯AⅢである。2は口縁端部を内側に強く巻き込むが、その他は内側にわずかに肥厚させる程度である。1～4は二段放射暗文（以下、二段暗文とする。）をもち、4には底部内面に螺旋暗文がみられる。5では暗文が確認できない。調整は、杯AⅢ（4・5）がa0手法、杯AⅠ（1・2）がb1手法で、杯AⅡ（3）は磨滅のため不詳である。また、1の底部内面にはハケ目が確認できる。5の底部外面には指頭圧痕が目立つ。1は胎土に雲母を、4・5は胎土に赤色粒子を含む。

杯B（6・7）はともに二段暗文を施す。6はa1手法で調整し、胎土に赤色粒子を含む。7は口縁部をヨコナデした後にヘラミガキを施す。両者とも橙褐色を呈する。

杯B蓋（8）は頂部に径4.5cmほどの扁平なつまみを有する。口縁端部は肥厚する。内面には螺旋暗文、外面にはヘラミガキを施すとみられるが、風化のために不詳。

9～13は杯C。9が杯CⅡで、他は杯CⅠである。器形は9が若干深く、13は浅めである。11は口縁端部が外側に屈曲する。いずれも一段放射暗文（以下、一段暗文とする。）をもつ。9・12はa0手法、11はa1手法で調整する。13の内面および口縁端部外面には黒色のタール状物質が付着し、灯明皿として用いたと考えられる。

14・15は杯G。口縁端部は丸くおさめるもの（14）と内傾するもの（15）がある。ともに口縁部内面には斜め方向の工具痕がみられる。

杯H（16）は口径約10cmの小型品。ヨコナデにより口縁部が外反する。底部外面のヘラケズりは底部全面には及ばず、一部に不調整の部分が残る。胎土には径1mmほどの砂粒を多く含む。

17～19は皿A。18・19が皿AⅠで17は皿AⅡ。3個体とも底部と口縁部との境は明瞭ではなく、口縁部が丸みをもって立ち上がる。口縁端部の形状は、丸くおさめるもの（17）、上端に面をつくるもの（18）、内側に肥厚するもの（19）と様々である。17はb0手法で調整し、暗文の有無は磨滅のために不明。胎土に赤色粒子を多く含む。18・19は内面に一段暗文を施す。b0手法で調整するが、底部外面の一部に指頭圧痕が残る。

20は碗C。口縁端部は内傾し、底部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。

21・22は鉢。21は口縁端部が内側に肥厚し、22は口縁部上端に狭い面をつくる。口縁部の形状は21が開いて終わるのに対し、22は端部付近が内弯気味となる。両者とも内面に一段暗文を施し、21は底部に螺旋暗文も残る。外面の調整は、口縁部から胴部上位まではヨコナデ、胴部中位以下はヘラケズりで、口縁部および胴部上半にヘラミガキを施す。21は胎土に雲母を含む。

高杯A（23）は杯部の破片。口縁端部側面にヨコナデによる弱い凹線をもつ。内面の暗文は二段暗文となると考えられる。外面上半はヨコナデ、下半はヘラケズりで調整し、全体にヘラミガキを施す。

24～26は盤。24は内面に二段暗文および螺旋暗文を施す。外面はヘラケズりの後、上半部のみヘラミガキを施す。大型の25・26は把手をもつ。25は口縁端部が内側にやや肥厚する。内面には一段の暗文が確認でき、その下には螺旋暗文がめぐる。おそらく二段暗文となるのであろう。胴部外面上半は横方向のナデで調整し、口縁部は端部のみを狭くヨコナデする。浅黄色を呈する。26は同一個体の破片から図上復元した。高台は大ぶりでハの字に開き、端部が外方に屈曲する。底部内面には螺旋暗文があり、胴部には放射暗文をもつ。胴部外面は把手部より下をヘラケズりで調整し、把手付近より上にはヘラミガキを施す。橙色を呈する。

壺B（27～31）は口径7cm、器高5cmほどの小型品（27～29）と、口径14cmほどの中型品（30・31）がある。小型品はほぼ同大同形であるが、27は頸部のくびれが若干弱い。調整は口縁部から頸部をヨコナデするのみで、胴部外面にはユビオサエによる指頭圧痕や粘土接合痕が残る。27はにぶい黄橙色である。28・29はともに浅黄橙色で、胎土に赤色粒子を含むが、28のほうが砂粒の含有量が多い。中型品は口縁部をヨコナデ、胴部をナデで調整する。31の胴部外面には指頭圧痕の凹凸が残る。30は橙色、31は浅黄色を呈する。

32～37は甕。把手の有無は、34を除き不明である。口径により、小型品（32～34）、中型品（35）、大型品（36・37）に分けられる。口縁端部の形状は多様で、つまみ上げるもの（32・36・37）、端部側面に面をもつもの（33）や、丸くおさめるもの（34・35）がある。36は口縁端部の側面が、ヨコナデによりやや凹む。32は胴部外面が縦方向のハケ目、内面はナデで調整する。

33は胴部外面にハケ目を施した後、胴部下半をヘラケズリで調整する。胴部内面には横方向のハケ目を短い単位で施す。34は、口縁部の一部を欠損する以外は完存する。外面は、底部をナデ、胴部下半を目が粗く条線の浅いハケ目で調整する。胴部上半はナデであるが、ユビオサエによる指頭圧痕が多く残る。頸部から口縁部はヨコナデで、頸部には先行して施した縦方向のハケ目がわずかに残る。内面はナデ調整で、口縁部には目の粗いハケ目を施す。35は胴部外面をハケ目、内面をヘラケズリで調整する。36・37は胴部外面をハケ目で調整し、内面は胴部をナデ、頸部から口縁部に横方向のハケ目を施す。32・36・37は都城型²、33は近江型、35は河内型である。33は胎土に雲母と砂粒を多く含み、34の胎土は赤色粒子と雲母を、37の胎土は赤色粒子と径1～2mmの大きめの砂粒を含む。

鍋(38)は、口縁端部がヨコナデにより上下に肥厚する。胴部外面は縦方向のハケ目。胴部内面はナデで調整し、指頭圧痕が残る。頸部内面の一部に焦げが付く。

須恵器 (Pl.15・16) 須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯H、杯H蓋、皿A、皿B、椀A、椀B、鉢A、高杯、盤、壺A、壺A蓋、壺C、壺K、平瓶、提瓶、横瓶、甗、甗A、甗Cなどがある。

701～705は杯A。701～703は杯AⅡ、704は杯AⅣ、705は杯AⅤで、杯AⅡは器高の低いもの(701)と高いもの(702・703)に二分される。口縁端部の形状は丸くおさめるものが基本であるが、705は内側にわずかに肥厚する。底部外面は、701～704はロクロケズリで、705はヘラ切り不調整である。701・702は胎土に白色微砂を含む。702は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。704は底部内面に自然釉が降着する。

706～711は杯B。口径により杯BⅠ(711)、杯BⅡ(708・710)、杯BⅢ(709)、杯BⅣ(707)、杯BⅤ(706)に分かれ、さらに杯BⅡには器高が低いもの(708)と高いもの(710)がある。口縁端部はいずれも丸くおさめる。底部外面の調整は、708・710がロクロケズリで、709はロクロナデと考えられる。706は高台の貼付位置が外に寄り、底部外縁に近い。707は高台が高く、端部を外方に突出させる。口縁端部内面と底部内面が平滑で、墨の付着がみられることから、硯として使用したと考えられる。708は口縁端部内面にタール状の付着物が確認でき、灯火器として使用した可能性がある。胎土に黒色粒子を含み、径1～3mmの大きめの砂粒が目立つ。709は灰白色を呈し、焼成がやや不良で軟質である。器面は内外面ともに平滑。710の底部と胴部の境はロクロケズリにより明瞭な稜をなし、胴部外面には火襷がある。胎土には黒色粒子と白色微砂を含む。710は、下層出土と上層出土の破片が接合した資料である。711は胎土に白色微砂を含む。

712～717は杯B蓋。712・716は頂部がなだらかな弧状をなし、713・714は頂部が平らで、715は器高が高く笠形を呈する。712のみ、かえりをもつ。頂部外面は、全てロクロケズリで調整する。713は外面全面に自然釉が降着する。内面中央は非常に平滑で、墨痕は残らないものの、転用硯として使用した可能性がある。714は頂部外面の口縁端部よりやや内側に環状の剥離痕がある。胎土は精良で、灰白色を呈する。715は上部中央が突出する径約4cmのつまみを付す。焼成はやや不良で、灰白色を呈する。716は、下層出土と上層出土の破片が接合した。内面外寄りには降灰が環状にみられ、重ね焼きしたことがわかる。胎土には黒色粒子を含む。717は外面外縁部にのみ、薄い自然釉が降着する。胎土と器形から、猿投窯の製品とみられる。また、

712は色調と精良な胎土から、猿投窯産と推定できる。

杯C(718)は口縁端部に外傾面をもち、内面をやや窪ませる。底部外面はロクロナデで調整する。内面および口縁端部外傾部分に自然釉の降着が著しい。胎土には黒色粒子を含む。

719は杯H蓋。口縁部は歪んでいるが、口径は約10cmに復元できる。天井部はヘラ切り不調整。外面の一部に自然釉が降着し、頂部外面には別個体の破片が融着する。

皿A(721)は口縁端部を丸くおさめる。底部外面はロクロケズリで調整する。胎土に黒色粒子と白色微砂を少量含む。

皿B(720)は高台が細く直立する。胴部下半から底部外面にはロクロケズリを施す。

椀A(722)は深い器形で、径高指数が57.6。底部外面にはロクロケズリを施す。胎土には径2～5mmの大きめの砂粒を少量含む。

723は底部の大半と高台を欠損するが、器形と底部の調整から椀Bと判断した。胴部はわずかに開きながら立ち上がり、口縁部はやや内湾し、端部は丸くおさめる。内外面ともロクロナデで調整し、内面にはナデによる条線が明瞭に残る。灰白色を呈する。器形や胎土から、尾北窯産と推定できる。

鉢A(724)は口縁部が若干内湾する。調整は内外面ともロクロナデで、胴部内面下半には斜め方向のナデを施す。胎土には白色微砂を含む。

高杯(725)は脚部の破片で、裾部がラップ状に大きく開く。端部内面は強いナデにより、わずかに肥厚する。調整は内外面ともロクロナデ。灰白色を呈する。

壺A(726)は、短く直立する口縁部をもつ。肩部外面に自然釉の降着が著しいが、蓋を被せた状態で焼成したため、口縁部付近は釉の降着を免れる。肩部には、蓋の口縁端部の一部が融着して残る。

727～729は壺A蓋。727は口縁端部が鋭く突出して内傾し、焼成時の融着を防ぐ形状を呈する。頂部外面はロクロナデ調整で、頂部内面には不定方向のナデを施す。728は口縁部がやや外開きで、端部には平坦面をもつ。頂部外面はロクロケズリ調整で、胎土は精良である。729は扁平なボタン状のつまみをもち、頂部外面にはロクロケズリを施す。焼成はやや不良で、灰白色を呈する。

壺C(730)は肩部外面に自然釉が降着するが、頸部付近で釉が弧状に途切れており、蓋を被せた状態で焼成されたことがわかる。胎土には黒色粒子が目立つ。

731～733は壺K。731は胴部と頸部は二段接合で、肩部内面の中央付近に体部形成時の絞り目が観察できる。頸部から肩部の外面と口縁部内面には、自然釉がみられる。732は、底部に下端を鋭く突出させた高台が付く。口頸部中位および肩部にはそれぞれ1条の凹線が巡る。調整は胴部下半がロクロケズリ、それ以外はロクロナデによる。口縁部上部と高台の一部を欠損するのみで、他は完存する。口縁部は意図的に打ち欠かれた可能性がある。頸部から肩部の外面と、口縁部内面には自然釉が降着し、胎土には白色微砂を多く含む。733は底部が狭い平底で、肩が強く張り、稜をもつ。高台は付さない。底部と胴部下端の外面はロクロケズリで、その他はロクロナデ。胴部と頸部の接合は二段接合。肩部外面と口縁部内面および底部内面には、薄緑色の自然釉が降着する。灰白色で精緻な胎土である。器形や胎土の特徴から、湖西窯産と考えられる。

平瓶(734)は頸部が細く、肩部は丸みをおびる。口縁部外面には凹線が1条巡り、体部の成形は円盤閉塞による。外面全面および口頸部内面には緑色の自然釉の降着が著しい。灰白色を呈し、胎土は精緻で砂粒はほとんど含まない。自然釉の状況や器形、胎土から、東海地方の製品と考えられる。

甕(735)は肩が張り、低い高台が付く。口縁部上部以外は完存し、口縁部は意図的に打ち欠かれた可能性がある。肩部外面と口頸部内外面、および底部内面には自然釉が降着する。

736~743は甕A。口縁端部の形状は多様で、つまみ上げるもの(736)、玉縁状につくり出すもの(737・739)、短く外方に屈曲するもの(740・742)、内弯させるもの(741)、上下に肥厚させるもの(743)がある。胴部は叩き調整を基本とし、737・738では外面に平行叩きの後、カキ目を施す。740は外面に単位の短いカキ目が入り、内面には当て具の痕跡がみられない。742・743の内面には当て具の痕跡がほとんどみられず、わずかに観察できる程度である。また、736では底部内面中央にのみ当て具の痕跡がない。736は肩部に耳状の把手が3箇所につき、灰白色を呈する。738の口縁部には波状文が入り、その上下に凹線が巡る。肩部外面と口縁部内面には自然釉の降着が著しく、739の口縁部内外面と742の口縁部内面にも自然釉がみられる。739は、胎土に黒色粒子を多く含む。742の胎土は精緻で、砂粒をほとんど含まない。743は灰白色を呈し、胎土には黒色粒子を多く含むが、砂粒はほとんど含まず、精緻である。

744~746は甕C。744は口縁端部を玉縁状につくり出す。口縁部の外反が強いが、口径と胴部最大径の比率から、甕Cとした。胴部外面は格子目叩きの後、目の粗い平行叩きを横方向に施す。胎土は白色微砂と黒色粒子を少量含む。745は口縁端部を玉縁状につくり出す。胴部外面を平行叩きで調整し、頸部内面にはヘラケズリを施す。灰白色を呈し、胎土には径3~6mmの大きめの砂粒が目立つ。746は口縁部がほぼ直立し、端部内面がナデによりわずかに凹む。頸部内面にはヘラケズリを施し、口縁部内外面はナデ調整であるが、ロクロは使用していない。大型品であるため、使用できなかったのであろう。胴部外面は格子目叩きの後、ナデを施す。また、胴部内面には当て具の使用が確認できるものの、その痕跡はほとんど付かない。胎土には白色微砂と径2~3mmの砂粒を含む。

b 中層出土土器 (Pl. 17~26, Ph. 77・82~91)

土師器 (Pl. 17~21) 中層から出土した土師器には、杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯E、杯F、杯G、杯H、皿A、皿B、皿B蓋、皿C、椀A、椀C、鉢、高杯A、壺A、壺B、甕A、甕B、甕C、鍋、甌、竈などがある。なお、杯Aと皿Aの分類は、径高指数の値を基準とし、ほかに口縁部形状、暗文の施文方法などから判断した。おおよそ、径高指数15.5以上が杯A、それ未満が皿Aである。

39~80は杯A。口径が16.5cm以上の杯A I (39~68)、口径が14.5~15.5cmの杯A II (73~80)、口径が14.0cm以下の杯A III (69~72)がある。口縁端部の形状は、ほとんどのものが内側に巻き込み肥厚させるが、その程度は様々で、肥厚の弱いもの(39・45・49・66・72・75・76)も散見する。また、65は通有のものとは異なり、端部を外側に短く屈曲させる。内面の暗文は、39~42が二段暗文で、42では上段と下段の放射暗文の間に連弧暗文Aを入れる。43~48・69・73は、連弧暗文と一段放射暗文(以下、連弧暗文とする。)を施す。44・46・47は上部の暗文がループ状

をなす連弧暗文Aで、連弧暗文Bのものより概して上部暗文の施文幅が広い。49～64・74～78は一段暗文を施し、65～68・70～72・79・80には口縁部内面に暗文が確認できない。51は口縁部内面と底部外面にそれぞれ「+」のヘラ書きがみられる。72の口縁部内面には斜め右上がりの工具痕が残り、口縁部外面には「#」と「×」のヘラ書きが並んで入る。いずれも焼成後のものである。71は底部外面に墨書がみられ、釈文は「□（記号カ）」である。

調整は、二段暗文のものは42がa手法、他の3個体はb手法で、連弧暗文をもつものは全てb手法である。一段暗文のものは、64・76がa手法で、その他は全てb手法で調整する。暗文の確認できないものは、65・70・71・79がa手法、72・80がb手法、66～68がc手法である。口縁部が八分の一以上残存する資料で、調整手法が識別できるものは63点あるが、そのうちb手法は50点を数え、全体の約8割を占める。暗文をもつ個体では、暗文構成にかかわらずb手法が主体で、暗文が確認できないものではa手法やc手法の割合が増える。ヘラミガキの有無についてはa手法ではほぼ全てがa0手法であるが、b手法ではb0手法とb1手法が等量ある。色調には大きく分けて橙色系と灰白色系の2つがあるが、それぞれにおいて発色や胎土の質には大小の差異がみられる。胎土は概して精良で、47・50・56は胎土に白色微砂を多く含む。

70・71・79は、器形としては杯Aに分類できるが、粗製で器壁が厚く、他の個体と比べて異質である。口縁端部は丸くおさめ、暗文はもたず、a0手法で調整する。70はにぶい橙色、79は灰白色を呈する。71はにぶい黄橙色で、赤色粒子を多く含む。

81～84は杯B。図示したものは、全て口径19cm以上の杯B Iである。口縁部が斜め上方に開きながら立ち上がり、端部は内側に巻き込み肥厚する。81・82は二段暗文、83は連弧暗文をもち、83の連弧暗文は各弧間の円が大きい。3個体とも底部内面には螺旋暗文を施す。84は暗文をもたない。調整は81～83がb1手法。84はc3手法で調整するが、口縁端部にはヘラケズリは及ばず、奈良時代後半の所産である。81は胎土に赤色粒子を含む。

85～88は杯B蓋。口径19cm以上の杯B I蓋（85・86）、口径15.5cm前後の杯B II蓋（88）、口径14.5cm前後の杯B III蓋（87）がある。85・88は平坦な頂部と緩やかに短く曲がる縁部からなり、86は平坦な頂部から縁部が強く屈曲する。87は器高が高く、笠形を呈する。口縁端部は内側に肥厚するもの（85・86）と、丸くおさめるもの（87・88）がある。87は径約2cmのボタン状のつまみをもち、88には長さ約3cmの板状のつまみが付く。いずれの個体も外面には丁寧な分割ミガキを施し、内面はナデ調整である。85・86の内面には、螺旋暗文を施す。85・86の胎土には白色微砂を多く含み、87は胎土に径1mmほどの赤色粒子が目立つ。

96～106は杯C。口径が18.0～19.5cmの杯C I（96～100）、口径が16.0～17.0cmの杯C II（101～105）、口径が11.5cm前後の杯C III（106）がある。径高指数は、105が22.8、106が約27.5で深く、101が15.9とやや浅いが、96～100・104は17.9～19.1の範囲にまとまる。口縁端部の形状は、内傾するもの（98～105）が主体だが、丸くおさめるもの（96・97）、薄く尖るもの（106）もある。96～98・100～103は一段暗文をもち、底部内面には螺旋暗文が入る。調整は、99・101・103がa0手法、100がa1手法、98・104～106がb0手法、96・97・102がb1手法である。97・106の底部外面には、削り残した部分に木の葉圧痕が一部残る。99は底部外周にユビオサエによる指頭圧痕が多く残る。また、底部内面には刀子状利器による直線的な線刻が多数刻まれており、俎板として使用したものか。98の口縁端部には灯明痕がみられる。100の底部外面には、焼成

後に「#」のヘラ書きを施す。101はにぶい黄橙色を呈し、99・105は胎土に赤色粒子を多く含む。

89～93は杯E。平底の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁端部は89・91～93が丸くおさめ、90は口縁端部が尖る。92は把手が1箇所が付く。器壁が薄い、精良な土器である。調整はいずれもc3手法であるが、90・91は口縁部上位を削り残す。外面のヘラミガキは基本的に密で丁寧であるが、91は他に比べやや粗い。89は底部内面にハケ目を施し、90は底部内面に指頭圧痕による凹凸が残る。91は口縁部内面の一部が黒色化しており、灯火器として使用した可能性がある。内面全面は黒褐色を呈し、漆状の物質が薄く付着していると考えられる。89・93は胎土に赤色粒子を含む。

杯F (94) は、杯Eに高台を付した器形で、器高はやや高い。調整はc1手法。橙色を呈し、胎土には赤色粒子を含む。高台の一部にV字状の切り込みを入れているが、何を意図したものは不明である。

95は杯G。平底に近い形状を呈し、口縁端部は丸くおさめる。色調はにぶい黄橙色で、胎土に赤色粒子を含む。

杯H (107) は底部外面のヘラケズリが丁寧で、底部と口縁部の境には明瞭な稜ができる。橙色を呈する。

杯X (108) は、平底の底部から口縁部が内湾しながら立ち上がる。口縁端部は内側に巻き込み肥厚する。調整はb1手法で、口縁部下半はユビオサエにより横方向の帯状に凹む。

109～138は皿A。口径が21.0～25.5cmの皿AⅠ (117～120・124～138)、口径が17.0～19.5cmの皿AⅡ (113～116・121～123)、口径が14.0～16.0cmの皿AⅢ (109～112) がある。全体の形状には、底部と口縁部の境が明瞭な一群と、底部から口縁部までがなだらかにつながる一群 (112・114・120・123・134・137) があり、それぞれに口縁部がヨコナデにより外反するもの、内湾気味におさめるもの、直線的に開くものなどがある。口縁端部の形状は、内側に肥厚するものが最も多いが、その他に、内傾する面をもつもの (109～111・113)、丸くおさめるもの (112・122・136)、上端に狭い面を作出するもの (116) などがある。内面に施している暗文は、口縁部が八分の一以上残存するもので集計すると、一段暗文のものが35点、暗文の認められないものが12点で、二段暗文や連弧暗文をもつものはみられない。一段暗文をもつもののうち、暗文の密度が細かいものは21点、粗いものは14点を数える。調整については、a0手法が17点、a1手法が1点、b0手法が21点、b1手法が3点、c0手法が4点、c1手法が1点で、b手法が全体の半数以上を占める。なお、暗文構成と調整手法に明確な対応関係は見い出せない。125・128の底部外面には木の葉の圧痕があり、127・129の底部外面には指頭圧痕が明瞭に残り、凹凸が激しい。色調は橙色系、灰黄色系、浅黄橙色系に大きく分かれるが、胎土の質や細かな色調には個体ごとに差異がみられる。111・113・120・121・127は胎土に赤色粒子を含み、123の胎土には白色微砂を含む。112・129・130・134は胎土に雲母を多く含む。

126・132・135の底部外面には、ヘラ書きがみられる。いずれも焼成後のものである。132は「#」と「×」、135は「キ」で、126は記号の一部が残るのみで全容は不明である。129の底部内面には、刀子状利器による直線的な刻線が多数平行して走る。110は口縁端部の一部に煤が付着する。

139は皿B。口縁部上位は強いヨコナデにより大きく屈曲し、端部は内側に肥厚する。高台は低く、端部が外方に突出する。調整はb1手法。口縁部内面には一段暗文をもち、底部内面には螺旋暗文を施す。色調は浅黄橙色で、胎土に赤色粒子を含む。

140・141は皿C。口径は10.5cm前後で、140の口縁部は斜め外方に直線的に開き、141は口縁部がヨコナデにより外反する。両者とも調整はe手法で、外面に粘土の接合痕が観察できる。140は灰白色を呈する。141はにぶい黄橙色を呈し、胎土に雲母を含む。

142～146は椀A。口径は12.0～13.2cm、深さは3.5～4.0cmで、大きさはほぼ類似する。基本的に外面全体をヘラケズリで調整するが、142は口縁端部直下を削り残す。145以外はケズリの後にヘラミガキを施す。146は底部外面に墨書の一部が残るが、判読できない。142は底部外面に記号のヘラ書きを焼成後に施している。143～146は橙色を呈し、142は浅黄橙色で、胎土に雲母と赤色粒子を含む。

153～212は椀C。中層から出土した椀Cは、口縁部の八分の一以上が残存するもので計測して227点を数える。復元口径は10.0cm～16.0cmの幅があるが、12.0～14.0cmのものが158点で、全体の7割近くにおよぶ。器高が判明するものは89点で、3.0～5.0cmの範囲におさまるが、径高指数には22.9～35.1の幅がある。ある数値に極端にまとまることはなく、25.0～31.5の範囲に偏りなく分布する。口縁端部の形状は、内傾するものももっとも多いが、丸くおさめるもの(153～156・162・163・172・175・180・184・186・187・191・201・207・212)や端部外面が外傾するもの(164)も存在する。調整はe手法で、体部から底部外面に指頭圧痕が明瞭に残るものが多い。内面はヨコナデ調整を基本とするが、162では底部内面にハケ目が残る。多くの個体で、体部外面に渦巻き状の粘土接合痕がみられる。また、口縁部内面に斜め方向の工具痕が残るもの(157・170・174・176・177・180・181・197・198・200・205・209・211)が散見し、製作時になんらかの工具を使用したと考えられるが、工具の具体的な形状や用途は不明である。196の口縁部外面や、199の底部外面には黒斑がみられる。

153は器壁が薄く、白色粘土を少量含み、196の内面には、全面に灰オリーブ色の薄い付着物がみられる。164・171～173・176・182は胎土に1～2mmの砂粒を多く含み、内面器面の荒れが目立つ。色調には、橙色系、灰黄色系、灰白色系があり、胎土に赤色粒子を含むものが多くみられる。

165・189は口縁端部の一部に煤が付着し、灯火器として使用したもの。179の外面は煤の付着が著しく、一部には被熱による剥離がみられる。154・169は底部内外面の一部が黒色化する。188は内外面のはほぼ全面が黒色化し、207は内面全面および外面の一部が黒色化する。

169の底部外面には、「□〔大カ〕」の墨書がある。155・156・158・165・166・180・201・204の底部外面と192の口縁部外面にも墨書がみられるが、釈文は「□」や「□(記号カ)」、あるいは墨痕で、内容は不明である。171の底部内面と198の底部外面には、それぞれ「+」のヘラ書きがあり、196の底部外面には「#」のヘラ書きがみられる。203の底部内面にも、ヘラ書きの一部が残る。いずれも焼成後のものである。

147～152は鉢B。小さな平底から体部が内湾する弧を描いて立ち上がる器形である。口径24cm～27.5cmの大型品(147・148)と、口径20cm程度の小型品(149～152)がある。口縁端部の形態には、丸くおさめるもの(147)と、内側に巻き込み肥厚するもの(148・151・152)、ヨコナ

デにより内側に肥厚するもの(149・150)がみられる。外面の調整は、148～151は口縁部をヨコナデし、体部以下にヘラケズリを施す。150はヘラケズリの範囲が広く、口縁端部直下にまで及ぶ部分もある。一方、147・152は口縁部から体部上半までをヨコナデし、それ以下は不調整で、指頭圧痕が明瞭に残る。151・152は口縁部から体部外面にヘラミガキを加え、内面には螺旋状暗文を施す。また、147は体部内面にハケ目が残る。150は灰白色を呈し、白色微砂を含む。

213～217は高杯A。213は杯部で、口縁端部は外傾する面をなす。外面調整は、杯部下半にヘラケズリ、口縁部にヨコナデを施し、その後分割ヘラミガキを加える。内面はヨコナデで調整し、丁寧な二段暗文を施す。

214～217は脚部で、いずれも心棒成形のⅡ群土器。脚柱部外面は、ヘラで上方から下方に向けて丁寧に面取りする。214は九面体、215は十二面体、216は十三面体とし、217は細かい面取りで25～30面を削り出す。214の杯部外面には横方向のヘラケズリを施し、さらにヘラミガキがわずかに確認できる。杯部内面には螺旋状暗文がある。脚部内面は横方向のヘラケズリで調整し、裾部外面には分割ヘラミガキを施す。脚柱部内面には縦や斜め方向の凹線が複数みられる。にぶい橙色を呈し、胎土には赤色粒子を含む。215の杯部外面には分割ヘラミガキがわずかに残り、杯部内面には螺旋状暗文がみられる。脚柱部上端外面には多数の爪状圧痕が確認できる。脚柱部を面取りした後に施しているが、何を目的としてなされたものかは不明である。216は杯部外面にヘラミガキを施し、胎土には赤色粒子を多く含む。217は裾部が大きく開き、端部は断面コの字形となる。裾部外面には丁寧なヘラミガキを時計回りに5分割で施し、内面には部分的にヘラケズリ調整がみられる。橙色を呈し、胎土には白色微砂と赤色粒子を多く含む。214～216では、杯部との接合部に粘土を足して補強している。216では杯底部が一部剥離しており、粘土紐を巻き付けて接合部を補強している状況がわかる。

218～220は壺Aで、218・219は小型品。218は口縁部が外方に開き、体部は球形で肩の張りは弱い。外面は、口縁部から肩部をヨコナデで調整し、体部にはヘラケズリを施す。その後全面に丁寧なヘラミガキを加える。胎土には白色微砂と雲母を含む。219は短く直立する口縁部と肩の張った球形の体部からなり、口縁端部は内側にわずかに肥厚する。頸部には、ヨコナデにより狭い平坦面をつくり出す。底部に低い高台をもち、肩部に把手が剥離した痕跡がある。把手は器面に直接貼り付けている。外面は、体部中位以下をヘラケズリで調整する。その後、ヘラミガキを施すと考えられるが、磨滅のため不詳。器壁は薄く、色調は橙色を呈する。220は胴の張った球形の体部で、肩部に把手を挿入法により付す。底部には、高台が剥離した痕跡がみられる。外面の調整は、体部下半はヘラケズリのままで、上半はヨコナデを施した後、密なヘラミガキを施す。また、体部下半には、一部にヘラ状工具による短線状の痕跡が平行して残る。胎土には赤色粒子を多く含む。

221は壺X。やや内傾する口縁部が上端で直立し、端部は内傾する。体部は肩の張らない卵形をなす。外面は磨滅が著しく調整は不明であるが、肩部以下の広い範囲に赤色顔料が残る。また、体部外面には薄く煤が付着する。浅黄橙色を呈し、胎土には径1～2mmの大きめの赤色粒子を含む。

226～228は甕B。いずれも都城型。226・228では口縁端部を上方に肥厚させ、227は端部を

わずかにつまみ上げる。体部の調整は、外面がハケ目、内面がナデによる。外面のハケ目は縦方向を基本とするが、228の体部下方では斜めから横方向となる様である。227・228の内面には板状工具の痕跡が残り、板ナデであることがわかる。口縁部内面は、226・227が横方向のハケ目、228がヨコナデで調整する。227には幅広で薄い舌状の把手が付き、把手には成形時の指頭圧痕がよく残る。把手の接合は貼付法により、接合部外面には部分的にヘラケズリを施す。226・228は把手の大部分を欠損し、形状は不明であるが、把手基部は226では下向きに緩い弧を描き、228では直線的となる。両者とも幅は約9.5cmを測り、接合は貼付法による。また、228の体部下半には煤の付着がみられる。226・227はともに橙色を呈し、胎土に赤色粒子を含む。

222～225は甕C。口縁端部の形状は、上端に面をつくるもの(222)、つまみ上げるもの(223・225)、側面に面をもつもの(224)があり、多様である。口縁部の調整は内外面ともヨコナデ調整を基本とするが、225は内面にハケ目を施している。222の体部の調整は、外面は縦方向のハケ目で、内面は斜め方向のハケ目の後、体部上半をヘラケズリする。外面のハケ目は非常に目が細かく、目の粗い内面のハケ目とは異なる工具で調整を行ったことがわかる。225の体部外面調整は縦方向のハケ目で、同一個体と考えられる破片資料によると、体部下方にはヘラケズリを施すようである。内面は口縁部、体部とも目の粗い横方向のハケ目調整。外面のハケ目は目が細かく、222と同様に内外面で異なる工具を使用していたと理解できる。223の体部内面は、横および斜め方向のナデ調整である。体部外面は縦方向のハケ目であるが、体部上半に目の粗いハケ目を施した後、体部中位以下を目の細かいハケ目工具により調整する。調整に異なるハケ目工具を使用するという点で、222・225と共通する。224の体部内外面はハケ目調整。なお、222・223・225の体部外面には煤の付着がみられ、特に223で著しい。222は河内型、223は都城型、224・225は近江型。

229～231は都城型の甕で、把手の有無は不明。口縁端部の形状は、229では内側に巻き込み肥厚させ、231では上方につまみ上げる。230では断面コの字形をなし、端部側面には凹線が1条巡る。いずれも、体部外面を縦方向のハケ目で調整し、内面はヨコ方向のナデ調整である。口縁部内面の調整は、229がヨコナデ、231は短い単位の横方向のハケ目で、230は横方向のハケ目の後にヨコナデを施す。また、229の外面には煤の付着がみられる。

232～234は鍋A。口縁端部の形状は、232・233では丸くおさめ、234では内側に肥厚させる。232の胴部外面は、下半に横方向のハケ目を施した後、全体をナデで調整する。内面は横方向のナデ調整である。233は平底になるとみられ、胴部外面上半に縦方向のハケ目を施し、胴部内面は横方向のナデで調整する。232・233ともに、口縁部内面に横方向のハケ目を施す。234は都城型で、器表面の磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、胴部外面にはハケ目がわずかに確認できる。また、胴部内面にはユビオサエの痕跡が残る。232の胎土は赤色粒子を多く含み、233は胎土に雲母を多く含む。234の胎土には1～3mmの砂粒が多く目立つ。

235～238は鍋B。235～237は都城型で、238は近江型。いずれも半球形に近い扁平な体部に、大きく外反する口縁部が付く。口縁端部の形状は235・236では上方につまみ上げ、237では内側に巻き込み肥厚させる。238では上方への突出がほとんどなく、断面コの字形をなす。238は平底で、底部中央は円形に凹む。いずれも体部の2箇所に把手が付き、237の把手は幅広で薄く、隅丸三角形を呈する。237以外の把手は剥離または欠損するが、235・236では把手基部が薄く、

238では把手基部が厚い。把手の取り付けは235～237では貼付法、238では挿入法による。

口縁部内面の調整は、235・237・238はヨコナデ、236では横方向のハケ目による。235～237は、体部外面上半に縦方向、中位以下では斜め方向のハケ目を施す。内面はナデ調整である。238は体部外面に横方向のハケ目を施し、その後中位以下に横位のヘラケズリを施す。内面は、体部から底部までを横位および斜め方向のハケ目で調整する。体部内外面のハケ目は、非常に細かく浅い。

235～237では、体部外面の中位以下と口縁部外面の一部に煤の付着がみられ、236では頸部内面付近を中心に焦げが残る。238は、内外面に焦げや煤などの付着が全くみられない。235・237は橙色を呈し、237では胎土に赤色粒子を含む。236はにぶい黄橙色で、胎土に1～2mmの大きめの赤色粒子を含む。238は浅黄橙色を呈し、胎土には1～2mmの大きめの赤色粒子や雲母がみられ、砂粒はあまり含まない。

須恵器 (Pl. 22～26) 中層から出土した須恵器には杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯E、杯F、杯G、杯H、杯H蓋、皿A、皿B、椀B、鉢A、鉢D、高杯、盤、壺A、壺A蓋、壺B、壺C、壺E、壺G、壺K、壺Q、平瓶、横瓶、甕などがある。

782～797は杯A。口径20cm以上の杯AⅠ(782・783)、口径17.0～20.0cmの杯AⅡ(784～787)、口径14.0～15.5cmの杯AⅢ(792～797)、口径12.5～13.0cmの杯AⅣ(788～791)がある。径高指数が30代後半のものを中心とする器高の深いタイプ(782・792)と、径高指数が20代ものを中心とする器高の浅いタイプに大きく2つに分けることができるが、前者の出土量は少ない。後者には、器形が箱形に近いもの(784・791・793・794)と、口縁部の立ち上がりが外開きとなるもの(783・785～790・795～797)がある。

底部外面の調整は、口縁部が八分の一以上残存するもので算出すると、ロクロケズリが12点、ヘラケズリが1点(782)、ヘラ切り不調整が10点、ロクロナデが2点(794ほか1点)となる。786は口縁部から底部内面に火襷がみられる。794の内面には自然釉の降着が著しい。791・793・795は重ね焼きにより、口縁部付近のみが暗い発色となり、782・785・786・788・790・797は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。782・785・787は胎土に雲母を多く含む。788・789の口縁端部には灯芯の痕跡が残り、789では3箇所を確認できる。また、785の外面には煤の付着がみられる。784・794の底部外面には墨書がみられるが、意味は判読できない。797の底部外面には焼成前のヘラ記号が入るが、欠損が大きく、記号の形は不詳。

755～781は杯B。口径20cm前後の杯BⅠ(758)、口径17.0～18.5cmの杯BⅡ(755～757)、口径13.5～16.0cmの杯BⅢ(759～773)、口径11.5～12.5cmの杯BⅣ(774～776)、口径11.5cm未満の杯BⅤ(777～781)がある。杯部の径高指数が37以上の器高が深いタイプ(759・777・778)と、20代ものを中心とする器高が浅いタイプに2つに大別でき、杯Aと同様に前者の出土量は少ない。口縁端部は丸くおさめるものが基本であるが、757では内面に1条の浅い沈線が巡る。758・769は底部が高台より突き出す所謂出尻タイプで、769の底部外面には螺旋状のヘラ切り痕跡が明瞭に残る。774は幅広で低平な高台をもつ。底部外面の調整は、口縁部または高台の八分の一以上が残存するもので算出すると、ロクロケズリが10点、ヘラ切り不調整が33点で、後者が格段に多い。771・773・781の高台内側には爪状圧痕が残り、773ではほぼ一周確認できる。780は口縁部外面に火襷があり、内面には自然釉の降着が著しい。755・763・765・775・

779は口縁部外面に、768・778は口縁部～底部外面に、766は底部内面に自然釉の降着がみられる。759・777は重ね焼きのため、口縁部上半や口縁端部付近の外面が黒く発色する。758・773は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。770は浅黄色、762の内面と772は灰オリーブ色で、他と比べやや異質な色調である。760・761・764の胎土には、1～3mmの砂粒が多く目立つ。762・768・778の底部外面には墨書がみられ、釈文は762が「+」、768・778が「□」である。764の底部外面には3cm×5.5cmの楕円形状に墨が付着する。

747～754は杯B蓋。口径23cm前後の杯BⅠ蓋(749)、口径18.5～19.0cmの杯BⅡ蓋(747・748)、口径16.0～16.5cmの杯BⅢ蓋(750～752)、口径13.0cm前後の杯BⅣ蓋(754)、口径10.5cm前後の杯BⅤ蓋(753)がある。形状をみると、笠形を呈するもの(747・748・751・753・754)、頂部中央から縁部にむかい直線的にのびるもの(749・750)、器高が低く扁平なもの(752)がある。750は口縁端部を小さくつまみ出し、段をつくる。口縁部が八分の一以上残存するもので算出すると、かえりの有るものが8点、かえりのないものが24点を数える。749のかえりは低平で丸みを帯びており、かえりの形状に明らかな退化傾向がみられる。つまみは幅が広く扁平なものが多く、頂部が若干突出するものと平坦なものがあるが、破片資料を含めると、両者はほぼ同数を数える。頂部外面はロクロケズリあるいはロクロナデで調整し、比率はロクロケズリがやや多い。753は、頂部外面に縦方向の刻み目文を巡らせる。747・751の外面には自然釉が降着し、754は焼成がやや不良で灰白色を呈する。747・748の胎土には、1～3mmの大きめの砂粒が目立つ。

798～802は杯C。口径20cm程度の杯CⅠ(801・802)と口径17.5～18.5cmの杯CⅡ(798～800)がある。土師器杯Aを模した器形で800・801は口縁端部内面にナデを加えて端部を肥厚させ、外面に外傾する面をつくり出す。798・799・802は口縁部内面に沈線が入り、端部を丸くおさめる。底部外面の調整は、798・802がロクロケズリ、799・800がヘラ切り不調整である。800・802の口縁部内面には火襷がみられる。798・801は雲母を多く含む胎土で、焼成がやや不良で灰白色を呈する。798の内外面には煤が付着する。

杯E(803)は銅椀を模した器形。平底と内湾しながら立ち上がる口縁部からなり、口縁端部はやや丸みをおびた面をなす。底部外面に丁寧なロクロケズリを施し、内面にはロクロナデの条線がよく残る。底部外面は灰白色、それ以外は灰色を呈する。

杯F(806)も金属器の模倣形態で、底部には高台を付すと考えられる。口縁部外面に鈍い稜を作出する。胴部内面には不定方向の細かいハケ目がみられる。焼成はやや不良で、灰白色を呈する。

杯G(816)は、口径9.5cmほどに復元できる。口縁部はわずかに外反し、底部外面はヘラ切り不調整である。胎土には微細な黒色粒子を多く含む。飛鳥Ⅱの所産と考えられる。

804・805は杯X。804は狭い平底で、口縁端部は外側に弱く肥厚し、上部に平坦面をつくる。口縁部は内外面ともロクロナデを施し、底部は外面をロクロケズリ、内面を不定方向のナデで調整する。砂粒をほとんど含まない精緻な胎土だが、焼成はやや不良。805は、底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁部下半以下をロクロケズリで調整する。黒色粒子を含む精緻な胎土で、器表面は非常に滑らかである。灰白色を呈するが、重ね焼きのため、口縁部外面上半のみが灰色に発色する。

807～811は皿A。口径が21.5～23.0cmの皿A I (810・811) と口径が20cm前後の皿A II (807～809) がある。底部外面は、809がロクロナデで調整し、その他の個体はロクロケズリを施す。807は焼成がやや不良で、外面全体と口縁部内面が燻したような灰色を呈し、底部内面のみが灰白色となる。808では内面全体が黒色化する。底部外面に墨書がみられるが、文字の一部が残るのみで意味は判読できない。809は焼成がやや不良で、全体が灰白色を呈する。810は還元炎焼成が完全でなく、内面が灰黄色、外面が黄灰色を呈する。811では、底部内面が口縁部内面に比べ明るい発色となる。重ね焼き焼成によるものと考えられる。

812～815は皿B。口径が25cm以上の皿B I (812・815) と口径が20cm前後の皿B II (813・814) がある。812・813・815は口縁部と底部の境が明瞭だが、814では底部から丸みをもって口縁部へとつながる。いずれも口縁部は丸くおさめ、高台は太く高いもの(812・813)と、華奢で低いもの(814・815)がある。底部外面の調整は、812・813・815がロクロケズリで、814はロクロナデである。813は胎土に1～2mmの砂粒を非常に多く含み、814は黒色粒子がロクロナデにより墨を流したようにのびる。812は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。815は砂粒をほとんど含まない灰白色の精緻な胎土で、東海地方産と考えられる。

皿E (817) は小型の平底の皿で、口縁部は強く外反する。底部外面はヘラ切り不調整で、内面には火襷がある。焼成はやや不良で、口縁部は灰色、底部は灰白色を呈する。

椀B (818) は深い器形で、胴部が垂直に立ち上がり、口縁部は欠失する。高台は底部外端に貼り付ける。底部内面はナデ、それ以外はロクロナデで調整する。

823・824は鉢A。口縁部は内弯し、口縁部は丸くおさめる。823は肩の張りが弱く、底部は平底になると思われる。口縁部は内外面ともロクロナデ調整で、体部下半の外面はロクロケズリ調整と考えられる。軟質の焼成で灰白色を呈し、胎土には白色微砂を含む。824は口縁部が強く内弯し、底部は尖底になるものであろう。内面はロクロナデ調整で、外面は口縁部から体部上位はロクロナデ、体部中位以下はロクロケズリによる。外面の一部には火襷がある。胎土には黒色粒子を少量含み、ケズリにより墨を流した様にのびる。

825～827は鉢D。平底で、外反する短い口縁部と上位で肩の張る体部からなる。826には断面台形の太い高台が付く。825は口縁部がやや外弯し、826・827の口縁部は直線的に開く。いずれも端部には平坦な面をつくる。外面の調整は、825・826では口縁部から体部上位までがロクロナデ、体部中位以下がロクロケズリによるが、825の底面にはケズリ調整は施さない。827は口縁部から体部下半までをロクロナデで調整する。825・827は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。825は胎土に赤色粒子と2～3mmの大きめの砂粒を少量含み、827の胎土は雲母を多く含む。826では体部外面下位に火襷がみられ、胎土には黒色粒子を多く含む。

820～822は高杯。820は杯部の破片で、平坦な形状をなし、口縁部を上方に短く折り曲げる。外面はロクロケズリを施した後、一部に不定方向のナデ調整を行う。脚部は上端部分が残るのみであるが、径は約2.5cmと細い。胎土には黒色粒子を含み、ケズリやナデにより黒色粒子が墨を流した様にのびる。821は杯部を欠損するが、脚部はほぼ完存する。短脚の小型品で、脚部には径2～3mmの小円孔を3方に穿つ。外面の大部分には自然釉の降着がみられる。7世紀前半の所産と考える。822は脚部で、裾部が大きく開き、端部は上下に突出する。外面全体に自然釉が降着する。

盤(819)は大きな平底からやや内弯する口縁部が斜めに立ち上がる。口縁端部を内外に肥厚させ、上部に面をつくる。口縁部および体部内外面はロクロナデ調整で、底部外面にはロクロケズリを施す。焼成がやや不良で、灰白色を呈する。

835～837は短頸壺。835・836はなで肩で胴部中位が最大径となり、短く開く口縁部をもつ。胴部下半から底部の外面をヘラケズリし、それ以外はロクロナデで調整する。835では胴部外面上半に、836では口縁部から胴部外面と、胴部下半内面に自然釉が降着する。837はなで肩で球形の胴部をもち、口縁端部内面に強いナデを加える。胴部外面下半をヘラケズリで調整し、その他はロクロナデ調整である。

短頸壺蓋(834)は径5cmほどの小型品。つまみは付さず、頂部外面は不調整で、若干の凹凸をもつ。それ以外はロクロナデで調整する。外面全体に自然釉が降着する。灰白色を呈し、胎土に黒色粒子と白色微砂を含む。

841～845は壺A。平底で肩の張った扁球形の体部と、直立する短い口縁部からなる。841・842・845の口縁部は短く開き、843の口縁部は外反してやや長くのびる。842は肩の張りがやや弱い。844は肩部に耳状の把手が付く。調整はいずれも口縁部内外面と体部内面はロクロナデで、底部内外面はナデを施す。体部外面はロクロナデを基本とし、844・845は下半にロクロケズリを施す。外面にはいずれも自然釉がみられるが、頸部付近から口縁部にかけては円形に釉の降着を免れており、蓋を被せた状態で焼成したことがわかる。841の頸部裾には、蓋の口縁端部が一部融着して残る。844の胎土には2～4mmの大きめの黒色粒子が目立ち、845は胎土に白色微砂を少量含む。

839・840は壺A蓋。839は口縁部がわずかに内弯する。口縁端部は内側を薄く挽き出して小さな段をつくるが、挽き出した部分は焼成時に融着したようで、ほぼ全て欠失する。口縁部はロクロナデ、頂部内面はナデ調整で、頂部外面にはロクロケズリを施す。外面全体に自然釉が薄くみられるが、頂部中央には別個体を重ねて焼成したようで、その部分だけは釉の降着を免れている。胎土には黒色粒子を多く含む。840は頂部と口縁部の境が鋭い稜をなす。口縁端部は内側を薄く挽き出し、焼成時に身と融着しても容易に外せる工夫がみられる。つまみは断面逆台形を呈し、中央がやや突き出る。口縁部はロクロナデで、頂部内面には不定方向のナデを施す。頂部外面には自然釉の降着が著しい。

壺B(846)は肩部に稜をもち、短い口縁部はやや外反し、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ともロクロナデによる。肩部外面は自然釉の降着が著しいが、頸部付近と口縁部にはみられず、別の個体を重ねた状態で焼成したと判断できる。

壺C(838)は肩の張る胴部で、口縁部は短くやや内側に入る。口縁端部には狭い面をもち、肩部には1条の凹線が巡る。ロクロナデ調整を基本とするが、底部外面には手持ちヘラケズリを施す。肩部外面および底部内面に、自然釉が降着する。器壁が厚く、小型だが重量がある。口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形。

828・829は壺E。平底で、胴部はやや内弯しながら直線的に開き、狭い肩部から短い口縁部が立ち上がる。底部には高台を付す。調整は、828は内外面ともロクロナデによる。829の内面はロクロナデで、外面は口縁部から胴部上半がロクロナデ、胴部下半にはロクロケズリを施す。底部外面はヘラ切り不調整。829は肩部外面と口縁部上端および底部内面に自然釉が降着する。

一方、828の肩部外面では、外端にのみ自然釉の付着がみられ、また内面には一切自然釉がみられないことから、焼成時に蓋が被っていたと考えられる。

847は壺G。底部は厚く、底面には静止糸切り痕が残る。胴部から頸部の内外面にはロクロ水挽き成形の凹凸がよく残り、特に内面は凹凸が顕著である。ロクロの回転方向は時計回りである。胴部下半外面には縦方向に並ぶ指頭痕がみられるが、ロクロから製品を持ち上げる際に付いたものであろうか。灰白色を呈し、胎土には黒色粒子を含む。

848・849は壺K。肩部に稜をもち、頸部は長く、口縁部は外反しラッパ状にひらく。848は漆容器で、胴部は三分の一ほど、底部は二分の一ほどが残存する。肩部に1条の凹線を施し、その上には羽状文が巡る。高台は高く、内端部を突出させる。外面には自然釉の降着が著しく、そのため調整は不明瞭である。胎土には黒色粒子を非常に多く含む。内面と底部外面に漆が付着し、胴部の破面にも広範囲に漆の付着がみられる。849の胴部外面はロクロケズリで調整するが、砂粒の移動方向は上部と下部では逆転しており、胴部の調整は正位と逆位の両方で行ったと理解できる。口頸部の接合は三段接合による。外面全体と、口頸部および底部の内面には緑色の自然釉の降着が著しく、高台の底面や内側面にも釉が及んでいる。底部には焼成時の焼け歪みにより亀裂が生じており、その破面の一部にも釉の付着がみられる。胎土は灰白色で、器形や製作技法の特徴などから美濃須衛窯産と考えられる。焼成時に底部が破損した製品を運んできており、調納制のあり方を考える上で興味深い資料である。

850～853は壺Q。肩部に稜をもち、口縁部は大きく外反し、口縁端部を斜め上方に引き出す。853の高台は、端部の内側を下方に引き出す。いずれの個体も、口縁部および胴部上半はロクロナデ調整。852・853は、胴部外面の中位以下にロクロケズリを施す。口縁部内面と肩部外面、胴部内面下半には自然釉の降着がみられ、特に851の口縁部内面と852の胴部内面が著しい。852は胴部内面の上半に墨が付着し、器面の一部が平滑となっている。破片となった段階で転用硯として利用したものであろう。853は胎土に黒色粒子を含み、胴部外面は焼け膨れにより器面の凹凸が激しい。

830～833は平瓶。830は丸底で卵形をなす体部で、頸部は直立して立ち上がり、外反する口縁部につながる。口縁部には段をつくり、端部を大きくつまみ上げる。肩部に径1cm強のボタン状のつまみが2箇所につき、その下には2条の凹線が巡る。外面の調整は、口縁部から体部中位までをロクロナデで調整し、体部下半には平行叩きが残る。内面の調整はロクロナデで、体部にはナデの凹凸がよく残る。また、内面には全体的に白色固形物の付着がみられる。白色物質は肩部では薄い、下方にいくほど厚くなり、底部では1cm近くの厚さをもつ。この白色物質は、破面に沿って外面の一部にも付着し、内容物の成分に関わるものと考えられる。

831は小さな平底と、肩の張った扁球形の体部からなる。外面の調整は、口頸部から体部上半まではロクロナデで、体部下半から底部にはロクロケズリを施す。体部の成形は円盤閉塞による。口頸部と頂部の外面には自然釉が薄く降着する。漆の運搬具で、内外面の各所に漆が付着し、特に口頸部内面と頂部内面で厚い。口頸部の破面にも漆の付着がみられ、打ち割って漆を取り出したことが知られる。

832・833は平底で肩部には稜をもち、頂部は丸みを帯びる。頸部は直線的に開く。832の頂部には、断面長方形の把手の剥離痕が残る。外面調整は口頸部がロクロナデで、頂部はロクロ

ナデの後、ナデ調整を施す。体部側面は上半がロクロナデ、下半がロクロケズリで、底部は外縁にのみロクロケズリを施す。体部の成形は円盤閉塞による。胎土には黒色粒子を少量含む。833の体部の外面調整は、側面上半がロクロナデで、下半はロクロケズリの後、格子目叩きを施す。叩き目は底面外縁にもみられ、一部は底部外面の中央付近にも及ぶ。内面に当て具痕跡は認められない。頂部には自然釉の降着が著しい。内面にも広い範囲に釉の降着がみられ、口頸部は大きく開いた形態であったと推測できる。

これらの平瓶は830が7世紀中頃、831が7世紀後半、832・833が奈良時代の年代が与えられる。

854～874は甕。ほとんどは甕Aになるものと思われる。口縁部の形状は、強く外反し口縁部の長いもの(855～857・859～863)、強く外反し口縁部の短いもの(873・874)、弱く外反するもの(864～867・869・870)、直線的に外に開くもの(868・871・872)、大きく開かず直線的に立ち上がるもの(854・858)などがある。口縁端部の形状も多様で、外側に縁帯をつくり玉縁状をなすもの(855・856・860・866・869)、端部が内湾し玉縁状をなすもの(858・865・867・870)、内側に弱く肥厚し、上端に平坦面をつくり出すもの(854・871)、上下に肥厚するもの(862・874)、上方に肥厚するもの(864・873)、下方に垂下するもの(857)、上端に面をつくり、薄く尖らせるもの(859)、内側に段をもち、やや内傾する面をつくるもの(868)、断面コ字形となるもの(872)などがある。底部形状については、861は尖底に近い丸底で、多くの個体がこの形状に近い底部をもつと考えられる。863は平底で、低い高台をもつ珍しい例である。

口縁部の調整は内外面ともロクロナデで、873・874の外面にはナデに先行する叩き目が確認できる。また867の外面にはナデの後、カキ目を施す。体部外面は、叩きの後カキ目を施すもの(854・856・858・860・862・863・865・867・869・873・874)が多いが、叩きのみもの(859・864・866・871・872)も散見する。

855は口縁部に波状文が3単位巡り、その下方に2条の凹線を入れる。854は口縁部中位に1条の凹線が巡り、856は口縁部中位に2条の凹線を施す。857は外面に黄土を塗って赤黒く発色させ、体部内面の当て具痕は薄い。内外面に緑色の自然釉が降着し、口縁部内面には粘土接合痕が残る。尾張産と考えられる。861は灰白色を呈し、全体的に体部内面の当て具痕が目立たない。胴部のナデ調整などの特徴から、尾張産の可能性もある。862は体部内面の一部にナデを施す。863ではカキ目を入れた後、体部下端付近にヘラケズリを施す。底部外面は不調整で凹凸が残り、内面はナデ調整する。864は内面の当て具痕が薄く、不明瞭である。866は灰白色を呈し、断面はにぶい黄橙色に発色する。868は強いロクロナデにより口縁部外面の凹凸が著しい。870の体部外面下位には、叩きの後縦方向のハケを粗く施す。また、体部中位の一部にはカキ目を施す。871は頸部内面をケズリ調整する。856・859・867・870の肩部外面および870の口縁部内面には、自然釉の降着が著しい。

875～877は甕C。平底で胴径に比して口径が大きく、器高は低い。口頸部は短く直線的に開き、上端に平坦面をつくる。875は、口縁端部がヨコナデにより内側にわずかに肥厚する。肩の張りは弱い。外面調整は、口縁部から体部中位までは叩きの後ロクロナデで、器面に叩き目はほとんど残らない。体部下位にはヘラケズリを施す。内面は、口縁部から体部中位にはロクロナデを施し、体部下位は斜め方向のナデ調整である。叩き調整時の当て具痕跡はロクロナデにより消され、内面にはみられない。焼成がやや不良で、灰白色を呈する。876は肩部に耳状

のつまみを4箇所につす。調整は内外面ともロクロナデ。灰色を呈し、胎土には白色微砂を含む。877は胴部最大径が約60cmとなる大型品。口縁端部は内側に大きく肥厚し、口縁部上端にやや内傾する面をつくる。体部外面は平行叩きを施した後、一部をナデ調整する。内面は、口縁部から肩部まではロクロナデ。それ以下は叩き当て具による青海波文が残る。

c 上層出土土器 (Pl. 27~29, Ph. 76・92・93)

土師器 (Pl. 27・28) 上層からは杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯E、杯G、杯H、皿A、皿B、皿C、小型皿、椀A、椀C、椀D、鉢、高杯A、高杯C、壺A、壺B、小型壺、甕A、甕C、鍋、甑、竈などが出土している。

239~249は杯A。奈良時代に属する239~245は、口径が20.5cm前後の杯A I (243~245)、口径が18.5cm前後の杯A II (242)、口径が15.5~17.0cmの杯A III (239~241) に分けられる。口縁端部は内側に巻き込んで肥厚するもの(239~241・243~245)が主体であるが、242は口縁部上端に狭い面をもつ。243は口縁部の屈曲が著しく、新相を示す。240・241・245はa0手法、243・244はb0手法、239はb1手法で調整する。242は口縁部外面の磨減が著しいが、b1手法であろう。241の底部外面には多くの指頭圧痕が残る。239は口縁部内面に連弧暗文を施し、放射暗文の間隔も密で、平城宮土器ⅡまたはⅢ古段階に位置づけられる。240・241・243~245は内面に一段暗文をもち、241・243は底部内面に螺旋暗文が残る。240は赤褐色を呈し、口縁端部には煤が付着する。

246~249は器形や調整の特徴が新相を示し、9世紀の所産。口径が18cm前後の杯A I (246・247)と口径が13.0~14.0cmの杯A II (248・249)がある。いずれも斜め上方に大きく開く口縁部を有す。口縁端部は246~248は内側に肥厚し、249は内傾する面をつくる。246~248はe-c手法、249はe手法で調整する。249の胴部外面には指頭圧痕が目立つ。

250は杯B。口縁部は内弯しながら立ち上がり、端部には外傾する狭い面をもつ。高台は断面台形で、外に開く。c0手法で調整する。橙色を呈し、胎土には白色粘土が混じる。

251は杯B蓋。口縁端部は丸くおさめ、外面はヘラケズリした後、全面に丁寧なヘラミガキを施す。

252・253は杯C。口縁端部はわずかに内傾する。252は口縁部外面をヨコナデし、内面に間隔の粗い一段暗文を施す。平城宮土器Ⅲ新段階。253は暗文をもたず、胎土に赤色粒子を含む。

254~261は皿A。口径が22~24cmの皿A I (254~256・258・259)と、口径が17~20cm程度の皿A II (257・260・261)がある。254・256・257・260は口縁端部を内側に肥厚させ、平底から口縁部が斜め上方に開く形態を呈する。255は口縁部がなだらかに立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。254~256はa0手法、257・260はc0手法で調整し、254は底部外面に指頭圧痕が残る。254~256・260は内面に一段暗文を施し、255は底部内面に螺旋暗文がある。257は外面に煤の付着が著しく、内面にも黒色炭化物の付着がみられる。255の底部外面には、「=」と「×」を組み合わせたような意匠の記号のヘラ書きがあり(Ph. 125)、260の底部外面には「+」のヘラ書きを施す。254~256・260はおおむね平城宮土器Ⅲ、257は平城宮土器Ⅳ~Ⅴに位置づけられる。

一方、258・259・261は口縁部がなだらかに立ち上がり、底部との境界は不明瞭である。261

は口縁部の開きが大きく、上部はヨコナデにより外反する。258・259の調整はc0手法で、261は口縁部を削り残すe-c手法である。258は口縁端部外面が一部黒色化する。259は赤褐色を呈し、胎土に径1mmほどの赤色粒子が目立つ。258は平城宮土器V、259・261は平安時代のもの。

262・263は皿C。両者ともe手法で調整し、底部外面中央が若干凹む。263は口縁部と底部の境に弱い段を有する。262は胎土に雲母を多く含む。

264～266は小型皿。いずれも「て」字状口縁で、264は端部を上方につまみ上げ、265は端部を内側に肥厚させる。3者ともe手法で調整する。264・265はにぶい黄橙色、266は浅黄橙色を呈する。10世紀末から11世紀初頭の年代が与えられる。

267～272は椀A。狭い平底と、内弯しながら大きく開く口縁部からなる。267～270は器高が高く深い器形で、271・272は器高が低く、時期が下がる。268以外は口縁端部を丸くおさめ、268は端部をわずかに内側に肥厚させる。267は不明瞭であるが、外面にヘラケズリを施し、その他はいずれもc0手法で調整する。267～270は口縁端部を削り残す。

273～286は椀C。上層出土の椀Cで、口縁部が八分の一以上残存する資料は64点を数える。口径は10.0～15.5cmの幅をもつが、11.5～13.5cmを測るものが49点と全体の7割を超える。器高は3.2～4.5cmの範囲におさまるが、径高指数には23.5～33の幅がある。口縁端部の形状は、内傾する面をなすものが多いが、丸くおさめるもの(277・280・284)、薄く尖らせるもの(274・283)、端部外面を外傾させるもの(273)や上端に平坦面をつくるもの(278)もみられる。調整はいずれもe手法で、外面には粘土接合痕が残るもの(276・279～284・286)が多い。277・281の口縁部内面には斜め方向の工具痕が一定間隔で並ぶ。278は胎土に赤色粒子を多く含み、285は径1～2mmの砂粒を多く含む。280の底部外面には墨書がみられるが、判読はできない。

鉢(287)は、口縁部が内弯し、口縁端部は丸くおさめる。調整はe手法。体部外面には指頭圧痕が残る。

288は鉢B。体部は内弯しながら立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。外面は底部から口縁部直下までをヘラケズリする。にぶい黄橙色を呈し、胎土に白色微砂を多く含む。

289～290は高杯A。289は杯部。口縁端部は上方に肥厚する。口縁部をヨコナデし、杯部外面はヘラケズリの後、分割ヘラミガキを施す。内面は灰黄褐色を呈し、一部にタール状の付着物がみられる。290・291は脚部。290は心棒成形のⅡ群土器で、外面を縦方向にヘラケズリし、八角形に面取りする。内面下方にはヨコナデを施す。

291は高杯C。裾部がラッパ状に開き、端部は丸くおさめる。裾部内面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。7世紀代の所産であろう。

292～294は壺B。口縁部は外反し、端部はいずれも丸くおさめる。293は口頸部のヨコナデにより、肩部に弱い稜をもつ。色調は292がにぶい黄橙色で、293が赤褐色を呈する。294は小型品で、口縁部の一部を欠くが、ほぼ完存する。底部は平底に近い丸底をなす。外面調整は口頸部をヨコナデするのみで、体部にはユビオサエの痕跡がよく残る。内面はヨコナデで調整し、一部に粘土接合痕がみられる。灰黄色を呈する。

295～297は甕A。いずれも都城型の甕である。口縁端部は3個体とも内側に肥厚させるが、その方法は、内側に巻き込むもの(295・297)とつまみ上げるもの(296)がある。調整については、口縁部外面はいずれもヨコナデで、295・297ではヨコナデに先行するハケ目がみられる。

296の口縁部内面はヨコナデ調整で、ナデに先行する横方向のハケ目がわずかに確認できる。295・297の口縁部内面は横方向のハケ目調整で、295のハケ目は粗い。体部外面は3個体ともハケ目調整で、295・296のハケ目は粗く、体部内面はいずれもナデ調整である。297は体部器面の凹凸が激しく、浅黄橙色を呈し、胎土には赤色粒子が目立つ。295の外面にはほぼ全面に煤が付着し、296の体部内面には焦げが付着する。

298～300は鍋A。口縁端部は、298・299では内側に肥厚し、300では上下に肥厚する。299は他に比べ、上方への突出が高い。口縁部の調整は、いずれも内外面ともヨコナデである。298は、体部上半をナデで調整し、中位以下に目の粗いハケ目を施す。体部の内面調整は、上半がヨコ方向を基本としたハケ目で、下半はナデ。内面のハケ目は細かく、外面のものとは異なる工具による。体部外面上半には、横方向に3cm程度の帯状に煤の付着がみられる。色調はにぶい黄橙色を呈する。299の体部外面はハケ目調整。体部内面はナデであるが、指頭圧痕が残る。口縁部外面には粘土接合痕が確認できる。色調は橙色を呈する。300の体部外面の調整は、磨滅により不明瞭であるが、縦方向の板ナデあるいはハケ目と考えられる。体部内面はナデ調整である。体部の器面は滑らかではなく、凹凸がみられる。頸部以下の内面には、煤の付着が著しい。浅黄橙色を呈し、胎土に赤色粒子を多く含む。

黒色土器 (Pl. 27) 上層からは、土師器、須恵器の他に黒色土器も出土したが、多くは小片であり、図示できるものは少ない。大部分が内面のみ黒色のA類であり、全面黒色のB類の出土はわずかである。

1061～1067はA類椀。1061は口径18.0cmを測る。口縁部をヨコナデし、体部外面をヘラケズリで調整する。外面にヘラミガキはみられない。胎土には雲母を多く含む。1062は口縁部をヨコナデし、体部外面にはユビオサエの痕跡が残る。外面にはヘラミガキはみられず、内面には密にヘラミガキを施す。1063は口径14.9cm、器高4.0cm。断面三角形の低い高台を付す。口縁部外面には粗いヘラミガキがみられ、内面は全面に密にヘラミガキを施す。口縁部内面には渦状の暗文が入り、底部外面には「井」のヘラ書きがある。1064は底径9.4cmで、他に比べ大きい。低い高台を有し、高台の断面は三角形に近い台形を呈する。内面には密なヘラミガキがみられる。1065～1067は底径が7cmほどである。1066・1067は、断面三角形の高台をもち、高台の高さは1067のほうが低い。両者とも内面には密にヘラミガキを施す。1065の高台は足高でハの字状に開く。

1068はB類の椀。高台は断面三角形で、端部が外側に小さく屈曲する。器面の磨滅が著しいが、内面にヘラミガキがわずかに確認できる。

須恵器 (Pl. 28・29) 上層から出土した須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯E、杯H蓋、皿A、皿B、椀A、椀B、鉢A、鉢D、高杯、盤、平瓶、横瓶、甗、壺A、壺A蓋、壺B、壺C、壺D、壺K、壺L、壺Q、甕A、甕B、甕Cなどがある。

901～905は杯A。口径が13.0～15.0cmの杯AⅢで、いずれも口縁端部は丸くおさめる。底部外面は、901・903・905がヘラ切り不調整、902がロクロケズリで、904がロクロナデである。903・904は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。901・905の底部外面には墨書があるが、文字あるいは記号の断片であり、意味は不明である。

883～895は杯B。口径が19.0～23.0cmの杯BⅠ (891～895)、口径が15.0cm前後の杯BⅢ (888

～890)、口径が11.5～12.5cmの杯BIV (884～887)、口径が10.0cm以下の杯BV (883)がある。径高指数が20代半ばの器高の低い一群(888～890・893・895)と、径高指数が20代後半から30代の器高の高い一群(883～887・891・892・894)があるが、その中間の様相を示す径高指数30代前半の個体も多い。口縁端部は丸くおさめるものが基本であるが、895は口縁端部上面に内傾する狭い面をもつ。884は口縁部上部が外反して開き、888は底部から口縁部がゆるやかに弯曲しながら立ち上がり、高台が底部の内側寄りに付く。底部外面の調整は、杯BIでは892がヘラ切り不調整で、その他の4個体はロクロケズリ。杯BIII～Vでは、884は不明であるが、888はロクロケズリで、その他の6個体はヘラ切り不調整である。885・886・895では口縁部外面から底部外面にかけて自然釉がみられ、逆位で焼成したことがわかる。888・889では口縁部外面から高台側面にかけての範囲に自然釉が降着する。883の外面には底部から口縁部にかけて火襷があり、889は器表面に多くの気泡がみられる。894では、底部外面中ほどに爪状圧痕が四分の三周分ほど確認できる。890は淡緑灰色を呈し、胎土に多くの白色微砂と少量の黒色粒子を含む。また、891・894は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。これらの杯Bの多くは奈良時代に属するが、889は底部外周縁に高台が付き、長岡京期のものとみられる。

878～882は杯B蓋。口径より、879・880は杯BI蓋、882は杯BIII蓋、878は杯BV蓋である。形態は多様で、頂部が丸みをもち、端部が下方に突出するもの(879)、同形で、非常に低いかえりを有するもの(882)、頂部が平坦で外縁部がわずかに傾斜し、端部が下方に突出するもの(878)、頂部が平坦で外縁部が屈曲し段をなすもの(880)がある。881は、焼成時の焼け歪みで頂部が凹む。頂部外面は、878・880・881がロクロナデ、879・882がロクロケズリ調整である。878・881・882のつまみは、頂部が突出する形状を呈する。882は外面全面に、878・880は外面外縁部にのみ自然釉が降着する。880は胎土に黒色粒子を多く含む。これら杯B蓋は、882が藤原宮期～奈良時代初頭、878・879が奈良時代前半、880が奈良時代後半の年代が与えられる。

杯E (906)は平底で、口縁部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部には内傾する面をもつ。胴部下端はロクロナデにより、わずかに屈曲する。底部外面はヘラ切り不調整。焼成がやや不良で、内面は白色を呈し、火表にあたる口縁部から底部外縁までは灰色に発色する。底部外面には、直線のヘラ記号が1条入る。

皿A (896)は、口縁端部を丸くおさめ、内面はヨコナデにより弱い凹線状の凹みを有す。底部外面はロクロケズリで調整し、胎土には黒色粒子を含む。

898・899は皿B。口径が30cm前後の皿BI (898)、口径が20cm程度の皿BII (899)がある。899の底部外面の調整はロクロナデによる。898は焼成がやや不良で白色を呈するが、重ね焼き焼成により、口縁部外面上部は灰色に発色する。899の底部内面には火襷がみられ、胎土には径3～5mmの大きめの砂粒が目立ち、底部外面では黒色粒子が墨を流した様にのびる。

897・900は皿D。口縁端部に平坦面をつくる。900は底部中央を欠損するが、底部が高台より出る、所謂出尻状をなすとみられる。底部外面の調整は、897・900ともにロクロケズリによる。900の口縁部外面には、火襷がみられる。

鉢A (907)は、体部から口縁部までが内湾しながら立ち上がる。底部は平底に近くなると思われる。口縁端部は内側に突出し、断面三角形状で、上部には平坦面をもつ。内面調整は、口

縁部から体部はロクロナデで、体部下端から底部にかけては不定方向のナデを施す。外面は、口縁部から体部中位までをロクロナデ、体部下半をロクロケズリの後、手持ちヘラケズリで調整する。還元炎焼成が完全でなく、淡黄色～灰黄色に発色する。

908・909は鉢D。908は短く外反する口縁部と、若干肩の張った胴部からなる。口縁端部には外傾する面をもつ。外面は、口縁部から胴部中位までをロクロナデ、胴部下半をロクロケズリで調整する。内面調整はロクロナデ。909の口縁部は短く直線的に開き、端部を上方につまみ上げる。肩の張りは908より弱い。内外面とも調整はロクロナデを基本とし、外面の肩部付近にのみロクロケズリを施す。体部外面下半は調整が不十分で、器面に凹凸がみられ、粘土接合痕が残る。体部外面には、斜め左上がりのヘラ描きが3条平行して走る。胎土には黑色粒子を含む。

高杯（910）は短脚で、杯部を欠く。裾端部は上方につまみ上げ、側面は凹む。調整は内外面ともロクロナデで、内面にはナデの痕跡がよく残る。脚部外面には、2箇所自然釉が滴状に付着し、裾部では端部側面にのみ釉の降着がみられる。胎土には黑色粒子を多く含む。

915・916は壺A。915は口縁端部に狭い面をもつ。体部外面下半をロクロケズリで調整し、その他はロクロナデ調整。肩部外面には自然釉が降着するが、口縁部付近には及んでおらず、蓋を被せて焼成したことがわかる。砂粒をほとんど含まない精良な胎土で、灰白色を呈する。916は口縁端部にやや内傾する面をもつ。残存部は内外面ともロクロナデ調整。蓋を被せずに焼成し、口縁部および肩部外面に自然釉が降着する。

912～914は壺A蓋。912・914は口縁端部の内側を薄く挽き出し、焼成時の融着を軽減させる形態とする。913の口縁端部は狭い面をなす。調整は3個体とも同様で、頂部外面はロクロケズリ、口縁部内外面はロクロナデ、頂部内面は不定方向のナデによる。912には中央がやや突き出たボタン状のつまみを付す。913・914の外面には自然釉の降着がみられる。912は焼成がやや不良で、外面は灰白色～灰色、内面は白色を呈する。

924～926は壺B。肩部が強く張る、胴長の器形。924は口縁端部が肥厚し、肩部には径5mmほどの小孔があく方形の把手が付く。残存部の内外面はロクロナデ調整で、外面の肩部下半から胴部にかけてはカキ目を施す。灰白色を呈し、胎土は精良で、砂粒はほとんど含まない。器面の発色の違いから、蓋を被せて焼成していることがわかる。925は胴部から底部にかけて残存するが、底部中央を大きく欠く。平底で、胴部はバケツ状に開く。胴部内面はロクロナデ調整する。胴部外面は、下端から5.5cmまでの範囲にロクロケズリを施し、それより上はロクロナデで調整する。底部外面はヘラ切り不調整。胴部外面の一部には濃緑色の自然釉が流れ、一部は底面にも及ぶ。自然釉は胴部内面の一部にもみられる。焼け膨れが著しく、特に内面の器面は気泡による凹凸が激しい。926は平底とやや丸みを帯びた体部からなり、断面台形の低い高台が付く。ロクロ水挽きで成形し、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には、径2～4mmの砂粒や黑色粒子を含む。

壺D（922）は扁平な体部の小型の壺で、短い口縁部が直立して立ち上がる。高台は付さない。底部外面はヘラ切り不調整で、外周のみに手持ちヘラケズリを施し整える。他はロクロナデ調整。胴部外面には自然釉が降着するが、蓋を被せた状態で焼成していたようで、肩部上半および口縁部は釉の降着を免れる。完形品で出土した。

921は壺L。口頸部上半を欠くが、それ以外は完存する。口頸部外面および胴部外面はロクロナデで、胴部下端にのみロクロケズリを施す。底部外面はヘラ切り不調整。体部の成形は円盤閉塞法により、肩部には薄緑色の自然釉が薄くかかる。胎土は精良で、砂粒をほとんど含まない。胎土の特徴や、底部の切り離しが糸切りでなく、製作技法が三段構成であることから、美濃須衛窯産の可能性がある。

919・920は壺M。919は口頸部を欠くが、それ以外は完存する。胴部外面はロクロナデで、底部外面はヘラ切り不調整。肩部外面および底部内面には、自然釉の降着が著しい。920は肩部下半以下が残存し、断面台形の高台をもつ。残存部は内外面ともロクロナデ調整。胴部外面および底部内面には自然釉が降着し、特に胴部外面の三分の一ほどが著しい。胎土には黑色粒子を多く含む。両者とも、ロクロ水挽きで成形したと考えられる。

壺N(923)は倒卵形の器形で、ロクロ水挽きで成形する。胴部外面下端にのみロクロケズリを施し、底部外面は不調整。底部内面には粉紅色の自然釉がみられる。灰白色を呈し、胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。

壺Q(917)は、平底で肩の張る胴部をもつ。頸部より上を欠くが、外反する広口の口頸部が付くと考えられる。高台は側面を外に引き出し、底端部は下方に短く突出する。肩部外面はロクロナデで、胴部外面はロクロケズリで調整する。底部外面は不調整で、布目状の圧痕が残る。また、高台の内側には爪状圧痕が四分の三周分ほど確認できる。内面は肩部および胴部がロクロナデで、底部は不定方向のナデ調整。肩部外面および底部内面には、自然釉が薄く降着する。

平瓶(911)は肩が張り、体部は台形状をなす。口頸部を欠き、頂部には断面方形となる把手の剥離痕がある。体部側面はロクロナデで調整し、下端にはロクロケズリを施す。底部外面は不調整で、布目状の圧痕が残る。体部は、円盤閉塞法で成形する。胎土には黑色粒子を多く含み、頂部から体部側面にかけて自然釉が降着する。気泡による焼け膨れがあり、器表面は凹凸が著しい。

甕(918)は、口頸部上部を欠くが、それ以外は完存する。胴部は球状を呈し、頸部には1条の凹線を入れる。胴部中央には径約1.5cmの孔を穿ち、胴部外面の上半はロクロナデ、下半はロクロケズリで調整する。肩部の内面には絞り痕がみられ、円盤閉塞の痕跡は確認できない。頸部外面および胴部下半から底部にかけての外面に広く自然釉が降着する。

927～931は甕A。口縁端部の形状は多様で、断面がコの字形となるもの(927)、上端に平坦面をつくるもの(928)、内側をつまみ上げ突出させるもの(929)、玉縁状になるもの(930・931)などがある。いずれも体部は叩きで整形し、927・928・931は外面にカキ目を加える。口縁部は内外面ともロクロナデが基本であるが、927では外面に弱いカキ目を施し、928では頸部内面にケズリ調整を加える。また、930では口縁部外面にロクロナデに先行する叩きの痕跡がわずかに確認できる。927・929・930では、体部外面や口縁部内面に自然釉が降着するが、928・931には自然釉はみられない。928・931は灰白色を呈し、928は胎土に黑色粒子を含む。927は胎土に径1～2mmの砂粒を多く含み、931の胎土は白色微砂を多く含む。

932は甕C。口縁部のみが残る。口縁端部は内側に肥厚し、上部に平坦面をつくる。口縁部は内外面ともロクロナデで、頸部内面にはヘラケズリを施す。体部も残存部はロクロナデ調整

で、叩き調整の痕跡はみられない。また、内外面とも自然釉の降着はみられない。灰白色を呈し、胎土に白色微砂を含む。

ii SE4740出土土器 (Pl. 30・31, Ph. 78・79・94～100)

SE4740は、東西大溝SD4130南側の近接した位置に設けられた井戸である。建築部材を転用し、一辺0.9mの方形の井戸枠を組む。井戸掘方は、上部は径4.8～6.2mの不整円形を呈し、0.3～0.6mの深さで段をなして、径4m、深さ3mの竪穴を掘り込む。竪穴部分は下方ほど径を狭め、底部では径1.7mとなる。掘方の深さは3.6mである。

調査時の所見では、井戸枠内の埋土は、最下層（灰褐色砂礫）、下層（褐色砂質土）、中層（砂交じり褐色粘質土）、上層（青灰褐色粘質土）の大きく4層に分けられている。別表6には各層の器種構成を示した。個体数の算出はSD4130の場合と同様、口縁部が八分の一以上残存する資料を基準とした。以下、掘方および埋土各層ごとに報告する。

掘方出土土器 (Pl. 30) 掘方からは、土師器では杯A、杯C、杯G、杯H、皿A、高杯C、鉢H、甕、須恵器は壺、甕が出土した。出土量は少なく、図化できたものは土師器のみである。

杯A (301) は、口縁端部が内側に肥厚する。暗文は一段分が残るのみであるが、施文角度から考えると、二段暗文であろう。杯C (302) は、口縁端部に緩い内傾面をもつ。a0手法で調整し、一段暗文は細く垂直に施す。杯G (303)・杯H (304) は、ヨコナデにより口縁端部が弱く外反する。鉢H (305) は口縁部付近の器壁が厚手で、口縁部が緩やかに波打つ。高杯C (306) は、脚部と杯部の境に、接合時のナデの痕跡が明瞭に残る。

甕 (307) は、口縁端部が外側に肥厚し、内面は横方向のハケ目で調整する。口縁部外面中位には粘土接合痕が明瞭に残る。

これら掘方出土土器は断片的であるが、年代の判定できるものは飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。

最下層出土土器 (Pl. 30) 最下層からは、土師器 (308～329) 杯A、杯C、皿A、椀C、蓋、甕A、甕C、鍋、須恵器 (941～946) 杯A、杯B、杯B蓋、平瓶、壺A、甕などが出土している。器種構成をみると、土師器では38個体中、甕が20個体で半数以上を占める。また、器種構成の算出からは除外しているが、土師器甕体部の破片が多量に出土しており、これらを含めると出土総量に占める甕の割合はさらに高くなる。

308～311は土師器杯A。いずれも口縁端部を内側に肥厚させるが、311は肥厚が弱い。310・311はb1手法で調整する。口縁部の暗文構成は、308・309が二段暗文、310・311が連弧暗文で、311は上部の暗文がループ状になる連弧暗文A。308は径高指数が23.7以上で上段の放射暗文帯の幅が広く、飛鳥Ⅳに属する。309は藤原宮期、310・311は平城宮土器Ⅱの年代が与えられる。

312は杯B蓋。頂部外面はヘラケズリの後、ヘラミガキを施す。胎土には赤色粒子を含む。

313～315は杯C。いずれもa0手法で調整する。径高指数は314で14.7。3個体とも一段暗文を施すが、315は暗文の施文間隔が粗い。314・315は胎土に雲母を含む。313は飛鳥Ⅴ、314・315は奈良時代前半のもの。

316・317は皿A。両者とも、口縁端部は内側に巻き込み肥厚する。調整は316がb0手法、317がc0手法。316は一段暗文をもつが、施文間隔は粗い。

318・319は椀C。口縁端部は、318では明瞭な内傾面をつくり、319は丸くおさめる。両者とも、口縁部内面には右上がりの工具痕が不定間隔で残る。

320～328は甕A。口縁部は、外弯して開くもの(321～325)と直線的に開くもの(320・326～328)がある。口縁端部の形状には、つまみ上げるもの(321・323・327)、丸くおさめるもの(322・325・326)、ヨコナデにより上面が凹むもの(320)、断面コの字形のもの(328)などがあり、多様である。口縁部は内外面ともヨコナデで調整するものが多数を占めるが、323・324は内面を目の粗い横方向のハケ目で調整する。また、321では頸部内面に横方向のハケ目が残る。体部は外面をハケ目、内面をナデで調整するものが多く、321・323・324・327の外面のハケ目は目が粗い。325・326では体部外面下半にケズリを施し、内面をハケ目で調整する。328は体部内面上半にケズリを粗く施し、胎土には径1～3mmの黑色砂粒を多く含む。320～324・327は都城型で、325・326は近江型、328は河内型。320の頸部外面には、粘土接合痕が横方向に長く残る。320・327は焦げにより内面全体が黒色となり、325は外面の大部分が煤により黒色化する。また、321・322・328は体部中位に黒斑を有する。326は胎土に径1mm以下の細かい砂粒を多く含む。

鍋(329)は、胴部外面を縦方向のハケ目で調整し、口縁部内面には横方向のハケ目を施す。ともにハケ目は粗い。胴部内面はナデ調整で、口縁部外面には黒斑がある。

須恵器杯A(945)の底部外面はヘラ切り不調整。胎土に白色微砂を含む。

943・944は杯B。両者とも底部外面はヘラ切り不調整で、胎土には黑色粒子を含む。944の底部内面には、不定方向の条線が入る。943の底部外面には、「一」状の墨線がみられる。

941・942は杯B蓋。両者ともかえりをもたず、頂部外面はロクロケズリで調整する。942は外面の周縁部にのみ自然釉が降着し、胎土には黑色粒子が目立つ。

946は胴部最大径約24cmとなる壺の胴部。外面下半は、ロクロケズリの後、叩きを施す。胴部上半は、内外面ともにロクロナデによる凹凸が明瞭に残る。肩部外面には自然釉が降着する。壺Aになるか。

これら最下層出土土器には、藤原京期から奈良時代半ば頃までの年代が与えられる。

下層出土土器 (Pl. 31) 土師器(330～337)は杯A、皿A、椀A、椀C、甕A、須恵器(947～954)では杯A、杯B、杯C、皿A、壺Lなどが出土している。下層出土土師器の器種構成で特筆すべき点は、椀Cが10個体と過半を占め、そのうちの8個体に「香山」の墨書をもつ点である。椀Cの比率が高く、かつ「香山」の墨書土器を含むことは、SD4130中層出土土器の特徴に共通する。また、須恵器では、壺Lの比率が高く、さらにほとんどが完形に近い状態で出土している点が注目できる。

330・331は土師器杯A。330は口縁部の一部を欠くが、それ以外は完存する。331は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部の肥厚が弱い。径高指数は330が19.3、331が19.7。両者ともにa0手法で調整する。330は口縁部に粗い一段暗文を施し、底部には螺旋暗文がある。底部外面には指頭圧痕が多くみられ、胎土に雲母を多く含む。平城宮土器Ⅲの新段階。331は暗文をもたず、底部外面に木の葉の圧痕が残る。

皿A(332)は完形で出土した。b0手法で調整し、内面に暗文は施さない。灰白色を呈し、底部内面には「△」(記号)のヘラ書きを施す。

333・334は椀C。334はほぼ完形で出土した。334は「※」、333では全形は不明であるが、記号のヘラ書きを底部外面に施す。いずれも焼成後のものである。334は胎土に赤色粒子を含む。

335～337は甕A。いずれも都城型で、口縁端部を内側に強く巻き込み肥厚させる。外面は、口縁部がヨコナデ、胴部はハケ目調整であるが、336・337では頸部から口縁部にかけて、胴部のハケ目に先行する、目の粗い縦方向のハケ目が残る。口縁部内面の調整は、335がヨコナデ、336・337が目の粗い横方向のハケ目である。胴部内面はナデ調整を基本とし、335・337では一部にハケ目がみられる。337では胴部下半を中心に指頭圧痕が明瞭に残る。3個体とも胎土に赤色粒子を含み、底部外面を中心に煤が付着する。また335・337は、焦げにより内面全体が黒色化する。

須恵器杯A (947) は口縁端部を丸くおさめ、胎土に雲母を多く含む。

杯B (948) は完形品で、断面方形の低い高台が底部外周に寄って付く。底部外面には不定方向のナデ調整を施す。外面には広範囲に自然釉がみられるが、重ね焼き焼成のため、底部中央付近のみは釉の降着を免れる。

杯C (950) は土師器杯Aを模した器形で、口縁端部内面に1条の強い凹線が巡る。底部外面はロクロケズリで調整する。灰白色を呈し、胎土には雲母を含む。

皿A (949) は完形品。口縁端部内面には1条の凹線が巡る。口縁部のロクロナデが強く、口縁部外面にその痕跡がよく残る。底部外面には不定方向のナデを施す。色調は灰白色で、重ね焼きにより、口縁部外面上部のみが暗く発色する。胎土には雲母を多く含む。底部外面には焼成後の「井」のヘラ書きを入れる。

952～954は壺L。球形の胴部で、直立する頸部から口縁部が強く屈曲し、口縁端部を上方につまみ上げる。954は口縁部をわずかに欠損するのみで他は完存する。952・953も頸部以下は完存するが、口縁端部を全て欠き、意図的に打ち欠いた可能性がある。952・953は、やや肩が張る器形となる。954は胴部外面下半をロクロケズリで調整し、952・953は胴部下端にのみロクロケズリを施す。953の高台底面には木目の条線が残る。木製の作業台の痕跡であろう。953・954には肩部内面に円盤閉塞の痕跡が認められるが、952では確認できない。3個体とも肩部を中心とした外面と、口縁部内面および底部内面に自然釉が降着する。

壺M (951) は、口頸部以外が完存し、口頸部を意図的に打ち欠いた可能性がある。胴部外面はロクロナデで、肩部外面と底部内面には自然釉が降着する。胎土には黒色粒子を多く含む。

これら下層出土土器には、奈良時代中頃の平城宮土器Ⅲから、奈良時代後半にかけての年代が与えられる。

中層出土土器 (Pl. 31) 中層からは、土師器 (338～345) 杯A、皿A、皿C、椀A、椀C、壺E、小壺、甕A、須恵器 (955・956) 杯A、杯B、壺、壺蓋などが出土した。

338・339は土師器皿A。339は口縁部の一部を欠くが、それ以外は完存する。ともにc0手法で調整する。338は口縁部外面に漆を塗布し、黒く光沢感をもつ。339は口縁端部外面が黒色化し、漆を塗布したとみられ、底部内面には「※」の焼成後の線刻がある (Ph. 126)。細部は異なるが、SD4130上層出土の土師器皿A (Pl. 27-255, Ph. 125) のヘラ書きと同じ記号であろう。

皿C (340) は口縁端部に内傾する面をもつ。e手法で調整し、底部外面には指頭圧痕の凹凸が多く残る。

341・342は椀A。いずれも完形品で、口径はほぼ同じである。c0手法で調整し、341では口縁端部までケズリが及ぶが、342では口縁端部を削り残す。内面はハケ目調整の後、ヨコナデを施す。

椀C (343) も完形品で、内面はハケ目を施した後、ヨコナデで調整する。外面には、粘土接合痕が螺旋状にほぼ一周残る。胎土に赤色粒子を含む。

壺E (344) は底部のみ残存する。外面は磨滅が著しく、調整は不明である。胎土には赤色粒子と多くの雲母を含む。

甕A (345) は、口径15cmほどの小型品で、ほぼ完形で出土した。口縁端部は内側に肥厚する。口縁部外面はヨコナデで、ナデに先行する縦方向のハケ目がわずかにみられる。口縁部内面および胴部外面にはハケ目を施すが、後者のハケ工具のほうが目が細かい。胴部内面の調整はナデで、一部に指頭圧痕が残る。底部外面は全面が煤により黒色化する。

須恵器杯A (956) は、底部にわずかな丸みをもち、外面はヘラ切り不調整である。

壺蓋 (955) は、つまみ以外が完存する。外面にはほぼ全面に自然釉が降着する。

これらの土器は、おおむね奈良時代末の平城宮土器Vから、長岡京期に位置づけられる。

上層出土土器 (Pl. 31) 土師器 (346~351) は杯A、皿A、椀A、椀C、須恵器杯A、杯B、壺B、および黒色土器 (1069・1070) の椀Bなどが出土している。347~349・351は、胎土に雲母が目立つ点で類似する。

杯A (346) と椀A (347) は9世紀前半に比定できるもの。杯Aは口縁端部が内側に肥厚し、c0手法で調整する。胎土には赤色粒子を多く含む。椀Aは口縁端部を丸くおさめる。外面全面をヘラケズリで調整するが、ヘラミガキは施さない。

杯A (348) および皿A (349) は、9世紀後半の資料である。杯Aは口縁端部が内側に軽く肥厚し、e手法で調整する。外面には粘土接合痕がみられる。皿Aは口縁端部を内側に肥厚させ、調整はe手法。底部内面には刀子状利器の使用痕が確認できる。

10世紀前半に比定できるものには、杯A (350) と皿A (351) がある。杯Aはe手法で調整し、口縁部は強いヨコナデにより屈曲する。皿Aは、口縁部がヨコナデにより外反し、口縁端部は内側に肥厚する。調整はe手法で、底部外面には指頭圧痕が残る。

1069・1070は黒色土器A類の椀B。底部に断面三角形の低い高台を付す。e-c手法で調整し、両者とも外面のヘラケズリは粗い。1070は外面に粗いヘラミガキを施すが、1069にヘラミガキはみられない。内面には口縁端部に1条の沈線を入れ、密なヘラミガキを全面に施す。1069は口縁部に螺旋暗文が半周ほど巡り、底部には平行ミガキを施した後に崩れた螺旋暗文を入れる。1070は、口縁部中位に一単位のみ螺旋暗文が2箇所に入る。両者とも、胎土に赤色粒子と多くの雲母を含む。これらは350・351と同じく、10世紀前半の所産と考えられる。

B 道路側溝・その他の溝出土土器

i 六条条間路側溝出土土器 (Pl. 32, Ph. 101)

六条条間路SF4750は、SD4139を北側溝、SD4311を南側溝とする。北側溝SD4139から比較的まとまった量の土器が出土した。

北側溝SD4139出土土器 土師器は杯A、杯C、杯G、杯H、杯X、皿A、皿H、皿X、高杯A、高杯C、甕、鍋、須恵器は杯A、杯B、杯B蓋、平瓶、壺C、短頸壺が出土した。

土師器杯A (361) は平底の底部から内弯気味に口縁部が立ち上がり、端部を内側に肥厚する。便宜上杯Aとするが、典型的な杯Aとは形態が異なり、暗文構成も異なる。同形態の杯は藤原宮SD2300³の他、一定量存在する。b1手法で調整し、口縁部直下までヘラケズリを施す。内面に放射暗文と下向きの連弧暗文Aを施す。杯Cは杯C I (362)、杯C II (363・364)、杯C III (365) がある。362は底部付近の破片。外面は器面剥離が著しいが、a1手法で調整するとみられる。内面に一段暗文を施す。364はやや深い形態であり、口縁端部にわずかに内傾する面をもつ。363・365は浅い形態で、口縁端部に沈線状の段がある。一段暗文を施し、a0手法で調整する。363の復元口径は12.8cm。杯Gは杯G I (366) と杯G II (367) がある。366は薄手のつくりで、口縁端部内面に小さく内傾する面をつくる。精良な胎土で、杯Cに似た杯Gaである。367は口縁部が外反する。胎土に白色微砂と少量の金雲母を含む。杯Hはb0手法で調整する粗製の杯で、口縁部と底部との境に段があり口縁部が外反するもの (369) と境に稜がつくもの (370・371) がある。いずれも淡褐色の色調を呈し、胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。なおSD4139出土の杯Gと杯Hの破片量を比較すると、杯Hの方が多い。杯X (368) は口縁部を強くヨコナデし、口縁端部が面をなして内傾するものとした。器壁が厚く、胎土も粗い。皿A (372・373) は口縁部が底部から丸みをもって立ち上がる形態である。372は口縁部がやや内弯し、端部が内面にわずかに肥厚する。b1手法で調整する。373はやや深い形態で、口縁端部を丸くおさめる。b0手法で調整する。内面に薄くススが付着し、外面にもススが付着する。灯火器として使用したと考えられる。374は口縁部をヨコナデし、底部をヘラケズリで調整する粗製の皿Hで、口縁部と底部の境にわずかに段が付く。黄褐色を呈し、赤褐色粒子を多く含む。375は外面を口縁部直下までヘラケズリで調整する皿H。やや深い形態で、口縁端部を丸くおさめる。胎土と色調は杯Hに似ており、黄褐色を呈し、赤褐色粒子を含む。高杯A (376) は脚部の破片で、粘土紐を径4～5cmの円筒で輪積みして成形するI群土器である。外面を上向きの縦方向のヘラケズリにより面取りする。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。高杯C (377) は杯底部に口縁部の粘土を貼り付けて成形するもので、杯底部と口縁部の間に段をもつ。脚部内面には絞り痕跡が残る。

甕は口径25cm前後の中型品 (378・379) と口径30cm前後の大型品 (380) がある。378は口縁端部を上方につまみ出し、外側に面をなす。外面ハケ目調整、内面ナデ調整の都城型甕である。379は口縁端部を丸くおさめ、わずかに上方に肥厚する。体部外面をハケ目調整する。380は口縁端部上面に面をもち、内面に縦方向のケズリ調整を施す。胎土に赤褐色粒子と金雲母を含む。鍋 (381～383) も中型品と大型品がある。381は口縁端部を丸くおさめ、灰褐色の色調を呈する。382は口縁端部に面をもち、外面に斜め方向、内面に横方向の粗いハケ目調整を施す。胎土、調整が後述のSK4327出土の522に似る。383は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。外面に縦方向のハケ目調整、内面にナデ調整を施す。

須恵器杯A (961) は口縁部が外方に開く形態である。底部は丸みをもち、口縁部との境にゆるやかな稜がつく。ヘラ切りの後、ナデ調整を施す。胎土に白色微砂を含む。杯B蓋 (962～965) は杯B I 蓋、杯B III 蓋がある。962・965は杯B I 蓋で、962は口縁端部とかえりの高さが等

しい。965は径3.4cmの大きなたまみを貼り付ける。胎土に白色微砂を多く含み、2～5mmの白色砂粒が少量混じる。963・964は杯BⅢ蓋で、頂部から口縁部にかけてなだらかに弯曲する形態である。964は中央が突出する擬宝珠状のつまみを貼り付ける。つまみ径は2.2cm。胎土に黒色粒子と0.5～4mmの白色砂粒を含む。

壺C(966)は口縁部が直立し、端部を丸くおさめる。短頸壺(967)は口縁部が直立し、端部をわずかに外方へつまみ出す。肩はあまり張らずなだらかな器形である。

南側溝SD4311出土土器 土師器杯C、須恵器杯A、杯B蓋、杯G蓋、壺C、甕A、甕Cが出土した。

土師器杯C(384)はやや浅い形態で、口縁端部はわずかに外反し、内面に内傾する面をつくる。b0手法で調整するが、ヘラケズリの範囲が広い。内面の暗文は磨滅により観察できない。

須恵器杯A(970)は平底で、外方に開く口縁部が丸みをもって立ち上がる。底部はヘラ切り不調整。胎土に白色砂粒を少量含む。杯BⅠ蓋(969)は頂部から口縁部にかけてゆるやかに下る。端部を欠損するが、かえりのつかないタイプである。径3.4cmの大ぶりの擬宝珠状つまみを貼り付ける。淡青灰色を呈し、胎土に白色微砂を少量含む。杯G蓋(968)は平坦な頂部から外方に開く口縁部が付き、かえりは口縁端部よりも内側に入る。山形のつまみを貼り付ける。

壺C(971)は口縁部が直立し、端部を丸くおさめる。肩部はなだらかで沈線状の段が1条巡る。体部外面の底部付近にロクロケズリを施す。肩部外面に「惣」の刻書があり、口縁部外面と体部外面中位には「V V V」のヘラ書きがある。いずれも焼成前に先端の細い鋭利な道具で記している。甕A(972～974)は口縁部を図示した。972は口縁部を丸くおさめ、端部直下と頸部にそれぞれ低い突帯状の段をもつ。973は口縁部が外反し、端部外面に面をもつ。肩部にカキ目を施す。974は口縁部が外反し、水平に開いた端部を丸くおさめる。頸部に1条の沈線を施す。甕C(975)は口縁部が外方に直線的に開き、端部を内側に肥厚させる。

以上のSD4139・4311出土土器は飛鳥Ⅲの杯G蓋(968)を含むが、飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

ii 東三坊坊間路側溝出土土器 (Pl. 32)

東三坊坊間路SF4300は、東側溝がSD4301で西側溝がSD4302となる。遺構の削平が著しく、土器の出土量も六条条間路両側溝に比べ少ない。

東側溝SD4301出土土器 土師器杯C、杯H、高杯C、鉢、甕と、須恵器杯B、横瓶、甕が出土した。

土師器杯CⅠ(386)はやや浅い形態で、口縁端部が内傾する面をなす。a0手法で調整し、ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。胎土に白色砂粒を少量含む。杯H(387)は口縁部が外反し底部との境に鈍い稜がある。内外面に漆が付着する。385は鉢。口縁部が内弯気味に直立し、端部を丸くおさめる。体部外面は口縁部より下を手持ちヘラケズリで調整する。古墳時代の所産の可能性がある。

須恵器杯B(976)は底部の破片で、底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。底部内寄りに低平な高台を貼り付ける。底部はヘラ切りの後、軽くナデ調整を施す。横瓶(977)は口縁部が直立し、端部に外傾する面をつくる。外面は格子叩きで調整する。胎土は白色微砂をやや多く含む。

西側溝SD4302出土土器 土師器鉢Aと壺Aの破片、須恵器杯G蓋、壺Bが出土した。

須恵器杯G蓋(978)は平坦な頂部から口縁部がなだらかに開く。頂部内面はロクロナデ調整の後、中心部分を一方向のナデ調整で仕上げる。頂部に「|」のヘラ記号を記す。壺B(979)は体部下半から底部にかけての破片。平底の底部で、体部が直立する。外面にロクロケズリを施し、底部外面はナデ調整を施す。内外面に自然釉が降着する。

これら東三坊坊間路SF4300の両側溝出土土器は、飛鳥Ⅱ～Ⅲに属する須恵器杯G蓋(978)を含むが、土師器杯C(386)や須恵器杯B(976)からみて、飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

iii その他の溝出土土器

南北溝SD4131出土土器 (Fig.127, Ph.102) SD4131は、東西大溝SD4130に南から合流する南北溝である。合流点の南方には橋脚SX4134、護岸施設SX4133を設けており、その南でSD4132が東から合流する。

出土土器には土師器杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、鉢B、高杯A、壺A、鍋B、須恵器杯A、平瓶、長頸壺があり、皿Aなど土師器の出土量が多い点が特徴的である。層位は上層と下層に分かれ、当初の南北溝の時期(下層)と、後に東西溝SD4132が接続する時期(上層)がある。393・405・983が下層からの出土である。

389・390は土師器杯AⅠである。389は口縁部が直線的に開き、端部を小さく内側に肥厚する。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。色調は褐色を呈し、胎土に白色微砂と赤褐色粒子を少量含む。390は口縁端部をわずかに内側に肥厚する。b0手法で調整し、内面の暗文は磨減により不明である。径高指数は27.0。胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。口縁部と底部内面にススと灯芯痕が残り、灯火器として使用したことが分かる。391は杯AⅢである。底部はやや丸みを持ち、口縁部が外方へ立ち上がる。口縁端部をわずかに肥厚する。外面をb1手法で調整する。内面の暗文は、器面が磨耗しているために観察できない。径高指数は23.3。胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。杯B(397)は底部から丸みをもって口縁部が立ち上がり、端部を小さく内側に肥厚する。底部外寄りに断面方形の高台を貼り付ける。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。胎土がやや粗く、白色砂粒を多く含む。杯B蓋(388)は頂部が平坦な小ぶりのつまみを貼り付ける。頂部外面に4分割のヘラミガキを施す。内面は黒色を呈し、螺線暗文の有無は不明である。内面に「×」の針書きを焼成後に記す。392・393は杯CⅠである。392は浅い形態で、口縁端部を丸くおさめる。a0手法で調整する。393はやや深い形態で、口縁端部に内傾する面をなす。a0手法で調整し、内面に一段暗文を施す。径高指数は28.2。口縁部と底部内面にススと灯芯痕が残り、灯火器として使用したことが分かる。杯G(394～396)は、いずれも口縁端部に内傾する小さな面をもつGbタイプである。394・395は褐色の色調を呈し、胎土に赤褐色粒子を含む。396は黄褐色の色調を呈し、胎土に赤褐色粒子と白色砂粒を多く含む。皿A(401～404)は、口縁部と底部との境が不明瞭で底部が丸みをもつ形態が多い。401は口縁部が内弯して開き、端部を小さく内側に肥厚する。a0手法で調整し、底部内面に螺旋暗文と一段暗文を施す。402は底部が平底気味で、口縁部が直線的に開く。口縁端部を内側に折り返し、上面に平坦な面をもつ。b0手法で調整し、底部内面に螺旋暗文と放射暗文を施す。器壁が薄く、シャープなつくりである。褐色を呈し、胎土に赤褐色粒子をやや多く含む。403は口縁端部を

内側に巻き込み、上面に平坦な面をもつ。a0手法で調整する。胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。404は口縁端部を内側に肥厚し、外面に外傾する面をもつ。a0手法で調整し、胎土に白色微砂を少量含む。鉢B(400)は、外方に開く体部から口縁部が直立し、端部に内傾する面をもつ。内面を板状工具で調整した後、一段暗文を施す。外面は口縁部付近をヨコナデ調整、以下はヘラケズリを施す。高杯A(399)は杯部から脚部にかけての破片である。心棒成形のⅡ群土器で、脚柱部外面に下から上への縦方向のヘラケズリを施し面取りする。内面には絞り痕が残る。杯部外面に分割ヘラミガキを施す。褐色を呈し、胎土に白色微砂をやや多く含む。398は大型の高杯としたが、蓋の可能性もある。口縁部が内弯しながら大きく開き、端部を内側に小さく巻き込む。外面は上から下方向へヘラケズリ調整を施し、口縁部との境に緩い稜をつくり出す。内面はヨコナデ調整で、暗文はない。胎土に1~3mmの白色砂粒をやや多く含み、赤褐色粒子を少量含む。

405・406は鍋Bである。405は口縁部が外反し、端部外面に沈線状の段をもつ。外面にハケ目調整を施し、把手を貼り付ける。内面は口縁部にハケ目調整、体部にヨコナデ調整を施す。胎土に3~5mmの白色砂粒を含む。406は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁端部に外傾する面をなす。体部外面には単位幅の狭いハケ目調整を施した後、体部上半にヘラミガキを施す。把手は、貼り付け手法により接合する。口縁部に焼成前に上から下への刺突による径1.1cmの円形の穿孔を施し、把手にも焼成前穿孔を施した痕跡がある。胎土に白色微砂と雲母を少量含む。内外面にススヤコゲの付着は確認できず、内面の器面が磨滅するが、これは煮沸によるものかは不明である。口縁部と把手に穿孔を施し、外面にヘラミガキを施す同様な鍋は、飛鳥池遺跡のSD1130とSD1173から出土している⁴。

須恵器杯AⅡ(980)は、平底の底部と口縁部の境に稜がつく。底部はヘラ切り後、粗いナデ調整を施す。内面に焼成時の降灰がみられ、漆が付着する。平瓶(981)は肩部がほぼ水平で、底部と体部外面下半にロクロケズリ調整を施す。体部を円盤閉塞した後、口頸部を接合している。体部外面に焼成前の線刻がある(Ph.120)。淡青灰色を呈し、胎土に1~3mmの白色砂粒を少量含む。胎土や形態からみて、猿投窯産の可能性が高い。982は長頸壺の口頸部。口縁端部を一部欠いており、その破面と頸部内面付近に漆が付着する。台付長頸壺(983)は体部下半が残存する。肩部下に櫛状工具による列点文を巡らせ、その下に1条の凹線が巡る。体部外面下半にロクロケズリ調整を施す。底部にハの字状に大きく開く脚部を貼り付け、脚端部は外方につまみ上げる。脚部内面に火襷がある。砂粒が目立つ胎土で、白色微砂を含む。底部内面に白色付着物が認められる。

これらSD4131出土の土器は、飛鳥Ⅳ~Ⅴの特徴を示す。

東西溝SD4132出土土器(Fig.127, Ph.101) SD4132はSD4130の約10m南方を西流し、南北溝SD4131に流れ込む溝。SD4131と同時に廃絶したと考えられる。土師器杯A、杯B、杯H、皿A、高杯C、須恵器杯A、杯B蓋、甕が出土した。

土師器杯A(407)はやや深い形態で、口縁端部を内側に小さく巻き込む。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。杯B(408)は底部外端に外方へのびる高台を貼り付ける。口縁端部をわずかに内側に巻き込み、内面に二段暗文を施す。外面は器面剥離が著しく、調整は不明である。胎土に1~3mmの白色砂粒をやや多く含む。杯H(413)はやや深い形態で、口縁部がゆるや

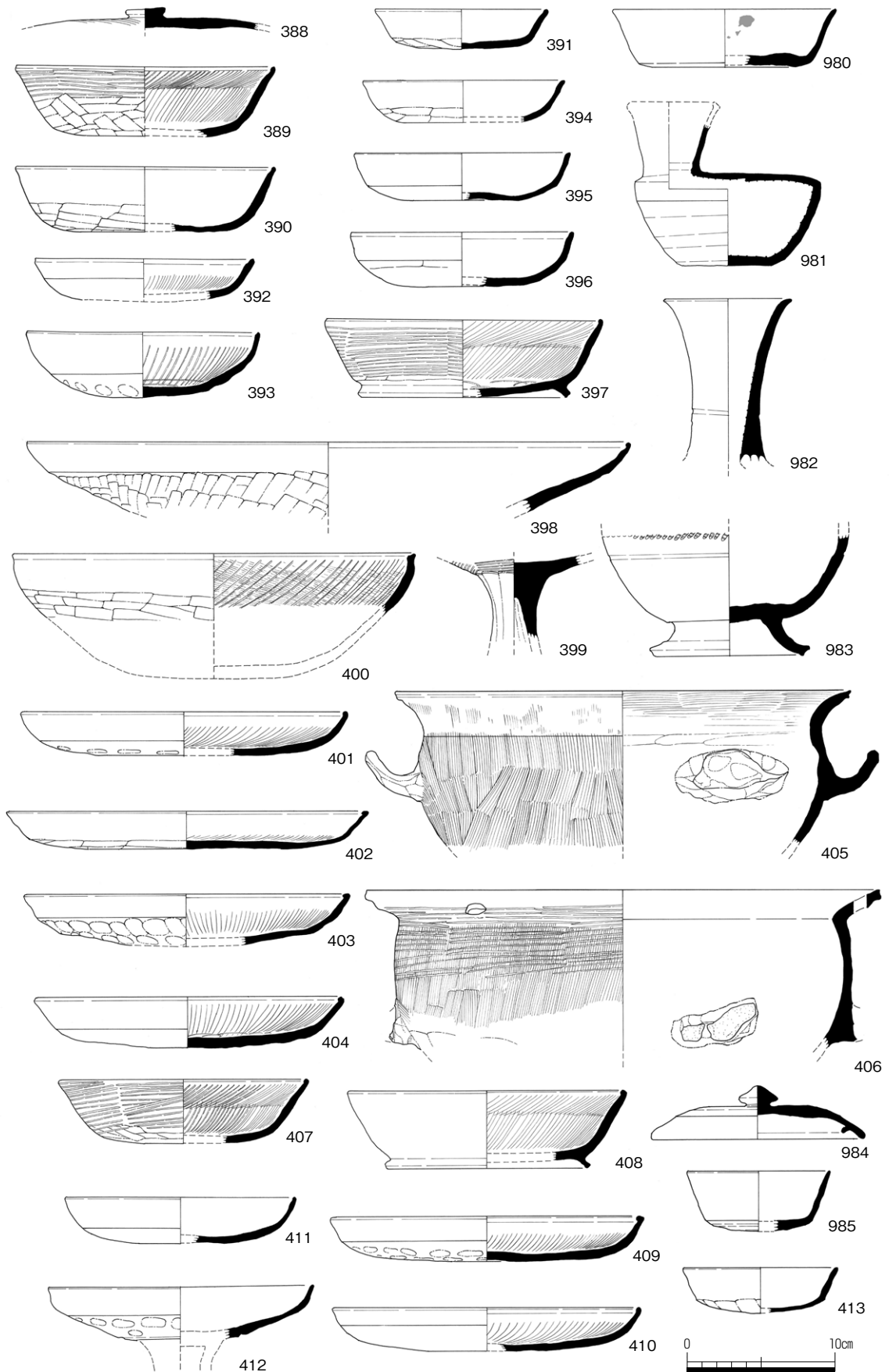


Fig. 127 SD4131・4132出土土器 1:4

かに立ち上がり、底部との境に段をもつ。皿Aは皿A I (409・410) と皿A II (411) がある。409・410は、丸底気味の底部から口縁部がゆるやかに立ち上がり、端部を内側に肥厚する。a0手法で調整し、内面に一段暗文を施す。褐色を呈し、胎土に白色砂粒を含む。411は丸底気味の底部から口縁部がやや屈曲して立ち上がり、端部を丸くおさめる。a0手法で調整し、内面は磨滅のため暗文の有無は不明である。底部外面には黒斑がある。褐色の色調で、胎土に白色砂粒をやや多く含む。高杯C (412) は杯部の破片。浅い皿状の形態で、口縁端部を丸くおさめる。内面はヨコナデで調整し、暗文は施さない。

須恵器杯A (985) は深い形態で、丸みをもった底部からゆるやかに口縁部が立ち上がる。底部はロクロケズリ調整を施す。胎土に白色微砂を含む。杯B蓋 (984) は算盤玉状の径2.7cmの大きなつまみを貼り付ける。頂部は平坦で口縁部にかけて丸みをもつて下る。内面にかえりを有し、かえりは口縁端部よりも内側に入る。胎土に白色微砂を多く含み、3～5mmの白色砂粒を少量含む。また、微細な黒色粒子を含み、ロクロナデ調整により墨流し状にのびる。

これらの土器は飛鳥IV～Vの特徴を示す。

南北溝SD4135出土土器 (Fig. 128, Ph. 103) SD4135は調査区東半を北流する溝で、東西溝SD4132以北では確認していない。土師器杯A、杯B蓋、杯C、杯G、杯X、皿A、皿X、高杯A、盤A、壺A、甕A、須恵器杯A、杯B蓋、壺Kが出土した。灯火器に使用した土器が多い点の特徴である。完形の土師器壺Aと盤Aは溝の北半からの出土である。

土師器杯A I (415・416) は415が口縁端部を小さく内側に巻き込むのに対し、416はヨコナデにより内側を凹線状に窪ませる。415はa1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。416はb1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。色調は褐色を呈し、胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。径高指数は28.1。杯B蓋 (414) は頂部から口縁部がゆるやかに弯曲し、端部を丸くおさめる。頂部外面に分割ヘラミガキを施す。杯C I (417) はやや深い形態で、口縁端部を短く外反させ内面に内傾する面をつくる。b0手法で調整し、内面に斜放射暗文を施す。径高指数は21.8。杯C II (418～422) はいずれも浅い形態である。418は口縁部が外反し、端部を内側に巻き込む。a0手法で調整し、内面見込みに斜放射暗文を施す。419は平底気味の底部から口縁部が内弯しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。a0手法で調整し、内面に一段暗文を施す。胎土に白色微砂を多く含み、赤褐色粒子を少量含む。420は口縁部が外反し、端部に内傾する面をもつ。外面は器面の磨耗が著しいが、a0手法とみられる。胎土に白色微砂を多く含む。内面にススが付着しており、灯火器として転用した可能性が高い。421は底部と口縁部との境に、ヨコナデによる鈍い稜がつく。口縁部を打ち欠いており、その破面にススが付着することから、灯火器に転用したもので、打ち欠き部に灯芯を据えて使用したことが分かる。422はa0手法で調整し、口縁端部に内傾する面をもつ。杯G (423) は浅い形態で、口縁部が底部からゆるやかに立ち上がり、端部を丸くおさめる。胎土に白色微砂を多く含む。灯火器に転用している。424は碗⁵Cである。口縁部を強くヨコナデし、端部外面に面をつくり、内面に凹線状の段が付く。a0手法で調整し、不調整部にはユビオサエ痕が顕著に残る。胎土に0.5～3mmの白色砂粒をやや多く含む。皿A (425～430) は丸みをもった底部からゆるやかに口縁部が開き、底部と口縁部との間にわずかに稜をもつ。いずれもa0手法で調整する。425～427・430は口縁端部を小さく内側に巻き込み、上面に丸みをもつ。428・429は口縁端部を肥厚させ、上面に平坦な面をもつ。425

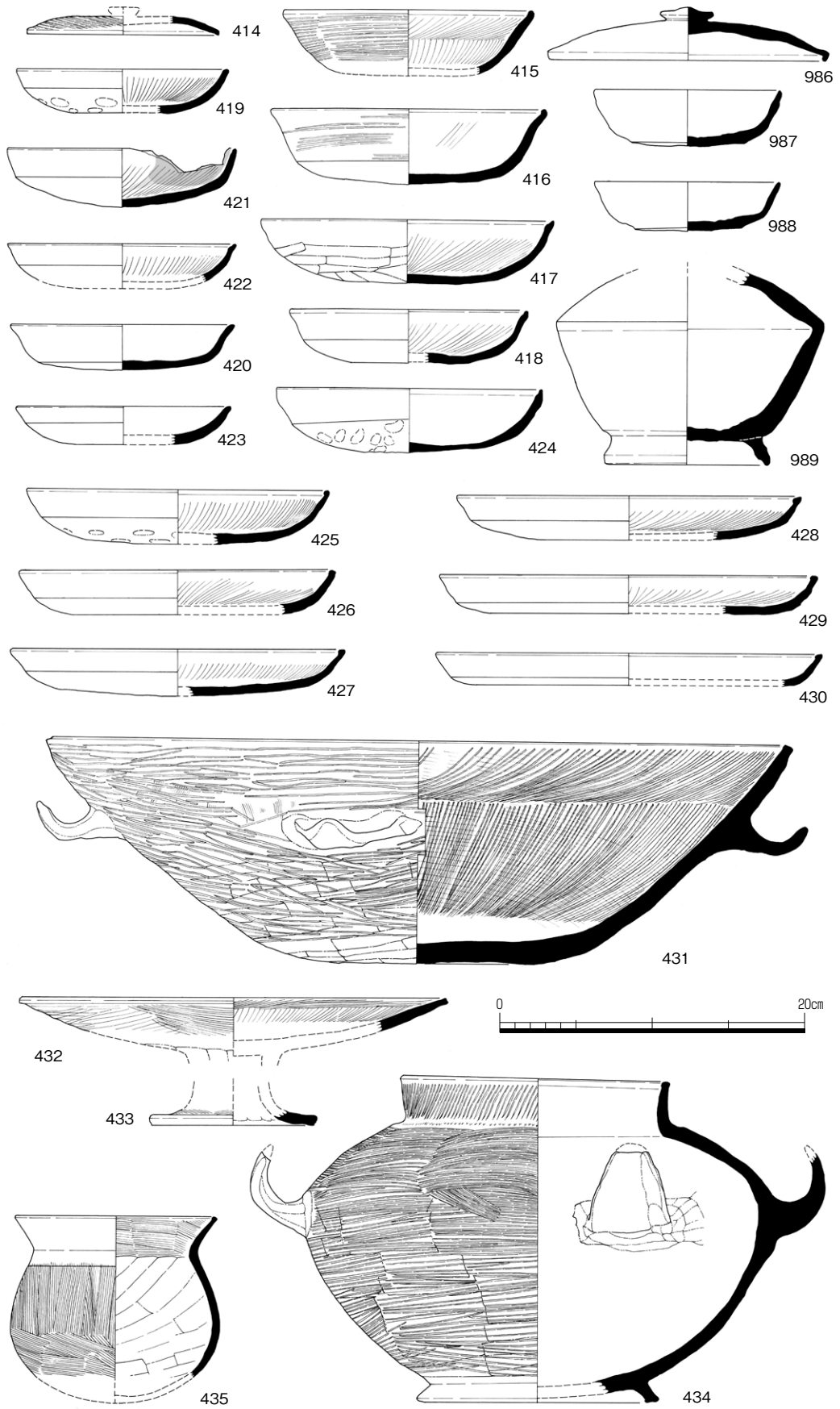


Fig. 128 SD4135出土土器 1:4

～429は内面に一段暗文を施す。430は器面の磨耗が著しく、暗文の有無は確認できない。428は灯火器として転用しており、内外面に二次被熱痕跡がある。432は高杯A杯部の破片である。口縁部が直線的に大きく開く形態で、端部を丸くおさめる。内面に二段暗文を施し、外面にも分割ヘラミガキを施す。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含み、白色粘土が斑状に混じる。433は高杯Aの脚部片である。外面に分割ヘラミガキを施す。大型の盤A（431）は平坦な底部から口縁部が大きく外方へ開く。口縁端部は平坦な面をなす。内面は横方向のハケ目調整を施した後、二段暗文を施す。外面は体部上半に右上がりのハケ目調整を施し、底部と体部下半に分割ヘラケズリを施した後、太いヘラミガキを施す。外面に、把手を4箇所貼り付ける。色調は燈褐色を呈し、胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。

壺A（434）はほぼ完形に復元できる。直立する口縁部は長く、端部は内側をわずかに肥厚させ、上方に平坦な面をもつ。最大径部が体部中位より上にあり、やや幅広の長い把手を2箇所に接合する。底部には外方へ開く低い高台を付す。体部は分割ヘラケズリの後、8分割のヘラミガキを密に施し、口縁部外面にやや斜めに傾くヘラミガキを施す。甕A（435）は小型で口縁部が外反し、端部を小さく内側に巻き込む。外面ハケ目調整、内面ヘラケズリの河内型甕である。

須恵器杯AⅢ（987・988）は浅い器形で、底部に丸みをもち、口縁部が外方へ開く。底部はヘラ切りの後、軽くナデ調整を施す。いずれも焼成がやや軟質で、胎土に白色微砂を含む。杯BⅡ蓋（986）は頂部から口縁部にかけてゆるやかに弯曲し、端部を折り曲げる。頂部に径3.4cmの中央が突出する擬宝珠状つまみを貼り付ける。胎土に0.5～2mmの白色砂粒を含む。壺K（989）は肩部がなだらかに弯曲し、体部との境にゆるやかな稜をもつ。底部外寄りに高台を貼り付ける。高台は端部を強くヨコナデし、外面に面をもつ。底部外面に指頭圧痕が残り、ロクロケズリ調整は行わず、軽いナデ調整を施す。

これらの土器は飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

南北大溝SD4143出土土器 (Fig. 129, Ph. 104) 調査区の東端で検出した大溝である。東三坊大路推定地にあたり、藤原京の東堀河とも考えられ、また、狂心渠の名残ともみられる。埋土は大きく上層（褐色砂質土・青灰微砂）と下層（青灰砂礫）に分かれる。下層、上層出土土器に分けて記述する。

下層出土土器 一部上層に帰属すると考えられる瓦器片や土師器小皿片が混じるものの、大部分は藤原宮期までの土師器、須恵器である。

437は土師器甕で、口縁部が外反し、端部を内側に折り曲げ、外傾する面をもつ。外面にスス、内面にススとコゲが付着している。438は土師器甕Cの口縁部である。口縁部が大きく外反し、端部を上方に折り曲げる。外面にハケ目調整を施し、内面は口縁部が横方向のハケ目調整、体部が横方向の板ナデ調整である。外面にススが付着する。

990～995は須恵器。杯B（991～993）は、いずれも底部と口縁部との境に緩い稜や丸みをもつ形態である。991は底部やや内寄りに幅の広い低い高台を貼り付ける。底部はヘラ切り後ロクロナデ調整を施す。胎土に白色微砂と黒色粒子、3mm前後の白色砂粒を少量含む。992は底部外寄りに断面方形の高台を貼り付ける。胎土に3～5mmの白色砂粒を多く含む。993は底部外寄りに断面方形の高台を貼り付ける。底部外面はヘラ切り後不調整である。胎土は992によく似ており、3～5mmの白色砂粒を多く含む。底部外面に点状に墨痕が残る。研磨痕は全く認めら

れない。杯B蓋(990)はかえりがないタイプで、端部を外方に折り曲げる。壺C(994)はやや肩が張る体部に短く直立する口縁部がつく。最大径は14.6cm。体部下半はロクロケズリ調整を施す。青灰色を呈し、胎土に白色微砂を少量含む。外面の降灰の状況からみて、蓋を被せて焼成したことが分かる。甕A(995)は口縁部が外反し、端部下端に断面台形の突帯状の段が付く。体部外面は平行叩きの後、カキ目を施し、口縁部は平行叩きの後ロクロナデ調整を施している。胎土に1~3mmの白色砂粒を含む。

上層出土土器 瓦器、土師器小皿、羽釜が多く出土した。439~447は土師器小皿である。439はいわゆる「て」字状口縁を呈する。赤褐色を呈し、胎土に白色微砂を少量含む。復元口径10.6cm。440~443は口縁部にヨコナデ調整を一周施し、端部を丸くおさめる。口径は9.0~10.0

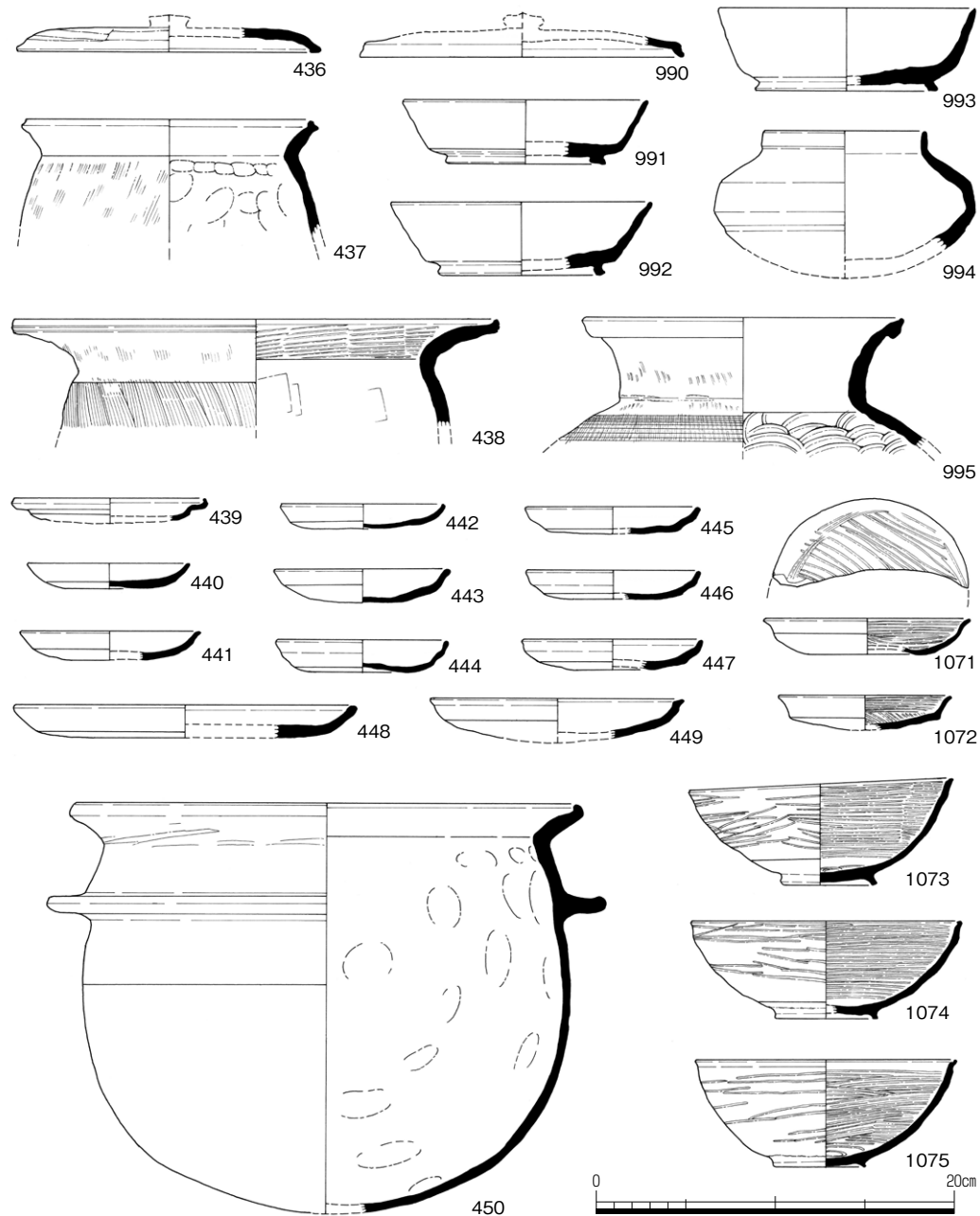


Fig. 129 SD4143出土土器 1:4

cmである。440は燈褐色を呈し、胎土は精良で赤褐色粒子と雲母を少量含む。442は完形品である。黄褐色を呈し、胎土に微細な雲母を含む。443も完形品で、褐色を呈し、胎土に白色砂粒を少量含む。444～447は口縁部下半と口縁端部の二段にヨコナデ調整を施す。口径は9.6～10.0cmである。445は赤褐色の色調を呈し、胎土に白色微砂をやや多く含み、5mm大の赤褐色粒子を少量含む。444・446は灰褐色を呈し、胎土に白色砂粒を少量含む。444は底部中央が凹む。447は褐色を呈し、白色砂粒を少量含む。448・449は土師器皿。448は平底気味の底部から口縁部が丸みをもって立ち上がり、端部を丸くおさめる。褐色を呈し、胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。449は丸底の底部から短い口縁部が立ち上がり、端部上面に平坦面をなす。褐色を呈し、白色砂粒を少量含む。底部内面と口縁部にススが付着することから、灯火器として使用したと考えられる。

450は土師器羽釜である。球形の体部で口縁部は「く」字状に屈曲し、端部を丸く折り返す。体部上半に鏝を貼り付ける。内外面の調整はススの付着、二次被熱により不詳であるが、内面に当て具痕が残り、叩き成形であることが知られる。外面のススが体部、底部全面に付着し、鏝下面には付着しないことから、竈に掛けて使用したことが分かる。

瓦器は皿(1071・1072)と椀(1073～1075)がある。皿は丸底から短い口縁部が立ち上がり、内面は底部にジクザク状の暗文、口縁部に横方向のヘラミガキを施す。1071は口縁端部を短く外反させ、1072は口縁端部上面に平坦な面をもつ。椀は口縁部が内弯しながら立ち上がり、端部内側に1条の沈線を施す。口径は14.5～15.0cmの間におさまる。1073・1074は高さ5mm前後で断面台形の高台を貼り付け、1075は断面三角形の低い高台を貼り付ける。内面は口縁部に横方向のヘラミガキを施し、底部に螺線暗文を施す。外面はいずれも粗いヘラミガキを施す。

以上、図示した土器は、上層が11世紀から12世紀後半頃、下層は飛鳥Vの年代が与えられる。その他、飛鳥I～IIに比定できる須恵器杯G蓋や短脚高杯の破片も出土しているが、断片的である。SD4143は西半分のみ調査で、下層の掘削では湧水と砂層の崩落により完掘はしていない。そのため開削年代を定めることは困難だが、出土土器からみて藤原宮期以前に存在していた可能性は否定できず、藤原宮期から奈良・平安時代まで埋没しかけながらも存続し、13世紀を迎える頃に完全に埋没し、現在の中川の流路となるのであろう。

東西溝SD4129出土土器 (Fig. 130, Ph. 104) 六条条間路北側溝SD4139の北側にある素掘溝である。少量の土器が出土した。須恵器杯G蓋(996)は口径が小さく頂部に丸みをもつ形態で、口縁部のかえりは端部よりも内側に入る。胎土に白色微砂を少量含む。997は壺Cの蓋か。平坦な頂部と口縁部との境に丸みがある。口縁端部はわずかに外反し、丸くおさめる。焼け歪みが著しい。杯G蓋は飛鳥IIの特徴を示す。ただし、黒色土器B類椀や瓦器椀の破片も少量含んでおり、溝の時期を示すかは不明である。

東西溝SD4179出土土器 (Fig. 130, Ph. 104) 東西大溝SD4130の北約7mに位置する素掘溝である。少量の土器が出土した。土師器杯CII(451)はやや浅い形態で、口縁端部を丸くおさめる。a0手法で調整する。内面は磨滅のため、暗文の有無は不明。土師器高杯C(452)は、杯部のみ残存する。やや深い椀形の杯部で、杯底部の粘土円盤と口縁部との境の段が明瞭である。内面にやや太い一段暗文を施す。赤褐色を呈し、胎土に白色微砂を含む。

須恵器杯B蓋(998)は、頂部から口縁部にかけてなだらかに弯曲する。口縁端部よりわずか

に内側に入るかえりを貼り付ける。胎土に0.5～3mmの白色砂粒を含む。これらの土器は飛鳥Ⅱ～Ⅲの特徴を示す。

南北溝SD4255出土土器 (Fig. 130, Ph. 104) SD4255は第46次調査区東端で検出した南北溝。南で東西溝SD4083とL字形に接続する。土器の出土量は少ない。須恵器皿A (1002) は丸底気味の底部から外反する口縁部が緩やかに立ち上がる。底部はロクロケズリ調整を施す。焼成は軟質で、灰色を呈する。胎土に白色砂粒を多く含む。内面見込み部分と、対応する底部外面にススが附着する。1001は須恵器蓋か。頂部に2条の低い突帯が付く。2条の突帯の間は平坦で、内側の突帯から中心へ向かって高まる。突帯間の平坦面に2箇所の剥離痕跡とその周囲にヘラ描き沈線がある。頂部に3箇所、平面が楕円形もしくは水滴形の装飾を貼り付け、ヘラで縁取りをしていたとみられる。裏面には1条の隆帯があり、焼成時の火襍がある。胎土に白色微砂をやや多く含む。皿Aは飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

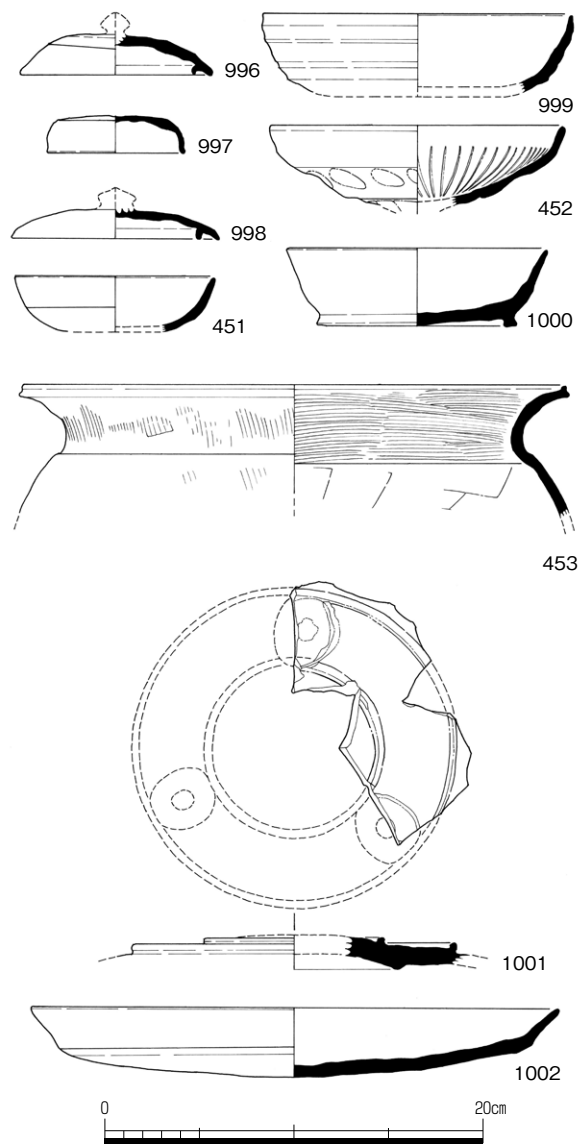


Fig. 130 その他の溝出土土器 1:4

東西溝SD4285出土土器 (Fig. 130) 調査区南西部にある東西堀SA4284の北3.5mに位置する東西溝。遺物はごく少量出土した。須恵器碗B (999) は口縁部のみが残存し、高台は剥離している。口縁部が内弯気味に立ち上がり、下位に段が付く。外面にはロクロナデによる凹凸が明瞭に残る。

東西溝SD4357出土土器 (Fig. 130, Ph. 104) 調査区南西部にある、奈良時代の遺構を区画する北限の東西堀SA4355の北側に位置する東西溝である。453は土師器甕A。口縁部は外反し、端部をわずかに上方につまみ上げ、外面に面をなす。体部内面にナデ調整、外面に縦方向のハケ目調整を施す都城型甕である。

1000は須恵器杯B。口縁部がゆるやかに外反し、底部との境に丸みがある。低い高台を底部外端に貼り付ける。復元口径13.8cm。底部はヘラ切り後に軽くナデ調整を施す。胎土に黒色粒子と白色微砂を含み、2～5mmの白色砂粒を少量含む。これらの土器は、飛鳥Ⅴから奈良時代前半の特徴を示す。

C 井戸・土坑出土土器

調査区全域にわたり、多数の井戸や土坑を検出した。これらは藤原京期から中世までの時期にわたり、この地の利用状況や性格を知る手がかりとなる。ここでは藤原京期および奈良時代に属する井戸と土坑出土の土器を取り上げ、中世のものについては本節E：藤原京造営以前の土器・中世の土器で扱うこととする。また、SE4740については既に本節Aで扱っている。

井戸SE5950出土土器 (Pl. 33, Ph. 105) SE5950は内郭の東区画堀SA4320東方約35mの空地に所在する、平面が楕円形の素掘りの井戸である。地表下0.9mまではすり鉢状で、それ以下は垂直に掘り下げ、深さ2.5mで砂層に達する。垂直に掘り下げた部分の埋土は、遺物を含まない。すり鉢状の部分の埋土は黄褐色粘質土と暗灰褐色粗砂の互層であり、これらを上から5層に分けて遺物を取り上げている。土器は土師器杯A、杯B、杯C、杯G、鉢B、盤B、高杯A、甕と、須恵器杯A、杯B、杯B蓋、皿A、高杯、壺、甕が出土した。図示した土器のうち、458・463・465は第3層から出土し、454は第5層からの出土で、その他は井戸と認識する以前の「土坑」として取り上げている。いずれも井戸廃絶後の埋立土からの出土である。

土師器杯Aは杯AⅠ(454)と杯AⅢ(455)がある。杯AⅠは口縁端部がわずかに肥厚し、二段暗文上段の暗文帯幅が広い。b1手法で調整する。径高指数は27.1。底部外面に「十」の墨書がある。杯AⅢは口縁端部を小さく巻き込む。内面の二段暗文上段の暗文帯幅が狭く、放射暗文の傾きが大きい。径高指数は23.3。底部外面に「□記」の墨書がある。杯BⅢ(458)は口縁端部をわずかに内側に巻き込む。外方に開く高台を底部外よりに貼り付ける。復元口径は15.6cmである。内面に二段暗文を施し、下段の放射暗文は斜めに傾き、上段の暗文帯幅は広い。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。杯C(456・457)はいずれも浅い形態である。456は口縁端部をわずかに内側に肥厚させ、内傾する面をなす。457は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。径高指数は21.6。鉢B(459)はb1手法で調整する。内面の暗文は磨滅により不明である。胎土に赤褐色粒子をやや多く含む。盤B(460)は復元口径30.7cmの大型品で、口縁部が外方に大きく開き、端部を内側に巻き込む。外方に開く低い高台を貼り付ける。外面は口縁部上位まで横方向のヘラケズリを施す。内面に二段暗文を施し、上段の放射暗文は左上がりである。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。内面に3mm前後の円形の敲打痕と刀子の使用痕とみられる線状痕が残る。表面が磨滅しており、よく使い込まれている。高杯A(461)は、杯底部の粘土円盤が擬口縁状に残る。杯底部に口縁部の粘土を継ぎ足す、高杯Cと同様の製作技法である。脚柱部は心棒に粘土を巻き付けて成形するⅡ群土器で、外面を下向きの縦方向ヘラケズリで面取りする。胎土に白色微砂を含む。

短頸壺(462)は直立する口縁部に、径約1cmの穿孔を焼成前に施す。外面はハケ目調整で、内面はヨコ方向のケズリ調整を施す。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を多く含む。甕Aは中型品(463・464)と大型品(465)が出土した。いずれも外面ハケ目調整、内面ナデ調整による都城型である。463は端部を上方につまみ出し、外方に面をもつ。外面は二次被熱が著しく、底部のススの付着状況から、3箇所を支脚を置いて使用したものと考えられる。464は口縁端部を上方に肥厚する。外面は二次被熱が著しく、口縁部内面にもススが付着する。口縁部内面にススの付着する部分と付着しない部分の境が輪状にまわることから、使用時に蓋を用いた可能性が高

い。465は口縁部が外反し、端部を上方につまみあげる。端部外面に面をなし、沈線状の段をもつ。色調は燈褐色で白色砂粒をやや多く含む。

須恵器杯B（1003）は器高が低いもので、口縁部と底部の境に丸みをもつ。底部外面はヘラ切り後にナデ調整を施す。復元口径11.4cm。長脚高杯（1004）は脚部の破片で、ヘラ状工具で4方向に沈線を描いて透かし孔を表現する。胎土に0.5～3mmの白色砂粒を少量含む。小型の甕A（1005）は肩部がなだらかで、体部との境に丸みがある。外面下半に格子状叩きを施した後、ロクロナデ調整を施す。胎土に黒色粒子を多量に含む。

これらの土器は飛鳥Vの特徴を示す。

井戸SE4335出土土器（Pl. 33、Ph. 107） SE4335は南北棟建物SB4331の西にある井戸で、大土坑SK4325を埋め戻した後に掘られたものである。井戸枠内からは完形品5個体を含む土師器壺B、甕Aや、土師器甕B、竈、須恵器皿B、高杯、壺Kが出土した。土器の出土量は少なく、須恵器はごく少量である。

471は土師器壺B。底部型作りにより成形する。内面上部を板状工具で横方向にナデ調整を施す。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。内外面にスス、コゲや二次被熱を受けた痕跡は確認できない。甕Aは口径12～16.5cmの小型品（466・468・469）と中型品（467・470）がある。466・467は外面を縦ハケ、内面はナデで調整する都城型甕である。466は目の粗い原体で外面と口縁部内面にハケ目調整を施す。内面下部に指頭圧痕がある。頸部内面より下に薄くコゲが付着し、外面は二次被熱による剥落がある。467は口縁端部を小さく上方につまみ出し、外面に面をなす。底部外面の中位以上にススと二次被熱が著しく、底部付近はススの輪郭がリング状に巡ることから、直置き状態で火に掛けたものと推測される。468はやや長い口縁部が直線的に外反し、端部を丸くおさめる。外面にハケ目調整を施すが、肩部付近と体部下半で原体が異なる。内面は口縁部が横方向のハケ目調整、体部上半が横方向の板ナデ調整で、体部下半には指頭圧痕が残る。胎土に雲母片を多く含む。外面にススが付着し、二次被熱による器面の剥落がある。469は口縁部がく字状に屈曲し、端部を丸くおさめる。底部は平底気味の形態である。内面を斜め方向のヘラケズリで調整し、外面はハケ目調整を施す。胎土に赤褐色粒子と2～4mmの白色砂粒をやや多く含む。体部外面には二次被熱による剥落がある。470は体部上半を欠く。内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整を施す。伊勢型の甕である。外面に「十」字状の焼成前ヘラ書きがある。外面にススが付着するが、467と同様に底部付近にススの輪郭がリング状に巡る。甕B（472）は復元口径26.4cmの大型品である。口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。外面にハケ目調整を施し、把手を貼り付ける。内面は下から上へヘラケズリを施し、内面上部に横方向のヘラケズリを施す。胎土に赤褐色粒子をやや多く含み、1～3mmの白色砂粒を少量含む。竈（473）は小型のもので、廂を貼り付けるタイプである。口径13.2～14.3cmで口縁端部をヨコナデにより丸くおさめる。外面はヘラケズリの後ナデ調整を施し、内面は横方向の板ナデ調整を施す。内外面ともに裾部は指ナデの痕跡が確認できる。廂はヨコナデ調整を施し、端部を丸くおさめる。廂の両側面は裾部のやや上でおさめるため、接地しない。焚き口はヘラケズリにより切り開ける。体部側面に半月状の孔を切り込む。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。内面にススが付着する。他に大型品の破片も出土した。

須恵器皿B（1006）は、SK4325出土の破片と接合した。口径30.0cmの大型品で、底部から外

反する口縁部が立ち上がる。胎土に白色微砂と1～3mmの白色砂粒をやや多く含む。1007は高杯杯部。口縁部が外反気味に外方へ開き、水平に近い杯底部との境に稜がつく。1008は壺K。肩部がやや張る形態で、胴部との屈曲部に2条の凹線状の段を施す。胴部外面にロクロケズリを施す。胎土に黒色粒子と白色微砂を含む。

これらの土器は飛鳥Vの特徴を示す。土師器の小型の甕や壺Bが完形に近い形でまとまって出土したことが特徴で、かつこれらは都城型以外のタイプも含むことが注意される。

土坑SK4325出土土器 (Pl. 34, Ph. 105・106) SK4325は南北棟建物SB4331の西にある土坑で、手斧の削り屑や木片が出土するなど、藤原京期後半(Ⅲ-C期)建物建設時の廃棄土坑と考えられる。上層を山土で埋め戻した後、井戸SE4335を掘っている。土器は破片での出土が多い。

土師器は、杯A、杯C、杯G、杯H、鉢A、平底鉢、鍋B、甕A、甌、甗がある。杯A I (475)は口縁端部を小さく内側に巻き込む。二段暗文を施し、上段の暗文帯幅が狭い。杯AⅢ (474)は口縁端部をわずかに内側に巻き込む。内面の二段暗文は下段の放射暗文の傾きが大きく、上段の暗文帯幅が狭い。a1手法で調整する。径高指数は25.4。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含み、3～5mmの白色砂粒を少量含む。杯C (476～478)はいずれも内面に一段暗文を施し、a0手法で調整する。476は口縁端部内面に内傾する面をもつ。焼成後に円形の孔を底部に穿つ。477は口縁端部を内側に肥厚させ、内傾する面をなす。478は口縁端部をわずかに外につまみ出す。灯火器として使用しており、内外面に二次被熱痕跡があり、内面にススが付着する。径高指数は27.6。杯G I (479)は、口縁端部外面に外傾する面をなすGcタイプで、器形は杯Aに似る。色調は淡褐色を呈し、胎土はやや粗い。杯GⅡ (480)は口縁部をわずかに外反させ、端部を丸くおさめる。器形は杯Cと同様で、Gaタイプである。杯H (481～484)は口径10cm前後と12cm前後の2法量に分かれる。481・482・484は口縁部が外方に開き、底部との境に段が付く。481は胎土に赤褐色粒子を多く含む。482・484は二次被熱を受け、内外面にススが付着することから灯火器として使用したことがわかる。483は口縁部が内弯気味に立ち上がり、口縁端部内側にわずかに段をもつ。底部との境は鈍い稜がつく。胎土に赤褐色粒子と1～3mmの白色砂粒をやや多く含む。底部外面に黒斑がある。鉢Bには大型品(487・488)と小型品(485・486)があるが、486は小破片のため、口径がもう少し大きくなる可能性もある。485は口縁部が内弯し、端部を内側に肥厚させる。a1手法で調整する。色調は破断面では褐色を呈するが、器表面は黒色を呈する。486は口縁部が内弯し、端部を内側に小さく肥厚させる。a1手法で調整する。内外面に漆膜が残る、漆塗土器である。487・488は平底の底部から内弯気味に口縁部が立ち上がり、端部を内側に巻き込む。b1手法で調整する。ともに底部に黒斑がある。鉢Bの大型品は、この他にも1点出土した。

甕Aには口径14～15cmの小型品(489～491)と24～25cmの大型品(492・493)がある。小型品は口縁部が大きく外反し、端部を丸く仕上げるもの(489・490)と、口縁部がくの字状に屈曲し端部に外傾する面をもつもの(491)に分かれる。490・491は胴部内面にヘラケズリを施す。大型品は、口縁端部を上方へつまみ出し、外側に面をなす。493は胴部内面に横方向のヘラケズリを施す。494・495は鍋Bである。494は口縁端部を上方につまみ出し、外面に面をもつ。被熱の痕跡が著しい。495は胴部の破片で、内面にユビオサエの凹凸が顕著に残る。内面にベンガラ⁶が付着する。被熱の痕跡は明瞭ではなく、ベンガラを塗布する際の容器として使用した

ものか。断面にベンガラは付着しない。甗(496)は外反する口縁部形態が甗Aと共通する。底部を強いヨコナデで仕上げ、端部を丸くおさめる。

須恵器は、杯A、杯B、杯B蓋、杯G、杯G蓋、平瓶、細頸壺、甗Cがある。杯A(1016~1019)は器高が低いものが主体である。1016は口縁部が丸みをもって立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部はヘラ切り不調整である。焼成がやや軟質で灰白色を呈し、胎土に白色砂粒を含む。内面と底部外面の一部に朱墨が付着する。1017は口縁部が丸みをもって立ち上がる。底部はヘラ切り不調整である。二次被熱を受け、内面に銅滴が付着する(Ph.106)。1018は外方へ直線的な口縁部が開く。底部をロクロケズリで調整する。底部と口縁部の境に鈍い稜をもつ。胎土に白色粘土が交じり、0.5~1mmの白色微砂を含む。1019は底部をヘラ切りした後にナデ調整を施す。内外面に黒色の漆が付着する。杯B蓋には、かえりがあるもの(1010~1012)とないもの(1013)の両者がある。個体識別できた破片では4:2でかえりのあるタイプが多い。1010は口縁部が頂部からゆるやかに降る。口縁端部より内側に入る短いかえりを貼り付ける。頂部外面に薄く自然釉がかぶる。1011は平坦な頂部からゆるやかに口縁部がのび、つまみは径が大きく中央が突出する擬宝珠状を呈する。口縁端部より内側に入る短いかえりが付く。胎土に黒色粒子を含み、ロクロナデ調整により墨流し状にのびる。白色微砂を少量含む。1012は1010と同様、頂部から口縁部にかけてゆるやかに降る。短くシャープなかえりを貼り付ける。胎土に黒色粒子と白色微砂をやや多く含む。内面に墨が付着しており(Ph.116)、硯として転用したとみられる。1013は口縁端部を折り曲げ、ロクロナデ調整によりわずかに外方へつまみ出す。1014・1015は杯B。1014は器高がやや高く、ゆるやかに外反する口縁部が立ち上がり、底部との境は丸みを帯びる。低い高台が底部外よりに付く。底部はロクロケズリ調整で仕上げる。胎土に黒色粒子と白色微砂を含む。1015は直線的な口縁部と底部の境に鈍い稜がつく。底部外よりに外方へ開く高台を貼り付ける。底部をロクロケズリ調整で仕上げる。胎土に白色微砂をやや多く含む。外面全面に降灰がみられることから、倒立した状態で焼成したことが分かる。杯G蓋(1009)はゆるやかに降る頂部から屈曲して口縁部が開く。短いかえりを貼り付ける。皿B(1020)は復元口径24.6cmの大型品で、口縁部と底部の境は稜をなして屈曲する。底部から口縁部中位にかけて、ロクロケズリ調整を施す。胎土に白色微砂をやや多く含む。

平瓶(1021)と細頸壺(1022)は内面に漆が付着し(Ph.106)、漆の運搬具として使用されたことが明らかである。平瓶の肩部は水平に近く、胴部との境に緩い稜をもつ。底部は平底で、体部外面下位に手持ちヘラケズリ調整を施す。内面から肩部外面にかけて漆が付着する。頸部の破面にも付着することから、口頸部は漆を取り出す際に打ち欠いたものとみられる。細頸壺は肩が張らず、二段構成で成形する。体部外面にカキ目を施した後、2条の沈線を施す。外面に自然釉が流下する。灰白色の色調でやや砂粒が目立つ胎土である。内面に漆が付着し、平瓶同様に頸部の破面にも付着することから、口頸部は漆を取り出す際に打ち欠いたとみられる。甗C(1023)は口縁部が直立し、端部は内傾する面をなす。外面は格子目叩き上にカキ目を施す。内面は当て具痕跡をロクロナデ調整によりナデ消している。

これらの土器は飛鳥IV~Vの特徴を示す。先述の様に、SK4325は藤原京期後半(Ⅲ-C期)の建物を建設した時の廃棄土坑と考えられており、漆付着土器(1019・1021・1022)、銅付着土器(1017)、ベンガラ付着土器(495)、灯火器(478・482・490)、製塩土器が出土したことは、それ

を裏付ける。これらは金属工房や漆工房等に関わるもので、改作時に様々な活動を行っていた様子がうかがえる。

土坑SK4327出土土器 (Fig. 131, Ph. 108) SK4327は六条条間路南側溝SD4311と重複するが、先後関係は不明である。Ⅲ-B期からⅢ-C期の施設に改変した際の廃棄土坑とみられる。比較的多量の土器が出土した。

土師器は、杯A、杯C、杯G、杯H、杯X、皿A、鉢B、小型鉢、甕A、鍋、甑、竈がある。また、漆が付着した個体もある。杯Aは杯AⅠ(499・500)と杯AⅢ(497・498)があり、AⅠにはやや深い形態(499)と浅い形態(500)がある。499は口縁部が外反し、端部を内側に肥厚させる。b1手法で調整し、内面には二段暗文を施すとみられるが、上段の放射暗文は風化のため観察が困難である。径高指数は27.9である。底部に黒斑がある。胎土に白色微砂と赤褐色粒子を少量含む。500は、口縁端部を小さく内側に巻き込む。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施し、上段の暗文帯幅が広い。上段と下段の放射暗文間に上向きの連弧暗文Aを施す。497はa1手法で調整し、密なヘラミガキを施す。内面見込みに「十」字状の針書きを焼成後に記す。径高指数は25.0。498は口縁端部を内側に小さく巻き込む。やや粗い胎土で、白色微砂を多く含む。内面の暗文は放射二段である。杯C(501)は口縁端部が内傾する面をなし、沈線状の段が付く。a0手法で調整する。502は小型の鉢Bで、口縁端部を内側に小さく巻き込む。外面に横方向のヘラミガキを施す。内面の暗文の有無は不明である。503～505は杯G。503は杯Gbで、口縁端部に内傾する沈線状の段が付く。a0手法で調整する。底部外面には黒斑がある。504は口縁部をヨコナデし、底部外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。胎土に白色微砂をやや多く含む。505は口縁部が外反する。内面にススが付着する。灯火器として使用した可能性がある。色調は灰褐色を呈し、胎土に1～3mmの白色砂粒を含む。杯X(506)は杯Gと同様の器形で、外面底部をヘラケズリ調整する。胎土に赤褐色粒子と白色微砂をやや多く含む。皿A(507～510)はいずれも口縁端部を内側に巻き込み、内面に一段暗文を施す。507は底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部を内側に小さく肥厚する。a0手法で調整する。胎土に白色微砂を含む。508は底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁部と底部の境にヘラケズリ調整を施し、底部に木の葉痕が残る。赤褐色粒子と白色微砂を含む。509は底部から丸みをもって口縁部が立ち上がり、端部に外傾する面をもつ。b0手法で調整するが、底部に木の葉痕が残る。510は口縁部が直線的に外反し、端部は内側に肥厚する。a0手法で調整する。511と512は鉢B。511は器厚が薄く、ゆるやかに口縁部が立ち上がり、端部を丸くおさめる。b1手法で調整する。内面の暗文は磨滅のため観察できない。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。512は小さな底部から口縁部が立ち上がり、端部を内側に巻き込む。外面に5分割ヘラケズリを施した後、ナデ調整で仕上げる。底部内面に螺旋暗文、口縁部には一段暗文と螺線暗文を施す。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。513は小型鉢。半球形の器形で、口縁部を丸くおさめ、内側にわずかな段をもつ。外面に把手を貼り付け手法で接合する。把手の数は不明であるが、2箇所であろう。内面にナデ調整を施し、外面は分割ヘラケズリ調整を施す。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。器壁が非常に薄く、内外面にスヤコゲなどの使用を示す痕跡はみられない。実用的ではないため、祭祀などに用いられたミニチュア製品の可能性がある。

甕Aは口径が13cm台の小型品(518・519)と20～24cmの中型品(515～517)、27cmの大型品

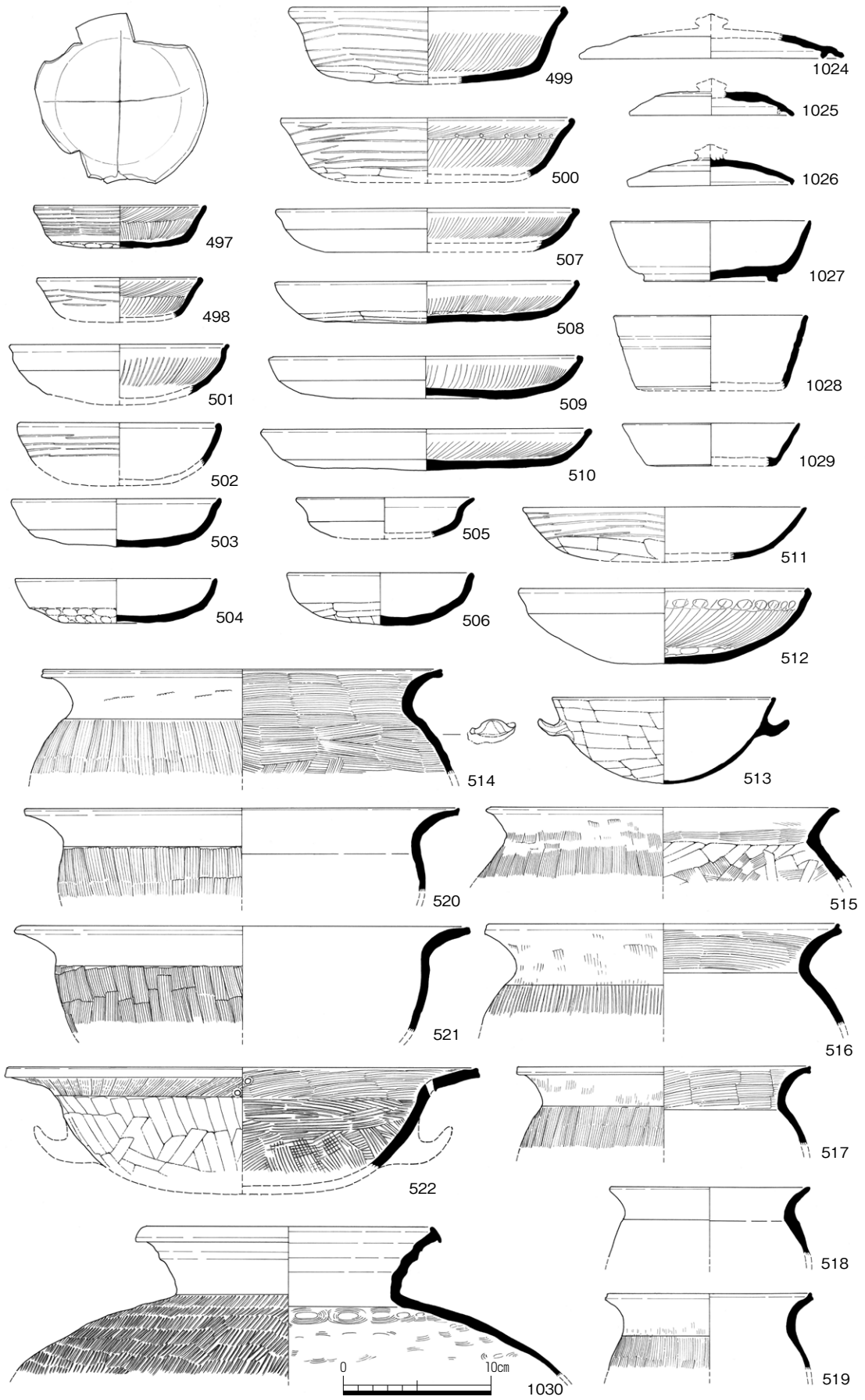


Fig. 131 SK4327出土土器 1:4

(514)に分かれる。518・519は口縁部が外反し、518は端部を丸くおさめ、519は端部を上方へつまみ出し外面に面をもつ。518は胎土に赤褐色粒子と白色微砂をやや多く含む。519は二次被熱が著しく、外面と口縁部内面にススが付着する。515は口縁部がく字状に屈曲し、端部を外方へつまみ出し、外傾する面をなす。内面にハケ目調整を施した後、斜め方向のヘラケズリ調整を施す。胎土に赤褐色粒子と金雲母を含む。516は口縁端部を上方につまみ出し、外面に沈線状の段が付く。1～5mmの白色砂粒をやや多く含む。517は外反する口縁部で端部外面に面をもつ。1～3mmの白色砂粒を含む。514は口縁部が外反し、端部外面に沈線状の段が付く。胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。520～522は鍋。520は口縁部をわずかに上方につまみ出し、外面が面をなす。521は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。外面にハケ目調整、内面にナデ調整を施す。胎土に金雲母や赤褐色粒子、白色微砂を含む。522は口縁部が外反し、端部に面をもつ。外面にハケ目調整の後ヘラケズリを施し、内面には粗いハケ目調整を施す。頸部の屈曲部付近に焼成前に穿孔を施す。口頸部に穿孔する鍋はSD4131からも出土しており(406)、孔に細棒を通して蓋を固定するものと考えられる。

須恵器には杯A、杯B、杯B蓋、甕がある。杯Aは器高の高いもの(1028)と低いもの(1029)がある。1028は口縁部が直線的に開き、端部を丸くおさめる。口縁部外周に2条の沈線を施す。1029は口縁部が外方へ直線的に開く。底部と口縁部の境に鈍い稜がつく。内面にススが付着しており、灯火器として使用したことがわかる。杯B(1027)は口縁部がゆるやかに立ち上がり、底部との境に丸みをもつ。低い高台を底部内寄りに貼り付ける。底部はヘラ切り不調整である。胎土に白色微砂をやや多く含む。杯B蓋はかえりのあるもの(1024・1025)とないもの(1026)がある。1024は扁平な器形で、口縁端部とかえりの高さが等しい。胎土に1～3mmの白色微砂を含む。1025は平坦な頂部からゆるやかに口縁部が降る。短いかえりを貼り付ける。1026は頂部から口縁部にかけてなだらかに弯曲し、端部を小さく折り曲げる。精良な胎土で白色微砂をわずかに含む。尾張産の可能性はある。甕A(1030)は口縁部が外反し、頸部中位に突帯状の低い段をもつ。口縁端部を上下につまみ出し、外傾する面をつくる。器壁が薄く、内面は当て具痕をすり消す。これらの特徴から、湖西窯産の可能性が高い⁷。

これらの土器は飛鳥V～平城宮土器Iの特徴を示す。

土坑SK4265出土土器(Fig.132, Ph.109) 第46次調査区南部にある不整形土坑。埋土の上層から比較的まとまった土器が出土した。出土した土器には、土師器杯C、杯G、杯H、皿A、鉢H、盤B、甕A、甕C、須恵器杯A、杯B蓋、杯G蓋、甕Aなどがある。土師器杯Cは杯C I(526)、杯C II(523・524)、杯C III(525)がある。526はやや浅い形態で、口縁端部内側に内傾する面をなす。a1手法で調整する。胎土に白色微砂をやや多く含む。523は浅い形態で、口縁端部を丸くおさめ、b0手法で調整する。524は口縁端部を小さく外反させ、内側に内傾する面をなす。a0手法で調整する。内面に細い一段暗文を密に施す。径高指数は31.1。525は外面の器面剥落が著しいが、a0手法とみられる。褐色の色調を呈し、胎土に白色微砂を少量含む。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。杯G(527)はやや深い形態で、端部を丸くおさめる。黄褐色の色調を呈し、胎土に白色微砂を含む。皿A(528)は平らな底部から口縁部が内弯しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。a0手法で調整する。鉢H(529・530)は口縁部をヨコナデし、底部にヘラケズリ調整を施す。529は口縁端部を丸くおさめ、530は内傾する面をもつ。

盤B (531) は体部が内弯しながら大きく開く。把手を貼り付け手法により接合する。内面に横方向のハケ目調整を施した後、一段暗文を施す。外面は体部下半にヘラケズリ調整を施し、体部上半はナデ調整の後ヘラミガキを施す。甕A (532) は口縁部が外反し、端部に面をもつ。褐色の色調を呈し、赤褐色粒子と1~3mmの白色砂粒を多く含む。甕C (533) は口縁部が「く」字状に大きく屈曲し、端部を丸くおさめる。胎土に赤褐色粒子と白色微砂をやや多く含む。

須恵器杯Aは深い形態(1033)と浅い形態がある。1033は底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。外面下部に2条の沈線を施す。底部外面をヘラ切りの後ナデ調整を施す。内面に炭化物が付着する。杯B蓋(1032)は平坦な頂部から口縁部がゆるやかに降る。短いかえりを貼り付ける。胎土に白色微砂と黒色粒子を含む。杯G蓋(1031)は平坦な頂部からなだらかに口縁部がのび、短いかえりを貼り付ける。器壁が厚い。胎土に白色微砂と黒色粒子を含む。甕A(1034)は口縁部が長く、大きく外方へ開く。口縁端部に外傾する面をもち、その直下に1条の突帯を貼り付ける。外面の3箇所に1条沈線を施し、最下段のものは2条一組となる。この沈線間に板状工具の小口を斜めに刺突した列点文を施す。内面は頸部の屈曲部に乱ナデ調整を施し、当て具痕を一部ナデ消している。

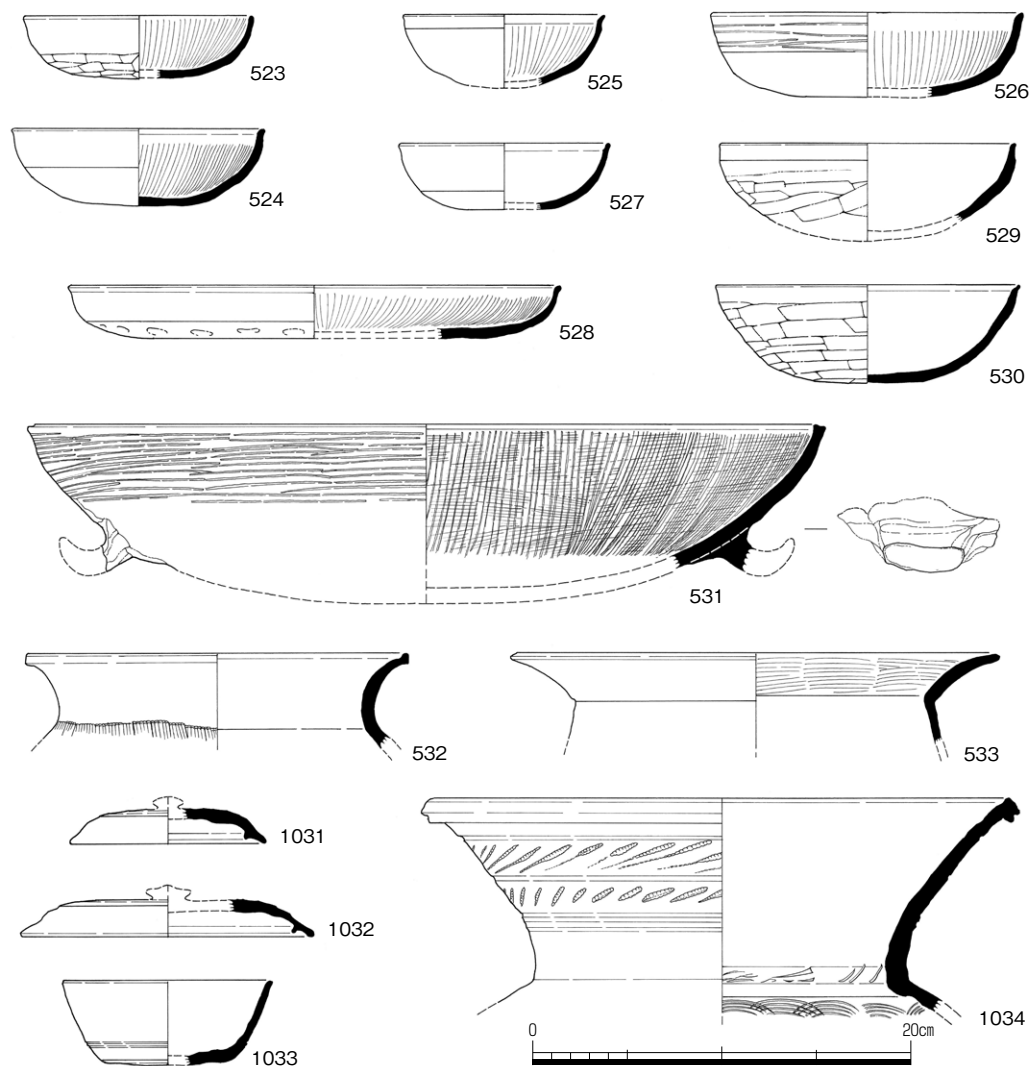


Fig. 132 SK4265出土土器 1:4

これらの土器は飛鳥Ⅲの特徴を示す。

土坑SK4271出土土器 (Fig. 133, Ph. 109) SK4271は藤原京期後半(Ⅲ-C期)の建物SB4333の内側にある井戸状の土坑。土師器杯A、椀C、高杯A、甕A、甕Cと、須恵器杯A、杯B蓋、壺K、甕が出土した。土師器椀C(534)は丸底の深い形態で、口縁端部内面に内傾する面をもつ。a0手法で調整する。高杯A(535)は脚部の破片。内面にヘラケズリを施すⅡ群土器で、外面に分割ミガキを施す。褐色を呈し、胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。甕A(536)は口縁端部を上方につまみ出し、外面に面をもつ。外面に縦方向のハケ目調整、内面にナデ調整を施す都城型甕である。胎土に1~3mmの白色砂粒をやや多く含む。甕C(537)も口縁端部を強くヨコナデし、外面に面をもつ。体部外面は被熱痕跡が著しく、ススが付着する。

須恵器杯A(1035)は深い形態で、平底の底部から口縁部が直線的に外方へ開く。底部はロクロケズリ調整で仕上げる。胎土に1~4mmの白色砂粒を含む。壺K(1036)は最下層からの出土。最大径は26.2cm。口頸部に2条一組の沈線を3箇所にし、肩部から胴部にかけての4箇所に同様の沈線を施す。灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。甕(1037)は口縁端部直下に断面三角形の段をもつ。1036・1037は胎土や色調、および形態からみて東海地方産の可能性が高く、特に1037は美濃須衛窯産の可能性がある。この他、かえりのない杯B蓋も出土した。

これらの土器は飛鳥Ⅳ~Ⅴの特徴を示す。

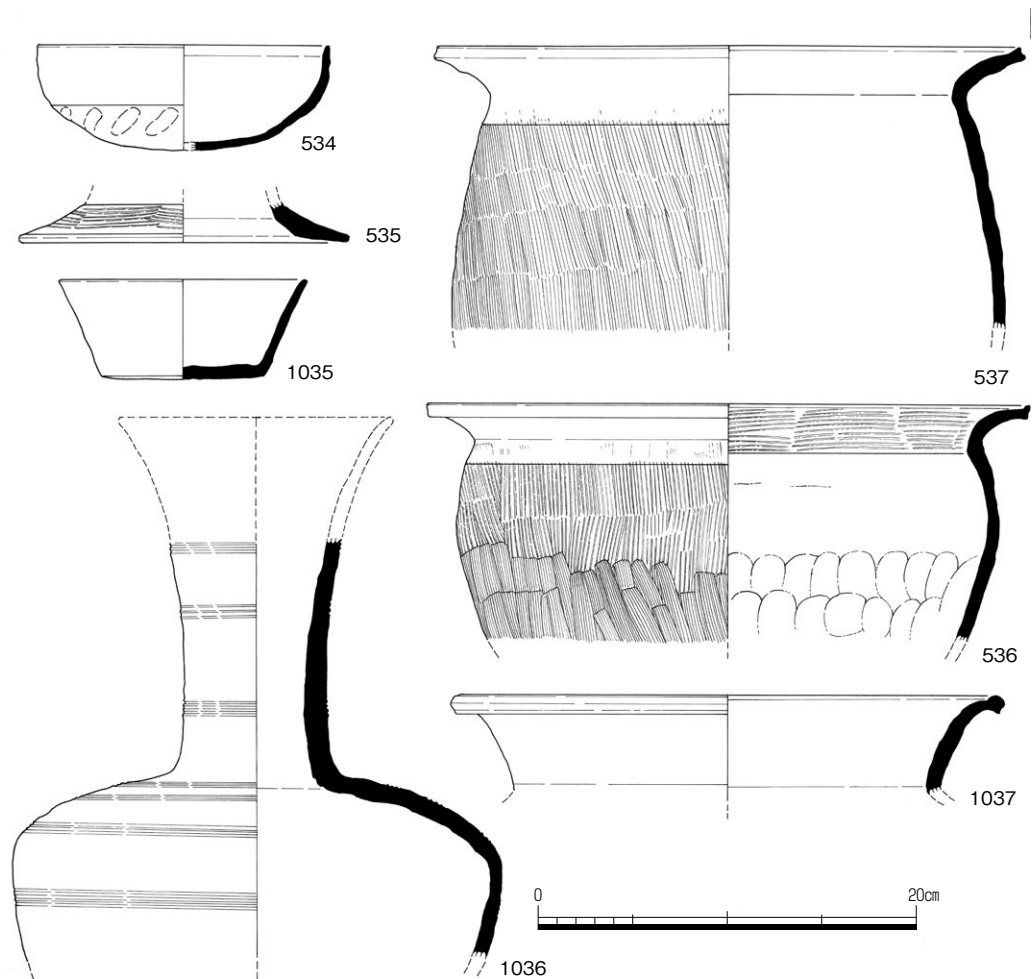


Fig. 133 SK4271出土土器 1:4

土坑SK4266出土土器 (Fig. 134, Ph. 109) SK4266は調査区南部にあり、藤原京期後半(Ⅲ-C期)の建物SB4330より古い小規模な土坑である。少量の土器が出土した。土師器杯C I (539)は口縁端部をヨコナデし、内傾する面をもつ。b0手法で調整する。内面に板状工具によるナデ調整を施した後、右上がり的一段暗文を施す。色調は燈褐色を呈し、砂粒が目立つ胎土で赤褐色粒子と白色微砂を含む。杯C II (538)はやや深い形態で、平底に近い底部から口縁部が丸みをもって立ち上がり、端部を丸くおさめる。a0手法で調整する。内外面にススが付着する。径高指数は31.6。高杯C (540)は杯部が椀形の深い器形である。内面に一段暗文を施し、脚部内面に絞り痕跡が明瞭に残る。杯部径高指数は23.5。甕A (541)は小型のもので、口縁端部を強くヨコナデし、外面に面をもつ。

これらの土器は飛鳥Ⅲの特徴を示す。

土坑SK4365出土土器 (Fig. 134, Ph. 109) 第46次調査区で検出した東三坊坊間路のすぐ東にある小規模な土坑である。土師器椀C (542)は小さな平底の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。口縁部をヨコナデし、外面はユビオサエの痕跡が残る。SD4130やSE4770出土の椀Cと同型式で、奈良時代の特徴を示す。この他、図示し得ないが他に口縁端部を折り返す土師器甕の破片が出土した。

SJ4260出土土器 (Fig. 134, Ph. 109) SJ4260は第46次調査区の東壁中央部にある埋納遺構で、一部拡張して全体を検出した。肩部以上と底部を欠失する須恵器甕Aを倒置し、その内部に土師器杯CⅢを正位で納め、その上を拳大の礫で覆っていた。

土師器杯CⅢ (543)はやや深い形態で、口縁端部を外反させ内傾する面をもつ。a0手法で調整する。径高指数は35.5。須恵器甕A (1038)は胴部のみ遺存する。肩が張らない倒卵形の器

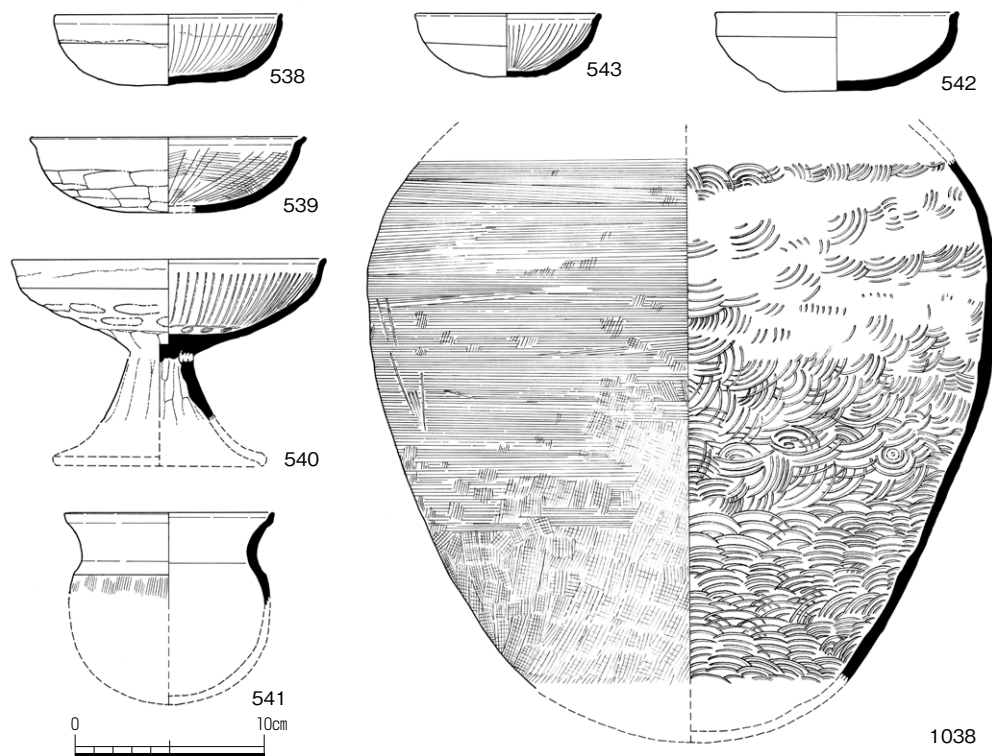


Fig. 134 SK4266・4365、SJ4260出土土器 1:4

形である。外面上半は平行叩きの後、カキ目調整を施す。下半はカキ目調整の後、平行叩きを施す。内面上半は当て具痕をナデ調整により一部消している。下半は当て具痕が密に観察される。当て具痕の重複関係からみて、胴部上半を叩き成形した後にカキ目調整を施し、その後底部を叩き出して成形したことが分かる。胎土に1～4mmの白色砂粒をやや多く含む。土師器杯Cは飛鳥Iの新しい段階の特徴を示す。

D 建物・堀出土土器 (Fig. 135・136)

建物や堀の柱穴出土土器は概して少量で、小破片のことが多い。その中でまとまった資料や遺構の時期判定に資する資料があり、ここではそれを中心に示す。

SB4735出土土器 藤原京造営期(Ⅲ-A期)の東北坪西側区画南端にある、桁行3間×梁行1間の東西棟建物。東西方向の掘立柱堀SA4171BとSA4732の間に位置し、門の機能が考えられる。各柱穴から土師器と須恵器が小片で出土した。須恵器杯G蓋(1039)は平坦な頂部から口縁部がなだらかにのびる。かえりと口縁部の高さが同じである。胎土に白色微砂を少量含む。この他土師器杯Bの底部片、杯C片なども出土した。

SB5020出土土器 西北区画内の西方に位置する桁行3間×梁行2間の総柱の南北棟建物。各柱穴から土師器、須恵器が破片で出土した。544・545・547・1040は柱抜取穴からの出土である。土師器杯A(544・545)はいずれもb1手法で調整する。544は口縁部が外反しながら立ち上がり、端部を内側に巻き込む。内面に二段暗文を施し、上段暗文帯の幅が広い。外面のミガキも密である。胎土に白色微砂をやや多く含む。545は544に比べやや深い形態であるが、二段暗文の上段暗文帯の幅は狭い。径高指数は26.7。口縁部内面にススが付着し、底部外面に「部女」の墨書がある。杯C(546)は皿に近い浅い形態である。口縁部が丸みをもって立ち上がり、端部内面に内傾する面をもつ。径高指数は21.9。a0手法で調整し、内面に斜めに傾く一段暗文を施す。内外面にススが付着する。鍋A(547)は口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部を小さく内側に巻き込み外面に外傾する面をもつ。体部外面上半に目の粗いハケ目調整を施した後、下半を目の細かい原体によりハケ目調整を施す。胎土に1～5mmの白色砂粒と赤褐色粒子を含む。器面は磨耗しており、内外面にススやコゲの付着は観察できない。須恵器杯B蓋(1040)は扁平な形態で、口縁端部を下方に折り曲げる。これらの土器は飛鳥Vの特徴を示す。

SB5970出土土器 調査区中央部に位置する、桁行2間×梁行1間の小規模な南北棟建物。土師器甕C(548)が出土した。口縁部が外反し、端部に面をもつ。体部外面に縦方向のハケ目調整を施す。

SB4330出土土器 藤原京期後半(Ⅲ-C期)の南東部の脇殿をなす、桁行7間×梁行2間の南北棟建物。各柱穴から土師器や須恵器が破片で出土した。須恵器杯B(1043)は丸みをもった底部が高台よりも下方に突出し、底部と口縁部との境に稜をもつ。底部外面をロクロケズリで調整する。淡青灰色を呈し、胎土に白色微砂と黒色粒子を含む。形態や胎土からみて、東海地域産の可能性はある。

SB4331出土土器 SB4330の北側にある桁行7間×梁行2間の南北棟建物。SB4330と東側柱筋を揃え、2棟の脇殿となる。各柱穴から土師器、須恵器が破片で出土した。図示し得ないが、浅い形態の土師器杯Cや把手貼り付け手法による甕Bが出土した。

SB4332出土土器 SB4330・4331の西側にある、藤原京期前半(Ⅲ-B期)の東脇殿。各柱穴から土師器、須恵器が破片で出土した。図示し得ないが、土師器杯Aが出土した。器高が深い形態で二段暗文の上・下段の間に上向きの連弧暗文Aを施す。

SB4333出土土器 正殿SB5000の東側にある東西棟建物で、東副殿と考えられる。土師器杯H(549)は口径が大きく、底部と口縁部の境に鈍い稜がつく。この他、土師器鉢Hが出土した。

SB4737出土土器 正殿SB5000の北東側にある桁行8間×梁行1間の東西棟建物。各柱穴から土師器、須恵器が破片で出土した。551・552は土師器杯C。551は浅い形態で、口縁端部は丸みをもつ。内面に一段暗文を施す。胎土に白色微砂をやや多く含む。552は深い碗形である。器面磨滅により内面の暗文は観察できない。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。須恵器杯A(1046)は平底の底部から口縁部が直線的に外反して立ち上がる。底部と口縁部との境が明瞭である。底部をロクロケズリで調整する。1044・1045は杯G蓋。1044は平坦な頂部から口縁部にかけてなだらかに弯曲し、かえりの高さが口縁部と同じ高さである。頂部に小さく高い宝珠つまみが付く。灰白色を呈し、やや砂粒が目立つ胎土で0.5~2mmの白色砂粒を含む。1045は杯B蓋の可能性もある。平坦な頂部から屈曲して口縁部がのび、短いかえりを貼り付ける。このほか図示し得ないが頂部が丸みをもつ須恵器杯B蓋が出土した。内面にススが附着する。これらの土器は552・1045が飛鳥Ⅲ~Ⅳ、551・1046が飛鳥Ⅳ~Ⅴの特徴を示す。

SB4340出土土器 正殿SB5000の前面にある推定桁行7間×梁行3間の東西棟建物。前殿の性格が考えられている。北東隅柱穴から須恵器杯B蓋(1042)が出土した。頂部から口縁部にかけてなだらかに弯曲し、頂部に径の大きな擬宝珠状のつまみが付く。短いかえりを貼り付ける。胎土に白色微砂をやや多く含む。この土器は飛鳥Ⅲ~Ⅳの特徴を示す。

SB4800出土土器 東西大溝SD4130の北側に位置する桁行5間×梁行2間の東西棟建物。各柱穴から土師器や須恵器が出土した。土師器杯A、杯C、杯H、杯蓋、皿A、鉢A、壺A、須恵器杯A、杯蓋、壺、甕Aがある。553・555・557・558・1047・1049は柱抜取穴から出土した。土師器杯Cは杯CⅠ(555)と杯CⅡ(556)がある。杯CⅠは口縁端部に内傾する面をもつ。a0手法で調整する。内面に杯Aにみられるような二段暗文を施し、上・下段の暗文間には上向きの連弧暗文Aを施す。杯CⅡは口縁端部がわずかに内傾する面をなす。内面に斜めに傾く一段暗文を施す。胎土に白色微砂をやや多く含む。杯AⅠ(553)は口縁部が外反し、端部を内側に肥厚する。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。二段暗文は上段の暗文帯幅が広く、上・下段の暗文間に上向きの連弧暗文Aを、口縁部上方に上向きの連弧暗文Bを施す。557・558は杯G。557は口縁部をヨコナデ調整し、端部を丸くおさめる。胎土に白色砂粒と赤褐色粒子を多く含む。底部外面に粘土紐巻き上げ痕跡がみられる。558は口縁部が外反し、底部との境に段が付く。杯Hに似た形態だが、外面にヘラケズリ調整はなく、小さな平底となる底部を軽くナデ調整する。底部外面に粘土紐巻き上げ痕跡が残り、幅3.5cmの粘土紐を巻き上げて成形したことが分かる。胎土に1~5mmの白色砂粒を含む。皿A(554)は大きな平底の底部から口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部を内側に肥厚する。a0手法で調整し、内面に螺旋暗文と一段暗文を施す。胎土に白色微砂を含む。1047・1048は須恵器杯A。1047は底部と口縁部の境に丸みをもつ。底部はロクロケズリ調整を施す。焼成はやや軟質で1~3mmの白色砂粒をやや多く含む。1048は底部が丸底に近く、口縁端部は外反する。底部を丁寧にロクロケズリした結果、

底部と口縁部との境に鈍い稜をもつ。胎土に白色微砂と黒色粒子を含む。形態と胎土から東海地域産の可能性が高い。甕A(1049)は、口縁部が外反し、端部直下に小さな段をもつ。胎土に白色砂粒をやや多く含む。これらの土器は飛鳥IV～Vの特徴を示す。

SB4725出土土器 藤原京期後半(Ⅲ-C期)の東区画塀に開く門。須恵器甕の口縁部が出土した(1050)。口縁部が大きく外反し、端部を丸くおさめる。外面に平行叩きを施す。

SB5000出土土器 左京六条三坊の中心に位置する、桁行7間×梁行3間の身舎の南に、廂が付く東西棟建物。左京六条三坊に占地する施設の正殿と考えられる。土師器と須恵器が少量出土した。須恵器甕A(Ph.120-1077)は口縁部が外反し、端部を内側に巻き込む。頸部内面に「𪛗」のヘラ記号を記す。

SB4786出土土器 調査区北側に位置する桁行3間×梁行3間の小規模な掘立柱建物。SB4787に並ぶ。各柱穴から土師器、須恵器が破片で出土した。土師器杯A(559)は復元図化が困難だが、口縁部が外反し、端部を小さく内側に巻き込む。内面に一段暗文と上向きの連弧暗文Aを施す。同様の破片がこの他1点出土している。また製塩土器も出土した。これらの土器は平城宮土器Ⅱの特徴を示す。

SB4787出土土器 調査区北側に位置する桁行4間以上×梁行2間の南北棟建物。SB4786の北に並んで位置する。土師器杯C(560)は口縁端部を丸くおさめる。a0手法で調整し、内面に細かい一段暗文を施す。皿H(561)は丸底に近い底部から短い口縁部が外方に開く。底部と口縁部の境に稜がつく。この他、低い高台を貼り付けた須恵器杯B片が出土した。底部外面が磨耗して平滑である。転用硯の可能性もあるが、墨痕は観察できない。これらの土器は飛鳥V～奈良時代前半の特徴を示す。

SB5050出土土器 調査区北西隅に位置する桁行3間×梁行3間の総柱建物。各柱穴から土師器と須恵器が破片で出土した。小型の壺A(562)は最大径部より上に分割ヘラミガキを施し、下はヘラケズリの後ヘラミガキを施す。把手は貼り付け手法により接合する。この他、間隔の広い一段暗文を施す土師器杯Aや、口縁端部を内側に巻き込む甕片が出土した。また製塩土器片が多く出土した。これらの土器は平城宮土器Ⅲの特徴を示す。土師器椀A(563)は北柱列の西から2基目の柱抜取穴から出土した。器高が浅く、口縁部が直線的に外方へ開き、外面をe-c手法で調整する。器壁が薄く、胎土に白色微砂、金雲母、赤褐色粒子を含む。平安時代初頭(SD650A段階)の特徴を示し、SB5050の廃絶時期の一端を示す。

SA4320出土土器 藤原京期後半(Ⅲ-C期)の内郭東限を限る南北方向の掘立柱塀。須恵器杯B蓋(1051)はかえりが見つからないタイプで、平坦な頂部から口縁部が屈曲して続き、端部を短く折り曲げる。器壁が薄く、シャープな作りである。復元口径は10.8cm。胎土に白色微砂を少量含む。他に図示し得ないが、土師器皿A破片も出土した。平底から直線的な口縁部が立ち上がり、底部との境が明瞭である。これらの土器は飛鳥IV～Vの特徴を示す。

SA4729出土土器 藤原京期後半(Ⅲ-C期)の内郭東限の南北塀。北でSB4780の東妻に接続し、南のSA4320との間には門SB4725が開く。土師器高杯C(565)はやや深い椀形の杯部で、口縁端部は丸みを帯びる。胎土に白色微砂をやや多く含み、径3～5mmの白色砂粒が少量混じる。須恵器杯G(1057)は、丸底の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁端部にわずかに内傾する面をもつ。底部をロクロケズリで調整する。軟質の焼成で灰白色を呈し、胎土に黒

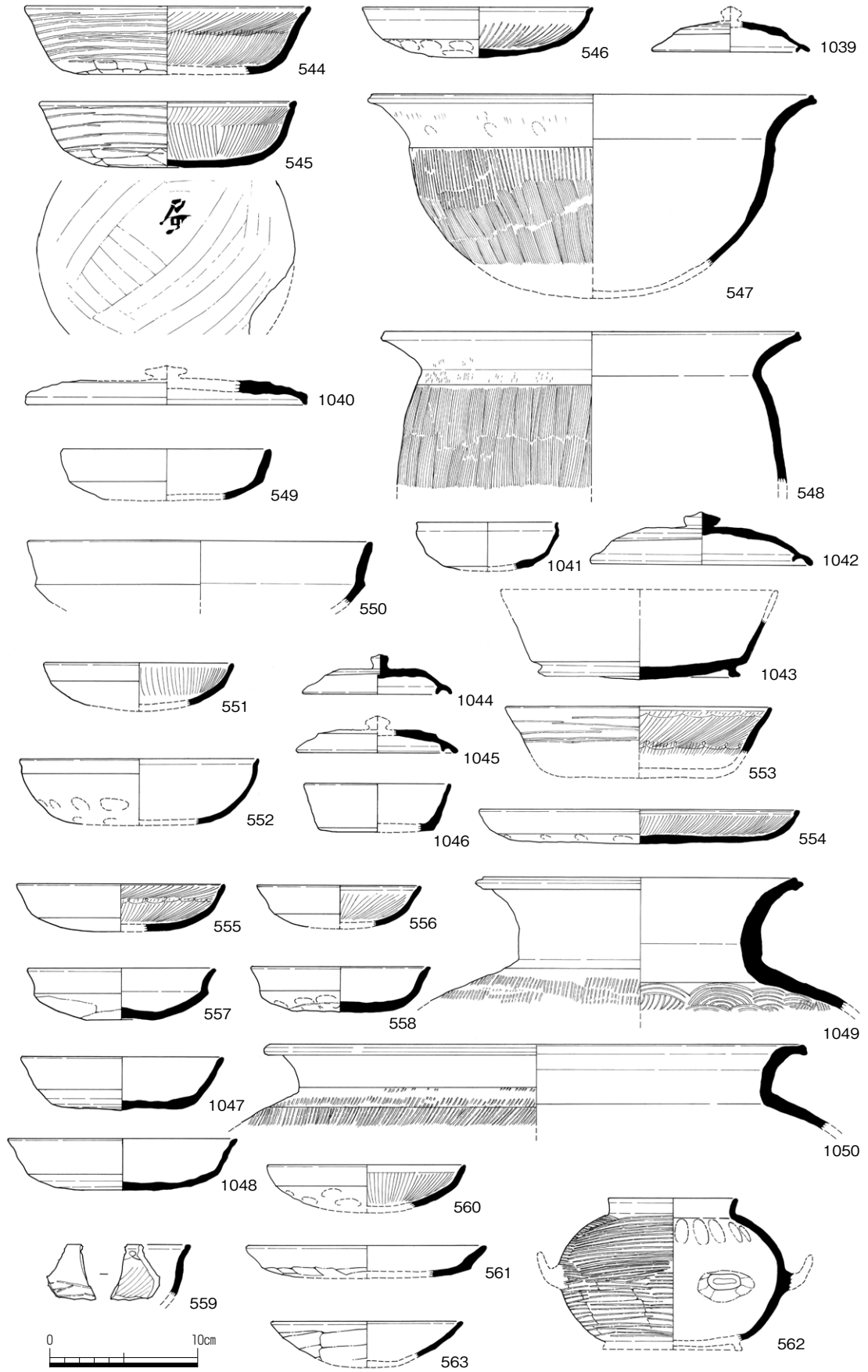


Fig. 135 掘立柱建物出土土器 1:4

色粒子を含む。これらの土器は飛鳥Ⅱ～Ⅲの特徴を示す。

SA4730出土土器 藤原京期前半（Ⅲ-B期）の内郭東限の南北塀で、SA4729の西に位置する。門SB4726を挟んで、SA4286の北延長上にあたる。各柱穴から土師器、須恵器が出土した。564・1052・1054・1055は柱抜取穴からの出土である。土師器鍋B（564）はほぼ完形である。口縁部が外反し、端部を上方につまみ出し、外面に面をもつ。外面ハケ目調整、内面ナデ調整の都城型である。把手を貼付手法により接合する。内外面にススやコゲ、二次被熱の痕跡はみられない。1052・1053は須恵器杯B蓋。1053は口縁端部を折り曲げ、1052は頂部に大ぶりの擬宝珠状つまみが付く。1054・1055は甕A。1054は口縁端部外面が丸く、小さな玉縁状になる。色調は淡青灰色を呈し、黒色粒子と白色微砂を含む。1055は口縁端部外面が丸く、下方に小さく垂れる。胎土に0.5～3mmの白色砂粒を多く含む。甕C（1056）の口縁端部は上部に平坦面をもつ。口頸部は外面を平行叩きで整形した後、ロクロナデ調整を施す。胎土に1～4mmの白色砂粒を多く含む。これらの土器は飛鳥Ⅴの特徴を示す。

SA4731出土土器 六条条間路北側溝SD4139に重複する東西方向の掘立柱塀。SD4139よりも新しい。土師器、須恵器が出土した。土師器杯A（567）は口縁端部の巻き込みが弱く、やや肥厚するのみで丸くおさめる。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。鉢B（568）は口縁部

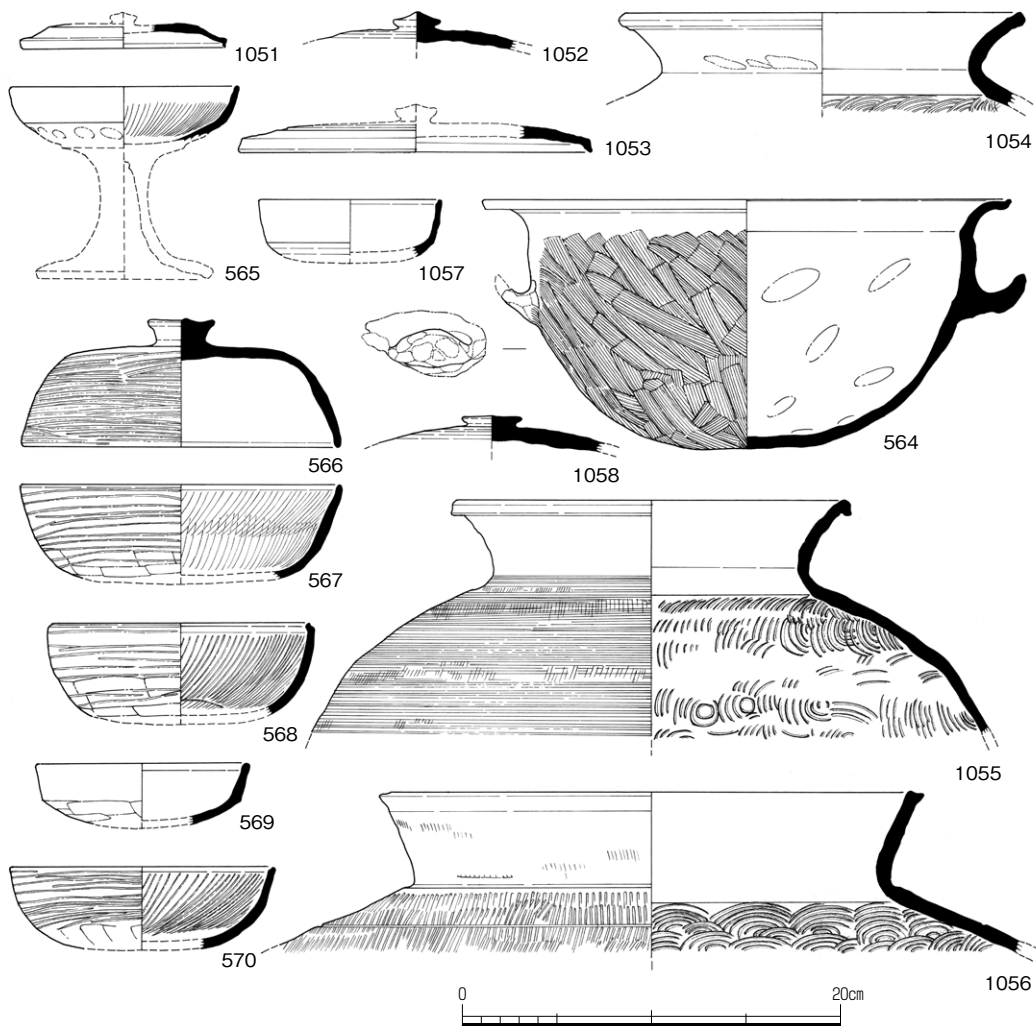


Fig. 136 掘立柱塀出土土器 1:4

が内湾しながら立ち上がり、端部を内側に巻き込む。b1手法で調整し、内面に一段暗文を施す。杯H (569) は直立する口縁部と底部との境に稜がつく。内外面と破面にススが付着する。壺A蓋 (566) は杯Aを逆にした様な器高が高い形態で、口縁端部を丸くおさめる。頂部に中央が突出する高いつまみを貼り付ける。頂部外面に分割ミガキを施し、口縁部外面に横方向のヘラミガキを施す。内面に暗文はない。燈褐色の色調を呈し、胎土に白色砂粒を含む。須恵器杯B蓋 (1058) は頂部がなだらかに弯曲し、扁平なつまみを貼り付ける。砂粒が目立つ胎土で白色砂粒や黒色粒子をやや多く含む。これらの土器は飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

SA4990出土土器 東三坊坊間路西側溝SD4302の西5mに位置する南北方向の掘立柱塀。土師器杯CⅡ (570) はやや深い形態である。口縁端部に内傾する面をもつ。b1手法で調整し、内面に一段暗文を施す。口縁部内面にススが付着する。飛鳥Ⅱ～Ⅲの特徴を示す。

E 藤原京造営以前の土器・中世の土器

i 縄文時代、弥生時代の土器

縄文土器 (Fig. 137, Ph. 113) 調査区全体から細片が20片ほど出土した。SD4130等からの出土で、本来の位置を保たない。1は口縁が外反して開く深鉢の口縁部。器壁は厚く、外面に粗い楕円押型文、内面には縦方向に太い沈線を施す。早期後半の高山寺式である。2・3は同一個体と考えられる深鉢の底部で、底面は剥落する。3にはLRとRLの羽状縄文が認められ、前期後半北白川下層Ⅱ～Ⅲ式に比定できる。4・5は刻目突帯文土器の深鉢口縁部。4の刻目はD字形で、晩期後半の船橋式。5の突帯は断面形が下向きの低い三角形を呈し、C字形の刻目を施す。晩期末の長原式に位置づけられる。6は頸部が屈曲する晩期の深鉢の胴部で、下半をケズリで調整する7は後期後半と思われる深鉢の胴部で、内面に巻貝条痕が残る。4～7は胎土に粗い砂粒を多く含む。

弥生土器 北東端の整地土などから、細片が少量出土した。図示はできないが、凹線文をもつ壺や棒状浮文を持つ無頸壺があり、底部に叩きを残す甕も多く認められることから、中期から後期のものが多いと考えられる。

ii 古墳時代の土器

古墳時代の土器は主に竪穴建物から出土した。溝、柱穴、包含層からも出土したが、いずれも小破片である。ここではまとまった出土をみた竪穴建物出土土器について記す。

土器には高杯、壺、甕、甑があり、特殊な土器として韓式系土器の甕片や両耳壺蓋がある。高杯は、辻美紀の分類を参

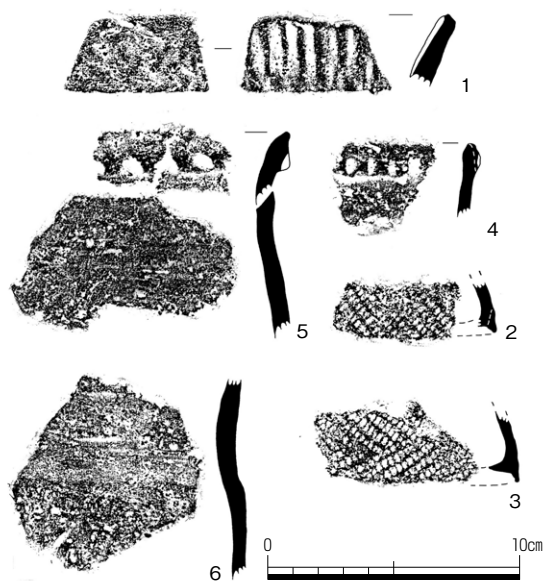


Fig. 137 縄文土器 1:3

考に、有段外反高杯、(600・614)、無稜外反高杯(581・595ほか)、無稜直口高杯(599)、椀形高杯(598)とした。また甕には大型の長胴甕と小型の球胴甕がある。

竪穴建物SI4230出土土器(Fig.139, Ph.110) SI4230は自然河川NR4225の東岸に位置する。削平が著しいが、炭化材がみられ、焼失住居である。596は柱穴からの出土である。

595は無稜外反高杯。脚部内面に絞り痕跡が残る。杯底部外面から脚柱部外面にかけて縦方向のヘラケズリを施す。脚裾部は低く、端部を内側に折り曲げる。胎土は赤褐色粒子と白色微砂をやや多く含む。596は高杯脚部。脚部がハの字状に広がり、外面は上から下方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラケズリを施す。この他、韓式系土器2片(Ph.113)が出土した。

竪穴建物SI4231出土土器(Fig.138, Ph.110) SI4231は自然河川SD4225の東岸に位置する。SI4232と重複し、SI4232より古い。北壁中央位置に竈を設け、石を置いて支脚としていた。584・585は竈前面からの出土、582は貯蔵穴からの出土である。

581は無稜外反高杯。外面は杯底部から脚裾部まで下から上にヘラケズリを施す。脚裾部はハ字状に開き、端部を内側に折り曲げる。赤褐色を呈し、白色微砂と赤褐色粒子を少量含む。582も同型式の高杯脚部だが、脚裾部がやや低い。杯部との接合部は粘土を巻き付けて補強する。583は小型丸底壺。口頸部はく字状に屈曲し、口縁端部は上方に小さくつまみ出す。肩部外面に板ナデの痕跡がある。外面に二次被熱の痕跡があり、口縁部内面にススが付着する。585は胴部がやや膨らむ形態の長胴甕。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。外面は縦方向のハケ目調整で、肩部に横方向のハケ目調整を施す。内面は斜め方向のヘラケズリを施す。体部外面下半にススが多く付着する。584は体部中位がやや膨らむ円筒形の甑。底部は丸底気味で、棒状の把手を挿入手法により接合する。底部の中心に1箇所、その周囲に円形や楕円形の蒸気孔を6箇所あける。この他、製塩土器3片と上から切り込みを入れた棒状の把手(Fig.141-1088)と格子目叩きを施す韓式系土器の甕片(Fig.141-1089)が出土した。

竪穴建物SI4232出土土器(Fig.139, Ph.111) SI4232は自然河川SD4225の東岸に位置する。SI4231より新しい。焼失住居であり、焼土や炭化した屋根材が落下していた。竈は北壁から約20cm離れて設けられ、石を置いて支脚としている。東壁北寄りに接して貯蔵穴がある。604・607が竈内から出土し、605・608は貯蔵穴からの出土である。

598は椀形高杯。口縁部は内弯し、端部を丸くおさめる。杯底部外面にヘラケズリを施す。色調は赤褐色で、胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。599は無稜直口高杯。杯底部外面と脚柱部にヘラケズリを施す。脚柱部内面もヘラケズリを施し、砂粒の移動した痕跡が明瞭に残る。脚裾部は内外面ともにユビナデで成形する。胎土に1～3mmの白色砂粒を多く含む。口縁部内外面に二次被熱の痕跡が残る。これは支脚転用ではなく、住居焼失時の被熱と考えられる。600は有段外反高杯。杯部は底部の粘土盤に大きく外反する口縁部の粘土を貼り付けて成形する。口縁端部に面をもつ。601・602は小型丸底壺。肩部以下を手持ちヘラケズリで調整し、内面もヘラケズリを施す。601は口縁部が短く外反する。赤褐色を呈し、赤褐色粒子と白色微砂を含む。604は直口壺の体部と思われる。体部下半に斜め方向、体部中位には横方向の手持ちヘラケズリを施す。赤褐色を呈し、胎土は赤褐色粒子と白色微砂を含む。甕(605～608)は口径12～15cmの中型甕が多く、また口縁部形態が多様である。605は口縁部が内傾し、端部を内側に巻き込み、内傾する面をつくる。外面は縦～斜め方向のハケ目調整で、内面は指ナデ痕跡が明瞭で

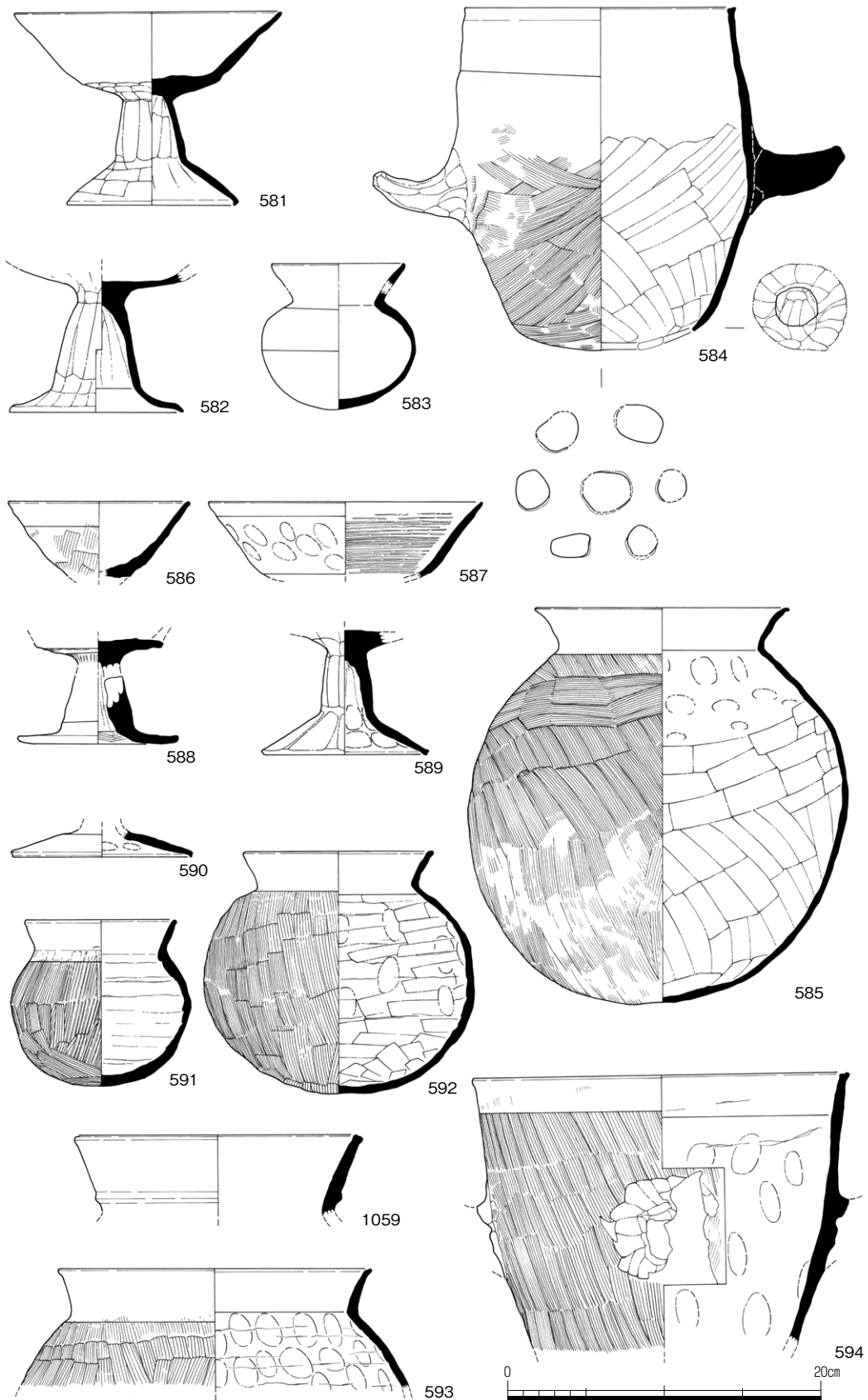


Fig. 138 SI4231・4233出土土器 1:4

ある。胎土に白色微砂を多く含む。606は長胴甕。口縁部はやや外反して開き、端部を丸くおさめる。外面は縦方向のハケ目調整を施し、内面は斜め方向のヘラケズリを施す。607は頸部が厚く、口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。体部外面は横方向に粗いヘラケズリを施す。内面はヘラケズリにより器壁をかき取る。赤褐色を呈し、金雲母をやや多く含む。608は台付甕。口縁部端部は外方と上方につまみ出し、三角形状を呈する。また、口縁部と頸部との屈曲部外面に小さく段をもつ。体部外面は櫛歯状の工具により、底部→体部中位、肩部→口縁部へとハケ目調整を施し、肩部に横方向のハケ目調整を1条施す。内面は体部下半に斜め方向のヘラケズリを下から上へ施し、体部中位は横方向の板ナデを施す。頸部はユビオサエの痕跡が残る。このほか、須恵器甕の口縁部片と製塩土器5片、韓式系土器甕が16片出土している。韓式系土器甕はいずれも外面に格子目叩きを施す (Fig. 141-1090~1097)。1092は口縁端部が残存し、端部にヨコナデを施し、上面は平坦をなす。

竪穴建物S I 4233出土土器 (Fig. 138, Ph. 110) SI4233は自然河川NR4225の西岸に位置する。竈は東南隅に斜め方向に設け、作りかえがある。第2次竈は土師器高杯脚部 (589) を芯にして粘土を巻き、支脚とする。南壁のほぼ中央に接して貯蔵穴がある。593・594が竈内、588・591・592・1059は貯蔵穴、590は西南柱穴、587は竪穴床面からの出土である。

586は小型の高杯で、杯部外面下位にハケ目調整を施し、口縁部にヨコナデを施す。胎土が粗く、白色砂粒と金雲母を含む。588は杯底部と脚柱部の破片である。器壁が分厚く、脚裾部は平坦に近い。杯底部は擬口縁をなし、内面に口縁部の剥離痕跡があり、そこに杯部内面から続くハケ目痕跡がみられることから、杯底部となる粘土円板全体にハケ目調整を施した後、口縁部を貼り付けたことが分かる。杯底部外面と裾部内面にもハケ目痕跡が残る。586と同型式と思われる。587は無稜外反高杯。内面に横方向のヘラ磨きを施す。外面はナデ調整である。胎土に赤褐色粒子を多く含む。589は裾部がハの字状に開く高杯脚柱部。外面は縦方向にヘラケズリを施し、裾部はナデ調整である。赤褐色を呈し、胎土に白色砂粒を多く含む。590は脚裾部で平坦に近い。脚端部を下方につまみ出す。胎土は赤褐色粒子を多く含み、587に類似する。甕 (591~593) は口径により、小・中・大の3つに分かれる。591・592は口縁端部を丸くおさめ、外面はハケ目調整。内面に粘土紐の痕跡が明瞭に残る。591は淡黄褐色を呈し、白色微砂を多く含む。592は白色微砂と金雲母を含み、外面にススが付着する。593は口縁端部を外方につまみ出し、上方に面をもつ。外面はハケ目調整で内面はユビオサエである。内面には粘土紐の痕跡が明瞭に残る。甌 (594) は底部に向かって直線的にすぼまる形態で、把手を挿入手法で接合し、外面に粘土を貼り付けて補強する。外面は縦方向のハケ目調整を施した後、口縁部にヨコナデ調整を施す。口縁端部は外方につまみ出し、上方に面をもつ。1059は須恵器甕。口縁部はやや外反し、端部をわずかに肥厚させる。口縁部下位に1条の突帯状の段がみられる。この他、製塩土器1点と韓式系土器甕12片が出土した (Fig. 141-1098・1099)。

竪穴建物S I 4234出土土器 (Fig. 139, Ph. 111) SI4234は自然河川NR4225の西岸に位置する。大半がSI4235によって壊される。南壁東寄りに貯蔵穴があり、597は貯蔵穴からの出土。

1086は韓式系土器の蓋。頂部と口縁部との境をわずかにつまみ出す。頂部の2箇所粘土を貼り付けて耳状の張り出しをつくり、上方の中心側から周縁に向けて刺突し、穿孔を施す。口縁部はやや外方に開く。淡褐色を呈し、胎土に0.5~3mmの白色砂粒を多く含む。韓半島西南部

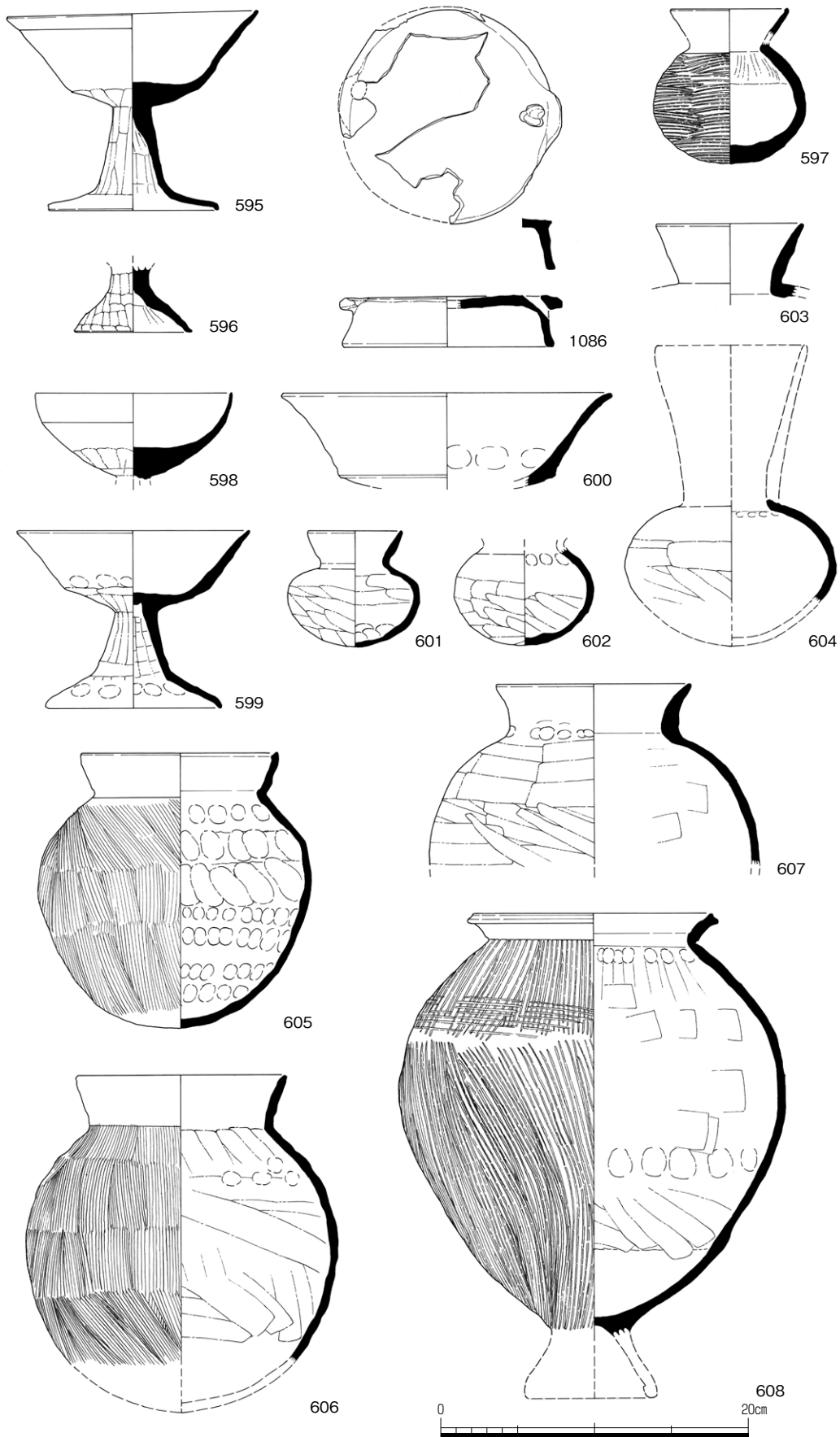


Fig. 139 SI4230・4232・4234出土土器 1:4

湖南地域（いわゆる馬韓の領域）に分布する両耳壺の蓋である。597は小型丸底壺。胴部最大径が体部下位にあり、下膨れの形態である。器壁が厚く、外面に粗い分割ヘラミガキを施す。口縁端部は内側に小さく巻き込む。この他、韓式系土器1点が出土した。

竪穴建物S I 4235出土土器 (Fig. 140, Ph. 112) SI4235は自然河川NR4225の西岸に位置する。SI4234よりも新しい。南壁中央に接して竈の痕跡があり、東壁北寄りに接して貯蔵穴がある。

609～613は無稜外反高杯。609は小型で、杯底部外面にヘラケズリを施す。赤褐色を呈し、赤褐色粒子と白色微砂を含む。610は器面の磨滅が著しく、調整は不明である。胎土に白色微砂と金雲母を含む。611・612は杯底部と口縁部との境が丸みを持ち、椀形高杯に似る形態である。両者ともに脚部との接合部に刺突痕が残る。611は白色微砂と金雲母を含み、612は口縁部内外面にススが付着する。613は内外面にススが付着する。614は有段外反高杯で、口縁端部を欠損する。杯部が深いタイプである。杯底部外面にヘラケズリを施す。赤褐色粒子と白色微砂を含む。616は長胴甕。やや肩が張る形態である。口縁端部を内側に小さくつまみ出し、上方に面をもつ。外面はハケ目調整を施し、内面はユビオサエ痕跡が残る。また内面には粘土紐の痕跡が残る。この他、韓式系土器甕1片が出土した (Fig. 141-1100)。

竪穴建物S I 4236出土土器 (Fig. 140, Ph. 112) SI4236は自然河川NR4225の西岸にある。竪穴建物で最も規模が大きい。北壁中央やや東寄りに竈の痕跡が残る。南壁東寄りに貯蔵穴がある。619・622・624・1087は貯蔵穴、621・623・626は竪穴床面、620は壁溝から出土した。

1087は韓式系土器の蓋。頂部と口縁部との境に稜を持ち、口縁端部はやや外方につまみ出す。頂部の2箇所粘土を貼り付けて耳状の張り出しを造り、上方から周縁に向けて刺突による穿孔を施す。穿孔位置と耳の位置は一致しない。頂部に分割ヘラミガキを施し、口縁部外面にも密なヘラミガキを施す。黒色を呈し、胎土に微細な雲母片を多く含む。1086と同じく、韓半島湖南地域に分布する両耳壺の蓋である。黒色に焼成する点や胎土に雲母片を含む点はこの竪穴遺構から出土する土師器とは異なっており、韓半島から直接搬入された可能性がある。ただし、韓半島の両耳壺蓋で頂部や口縁部にヘラミガキを施す例は、管見の限りない。617・618は無稜外反高杯である。杯底部外面にヘラケズリを施す。617は内外面に横方向のヘラミガキを施す。淡黄褐色を呈し白色微砂を含む。618は器面の磨滅が著しく、ミガキの有無は不明である。胎土に白色微砂をやや多く含む。619・620も無稜外反高杯で、外面底部から口縁部方向にハケ目調整を施す。620の口縁部は外反するが、619は外方へまっすぐ開く。また、619は内面にススが付着する。621は脚柱部で、外面に縦方向のハケ目調整を施す。内面に絞り痕跡が残る。裾部内面にはユビオサエ痕跡が残る。赤褐色を呈し、白色微砂を多く含む。甕（622～626）はいずれも大型の長胴甕である。622は口縁端部を丸くおさめ、口縁部中位の器壁がやや厚い。口縁部内面に横方向のハケ目調整を施し、体部内面は板ナデを施す。623は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。内面を斜め方向のヘラケズリで調整し、外面は縦方向と横方向のハケ目調整を施す。胎土に白色砂粒を含み、外面にススが付着する。624～626は外面に縦方向のハケ目調整を施した後、肩部に横方向のハケ目調整を行う。624・626は、口縁端部を内側につまみ出し、上方に面をもつ。625は口頸部がくの字状に屈曲し、口縁部はまっすぐ外方にのびる。口縁端部は外方につまみ出し、上方に面をもつ。内面は624・625が斜めや横方向のヘラケズリを施すのに対し、626はユビオサエが明瞭に残る。626は淡褐色を呈し、白色微砂と金雲母を含む。

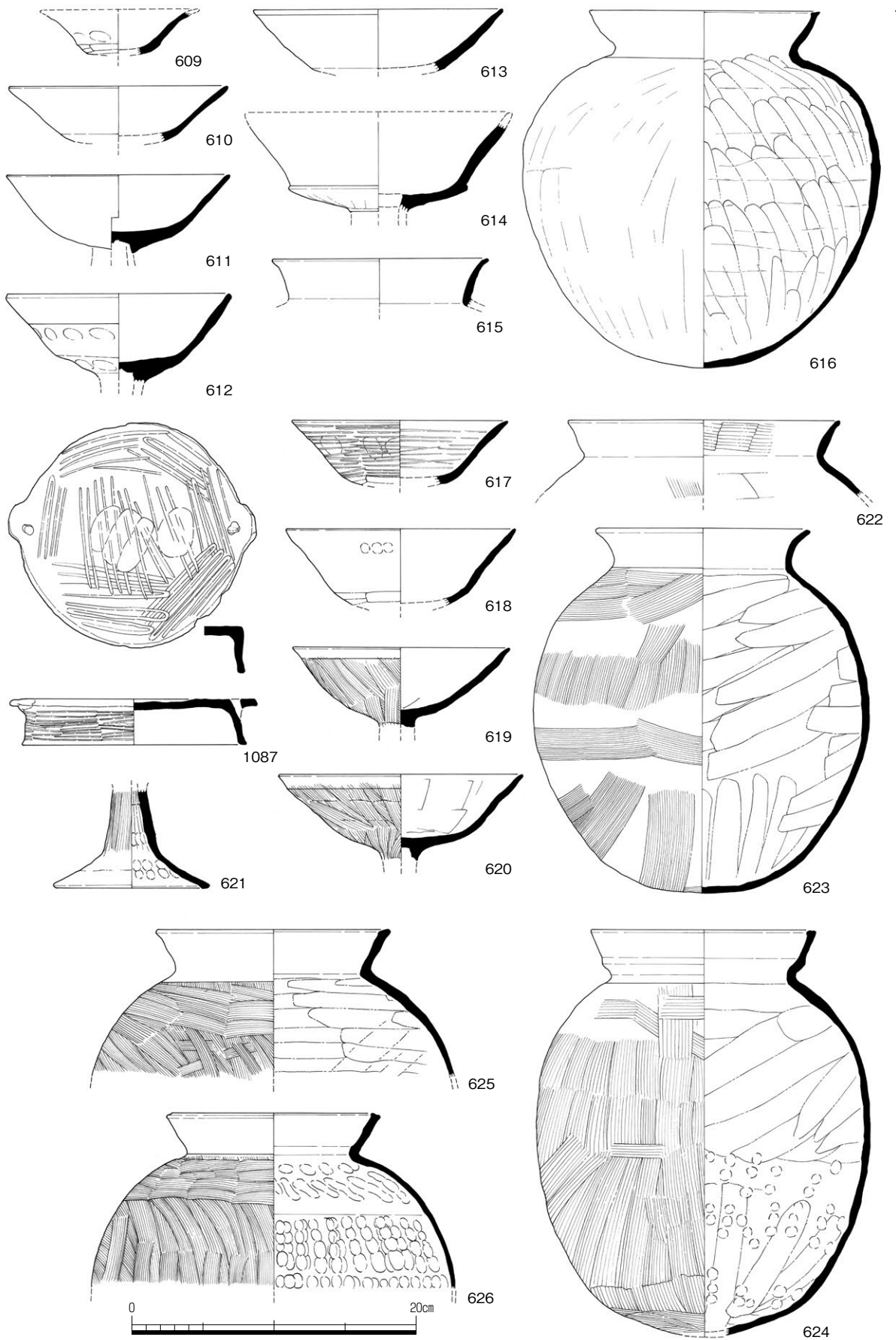


Fig. 140 SI4235・4236出土土器 1:4

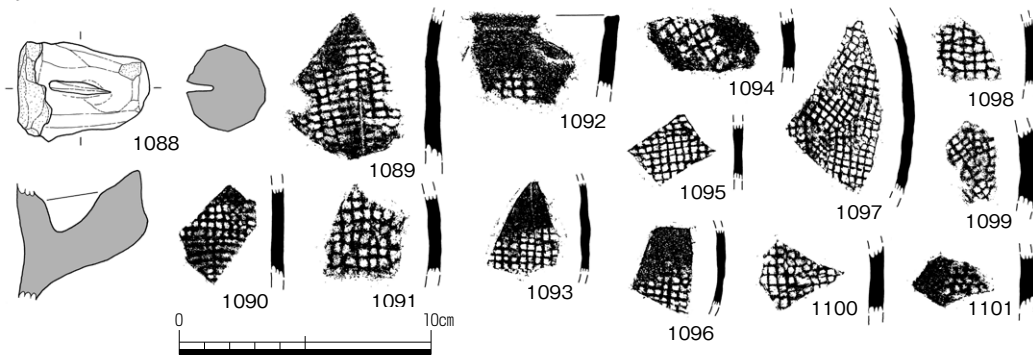


Fig. 141 韓式系土器 1:3

625は赤褐色を呈し、白色微砂を、624は白色砂粒と赤褐色粒子をやや多く含み、金雲母を少量含む。体部下半は器面磨耗が著しく、体部下半にススが付着する。この他、製塩土器と韓式系土器甕片が1点 (Fig. 141-1101) 出土した。

iii 中世の土器 (Pl. 35, Ph. 114)

調査区各地から多量の中世の土器が出土した。多くは井戸や溝などの遺構からの出土で、当地における土器様相を具体的に示す資料である。ここでは、資料的にまとまりのあるSE4790とSJ5029、SJ5007、およびSD4744・4745・4755出土土器について記す。

SE4790出土土器 (Pl. 35) 土師器皿・羽釜、瓦器椀、須恵器鉢・甕がある。最下層の曲物内出土の土師器皿 (631~634) はいずれも口縁部に沿ってヨコナデを施すもので、全てe手法で調整している。胎土はにぶい黄褐色を呈し、口径9cm前後 (631・632) と11cm前後 (633・634) の二群が認められる。石組内からは、瓦器椀 (1102~1105) と土師器皿 (635~642)、陶器鉢 (1060) が出土した。口径9.9~10.5cmの瓦器椀は川越俊一⁹の分類による第Ⅲ段階E型式に相当し、内面にのみ粗い渦巻状のミガキを施し、底部には形骸化した高台を付す。土師器皿は胎土がにぶい褐色を呈する一群 (635~641) と灰白色を呈する一群 (642) に大別でき、前者はさらに口径9cm弱 (635~639) と11cm前後 (640・641) の二法量に分化する。いずれも口縁部に沿ってヨコナデを施しており、調整がe手法であることも共通するが、褐色胎土のものと較べて灰白色胎土の642はごく薄手の作りで、京都近郊産と推定される。1060は「山茶碗」と俗称される東海地方産の無釉陶器で、体部外面下半にはヘラケズリを施している。胎土の特徴から尾張産と考えられる。井戸上層からは、瓦器椀 (1106・1107)、土師器皿 (643~649)・羽釜 (650)、須恵器甕 (1061) が出土した。瓦器椀は石組内出土品と同様に概ね第Ⅲ段階E型式の特徴を示すが、口径の復元値が若干大きく、むしろやや古相を呈する。土師器皿は石組内出土品のうち胎土がにぶい褐色を呈する一群との共通性が高く、やはり口径9cm前後 (643~646) と11cm台 (647~649) の二群に法量分化する。1061は胴部を叩き成形する須恵器甕で、外面に格子目叩き、内面には無文の当て具痕跡が認められる。焼成はやや軟質で胎土は灰白色を呈し、亀山焼と目される。土師器羽釜は、菅原正明¹⁰の土釜分類による大和B1型に相当する。内面口縁部から外面にかけて炭素 (煤) の付着が著しい。

曲物内や井戸上層の出土品には、やや古手の遺物が混在しているようにも見受けられるが、石組内出土品は総じて残存状態が良好で、時期的にもまとまりのある遺物群と考えられる。伴

出の京都近郊産土師器皿(642)は、平安京左京六条二坊五町楊梅小路南側溝SD19出土品¹¹に似るが、口径がやや小さく若干降る時期のものと考えられる。楊梅小路南側溝SD19は貞和元年(1345)に、勅諭で京都六条堀川に寺地を得た本國寺を建立した際に埋められたと推定され、出土品には14世紀前半の年代観を付与できる。よって、それよりも僅かに新相を示すSE4790出土品は、14世紀でも半ばから後半に差しかかる時期のものと考えられる。

SJ5029出土土器 (Pl. 35) 調査区北西部のSB5030の南側柱列中央やや内側に位置する土坑からの出土品。12枚折り重なった状態で出土した土師器皿のうち、6枚を図示した。いずれも口縁部に沿ってヨコナデを施し、調整はe手法である。口径は8.6~9.3cmで、胎土は明赤褐色を呈する。類品が奈良市教育委員会によるHJ第531次調査の土坑SK16から、前述の楊梅小路南側溝SD19出土品よりも僅かに古相を示す京都近郊産土師器皿に伴って出土¹²しており、14世紀前半でも初頭に近い時期のものと考えられる。

SJ5007出土土器 (Pl. 35) 中世の土坑SK5004の北肩に位置する小土坑から出土した土師器皿のうち、6枚を図示した。形質的な特徴は全般的にSJ5029出土品と高い共通性を示す一方で、口径が8.6~9.5cmと僅かに大型で、口縁部にヨコナデを強く施す傾向がある。SJ5029出土品とおよそ同時期と考えられるが、13世紀末頃にまで遡るかもしれない。

SD4744・4745・4755出土土器 (Pl. 35) 中世の集落を区画すると考えられる溝からの出土品。これらの溝は一連の遺構であり、出土土器にも高い共通性が認められるため、ここでは一括して記述する。瓦器椀、土師器皿・羽釜、灰釉陶器筒形容器・平椀、青磁椀、瓦質土器羽釜・鉢・甕、焼締陶器甕がある。瓦器椀(1108・1109)は口縁部にのみ炭素を吸着させるもので、内外面ともミガキ調整は認められず、第IV段階D・E型式に相当する。土師器皿(663~688)は、胎土がにぶい褐色から明赤褐色を呈する一群(褐色系:668~677)とやや黄ばんだ灰白色を呈する一群(白色系:678~688)に大別でき、さらに前者は口径7.5cm前後(663~671)と9cm台(672~677)の二群に、後者は口径7cm前後(678・679)、10cm前後(680~684)、12cm前後(685)、14cm台(686~688)の四群に法量分化する。いずれも調整はe手法で、口縁部に沿ってヨコナデを施すことも共通するが、白色系の土師器皿には概して幅広のナデを施す。土師器羽釜(689)は胎土に0.5mm大の砂粒を多く含んでおり、にぶい褐色を呈する。強く内側に折れ曲がる独特な形状の口縁部には内外面ともにヨコナデ調整を施し、胴部内面には成形時の圧痕が明瞭に残る。大和H3型¹³に属するもので、鏝と鏝より下位の胴部外面には二次的な炭素(煤)の付着が認められる。瓦質土器(1110・1111)は胎土に石英とおぼしき0.2~0.5mm大の砂粒を多く含む。羽釜(1110)は内面をハケ目で調整しており、鏝より下位の胴部外面にはヘラ削りを施す。鉢(1111)は磨耗のため調整手法が明瞭ではないが、口縁部のヨコナデ調整は確認できる。灰釉陶器(1112・1114)はいずれも愛知県の瀬戸窯産と目され、灰白色を呈

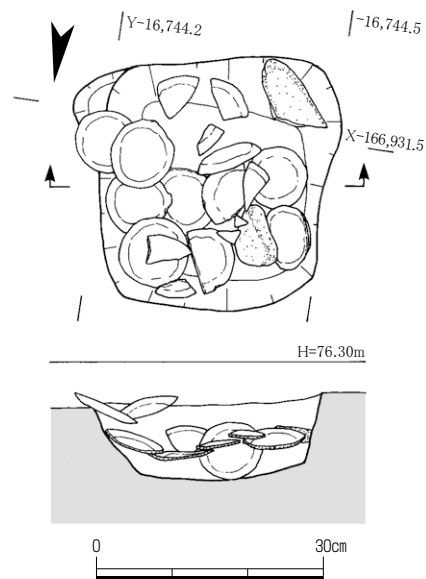


Fig. 142 SJ5007土器出土状況 1:8

する胎土は0.2～0.3mm大の長石、石英粒を多く含む。筒形容器（1112）は見込みと高台周辺が露胎で、時計回りのロクロで削り出した高台の下端面（畳付）には回転糸切痕が残る。淡緑色の灰釉は二次被熱によって変質（発泡）しており、剥落も著しい。1114は平碗の口縁部片で、やや黄ばんだ淡緑色を呈する灰釉は1112と同様に二次被熱によって変質している。青磁碗（1113）は中国南方系窯の産と考えられるもので、見込みに印花文を施すが、高台を除いて厚くかけられた青磁釉に遮られ、文様は不鮮明である。灰釉陶器と同じく、二次被熱によって口縁部の釉薬が変質し、発泡している。焼締陶器には胎土の特徴から信楽窯産と目されるものと常滑窯産と考えられる甕があるが、後者は細片で量的にも少ない。1115は1mm大の長石粒を多数含む胎土の特徴から信楽窯産と推定されるもので、器表面にはぶい褐色から橙色、割れ口は明るい灰白色を呈する。内面には、紐輪積成形による粘土紐の接合痕跡が認められる。

この土器群の年代を考える際には、瀬戸窯産の灰釉陶器と青磁碗、土師器羽釜が有力な手がかりとなる。筒形容器（1112）の類品は平安京左京五条三坊九町跡（烏丸綾小路遺跡）土坑¹⁵から、灰釉陶器平碗（1114）の類品は史跡・名勝嵐山土坑¹⁶170から、青磁碗（1113）の類品は平安京左京四条三坊十二町SK769¹⁷から、いずれも平尾政幸の編年¹⁸による9Bの土師器皿と共に出土している。史跡・名勝嵐山土坑170出土の土師器皿が文安4年（1447）の天龍寺の火災に伴う廃棄物処理土坑¹⁹と考えられることを勘案するならば、SD4744・4745・4755出土土器には、15世紀半ばを中心とする年代観を与えることが許されよう。この年代観は、古市城跡城山地区から出土した寛正7年・文正元年（1466）の墨書銘を有する土師器羽釜²⁰と689との形態的類似性からも裏付けられる²¹。

F 陶硯・特殊土製品

i 陶 硯

硯は定型硯²²20点、転用硯12点の全32点が出土した。転用硯には2点の朱墨硯を含む。出土位置はSD4130とその周辺の遺構や包含層に偏るが、少量ながらSD4130から離れた地点でも出土する（Fig. 272）。

a 定型硯（Fig. 143・145, Ph. 115・116）

緑釉獸脚硯（Fig. 143） 1は緑釉獸脚硯である。調査区北西のSD4130中層およびSD4130周辺の耕作溝から出土した破片が接合した。硯部は直径18cmで、外堤径15.6cmである。硯部はロクロナデ調整により、ほぼ水平の陸部から緩やかに外方へ開きながら厚みのある外縁に至る。硯部外縁の内寄りに外堤部を貼り付け、外傾する断面逆台形の海部をつくる。外堤端部は外傾する平坦面をなす。硯部外縁の上端に稜がつき、側面には文様を施すためにロクロナデ調整を施す。この硯部外側面に型抜きした獸脚を貼り付ける。獸脚の数は5本が残存し、11本に復元できる。獸脚は、半球形の脚頭部と蓮弁文を陽刻した脚裾部からなる。脚頭部は倒卵形を呈し、脚裾部の蓮弁文は、中心のものが先端のやや尖る単弁で、子葉の表現がある。硯部外側面の脚頭部の左右にわずかに平坦面が残り、これは型を押しつけた痕跡と判断される。硯部外縁上端を脚頭部の頂部の目安として粘土を入れた型を硯部に接合し、背面から粘土により補強する。その後、

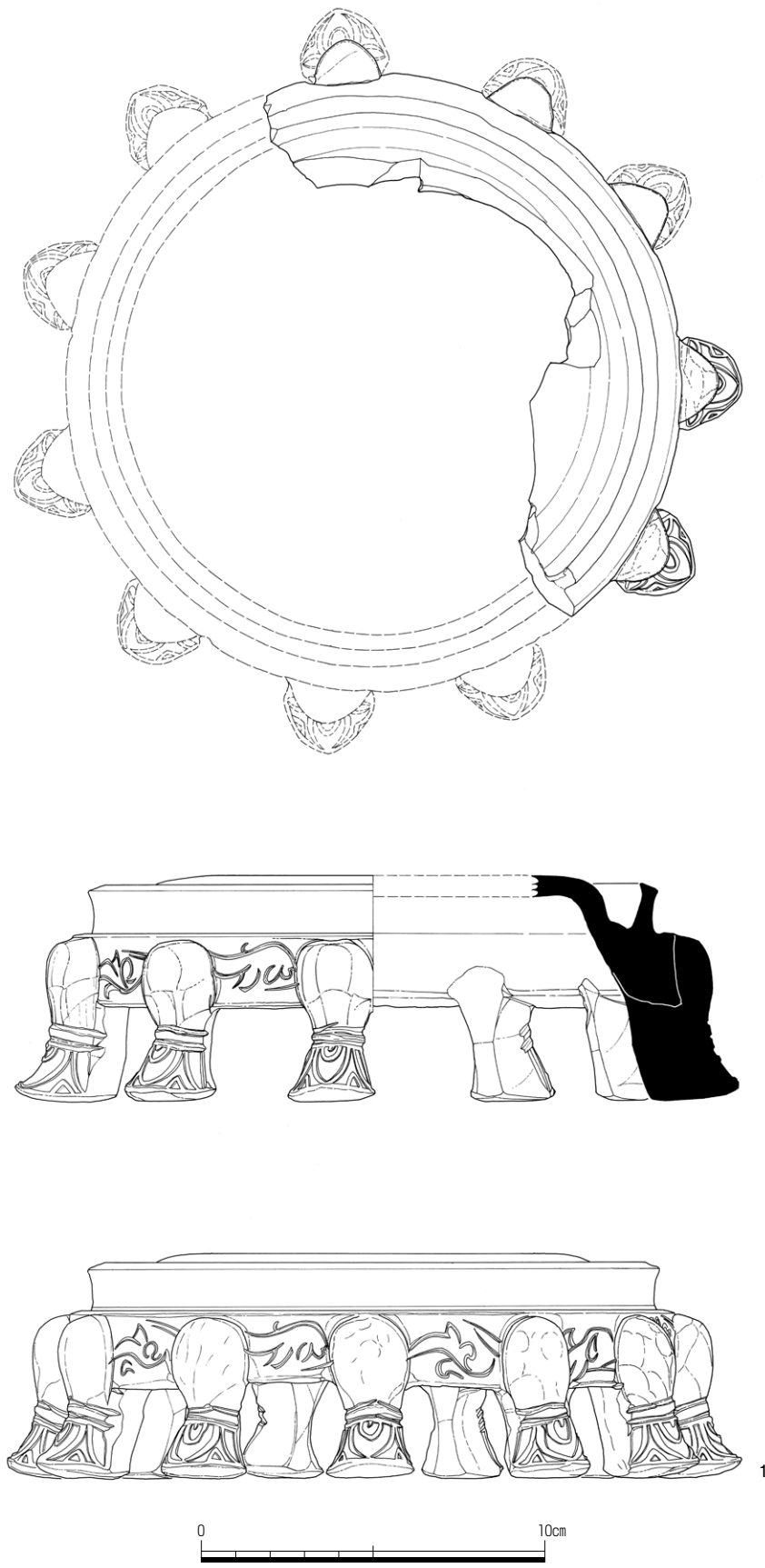


Fig. 143 緑釉獸脚碗 1:2

脚頭部のまわりをヘラで縁取り、背面と側面は上から下方向へのヘラケズリによって面取りを行う。脚端部にも面取りを行う。脚部側面の一部には型と補強粘土との段が残る。この後、獸脚のくびれ部にはヘラ描きで2条の沈線を施す。上の沈線は左右から描き始めており、中央で接する。

硯部外側面には忍冬唐草文をヘラ描きで陰刻する。これは、脚頭部および、その周囲の縁取りの沈線と重複していることから、獸脚を貼り付けた後に描かれたことが分かる。文様は残りの良いA区間（左から脚1・2の間）、B区間（同脚2・3の間）をみると、A区間では唐草の主弁が脚1へ伸び、上方に小さく1本の小弁、下方に3本の小弁を表現し、5葉の唐草が表現されている。B区間では主弁が脚2へ伸び、上方に2本の小弁と下方に1本の小弁を表現し、4葉の唐草となる。また、脚2左の左下に下がる1本の沈線と、脚3左の左上へ上がる2本の平行線は波状の莖を表現しているものと考えられ、この文様は右向きの忍冬唐草文であることが分かる。類例としては法隆寺献納宝物金銅小幡の坪縁を囲む忍冬唐草文²³（特に第7坪B面部分。Fig. 144）があり、これとの対比から獸脚の脚頭部を結節点の萼に、脚裾部の蓮弁を結節点からのびる蕾に見立てた意匠とする見解がある²⁴。

胎土は灰白色を呈し、精良である。緑釉は硯面を含め、全面に施すが、脚端部は露胎である。ただし、脚端部は使用による擦れにより釉が剥落した可能性も残る。釉調は淡い緑色で、一部褐色を呈する箇所もある。全体的に薄く施釉されているが、文様の沈線内の釉溜まりからみて、正置状態で焼成されたことが分かる。硯面および海部底に墨はみられない。実際に硯として使用されたか否かは不明である。

当該硯をめぐっては、その産地について韓半島（百済）に求める説²⁵と、国内での生産を求める説²⁶がある。同様の獸脚硯は百済を中心に類例が多く、特に扶余扶蘇山城出土緑釉獸脚硯は、形態、釉調、獸脚の蓮弁文様からみて、非常によく似ている。ただし、先行研究にあるとおり、現在までに硯部側面に唐草文様を施す獸脚硯は百済地域でも発見されていない。そもそも韓半



Fig. 144 法隆寺献納宝物金銅小幡と緑釉獸脚硯

島では印花文出現以前の新羅の陶質土器外面に幾何学文を施す例を除き、器物に唐草文などの文様をヘラ描きする例はきわめて少ない。むしろ、この唐草文様のモチーフが藤原宮式軒平瓦6647型式と類似している点もふまえ、百済の緑釉獸脚硯を熟知し、唐草文様の表現にも通じた工人が国内で製作した可能性を考えたい。

蹄脚円面硯 (Fig. 145) 4点出土した。いずれも脚台部と硯部を別に作る蹄脚円面硯Aである。2は硯部の下端が残存し、脚柱部は剥離する。外面に1条の凹線を施し、その下に脚柱部を貼り付ける。脚頭部の周囲をヘラ状工具で縁取る。灰白色を呈し、胎土に白色微砂を含む。硯部下端と内面に降灰があり、倒置焼成されたことが分かる。SD4130下層出土。3は外堤部が低く、外面に1条の突帯を巡らせ、その下に脚柱部を貼り付ける。脚柱部は型作りではなく、粘土を貼り付けた後、外面と側面をヘラケズリ、内面をナデ調整により脚頭部、脚柱部を表現する。また、ヘラケズリにより花卉状の透孔を繰り込む。青灰色を呈し、胎土に黒色粒子と白色微砂を含む。SD4130中層出土。

10は脚台部である。二段構成であり、下段は断面が逆台形を呈し、その上に上段の粘土を貼り付ける。上段脚台の内端に脚柱部を貼り付ける。上段は脚柱部右側に斜めに切り込みを入れており、この切り込み部分に剥離痕がみられることから、何らかの装飾を貼り付けていたものとみられる。ただし、脚柱部の左側に切り込みはみられないことから、装飾の間隔は一様ではなかったと考えられる。脚台部の内外側面および脚台下面にヘラケズリ調整を施す。脚柱部は低い三角形を呈し、脚節部を有する。型作り成形であり、両側面にヘラケズリ調整を施し、内面は縦方向のナデ調整を施す。胎土に1～3mmの白色砂粒を含む。藤原京期(Ⅲ-B・C期)の正殿SB5000の北東、NA34地区の包含層出土。11も脚台部である。脚台は断面形が長方形を呈し、脚柱を脚台の中央外寄りに貼り付ける。脚柱は正面観が丸みをもった三角形を呈し、外面は裏側までヘラケズリを施して整形する。脚台は外側面にヘラケズリ、内側面にナデ調整を施す。胎土に白色微砂をやや多く含む。脚台下面に降灰があり、倒置焼成されたことが分かる。SD4130中層出土。

圈足円面硯 (Fig. 145) 10点が出土した。硯面が残るものは、全て硯面が明瞭に隆起する圈足円面硯Aである。硯面径や脚台径により、大型品(4・5)、中型品(6～8)、小型品(9)が認められる。4は外堤部と硯面を欠損しており、海部がわずかに残る。体部外面に突帯が巡り、突帯から硯面までの間隔が長い点の特徴である。突帯の側面にロクロナデ調整を施し、下端部はわずかに内側に折り込む。幅4cm以上の広い透孔を開けるが、間隔や形状は不明である。青灰色を呈し、胎土に1～3mmの白色砂粒を少量含む。調査区中央西より、NB27地区のⅢ-C期東西塀SA4731の柱穴から出土した。5はSD4130中層、上層と、SE4770上層から出土した同一個体の破片から図上復元した。陸部はゆるやかに盛り上がり、陸部と海部の境に低い突帯を貼り付ける。外堤部は上方に開き、端部に平坦面をもつ。外面に断面三角形の太い突帯を貼り付ける。脚部はハの字状に開き、端部は丸みをもつ。端部直上に断面蒲鉾形の突帯を貼り付ける。脚部にヘラで切り込みを入れて、楕円形の透孔を開ける。胎土に1～5mmの白色砂粒を多く含む。6は陸部の中央がやや窪み、海部との境には緩やかな稜がつく。低い外堤部の下に1条の突帯が巡る。幅2～2.7cmの透孔が7～8箇所開く。硯面は良く擦れている。胎土に白色微砂と2～3mmの白色砂粒を少量含む。調査区東南部のSD4143西側、BS90地区包含層出土。7は陸部

が平坦で、浅い溝状の海部との境に稜がつく。堤部外面に1条の突帯をもち、外堤部を貼り付ける。硯面は良く擦れている。淡青灰色を呈し、黒色粒子と白色微砂を少量含む。調査区北西部FM97地区包含層出土。23 (Ph. 116) は小破片のために図示しえないが、外堤部は粘土紐を重ねて器壁を厚くする。外面直下に突帯が巡るが、下部を欠損しており、突帯の数や透孔の形状等は不明である。灰白色を呈し、やや砂粒が目立つ胎土である。SD4130上層出土。

8・9は脚部である。8は外面に1条の沈線を施し、ここを下端として方形の透孔を切り込んでいる。灰白色を呈し、黒色粒子をわずかに含む。調査区中央部、HQ20地区の土坑SK4327周辺の包含層出土。9は小型品の脚部で、脚部外端は接地せず、内端部は内側に肥厚させる。方形の透孔をヘラで切り込むが、透孔の数等は不明である。胎土に黒色粒子を少量含む。SD4130上層出土。

この他、図示はできないが、脚柱部が出土している。脚柱部が幅1.5cm以下の細いもの(Ph. 116-24・25)と2.5cm前後の太いもの(Ph. 116-26)とがある。24はハの字状に広がる脚部で、端部を内側に折り曲げる。外面に2条の沈線を施し、下の沈線を下端として透孔を切り込む。調査区北東部のNM25地区の小土坑出土。25は外面の突帯下部が残り、透孔が突帯直下から切り込んでいることがわかる。下端に沈線が残る。器高の低い小型圈足円面硯であろう。調査区中央部東よりのNA11地区包含層出土。26は透孔をヘラで切り込んだ後、内側、外側に面取りを行う。外面下位に1条の沈線が巡る。内面に降灰がみられることから、倒置焼成したものと考えられる。NG34地区のSK5015下層出土。

風字硯 (Fig. 145) 1点出土した。12は黒色土器A類の風字硯の硯頭部で、内面を黒色に燻し、ヘラミガキを施す。外面に円形の剥離痕跡があり、脚を貼り付けていたとみられる。胎土に金雲母と白色微砂を含む。奈良時代末以降、平安時代前半の所産であろう。SD4130上層出土。

猿面硯 (Fig. 145) 4点ある。13は甕の体部下半を利用したもので、頭が尖る隅丸方形の硯面をなす。側面は研磨している。外面に擬格子状の平行叩き目と内面に当て具痕が残る。内面は使用により、当て具痕の凹凸が磨り減っている。調査区東部、HI11地区のSD4130周辺の包含層出土。14は甕の肩部を利用したもので、細かな敲打により円形に成形した後、側面を研磨する。内面は使用により平滑になる。器壁は薄く、外面に平行叩きを施し、内面に無文当て具痕があり、一部はナデ調整により磨り消されている。また、外面には緑色がかった自然釉が降着する。胎土は精良で、白色微砂と黒色粒子をわずかに含む。猿投窯産の甕である。SD4130下層出土。15は14と同様、甕の体部を利用したもので、頭が尖る隅丸方形の硯面をなす。側面は丁寧調整しており、平滑である。一部に成形した際についた細かい条線がみられる。胎土はやや軟質だが焼成は堅緻で、外面に灰褐色の自然釉が降着する。外面に平行叩きを施す。内面は当て具痕跡がわからないほど磨られている。調査区西部、藤原京期前半(Ⅲ-B期)の東脇殿SB4332付近の、HG32地区の包含層出土。

16は壺の胴部下半で、側面および外面を研磨して成形する。外面には壺を製作した際のロケロケズリ調整が残る。硯面は平滑である。SD4130上層出土。

この他、硯に付属する筆立て(Ph. 116-27)が出土した。上端と下端を欠損するが、上部に径8mmの筆立て穴が開けられており、これは貫通しない。外面は表面と両側面をヘラケズリ調整し、角を面取りする。裏面はナデ調整である。

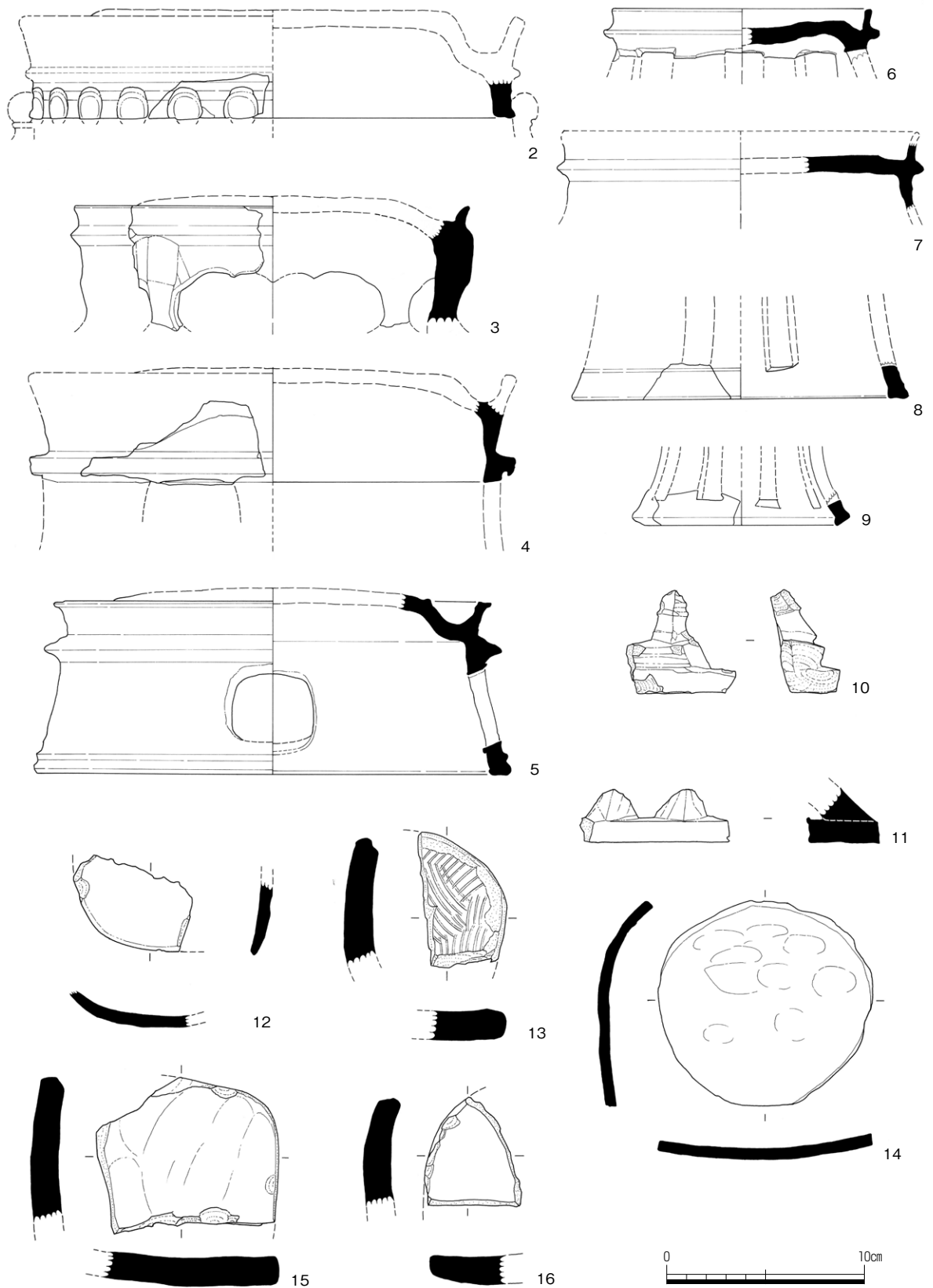


Fig.145 定型碗 1:3

b 転用硯 (Fig. 146, Ph. 116)

転用硯は12点ある。全て須恵器で、器種には杯A、杯B、杯B蓋、壺底部、盤、甕がある。うち2点(19・20)は朱墨が付着する。

杯A(20)はSK4325出土土器の項で報告(Pl. 34-1016)したが、ここで再掲する。直接接合はしないものの、同一個体の底部と口縁部から図上復元した。底部は平底で、口縁部との境に稜をもつ。内面は口縁端部付近まで朱墨が付着し、器面も平滑である。この他、杯AはSD4130中層から1点(Ph. 116-30)が出土した。平底の底部で、口縁部との境に稜をもつ。底部外面はロクロケズリ調整を施す。内面に墨が付着し、器面も平滑である。

19は杯B。底部から丸みをもって口縁部が立ち上がり、断面が三角形に近い低い高台を底部外寄りに貼り付ける。底部外面はヘラ切り後、軽いナデ調整を施す。内面に朱墨が付着する。SD4130中層から出土。

杯B蓋は、SD4130中層(17・18・28・29)から5点の他、SK4325(Pl. 34-1012)、SB4737から出土した。17は頂部が平坦で、口縁部がゆるやかに降り、端部で屈曲する。かえりはなく、口縁端部を折り曲げる。頂部中心から少しずれた位置にボタン状のつまみを貼り付ける。胎土に1~3mmの白色砂粒を含む。内面に墨が付着し、器面も平滑である。18は頂部が平坦で、ゆるやかに口縁部が降る。低い擬宝珠状のつまみを貼り付ける。外面は全面に降灰がみられる。胎土に1~5mmの白色砂粒を含む。内面に墨が付着し、器面も平滑である。つまみと頂部内面の破片(Ph. 125-28)は内面に墨が付着し、器面も平滑である。頂部の破片(Ph. 116-29)は内面に墨が付着し、器面も平滑である。

21は丸底の壺底部を利用したもので、外方へのびる高台をもつ。底部内面に無文当て具痕が残り、叩きによって成形したとみられる。底部外面にロクロナデ調整を施す。高台を外堤部に、

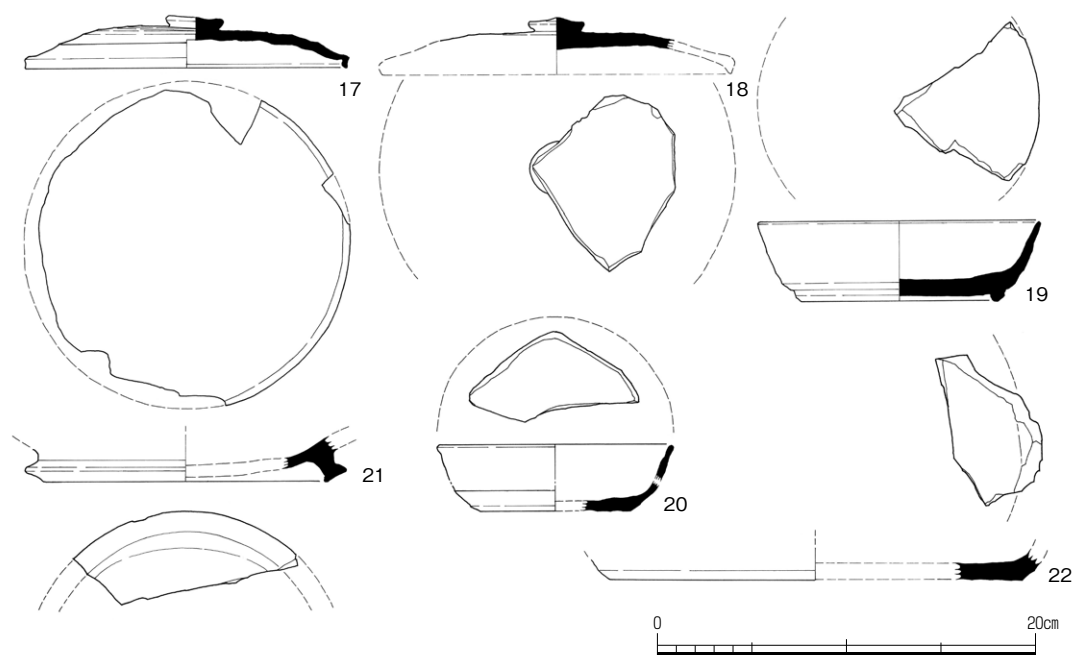


Fig. 146 転用硯 1:4

底部外面を硯面として使用しており、全体に墨が付着する。SD4130中層出土。

22は盤の底部片と考えられる。平底の底部と体部の境に稜をもつ。外面が暗灰色を呈し、内面は淡青灰色である。胎土に白色微砂を含む。内面に墨が付着する。SD4130中層出土。

これらの転用硯は、形態的特徴からみて、藤原宮期を中心としたものであろう。

ii 土馬 (Ph.117)

土馬は全20点出土した。出土位置は、大半が東西大溝SD4130および周辺の包含層であり、一部は調査地西南の第46次調査区から出土した。出土した土馬は以下のようにⅠ～Ⅲの3型式に分類できる。

Ⅰ型式 (Fig.147) 胴部を棒状粘土でつくり、径2cmを超える円柱状の脚部を接合する。尻尾は下向きに垂れる。胴部の横断面は円形から長楕円形を呈する。脚部を胴部と接合する際に胴部を少し窪ませ、脚部を差し込んでおり、接合粘土を用いる点が特徴である。小笠原B型式²⁷にあたる。8点が当該型式に属する。

1は脚部と頭部の一部を欠失するが、頭部から尻尾までの形がわかる良好な資料である。棒状粘土で胴部を作り、頭部から胴部にかけてヘラケズリ調整、尻尾にナデ調整を施す。頭部は

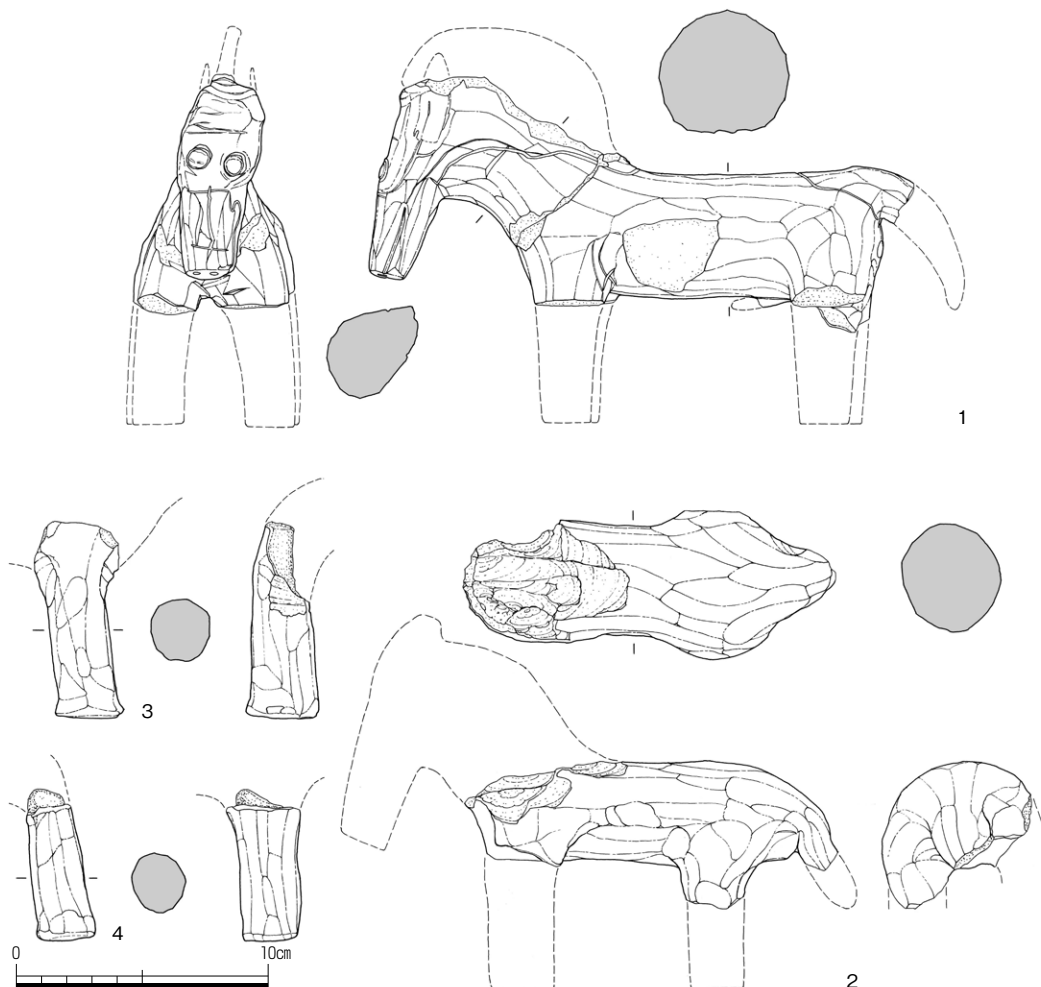


Fig.147 土馬Ⅰ型式 1:3

顔面が平坦で、目は竹管を押圧して表現する。口の先端部は平坦面をなし、鼻は棒状工具による刺突、口は側面にヘラで切り込みを入れて表現する。たてがみは欠損するが、ナデ調整により粘土を延ばして表現する。その後、耳を粘土で貼り付けるが、剥離しており残存しない。手綱と尻繫をヘラで線刻するが、鞍の表現はない。胴部には生殖器の表現がある。粘土を貼り付けて成形した後に、ヘラで両脇を刺突して整形したもののみられ、胴部にヘラの痕跡が残る。尻尾は下向きに垂れ、肛門を刺突により表現する。褐色を呈し、胎土に1~5mmの白色砂粒を

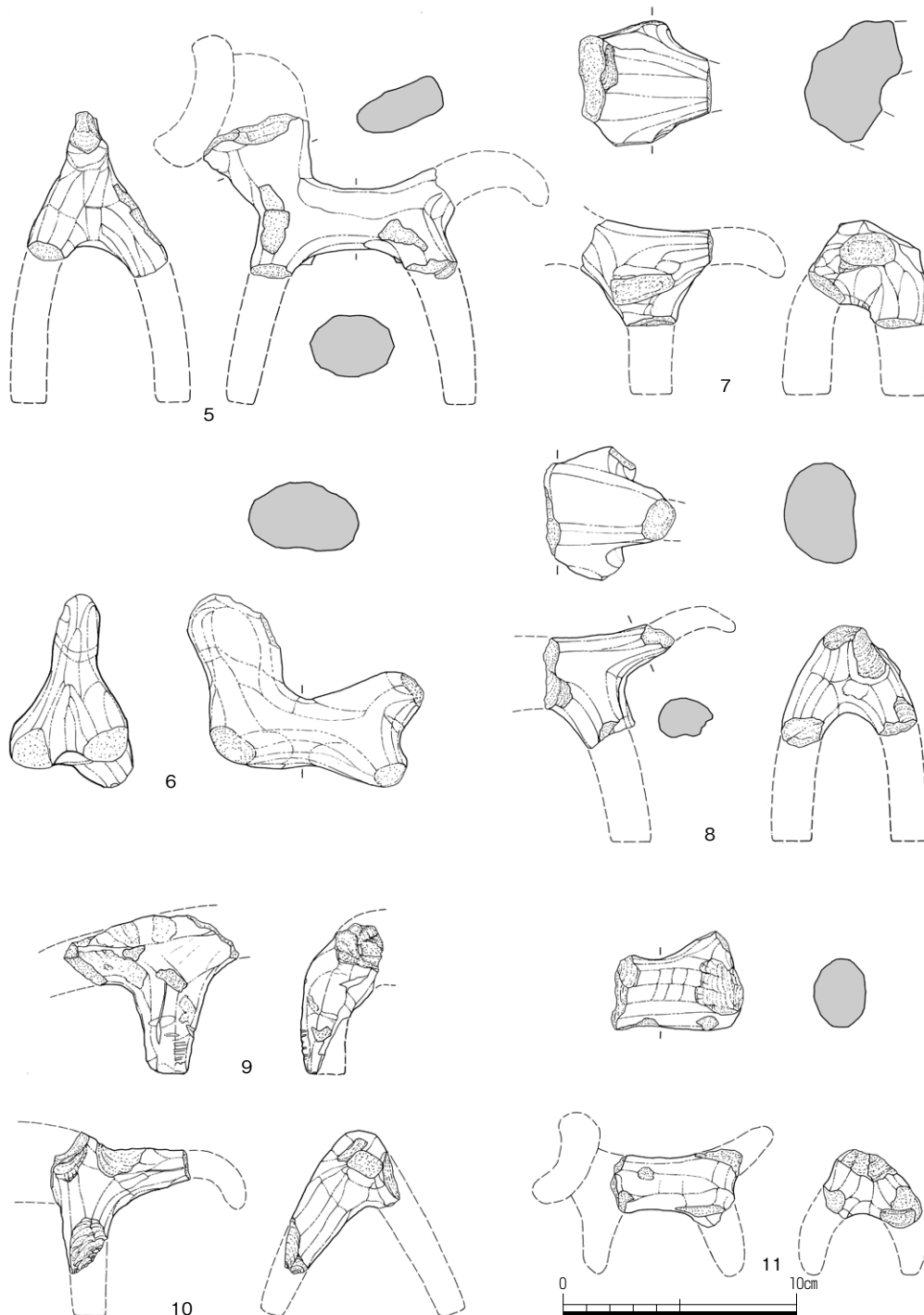


Fig. 148 土馬Ⅱ・Ⅲ型式 1:3

やや多く含む。SD4130中層出土。2は胴部から尻尾にかけて残存する。粘土の剥離痕跡から、胴部に脚部を差し込み、接合粘土を貼り付けていることがわかる。頭部も同様に、胴部に差し込んで成形した可能性がある。また、下向きに垂れる尻尾も棒状の粘土を差し込み、粘土を貼り付けて接合したとみられる。鞍の表現はない。外面にナデ調整を施す。淡褐色を呈し、胎土に白色砂粒と赤褐色粒子を含む。SD4130中層出土。3は左前脚か。粘土を貼り付けて胴部に接合し、上から下へのナデ調整により、脚裾を広げている。NF20地区の包含層出土。4は左後脚である。粘土を貼り付けて胴部に接合し、外面はナデ調整である。SD4130下層出土。

Ⅱ型式 (Fig. 148) I型式よりも小型になり、正面から見ると脚部と胴部が逆U字状になり、脚部が直線的に開く。胴部の横断面は長楕円形を呈する。尻尾は水平、もしくは上向きに突き上げる。頸部や脚部が短く、脚部は円柱状だが、径1.5cmとやや細くなる。一枚の粘土板を折り曲げて成形した可能性が考えられるが、確実に観察できるものはない。小笠原D形式、巽分類のIV型式またはV型式にあたる。9点出土した。

5は頭部上半と脚部を欠失する。頭部に三日月状の粘土を貼り付けていたものとみられ、その粘土を貼り付けた際のナデが残る。外面は全面ナデ調整を施す。尻尾は斜め上方にのびる。灰褐色を呈し、微細な赤褐色粒子を少量含む。SD4130上層出土。6も頭部と脚部を欠失する。尻尾は斜め上方にのびる。表面の磨耗が著しく、破面も丸みをもつ。褐色を呈し、胎土に赤褐色粒子と1~5mmの白色砂粒を非常に多く含む。HG32地区の包含層出土。7は胴部後半のみ残存する。外面にナデ調整を施し、尻尾は水平にのびる。胎土に1~5mmの赤褐色粒子を非常に多く含む。NH14地区の包含層出土。8も胴部後半のみ残存する。尻尾は斜め上方にのびる。胎土に赤褐色粒子と1~3mmの白色砂粒をやや多く含む。SD4130上層出土。9は右後脚と尻尾である。尻尾は水平よりやや下方に垂れてのびる。淡褐色を呈し、胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。NN23地区の包含層出土。10は左後脚と尻尾である。尻尾は水平に近くのびる。淡褐色を呈し、胎土に白色砂粒と赤褐色粒子を多く含む。SD4130上層出土。

Ⅲ型式 (Fig. 148) II型式よりもさらに小型化する。脚部が短くなり、先端が細い三日月状を呈する。巽分類のⅥ・Ⅶ型式にあたる。3点出土した。

11は胴部片。斜め上方にのびる尻尾を整形する際のナデが残る。淡褐色を呈し、胎土に白色砂粒と赤褐色粒子を多く含む。表面の磨耗が著しい。SD4130上層出土。

以上の土馬は、I型式が藤原宮期、II型式が奈良時代中頃~後半、III型式が奈良時代末~平安時代初頭に位置づけられる。

iii 小型模造土器 (Fig. 149)

1はSD4130中層出土の土師器小型模造土器の壺。口縁部の一部を欠くが、それ以外は完存する。体部は円盤閉塞法で成形しており、円盤の痕跡が体部側面にみられ、須恵器横瓶と共通する製作方法をとる。調整は、口縁部をヨコナデするのみである。灰黄色を呈し、胎土に赤色粒子や雲母を含む。

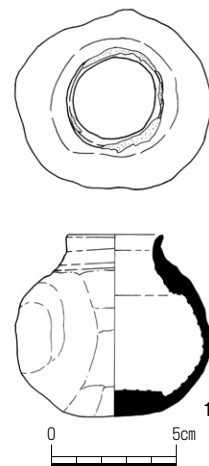


Fig. 149 小型模造土器 1:3

iv 製塩土器 (Fig. 150)

製塩土器はSD4130・SE4740からの出土が主体であり、その他の遺構では建物SB5050からの出土が目立つ程度である。古墳時代堅穴建物から出土したものは、個別に記述を行った。

古代に属する遺構から出土した製塩土器は、形態から筒形タイプと砲弾形タイプに分類できる。これらは製作技法や器壁の厚さ、胎土からさらに細分される。

筒形タイプはヨコナデで整形するが、内面にヨコナデをした際の段が明瞭につくものとならないものがある。また器壁が厚いタイプと薄いタイプに分かれる。また、胎土にも混和剤として、丸みをもち、大きさが揃った砂粒を含むもの、大小の砂粒が混在し赤褐色粒子や針状の白色物質を含むもの、砂粒を全く含まないものがある。砲弾形タイプは底部に向かってすぼまる形態である。粘土紐を積み上げて成形し、ナデ調整を施す。厚いタイプと薄いタイプがあるが、厚いものが多い。

1～7は筒形タイプである。1は口縁部内面にやや幅の広いヨコナデ調整を施す。口縁端部上面に外傾する面をもち、沈線状の段がつく。胎土に1～4mmの砂粒を多く含む。SE4740出土。2は口縁端部をわずかに内側に折り曲げる。焼成が堅緻で淡灰色を呈する。胎土に1～2mmの白色微砂と黒色粒子を含む。SD4130中層出土。3は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。胎土に白色微砂を少量含む。SD4130上層出土。4は口縁端部に強いヨコナデ調整を施し、内面に段がつく。器壁が薄く、精良な胎土で、砂粒をあまり含まない。SD4130中層出土。5は復元口径13.6cmの大型品。口縁端部上面に平坦面をもつ。内面にヨコナデ調整による右上がりの凹凸が明瞭に残る。胎土に1～3mmの丸みを帯びた砂粒を含む。SD4130中層出土。6は口縁部内面にやや幅の広いヨコナデ調整を施す。黄褐色を呈し、胎土に1～3mmの円形砂粒と赤褐色粒を含む。SD4130上層出土。7は口縁端部内面まで強いヨコナデ調整を施す。器壁が厚く、胎土に1～4mmの砂粒を多く含む。SD4130上層出土。

8・9は砲弾形タイプである。8は丸みをもって体部が立ち上がる形態である。口縁端部はわずかに内側に折り曲げる。口縁部内面に幅広くヨコナデ調整を施し、下位には右上がりの斜め方向のナデ調整を施す。外面に幅2.8cmほどの粘土紐積み上げ痕跡が明瞭に残る。胎土に1～3mmの白色砂粒をやや多く含む。SD4130上層出土。9は直線的に体部が開く形態である。内面にやや幅の広いナデ調整を施す。胎土に1～3mmの丸みを帯びた砂粒を多く含む。SD4130上層出土。

SD4130からは、口縁部が残存する破片数で集計すると、計193点の製塩土器が出土した。そ

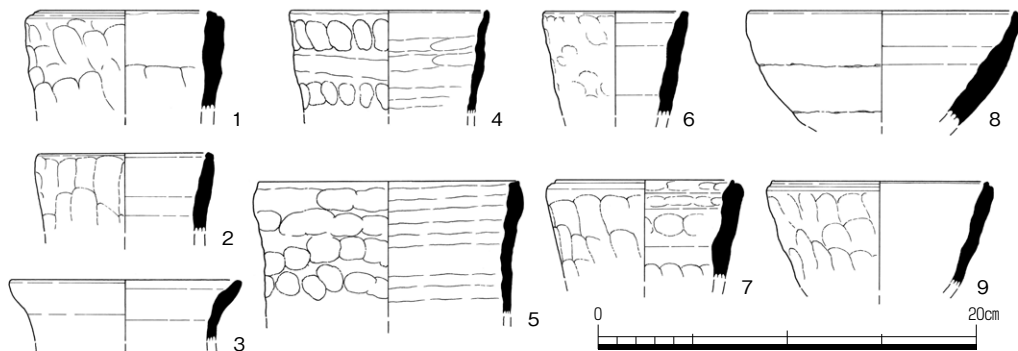


Fig. 150 製塩土器 1:4

の内訳をみると、筒形タイプが146点、砲弾形タイプが37点、不明が10点であった。層ごとの分布では、上層が121点（筒形91点、砲弾形25点、不明5点）、中層が69点（筒形53点、砲弾形12点、不明4点）、下層が3点（筒形2点、不明1点）である。口縁部が残存しない体部片をみても、同様の傾向を示し、上層と中層からの出土が大半で、筒形タイプが全体の8割を占める。

SE4740では、埋土全体から61点の製塩土器が出土した。筒形タイプが53点で、砲弾形タイプが8点である。

G 墨書・刻書土器

左京六条三坊の調査では、134点の墨書土器と3点の刻書土器、1点の刻印土器が出土した。出土遺構別にみると、墨書土器はSD4130から98点、SE4740から31点、SE5950から2点、SB5020から1点、SD4745から1点、その他遺構から1点となり、全体の95%以上がSD4130とSE4740からの出土である。器種の割合をみると、土師器では115点のうち114点が杯、皿、碗の食器で、特に碗Cが53点と多い。須恵器は19点で、うち18点が杯皿類である。墨書の記載内容は、「香山」や「香」「山」を含むものが突出して多く、22点を数える。次いで「大」を含む資料が4点、「宅」「佐」を含む資料がそれぞれ3点、「飛」「福」を含む資料がそれぞれ2点ある。また「|」のみを記す資料は9点ある。SE4740出土品には完形のものも多く、18点が完形またはほぼ完形である。刻書土器はSD4130から2点、SD4311から1点出土し、刻印土器はSD4130から出土した。これらは別表8に一覧を示したので、参照されたい。

以下、遺構ごとにまず墨書土器、次いで刻書土器について記述するが、文字が判読できたものを中心に報告し、墨痕や筆慣らしの類については基本的に言及しない。

i 墨書土器

a SD4130出土墨書土器 (Pl. 36~41, Ph. 118~120)

下層出土墨書土器 1は土師器杯類²⁹の底部。外面はケズリ調整で、「□〔佐カ〕」と墨書する。内面には一段暗文を施す。

中層出土墨書土器 2・3は土師器杯B蓋で、頂部外面に墨書する。2は「福」、3は「□〔福カ〕」。両者とも、縁部と頂部それぞれにヘラミガキを四分割で施す。2の内面と、3の内面およびつまみ上部に螺旋暗文がある。4~6は土師器碗C。5は完形、6はほぼ完形である。いずれも口縁部外面に記号とみられる墨書があり、字形は「p」を横にした形に近い。墨書は図の左端から始まり、右端で下へ曲げ、最後は上へはね上げるようにして終わる。3個体とも口縁部内面に斜め方向の工具痕があり、胎土には雲母を多く含む。7は土師器杯Cで、外面に「□也」と墨書する。内面には一段暗文を施す。8~11は土師器杯類底部で、いずれも外面に墨書がみられる。釈文は8が「□宅」、9が「□〔大カ〕」もしくは記号で、10が「□〔サカ〕」、11は井桁状の囲いの中央に墨点を打つ。8の内面には螺旋暗文がみられ、10・11は外面にヘラケズリを施す。12は土師器碗C、13は土師器杯類底部で、ともに外面に「佐」と墨書する。12の内面には斜め方向の工具痕が残る。13の内面には螺旋暗文がみられ、外面はケズリ調整である。

14~19は「香山」に関係するものである。14は土師器杯A。口縁端部が外方に屈曲し、内面

には弱い凹線が1条巡る。底部外面に「□〔香カ〕山」の墨書がある。15は土師器椀Cで、口縁端部は丸くおさめる。底部外面に「香山」の墨書を記す。外面に粘土の接合痕が残り、胎土には雲母を含む。16は須恵器杯B。底部外面に「香山」と書く。底部外面はヘラ切り不調整。17は須恵器杯類の底部で、外面に「□〔香カ〕□」の墨書がある。18・19は土師器杯類底部で、外面に墨書する。18は「□〔香カ〕」、19は「□山」。18は内面に一段暗文と螺旋暗文を施し、胎土には雲母を多く含む。19の胎土には赤色粒子が目立つ。

20は土師器杯A。底部外面に「大□〔山カ〕」と墨書する。b0手法で調整し、内面に粗い一段暗文と螺旋暗文をもつ。底部内面には刀子状利器による細い線刻が数条みられる。平城宮土器Ⅲ新段階の年代が与えられる。

21は土師器皿A。底部外面に「部」の墨書がある。a0手法で調整し、内面に一段暗文と螺旋暗文を施す。胎土に雲母を多く含む。22は土師器杯C。底部外面に「□□町」と書く。b1手法で調整し、内面に一段暗文と螺旋暗文を施す。胎土に1～2mmの大きめの赤色粒子を含む。23は須恵器杯B。底部外面に「多母□」と墨書する。人名または地名と考えられる。底部外面はヘラ切り不調整。24・25は土師器椀C。ともに底部外面に「飛」の一字を書き、内面に斜め方向の工具痕が残る。24の胎土には雲母と砂粒を多く含む。

26～31は土師器椀C。26は底部外面に「□□〔山部カ〕□」と墨書する。27～31はいずれも底部外面に一本線を記すが、30の線は途中で一度屈曲させ、末端を払う。30の内面には斜め右上がりの工具痕が深く残る。27は口縁部の残存率が低いため、口径は多少変わる可能性もある。

39は土師器皿A。底部外面に墨線がみられる。a0手法で調整し、内面には一段暗文と螺旋暗文を施す。

上層出土墨書土器 (Pl. 40・41, Ph. 120) 32～36は、「香山」関係の墨書土器である。32は土師器杯B蓋。つまみ上面に「香」の一字がみられる。外面には丁寧なヘラミガキを施す。内面に暗文はみられない。33は須恵器杯B。底部外面に「香山」と記す。34は土師器椀A。底部外面に「香□」と墨書する。外面全面に密なヘラミガキを施す。35は土師器杯類底部で、外面に「□〔香カ〕□」と墨書する。36は須恵器杯A底部。外面に「□〔香カ〕」の墨書がみられる。底部外面はヘラ切り不調整である。

37は土師器椀Cの底部と考えられる。外面に「大」と記す。38は須恵器壺の底部。底部外面に「荒田大年」と墨書がある。人名と考えられる。底部外面には布目の圧痕がよく残る。

40は土師器椀C。中層出土の27～31と同様に、底部外面に一本線を記す。口縁部内面には、斜め右上がりの工具痕が一定間隔で並ぶ。胎土に1～2mmほどの砂粒が目立つ。

b SE4740出土墨書土器 (Pl. 42～46, Ph. 121・122)

SE4740の層位は最下層、下層、中層、上層と分けられるが、上層から墨書土器は出土していない。各層のおよその年代は、最下層が飛鳥V～平城宮土器Ⅲ頃、下層が平城宮土器Ⅲ～V、中層が平城宮土器Vから長岡京期に位置づけられている。また、各層位に帰属させることはできないものの、SE4740周囲では井戸枠内出土土器と強い関連を示す墨書土器が出土しており、ここではそれも含めて報告する。

最下層出土墨書土器 44は土師器椀C。口縁部外面に「井」と記す。胎土には赤色粒子が目立

つ。45は土師器甕の体部と考えられる。外面に「支」と墨書する。内外面ともハケ目調整である。

下層出土墨書土器 46は土師器杯類の底部で、外面に「山」の墨書がある。47はc0手法で調整する土師器皿Aで、底部外面に「安」と墨書する。胎土には雲母を多く含む。48はc3手法で調整する土師器椀Aで、底部外面に「米」と書く。

49～57はいずれも底部外面に「香山」と記す資料である。後に詳述するが、「香山」の字形は全て同筆というわけではなく、いくつかに分類される。49はc0手法で調整する土師器皿A。底部は一方向にヘラケズリを行い、口縁部は5分割でヘラケズリを施す。胎土に雲母を多く含む。50～57は土師器椀C。いずれも完形あるいはほぼ完形である。8点とも「香山」と墨書する点は共通するが、胎土や色調では、灰白色を呈し、胎土に赤色粒子を含むもの(50～54・57)、外面が浅黄橙色を呈し、胎土に雲母の目立つもの(55)、外面が灰黄色を呈すもの(56)に分けられる。56は底部内面にハケ目を施し、56以外は口縁部内面に斜め右上がりの工具痕がある。8点とも外面には粘土の接合痕が残る。

中層出土墨書土器 8点あり、いずれも完形あるいはほぼ完形である。58～60は土師器椀C、61は土師器椀A、62は須恵器杯Bで、5点とも底部外面に同様の記号を墨書する。記号は細長い人字形の下に小点を3点あるいは4点入れるもので、これらは後述するように、「香山」の崩れたものとする見解がある。59の底部内面には不定方向のハケ目がみられる。60の底部外面には一方向の軽いヘラケズリがみられ、口縁部内面には斜め方向の工具痕が残る。61はe手法で調整し、底部外面に粗いヘラミガキを施す。外面には粘土の接合痕が明瞭に残る。62は高台の位置が底部外周縁に寄る。

63はc0手法で調整する土師器杯A、64は土師器椀Cである。ともに「宅」の一字を記すが、字形は明らかに異なり、別筆である。63は胎土に赤色粒子と雲母を多く含む、64は胎土に雲母を多く含む。65は土師器皿A。底部外面に「□〔人カ〕」と墨書する。e手法で調整し、胎土に赤色粒子と多くの雲母を含む。

SE4740周囲出土墨書土器 66は土師器杯B蓋。つまみ上面に「香山」と墨書する。外面全体に密なヘラミガキを施す。67・68は土師器椀Cで、ともに底部外面に墨書がみられる。67は「□〔刀カ〕」、68は「下□」と記す。68は底部内面にハケ目を施す。

c その他の遺構出土墨書土器 (Ph. 120)

上記SD4130・SE4740以外の遺構から出土した墨書土器については、既に各遺構の項で報告しているが、ここではそれを再掲する。

第53次調査中区で検出した、藤原京造営期(Ⅲ-A期)の素掘りの井戸SE5950からは、底部外面に「□記」の墨書がある土師器杯AⅢ(Pl. 33-455)が出土した。内面の二段暗文は、上段の暗文帯幅が狭く、放射暗文の傾きが大きい。第50次調査西区で検出した、藤原京A期の総柱南北棟建物SB5020出土の土師器杯A(Fig. 135-545)は、底部外面に「部女」の墨書がある。「部女」は人名と考えられる。

ii 刻書・刻印土器 (Pl. 32・41, Ph. 123～126)

ここではヘラで記した文字のみられる資料、および刻印のある資料について述べる。刻書土

器のうち、明らかに記号と判断されるものについては各遺構出土土器の項で記載している。なお、記号の詳細についてはPh.123～126で示した。

文字を刻書あるいは刻印した土器は、4点出土した。41はSD4130下層出土の土師器杯Cで、底部内面に焼成後の「天」のヘラ書きがある。a0手法で調整し、内面には一段暗文を施す。42はSD4130中層出土の須恵器底部で、器壁がやや厚く、大型の杯皿類の可能性はある。外面に焼成前に「馬」とヘラ書きし、内面には刀子状利器による細い線刻が3条確認できる。外面はロクロケズリ調整である。六条条間路南側溝SD4311出土の須恵器壺C (Pl.32-971)は、肩部外面に「惣」の一文字を記す。また「惣」の左上と左下に、それぞれ縦方向の細い線刻が数条みられる。器形や胎土から東海地方産と考えられる。

43は刻印土器で、SD4130上層出土の須恵器杯B蓋である。頂部外面に「美」の一字が残り、「美濃」あるいは「美濃国」の刻印を押捺していたことがわかる。頂部外面に1条の凹線が巡ることや、砂粒が少なく灰白色を呈する胎土なども、美濃国産須恵器の特徴を示す。奈良時代前半のものであろう。

H 墨書土器「香山」とその字形

墨書土器「香山」 本書が対象とする藤原京左京六条三坊では、第47・50次調査において、134点の墨書土器が出土した。このうち、「香山」と記した墨書土器は、その一部と推定するものも含み22点認められ、東西大溝SD4130と井戸SE4740の2つの遺構から出土している。墨書土器「香山」は、天平2年度(730)大倭国正税帳(正倉院文書正朱一〇、『大日本古文書一』396～413頁)にみえる「香山正倉」との関係が推測されるなど、当該遺跡の性格を考える重要な手がかりとして注目されてきた。本書の報告にあたり、墨書土器をあらためて積読(積文などはTab.4に掲載)したところ、墨書土器「香山」は、その字形からいくつかのグループに分類することができた。以下、その知見を示し、後に論じられる考察の手がかりとして提示したい。

「香山」の字形 管見の限り、「香山」墨書土器の字形は、少なくとも3つに分類される。その分類は、Fig.151に示した通りである。分類の基準と特徴は、以下の通りである。

分類A (Fig.152-1～6) 「香」字の禾の部分の払いが大きく伸びる点が指標で、いずれも流暢な筆致と言える。左の払いに比して右払いがとりわけ長く伸びる点の特徴である。日の部分は省画が顕著で、「香」字の日の最終画は省略され、³¹3画目の横棒がそのまま「山」字の1画目へと連続して書かれる。この部分の起筆の画が「了」の1画目のように残るか、点の様に記されるのみで省画が著しいかにより、A1(1・2)とA2(3～5)の2つに細分することができる。6は、日の部分の起筆の画が「了」の1画目の様に残る点でA1に近い字形であるが、禾の部分の払いはさほど伸びない点で分類Aのなかでやや孤立している。

分類B (Fig.152-7～9) 「香」字は比較的整っており、禾の部分、日の部分ともに省画はほとんどない。禾の払いは分類Aほど大きくなく、左右がバランス良く記されている。「山」字の3画目は、末端部分を撥ねるか長く左下に払うなど、強調して書かれる傾向がある。

分類C (Fig.152-10～12) 分類Bと同じく、「香」字は比較的整っており、日の部分の省画はほとんどない。ただし、「香」字の左右の払いを点のようにうち、左払いを右へ連続させるように撥ね、右で受け止め、日に続くような運筆がみてとれる。この点は、分類Bの特徴をもちつつ、

分類Aの伸びやかな筆致とは対照的である。なお、分類Cの3点について、「山」字に共通する特徴は認めがたい。10は2画目が右に倒れており、3画目は2画目の横画と重なり判別しがたいが、わずかに払っている。11・12は、分類Bと同じく、3画目の末端を撥ねるか払う。

分類D (Fig. 152-13~16) 上記のいずれにも分類しがたいものを分類Dとして一括した。「香」1文字のみが書かれたものが3点(13~15)、土師器杯蓋のつまみ上面に「香山」と書かれたものが1点(16)ある。13~15の「香」字は、いずれも分類Bに近い傾向を示すが、「香山」の2文字ではないため、ここに含めた。

なお、「香山」の可能性はあるが、欠損ないし墨痕不鮮明で確定できないものを、分類Z (Fig. 152-17~22)として参考までに掲げた。また、Zaとした2点(17・18)は、大きく払われる筆画が、「香」字の禾の部分の払いの一部であるとすれば「香」字と認定できるが、18は小片であり不詳。17は、左払いが非常に大きく、右払いが長く伸びる点に特徴的な分類Aの特徴とも必ずしも一致しない。19・20は、「香」字について、小断片もしくは墨書が鮮明ではないため、筆画を追えず字形を確定できない。Zy (21・22)は、確実に釈読できる文字は「山」字のみにとどまるか、あるいは「山」の上の文字が不鮮明で「香」と確定できないものである。

分類と出土遺構 以上のように、「香山」の字形は、少なくとも3つに分類することが可能である。それらの特徴は極めて顕著なものといえ、分類A、分類B、分類Cの墨書は異筆であると考えて差し支えないと思われる。細分化したA1・A2には別筆とみられるものが存在するものの、同筆か異筆かを確定するには至っていない。以下、「香山」字の分類と出土遺構との関係を整理するが、注目すべきは字形に即した分類が、出土遺構の相違と見事に一致することである。

分類Aは、全てSE4740下層から出土している。分類Cも同様である。これらに属する墨書土器は、分類Cの1点が土師器皿Aである他は、全て土師器椀Cである。加えて、完形またはほぼ完形で出土するという点にも共通点が認められる。これに対して分類Bは、全てSD4130の上層ないし中層から出土している。個体数が少なく有効な分析には

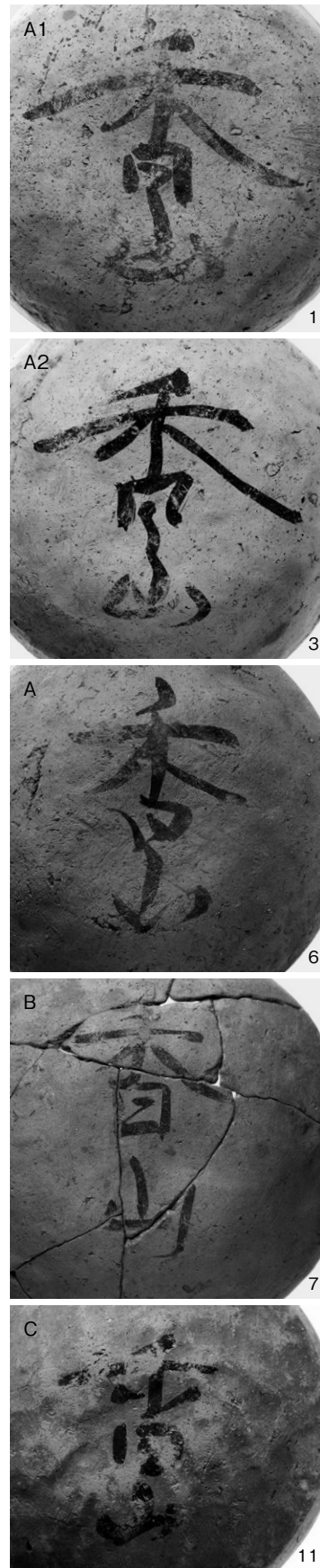


Fig. 151 「香山」の代表例

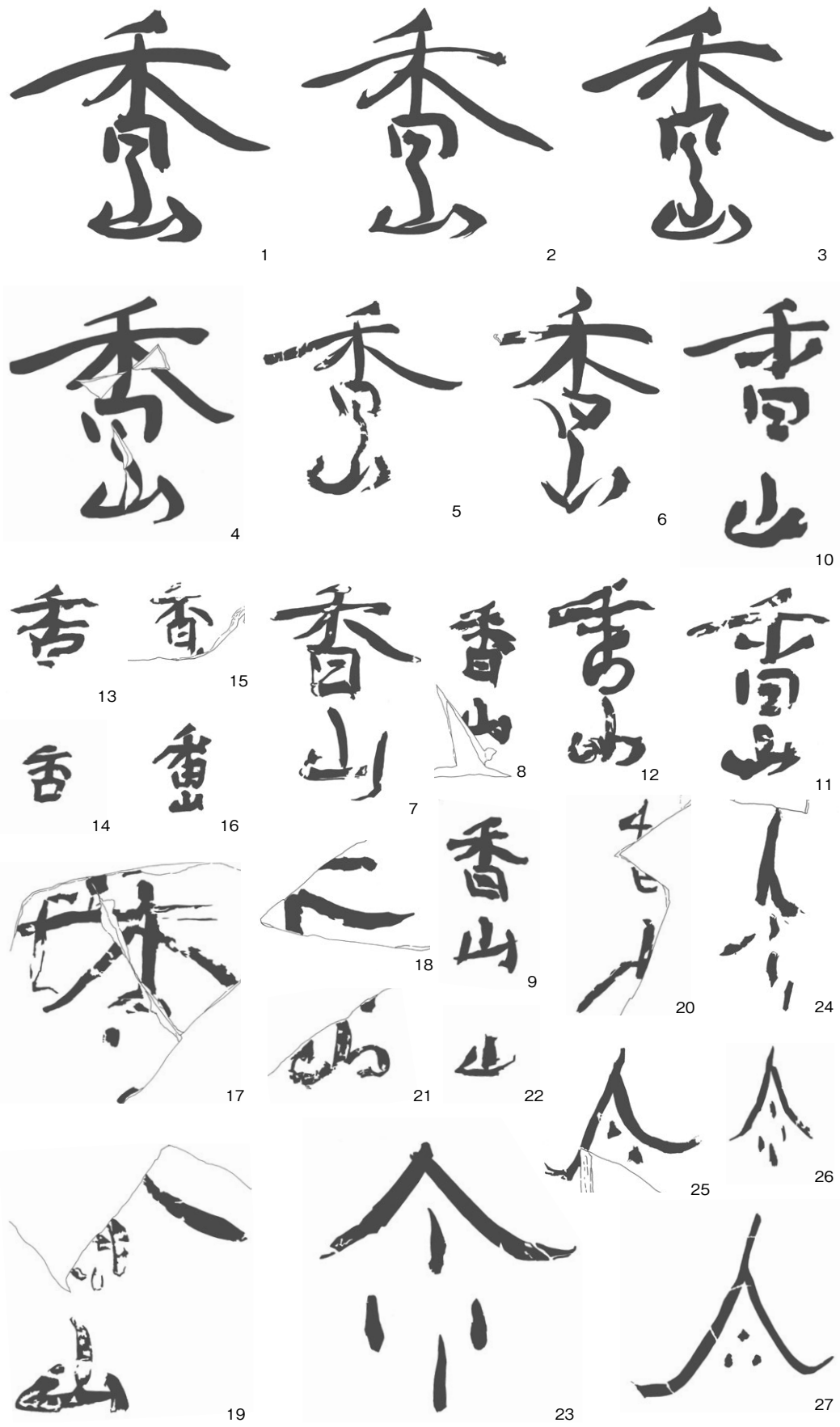


Fig. 152 「香山」の字形 1:2 (13・14のみ1:1)

Tab. 4 墨書土器「香山」等一覧

No.	分類	PL.	番号	遺構	層位	種類	器種	部位	釈文	残存率
1	A1	43	50	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
2	A1	43	51	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	ほぼ完形
3	A2	43	52	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
4	A2	43	53	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	ほぼ完形
5	A2	44	54	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
6	A	44	55	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
7	B	37	15	SD4130	中層	土師	椀C	底部外面	香山	ほぼ完形
8	B	37	16	SD4130	中層	須恵	杯B	底部外面	香山	ほぼ完形
9	B	40	33	SD4130	上層	須恵	杯B	底部外面	香山	底部のみ
10	C	40	49	SE4740	下層	土師	皿A	底部外面	香山	ほぼ完形
11	C	44	56	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
12	C?	44	57	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
13	D	37	18	SD4130	中層	土師	杯類	底部外面	□〔香カ〕	底部片
14	D	40	32	SD4130	上層	土師	杯B蓋	つまみ上面	香	1/3残存
15	D	40	34	SD4130	上層	土師	椀A	底部外面	香□	1/2残存
16	D	46	66	SE4740	周囲	土師	杯B蓋	つまみ上面	香山	1/4残存
17	Za	40	36	SD4130	上層	土師	杯類	底部外面	□〔香カ〕□	底部片
18	Za	40	35	SD4130	上層	須恵	杯類	底部外面	□〔香カ〕	底部片
19	Z	37	14	SD4130	中層	土師	杯A	底部外面	□〔香カ〕山	1/2残存
20	Z	37	17	SD4130	中層	須恵	杯類	底部外面	□〔香カ〕□	底部片
21	Zy	37	19	SD4130	中層	土師	杯類	底部外面	□山	底部片
22	Zy	42	46	SE4740	下層	土師	杯類	底部外面	山	底部片
23	K	45	58	SE4740	中層	土師	椀C	底部外面	記号	完形
24	K-	45	59	SE4740	中層	土師	椀C	底部外面	記号	ほぼ完形
25	K	45	60	SE4740	中層	土師	椀C	底部外面	記号	ほぼ完形
26	K	45	61	SE4740	中層	土師	椀A	底部外面	記号	完形
27	K	45	62	SE4740	中層	須恵	杯B	底部外面	記号	ほぼ完形

なりえないが、須恵器杯Bが2点、土師器椀Cが1点と器種にばらつきがみえる他、必ずしも完形で出土している訳ではない。分類Dとして把握した雑多な種類の「香山」墨書土器は、SD4130を主体としつつも、SE4740のいずれからも出土している。ほとんどが断片であり、その多くは器種を特定できない。

ところで、SE4740中層からは、23～27のごとく特徴的な記号を記した墨書土器が5点出土している（分類K）。同じ記号を記したものと推測されるが、やや形の崩れた24はK-とした。現在のところ、SE4740以外の遺構からは出土していない。この記号は、あるいは「香山」の重要な筆画だけを残したものとみられないであろうか。すなわち、細長い人字形は「香」字の左右の払いに由来し、下部の4つの点は「香」字の日と「山」字の縦棒3画を記号化したものと理解するのである。「香山」から記号への変化がみてとれる可能性は否定できないであろう。

SE4740に廃棄された墨書土器は、分類A、分類C、さらには分類Kなど、特定の字形が集中する傾向が強く、これらがSE4740以外の遺構から出土しない点も注目される。SE4740の遺物は、その廃棄元が限定されていたとみる余地もあろう。同じくSE4740中層から出土した2点の墨書土器「宅」は、この地に何らかの経営拠点が存在したことを物語っている。井戸廃絶期、奈良時代半ば頃の遺跡の性格を示す資料の一つといえる。

小 結 以上、「香山」墨書土器の字形の分類を行い、字形の相違が出土遺構と見事に対応することを示してきた。ここで示した分類が、時期差を伴うものとみられるか、さらなる検討が望まれる。

- 1) 奈文研1987『藤原京右京七条一坊西南坪』。
- 2) 従来大和A型と呼んでいた甕であるが、長岡京、平安京でも同巧の甕がみられ、都城に寄生して製作集団が移動していくことが認識されたため、呼称を変更した（古代の土器研究会1996『古代の土器研究4』）。鍋もこれにしたがう。

- 3) 高橋透2012「藤原宮東面内濠SD2300出土土器(1)第24次調査から」『奈文研紀要2012』。
- 4) 奈文研2015『飛鳥池遺跡発掘調査報告』。
- 5) 従来は杯Gなどと呼称していたが、本書では碗Cの呼称を用いる(別表2参照)。
- 6) 当調査部の降幡順子の分析による。
- 7) 口縁部形態は青平Ⅱ・Ⅲ号窯に類例がある(静岡県湖西市教育委員会1984『青平古窯跡・新古古窯跡発掘調査報告書』)。
- 8) 辻美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室。
- 9) 川越俊一1983「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』同朋舎出版。
- 10) 菅原正明1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』同朋舎出版。
- 11) 上村和直2012「平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所。
- 12) 中島和彦・佐藤重聖2014『南都出土中近世土器資料集—奈良町高天町遺跡(HJ第559次調査)出土資料—』奈良市教育委員会。
- 13) 前掲註9に同じ。
- 14) 前掲註10に同じ。
- 15) 網伸也・柏田有香2008『京都市埋蔵文化財発掘調査概報2008-10 平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所。
- 16) 内田好昭2004『京都市埋蔵文化財発掘調査概報2004-7 史跡・名勝嵐山』京都市埋蔵文化財研究所。
- 17) 平尾政幸ほか2007『京都市埋蔵文化財発掘調査報告2006-25 平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所。
- 18) a 平尾政幸ほか2003『京都市埋蔵文化財発掘調査概報2003-5 平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所。
b 註17に同じ。
- 19) 尾野善裕2013「京都からみた〈山茶碗〉編年～空白の14・15世紀をめぐる～」『第2回東海土器研究会資料集 渥美窯編年の再構築』東海土器研究会。
- 20) 森下恵介ほか1981「古市城跡発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和55年度』奈良市教育委員会。
- 21) 瓦器碗については終末を1330年頃とする見解が近年有力視されており(橋本久和2009『中世考古学と地域・流通』真陽社)、いまだ少し新しく考える意見(註13)の存在を考慮しても、他の土器の年代観との間に著しい不整合があることは否めない。図示しなかった土師器皿の中には時期的に先行する形質の特徴を有するものが一定量含まれており、41・42については古い時期の遺物の混入とみなしてよいと思われる。
- 22) 定型碗の型式、部位名称については、奈文研2006『平城京出土陶硯集成Ⅰ』(奈文研史料第77冊)に従う。また、猿面碗も定型碗に含めた。
- 23) 東京国立博物館1992『法隆寺献納宝物特別調査概報XⅡ』。
- 24) 西口壽生2012「初期施釉陶器の文様と産地」『奈文研紀要2012』。
- 25) 千田剛道1995「獸脚硯にみる百済・新羅と日本」『文化財論叢Ⅱ』奈文研。
山本孝文2003「百済泗泚期の陶硯」『百済研究』第38輯忠南大学校百済研究所。
白井克也2004「筑紫出土の獸脚硯」『九州考古学』第79号九州考古学会。
- 26) 巽淳一郎1998「七世紀後葉の海外交渉を物語る焼物」『季刊明日香風』第66号(財)飛鳥保存財団。
西口前掲註24。
- 27) 小笠原好彦1975「土馬考」『物質文化』vol.25物質文化研究会。
- 28) 小笠原前掲註16、巽淳一郎1984「祭祀用土器・土製品」『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』奈文研。
- 29) 杯、皿、碗などの食器であるが、器種を確定できないものを杯類と呼ぶこととする。
- 30) 奈文研1987『藤原概報17』、川越俊一1995「藤原京「香山」墨書土器」(奈文研創立40周年記念論文集刊行会編『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版)など。
- 31) 何画目という表現は、現行の常用字体の筆順によって示す。以下同じ。

3 木製品

調査区全域から、整理用コンテナで120箱程度の木製品が出土した。大半は東西大溝SD4130および井戸SE4740から出土している。器種は多様で、曲物、刳物、漆器などの容器類、紡錘車、糸巻などの紡織具、横櫛、下駄などの服飾具、琴柱などの遊戯具、人形、馬形、斎串などの祭祀具、刀子柄などの工具や、杭、加工棒がある。この他、井戸枠として使用した曲物が多数出土した。ここでは、器種や形態を確定できた資料を中心に報告する。柄を装着したままの短刀や鎌も出土しているが、それらは金属製品の項で詳述する。また、中世の井戸SE4464・4468などから出土した井戸枠については、溝から出土した木製品とは区別して後述する。以下、木製品の分類は基本的に奈文研1985『木器集成図録 近畿古代編』（奈文研史料第27冊）による。

A 東西大溝SD4130出土木製品

調査区中央を流れる東西大溝SD4130から、多量の木製品が出土した。層位は下層、中層、上層に大別されている。木製品の大半は上層と中層から出土し、とくに中層からの出土が多い。以下、層位ごとに製品を詳述する。

i 中層出土木製品 (Fig. 153~167, Ph. 127~137)

曲物底板・蓋 (Fig. 153~158-1~23) 円形曲物の底板および蓋である。1は樺皮結合曲物の底

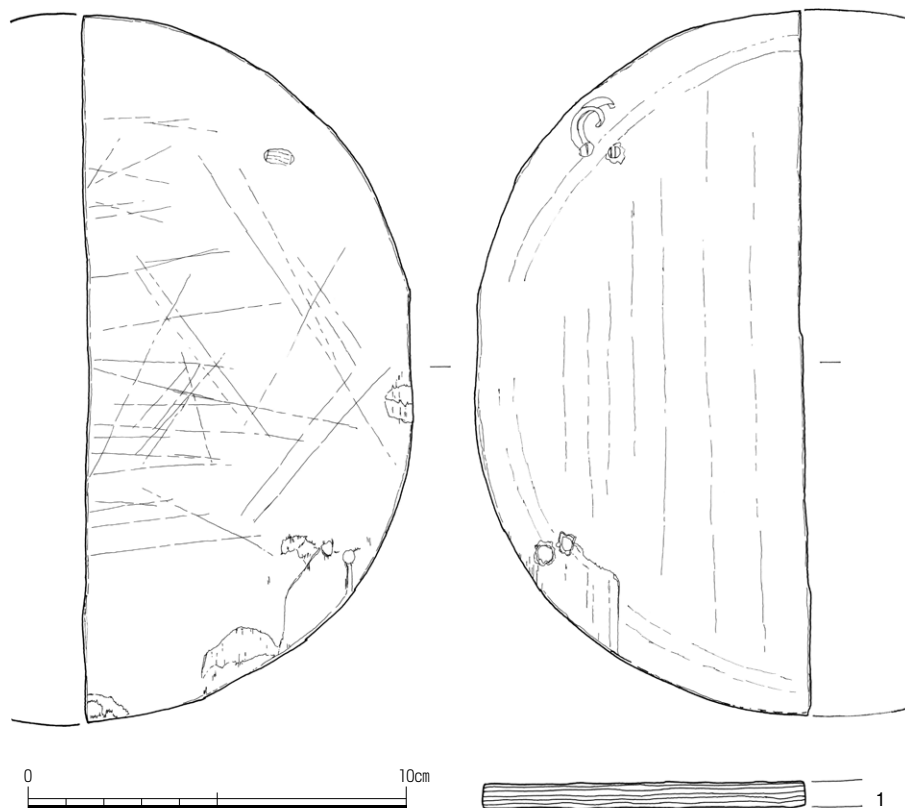


Fig. 153 SD4130中層出土木製品 (1) 1:2

板で、半分程度が残存し、復元径は約19cm。2個1組で開けた穴が2箇所に残存し、そのうち1つには樺皮が残存する。外面にはケビキ、内面には側板のアタリと削りの痕跡が残る。ヒノキ科の板目材。2は樺皮結合曲物の底板小片。内面には側板のアタリがある。穴は1箇所残存し、

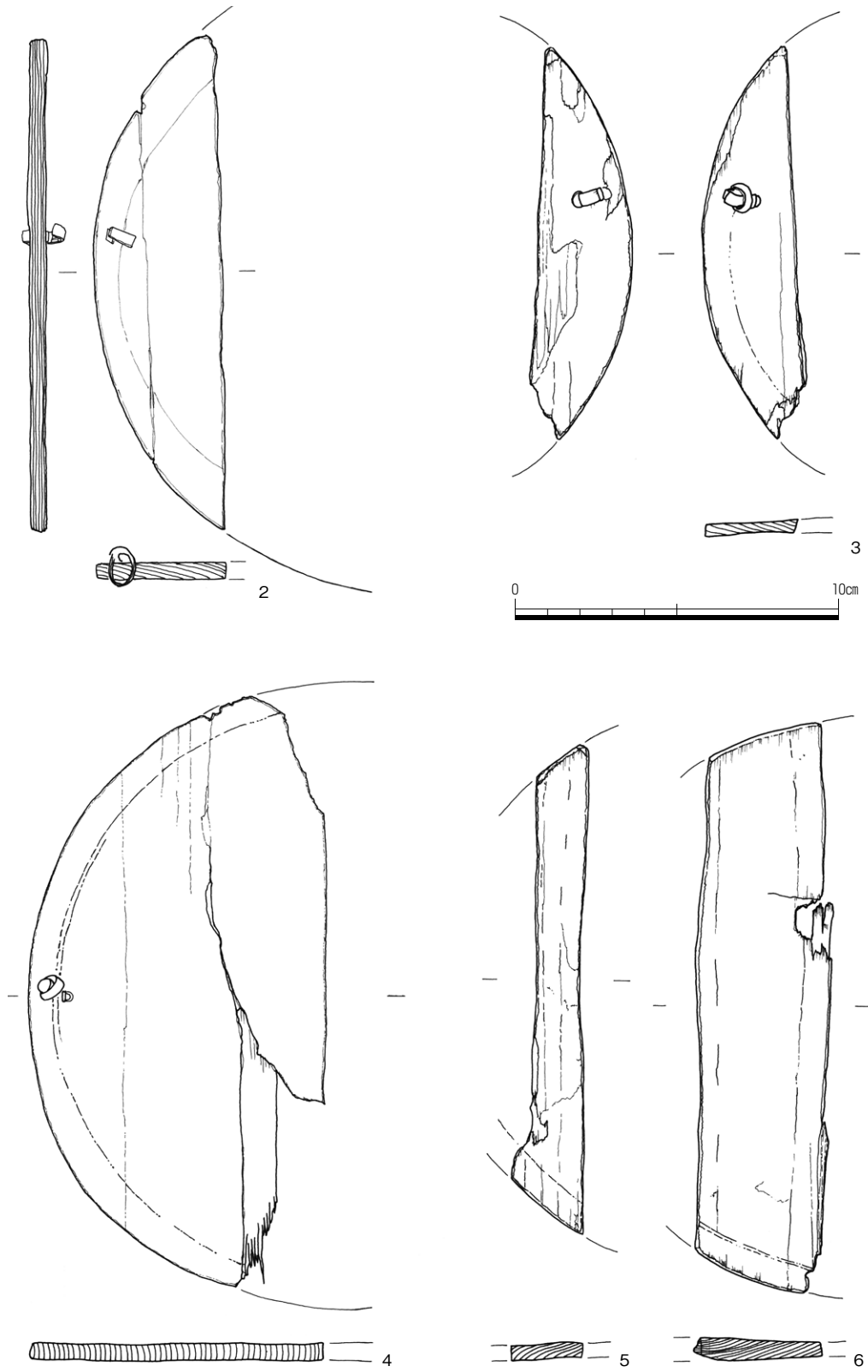


Fig. 154 SD4130中層出土木製品(2) 1:2

そこに樺皮が残る。ヒノキ属の板目材。3は樺皮結合曲物の底板小片。1箇所穴が残り、樺皮が残存する。ヒノキの板目材。4は樺皮結合曲物の破片。復元径は約19cm。内面に側板のアタリがある。穴は1箇所残存し、そこに樺皮が残る。ヒノキ属の柱目材。5は曲物底板の小片。内面に側板痕跡が残り、樺皮結合であると判断される。ヒノキの板目材。6は曲物底板の小片。内面に側板のアタリが残る。ヒノキ属の板目材。7は曲物底板の小片。内面に削りの痕跡と側

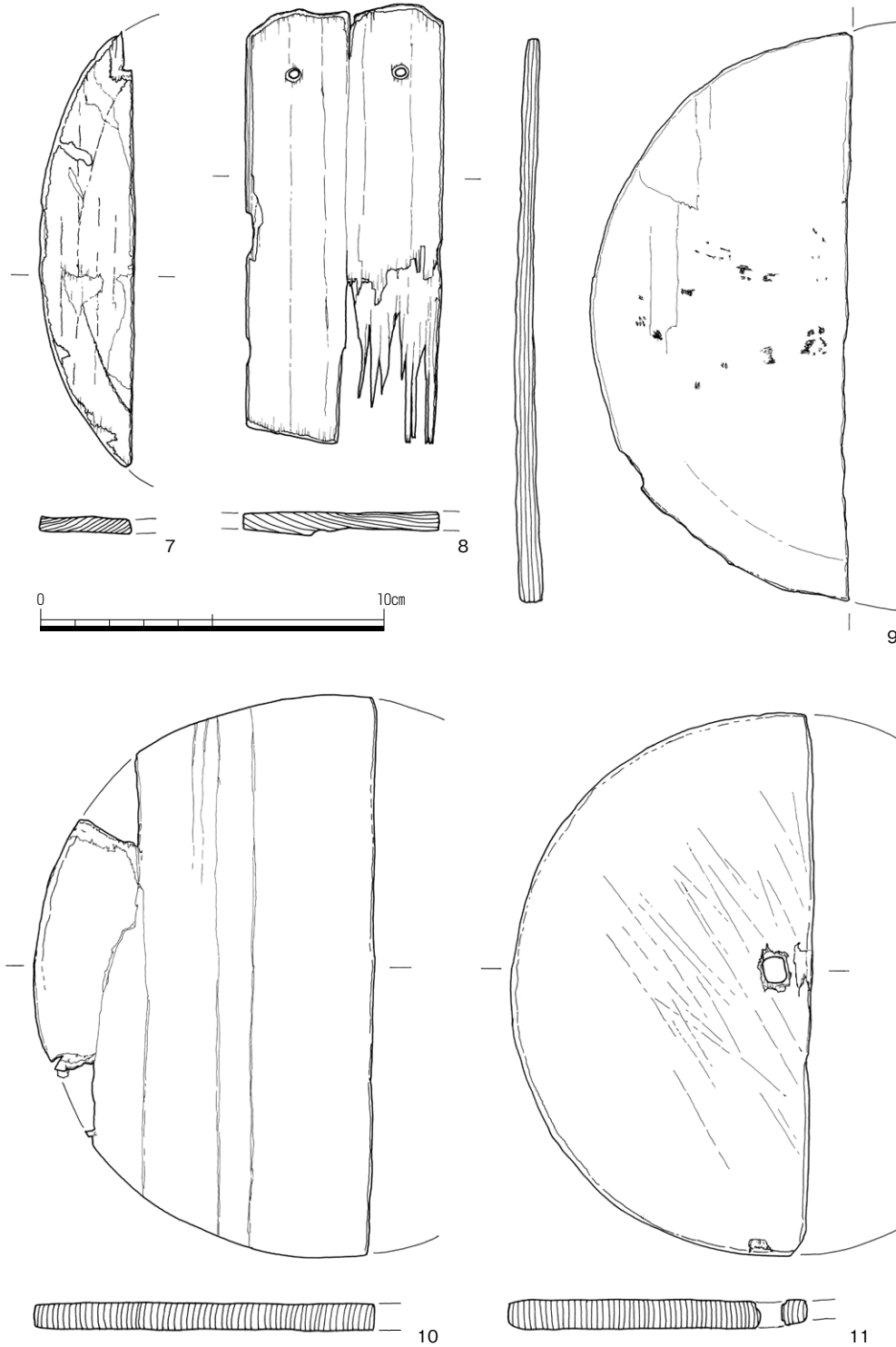


Fig. 155 SD4130中層出土木製品 (3) 1:2

板のアタリが残る。ヒノキ属の板目材。8は曲物底板の小片。側板のアタリ等は見られない。2箇所約3cm間隔で径5mmの穴をあけるが、反対側の縁部に穿孔はしていない。ヒノキ科の板目材。9は円形曲物の底板で、半分程度が残存し、復元径は16.4cm。側面に釘穴はみあたらず、内面に側板のアタリが残る。内面に黒い付着物がある。ヒノキの板目材。10は円形曲物の底板で、直径は16.4cm。半分強が残存する。側面の釘穴および樺皮の通し穴、側板のアタリがみられず、蓋板である可能性もある。ヒノキ属の柁目材。11は円形曲物の蓋板で、直径15.8cm。中心に径8mmの穴をあける。把手は残存しない。ヒノキ属の柁目材。12～14は円形曲物の底板小片で、いずれも側面の釘穴、樺皮の通し穴は見られない。12には、側板のアタリがわずかに残る。樹種は12がヒノキ属の柁目材で、13・14はヒノキ科の柁目材。

15は釘結合曲物の底板で、長径17.6cm、短径16.9cmを測り、やや楕円形を呈する。釘穴は1箇所しか確認できないが、周縁の破損部分に他の釘穴があったと考えられる。ヒノキの柁目材。16は釘結合曲物底板の小片。釘穴が1箇所に残る。ヒノキの柁目材。17は釘結合曲物の底板で、一部を欠く。直径17.7cm。側縁に3箇所の釘穴をもつ。ヒノキ属の柁目材。18は釘結合曲物の底板。内面にケビキが残る。側縁に3箇所の釘穴をもつ。ヒノキ属の柁目材。19は釘結合曲物の底板片で、残存長25.0cmにおよぶ大型品である。側縁には5箇所の釘穴をもつ。表面には削りとケビキの痕跡が残る。ヒノキ科の板目材。20は釘結合曲物の底板片。約半分が残存し、直径は15.9cm。側面に2箇所の釘穴をもつ。ヒノキ属の柁目材。21は釘結合曲物の底板片。側縁に2箇所の釘穴をもつ。表面にケビキが見られる。ヒノキ属の柁目材。22・23は釘結合曲物の底板小片。どちらも1箇所の釘穴をもつ。22はヒノキ科の柁目材、23はヒノキの柁目材。

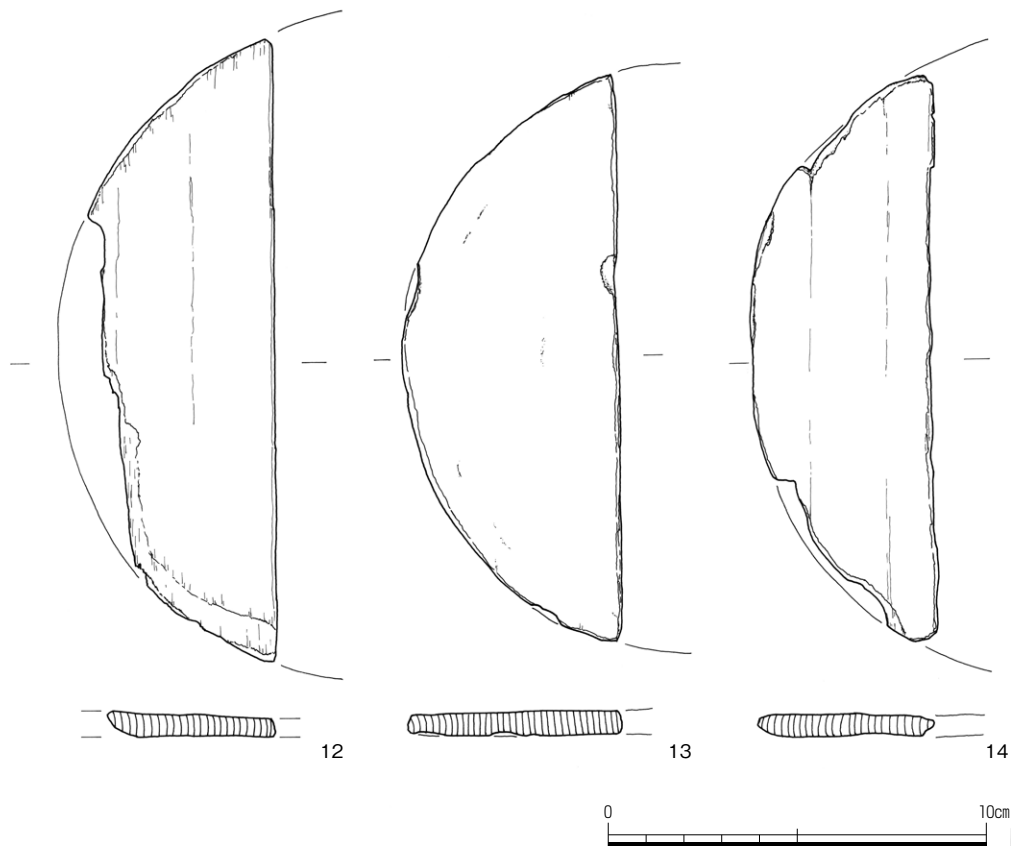


Fig. 156 SD4130中層出土木製品(4) 1:2

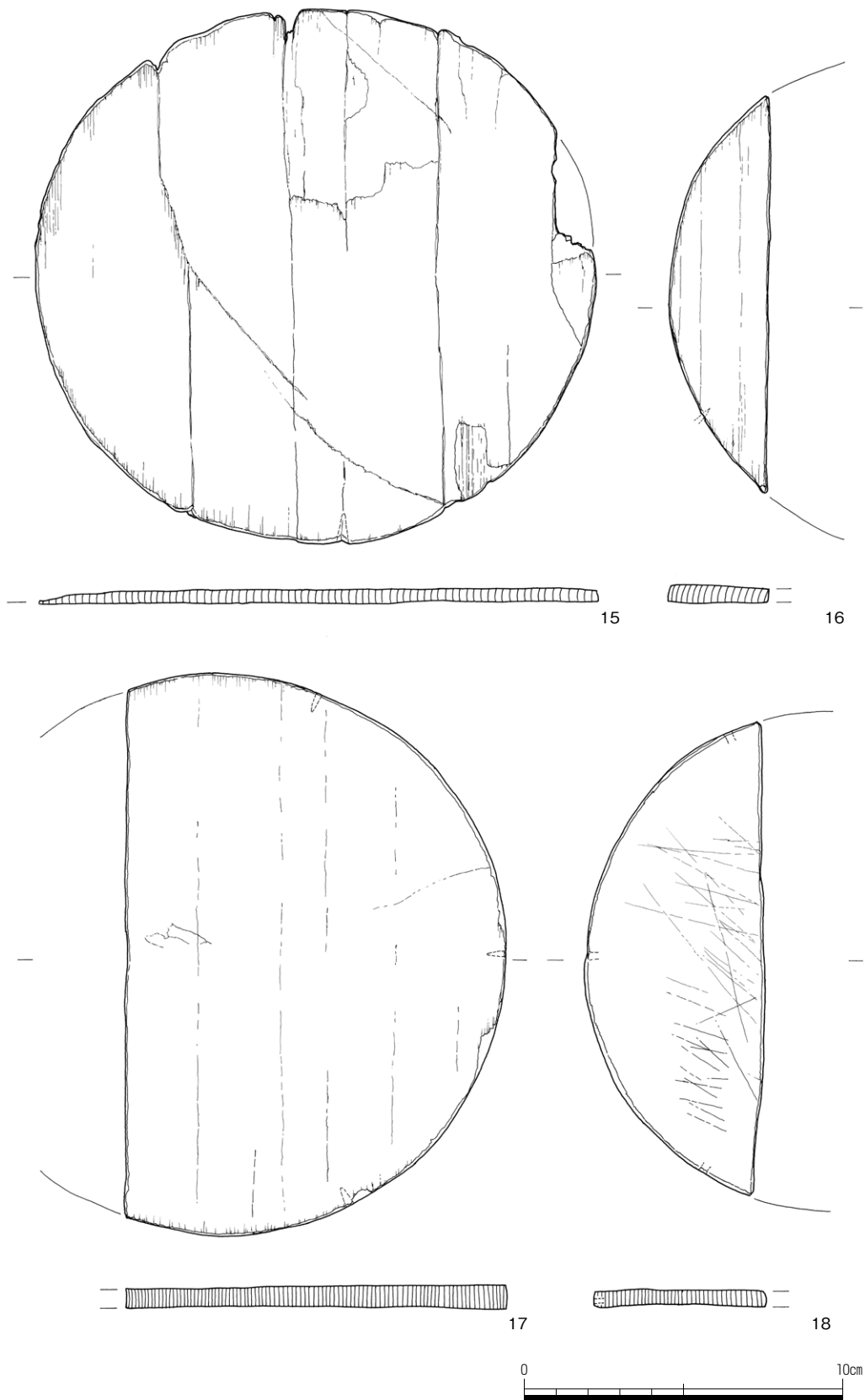


Fig. 157 SD4130中層出土木製品 (5) 1:2

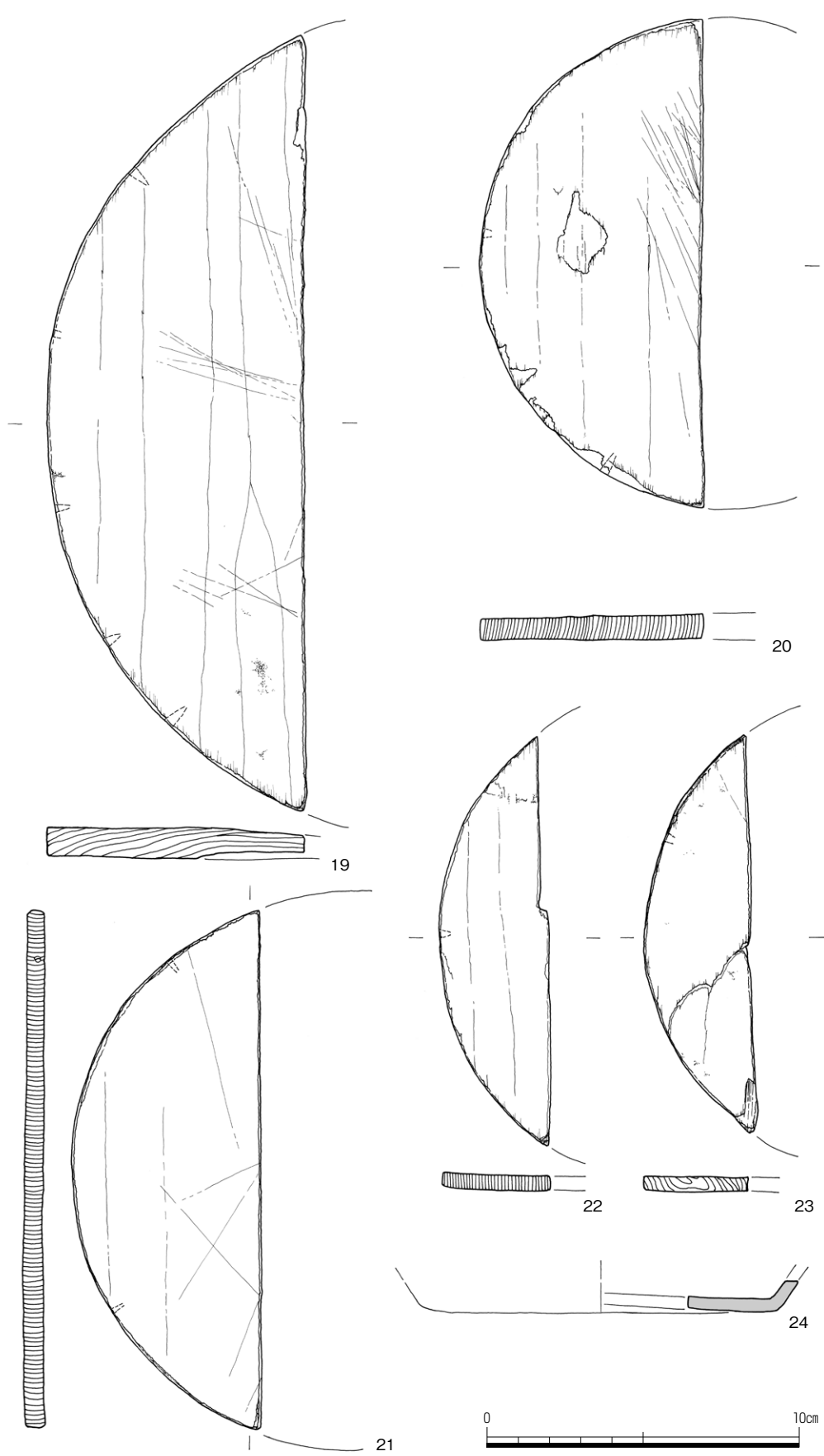


Fig. 158 SD4130中層出土木製品 (6) 1:2

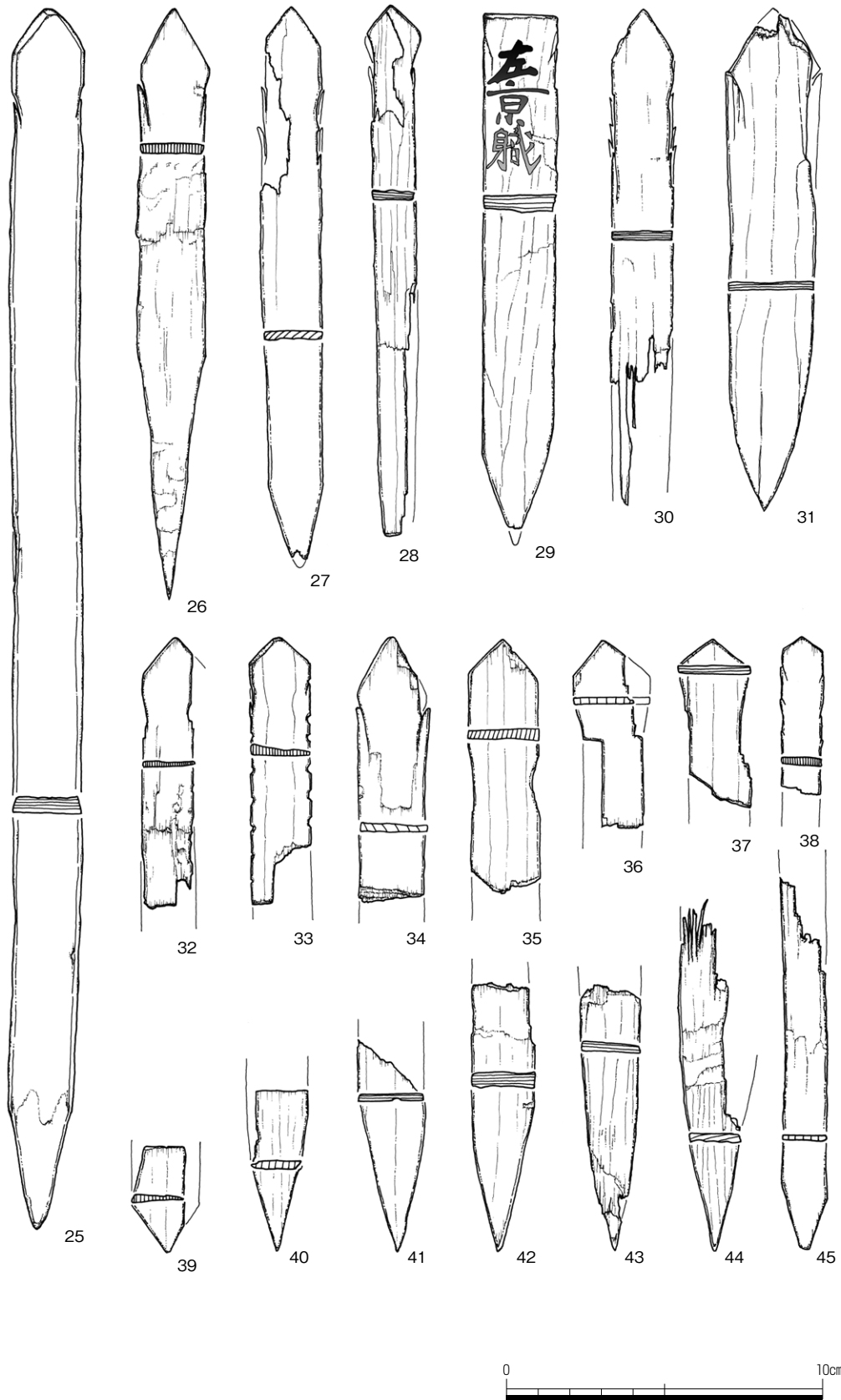


Fig. 159 SD4130中層出土木製品 (7) 1:2

漆器皿 (Fig. 158-24) 漆器皿の小片。残存率は低いですが、底径11.5cm程度に復元できる。内外面に黒漆が塗られている。高台部は遺存状況が悪く、底部外面の漆は確認できない。樹種はヤマゲワである。

斎 串 (Fig. 159・160-25~64) 斎串は、板両端の形状によってA~Dの4型式、板材の側面からの切り込みによって8式に分類している。25は板材の両端を圭頭状につくり、上端近くの側面の左右1箇所に入り込みを入れるBⅢ式の大型品で、全長38.8cmを測る完形品。ヒノキ属の板目材。26はBⅢ式の小型品で、下半の削り出し部分が著しく長い。2片に折れているが、接合すれば全長18.8cmを測る。ヒノキ科の柁目材。27は両側面の左右対称位置を三角形に切り欠くBⅣ式。先端を欠き、残存長は17.5cm。切り込みは上下二段に施す。ヒノキ属の柁目材。28はⅢ式の破片。残存長16.8cm。ヒノキ科の板目材。

29は木簡に転用されたBⅢ式。先端部をわずかに欠き、残存長は16.3cm。頭部は直線的に切り落とし、そこに収まるように「左京職」の文字を配置していることから、斎串から木簡に転用したと考えられる。本調査区が左京職に関連する施設である可能性を示唆する資料である。ヒノキ属の板目材。

30はⅣ式の破片。先端部を欠き、残存長15.7cm。ヒノキ属の板目材。31は板材の上端を圭頭状にして下端を剣先状につくるCⅣ式。残存長15.5cm。ヒノキ属の板目材。32はⅣ式の破片。残存長8.6cm。ヒノキ科の柁目材。33はⅦ式の破片。上端近くの側面の左右1箇所に入り込みを入れ、両側縁に6箇所以上の刻みを入れる。今回の調査では唯一の型式である。残存長9.0cm。ヒノキの柁目材。34はⅢ式の破片。残存長8.4cm。ヒノキ科の柁目材。35~37はⅢ式またはⅣ式の小片である。35はヒノキ属の柁目材、36はヒノキ科の柁目材、37はヒノキ属の板目材である。38はⅣ式の小片で、両側縁に3箇所の切り込みを入れる。ヒノキ科の柁目材である。39~45は斎串の先端部の破片。いずれもB型式で、39・40・45がヒノキ属の柁目材、41~44がヒノキ属の板目材である。

46はCⅣ式。全長15.6cm。ヒノキ属の柁目材。47は、側面を割り裂くように上端木口から割れ目を入れるBⅡ式。全長14.0cm。ヒノキ科の板目材。48・49はⅣ式の破片。残存長はそれぞれ11.1cmと9.7cm。48はヒノキ属の柁目材、49はヒノキ科の柁目材。50はⅢ式の破片。ヒノキ属の板目材。51は切り込みを入れないDⅠ式の完形品。全長17.1cm、幅1.0cmを測る。断面形は半円形に近く、切先の突出も弱い。斎串ではない可能性も残る。ヒノキ属の板目材。52はDⅣ式の完形品。全長19.6cm、幅1.1cm。片側の側縁に8箇所、反対側に1箇所わずかに切り欠きをもつ。ヒノキ属の板目材。53はBⅠ式の完形品。全長19.5cm、最大幅1.1cm。ヒノキ属の板目材。

54~60は上端部の小片。55・56がⅢ式、58がⅠ式であるほかは、型式を確定できない。54・57・58・60がヒノキ属の柁目材、55がヒノキ科の板目材、56・59がヒノキ属の板目材。61~64は下端部の小片。61・62が板材の両端をそれぞれ一側面から鋭く斜めに切り落とすA型式、63・64がB型式である。61がヒノキ科の板目材、62・63がヒノキ属の板目材、64がヒノキ属の柁目材。

人 形 (Fig. 160-65) 正面全身人形で、頭頂部と右足を欠く。残存長14.4cm、肩部幅3.3cm、厚さ0.3cmを測る。眉、目、鼻、口は線刻によって表現する。腕は両面に線刻を施すことで表現し、足は切り抜きによって作る。ヒノキの板目材。

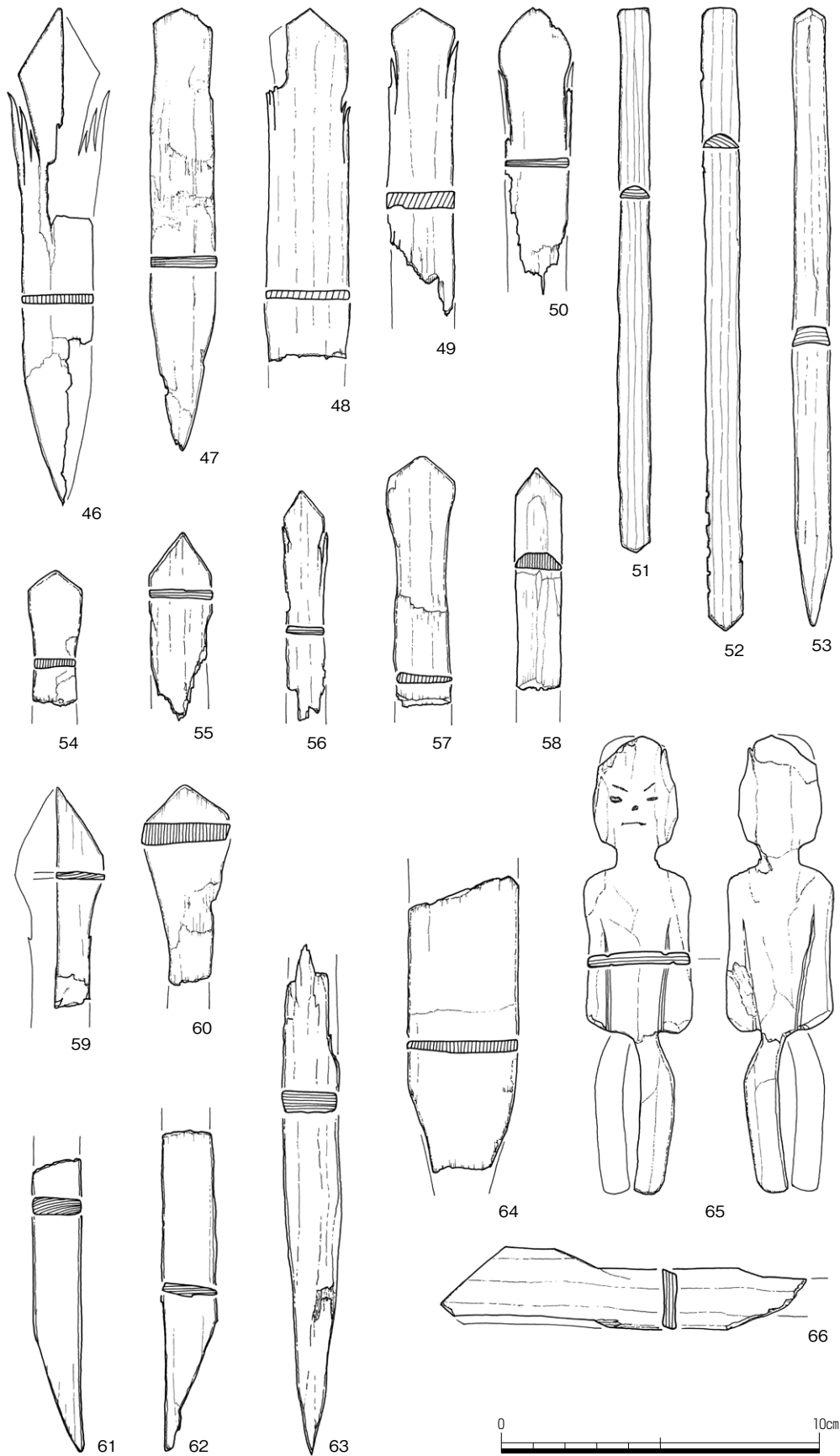


Fig. 160 SD4130中層出土木製品 (8) 1:2

馬形 (Fig. 160-66) 鞍の表現をもたないA I型式。下半身の端部を欠き、残存長は11.5cm。ヒノキ属の板目材。

尖端棒 (Fig. 161-67~72) 先端を尖らせた棒である。67と69は三角柱状を呈し、残存長はそれぞれ21.8cmと18.4cm。67はアスナロ属の柁目材、69がヒノキ属の板目材。68は先端を薄く加工した篋状を呈する。ヒノキ科の板目材。70は一端を茎状に作り、反対側を刀子の刃部状に加工する。全長17.8cm。サワラの柁目材。71は残存長13.7cm。ヒノキ属の板目材。72は先端を切先状に加工した棒状品。残存長11.8cm。ヒノキ属の柁目材。

紡輪 (Fig. 161-73) 紡輪の完形品。長径6.2cm、短径5.5cmの楕円形を呈する。側面は粗く削る。中央に0.7cmの穴を穿つ。ヒノキの板目材。

琴柱 (Fig. 161-74) 片側の脚部を若干欠き、残存幅3.2cm、高さ1.6cm、厚さ0.3cmを測る。ヒノキの柁目材。

横櫛 (Fig. 161-76・77) いずれも全体が長方形を呈し、やや肩部が張るA I型式。76は2片に分かれるが、同一個体と考えられる。推定長11cm前後、最大幅5.0cm、厚さ1.1cmを測る。77は細片で、肩部と歯の一部が残存する。樹種は76がネジキ、77がイスノキの板目材である。

部材 (Fig. 161-78) 四角い箱の一辺と考えられる。短辺の両側に柄を入れて組み合わせる構造で、四隅と下辺（あるいは上辺）に4箇所ずつ木釘を打ち込む。長さ13.3cm、幅6.3cm、厚さ1.2cm。ヒノキ属の板目材。

用途不明品 (Fig. 161・162-75・79~89) 用途不明品や部材の破片。75は木材ではなく何らかの樹皮で、中央に径0.5cmの穴を穿つ。79は残存長10.2cmの棒状品で、両端を細く削り出す。糸巻軸棒の可能性もあるが、削り出し部分が長すぎる。ヒノキ属の柁目材。80は平面台形の棒状品。全長11.1cm、残存幅3.1cm、厚さ1.8cm。アカガシ亜属の板目材。81・82は長方形の板。81は全長13.8cm、幅3.0cm、ヒノキ属の柁目材。82は全長16.5cm、幅2.5cm、ヒノキ属の柁目材。83は一方を尖らせた板状品で、残存長16.2cm、上端幅1.7cm。両側縁に4箇所ずつと上辺に1箇所、計9箇所の穿孔を施す。ヒノキ属の板目材。

84は台形状の不明部材。下端の長さは15.8cm、高さは6.7cmで、下辺に高さ1.1cmの切り込みを入れる。ヒノキ属の柁目材。85・86は板状品の破片。85は台形を呈し、残存長7.7cm。スギの板目材。86は端部付近に小孔を穿つ。ヒノキ属の柁目材。

87は短い棒状の部材で、一端は断面が方形の柄状に削り出し、反対側は面取りして尖らせる。全長10.0cm。樹種はアカガシ亜属。88は円柱状の部材で、中央付近に長方形の柄穴をあける。木槌の頭部の可能性もある。残存長10.9cm。樹種はアカガシ亜属。89は木の葉形の加工板。中央部分が厚くなり、厚さ0.9cm。中央の下部に直径0.5cmの穴を穿つ。欠損している上端中央にも同様の穴の一部が残る。ニヨウマツ類の柁目材。

杭 (Fig. 163-90~96) 90のみ完形品。90は角柱状を呈し、全長34.6cm。最大幅3.0cm、厚さ1.8cm。先端付近は断面円形に面取りするが、加工はあまり鋭くない。ヒノキ属の板目材。91は円柱状の杭。残存長28.5cm、太さ5.1cm。一部に樹皮を留める。ナシ亜科の心持材。92は先端付近の小片。残存長13.1cm。樹種はナシ亜科。93は残存長23.0cm。一部に樹皮を留める。コナラ亜属コナラ節の心持材。94は先端部の破片。残存長12.9cm。アカガシ亜属の心持材。95は基部から先端部にかけての破片。樹皮を留め、残存長21.9cm。アカガシ亜属の心持材。96は先端付近の破片。

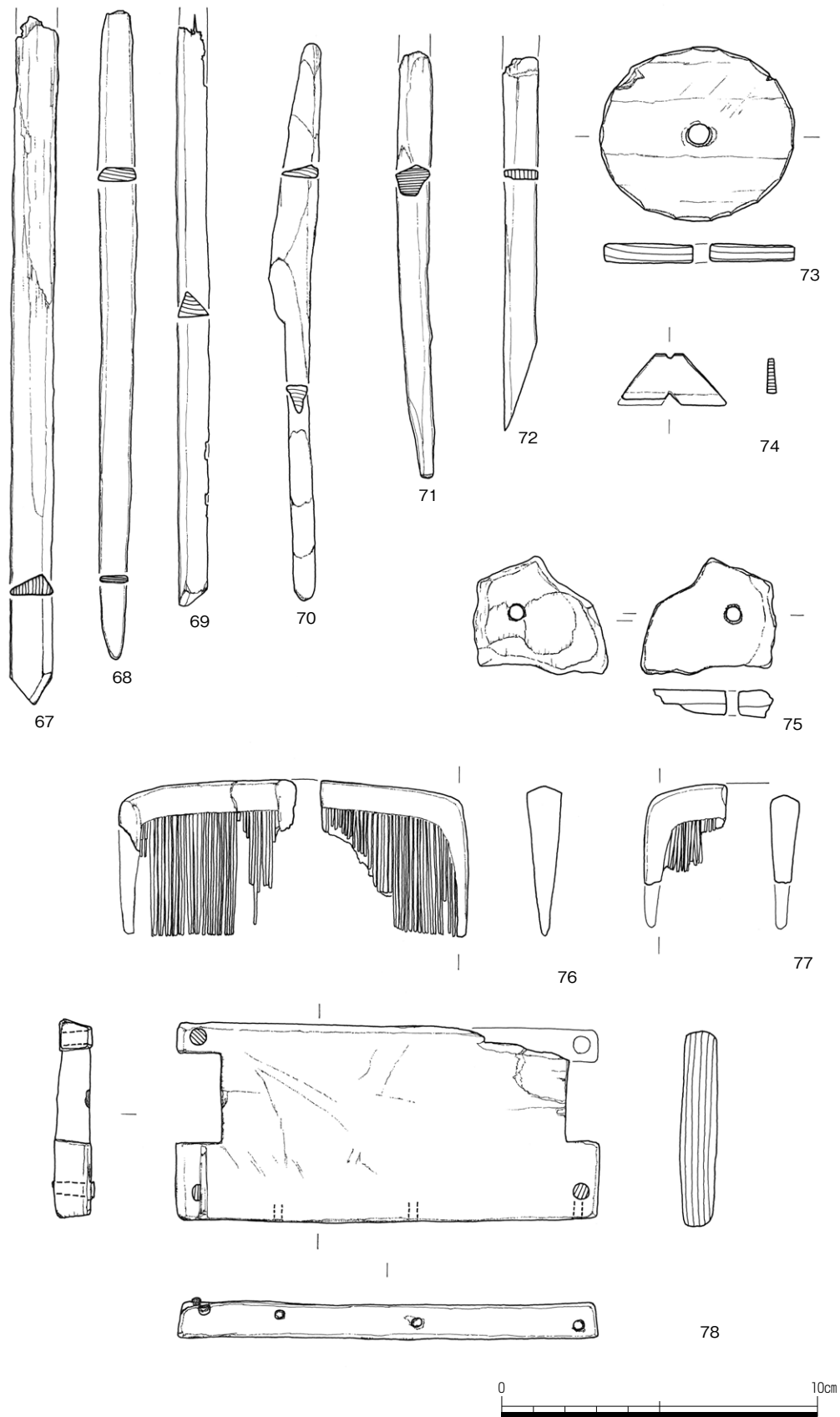


Fig. 161 SD4130中層出土木製品 (9) 1:2

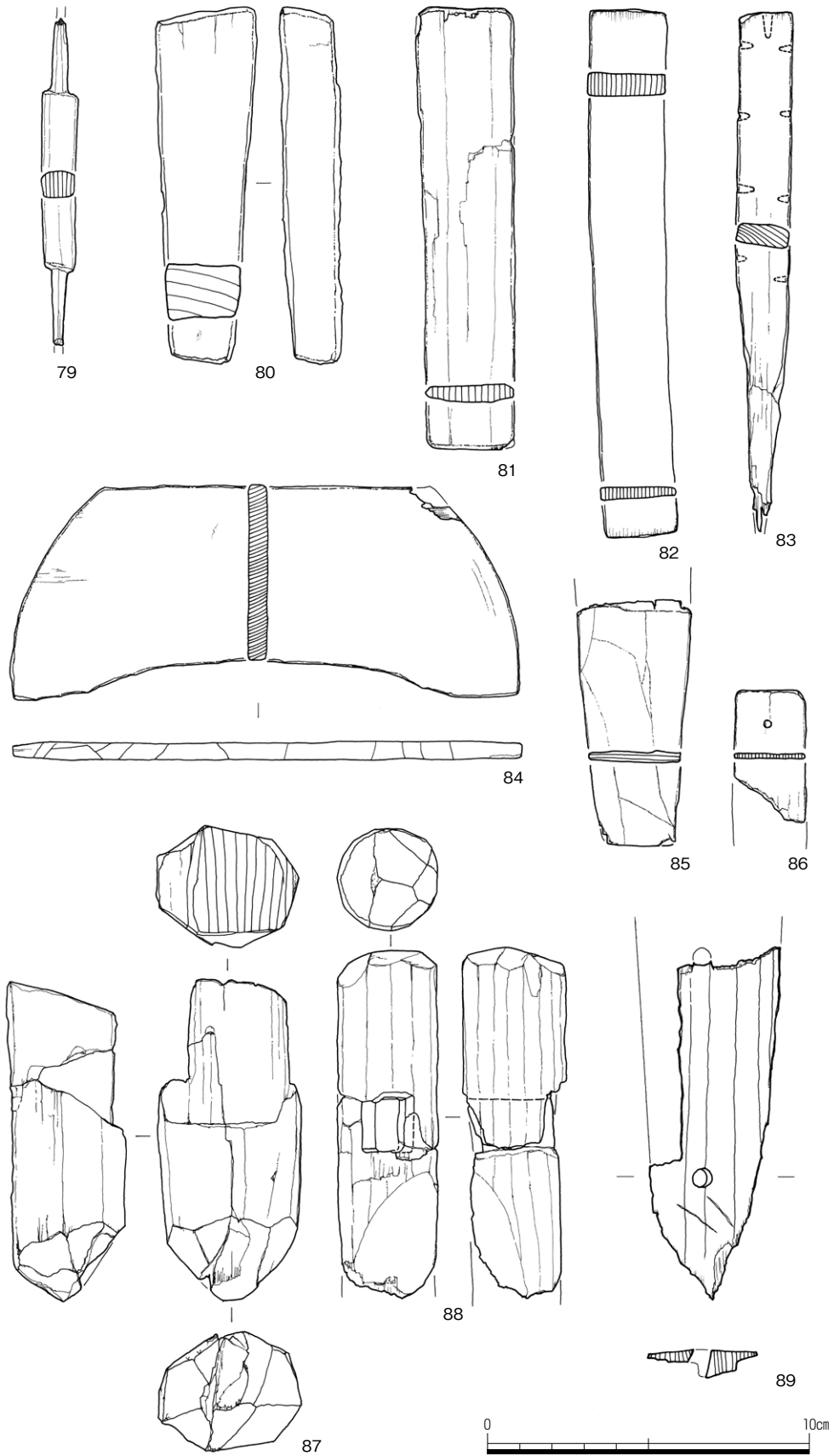


Fig. 162 SD4130中層出土木製品 (10) 1:2

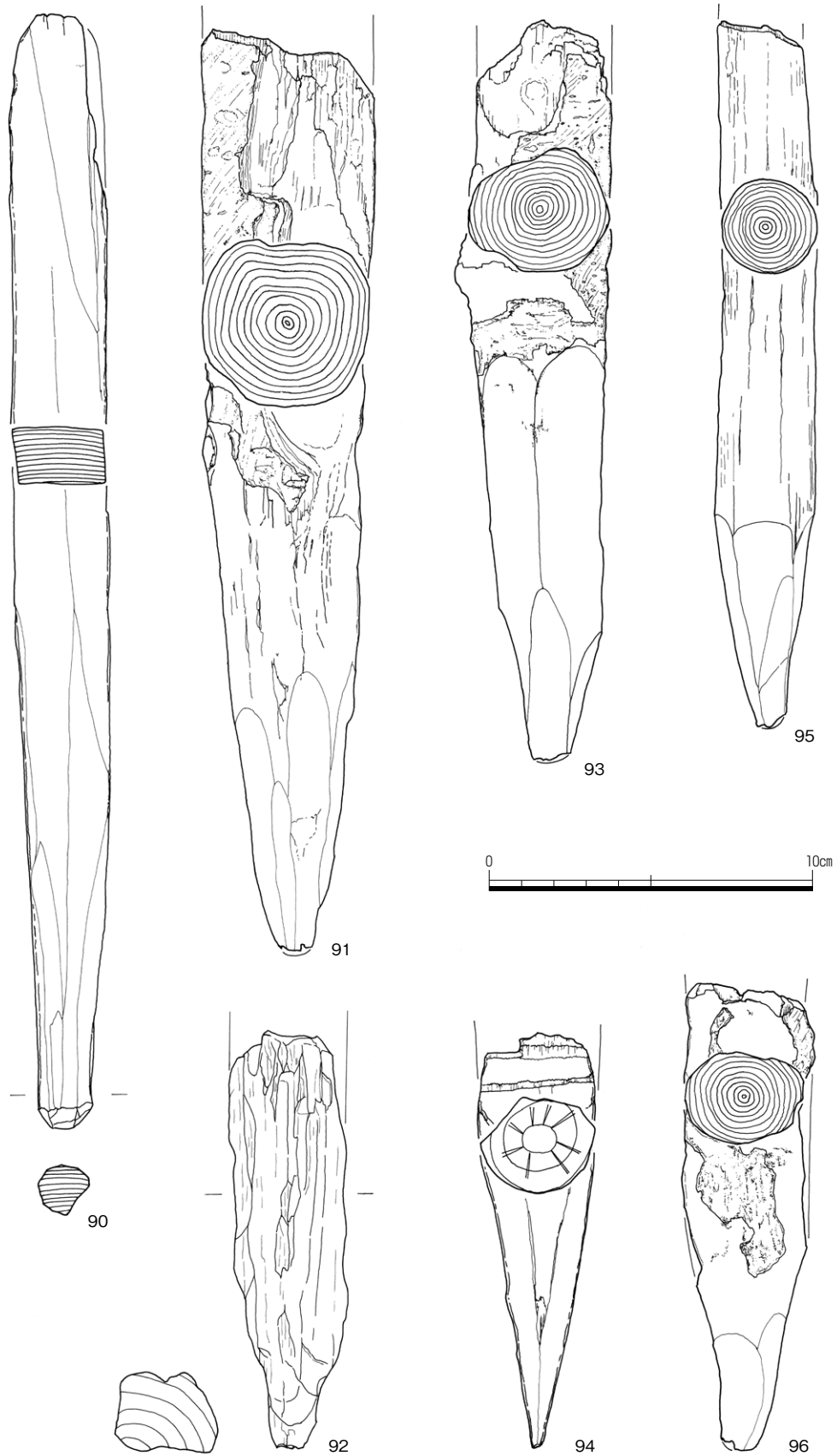


Fig. 163 SD4130中層出土木製品 (11) 1:2

一部に樹皮を留める。残存長14.5cm。シキミの心持材。

加工棒 (Fig. 164~167-97~166) 加工棒には、径が比較的太く、端部を尖らせたり、段差加工を施したりするもの(97~107)と、細い角棒や板状を呈し、一端または両端を平滑に仕上げたもの(108~166)の2種類がある。前者には工具柄の破片、杭の破片、部材など様々な器種が含まれ、後者は籌木が大半を占めると考えられよう。まず前者について報告したい。

97は断面円形の加工棒。全長58.8cm、最大径2.3cmを測る完形品で、一端を面取りして細く加工する。何らかの柄と考えられる。ウツギ属の中空の部位を用い、内径は8mmである。98はやや扁平な加工棒。残存長37.6cm。全体を扁平な八角形に面取りする。柄杓の柄か。ヒノキの板目材。99は丸棒の完形品。一端を一回り細く削り、そこに別材をはめたとと思われる。全長31.2cm。ヒノキの柁目材。100は断面隅丸方形の加工棒。残存長29.9cm。ヒノキの板目材。101は丸棒の破片。2つに折れ、完全には接合しないが、残存長は28.0cm。先端付近を人頭状に加工する。散孔材の心持材。102は角棒の破片。一端を面取りして尖らせる。残存長20.6cm。ヒノキの板目材。103は断面蒲鋒形の棒状品で、一端を斜めに切り落とす。残存長16.5cm。ヒノキ科の柁目材。104は細い丸棒で、一端を両側から斜めに切り落とす。残存長7.8cm。ニシキギ属の心持材。105も細い丸棒。一端を弓弭状に加工する。残存長8.9cm。ニシキギ属の心持材。106は尖端棒。残存長10.1cm。樹種はヒノキ。栓の可能性もある。107も尖端棒。断面円形の棒状品で、残存長12.6cm。ヒノキ属の柁目材。

108~166は籌木と考えられる加工棒である。大半は簡単な加工を施したのみの棒にすぎないが、特に丁寧に削られた完形品(138・140・153・157)も出土している。これらの法量や樹種等は、Tab. 5に示す。

Tab. 5 SD4130中層出土加工棒一覧(単位:cm)

図面番号	全長	最大幅	最大厚	樹種	図面番号	全長	最大幅	最大厚	樹種
108	26.2	0.8	0.8	ヒノキ属	138	19.0	1.0	0.4	ヒノキ属
109	23.7	1.4	0.6	ヒノキ属	139	18.2	0.8	0.3	ヒノキ属
110	23.6	0.7	0.5	ヒノキ属	140	17.7	1.0	0.4	ヒノキ属
111	23.2	1.2	0.5	ヒノキ	141	7.9	0.8	0.3	ヒノキ属
112	23.5	0.8	0.8	ヒノキ属	142	8.4	0.7	0.4	ヒノキ
113	21.8	0.9	0.6	ヒノキ属	143	8.6	0.8	0.4	ヒノキ属
114	19.5	0.8	0.5	ヒノキ属	144	8.7	0.9	0.9	ウツギ属
115	18.7	0.8	0.5	ヒノキ属	145	9.2	0.9	0.9	ヒノキ属
116	18.7	0.9	0.9	ヒノキ属	146	9.3	0.7	0.5	ヒノキ属
117	18.4	0.6	0.6	ヒノキ	147	11.2	1.0	0.5	ヒノキ属
118	18.0	1.0	0.6	ヒノキ属	148	11.7	1.1	0.6	ヒノキ
119	12.0	0.8	0.3	ヒノキ科	149	12.1	0.9	0.7	コウヤマキ
120	12.8	0.7	0.4	ヒノキ属	150	12.4	1.1	0.4	ヒノキ科
121	13.4	0.9	0.7	ヒノキ属	151	14.6	1.1	0.4	ヒノキ
122	13.3	1.2	0.7	ヒノキ属	152	23.9	1.3	0.6	ヒノキ
123	14.5	0.8	0.8	ヒノキ	153	22.1	1.3	0.6	ヒノキ
124	15.7	0.7	0.4	ヒノキ属	154	20.9	1.4	0.4	ヒノキ
125	16.5	1.0	0.5	ヒノキ	155	18.6	1.5	0.3	ヒノキ
126	15.5	1.0	0.4	ヒノキ	156	15.8	1.8	0.4	ヒノキ属
127	17.3	0.6	0.3	ヒノキ属	157	15.2	1.9	0.6	ヒノキ
128	18.0	0.6	0.3	ヒノキ	158	12.1	1.4	0.8	ヒノキ属
129	19.3	0.7	0.6	針葉樹	159	11.4	1.1	1.1	ヒノキ
130	27.9	1.1	0.5	ヒノキ属	160	9.4	1.4	0.4	ヒノキ
131	25.8	1.1	0.7	スギ	161	7.0	0.7	0.6	ヒノキ属
132	24.4	1.5	0.7	ヒノキ属	162	9.1	0.8	0.6	ヒノキ属
133	24.0	1.0	0.4	ヒノキ	163	10.2	0.8	0.8	ヒノキ
134	23.1	0.7	0.6	ヒノキ	164	11.3	1.0	0.8	ヒノキ属
135	22.8	0.8	0.8	ヒノキ属	165	11.4	1.1	0.9	ヒノキ
136	22.0	0.8	0.5	ヒノキ	166	12.1	0.9	0.9	ヒノキ
137	19.4	1.1	0.5	ヒノキ					

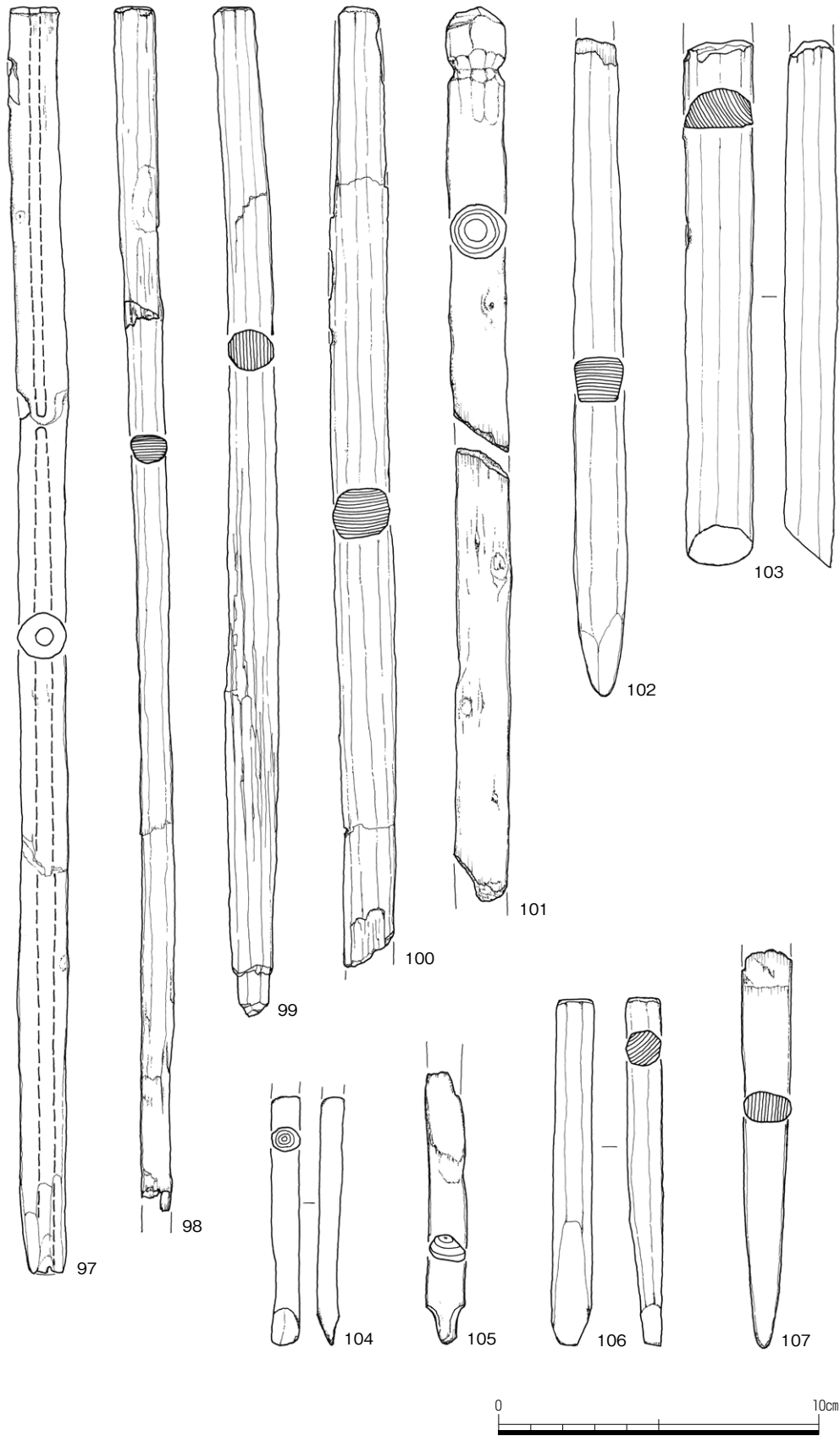


Fig. 164 SD4130中層出土木製品 (12) 1:2 (97のみ 1:3)

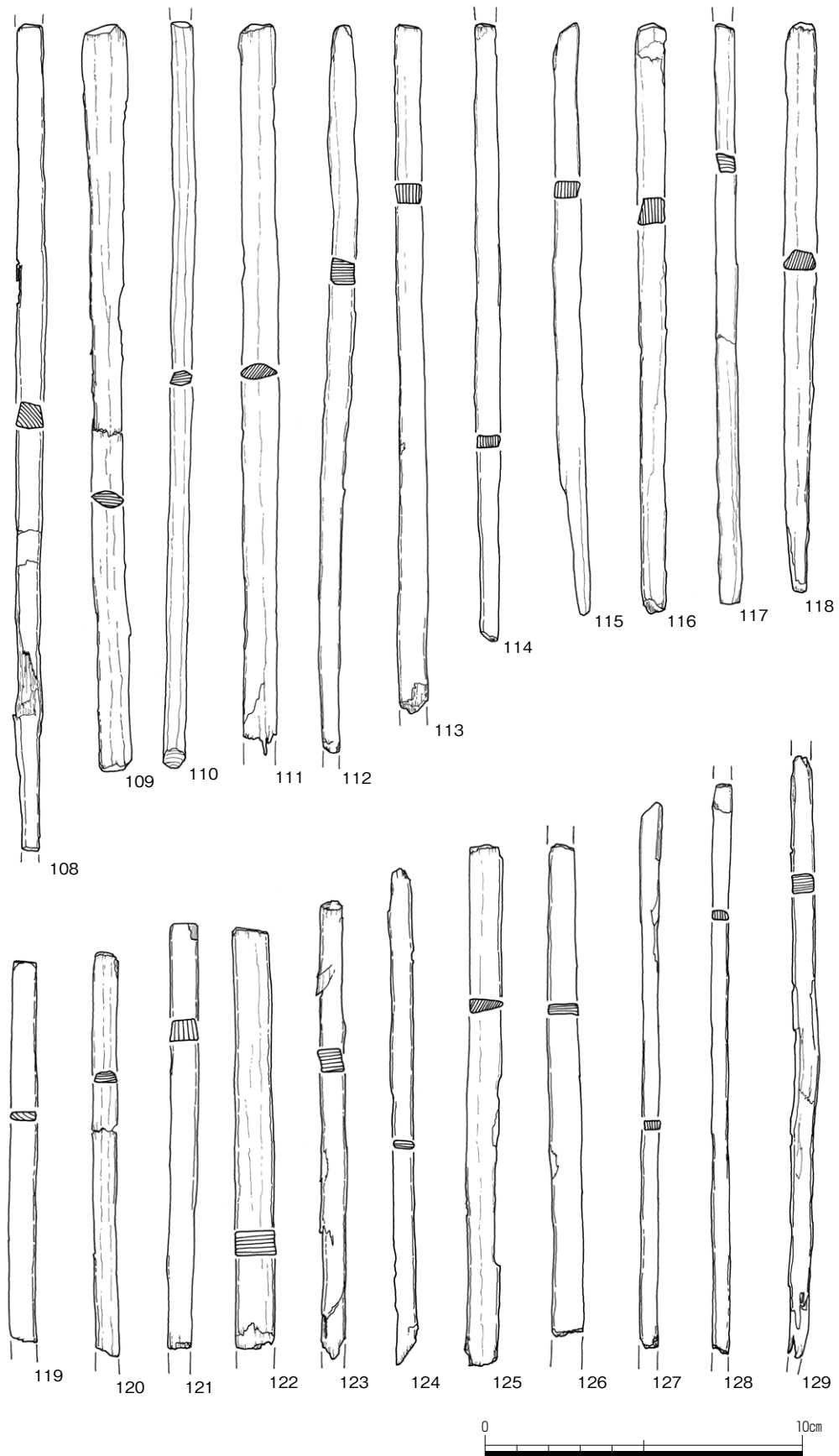


Fig. 165 SD4130中層出土木製品 (13) 1:2

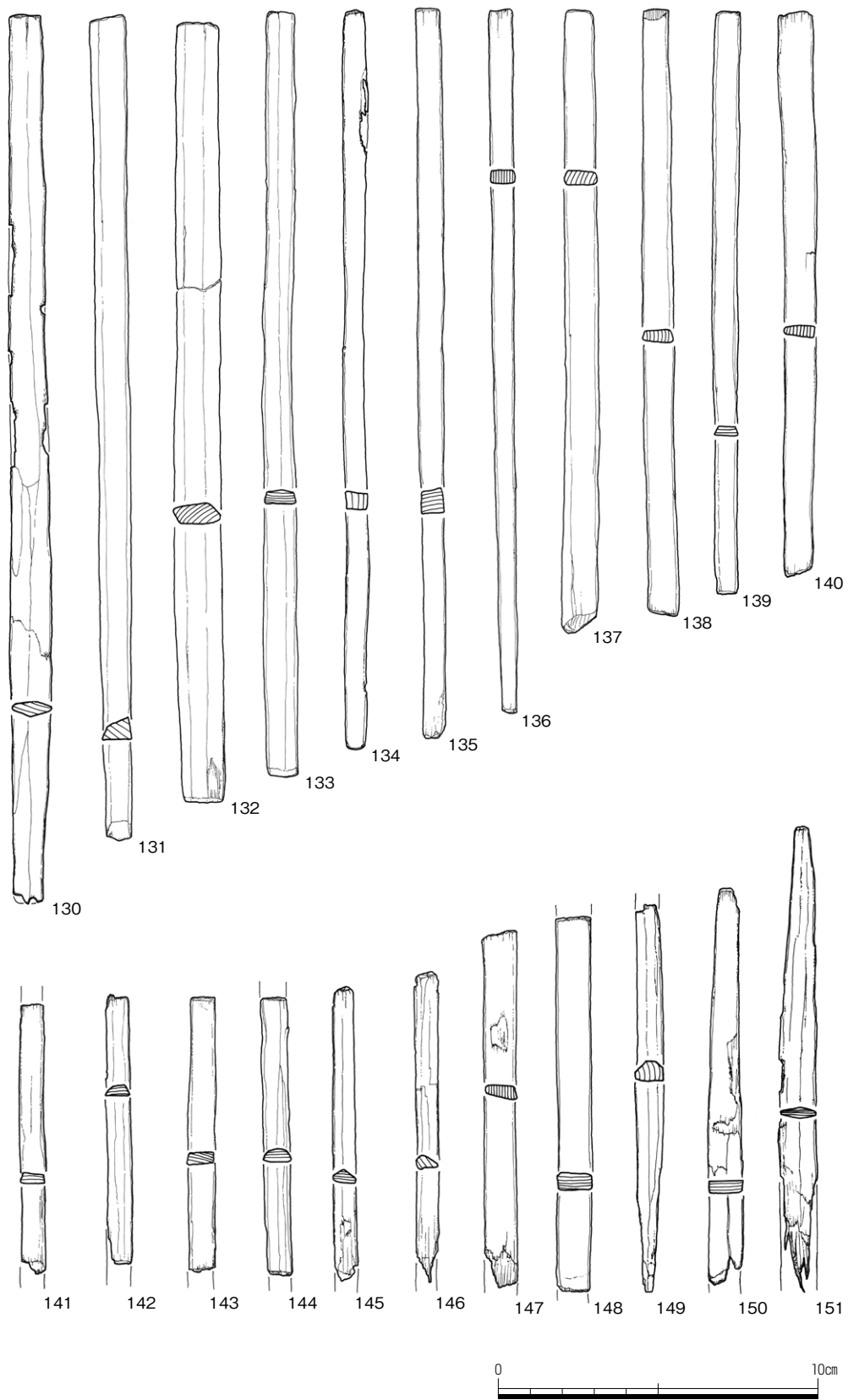


Fig. 166 SD4130中層出土木製品 (14) 1:2

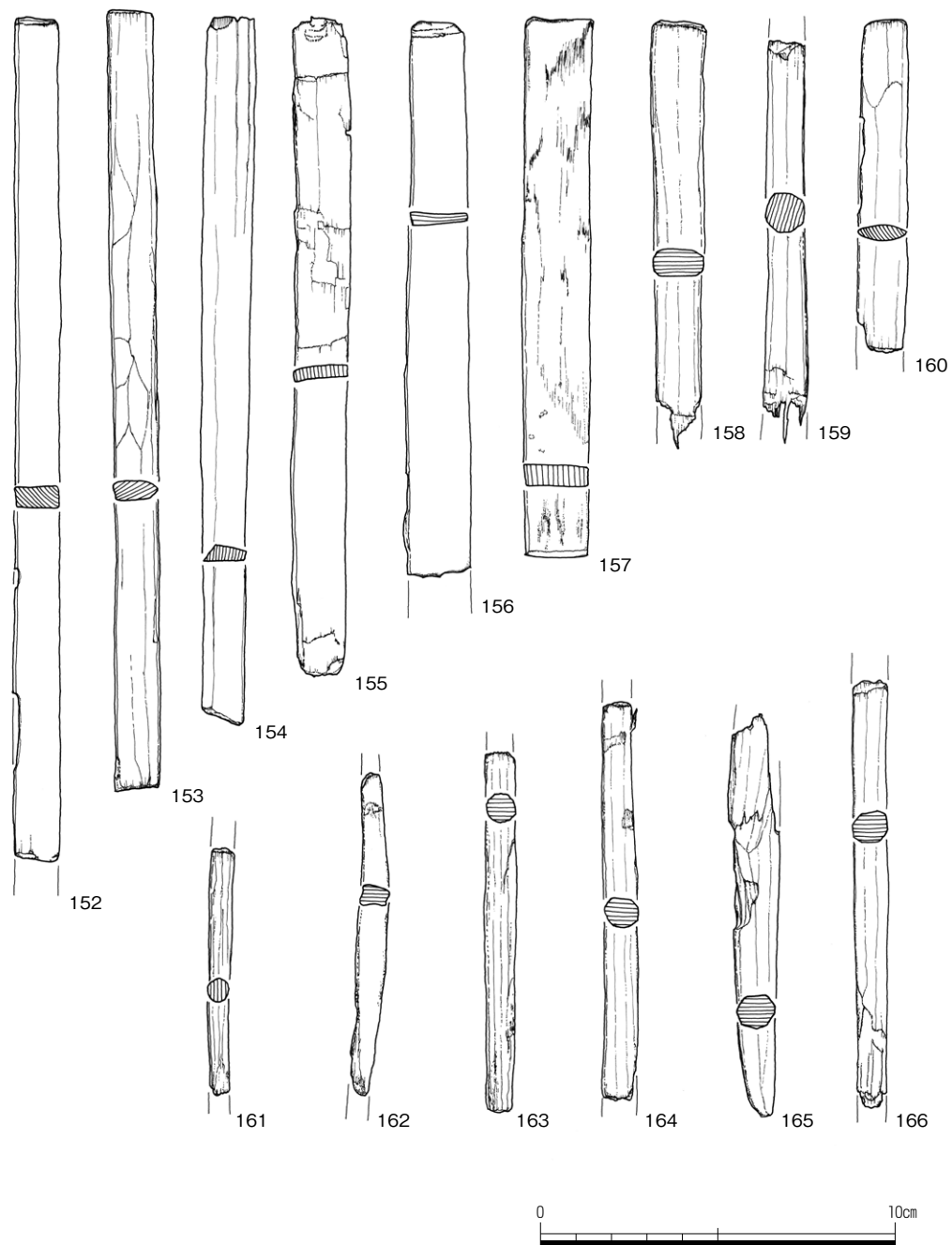


Fig. 167 SD4130中層出土木製品 (15) 1:2

ii 上層出土木製品 (Fig. 168~173, Ph. 138~140)

曲物底板・蓋 (Fig. 168~170-167~173) 円形曲物の底板・蓋である。167は釘結合曲物の底板。側縁を若干欠損する。最大径16.2cm。側面には側板を固定する釘穴を3箇所以上もち、内面には刀子によるケビキ痕跡と側板のアタリが残る。表面の各所にも釘穴らしきものが認められ、穴が貫通しているものもある。通気あるいは水抜き工夫かもしれない。ヒノキの柾目板。168は釘結合曲物底板の破片。側縁に2箇所以上の釘穴をもつ。表面1箇所に径5mm程度の穴を穿つ。ヒノキの板目材。169は蓋板で、ほぼ完形。最大径13.2cmを測る。中央に把手を付けたと思われる

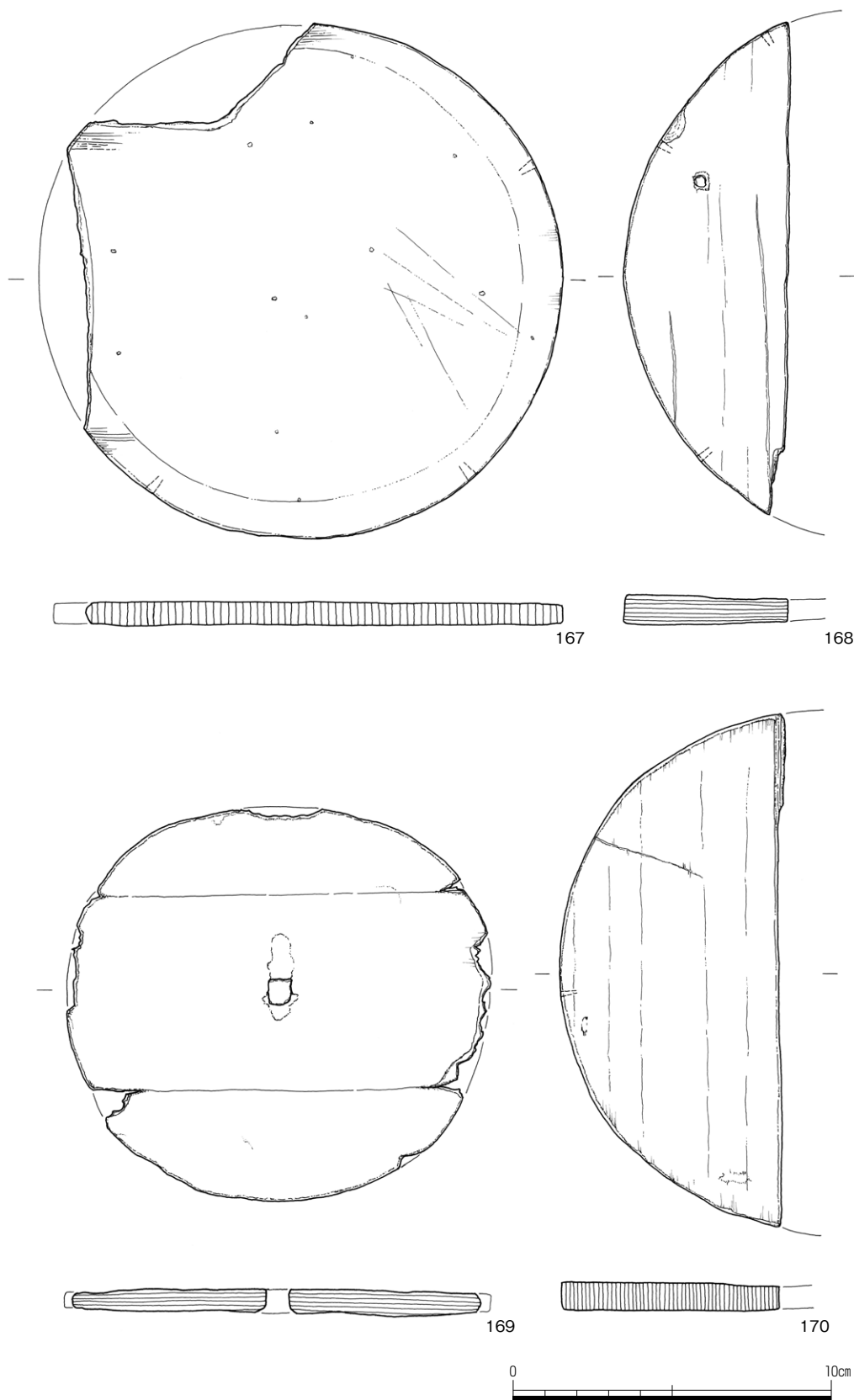


Fig. 168 SD4130上層出土木製品 (1) 1:2

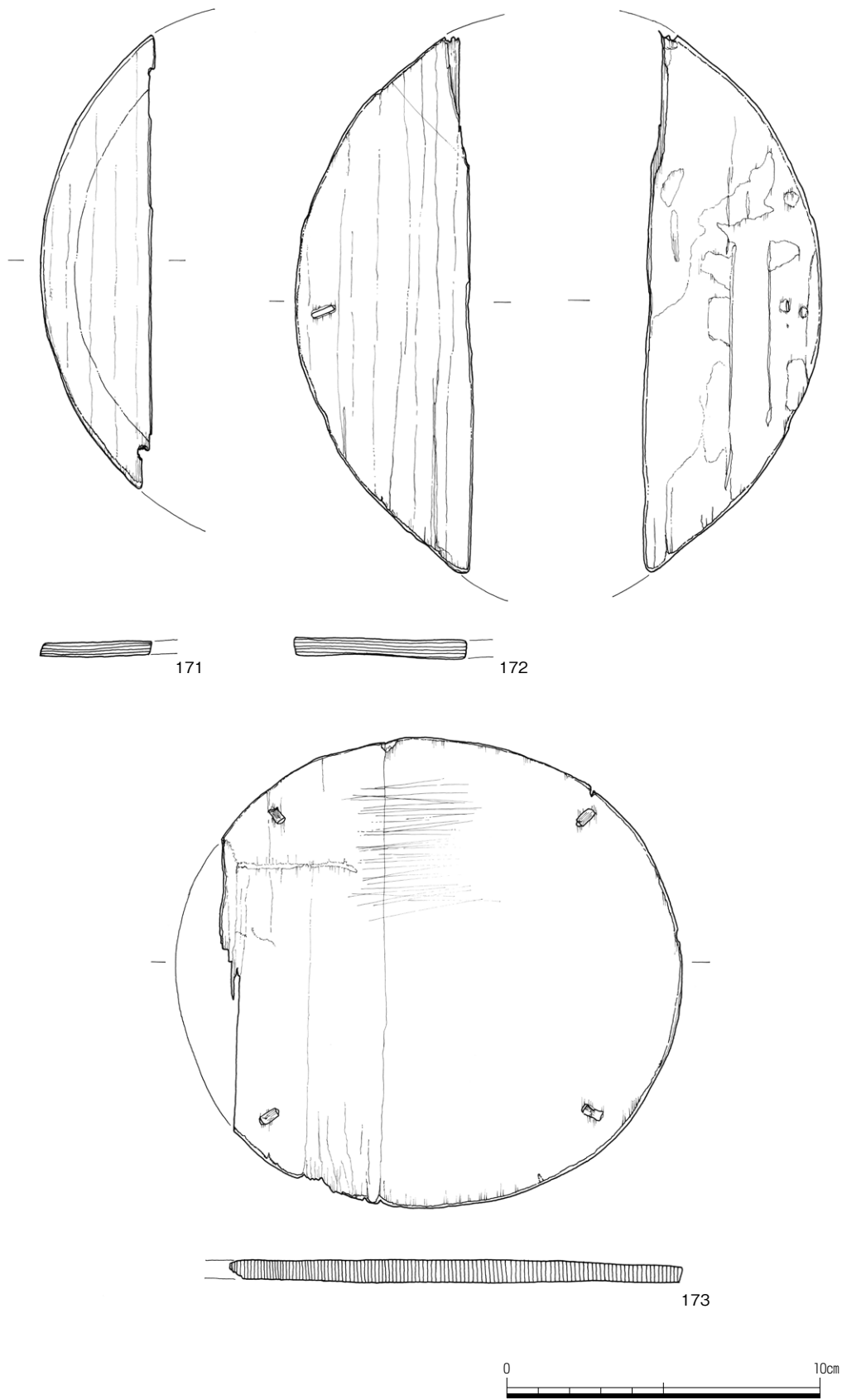


Fig. 169 SD4130上層出土木製品 (2) 1:2

る径8mmの穴をあける。ヒノキの板目材。170は釘結合曲物の底板片で、側縁に1箇所釘穴をもつ。残存部の最大径は16.2cm。ヒノキの柁目材。171は樺皮結合曲物の小片で、内面に側板のアタリの痕跡が残り、端部には側板を固定した穿孔もわずかに残る。ヒノキ属の板目材。172は樺皮結合式曲物の破片で、側縁の1箇所に長方形の紐通し穴をもつ。ヒノキの板目材。173は樺皮結合式曲物の底板。ほぼ完形で、最大径16.2cmを測る。表面にケビキが残る。紐通し穴は4箇所、幅4mm程度の樺皮が残存している。ヒノキの柁目材。

紡 輪 (Fig. 170-174~176) 174は楕円形を呈し、最大径5.8cmを測る。中心に径5mmの小穴を穿つ。ヒノキ科の柁目材。175もほぼ同様のもので、最大径5.8cm。中心に糸巻棒が残存する。ヒノキ属の柁目材。176は174・175よりも大型の紡輪で、最大径7.9cm側面を粗く削り、側縁を斜めに面取りした部分もある。中心には最大径1.1cmの穴をあける。ヒノキの板目材。

糸 巻 (Fig. 171-177) 糸巻横木の破片。軸棒を通す穴を挟んで片側を欠損する。残存長5.3cm、最大幅1.3cm。ヒノキ属の柁目材。

杭 (Fig. 171-178) 径約2cmで中空の心持材の先端を鋭利に尖らせる。約28cmが残存し、基部は破損している。樹種はウツギ属。

用途不明品 (Fig. 171-179・180) 179は一方がすぼまる角柱状をなし、表面には削りの痕跡が残る。全長27.2cm、厚さは約3cm。ヒノキ属の板目材。180は一方を尖らせた板状品で、端部に突起を作り出す。径3mm程度の小穴を4箇所にあけている。全長16.0cm、最大幅5.5cm、厚さ7mm。ヒノキ属の柁目材。

齋 串 (Fig. 172-181~190) 上層からは10点の齋串が出土している。181はBIV式で、側面の切り込みは各3箇所。先端をわずかに欠く。残存長15.6cm、最大幅2.3cmを測る。ヒノキ属の板目材。182はIV式で、下半を欠く。残存長8.8cm。ヒノキ属の柁目材。183はIV式の破片。残存長6.9cm。ヒノキ属の板目材。184はIII式の破片。残存長6.9cm。ヒノキ科の柁目材。185はIII式の小片。残存長5.0cm。ヒノキの柁目材。186はIII式の小片。残存長4.9cm。ヒノキ科の柁目材。187はB型式の完形品と考えられるが、全長が5.8cmと短く、厚みも0.6cmと他の齋串より厚いことから、齋串ではない可能性も残る。ヒノキ科の板目材。188はC型式の破片。残存長9.6cm。ヒノキ属の柁目材。189はB型式の破片。残存長9.0cm。ヒノキ属の柁目材。190はB型式の小片。残存長8.2cm。ヒノキ属の柁目材。

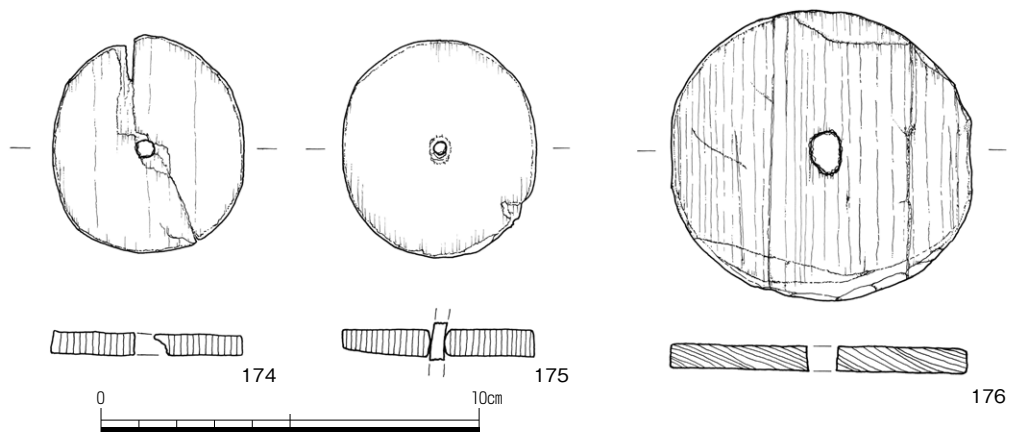


Fig. 170 SD4130上層出土木製品 (3) 1:2

刀子柄 (Fig. 172-191) ムクノキの板目材を丁寧に削り、楕円柱状に加工する。刃部に向かって若干の反りをもつ。全長10cm、最大幅1.4cm、厚さ1.2cm。

加工棒 (Fig. 172-192~198) 加工棒として一括するが、板状品や断面円形に近い棒状品を含み、様々な用途が想定される。192は全長25.4cm、幅1.0cmを測る棒状品で、一方を丸く削り出す。ヒノキ属の板目材。193は残存長22.7cm、最大幅2.2cm、厚さ1.0cmを測る板状品。ヒノキ属の柁目材。194は残存長13.7cm、幅1.2cmの角棒。片側は炭化している。ヒノキ科の板目材。195は残存長11.6cm、径1.0cmの丸棒。両端を欠く。樹種はヒノキ属。196は残存長10.0cm、径1.3cmの丸棒。両端を欠く。樹種はヒノキ属。197は残存長10.7cmの楕円柱状を呈する。ヒノキの柁目材。198は残存長9.6cm、径0.8cmの丸棒。樹種はヒノキ属。

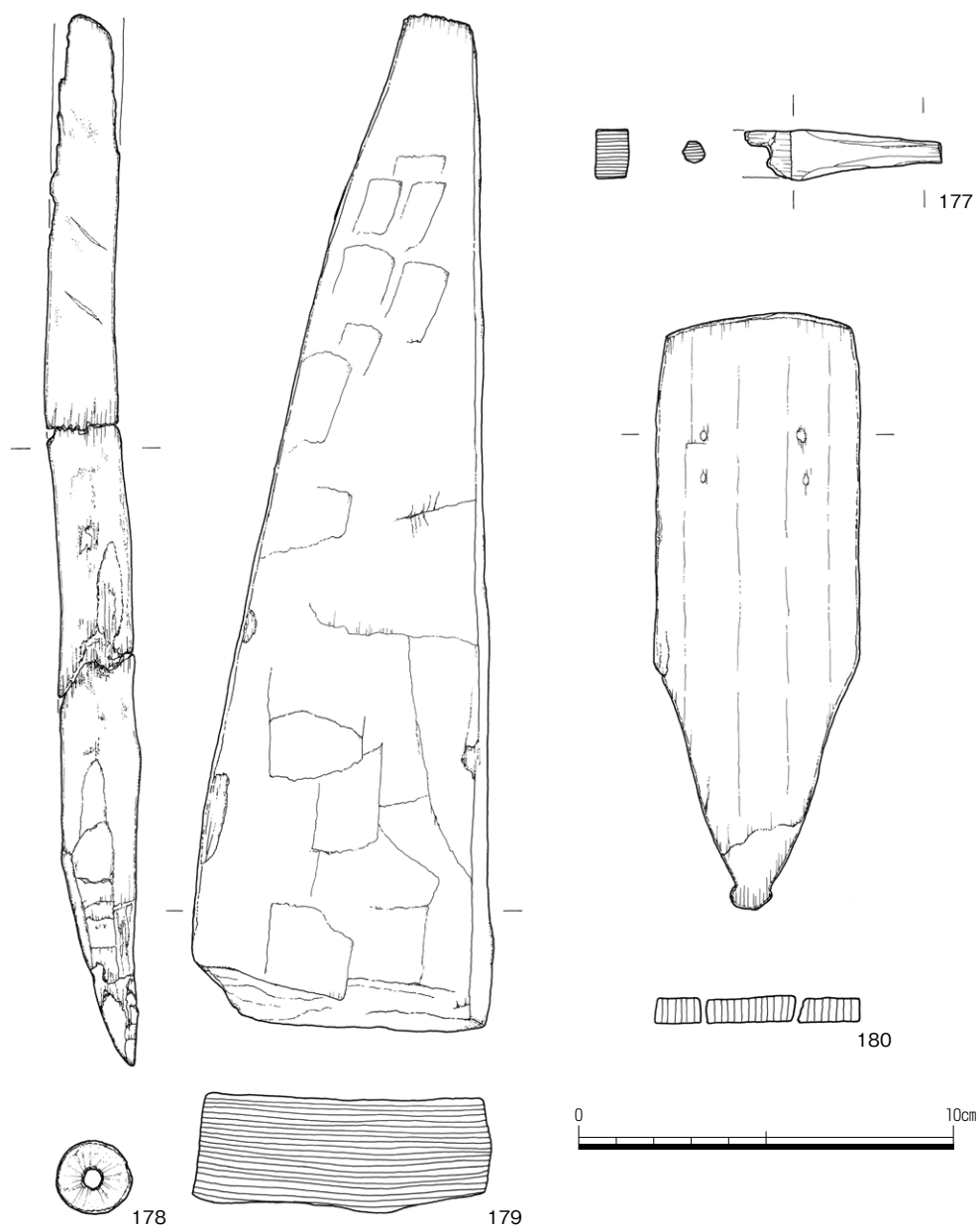


Fig. 171 SD4130上層出土木製品(4) 1:2

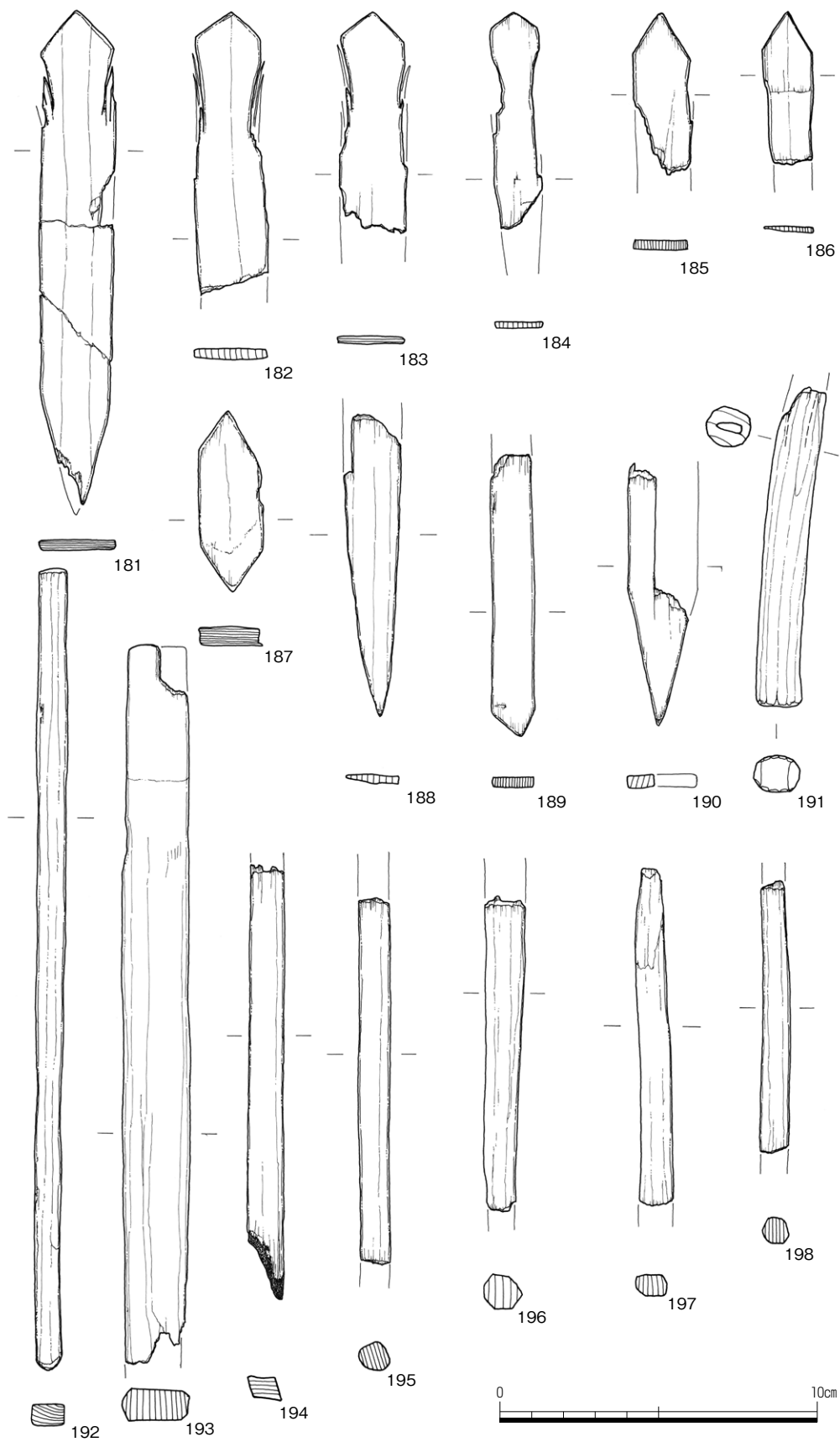


Fig. 172 SD4130上層出土木製品 (5) 1:2

B 井戸SE4740出土木製品 (Fig.173~179, Ph.141~145)

調査区北西部にある藤原京期から奈良・平安時代の井戸SE4740からも、まとまった量の木製品が出土した。SE4740は東西大溝SD4130南岸に近接して掘られた方形横板組の井戸で、井戸枠の大きさは一辺0.9mを測る。井戸枠は横板材12段分で、高さ約3mが残存していた。井戸掘方の埋土は、底から0.7~1mの高さまでは青灰色砂礫である。なお、掘方から木製品は出土していない。

井戸枠内の遺物の取り上げは、最下層、下層、中層、上層の4層に分けて行った。最下層は灰褐色砂礫で、土器、木製品、金属製品が出土した。下層は褐色砂質土で、多量の土器と木製品を含む。中層は砂交じりの褐色粘質土で、多量の土器と木製品が出土した。上層は青灰色から暗褐色を呈する粘質土で、土器や漆器が出土したが比較的遺物は少ない。

各層のおよその年代であるが、出土土器の分析から以下の様に考えられている(本書第VI章2参照)。掘方は飛鳥IV~Vに位置付けられ、藤原京期には既に掘削されていることが知られる。最下層は藤原京期から、奈良時代後半の平城宮土器Ⅲ~Ⅳまでにあたる。出土資料の一括性は低く、短期間で堆積した層とみなすことは難しい。下層は平城宮土器Ⅲ~Ⅴで奈良時代後半、中層は奈良時代末から長岡京期に比定される。上層は9世紀前半から10世紀前半までで、その頃にはほぼ埋没したとみられる。

これらSE4740の各層は、SD4130の各層とある程度の対応関係が認められる。SE4740最下層と下層は、SD4130中層との堆積が並行していたと理解でき、それらの堆積は奈良時代には完了していたとみられる。SE4740中層と上層は、SD4130上層にほぼ対応するものと考えられる。

また、別項で述べるように、最下層・下層からは無文銀銭1点と和同開珎26点がまとめて出土した。以下、層位ごとに報告する。

i 最下層出土木製品 (Fig.173, Ph.141)

刀子柄 (Fig.173-199・200) 2点出土した。199は残存長14.8cm、幅1.9cmで、厚さ1.3cmを測る。断面楕円状の心持材である。刃部装着部分の断面形態はレンズ状を呈している。樹種はシャシャンボ。200は残存長17.5cm、幅1.9cm、厚さ1.7cmを測る。断面円形の辺材。刃部の装着部分は長方形を呈する。柄の下端付近は握りやすいように削りが施される。樹種はケヤキ。

用途不明品 (Fig.173-201) 丸太状の部材であり、両端が加工されて尖っている。全長9.4cm、幅5.5cmの心持丸木である。樹種はアカガシ亜属。

ii 下層出土木製品 (Fig.173~175, Ph.141・142)

齋串 (Fig.173-202) 板材の上端を圭頭状につくり、上端近くの側面の左右に切り込みを入れるCⅢ式で、切り込みは各2箇所。完形品であり、全長は20.4cm、幅2.3cm、厚さ0.2cmを測る。ヒノキの板目材。

曲物底板 (Fig. 174・175-203~208) 203は釘結合曲物の底板。一部を欠損する。最大径19.5cm、厚さ0.7cmを測る。周囲に3箇所の釘穴があり、片面には刀子状の工具によるキズが確認できる。ヒノキの板目材。204は円形曲物底板の破片で、およそ半分が残存する。残存部に釘穴等は確認できない。復元径19.8cm、厚さ0.7cm。ヒノキの板目材。205は円形曲物底板。ほぼ完形で、最大径13.3cm、厚さ0.8cm。片面には削りの痕跡が明瞭に残る。側縁の釘穴等は確認できない。ヒノキ属の板目材。206は円形曲物底板の小片。径は20cm程度か。厚さは0.9cm。ヒノキ属の板目材。207は釘結合式曲物底板の破片。約半分が残存し、復元径は19.4cm、厚さ0.7~0.9cm。側縁に4箇所の釘穴、内面に側板のアタリが認められる。ヒノキ属の板目材。208は曲物底板の破片。一端が直線的に見えるが、円形曲物の端部が破損した可能性もある。残存長20.0cm、厚さ0.8cm。側縁の釘穴等は認められない。ヒノキ属の板目材。このほか、曲物柄杓残欠がある。

下駄 (Fig. 175-209) 下駄の破片。最大長9.0cm。中央付近に鼻緒を通す径9mmの穴を開ける。台表面には足指のアタリが残り、右足用と考えられる。歯の高さは4.0cm程度で、端部が丸く磨り減っている。樹種はケヤキ。

把手 (Fig. 175-210) 角棒状の不明品で、両端付近の側縁に窪みが認められる。この窪みを紐等による緊縛痕とみれば、曲物を固定する把手の可能性が考えられる。全長22.8cm、幅2.0cm、厚さ1.2cm。ヒノキの柁目材。

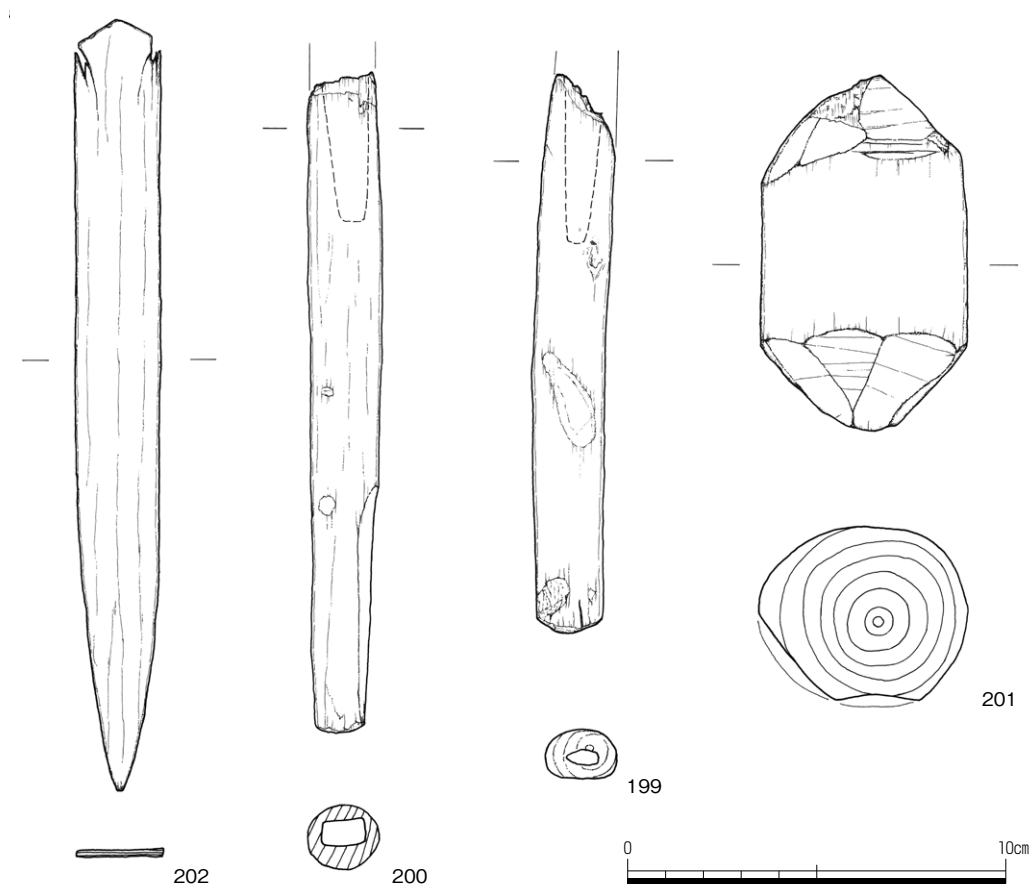


Fig. 173 SE4740最下層・下層出土木製品 1:2

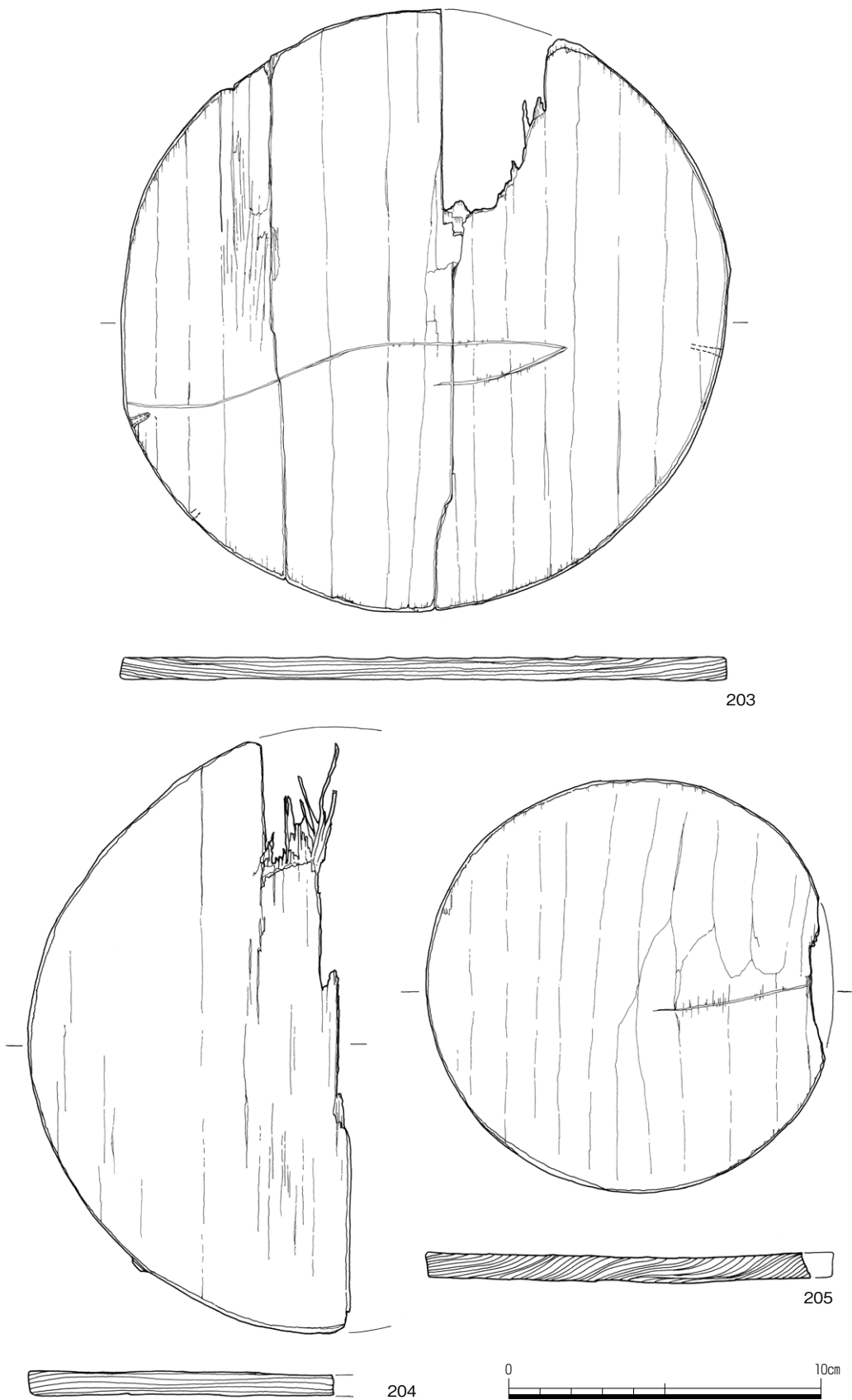


Fig. 174 SE4740下層出土木製品 (1) 1:2

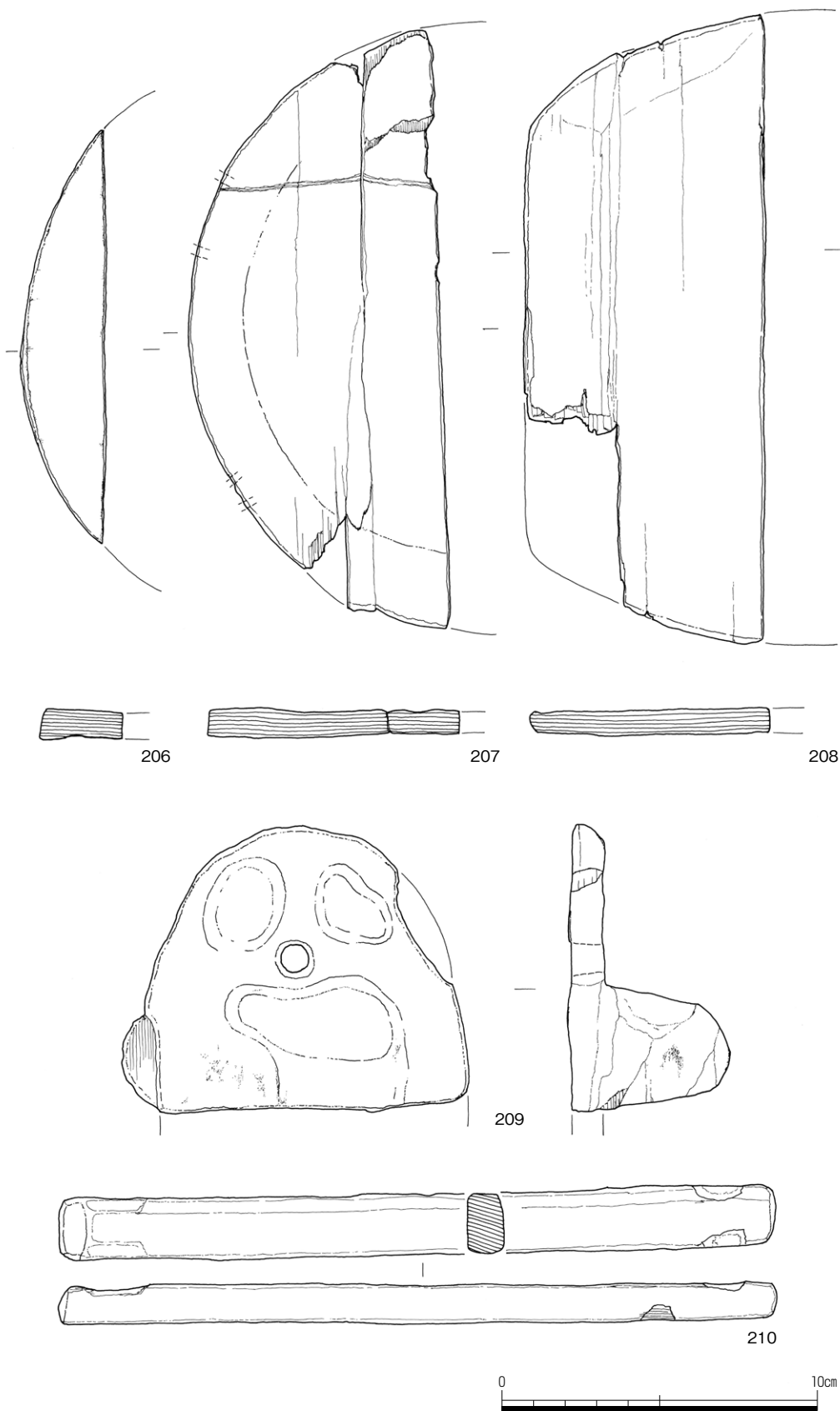


Fig. 175 SE4740下層出土木製品 (2) 1:2

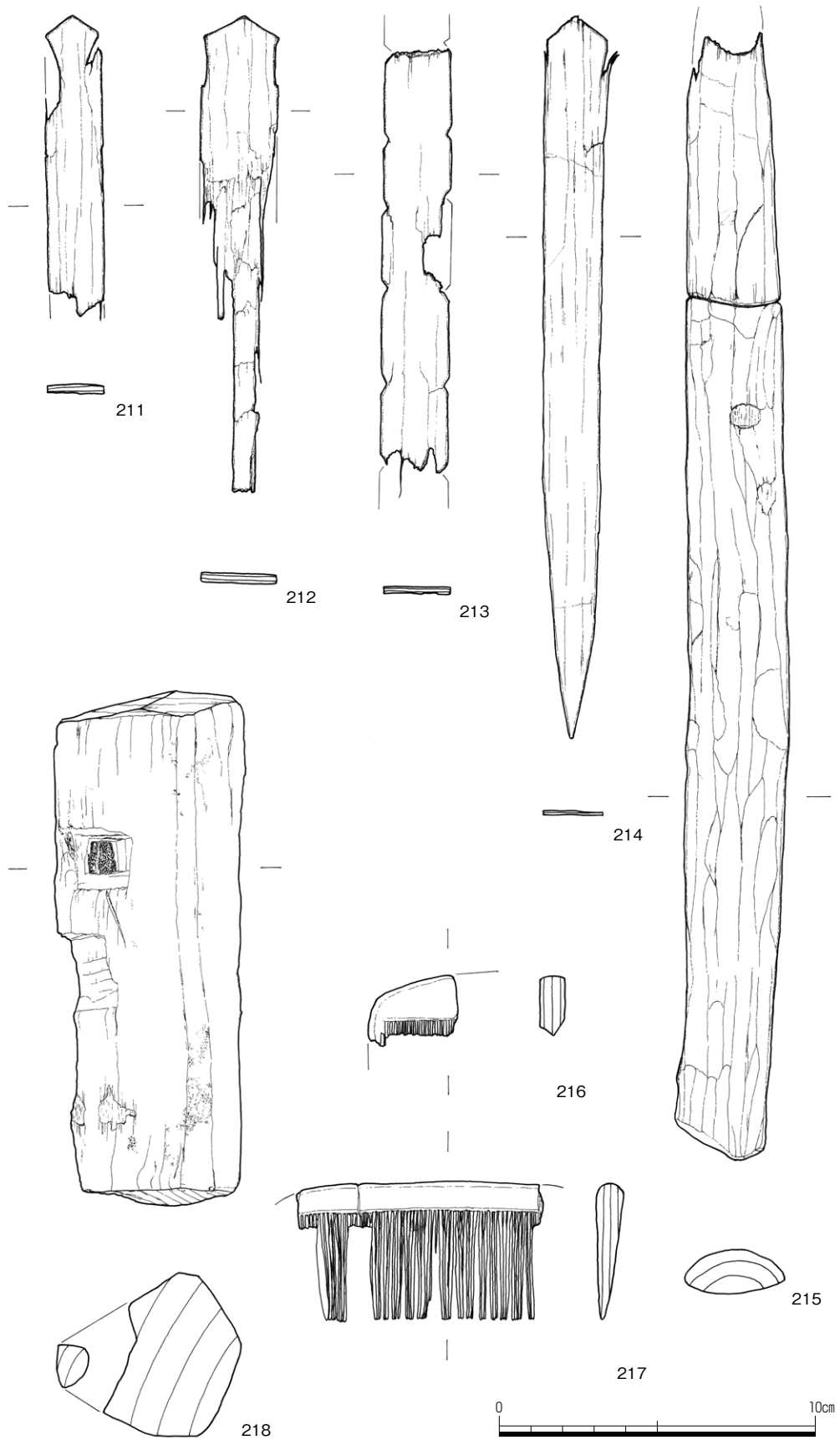


Fig. 176 SE4740中層出土木製品 1:2

iii 中層出土木製品 (Fig. 176, Ph. 143・144)

齋 串 (Fig. 176-211~214) 211はCⅢ式で、残存長9.5cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。片側面の切込みおよび下半部が欠損。ヒノキの板目材。212はCⅢ式で、残存長15.1cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmを測る。下部は破損。ヒノキの板目材。213はⅥ式で、残存長13.5cm、幅2.2cm、厚さ0.3cmを測る。ヒノキの板目材。214はCⅢ式で、全長22.9cm、幅1.9cm、厚さ0.1cmを測る。薄くて精巧なつくりである。ヒノキ属の板目材。

加工棒 (Fig. 176-215) 残存長35.6cm、幅3.3cm、厚さ1.4cmの加工棒である。先端状に加工され、外面は丁寧に削られている。ウツギ属の辺材。

横 櫛 (Fig. 176-216・217) 216は長方形で肩部に丸みをもたすAⅡ型式である。残存長2.8cm、残存幅2.4cm。イスノキの板目材。217は残存長7.8cm、幅4.4cmを測る。イスノキの板目材。

用途不明品 (Fig. 176-218) 残存長16.4cm、最大幅6.1cm、最大厚5.2cmを測る。片側の側面下半は削られ、ノミ痕がみられる。四角柱の一辺から一辺へ、方形の孔が「く」字状に穿たれている。用途は不明である。穿孔の外側になる材が薄く、重量には耐えないことから、比較的負荷の少ないものを孔に通して利用したと考えられる。樹種はアカガシ亜属。

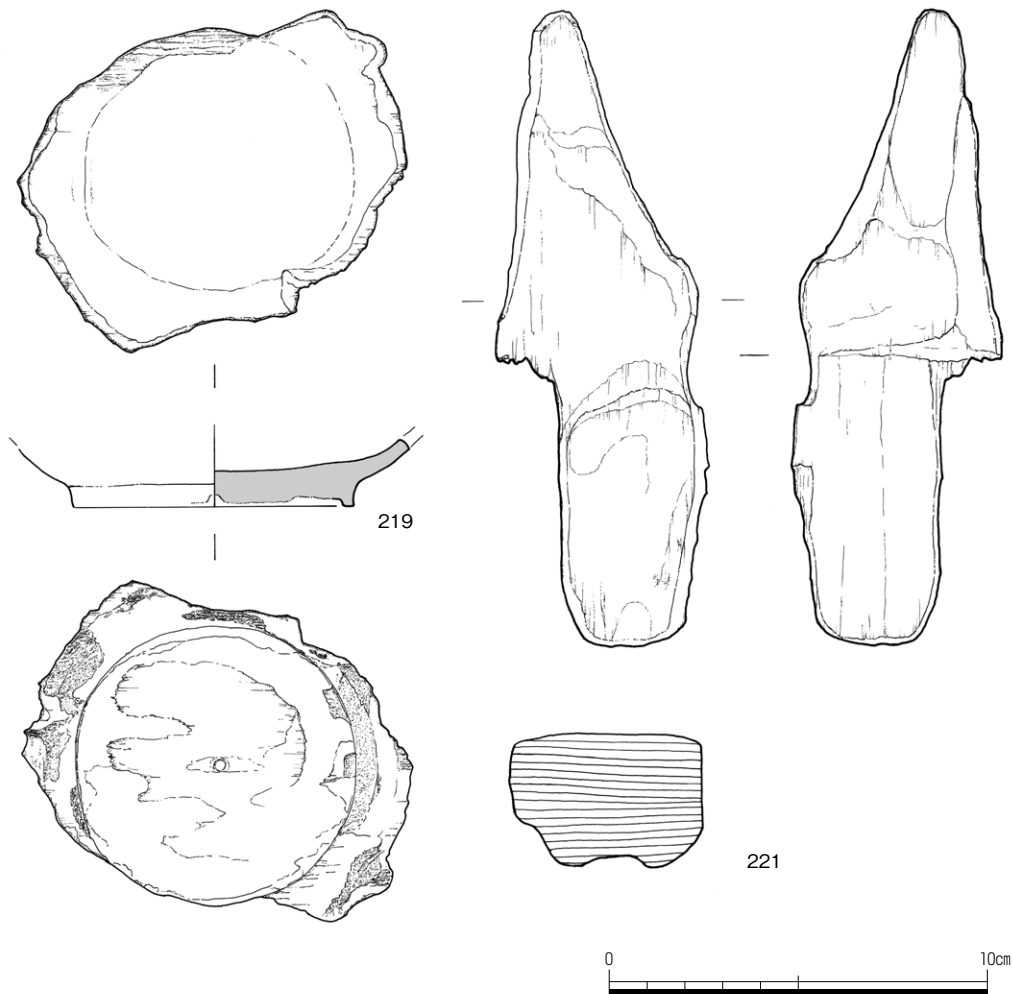


Fig. 177 SE4740上層出土木製品 (1) 1:2

iv 上層出土木製品 (Fig. 177~179, Ph. 143~145)

漆器椀 (Fig. 177-219) 高台付の椀で、底部付近のみが残存する。底部内面中央に径0.2cm程度の窪みをもつ。外面に黒漆を塗布する。樹種はケヤキ。

用途不明品 (Fig. 177・178-220・221) 221は残存長16.9cm、最大幅5.1cm、厚さ3.5cmを測る。全体に腐食が進む。樹種はスギ。用途は不明であるものの、井戸上層からの出土であることから、井戸枠の部材の可能性も考えられよう。220も221と同様の加工がなされた木製品である。残存長17.5cm、最大幅6.3cm、厚さ4.8cmを測る。樹種はスギ。

加工棒 (Fig. 179-222~232) 断面形態に違いがあり、222~227は方形で、228~232は円形である。222は残存長18.3cm、幅1.2cm、厚さ0.9cmを測り、両端を欠く。樹種はヒノキ。223は全長18.7cm、幅0.8cm、厚さ0.7cmの尖端棒で、屈曲箇所がある。樹種はコウヤマキ。224は残存長16.8cm、幅1.0cm、厚さ1.0cmで、一端を欠く。樹種はヒノキ属。225は全長15.2cm、幅0.8cm、厚さ0.6cmの尖端棒。樹種はコウヤマキ。226は残存長14.5cm、幅1.3cmの尖端棒。上端を欠損。樹種はヒノキ属。227は残存長14.5cm、幅1.6cmの角棒。両端を欠く。樹種はヒノキ属。228は残存長10.2cm、最大幅0.9cmの丸棒。両端を欠損。樹種はコウヤマキ。229は残存長10.2cm、幅1.2cmを測る棒状品。表面が面取りされており、断面が多角形を呈する。両端を欠く。樹種はモミ属。230は残存長16.0cm、最大幅1.8cmの丸棒。両端を欠く。231は残存長16.3cm、最大幅1.7cmの丸棒。下端を欠く。230・231は散孔材の心持材。232は残存長20.2cm、幅1.3cmの加工棒。弓なりに曲がり、両端を欠く。樹種はニヨウマツ類。

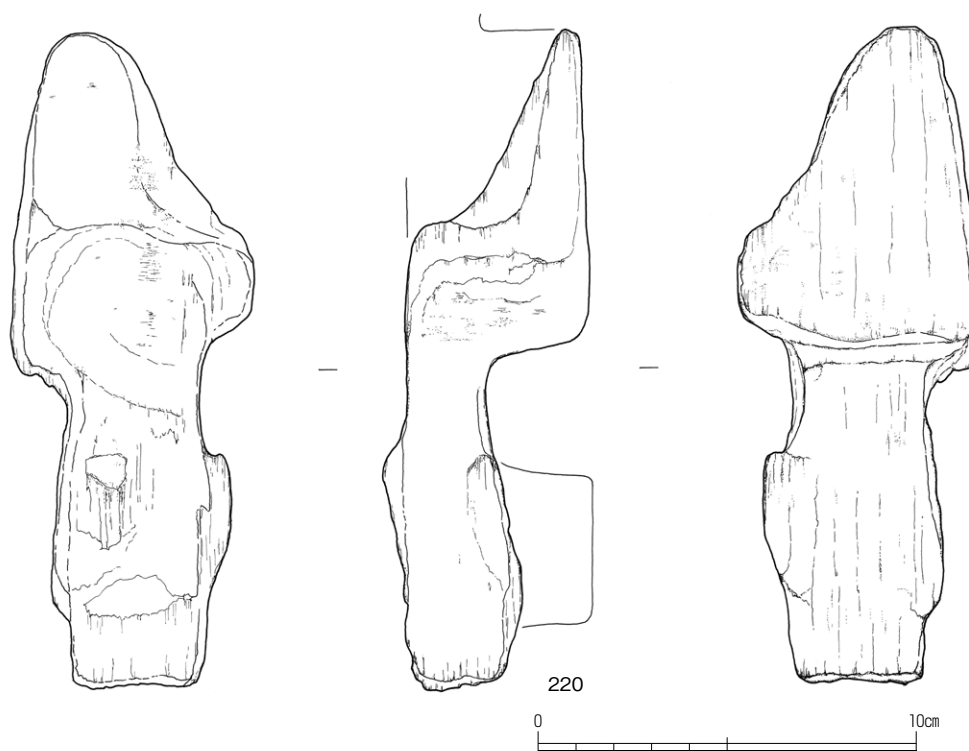


Fig. 178 SE4740上層出土木製品 (2) 1:2

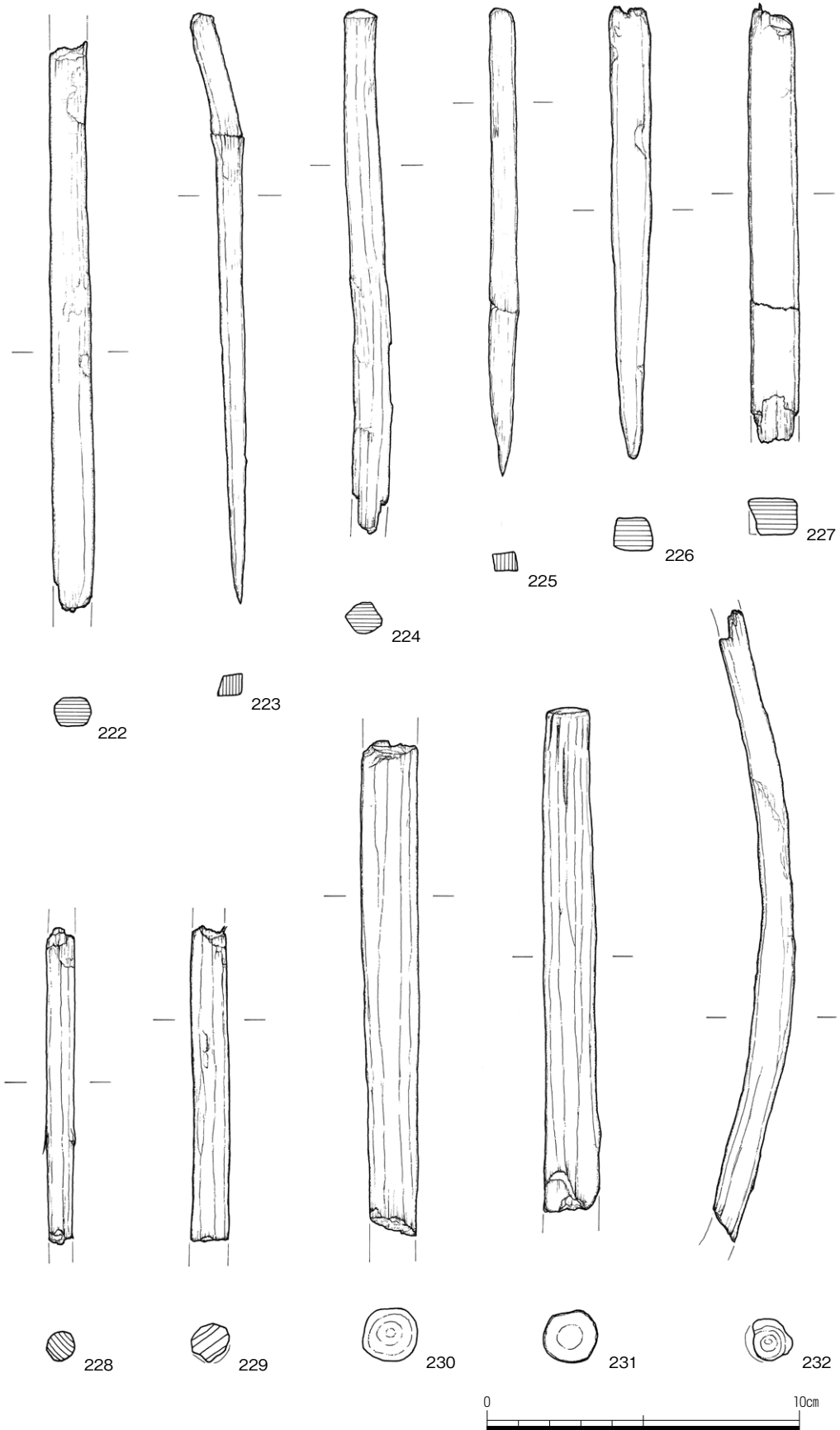


Fig. 179 SE4740上層出土木製品 (3) 1:2

C その他の遺構・包含層出土木製品

i 藤原京期の遺構出土木製品 (Fig. 180・181, Ph. 145)

藤原京期の掘立柱建物や土坑等からも、少量の木製品が出土した。ここでは図化が可能であったものについて述べる。

掘立柱建物SB4332出土木製品 (Fig. 180-233) SB4332は藤原京期前半(Ⅲ-B期)の東脇殿。南妻柱の掘方から出土した。断面多角形状に加工した辺材で、残存長2.7cm、幅3.2cm、厚さ2.7cmを測る。用途は不明であるが、同様の木製品がSB4332より全部で4点出土している。樹種はコウヤマキ。

掘立柱建物SB4737出土木製品 (Fig. 180-234) SB4737は正殿SB5000の東北方に位置する藤原京期前半(Ⅲ-B期)の建物。234は残存長13.1cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmを測る。先端を一側面から鋭く斜めに切断する。用途不明だが、籌木の可能性もある。ヒノキの板目材。

土坑SK4325出土木製品 (Fig. 181-235・236)

SK4325は、藤原京期前半(Ⅲ-B期)から後半(Ⅲ-C期)への改作の際のゴミ捨て穴とされる土坑。235・236は用途不明の木製品。235は残存長25.4cm、幅3.3cm、厚さ1.2cmの板目材である。両端を欠く。中ほどに楕円形に穴が開く。樹種はコウヤマキ。236は残存長24.4cm、幅2.5cm、厚さ1.1cmの板目材。用途は不明であるが、先端は面取りしている。もう一方の端部は破損している。樹種はヒノキ。

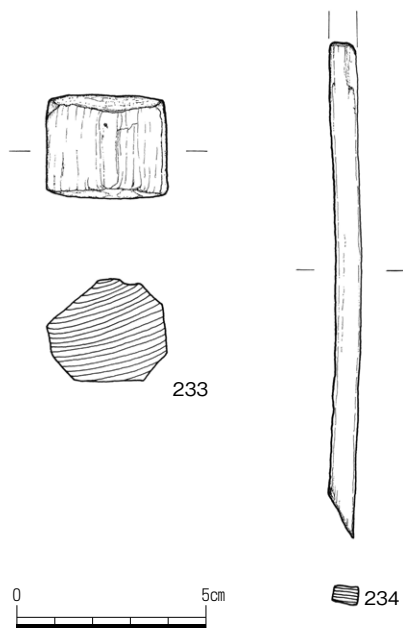


Fig. 180 SB4332・4737出土木製品 1:2

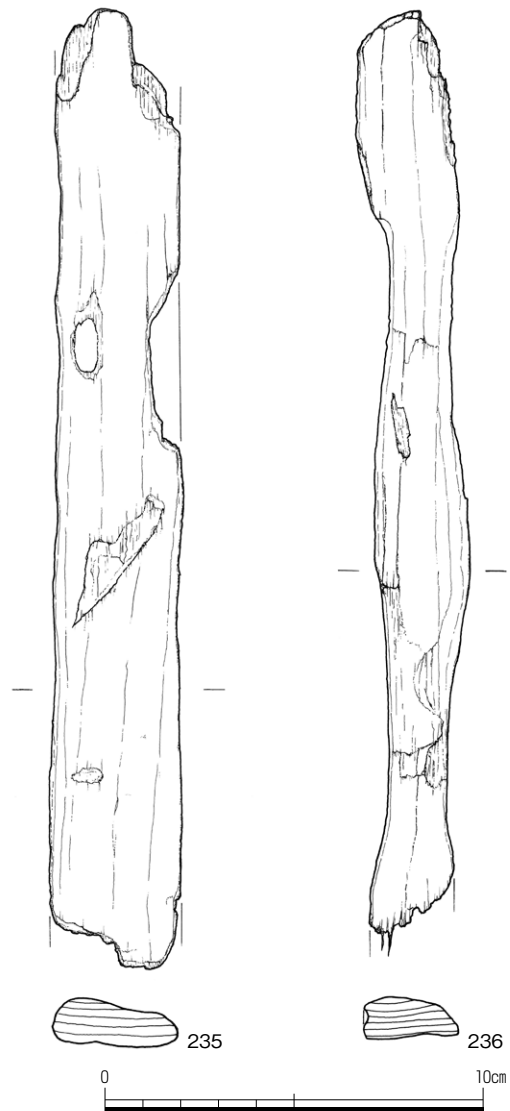


Fig. 181 SK4325出土木製品 1:2

ii 中世の井戸および包含層出土木製品 (Fig. 182~186, Ph. 145~147)

調査区全域に所在する中世の井戸や包含層からも、多数の木製品が出土した。ここでは比較的まとまった資料を出土した13世紀末~14世紀の井戸SE4790出土のものについてまず述べ、その後は器種ごとに記述する。

a SE4790出土木製品 (Fig. 182・183, Ph. 145)

箸 (Fig. 183-237~251) 棒状製品で、両端または一端を細く加工する。いずれも多角形状に丁寧に面取りしている。断面形はやや扁平な形態が多く、最大幅0.6cm、最大厚0.5cmほどのものが多い。樹種はヒノキが多い。法量等はTab. 6に示した。

加工棒 (Fig. 183-252・253) 252は残存長11.2cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmの先端棒。やや太いが、箸の可能性もある。樹種はヒノキ属。253は両端を欠損している。残存長10.0cm、幅0.9cm、厚さ0.8cmを測る。樹種はコウヤマキ。

用途不明品 (Fig. 183-254~256) 254は板状の部材。横方向の盛り上がりがあり、刃物による加工痕とみられる。残存長7.7cm、残存幅2.5cm、厚さ2.5cm。ムクノキの辺材。255は全面に加工痕がみられ、断面形態は台形を呈する。一端を欠損している。残存長は15.4cm、幅3.4cm、厚さ3.1cm。ムクノキの板目材。256は柄状の部材。断面形は隅丸方形で、一側面を山形に削り込み、突起を作り出す。残存長16.6cm、幅3.8cm、厚さ2.4cm。アカガシ亜属の柁目材。261・262と形態が類似する。

この他、黒漆の地に朱漆の印判の花文を内外面にあしらう漆絵椀の破片が出土した (Fig. 182)。蛍光X線分析により、朱色部分で水銀を検出した¹。

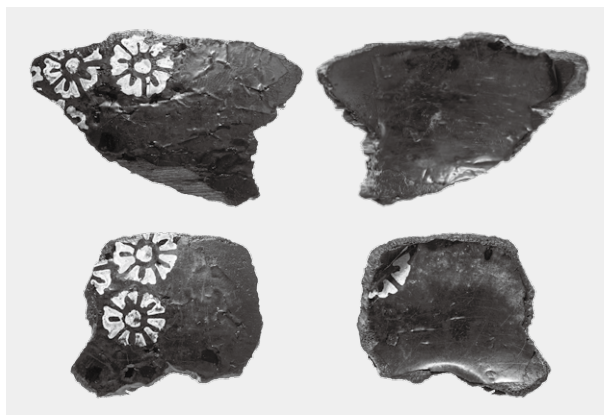


Fig. 182 SE4790出土漆器

Tab. 6 SE4790出土箸一覧 (単位: cm)

番号	残存長	最大幅	最大厚	樹種	備	考
237	21.2	0.6	0.5	ヒノキ属	両端先細り。	
238	12.3	0.7	0.4	ヒノキ属	扁平な円柱状に加工。先端状。	
239	11.8	0.6	0.6	ヒノキ属	丁寧に面取りされている。	
240	5.8	0.5	0.4	ヒノキ	断面五角形だが、隅が丸く円形に近い。	
241	16.1	0.6	0.5	サワラ	両端先細り。	
242	9.9	0.5	0.5	ヒノキ	先端状。	
243	13.6	0.6	0.5	ヒノキ	断面五角形に面取り。先端状。	
244	7.4	0.5	0.4	ヒノキ	先端状。	
245	10.6	0.6	0.4	ヒノキ科	先端状。	
246	20.4	0.6	0.4	ヒノキ	両端先細り。	
247	15.5	0.6	0.6	ヒノキ	断面六角形。先細りに加工。途中屈曲。	
248	12.9	0.5	0.4	ヒノキ	断面隅丸方形。先細りに加工。	
249	15.0	0.7	0.3	ヒノキ	断面は扁平な五角形。先細りに加工。	
250	7.2	0.6	0.5	ヒノキ属	断面六角形。	
251	7.2	0.6	0.5	コウヤマキ	断面六角形に面取り。	

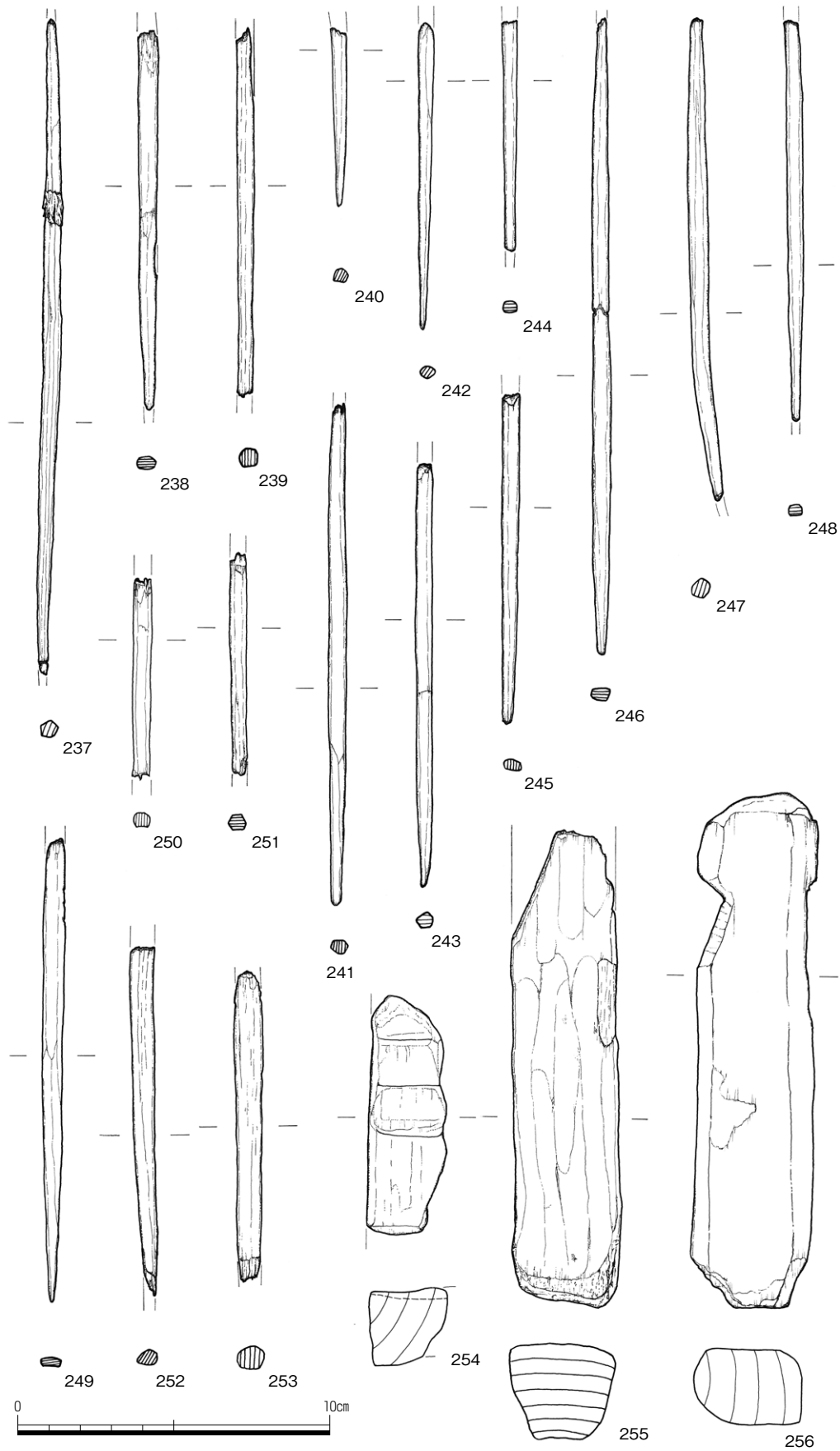


Fig. 183 SE4790出土木製品 1:2

b その他の井戸・包含層出土木製品 (Fig. 184~186, Ph. 145~147)

箸 (Fig. 184-257) 残存長4.0cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmの箸で、両端が欠損している。断面が五角形になるよう面取りされている。11世紀代の井戸SE4782より出土。樹種はヒノキ属。

横 櫛 (Fig. 184-258) 残存長9.0cmの櫛。歯先は欠損し、両面から挽きだした歯の根元部分(挽実)と棟だけが残る。イスノキの板目材。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4474より出土。

漆器椀 (Fig. 184-259) 赤漆が塗られた椀で、底部径5.8cm、残存高4.0cm、残存率は約50%である。高台の接地面には漆を塗っていない。体部には、黒色の図柄が描きこまれている。おそらく3箇所と同様の図柄が描かれていたであろう。樹種はトチノキ。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4463から出土。蛍光X線分析により赤色部分で鉄を検出した²。

割 物 (Fig. 184-260) 復元口径14.5cm、残存高8.3cmの割物。外面にはノミ痕が明瞭に残る。小型の臼か鉢のような容器であったと推測できる。下半部を欠くため、脚部が続くかどうかは不明。井戸から出土しているので釣瓶とも考えられるが、器高が低すぎるきらいがある。ニヨウマツ類の心持材を削り抜く。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4471より出土。

杭 (Fig. 185-265) 包含層より出土した杭。先端状にする加工痕が明瞭に確認できる。上端を欠く。断面は楕円形。残存長35.4cm、直径5.7cmである。トネリコ属の心持材。

用途不明品 (Fig. 185・186-261~264・266・267) 261・262は柄状の部材。SE4790出土の256と形態がやや類似している。261は断面楕円形で、一端に鎌柄のすべり止めに似た山形突起を作り出す。一端を欠くが、その破損部に鉄釘を2cm程度打ち込んでいる。残存長23.8cm、柄の幅2.2cm、厚さ1.7cm。樹種はクリ。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4467から出土。262も断面形は楕円形で、一端に鎌柄の滑り止めに似た山形突起を作り出す。残存長23.6cm、幅2.8cm、厚さ2.0cm。下半部を欠く。コナラ亜属の心持材。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4473から出土。263は残存長9.8cm、幅6.5cm、厚さ4.0cmの木製品。用途は不明であるが、部材の一部かもしれない。樹種はヒノキ科。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4462出土。264は断面が楕円形を呈する杭状の木製品である。残存長13.2cm、幅2.2cm、厚さ1.2cmを測る。クリの板目

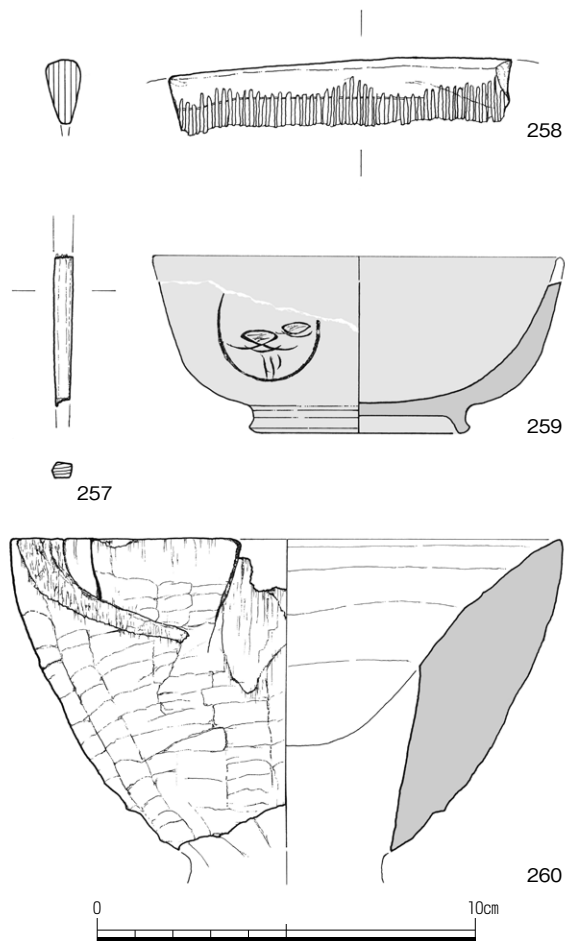


Fig. 184 中世井戸出土木製品 (1) 1:2

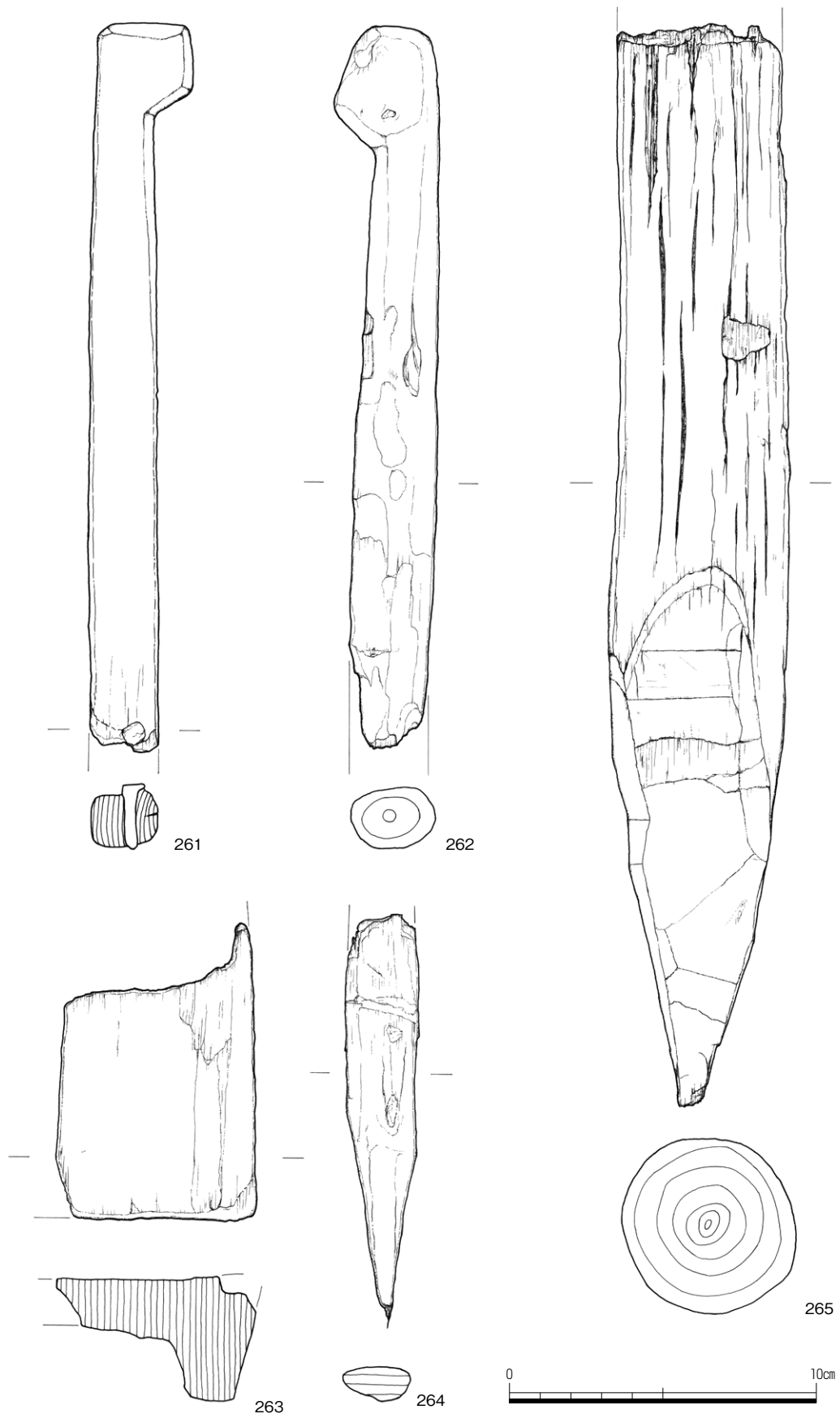


Fig. 185 中世井戸(2)・包含層出土木製品 1:2

材。中世の包含層より出土。266は板状の木製品。残存長30.6cm、幅2.7cm、厚さ0.6cm。双孔が2箇所に見られる。中央付近には丸い断面形態をした痕跡が2箇所に残る。ケビキのような痕跡が一方の面に確認できることから、曲物の底板を転用している可能性がある。用途は不明。ヒノキ科の板目材。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4461より出土。267は残存長30.6cm、幅1.7cm、厚さ1.1cmの棒状木製品。一端は斜めに切断されている。もう一端は欠損しているが、こちらも斜めに切りこんだように加工されていたと考えられる。スギの板目材。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4469出土。

D 中世井戸内出土曲物

ここで報告するのは、SE4177の出土例を除き、調査区内の井戸で井戸枠として使用した曲物である。曲物は可能な限り取り上げたが、いずれも遺存状態が悪く、図化できなかったものや写真撮影が不可能であったものも多い。

SE4177出土曲物 (Fig. 187・Ph. 148-268) 中世の石組井戸SE4177から出土した釘結合曲物で、木釘は箍と側板をまとめて底板に固定するように6箇所打ち込まれている。箍の部分は1列内4段綴じである。底板の内面には削りの痕跡が明瞭に認められる。径14.4cm、高さ11.6cm。樹種は底板がスギ、側板と箍、木釘がヒノキ科である。

SE4468出土曲物 (Fig. 187・Ph. 148-269・270) 平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4468は、井戸底に井戸枠として4点の円形曲物を重ねていた (Fig. 65)。ここでは、そのうち2点を図示した。³269は上から3段目に使われた曲物。底板はない。本体は樺皮の1列内4段綴じ。本体の口径は51.3cm、高さ23.0cm。本体の外面には斜め方向、内面には縦方向のケビキが残る。樹種はヒノキ。270は上から2段目に使われた曲物。底板はない。本体は樺皮の1列内6段綴じ。箍は木釘で固定する。内面には縦方向のケビキが残る。本体の口径は66.0cm、高さ51.6cm。箍の口径は66.6cm。樹種はヒノキ科。

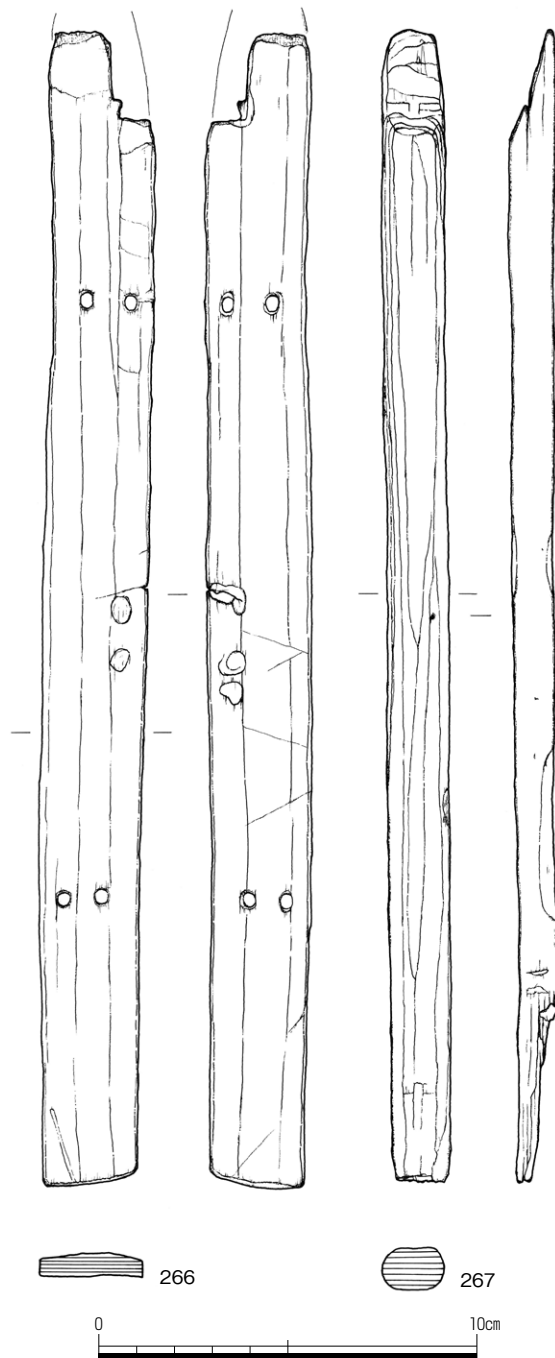


Fig. 186 中世井戸出土木製品 (3) 1:2

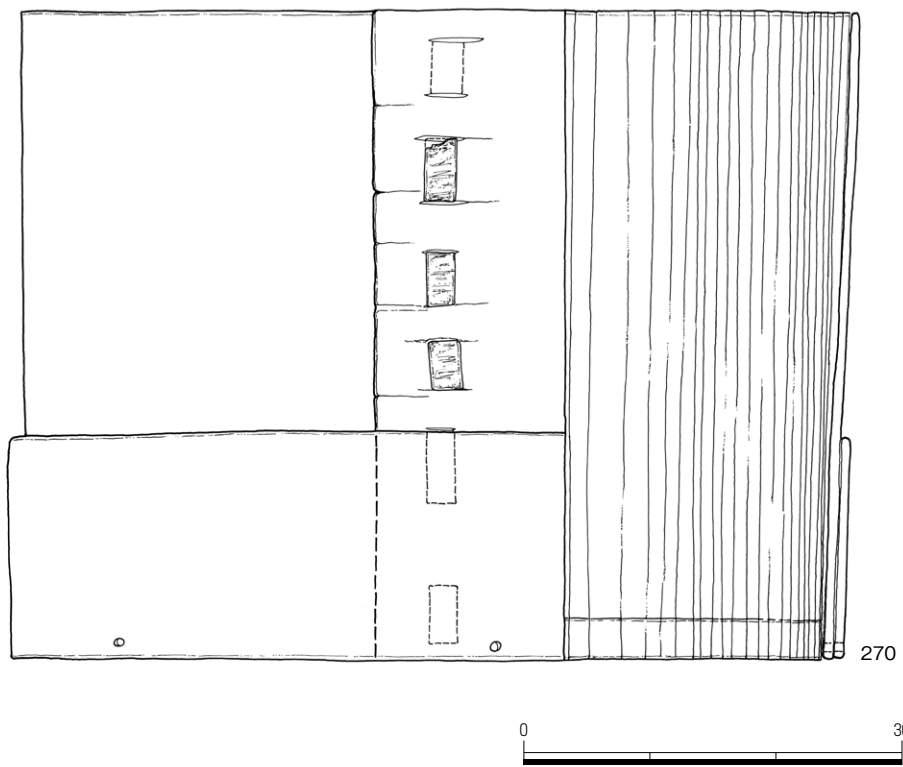
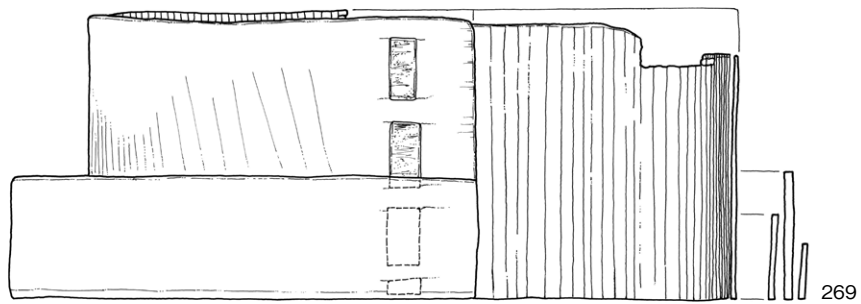
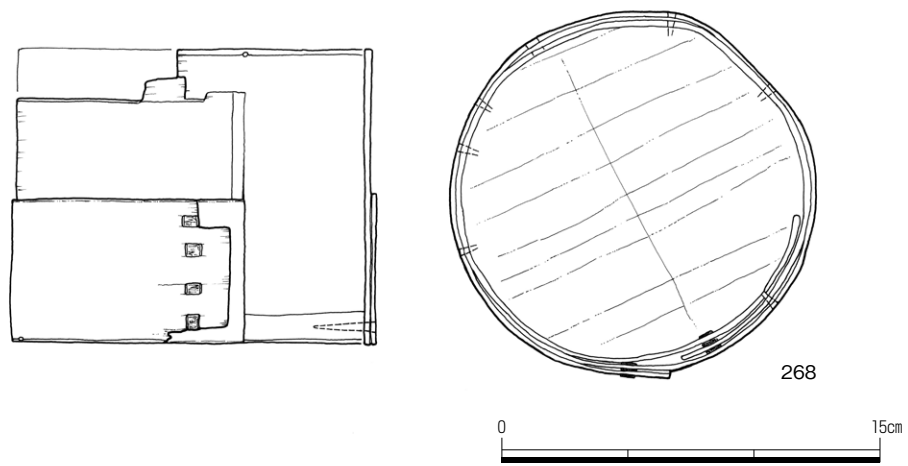


Fig. 187 SE4177・4468出土曲物 1:6 (268のみ 1:3)

SE5001出土曲物 (Fig. 188-271) 14世紀の井戸SE5001から出土した曲物。本体は樺皮の1列内8段綴じ。箍は1列内4段綴じ。本体と箍は木釘で固定する。口縁部付近に穿孔を施す。本体の内面には縦方向のケビキが残る。本体の口径は48.8cm、高さ23.5cm。箍の口径は50.4cm。樹種はヒノキ科。

SE4464出土曲物 (Fig. 188-272・273) 平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4464は上下二段、計3点の曲物を井戸枠に使用していた(別図2)。272は上段の下に使用されたもの。樺皮の1列内4段綴じで、口径52.0cm、高さ23.0cm。外面には斜め方向、内面には縦方向のケビキが認められる。樹種はヒノキ科。273は上段の上に使用されたもの。本体は樺皮の1列内5段綴じで、口縁部に穿孔を施す。内面には縦方向のケビキが認められる。口径54.0cm、高さ23.6cm。箍は1列上内下外3段綴じ。口径54.8cm。樹種はヒノキ科。

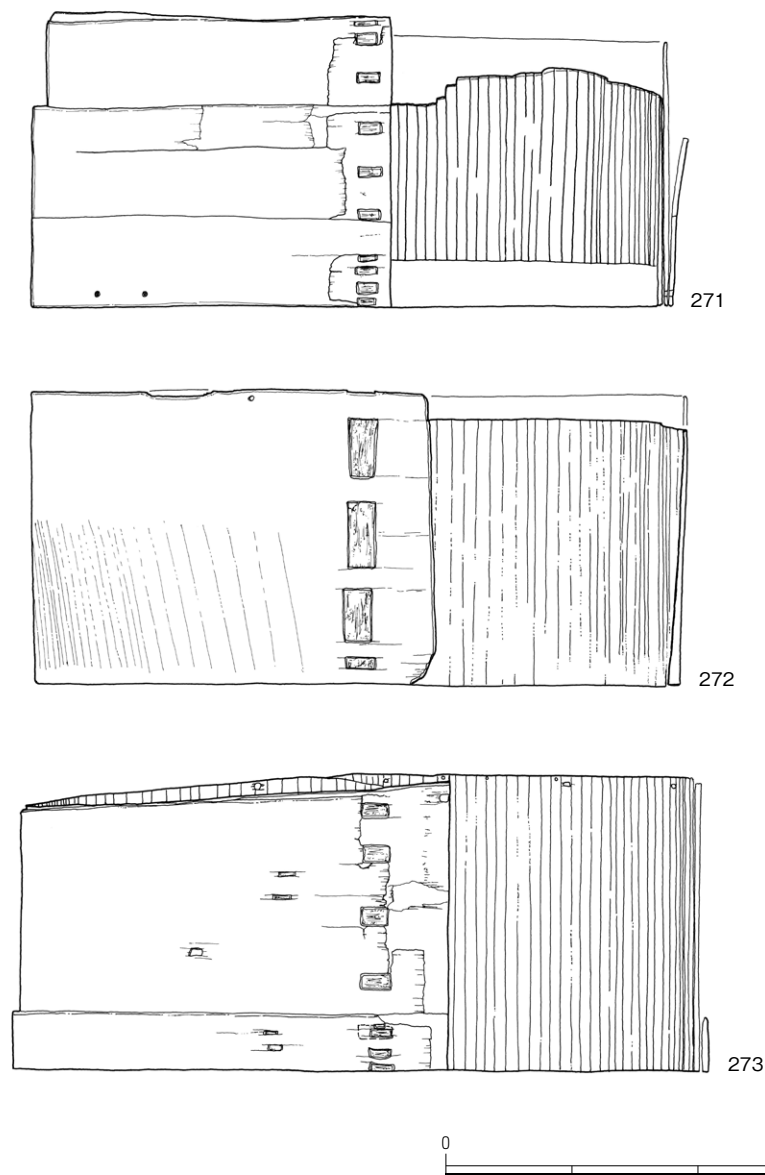


Fig. 188 SE5001・4464出土曲物 1:6

E 建築部材・井戸枠

i 建築部材

建築部材は、掘立柱建物や掘立柱塀の柱穴から柱根11点と礎板2点が出土している。全体として柱根や礎板が遺存している柱穴は少なく、部材の遺存状況もあまり良くない。ここでは数少ない遺存状況の良い部材を中心に、遺構ごとに報告する。

a 藤原京期の掘立柱柱穴から出土した部材

SA4730出土部材 (Fig. 191-4) Ⅲ-B期の南北塀SA4730の南端から3基目の柱穴から、柱根が出土した。直径22.5cmの円柱で、長さ81.5cmが遺存する。側面の下部に幅15.0cm、高さ15.0cmの窪みがあり、えつり穴の痕跡とみられる (Fig. 189)。腐食により側面には加工痕跡は残らないが、北東側は比較的当初に近い面が残る。底面は平坦で、ノコとみられる加工痕が残る。樹種はコウヤマキ。

SB5000出土部材 (Fig. 191-1～3) Ⅲ-B・C期の正殿SB5000からは柱根3点、礎板1点が出土した。礎板と、残りの良い柱根2点を報告する。1はSB5000の「ホ二」の柱穴から出土した礎板。上面33.0×26.0cm、下面38.3×34.3cmの方形平面、厚さ9.8cmで側面は台形を呈する厚板材である。板目材の木表を上面とする。柱のアタリ痕跡はみられない。下面は割れ肌の部分とチョウナ痕跡が残る部分があり、板を割る際に出っ張って残った部分のみチョウナはつりしたものとみられる。両側面にノタを残す。側面と下面がなす鋭角をヨキまたはチョウナではつった痕跡が残る。2はSB5000の「ホ三」の柱穴から出土した柱根。直径34.2cmの芯持ち材で、長さ64.6cmが遺存する。南面は腐食し欠損するが、北面の下部は比較的腐食が少なく、加工面に近い平らな面が残る。丸太材を多角形断面になるように表面を加工していたとみられる。底面は柱の垂直方向に対しやや角度をつけて切断している。3はSB5000「ホ六」の柱穴から出土した柱根。直径35.1cmの心持丸太材で、長さ64.2cmが遺存する。根元の10cmほど当初の材表面が残るが、腐食のため加工痕跡はみられない。柱根はいずれも底面に加工痕跡はみられないが比較的平滑で、ノコにより切断したとみられる。1～3の3点とも、樹種はコウヤマキ。



Fig. 189 SA4730出土柱根のえつり穴



Fig. 190 SB4445出土柱根の底面加工痕跡

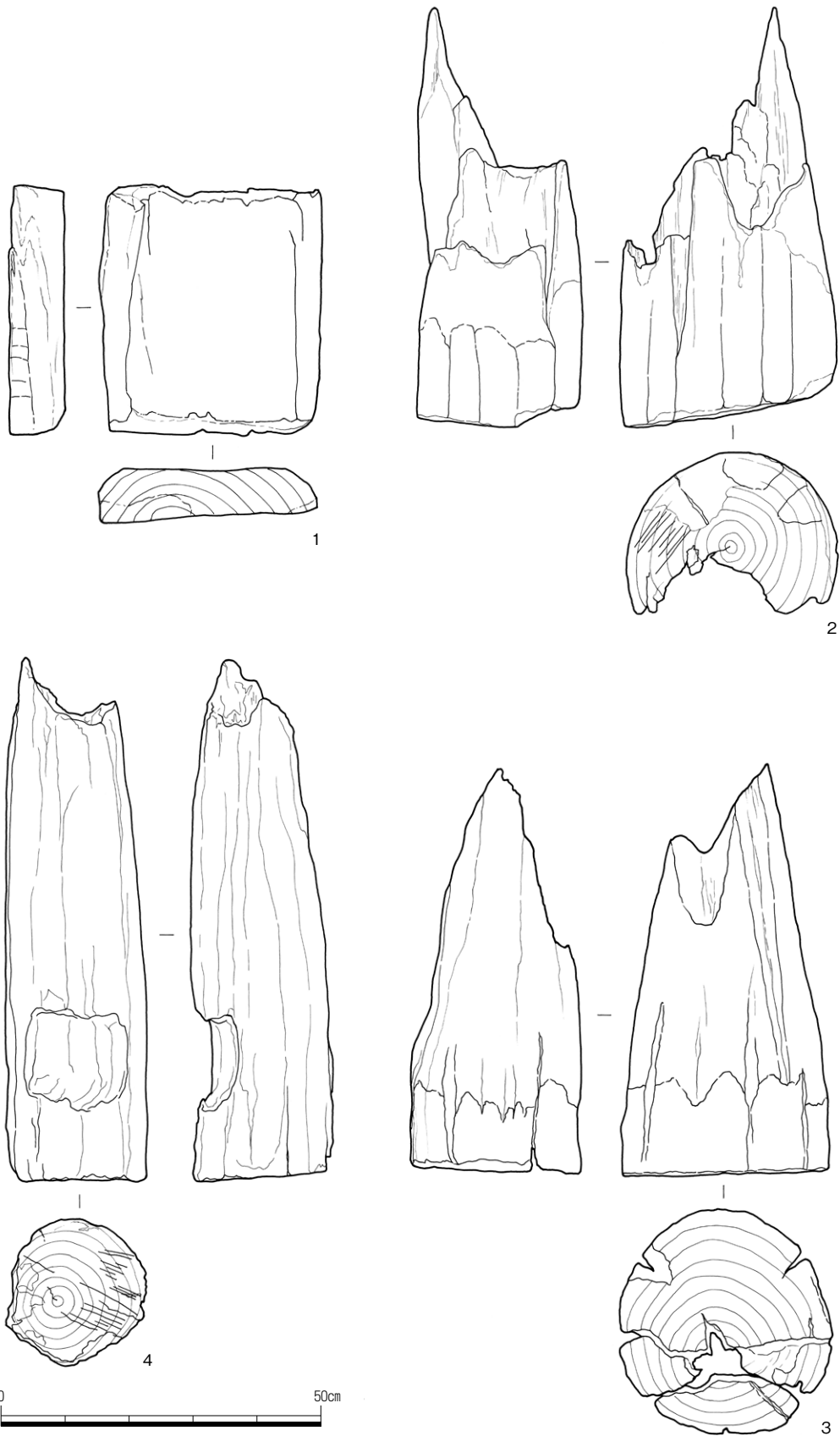


Fig. 191 SA4730・SB5000出土部材 1:10

SB4332出土部材 (Fig. 192-5) Ⅲ-B期の建物SB4332の「トー」の柱穴から出土した礎板。22.8×19.1cmの方形平面、厚さ10.4cmの厚板材である。大径材を年輪に沿って割った材とみられ、側面は柁目を呈する。上面と側面には部分的にチョウナ痕跡がみられ、割れ肌の凸部分のみチョウナではつっていたとみられる。木口にはノコの痕跡が重複して残っており、ノコを入れる方向を何度か変えながら切断したものであろう。樹種はヒノキ。

SB4330出土部材 (Fig. 192-6) Ⅲ-C期の建物SB4330の「ヘー」の柱穴から出土した柱根。直径30.0cmの円柱で、長さ48.0cmが遺存する。芯持ちではあるが芯は隅に寄り、丸太材を4つ割りした木取りとみられる。側面に加工面とみられる面が残る個所があり、曲面と割った面の間の角を面取りしたものと考えられる。底面には凹凸があり、明瞭ではないがヨキの痕跡とみられる。樹種はコウヤマキ。

SB4331出土部材 (Fig. 192-7) Ⅲ-C期の建物SB4331の「チー」の柱穴から出土した柱根。直径32.5cmの丸太を半割にした芯去り材で、長さ62.5cmが遺存する。不明瞭ながらも曲面には面取りの痕跡が残る。底面にはヨキの痕跡がみられる。樹種はコウヤマキ。

SB4738出土部材 (Fig. 192-8) Ⅲ-C期の建物SB4738の「ロ六」の柱穴から出土した柱根。腐食が激しく材径も当初より小さくなっているとみられるが、最大径16.0cm、長さ29.0cmが遺存する。心去材で、木口の年輪からは、丸太を4つ割りした木取りとみられる。樹種はコウヤマキ。

b 奈良時代以降の掘立柱柱穴から出土した部材

SB5050出土部材 (Fig. 192-9) 調査区北西部にあるⅣ期の総柱建物SB5050では、2基の柱穴に柱根が遺存していた。いずれも腐食のため粘土化した部分が多く、木質は小片となって出土している。9はこのうち「ハー」の柱穴から出土した柱根で、3材に分かれて出土した。いずれも腐食が激しく互いに接合する箇所もないが、出土状況とあわせると、直径約40cmの円柱に復元できる。樹種はコウヤマキ。

SB4445出土部材 (Fig. 192-10) Ⅵ期の建物集中区のうちB区に位置するSB4445の南西隅の柱穴から出土した柱根。直径15.4cmの円柱で、長さ29.2cmが遺存する。心去材で、大径材を4つ割らないしは6つ割りした木取りとみられる。側面にはチョウナ痕跡が残り、チョウナで円柱に加工したとみられる。底面にもチョウナとみられる痕跡が不明瞭ながらも残る (Fig. 190)。樹種はコウヤマキ。

ii 井戸枠

木製の井戸枠が出土した井戸は、Ⅲ期のSE4335、Ⅲ期からⅣ期のSE4740、Ⅴ期のSE4765、Ⅵ期のSE4467・4474・5940の合計6基である。このうちSE4740は方形横板組井戸で、これを除く5基は方形または円形の縦板組井戸である。ここでは調査区内最大規模であり、かつ唯一の方形横板組井戸であるSE4740の井戸枠部材について報告する。なお、井戸枠として使用された曲物については本節「D 中世井戸出土曲物」で報告している。

SE4740は一辺0.9m、深さ3.6mの方形横板組井戸である。井戸枠は組まれた状態で出土した。隅柱を井戸掘方底に立て、底から0.5～0.6mの高さで背違いに柄穴をあけ、横棧を柄差しして隅柱を固定する。横板は隅柱の外側にあて、粘土で押さえる。井戸枠として不要な仕口が隅柱

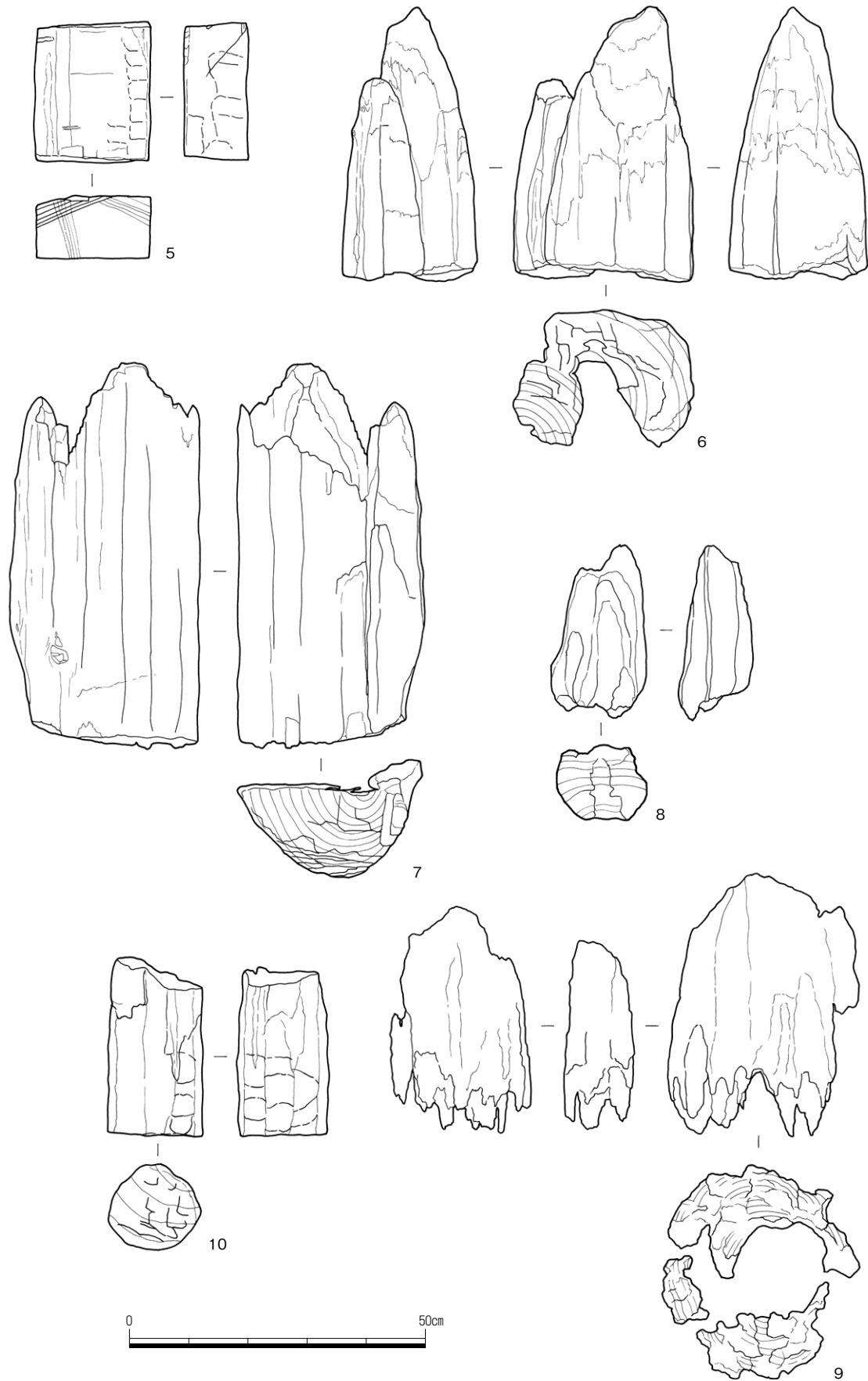


Fig. 192 SB4330・4331・4332・4445・4738・5050出土部材 1:10

4点、横棧1点、横板3点認められ、建築部材などを転用したとみられる。以下、部材の種類ごとに詳述する。

隅柱 (Fig. 196・197) 井戸枠の四隅に立てた柱。角材で底の方が残りは良く、上端は腐食し細くなる。部材には柄穴を中心とした仕口が多数残されており、その用途と形状から3種類に分類できる。隅柱に横棧を柄差しするための柄穴を「新柄穴」とする。新柄穴は各部材に2箇所、背違いに設けられており、東西方向のものが南北方向のものより一段高い位置にある。この他に井戸SE4740の組立には関係ない仕口が各部材に2～6箇所みられる。その寸法と形状から、6cm前後で方形の小柄穴を「旧柄穴」、長さ12～3cmの窪みを「旧仕口」とする。樹種は、11～14の4点ともコウヤマキ。

北西隅柱 (Fig. 196-11) は南北方向15.3cm×東西方向13.2cm、長さ317.1cmが残る心持ちの角材。新柄穴は、南面が底から56.0cmの位置に幅6.4cm×高さ11.4cm、東面が底から71.5cmの位置に幅6.1cm×高さ8.7cmであけられており、その周囲には横棧断面の圧痕がみられる (Fig. 193)。旧柄穴は北面に2箇所ある。

北東隅柱 (Fig. 196-12) は南北方向17.5cm×東西方向14.5cm、長さ317.8cmが残る心去りの角材。新柄穴は、南面が底から57.2cmの位置に幅6.2cm×高さ10cm、西面が底から69.8cmの位置に幅5.5cm×高さ12.0cmであけられており、その周囲には横棧断面の圧痕がみられる。旧柄穴は、西面に3箇所、北面に2箇所ある。うち西面の2箇所は穴が北面にかかる (Fig. 194)。先端部分の西面から北面にかけて旧仕口が幅5.7cm×高さ13.0cm×深さ4.2cm (以下、●×●×●cmとする。) で残る。

南西隅柱 (Fig. 197-13) は南北方向14.9cm×東西方向17.6cm、長さ311.0cmが残る心持ちの角材。新柄穴は、北面が底から54.7cmの位置に幅7.4cm×高さ12.5cm、西面が底から68.6cmの位置に幅7.2cm×高さ11.4cmであけられており、その周囲には横棧断面の圧痕がみられる。旧柄穴は、西面に3箇所、北面に2箇所ある。

南東隅柱 (Fig. 197-14) は東西・南北方向とも16.0cm、長さ316.5cmが残る心持ちの角材。新柄穴は、北面が底から56cmの位置に幅7.0cm×高さ12.0cm、西面が底から70.0cmの位置に幅7.6cm×高さ12.0cmであけられており、北面新柄穴の周囲には横棧断面の圧痕がみられる。旧柄穴は、南面・東面に各2箇所ある。先端部分の南面から東面にかけて旧仕口が9.5×11.5×10.0cmで残る (Fig. 195)。

新柄穴はいずれもノミ痕跡が明瞭に残るが、それ以外の柄穴や仕口に加工痕跡はほぼみられない。新柄穴の高さを南北方向、東西方向ごとに比較すると、南北方向上端の差が0.8cmと最も少ない。東西方向も上端の方が差が少なく2.0cmである。柄穴そのものの高さが2cm以上異なる



Fig. 193 北西隅柱新柄穴と横棧圧痕



Fig. 194 北東隅柱旧柄穴



Fig. 195 南東隅柱旧仕口

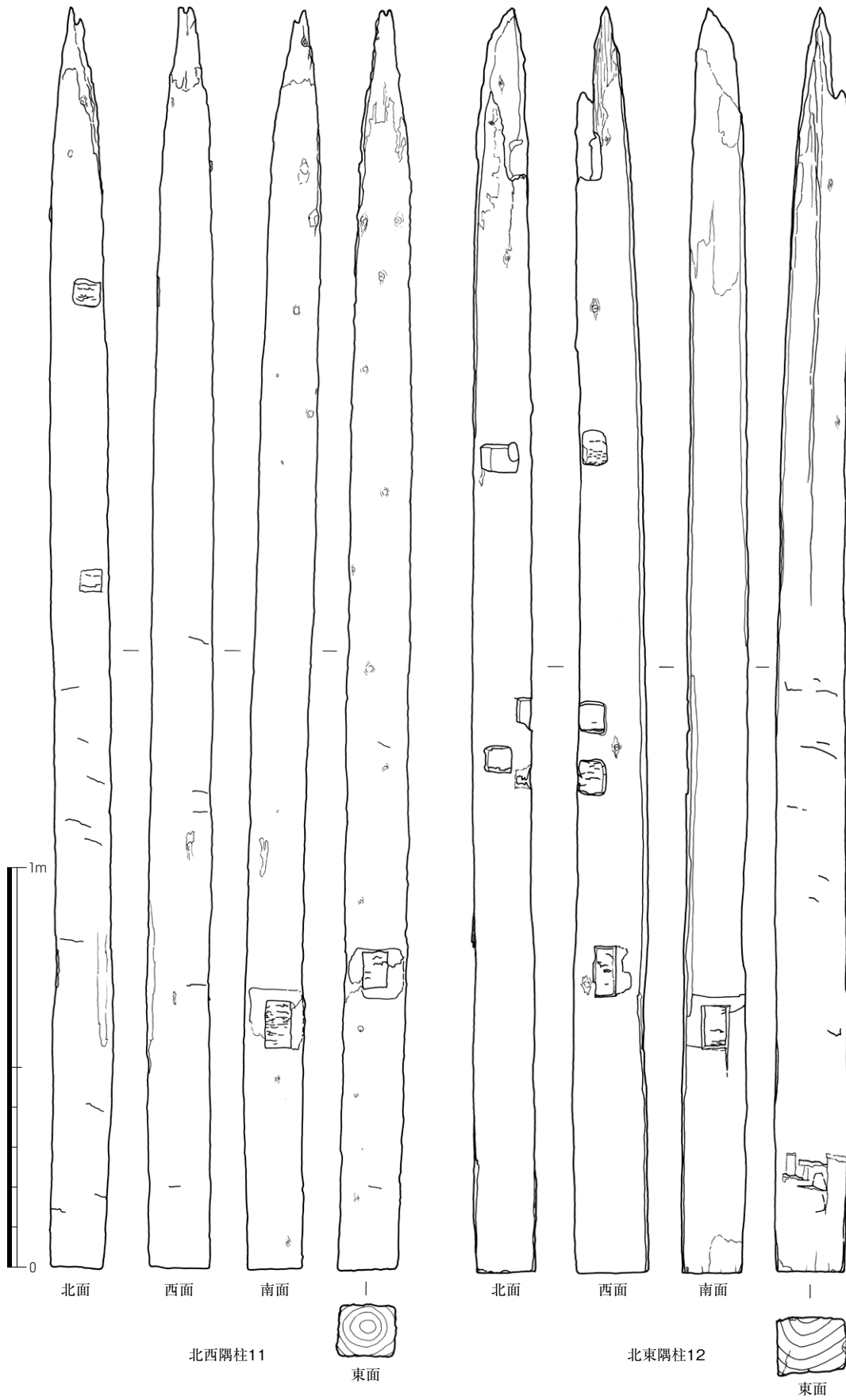


Fig. 196 SE4740隅柱 (1) 1:15

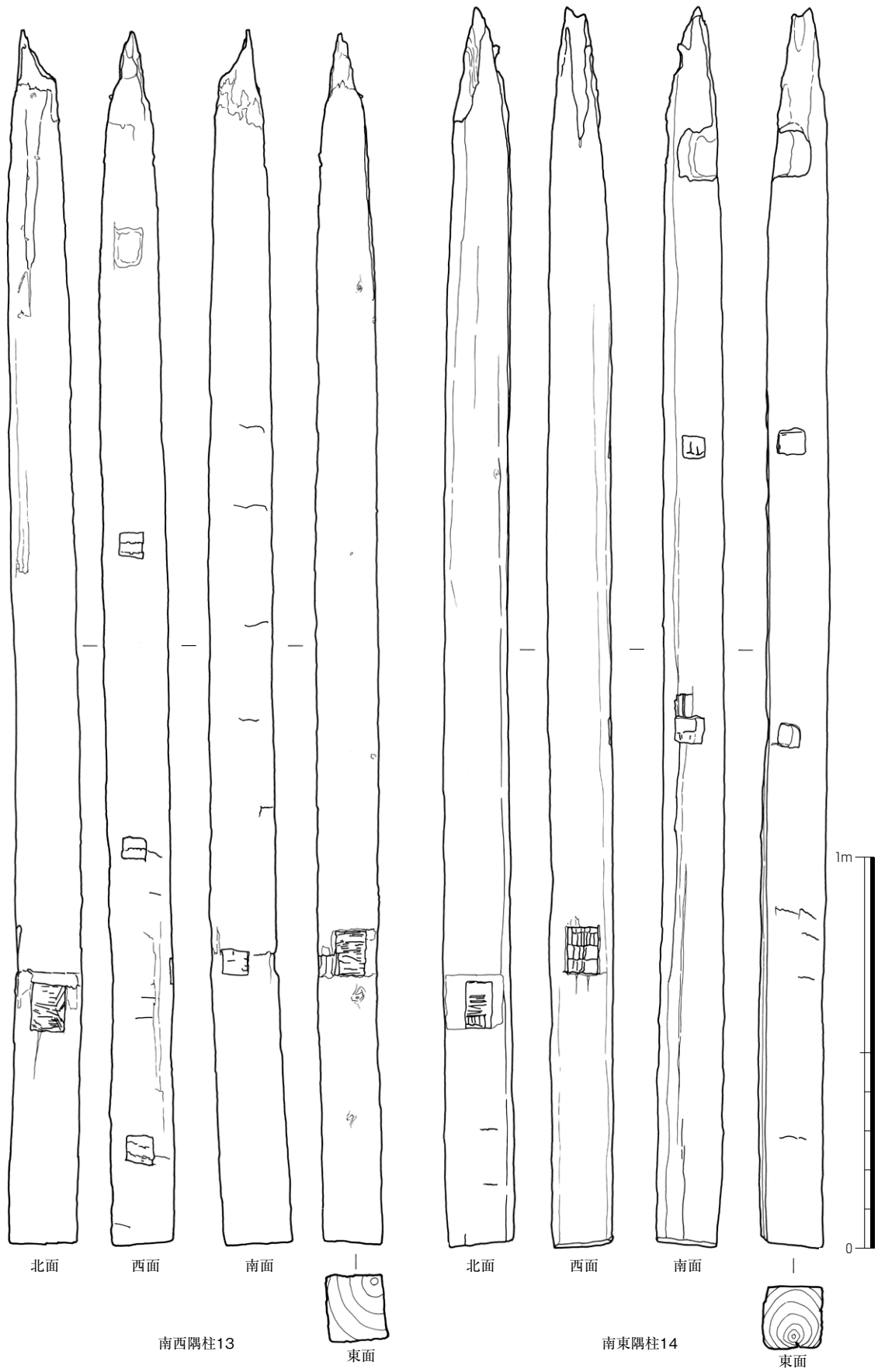


Fig. 197 SE4740隅柱 (2) 1:15

ので、柄穴の位置は上端を基準に加工していた可能性も考えられる。北東隅柱を除き、旧柄穴は新柄穴のない面に残されている。いずれの材に残る旧柄穴も新柄穴と同様に、隣り合う2面にのみ確認された。旧柄穴は平面寸法と旧柄穴同士の間隔が比較的揃っている。旧仕口も旧柄穴との間隔が60~70cmと旧柄穴同士の間隔と揃っており、同時期に機能していた可能性もある。

横 棧 (Fig. 200) 隅柱の間に渡し、固定した横架材。角材で両端に角柄を造り出す。東西方向のものは南北方向のものよりやや太い。

西横棧 (15) は長さ105.9cm、幅14.5cm、高さ14.2cmの角材。心去材で、木口年輪より丸太を4つ割りにした材とみられる。柄の寸法は北側が6.9×6.2×11.5cm、南側が5.0×5.0×9.6cm。木口には柄を切り出したノコの痕跡と、それを整えたノミの痕跡が残る。また、北側柄の下端に柄穴に納まっていた際の圧痕が残る。樹種はヒノキ。

東横棧 (16) は長さ105.3cm、幅14.5cm、高さ14.3cmの角材。心去材で、木口年輪より丸太を4つ割りにした材とみられる。柄の寸法は南側が6.5×6.0×11cm、北側が5.5×8.0×11.8cm。柄の根元にノミの痕跡が残る。また、両柄の下端に柄穴に納まっていた際の圧痕が残る。樹種はヒノキ属。

南横棧 (17) は長さ107.0cm、幅10.9cm、高さ11.8cmの角材。心去材で、木口年輪より丸太を4つ割りにした材とみられる。材中央部と柄部の断面寸法にあまり差がなく、側面を両端から15~20cmの長さで斜めにそぎ落とし角柄とする (Fig. 199)。圧痕及び風食差より、柄として隅柱に納まっていた部分の寸法は西側が6.6×6.0×11.0cm、西側が7.5×6.6×11.3cm。樹種はコウヤマキ。

北横棧 (18) は長さ103.0cm、幅14.5cm、高さ12.3cmの角材。心持材で、ノタが多く残り、径15~16cmの丸太材を側面4面そぎ落としたとみられる。両端に角柄を造り出す。柄の寸法は東側が4.0×6.5×11.9cm、西側が4.9×6.3×9.0cm。内側に2箇所、外側に1箇所、井戸枠とは関係ない柄穴が残る (Fig. 198)。4.3~3.5×4.0~3.3cmの方形で深さは2.0~2.7cmと浅い。SE4740に転用する前の仕口で、穴の浅さから当初は丸太材のまま使用していた可能性がある。樹種はヒノキ属。

横 板 (Fig. 201~203) 井戸枠の壁をなす板材。東西南北各面に11~12枚を隅柱の外側にあてて積み上げられていた。東西南北の各辺について、上から「1、2……」と番付をしながら取り上げたが、一部、同じ番号に2材が割り当てられ、さらに「上」「下」を付すものがある(「南2下」など)。横板は製材方法により、内側、外側とも平坦に加工した「板材」、内側のみ平



Fig. 198 北横棧角柄



Fig. 199 南横棧角柄

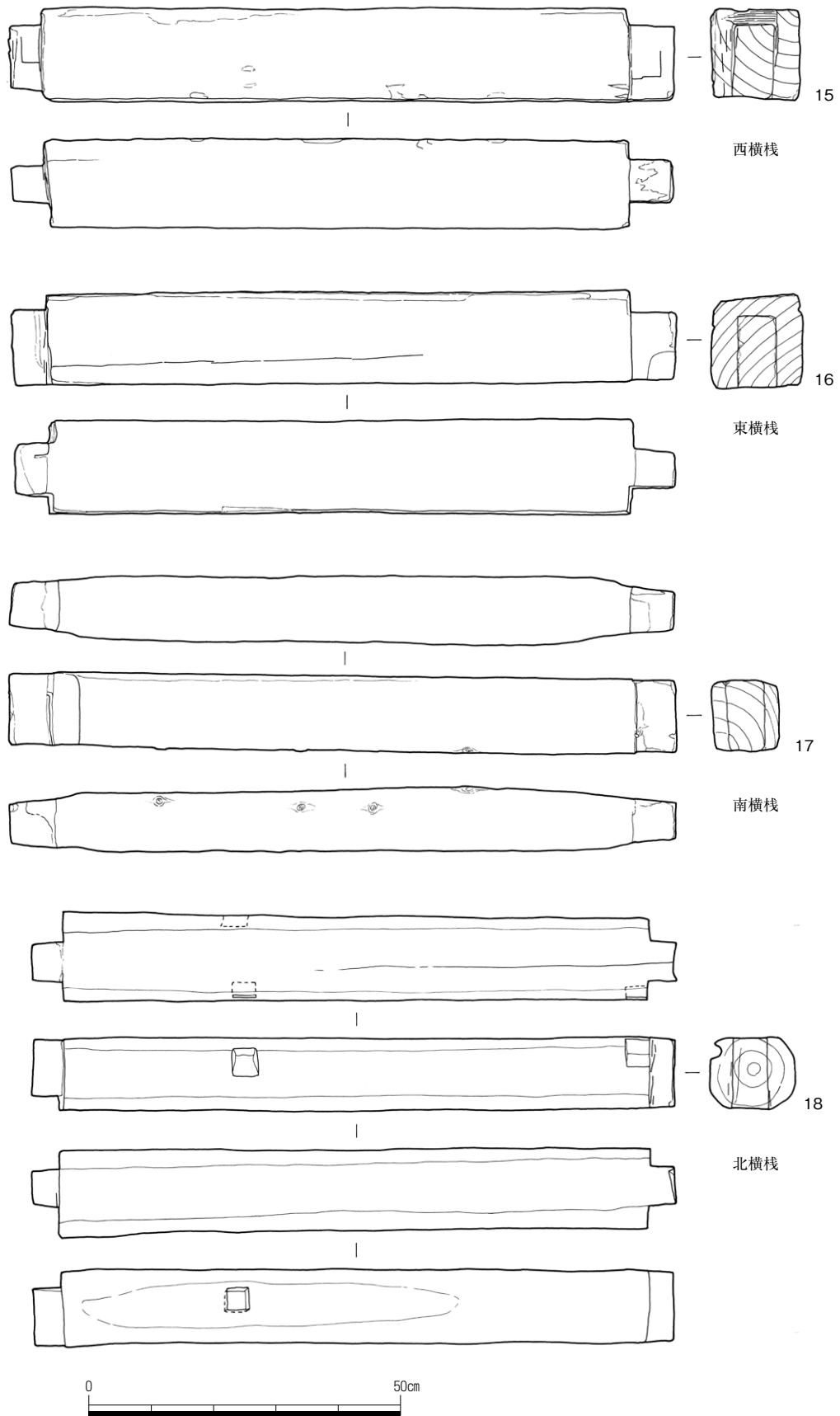


Fig. 200 SE4740横棧 1:10

坦に加工し外側は割れ肌のままの「割板材」、外側はノタの曲面を残す「背板材」の3つに分類できる。腐食が激しくいずれに該当するか判断しかねるものも数点あった。ここでは、各種類のうちの残りの良い部材と、仕口をもつ部材について報告する。樹種同定は横板全点について行い、結果は312頁のTab. 7にまとめた。

板材 (Fig. 201) は計18点あった。内側、外側ともチョウナで仕上げ、また端部を斜めにそぎ落とすものが多い。厚さは3~4cmのものが多く、最大でも5cmである。木取りは柾目材と板目材の両方がある。南11 (19) は長さ116.5cm、幅27.5cm、厚さ4cmの板材。心去りの板目材で、

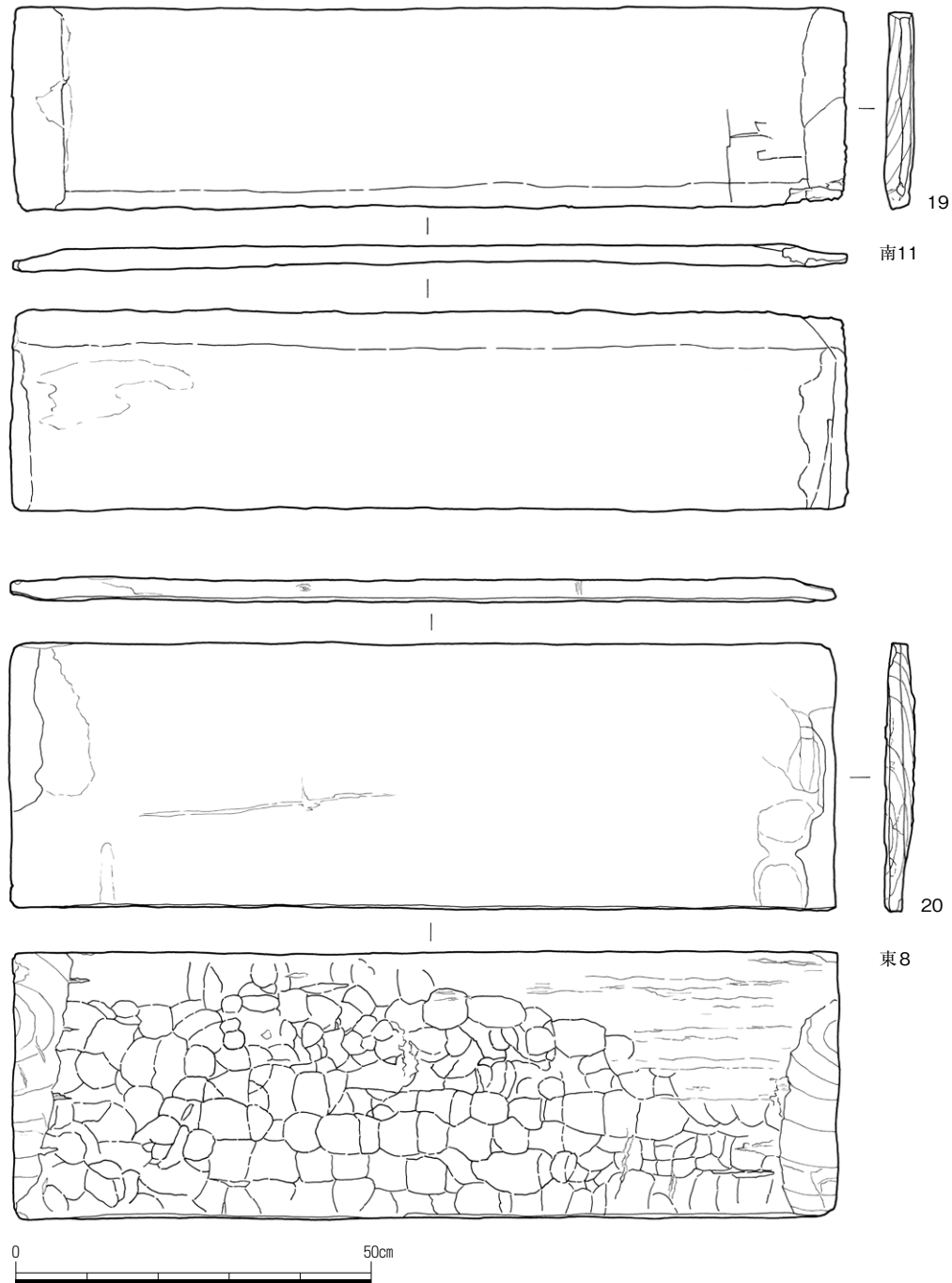


Fig. 201 SE4740横板 (1) 1:10

木表が内側にあたる。内側両端を6~7cmの長さで厚さ2cmまで削ぎ落す。内側両端には隅柱の圧痕が残る。腐食がやや進み、加工痕跡は外側にチョウナ痕跡がわずかに残るのみである。東8(20)は長さ115.8cm、幅37.3cm、厚さ3.7cmの板材。心去りの板目材で、木裏が内側にあたる。内側、外側とも端部を厚さ2.2cmまでそぎ落とす。内側には隅柱のアタリとみられる風食差が残る。外側にはチョウナ痕跡がよく残り、刃幅は6cm程とみられる(Ph.154)。

割板材(Fig.202)は13点あった。内側は平坦に仕上げ、外側は割れ肌のままとする。厚さは7cm程度のもが多く、最大10cmのものもある。外側には木の繊維を切断するヨキ痕跡がまみみられる。側面にチョウナまたはヨキによるはつり痕跡が残るものもあり、丸太の表面を加工した後、割れ板に製材したものとみられる。木取りは柂目と板目の2種類がある。柂目の材はミカン割りに近い形状で、板幅は原木の半径より小さい。板目は心持か、心去りでも心に近いいわゆる中空目の木取りであり、板幅が原木の直径に近いと考えられる。前者の例として西7(22)、後者の例として東4(21)がある。西7は長さ112.0cm、幅21.6cm、厚さ8.5cmの割板材。心去りの柂目材である。外側は割れ肌のまま、内側は加工痕が残らないが比較的平坦で、チョウナなどで仕上げたものとみられる。上側面にはチョウナ痕跡が残る。木口にはノコの痕跡が

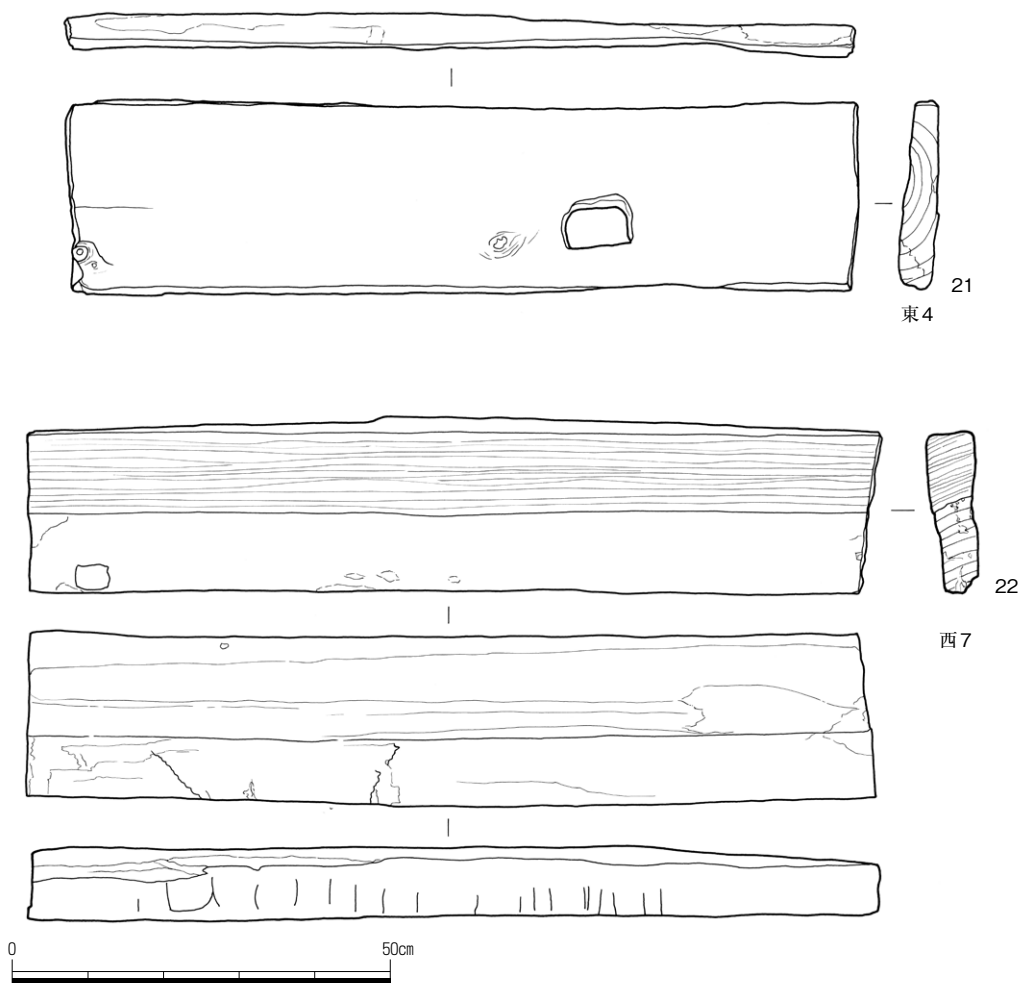


Fig. 202 SE4740横板(2) 1:10

残る。東4は長さ103.0cm、幅25.0cm、厚さ4.6cmの割板材。心去りの板目材で、木裏を内側とする。内側には加工痕跡は残らないが比較的平滑で、チョウナなどで仕上げたとみられる。外側は割れ肌のまま用いる。

背板材 (Fig. 203) は12点あった。木裏は平坦に仕上げ、木表はノタの曲面を残す。平坦な木裏を内側、木表を外側として用いる。木取りは2種類あり、ひとつは木表の曲面にノタがほぼ残る、原木の曲面を利用した木取りである。もうひとつは木表の曲面にノタがほとんど残らない、大径材の背板材の木表を削り、あえて小さい曲面に仕上げているものである。前者の例として東5 (25)、後者の例として北3 (23)、南2 (24) があげられる。東5は長さ135cm、幅20.0cm、厚さ6.5cmの背板材。内側には加工痕跡は残らないが比較的平坦で、チョウナなどで仕上げたものとみられる。外側は加工したチョウナ痕跡が一部に残る。北3は長さ104.6cm、幅19.2cm、厚さ6.3cm、南2 (24) は長さ102.3cm、幅18.5cm、厚さ5.0cmである。

横板のうち3点に穴や欠き込みが残る。東4 (21) は板のやや下寄りに9.2×6.0cmの平面隅丸長方形の穴が貫通する。穴の長辺が板の長辺に対してやや振れる (Ph. 154)。北3 (23) は上辺に12.0×7.0cmの欠き込みが残る (Ph. 154)。南2 (24) は下端に10.5×8.0cmの欠き込みが残る。

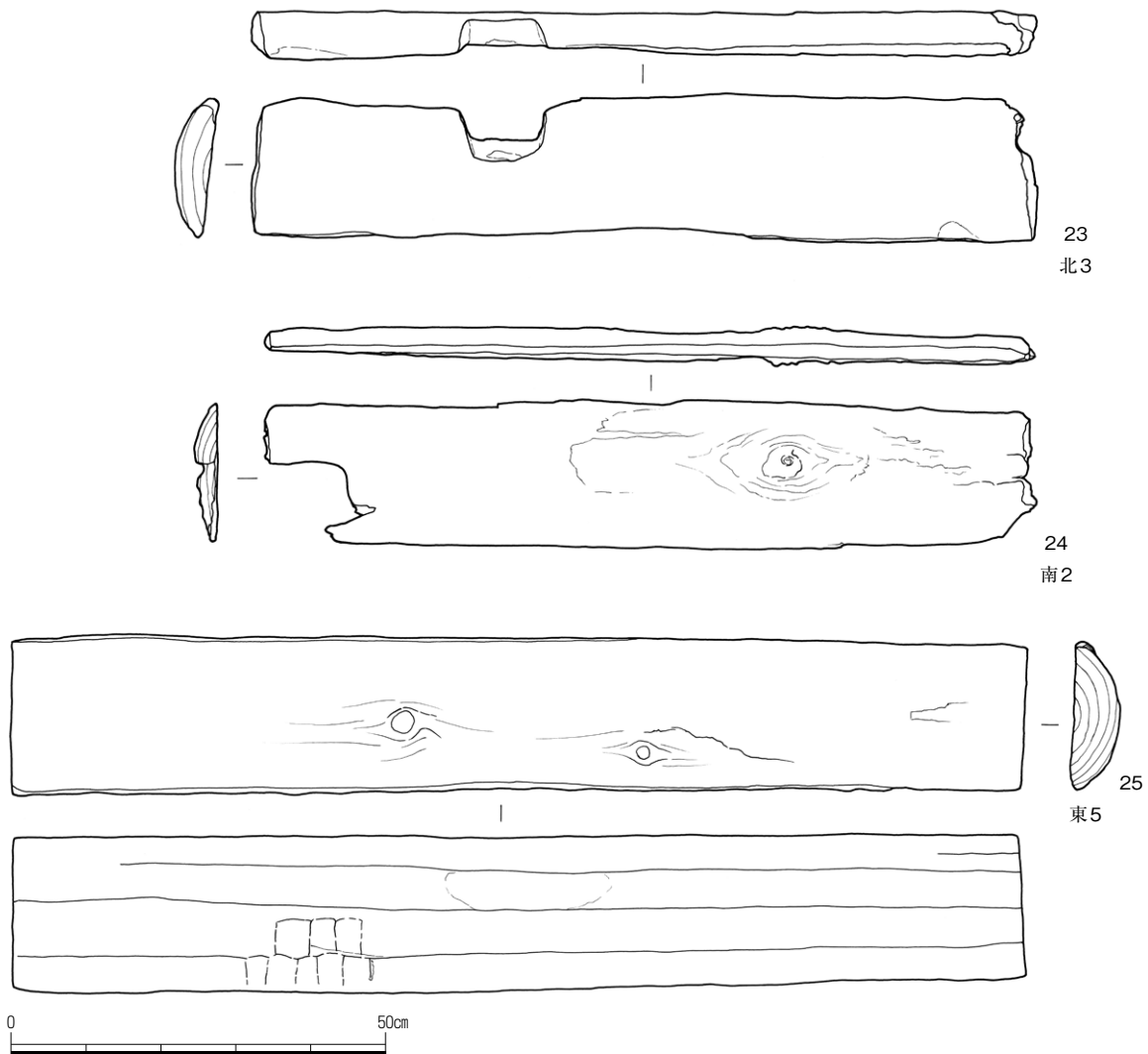


Fig. 203 SE4740横板 (3) 1:10

Tab.7 SE4740横板 樹種・製材方法一覧

段	北				東				南				西				
	No.	整理番号	樹種	製材	No.	整理番号	樹種	製材	No.	整理番号	樹種	製材	No.	整理番号	樹種	製材	
1	上	904	ヒノキ属	背板	-	1063A	ヒノキ属	不明	-	917	ヒノキ科	背板又は割板	-	1040	コウヤマキ	不明	
					-	1063B	ヒノキ科	割板カ	-			不明					
					-	898	ヒノキ	割板	-			958	コウヤマキ			背板	-
2	上	967	コウヤマキ	背板	-	918	コウヤマキ	板又は割板	24	860	コウヤマキ	背板	-	893	コウヤマキ	背板カ	
								-	890	コウヤマキ	背板						
3		23	891	コウヤマキ	背板	-	858	コウヤマキ	割板カ	-	863	コウヤマキ	割板	-	892	コウヤマキ	背板
4		-	895	コウヤマキ	割板	21	865	コウヤマキ	割板	-	862	コウヤマキ	背板	-	871	コウヤマキ	割板
5		-	889	コウヤマキ	背板	25	873	コウヤマキ	背板	-	869	コウヤマキ	割板	-	859	コウヤマキ	背板
6		-	861	コウヤマキ	割板	-	2057	コウヤマキ	割板	-	896	コウヤマキ	割板	-	894	コウヤマキ	背板
7		-	852	コウヤマキ	割板	-	872	コウヤマキ	割板	-	866	ヒノキ属	板	22	867	コウヤマキ	割板
8		-	856	コウヤマキ	板	20	857	ヒノキ属	板	-	850	ヒノキ属	板	-	864	コウヤマキ	割板
9		-	2058	サワラ	板	-	2059	ヒノキ属	板	-	870	ヒノキ属	板	-	874	ヒノキ属	板
10		-	1998	ヒノキ属	板					-	2060	ヒノキ属	板	-	851	ヒノキ属	板
11	上	-	2061	ヒノキ属	板	-	855	コウヤマキ	板	19	868	ヒノキ属	板	-	899	ヒノキ属	板
															854	ヒノキ科	板
12					-	849	ヒノキ属	板					-	853	ヒノキ属	板	

いずれの穴や欠き込みも、SE4740の井戸枠として必要な仕口ではない。しかしながら、仕口の形状や角度などからみて、少なくとも板の形状で建築部材に用いられていたものではない。また、これらの仕口が残る部材は割板材・背板材といった製材が簡略化されたものであり、建築部材を加工し転用したものとも考えにくい。

Tab. 7は、横板の樹種および製材方法をまとめたものである。東西南北いずれの面でも、井戸下方は板材、中ほどは割板材、上方は背板材を用いる傾向がある。板材にみられる端部の斜めそぎ落としはSE4740の井戸枠構造には不要のものである。板材は長さが115～122cmと比較的揃うことから、溝を切った柱に落とし込むように作られた横板を転用したものと考えられる。

- 1) 蛍光X線分析は降幡順子による。
- 2) 蛍光X線分析は降幡順子による。
- 3) 調査日誌には取り上げ時に破損したことが記録されており、遊離している籬や側板と思われる破片群がどのように復元できるかなど、不明確な要素も多いが、現状から図化した。

4 金属製品・銭貨

A 金属製品

金属製品では短刀、鎌、釘などの鉄製品、花形飾金具、銅釧などの銅製品がある。断片的な資料が多く、時期的にも古墳時代から中世までと幅がある。そのため、ここでは鉄製品、銅製品の順に、器種ごとにまとめて記述する。また、銅製品のうち、棒状金銅製品、銅釧、花形飾金具、銅鏡については、透過X線撮影による内部構造調査、蛍光X線分析法による材質調査を行った。その結果は第V章4に示したので、参照されたい。

i 鉄製品 (Fig. 204~206, Ph. 155~157)

短刀 (Fig. 204-1・2) 把付の短刀。1は切先と刃部を欠き、把を含めた残存長は28.5cm。片関で、茎の長さは5.1cm。把は一木造りで、長さ13.4cm、幅2.9cm、厚さ2.0cm。把縁側の端面から茎挿入孔をあける。把縁寄りには幅0.5cmの溝を彫り込む。樹皮等で緊縛するための加工と思われる。把の樹種はコウヤマキ。調査区中央部の、平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4474から出土した。2は全長26.2cmを測る完形品である。刃部は17.0cm、茎の長さ8.8cm、両関で1箇所目釘穴をもつ。把は2枚合わせの構造で、長さ11.5cm、幅3.0cm、厚さ1.8cm。刀身の一部まで把に覆われる。把縁付近には緊縛した樹皮が残る。把には目釘穴がなく、鉄本体の目釘穴は未使用である。把の樹種はヒノキ属。調査区西北部の、13世紀後半から14世紀前半の井戸SE4790出土。

環状鉄製品 (Fig. 204-3~5) 断面円形の鉄棒をC字状に折り曲げて環状とする鉄製品。3は幅8.3cm、高さ5.6cm。4は幅6.7cm、高さ5.1cm。5は正円に近く、径6.5cm。5のみ両端の片側に面取りを施す。このほか、錆化が著しいが、現状で外径1.9cm、内径0.4cm、厚さ0.6cmの小型品がある。すべて藤原京期から奈良時代の井戸SE4740最下層出土で、釣瓶等に使用された金具と思われる。

鉄鎌 (Fig. 205-6~8) 6は柄付の完形品で、全長36.0cmを測る。刃部は長さ12.0cm、最大幅3.9cm。茎の長さは6.5cmで、先端を刃部側に折り曲げる。柄の長さは30.0cm、最大幅2.6cm、厚さ1.7cm。刃部側から約11cmの位置に片面から切り込みを入れ、そこまでを2枚合わせにする構造である。鎌の茎を挟み、幅0.8cmの鉄製ハバキを装着し、鉄製目釘で固定する。茎の背の部分には別材の木製楔が2枚はめ込まれている。柄の樹種はアカガシ亜属。13世紀後半から14世紀前半の井戸SE4790出土。7は刃部の最大幅1.8cmの小型品で、茎に柄の木質が残存する。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4467出土。8は切先部分を欠く。刃部の最大幅3.3cm。柄の木質等は遺存しない。調査区中央部付近にある、平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4473出土。

不明鉄製品 (Fig. 205-9) 板状鉄製品の破片。残存長11.1cm、幅2.6cm、厚さ0.3cm。刃部等は認められない。井戸SE4740最下層出土。

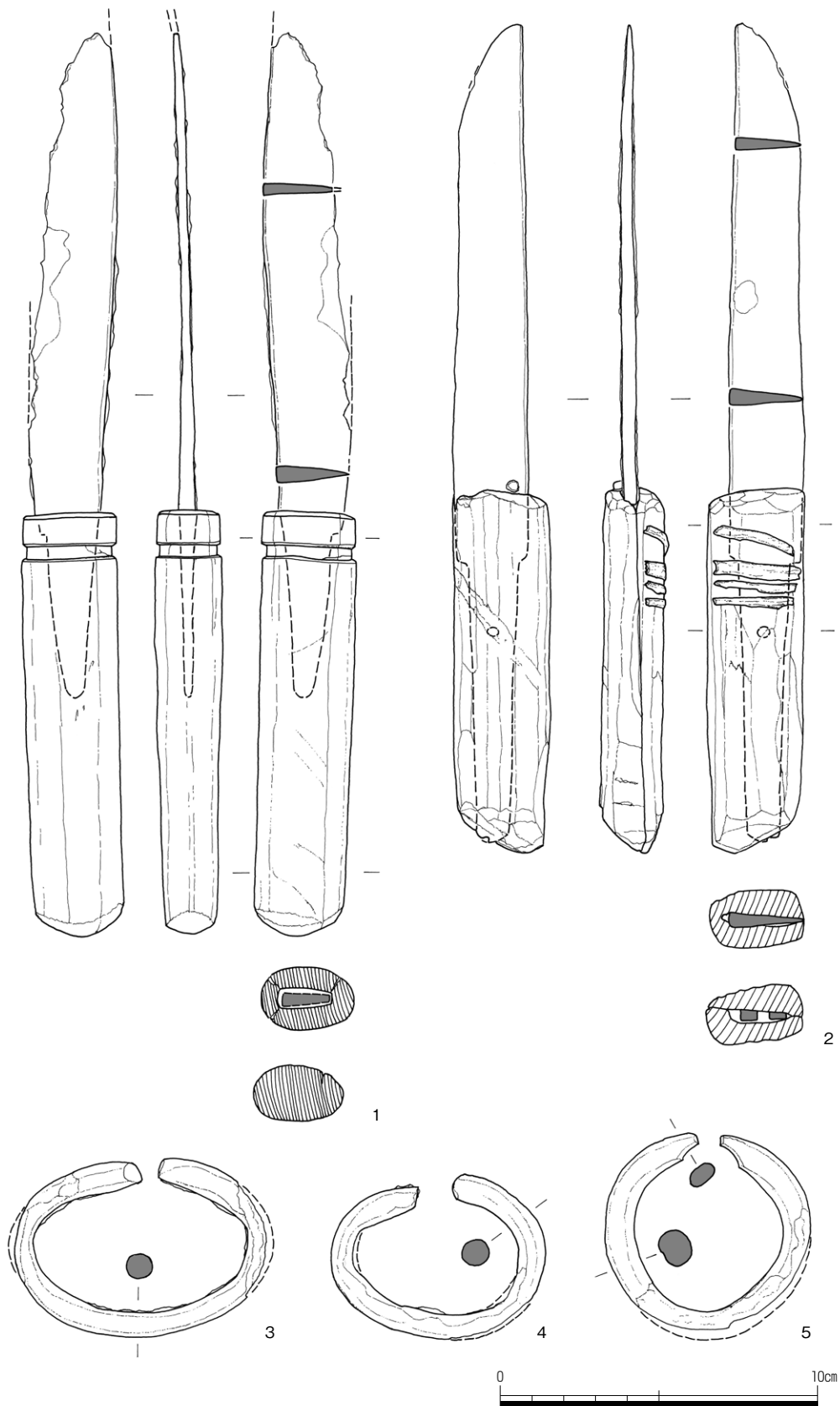


Fig. 204 鉄製品 (1) 1:2

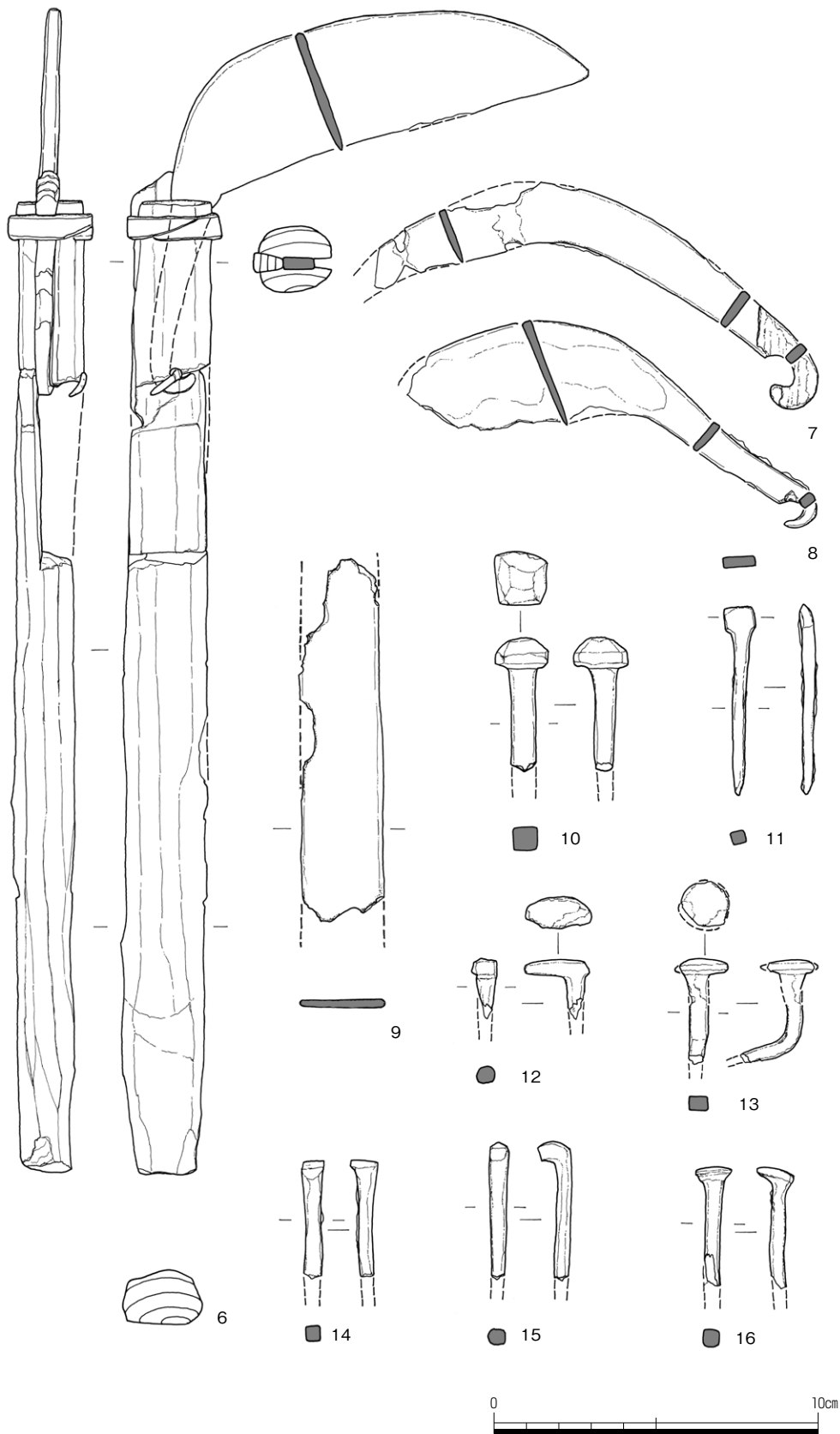


Fig. 205 鉄製品 (2) 1:2

鉄釘 (Fig. 205・206-10~25) 10は方頭釘、13が円頭釘、17と18は方頭釘、その他が叩折釘である。11のみ完形品で、全長5.9cmを測る。その他は全長不明。10~16は井戸SE4740の最下層から出土したもの。17は東西大溝SD4130中層出土で、18~25は包含層からの出土である。

鉄鍋 (Fig. 206-28) 小片のため、復元径は不明。内面に稜線をもつ。口縁端部の厚さは0.6cmで、胴部は0.4~0.5cm。東西大溝SD4130上層出土。

その他鉄製品 (Fig. 206-26・27) 26は刀子の破片。切先と茎を欠失する。片関で、刃部幅は2.1cmを測る。27は棒状の鉄製品で、先端が尖る。鉄鏃の破片か。残存長4.2cm。いずれも包含層からの出土である。

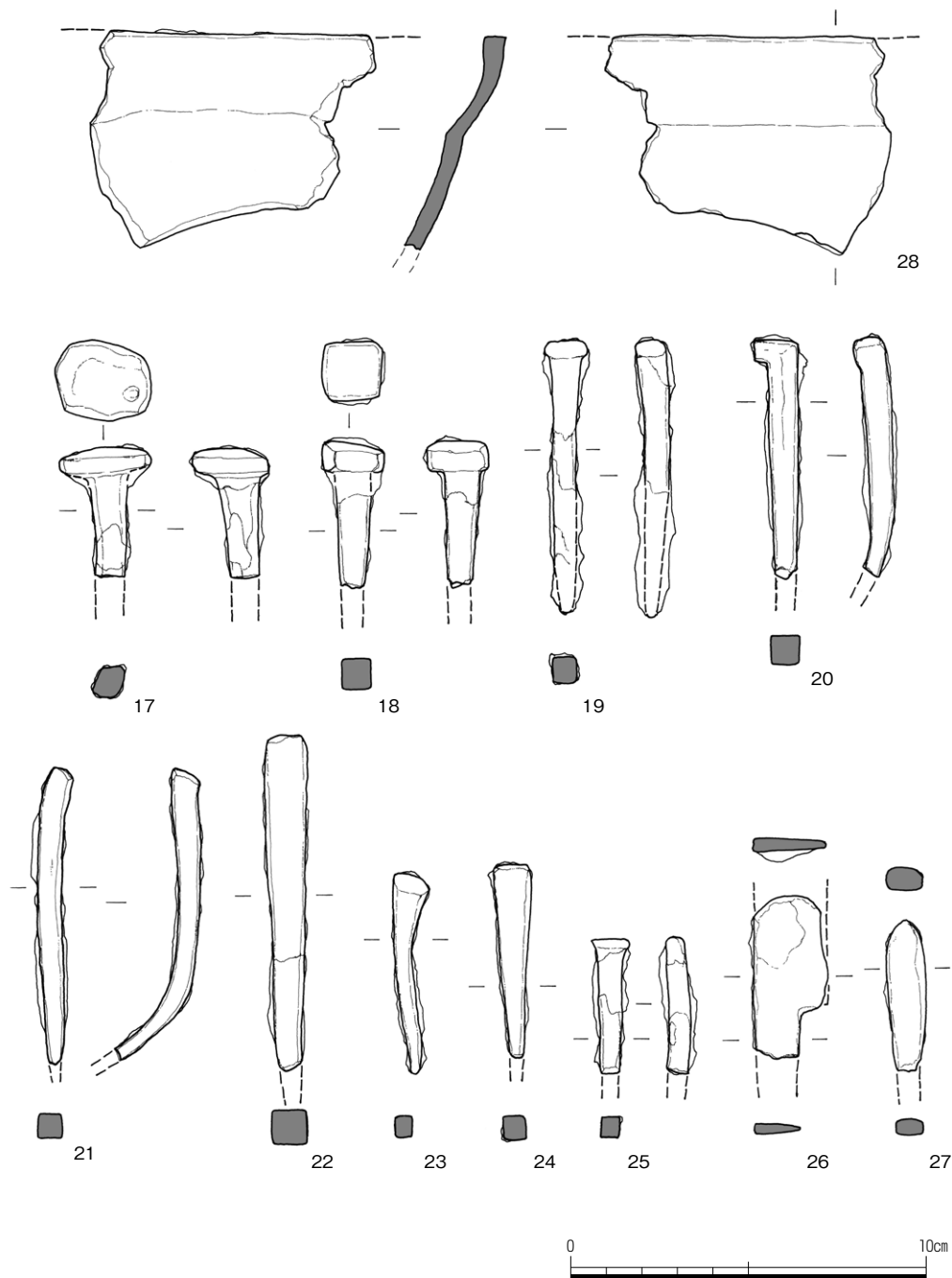


Fig. 206 鉄製品 (3) 1:2

ii 銅製品 (Fig. 207, Ph. 156・157)

帯金具 (Fig. 207-29・30) 29は蛇尾。全体に銹化して破損しており、先端を欠く。現状で長さ2.7cm、幅2.9cm、脚下端から上面までの高さ0.4cm。銅板の厚さ1.2mm。重量2.2g。内面には直径0.2cmの脚が残り、広端側は2箇所1脚ずつ、先端側は1箇所2脚の配置である。表裏とも塗装は認められない。NO20地区の包含層から出土。30は蛇尾と考えられる残欠。現状で長さ2.3cm、幅2.4cm、高さ0.2cm。銅板の厚さ0.5~0.8mm。重量2.1g。表裏とも塗装は認められない。脚は遺存していない。全体にねじれており、左右両端を切断している。保存状態良好で銅の色が残る。SD4130下層出土。

花形飾金具 (Fig. 207-31) 完形の青銅製花形飾金具¹。全長4.6cmで本体部分は12葉の花弁状を呈し、頂部に山形の釣手をもつ。裏面は花弁端部がほぼ平坦で揃い、釣手部分が厚いため0.4cmの段をなす。花弁部分は径3.5cm、厚さ0.1~0.3cm。釣手は厚さ0.5cm、中央に穿たれた円孔は径0.5cmを測る。花弁の中心に円形鋏を打ち込む。鋏は頭部径1.1cm、頭部高0.4cm、脚部径0.3cm、全長0.9cmを測る。円形鋏と本体との間に径1.4cmの円形波板をかませており、幅0.1cmの放射状文様帯をなす。材質はいずれも銅、錫、鉛を主とするが、本体は錫の割合が極めて高い。円形波

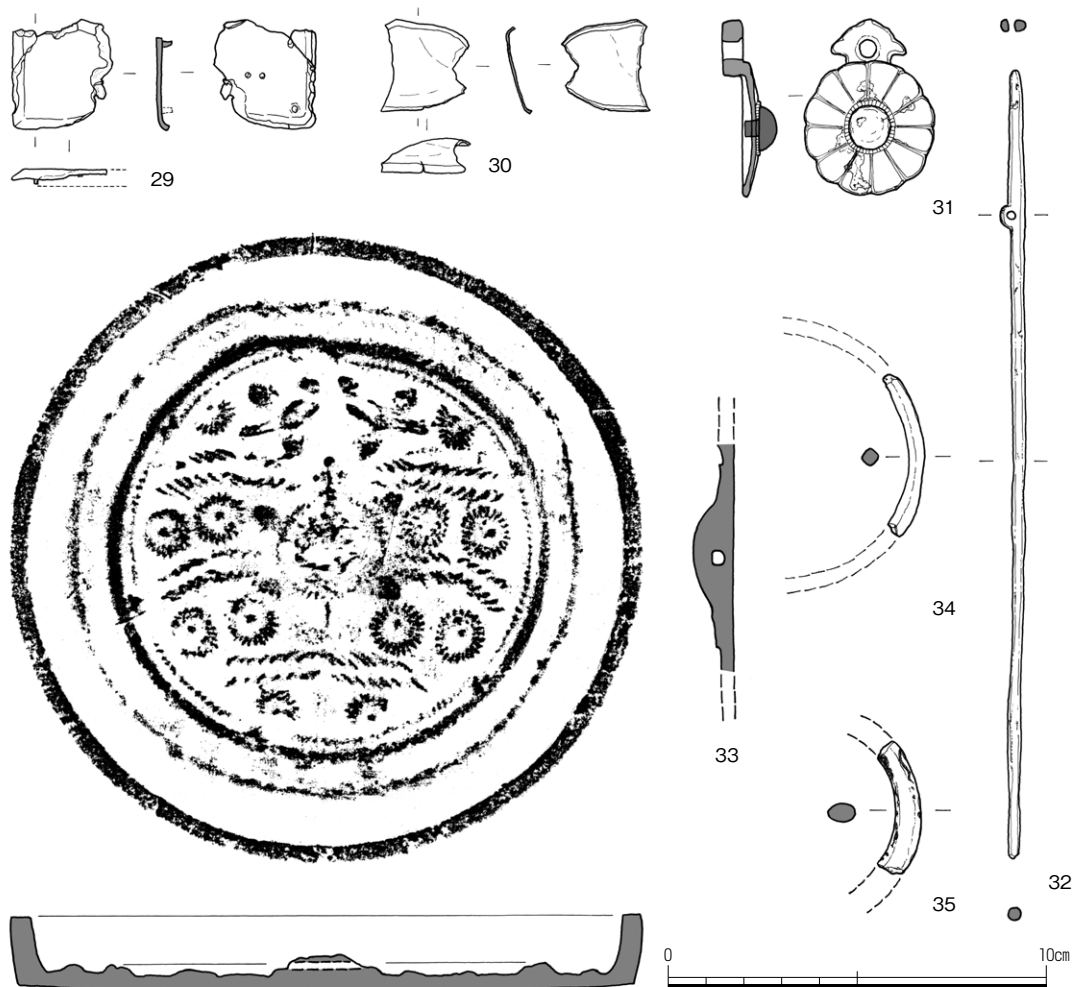


Fig. 207 銅製品 1:2 (33は1:1)

板部分は現状で黒色を呈し、銅の比率が高く鉛が少ない。鋳は現状で黄褐色を呈し、円形波板部分より錫が多い。調査区中央部にある、平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4467上層出土。

棒状金銅製品 (Fig. 205-32) 棒状の金銅製品で、全長20.8cm、中心付近の径0.4cmを測る。表面にはわずかに鍍金が残る。片側に半円形の突起をもち、径0.3cmの小孔を穿つ。井戸SE4740最下層出土。

銅鏡 (Fig. 207-33) 青銅製の菊水双雀鏡である。中世大溝SD4755より出土した。重量は115.3g。円鏡で、直径は8.4cm、鏡面径は8.2cmを測る。外縁高0.9cm、外縁厚0.3cmの直角式中縁を持つ。亀形紐を有し、紐孔は1つである。紐孔には紐が残存している。内区には、菊水文が描かれ、雀2羽が上方で相対向して配置されている。界圏は縄文式の特殊圏であり、外区には擬漢式文様が描かれている。製作年代は室町時代と推測できる。法隆寺西円堂奉納の鏡には、菊水双雀鏡は含まれていないものの、類品が数多くみられる。この他類品には、岐阜県白山神社蔵の菊水双雀鏡がある。

銅釧 (Fig. 207-34・35) 古墳時代の銅釧片が2点出土している。34は全体の五分の一程度が残存し、径は7.5cm前後に復元できる。環の断面形は菱形に近い。古墳時代の竪穴建物SI4234出土。35は小片で、径の復元は難しい。断面形は内側のやや尖った卵形を呈する。NB19地区の包含層から出土。

この他、包含層などから少量の銅滴、銅針金、銅釘などが出土している。

B 銭貨

調査区内からは46点の銭貨が出土した。このうち、SE4740の井戸枠内最下層・下層からは、無文銀銭1点と和同開珎26点が一括で出土した。計測可能な銭貨の法量等は、Tab. 8に示す。無文銀銭と和同開珎について実施した自然科学分析については、第V章4を参照されたい。

無文銀銭 (Fig. 208・Ph. 158・159-1) 外形は正円形を呈さず、角のとれた五角形に近い。最大径は27.5mm、厚さ1.5mm前後、方形を呈する中心孔の径は3.0mm、重さ8.45g。片側から穿孔したため、裏側の孔の周縁が盛り上がり、バリを平坦に整えている。孔の位置が中心から若干ずれるため、周囲を削った可能性が指摘されている³。銀片の貼り付けや線刻は認められない。表面は酸化により黒く変色している。SE4740最下層出土。

和同開珎 (Ph. 158~161-2~28) 2~27はSE4740出土の和同開珎で、すべて完形品。和同開珎Aに属し、「開」の字の門構えの上端が開いた「新和同」である。2~5は最下層、6~27は下層出土。このうち6~14は井戸内の北側棧上で検出した (Fig. 53)。北側板に沿って、重なる2枚 (11の上に10) とその東隣に横位で3枚 (西から14・13・12) を連ねたような状態であった。また6~9はその直近の横棧上に散らばった状態と復元される。10~14の状態からみて、ばらばらの銭を散布したのではなく、まとまった状態で置いたものと推察される。坂田寺などで10枚前後の緋銭や

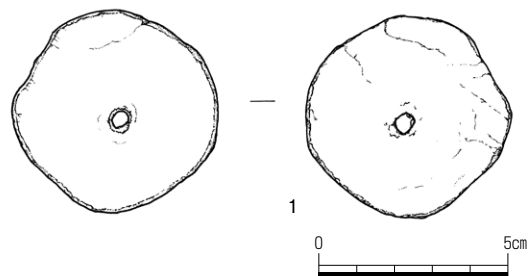


Fig. 208 無文銀銭 1:1

Tab. 8 銭貨計測表

番号	次数	出土地点	出土銭貨	重量 (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)	
1	47次	SE4740	灰褐砂礫土 (最下層)	無文銀銭	8.45	26.74	—	—	—	1.54	1.51
2	47次	SE4740	灰褐砂礫土 (最下層)	和同開珎	1.99	24.79	21.29	8.15	6.81	1.26	0.45
3	47次	SE4740	灰褐砂礫土 (最下層)	和同開珎	2.63	25.09	21.04	8.30	6.57	1.36	0.42
4	47次	SE4740	灰褐砂礫土 (最下層)	和同開珎	2.94	24.98	21.07	8.11	7.12	1.41	0.55
5	47次	SE4740	灰褐砂礫土 (最下層)	和同開珎	2.03	24.80	21.09	8.23	6.97	1.16	0.59
6	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	3.23	24.80	21.22	8.25	7.52	1.33	0.49
7	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	3.65	25.06	21.35	8.29	6.73	1.47	0.58
8	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.32	24.27	20.78	8.00	6.59	0.96	0.42
9	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	3.79	25.32	21.33	7.83	6.85	1.58	0.56
10	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.60	24.52	21.22	8.07	6.72	1.18	0.45
11	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	3.03	24.65	21.11	8.12	6.57	1.44	0.61
12	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	4.16	24.76	21.28	8.15	6.96	1.68	0.99
13	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.98	24.15	20.42	8.10	6.50	1.37	0.46
14	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	3.10	25.25	21.08	8.23	6.83	1.37	0.50
15	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	3.07	25.17	21.13	8.07	6.90	1.47	0.40
16	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.90	24.87	21.20	8.63	6.65	1.40	0.52
17	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	3.84	24.88	20.93	7.76	6.58	1.52	0.77
18	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.88	25.39	21.59	8.36	6.93	1.40	0.63
19	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.36	24.24	21.27	8.72	6.45	1.13	0.57
20	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.79	24.80	20.87	8.12	6.86	1.38	0.50
21	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	3.10	24.67	21.65	8.13	6.86	1.47	0.54
22	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.03	24.57	21.21	8.36	7.12	1.24	0.49
23	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	1.69	25.17	21.39	8.05	6.81	1.35	0.37
24	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.04	24.73	21.12	8.27	6.78	1.27	0.39
25	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	3.50	24.43	20.56	7.98	6.93	1.46	0.60
26	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.08	24.34	21.37	8.20	6.84	1.20	0.45
27	47次	SE4740	褐色粘質土 (下層)	和同開珎	2.29	24.20	21.30	8.21	6.99	1.36	0.35
28	50次	SD4130	暗灰砂土 (中層)	和同開珎	2.12	24.46	21.41	8.33	6.97	1.48	0.57
29	50次	SK4796		開元通寶カ	2.60	23.91	20.54	8.59	6.90	1.33	0.93
30	47次	遺物包含層		天禧通寶	2.26	24.51	19.73	7.46	6.23	1.11	0.58
31	47次	耕作溝		天禧通寶	2.31	24.62	19.99	7.56	6.65	1.34	0.69
32	47次	SE4790	青灰粘土混青灰砂質土	天聖元寶	4.99	25.31	20.71	8.70	6.32	1.38	1.11
33	50次	遺物包含層		天聖元寶	1.82	24.42	20.26	8.16	6.32	1.02	0.77
34	50次	遺物包含層		天聖元寶	2.90	25.21	20.67	8.55	7.33	1.44	1.09
35	50次	遺物包含層		皇宋通寶	2.11	24.11	19.22	8.35	6.99	1.23	0.67
36	47次	耕作溝		熙寧元寶	2.86	23.41	18.61	7.60	6.26	1.38	0.80
37	47次	不明		熙寧元寶	2.22	24.34	19.35	8.73	7.05	1.29	0.96
38	47次	不明		熙寧元寶	2.66	24.89	19.95	8.59	7.36	1.06	0.82
39	46次	遺物包含層		元豐通寶	2.65	24.31	18.72	8.33	6.77	1.25	0.87
40	53次	床土		元豐通寶	2.27	24.05	18.61	7.43	6.43	1.21	0.83
41	50次	遺物包含層		元豐通寶	2.15	25.17	19.80	9.22	6.93	1.16	0.75
42	45次	遺物包含層		政和通寶	1.53	22.08	19.11	7.49	6.32	1.01	0.71
43	50次	床土		寛永通寶	1.80	23.97	20.04	7.88	5.93	1.01	1.37
44	47次	SD4755	焼土混灰褐土	大観通寶	1.68	—	—	—	—	—	—

銭貨の各部測点については右のとおりである。

$$\begin{aligned} \text{外縁外径 } G &= \frac{Ga+Gb}{2}, & \text{外縁内径 } N &= \frac{Na+Nb}{2}, \\ \text{内郭外径 } g &= \frac{ga+gb}{2}, & \text{内郭内径 } n &= \frac{na+nb}{2}, \\ \text{外縁厚 } T &= \frac{A+B+C+D}{4}, & \text{文字面厚 } t &= \frac{a+b+c+d}{4} \end{aligned}$$

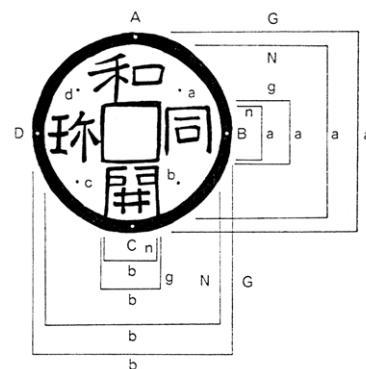


Fig. 209 銭貨の計測点

布に包んだ銭の存在が知られており、同様なものだった可能性があろう⁵。しかし、その他の銭貨は出土時に位置関係などの詳細が把握できなかつたので、全体として一連だったのか、散布したのか、井戸の改修に伴って置いたものかどうかなどは、判断しがたい。

この他、28は東西大溝SD4130中層出土。周縁部をわずかに欠く。和同開珎Aに属するものである。SD4130のうちNH32地区の南岸から出土しており、SE4740からはほど近い西へ5mほどの地点にあたる。

中国銭 (Ph. 160・161-29~42) 大半が北宋銭である。29は銭文が不鮮明だが、開元通寶(唐、621年初鑄)の可能性が高い。SK4796出土。30・31は天禧通寶(北宋、1017年初鑄)で、いずれも包含層から出土。32~34は天聖元寶(北宋、1023年初鑄)。32はSE4790上層出土で、33・34は包含層出土。35は皇宋通寶(北宋、1038年初鑄)。36~38は熙寧元寶(北宋、1068年初鑄)。39~41は元豊通寶(北宋、1078年初鑄)で、41は元符通寶(北宋、1098年初鑄)の可能性もある。42は政和通寶(北宋、1111年初鑄)。35~42は包含層出土。これらの他、南北大溝SD4755から大観通寶(北宋、1107年初鑄)が出土しているが、劣化が進んでいるため拓本を採取していない。

寛永通寶 (Ph. 160・161-43) 銭文は不鮮明で型式は不明だが、背文はない。包含層出土。

参考文献

法隆寺昭和資材帳編集委員会1988『法隆寺の至宝 第9巻 工芸 鏡』小学館

中野政樹1969『日本の美術 第42号 和鏡』至文堂

久保智康1999『日本の美術 第394号 中世・近世の鏡』至文堂

奈文研2004『川原寺寺域北限の調査』

松村恵司2004「無文銀銭の再検討」松村恵司・栄原永遠男編『古代の銀と銀銭をめぐる史的検討』

-
- 1) 表面が白色を呈するためか『藤原概報16』では銀製と記すが、今回分析したところ青銅製である。分析は降幡順子による。
 - 2) 広瀬都巽1974『和鏡の研究』角川書店。
 - 3) 松村恵司2004「無文銀銭の再検討」松村恵司・栄原永遠男編『古代の銀と銀銭をめぐる史的検討』。
 - 4) 奈文研1975『平城宮発掘調査報告VI』。
 - 5) 木村理恵2011「坂田寺SK160出土地鎮具」『奈文研紀要2011』。

5 石製品・鑄造関係品・石器

A 石製品・鑄造関係品 (Fig. 210~216, Ph. 161・162)

砥石 (Fig. 210~213-1~11) 1は表裏と側面に擦痕をもつ。残存長11.2cm、残存幅9.2cm、厚さ4.1cmを測る。重量673.7g。調査区西北部にある、平安時代後期の井戸SE5023出土。石材は流紋岩質凝灰岩。

2は長方形を呈し、上半部を欠く。表裏、側面のほか、小口面にも擦痕を残す。残存長8.0cm、幅4.5cm、厚さ2.7cm。重量108.9g。藤原京期から奈良~平安時代の井戸SE4740出土。石材は流紋岩質凝灰岩。

3は一側が大きく弯曲する角柱状の製品である。長軸方向の1面を使用している。残存長10.8cm、最大幅5.3cm、厚さ3.7cmを測る。重量234.8g。NI29地区の東西大溝SD4130上層出土。石材は片麻岩。4は長軸方向の4面を使用している。残存長7.5cm、幅5.3cm、厚さ4.5cmを測る。重量246.4g。NI28地区のSD4130中層出土。石材は流紋岩。5は長軸方向の4面と単軸方向の

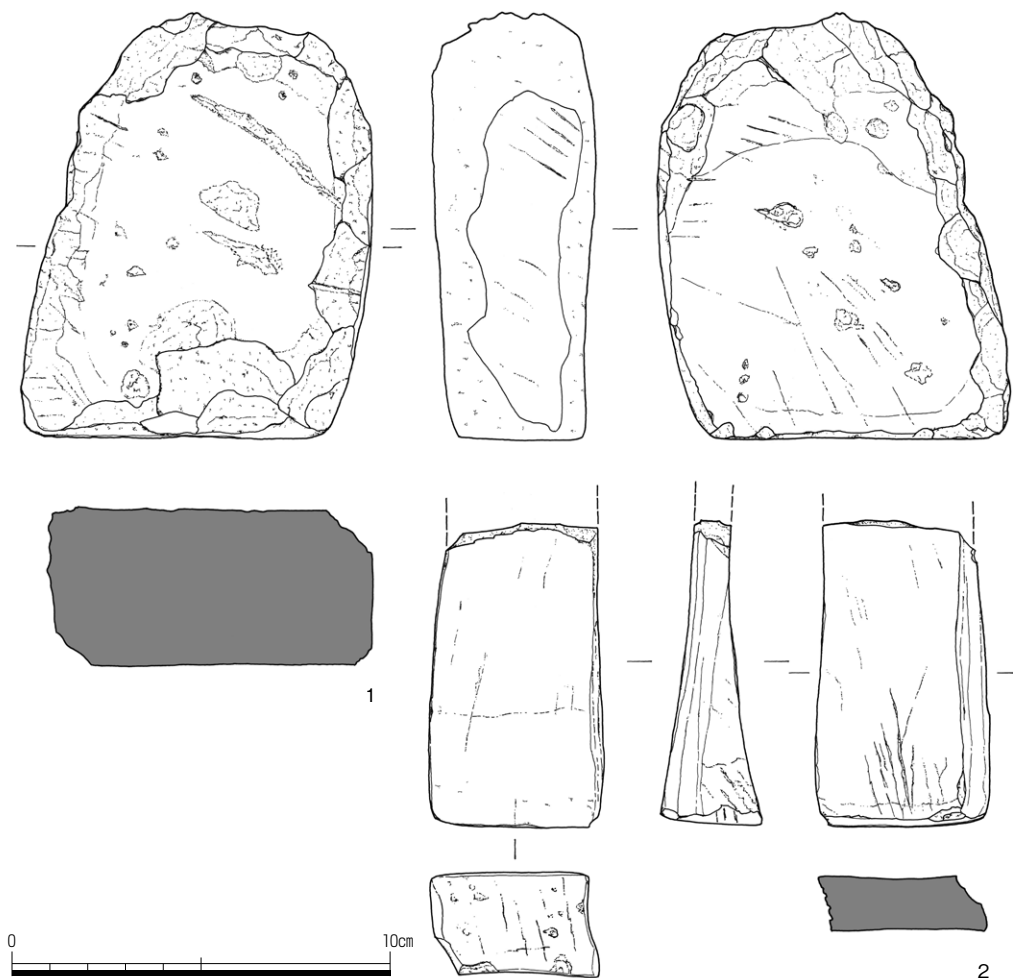


Fig. 210 石製品 (1) 1:2

1面の計5面を使用している。残存長5.6cm、幅4.4cm、厚さ4.5cm。重量139.4g。NI35地区のSD4130中層出土。石材は流紋岩。6は直方体状を呈し、上半部を欠く。長軸の3面と短軸の1面の計4面を使用している。残存長13.4cm、幅6.7cm、厚さ5.8cm。重量860.4g。NI30地区のSD4130中層出土。石材は流紋岩。

7は長方形を呈し、上面下面ともに欠損している。長軸の4面を使用している。残存長5.1cm、幅3.1cm、厚さ2.3cm。重量58g。NH26地区の包含層出土。石材は流紋岩。8は両端を欠き、長軸の4面に使用痕がみられる。残存長4.1cm、幅2.6cm、厚さ2.0cmを測る。重量27.1g。NC20地区の包含層出土。石材は流紋岩。9は長軸4面を使用している。うち1面には径0.6~0.8cm、深さ0.2~0.3cmの半球形の窪みが2箇所にみられる。残存長5.8cm、幅5.5cm、厚さ2.6cm。重量106.2g。NH25地区の包含層出土。石材は流紋岩。10は両端を欠損している。表裏と側面の4面に使用痕がみられる。表裏面には幅0.5~0.6cm、深さ0.1~0.3cmの溝状の研磨痕がそれぞれ2条ずつ確認できる。残存長7.5cm、幅4.5cm、厚さ2.2cmを測る。重量125.6g。NG18地区の包含層出土。石材はアプライト質花崗岩。11は台形状を呈し、6面全面を使用している。表面が彎曲しており、中心ほどすり減っている。長さ5.8cm、幅6.2cm、厚さ1.6cmを測る。重量97.6g。後述する井戸SE4765の北、NM18地区の包含層出土。石材は不明。

SD4130から出土した砥石(3~6)の出土層位は、3が上層、4~6が中層である。土器による年代観は、中層が奈良時代前半から中頃、上層は奈良時代後半から10世紀初めとなる。また、砥石の分布をみると、他の遺構・包含層出土のものも含めても、南北はNC~NNライン間、東西は19~36ライン間となる。このうち、SD4130より北のものは1と11のみで、8はNC20地区とやや南に偏する。これらを除けば、南北はNGラインからSD4130(NJライン)間で、東西は18~36ライン間の範囲に8点がまとまることが注意される。

羽口(Fig. 214-12~15)直線的なもの(12・13)と先端側がすぼまるもの(14・15)がある。12は残存長10.7cm、復元径7.9cm、内径2.7cm。先端付近は融解してガラス化し、その周囲は長

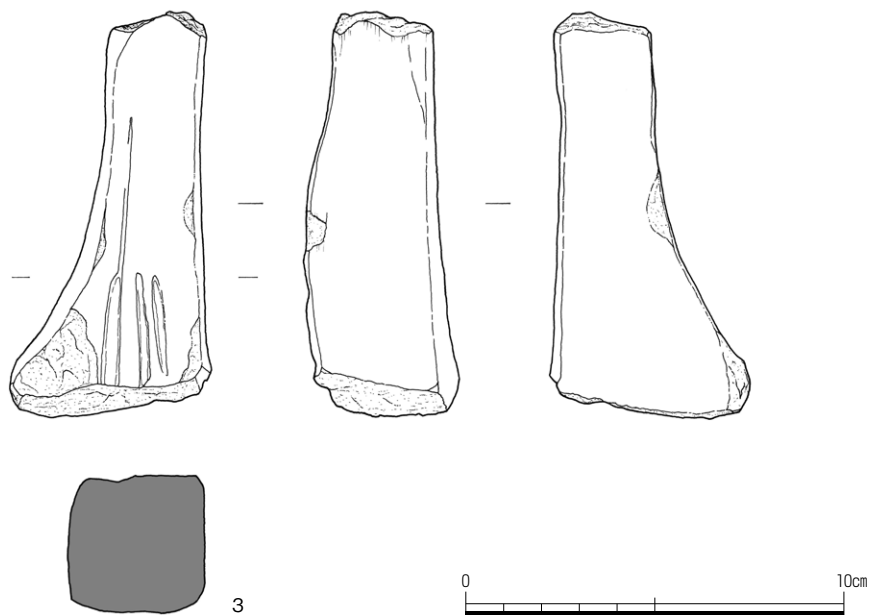


Fig. 211 石製品(2) 1:2

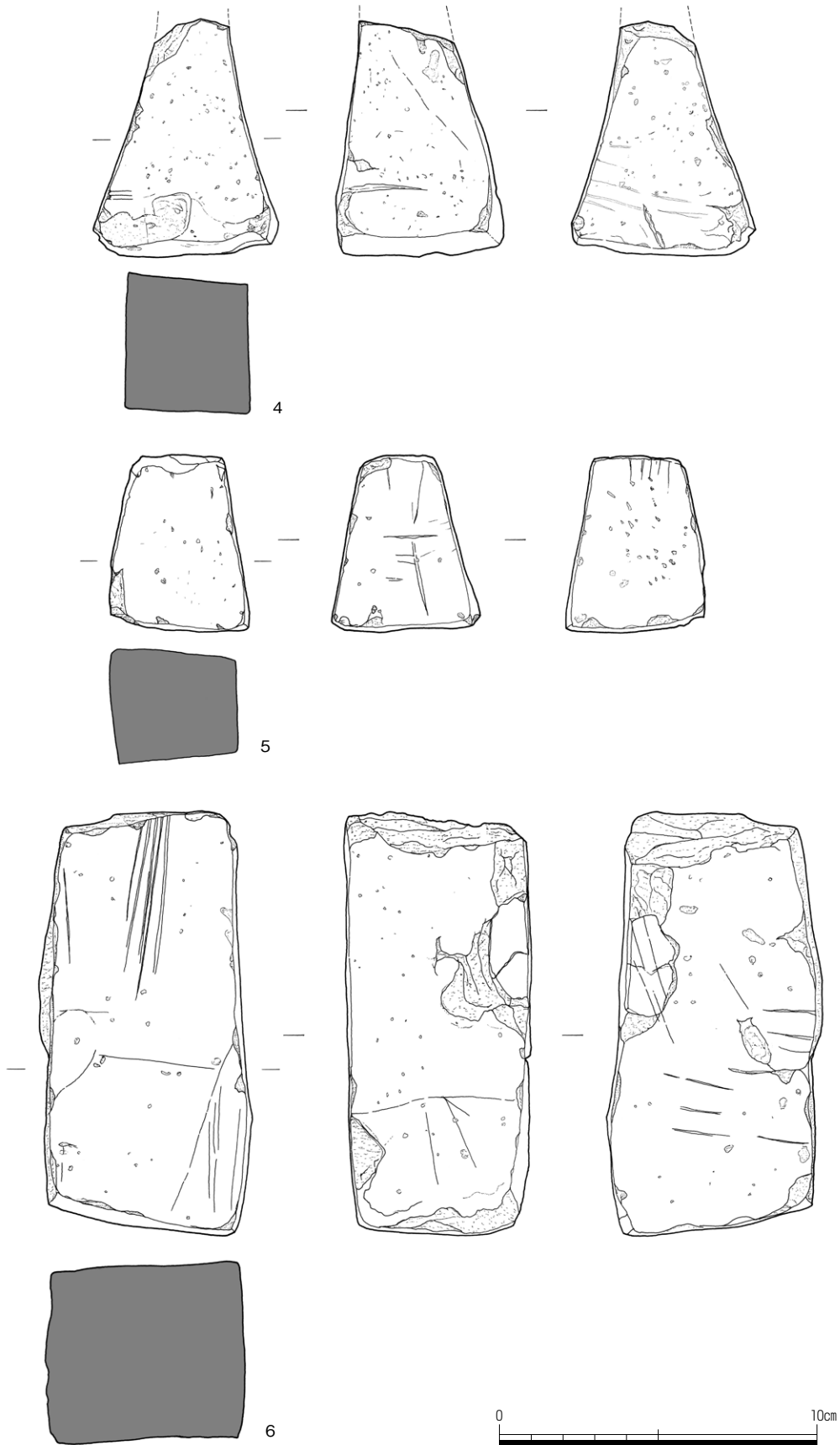


Fig. 212 石製品 (3) 1:2

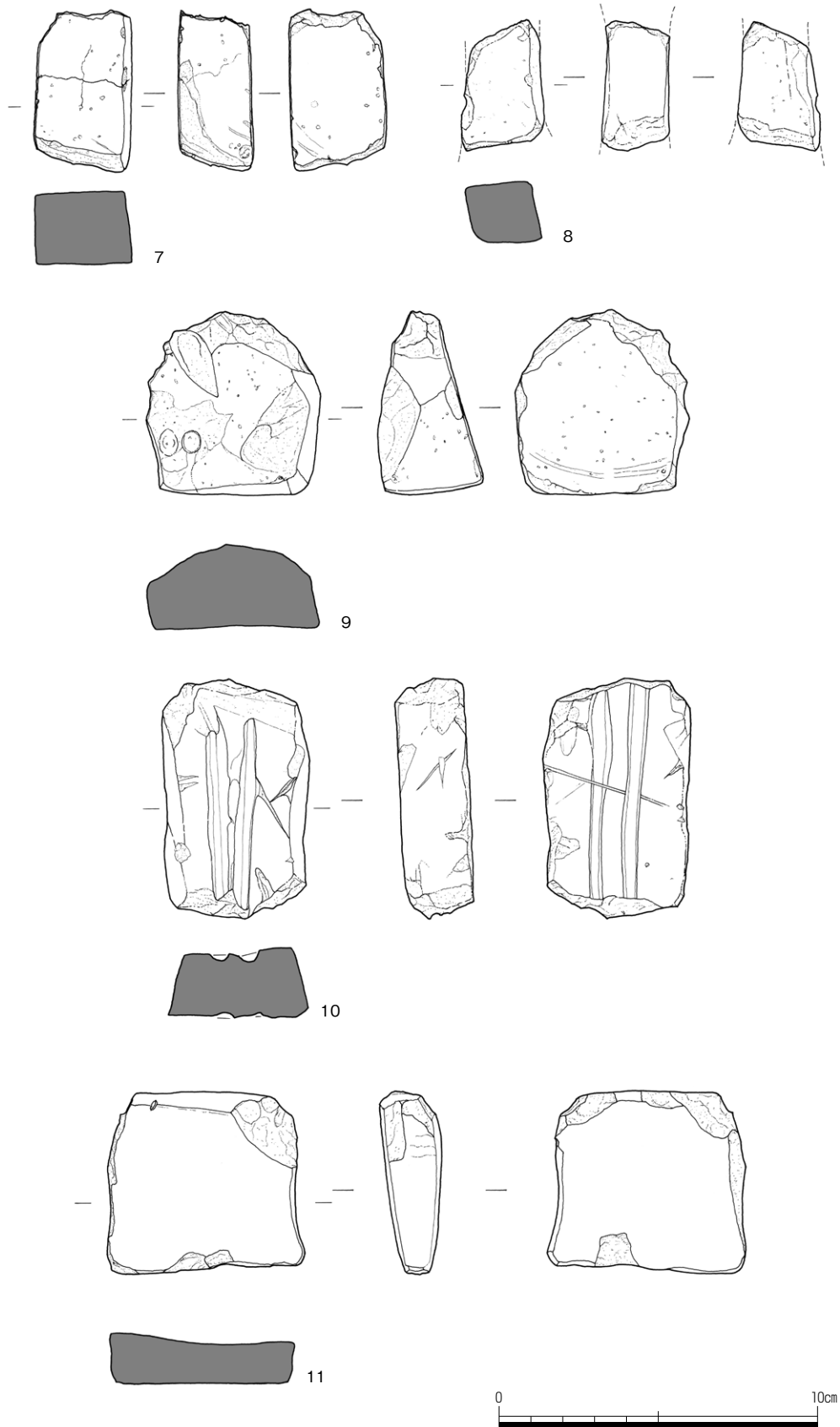


Fig. 213 石製品 (4) 1:2

軸に対して斜めに変色して灰白色の帯状を呈する。13は残存長8.8cm、径6.8cm、内径2.8cm。12と同様に先端はガラス化し、周囲は斜めに変色して灰白色を呈する。12・13は調査区東端の、SD4143西岸近くにある11世紀初頭の井戸SE5095出土。14は残存長6.4cm、径6.5cm、内径2.4～2.8cm。胴部表面に長軸方向の成形痕が明瞭に残る。丸棒を芯として粘土を巻き付け、簾状の道具で外面を巻き締めて成形したと考えられる。藤原京期前半（Ⅲ-B期）に属する掘立柱東西棟建物SB4737南側柱列の、東から3基目の柱穴から出土した。15は残存長6.2cm、径4.8cm、内径2.1～2.5cm。胴部表面に指頭圧痕がみられる。横断面には粘土接合痕がみられることから、丸棒を芯として粘土を巻き付け成形したと考えられる。9～10世紀の井戸SE4765から出土した。

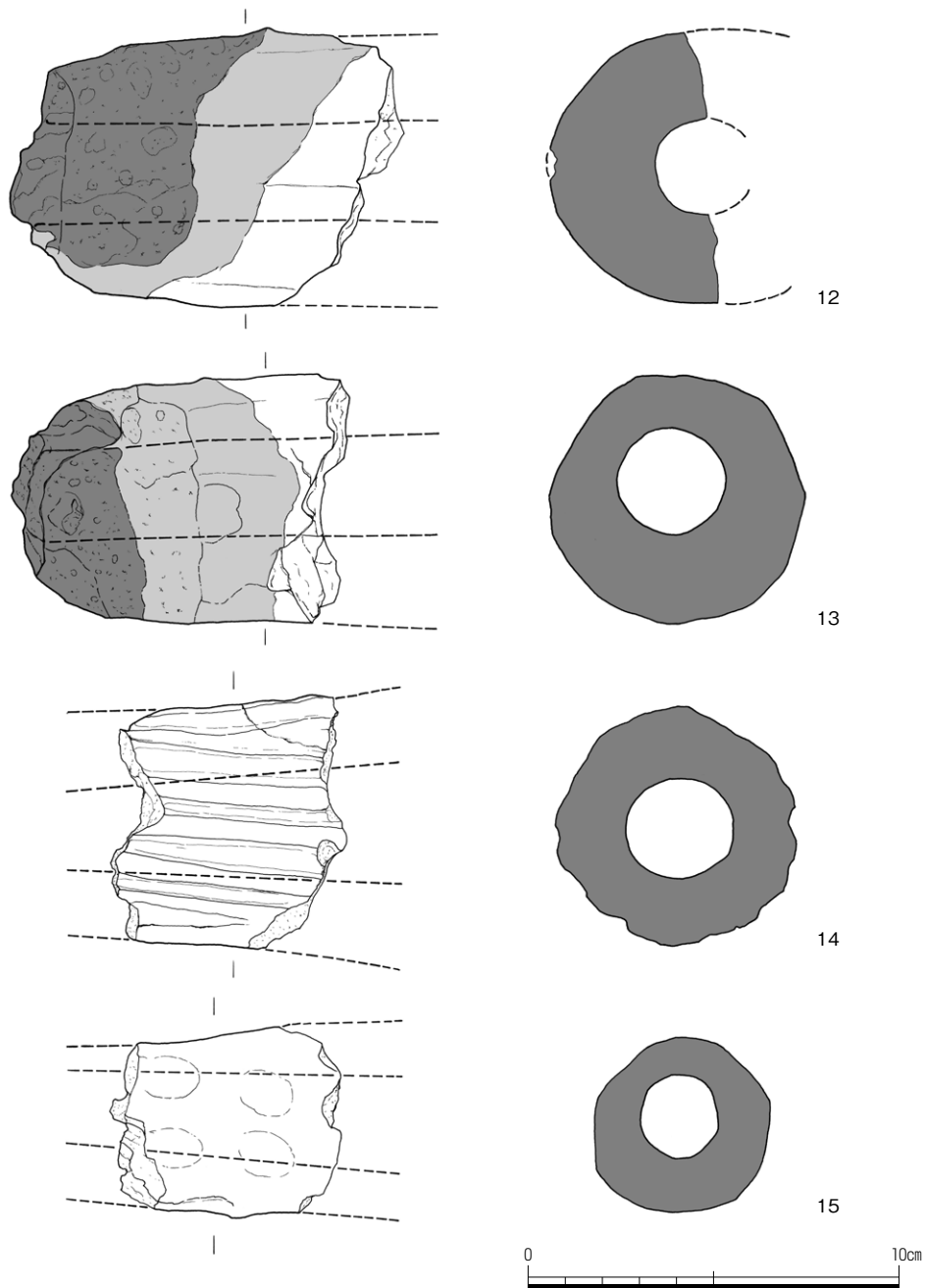


Fig. 214 鑄造関係品 (1) 1:2

埴 塙 (Fig. 215-16) 口縁部の破片。復元口径18.6cmで、半球形を呈していたものと推測できる。溶融した金属を鋳型に移す「とりべ」との区別が難しいが、ここでは埴塙として記述しておく。胎土にスサを多く含み、器表面は凹凸を成す。9～10世紀の井戸SE4765上層から出土した。

鋳 型 (Fig. 215-17・18) 17は破片資料のため復元しがたいが、金属製品の鋳型の可能性はある。胎土にスサを含み、表面は橙色を呈するが、破断面は黒色に変色する。残存長5.2cm、残存幅3.5cm、残存厚1.9cm。18は金属製品の鋳型。最大径18.0cm、高さ5.9cmの深皿形の鋳型外型で、内面は屈曲して口縁端部に至る。鋳型の口縁部は片口状を呈する。内面の底径9.7cm、屈曲部径11.2cm、上端の径17.2cm、深さ4.5cmを測る。内面中央に穿孔がある。器壁の厚さは1.3～1.8cm。スサを含む胎土で椀状に外形部分をつくる。内面下部に0.2cm程度の厚さできめ細かい砂質の土

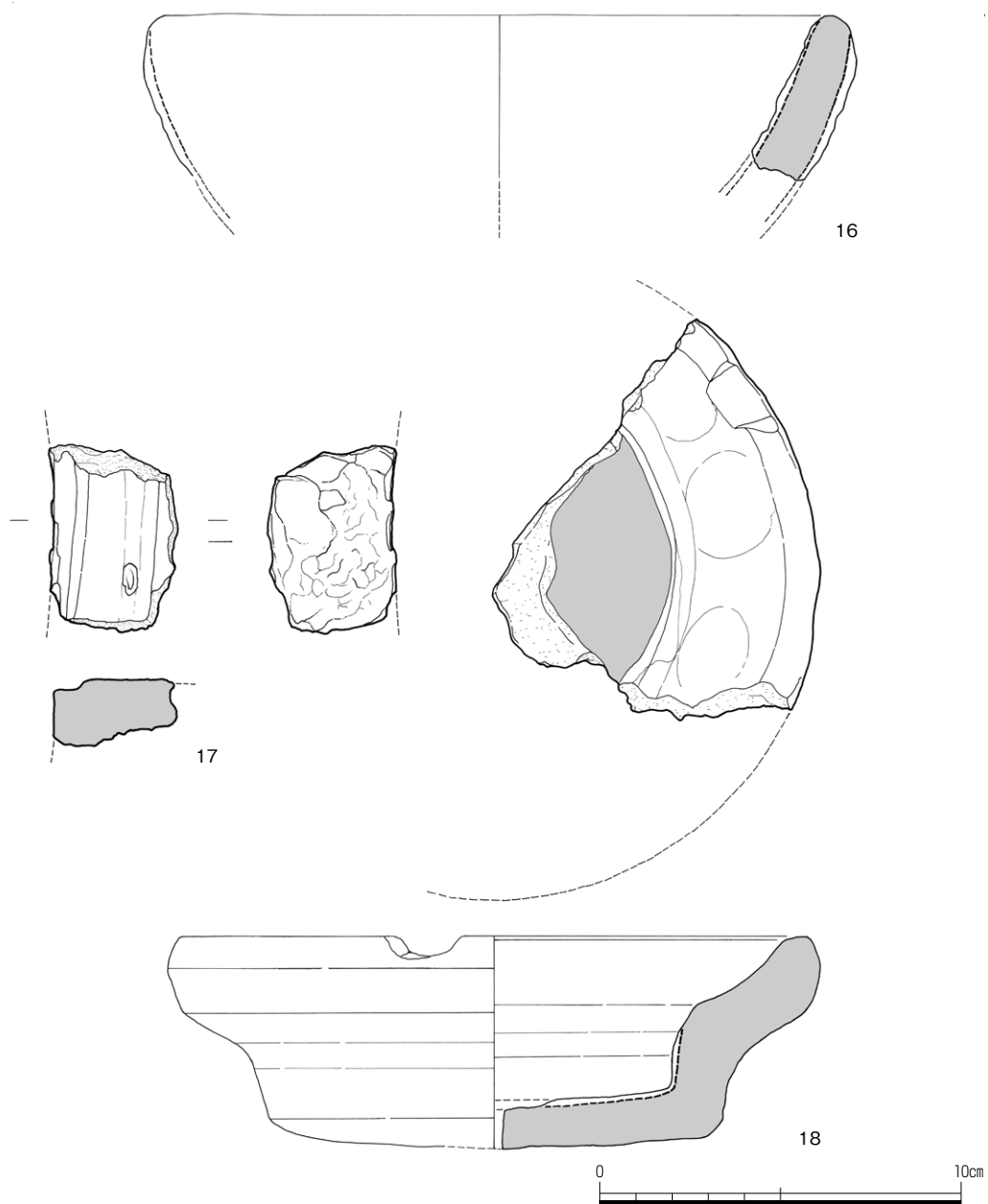


Fig. 215 鋳造関係品 (2) 1:2

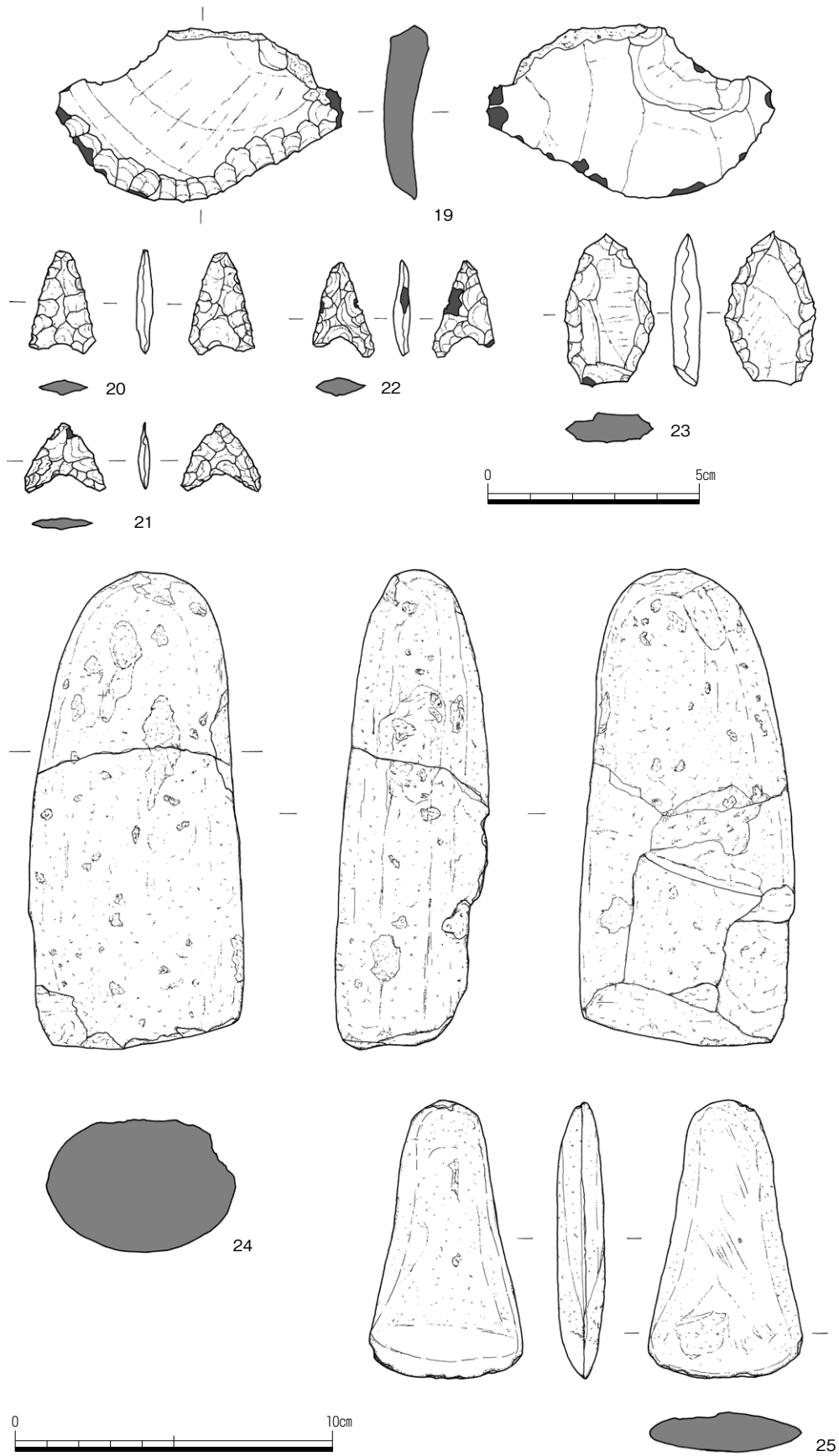


Fig. 216 石器 2:3 (24・25は1:2)

Tab. 9 小円礫計測表

No.	色調	長軸 (mm)	短軸 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	出土 遺構
26	白	10.9	10.3	6	0.8	包含層
27	黒	11.9	10.4	6.8	1.2	SE4740
28	灰	12.6	12	3.9	0.9	包含層
29	黒	20.8	16.9	7.3	3.7	包含層
30	灰	19.7	17.2	6.5	3.4	包含層
31	灰	17.4	15.9	6.4	2.7	包含層
32	白	18.1	16.3	7.5	3.3	包含層
33	黒	23.1	21.6	8.9	6.6	SE4740

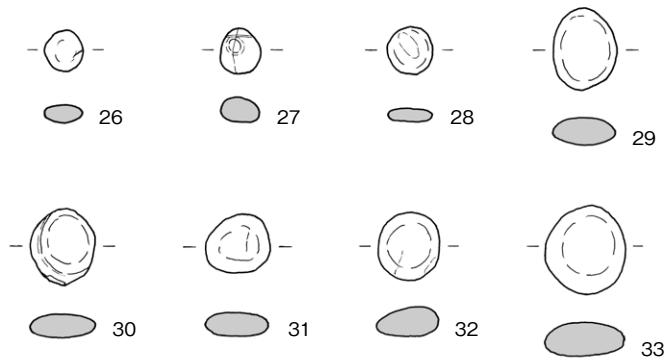


Fig. 217 小円礫 1:2

を貼っている。外面の色調は橙色で、内面は灰色や黒色に変色している。明確な器種は不明であるが、類品が川原寺寺域北限のSK609から出土している²。17・18ともに9～10世紀の井戸SE4765上層より出土した。

以上の様に、井戸SE4765上層からは羽口や埴塼、鋳型などの鋳造関連遺物が出土しており、すぐ北の包含層からは砥石も出土した。周辺に炉跡等の遺構は確認していないが、平安時代に金属製品の鋳造が行われた可能性を示唆する。

その他、小円礫が8点出土している (Fig. 217-26～33)。法量等はTab. 9に示す。通常みられない円礫であり、白色、黒色があることから基石の可能性もある。27・33は井戸SE4740の井戸枠内から出土。また、古墳時代の竪穴建物SI4231からガラス小玉が出土した。

B 石器 (Fig. 216, Ph. 162)

調査区内からは、縄文時代から弥生時代の石器が若干出土している。

削器 (19) 基部に自然面を残す大型の剥片を用い、刃部の片面から丁寧な調整剥離を連続して加える。長さ6.7cm、最大幅4.1cm、重量24.8g。石材はサヌカイト。SD4143の青灰色砂礫層(下層)出土。

打製石鏃 (20～23) 20～22は凹基式の打製石鏃。20は長さ2.8cm、最大幅1.6cm、重量1.2g。NL16地区の包含層出土。21は長さ1.6cm、最大幅1.9cm、重量0.6g。SA4284の柱穴出土。22は長さ2.3cm、最大幅1.5cm、重量0.9g。調査区東部、AO89地区の包含層出土。23は平基式の打製石鏃。SB5030の柱穴から出土した。長さ3.6cm、最大幅2.1cmを測る大型品。重量5.9g。石材はすべてサヌカイト。

磨製石斧 (24・25) 24は太形蛤刃石斧。刃部を欠く。残存長15.1cm、最大幅6.7cm、重量704.4gを測る。SE4469裏込め出土。25は小型の磨製石斧。刃部にかけて撥形に広がり、薄い作りである。全長8.8cm、刃部幅4.8cm、重量88.1g。HH27地区の包含層から出土。

1) 以下、石材同定は埋蔵文化財センター保存修復科学研究室の脇谷草一郎、田村朋美による。

2) 奈文研2004『川原寺寺域北限の調査』。

6 木 簡

出土遺構と点数 木簡は、第47・50次調査で28点（うち削屑5点）出土した。本稿では、1987年度に調査地西方約20mで行った第54-1次調査で出土した1点も含め、計29点（うち削屑5点）を扱うこととする。これらを出土遺構別にみると、井戸SE4740が1点、東西大溝SD4130が28点（うち削屑5点）となる。積文は『藤原木簡概報8』（1987年）で14点を報告し、その後『飛鳥藤原京木簡二』（2009年）で3点を追加した。残り12点は積読が困難であるので、以下、積読の可能な17点について改めて報告したい。なお、積文は巻末に示したとおりで、以下、その番号にしたがって記述する。

SE4740出土木簡 SE4740は藤原京期から奈良・平安時代にかけての井戸。井戸枠内の最下層から、呪符木簡である1が出土した。出土状況から、井戸を掘削して間もなく入れられたものとみられる。4片接続でほぼ完形。断面形は半円形を呈す。裏面は自然木の皮を剥いただけで、特に整形されていない。一方、書写面となる表面は綺麗に削ってある。上端および下端も削りで、上端には面取りもなされている。また、図版では特に示していないが、上端には墨線が一本引かれている。墨書は符籙（呪いの記号）を挟んで上下2箇所に分かれる。文字はほぼ中央行に書かれるが、符籙は幾分か右寄りになっている。記号と文字という違いもあろうが、筆の感じが少しばかり異なってみえる。全体の字配りもあわせて考えると、まず最初に符籙を描き、その上下の余白部分に文字を書いたとみられる。上部には「不殺」の文字が確認でき、「殺」には「かれる」の意味があることから、井戸が涸れないことを祈願する内容とみることができるともかもしれない。符籙は、大きく「山」字を記し（3画目の縦画がやや長い）、その下に上下4段にわたって、1・2段目は「日」字を、3・4段目は「月」字をそれぞれ3文字ずつ、計12文字を配す。下部の「未方女者」は「南南西の方角にいる女性」という意味であろうが、あるいは水神への捧げものとしての意識で書かれたものかもしれない。広葉樹散孔材の丸太半截。

SD4130出土木簡 SD4130は、調査区北部を西流する、藤原京期から奈良・平安時代にかけて機能した東西大溝。木簡が出土した場所は、1987年4月に西隣接地で実施した第54-1次調査出土の12を除いて、前述の井戸SE4740の付近に限られる。出土層位は中層で、奈良時代の遺物を多く含む層である。時期が判別できる木簡も、以下みていくように、8世紀前半代のものである。ただし、この溝は藤原京期から機能しているので、この時期の木簡が含まれている可能性も念頭においておく必要がある。

2はほぼ完形の文書木簡。上中下の3片接続であるが、中片の左上など一部欠損もみられる。下端・左右両辺削り。上端は表裏それぞれから刃を入れて切断するが、木簡当初のものである。左辺の上中下の3箇所、右辺の中央の1箇所に浅い切り込みがある。上下の切り込みはなぜか左側だけにしか存在せず、左右対称になっていない。中央の切り込みのみ、左右対称である。木簡の内容からみても、物に括り付けて使用されたとは少し考えにくい。切り込みが極めて浅いこととあわせて、その意味について今後類例を集めて検討する必要がある。スギの板目材。

書き出しの「菜採司謹白」については、A「菜採司、謹みて（〇〇に）白す」（上申先が省略）、B「菜採司に謹みて白す」、のいずれの読み方も可能²で、全体の内容を踏まえて解釈する必要がある。

ある。まず「菜採司」の「菜採」は日本語の語順で書かれている。「司」も二官八省の体系にもとづいた官司呼称としてのそれではなかろう。「菜採司」と仰々しく書かれているが、菜を採ることを職掌とした部署、といった意味にすぎないであろう。次の「奴」字は、「白」字と半角分程度の空白を設けて書かれており、意味の切れ目を示すための空格と考えられる。上申内容は奴の逃行と病女（この女は婢か。）の2件で、それにあわせて文末も「以前如□」で結ばれている。これらの奴婢は菜採司の統括のもと菜を採る作業に従事していたのであろう。先にA・B2つの読み方を示したが、Aの可能性がより高いと考えられる。その場合、木簡の出土地点こそ、上級機関の所在地ということになる。

3は文書木簡の断片か。左右2片接続。上下両端折れ、左右両辺割れ。1文字目は下半分が残存するにすぎない。「人」の可能性もあるが、ここでは「大カ」とした。

4～10は記録木簡、もしくはその可能性があるもの。4は上端・右辺削り。下端は折れであるが、二次的切断の可能性も否定できない。左辺は二次的割截。裏面は左側および下部が剥離する。「靈龜三年」(717)は11月17日に改元され、養老元年となる。したがって、木簡の下端には「養老二年」以後の年紀が書かれていた可能性が高い。ヒノキ属の板目材。

5は3片からなり、1片は直接接続しない。木簡の上部は2片接続で、上端・左右両辺削り、下端折れ。下の1片は上下両端折れ、左右両辺割れ。現状では小断片にすぎないが、幅広で文字も大きく、元来はそれなりの大きさの木簡であった可能性がある。裏面1文字目は「代」で、何かの代納物として「斗」で数えられる米などを納めたことを示すか。ヒノキ科の板目材。

6は削屑木簡。「束」「把」の単位から、稲に関わる記録木簡に由来するとみられる。

7は上下2片接続。下端・右辺削り、左辺割截、上端折れ。何度も削られたようで、厚さは一様ではない。5文字目「束」の第1画から上端にかけては、墨書以前の削り痕跡が認められ、下半部に比べて薄くなっている。長さ30.2cm以上の細長い木簡であるが、文字は材の右上にあるにすぎない。その後も記載することを考慮して、このように寄せたのであろうが、結果的には当該部のみで終わったようである。この記載がなされた後、現1文字目の途中から上端に向かって二次的に削り取られ、文字情報は失われている。「束」が2箇所あり、稲の収支状況を記したものと推定される。下から3文字目は「遣」のようにもみえるが、意味的に「遣」と釈読すべきであろう。なお、2文字目の「斤」は重量単位であるが、稲の場合にも使われることがあった。ヒノキ属の板目材。

8は左右2片接続。上下両端・左辺削り。右辺は少し割れ。ただし下半分は左右ともに大きく欠損する。墨書は材の上半分のみ。現状では1文字目が「斗」となり、その上に数字は確認できない。「一斗」の意味であるため、「一」を省略したものであろう。ただし、上端が二次的に削られた可能性も完全には否定できない。特に二次的な整形を被っていないとすれば、米などの数量を記したメモ的なものということになる。スギの追柁目材。

9は下端・左右両辺削り、上端折れ。現状では表面がふくらむように反り返る。「小豆」以外の文字ははっきりしない。下から2文字目は「田」の可能性もある。ヒノキ科の板目材。

10は左右両辺削り。上下両端は折れであるが、二次的切断の可能性も残る。「文」は銭の単位で、おそらく和銅開珎（銅銭）に関わるものであろう。「十八文」の左下の墨痕ははっきりとしないが、「買」のようにもみえる。ヒノキの板目材。

11は上下両端削り、左右両辺割截。上端は切断前のアタリが残る。下端は稜のある剣先形で、先端部は尖らせない。左右両辺には刃が入れられており、形状から斎串と判断される。文字は大きく「左京職」と記すのみ。「京」は「口」が「日」になる字形、「職」は「耳」を「身」で記す字形である。京職が分離して左右京職になるのは701年の大宝令施行後である。ヒノキ属の板目材。

12・13は荷札木簡。12は四周削り。上下の左右に台形の切り込みがあり、幅は上部は狭いが、下部は広い。郡制下の荷札木簡で、701年以後のものである。文字は極めて達筆である。貢進物の「魚鮓」は、魚を素材に「熟れずし」にしたものである。「鮓」は「鮓」とも表記するが、特に意味は変わらない。³『延喜式』によれば、尾張国は中男作物として中央に「雑魚鮓」を納め（主計式上16尾張国条）、斎宮寮に「雑魚鮓」5石を納めることになっていた（斎宮式78調庸雑物条）。養老元年（717）に成立した中男作物は、郡を単位として貢進されるのが一般的で、本木簡も「尾張国海部郡」が貢進主体となっている。本木簡が養老元年以後のものか不明であるが、系譜的に中男作物につながることはほぼ間違いない。ヒノキの板目材。

13は上端・左右両辺削り、下端折れ。上端は右端のみ少し削り落とす。上部左右に三角形の切り込みがある。近江国蒲生郡の荷札木簡である。裏面2文字目は「田」の可能性もある。「宿田」は戸主の個人名と推測される。最後は「戸口」と続くと推定される。貢進者の名前を書く際、養老年間（717～724）頃を境に、「国+郡+里+人」から「国+郡+里+戸主+戸口」に変化する大きな流れがあり、本木簡の年代を知る上でも参考になる。ヒノキ属の板目材。

14は上下2片接続。下端・左右両辺削り。上下両端は表裏それぞれから刃を入れて切断する。上部左右に台形の切り込みがある。現状では上部に「六斗」とのみ記す。「六斗」は庸米木簡に広くみられるが、本木簡には地名や人名などは書かれていない。ヒノキの板目材。

15は上中下の3片接続。上端・左右両辺削り。下端は焼損する。他の場所にも焼痕が認められる。字配りから表裏を決めたが、詳細は不明。ヒノキ属の板目材。

16は右辺削り、左辺割れ。上端は裏面から斜めに刃を入れて切断する。下端は焼損する。ヒノキの板目材。

17は上端折れ。下端は表面から刃を入れて二次的切断。左右両辺は二次的割截で、細長い小断片となっている。1文字目はわずかな墨付が残るのみ。2文字目は、3文字目に残された土偏を手がかりに文字のセンターラインを推定し、「京カ」と釈読した。ヒノキ属の板目材。

1) 奈文研2009『飛鳥藤原京木簡二』（奈文研史料第82冊）では「殺」を「熟」と釈読したが、「殺」に訂正したい。

2) Aは当然として、Bの読みを考慮するのは、次の事例を参考にしている。飛鳥池遺跡南地区（工房地区）から、「官大夫前白（後略）」という木簡と、「官白（後略）」という木簡が出土した（奈文研2007『飛鳥藤原京木簡一』（奈文研史料第79冊）1・147号木簡）。このうち「官白」は、「官大夫前白」と類似した表現であることを踏まえると、「官に白す」という読みが可能となる。「某白」と書かれてあるからといって、「某、白す」という読みが絶対的ではないのである。「某に白す」と訓読できる「某白」は、「某前白」（某の前に白す）の「前」字が省略されたものであろう。その他の事例も含めて、市大樹2010『飛鳥藤原木簡の研究』塙書房など参照。

3) 櫻井信也2002「日本古代の鮓（鮓）」『続日本紀研究』339号など。